

ナイーヴな数学者のブログ

吉川 敦

平成 26 年 1 月 5 日

目次

1	ブログ趣旨	1
2	プロフィール	2
3	2007	3
4	2008	79
5	2009	114
6	2010	196
7	2011	267
8	2012	379
9	2013	459

1 ブログ趣旨

無知を棚に上げたうえで、凶々しくも一見高級な議論を試みたい。ナイーヴ（プロフィール参照）というゆえんである。

実は、本来の（しかも、本当は秘めておくべき）目標は、何と、「日本文明の秘密を多少とも解き明かそう」ということである。その第一歩は、これまでのささやかな人生での体験上、われわれの時空認識の構造について検証可能な形で明確な記述を得ることではないかと思っはいる。鍵となることは、「日本文明」を相対化する原理として機能する本質的な観点の抽出である。

しかし、まず、時空把握の理解の方法からして十分な知識も訓練もない。どうやら自己と他者や外界との関係の認知の仕方が関係していると思うのだが、ここで、抽象的なことを言ってもしょうがない。

とまれ、物真似の基礎として、他人の著作を種にした雑論を始めていきたい。できるだけ、基本的、根本的、あるいは原理的と感じられる部分を探り、それらをめぐって素直に考えを進めていくことができれば、概念規定や語彙が多少甘くても、少しは意味のある議論を重ねられると思う。また、そうなることを期待もしている。

註：基本的なテキストは

William M. Ivins, Jr.: Art & Geometry
(Dover 1964. Harvard Univ. Press 1946)

である。

なお、当ブログは、ひっそりと運営されていることもあって、コメントは(記事への注釈や補充という自己コメントを別に)稀にいただくだけである。

受け入れるコメントに対する政策を述べておきたい：

- 0) 折り目正しい言葉遣いで書かれていること
- 1) 記事における不正確あるいは不足な部分の解消(の糸口)になることが期待されること(したがって、論拠や出典が明らかにされていることが望ましい)
- 2) 適切な長さであること
- 3) ただし、わたくしの判断で1) 2) を例外的に緩めることはありうる

また、専門的なご見識についてはブログとは別途にわたくしの蒙を啓くべくご連絡いただくと大変ありがたいと考えています。

2 プロフィール

手元の辞書に拠ると、「ナイーヴ」とは、「生まれたまま」というラテン語義から生じ、転じて、半人前で洗練度も足りないのに大きな顔をする、つまり、物を知らずに思い上がっていることを意味するようになったらしい。要するに、「ナイーヴ」とはおのれの世界が狭いことへの自覚を欠いている有様や人間を指す語である。この意味でナイーヴな数学者も多く、さる高名な統計物理学者には、数学者という人たちは数学を志した年齢のところで人間的成長が止まるようだ、と冒頭で述べているエッセイがある。揶揄しているわけである。さて、わたくしは一応数学者と名乗れると思うが、ナイーヴであることは自覚しているつもりである。このブログでは、主に、上掲の Ivins の書物を下敷きに、勝手な(つまり、ナイーヴな)議論をしていきたいと考えている。

なお、最近ホームページ：

「元」数学者のホームページ: <http://www7b.biglobe.ne.jp/yoshikawa/>を開いた。数学者としての燃え滓を集めたという意味を籠めて、「元」を付したのだが、「元」はどうかと疑問を呈してくださった友人もいる。しかし、近頃は関連セミナーに顔を出すたびに、つくづく大分前から「過去の人」になってしまっていたなど痛感している。このブログで「元」にしなかったのは、「ナイーブ」に重点があるからである。

3 2007

1. (07.1.14) まず, William M. Ivins, Jr. について

かれは1881年に生まれ、1961年に亡くなっているが、今でも、ネット検索により多数の関連記事を見つけることができる。20世紀初頭にハーヴァードを卒業、引き続き、欧州で勉学を続けた後、アメリカに戻って弁護士を開業している。第一次世界大戦中の1916年、メトロポリタン美術館に入り、以後、版画部の充実に力を注いだ。ついには館長を務めて退任した。その年1946年には、このブログの話題の中心となる *Art & Geometry* を Harvard University Press から出版した。この書物は、今は、Dover のペーパーバックとして入手できる。しかも、100ページ余りでもある。

ところで、*Art & Geometry* の副題は *A study in space intuitions* である。同書の主張は、挑発的とも評され、出版当時、相当の物議を醸したようである。内容は、古典ギリシアから20世紀中葉にいたる芸術と芸術観の変転、特に、その背景にある空間認識の変遷についての論考である。この書の根幹を成すのは、青春を送った20世紀初頭の西欧の時代精神、引き続いての世界大戦という暗転、さらに、弁護士という職業によって形成された実証性などが渾然として出来上がった著者の人格であろう。

この書物については、以後、論じてゆきたい。

2. (07.1.15) Dover 版 *Art & Geometry* の裏表紙に概要が載せられている。概要の第一段落は、およそ次のようである：

西洋文明において他所から盗られないよう厳重に守られている神話にギリシアの文化的卓越性というものがある。この物議を醸した考究で、William Ivins は、ギリシアの世界観の限界が実は芸術や科学の進展を損なってきたことを示し、ルネッサンスの新しい思想により、特に、絵画と幾何学において、われわれが古代以来の誤解から解放された歴史を生き生きと述べる。

もっと上手に訳せるとよかったが、もとの英文の雰囲気をも何とか想像できるようにしたつもりである。この段落は非常に要領のよい本書の摘要といえることができる。

第一の文章で、「他所から盗られないよう厳重に守られている神話」は、もとの英文では、jealously guarded myths である。「嫉妬深く守られている神話」では意味を成すまい。この文章の意義は、ギリシア文化の絶対化の確認である。

ところが、Ivins はギリシア文化を相対化してしまった。そのことが、本書が出版された 1946 年でも物議を醸した (controversial) というわけである。しかし、Ivins は相対化することによって初めて明らかになったギリシア文化の限界がルネッサンスの新思潮により乗り越えられて、現代の美術や科学 (幾何学) に至ったと述べるのである。stimulating を「生き生き」と訳したが適当ではなかったかも知れない。まあ、誰が書いたかわからない概要の一節である。お許しいただきたい。

3. (07. 1. 16) Art & Geometry の裏表紙にある概要の紹介を続けても意味は少ないようであるが、実は、まだ段落が二つある。

第二段落は、この書物の具体的な内容のやや踏み込んだ紹介であるが、ここでは、いくつかのキーワードや人名を挙げるのに留めよう：

ギリシア人、古代とルネッサンスそれぞれの絵画・彫刻の相違、
奇妙に静的なギリシア美術の特質、遠近法、射影幾何
アルベルティ、ベルラン、デューラー、ニコラウス・クザーヌス、
ケプラー、デサルグ

実際には、本書は二十世紀中葉まで扱ってはいるのだが、著者と同時代のせいであろうか、最後の方は駆け足でもあり、概要でわざわざ言及するには及ばないということであろうか。

第三の段落では、この本が数学史や美術史の研究者だけでなく、哲学者から一般人まで、およそ思想・思索の歴史に関心のある人を挑発してやまないものであると言っている。また、数学的遠近法と射影幾何の進展について英文での簡潔な唯一の本であるとも言っている。本書の要点として、美術の諸様式と幾何学の前進との関連づけが出来る著者の能力、そして、何よりも、現代とギリシアの世界観を「視覚的 visual」と「接触的 tactile」として対比させた著者の巧妙な理論を挙げている。実際、ここが著者によるギリシア文化の相対化の具体的な内容であり、物議を醸し、挑発的といわれるところである。

なお、概要では world-view と言っているから、ここまで世界観という語を使ってみた。著者の本来の言葉では space intuitions であった。概要としての内容紹介では止むを得ない選択であったかも知れないが、いずれにせよ、この書物本体を読者の手に取らせればよいわけである。

4. (07.01.17) Art & Geometry の表紙は、遠近法関係の書物の図を流用したものだと思われるが、詳細はわからない。ナイーヴな身としては、的確なことは言えないにもかかわらず、強引な主張をすべきかも知れない。ピ

エロ・デラ・フランチェスカの「絵画における遠近法」の挿図からではないことは、最近入手した仏語訳：

Piero della Francesca: De la perspective en peinture
(In Medias Res, Paris, 1998. ISBN 2-9511719-0-0)

によって確認した。

とまれ、これで Dover 版の Art & Geometry を手に取ったという段階は過ぎた。

本を開いて、見開きにある図を眺め、次のページに進んで、書誌情報をざっと見る。すると、著作権が1946年に The President and Fellows of Harvard College に設定されたことがわかる。Dover 版は1964年に初版本を内容的にそのまま変更を加えずに出版したものと記述がある。

次にどうするか。薄っぺらな本ではあるが、前書き、目次、序文、それから、結論を読むことだろう。前書きも目次も一ページしかないが、序文は二ページ、結論は三ページもあるから取りあえずは斜めに見て、腰を据えて本書を読むかどうか決めるのは、それからだろう。

5. (07.1.18) 前書き (Preface) を見てみよう。著者は、まず、

遠近法的に見れば、美術も科学も哲学も同じ基本的な直観の表現である

の意味の英文を書く。「遠近法的に見れば」という表現は日本語としては変かも知れない。原文では、Seen in perspective である。遠くから見れば、あるいは、離れてみれば、という方が自然な響きがあるだろうが、本書の主要な話題が遠近法 (perspective) であることを念頭に置くと、敢えてこう訳して置くべきだろう。

上の文自体が乱暴な印象を与えかねない言い回しだが、著者は開き直って、以下で、この話題を扱ったのは自分が素人 (むしろ、好事家) であるからであり、また、この論考の当否の判断は、結局は、素人 (好事家) に帰することになるかと述べるのである。では、著者は (当ブログのプロファイルで述べた意味で) ナイーヴかと言うと、追々明らかにできると思うが、大変な洗練度が伝わってくることになるだろう。ちなみに、素人あるいは好事家と訳したのは、amateur である。愛好家と言うべきかも知れない。著者がその典型に近いとすると、限られた専門に興味が偏ることがなく、また、均衡のとれた判断力を、深く、しかも総合的に発揮することができる力の持ち主を表すようである。かつてのオリンピックを支えたアマチュア精神、特に、その権化ともみなされたブランデー氏のことを思い起こすと、amateur とは、20世紀前半の西欧人にとって、人間の理想型だったのであろう。

少し先走ってしまった。著者は、上の文の内容を比喩的に補足して、次のように書く。

美術は、科学や哲学と違い、際立った除外のためのチーズグラスの下に隔離されてきた。覆いを取り払い、他の二つと並べて思想の外気にさらさなければ、美術の価値も内容も感知することはできない。

チーズグラスというのは、恐らく、食卓にチーズを供する際に、チーズの皿にかぶせるドーム型のガラス器のことであろう。それがかぶさっている限り、チーズに触れることはできないわけで、科学や哲学がある思想という外気の中に美術というものを引き出してみても初めて美術の価値を、ちょうどチーズを味わうように、感じられると著者は言っているのである。引き続いて、著者は次のように言う。

この仕事は、まさにこういう性質のものだから、素人にしかできないことである。というのは、これだけの幅や奥行きのある分野の専門家などいるはずもないからである。しかし、恐らくは、価値に関するあらゆる問題は、結局のところ、専門家ではなく、素人が解決することである。

この仕事というのは、覆いを取り外し、美術を思想の外気の中で味わうことである。素人云々については、すでに述べてしまった。

以上で、前書きの第一段落は終わる。やや短めの第二段落では、著者は、本書を書きかける過程で、同僚や友人と議論を重ねたこと、特に、原稿を詳細に読んで上で批判的な意見を述べた人たちへの謝意を述べ、中でも、令嬢の役割について丁寧な言及をしている。彼女は、この書物の挿図を描いたともあるから、建築家だったのだろうか。彼女は、著者没後にその膨大な収集品を美術館に寄贈したようである。

この後に、著者の名前のイニシャルがあり、場所と日付、正確には、メトロポリタン美術館、1945年12月、とある。

以上で、前書きは終了である。

6. (07.1.20) 目次を見よう。まず、序文があり、続いて、10章分の項目が並ぶ。最後は、結論である。すなわち。

序文

第一章 眼と手

第二章 ギリシアの美術

第三章 ギリシアの幾何

第四章 ギリシア人から15世紀まで

第五章 アルベルティ

第六章 15および16世紀の遠近法

第七章 クザーヌスとケプラー

第八章 デザルグとパスカル

第九章 ギリシア人再論. かれらに欠けていたもの

第十章 幾何学と他の思想との同期性

結論

である. 索引はない. ところで,

今野浩: カーマーカー特許とソフトウェア (中公新書, 1995)

に紹介されている「工学部の教え」では, 索引のない本は読むなということだから, それに従えば, この本は (少なくとも忙しいエンジニアは) 読むなということになる. まあ, 今は必要ならば一旦スキャンしてパソコン内に取り込みさえすれば, 索引は簡単に作れるだろうが.

さて, 順序としてはおかしいが, 各章の概要を先取りして述べておこう. 序文と結論については別記事で論ずる.

第一章に本書のアイデアの基本がある. 手で触ることによる空間認識と眼で見ることによる空間認識の差を論じ, 以下の議論の基礎となる命題を述べる. 特に, 古典ギリシア人の空間認識の特徴が接触感覚に基づくものであることを述べる. 著者 Ivins は, 執筆当時利用できた科学的数学的さらに医学的知見を動員しているようである. しかし, 今日の知見に基づいた場合に, どの程度の修正が必要になるかの検討は, われわれの課題になろう.

第二章での要点は, ギリシア美術が, まさに, 接触感覚的空間認識の反映であることの検証と同時にギリシア美術とされるものの純正な形を知ることの困難さの指摘である. もちろん, ここでも, 本書刊行後の半世紀余りの間の発掘調査などによる知見の累積によって著者の見解が本質的な修正を要するかどうかの検討が課題になろう.

第三章は, 基本的に,

T. L. ヒース: ギリシア数学史 (共立出版・復刻版 1998/05)

に従っているようである (ナイーブなわたくしは, 以前, この本を書店で見たことはあるが, その折には中身には関心は持てなかった). Ivins は, ギリシア人の接触感覚的空間認識の典型例としてギリシアの幾何を論ずる. 特に, アポロニウスらの円錐曲線およびユークリッドの「光学」に注意を向けている. もとより, ここの最近の研究の成果を反映させることにより, 本書の主張が受ける影響を評価することは課題であろう. この意味で, 例えば, (サイト検索で見出した) 齊藤憲氏 (大阪府立大学) の見解は参考になるであろう.

第四章は, ギリシアの美術や幾何について著者が第二章, 第三章で指摘した接触感覚的空間認識の影響から西欧世界が脱して来た過程についてざっと論じる. このために, 著者はギリシアをメソポタミア, ローマ, さらに, イスラムやヨーロッパ中世と至る歴史的な文脈の中に相対化してしまう.

第五章では, 15 世紀前半 (1435 年頃) に著された

レオン・バッティスタ・アルベルティ: 絵画論 (中央公論美術出版 1971)

について述べ、同書が初めて遠近法を体系的に説いた書物として絵画技法上重要であることその他、空間認識の転換を示すものとして思想上も近代の先駆けになるものと言う。本書が、

トーマス・クーン：科学革命の構造（みすず書房、1971、原版1962）

に先立っていなければ、まさに、パラダイムの転換と書いたのではないかと思う。ナイーヴの見本みたいな言い方になったが、この立場での検証も必要だろう。

第六章は、アルベルティの遠近法（正統作図法）について、やや幾何学的、技術的な詳細を記述し、また、以後の改良、普及について述べている。特に、西欧近世の世界観の転換との関わりに注意しているが、一方、本書執筆の動機になったというデューラーの「測定法教則」（第四書）にある誤解についても触れている。現物を見るには西欧各地の図書館にでも行かなければならないような文献が多数引用されており、さらに、この半世紀の関連分野の研究の進展を考えると、細部にはいろいろと議論の余地があるであろう。

第七章で、著者は、西欧近世の空間認識の変化は、神学、天文学および占星術に現れたと説き、変化の先駆けと象徴として、クザーヌスとケプラーを取り上げている。クザーヌスは連続変形によって円から直線に移れると言い、ケプラーは惑星運動を円ではなく楕円で記述し、円錐曲線についてギリシアにはなかった統一的な変形という新たな発想で取り組んだことを強調する。特に、無限が操作の中に意識されるようになったというのである。なお、コペルニクスについての言及はない。今日的には、やはり、検討を要するであろう。

第八章では、技術的にも思想的にも、遠近法と円錐曲線とが一体化したことを示すものとして、デザルグとパスカルの事跡を挙げている。デザルグは技師であり建築家であったというから学者としての数学者との発想の違いがあったのであろうか、平行性を絶対視することなく、点と直線、あるいは円の位置関係に関する多数の一見独立な諸定理が円錐曲線を経由させれば統一できることにデザルグは気づいたことを述べ、その空間認識における意義を論じている。デザルグの発想は、さらに、パスカルによって簡明な定理にまとめられ、接触感覚的なギリシア人の空間認識では到達し得ない、視覚的空間認識の特徴が完成したというのである。

第九章では、デザルグの定理やパスカルの定理に相当することをギリシア人がどう把握したかを、特に、デザルグの定理の極めて特別な場合であるユークリッドの不定命題（ポリズム）を例にとって論じている。現代風の注釈なしでギリシア語の原文を読むとその難解さ晦渋さがよくわかり、また、実は誰でも気づきそうな簡単な工作だけでより一般的な定理の示唆が得られるということを指摘し、このような比較を通じて見えてくるギリシア人のさまざまな限界に言及している。話題は広範囲であり、著者が利用した知見は半世

紀以上前のものである。著者の指摘をヒントにして新たな考察を行なうくらいの作業が要求されるかもしれない。

第十章は、幾何や遠近法の発展と絵画の進展が、相互の直接の連携がないはずなのにもかかわらず、同期的に進行しているという著者のテーゼの検証として、ルネッサンスから現代に至る両者の並行現象を羅列している。第十章では明確に述べられているが、読者は美術には通じているだろうからとして画家の人名の連続に近くなっている部分もある。

第十章に限らず、絵画や美術に関する部分は図版が付いていないものも多く、いちいち別な資料にあたらなければならない。ただし、著者は、現物を直に観察することによって初めて本当のことがわかると強調しているのだから、まあ、当然であるかも知れない。

7. (07.1.21) 序文を見てみよう。最初の段落で、執筆の動機を述べる。まず、

何年か前デューラーの版画の奇妙な遠近法がもとで、古今の幾何学書多数に表面的ながらも苦勞して目を通した。これらのうちに、フェデリゴ・エンリケスの「科学の諸問題」(シカゴ1914)があった。

と言う。デューラーの版画云々がそもそもの始まりであるようであり、実際、この関係で著者は論文を書き、また、本も著しているらしい。わたくしは、いずれこれらの著作により、この点の具体的な内容を直接確かめたいとは思っているが、現時点では何もしていない。一方、エンリケスは、イタリアの幾何学者である。ミラノ大学の数学教室は、今日、かれの名を冠して Dipartimento di Matematica "Federigo Enriques" (<http://www.mat.unimi.it/>) と称している。上掲の書物「科学の諸問題」は、アインシュタインの相対性理論の解説やその意義を論じたイタリア語の原書を英訳したものである。たまたま以前の勤務先の大学の図書館に収蔵されていたので現物を見ることができたが、相当大部のものである。この本についても必要なら再度図書館に行かなければならない。

さて、Ivins は上の文章に引き続いて

私は、計量的な幾何と射影的な幾何の違いが接触筋肉感覚的と視覚的な空間感覚の違いにまで遡らせることができようという風に整理される彼の注意に大変関心を惹かれた。

と言う。「彼」とはエンリケスであり、上掲の書物の205ページ以降でこの趣旨のことを論述しているというのである。「計量的」、「射影的」というのは原文では metrical, perspective であり、前者においては図形どうしの距離は変わらないことが、後者では観察者を中心とした図形どうしの位置関係が変わらないことが前提になっての幾何を意味している (perspective を射影的と

訳すのは抵抗があるが、文脈ではそうなる)。接触筋肉感覚的とは原文では tactile-muscular であり、視覚的とは visual である。それぞれの空間感覚がどのようなものであるかは詳細な説明が必要であるが、要するに、前者は図形の形や位置を手で触って確認し、後者は、目で見えて確かめるということである。

著者は、この段落を、

そこで、私が思ったのは、距離的幾何はギリシアであり、射影的幾何は現代であるから、恐らく、同じことがギリシアと現代の美術の違いにもあるのではないか、それならば、詳しく考えてみようということであった

という文章で締めくくる。ここで、大事なことは、ギリシアや現代の美術を論ずるにあたって、時代や分野によらない原理、すなわち、空間感覚というものを見出したことであり、この原理に基づいた議論を展開しようとしていることである。この立場であれば、ギリシアや西欧現代以外にも、和であれ漢であれ、あるいはインドでもイスラムでも、また、美術であれ科学であれ、あるいは社会であっても、同じように論じられるはずである。もとより、上述の原理が意味のあるものであり、有効な議論に耐えるものかどうかは検証が必要ではある。専門家は、この点に特に厳しいであろう。しかし、これこそが著者が前書きで（恐らく自負を籠めて）素人 amateur であることを強調していたゆえんであろう。

巨匠デューラーの作品を見て覚えた疑念をそのままにせず、その疑念の正体を明かそうと（必ずしも専念していたわけではなかろうが、忘れることなく）何年もかけて努力をし、さらに、この疑念の解決を、デューラーの版画という個別の事柄に限定はされない、はなはだ広大な文脈での一般的な命題の形で提案する — 著者 Ivins はこの一連の流れを基本的に自分の力で実現したわけである。本書は、まさに冒険談であり、実際、わたくしが本書に惹かれた最大の理由も著者の知的冒険を共有する愉しみからであった。

序文には、まだ、第二、第三、第四の段落が残っているが、別の記事にしたい。

8. (07.1.23) 序文の第二段落で、著者は、専門的な知識や訓練があったわけではないギリシア美術との関わりをざっと説明する。要するに、長い間古典美術の展示室の奥に版画部があって、著者はオフィスへの往復におのずとギリシア美術を学び、何と云っても、具体的な作品の観察から入ったのだと言っている。展示は当時の標準的なギリシア美術史の知見を反映させていたであろうし、有名な彫刻の復刻鋳造も並んでいたという。さらに、関係する書物も読んだと言っている。

第三段落は少し立ち入って見てみよう。著者は最初の文章で、

どんな人間集団の場合でも、もっとも根底にある直観的な想定は、

かれらが意識することもないほど当然としていることがらの内にこそ見出されるべきものだと、私には思われる。

と言う。「私」はもちろん著者 Ivins であって、このブログの筆者ではない。原文で assumptions とあるものを「想定」としたが、適切であったかどうか。文字通り、集団内で暗黙のうちに了解されている諸種の文化原理とでもいうべきであろうか。そう解すると、この文章は言わずもがなになってはしまう。しかし、次の文章で、著者は踏み込んで、

このような明示化されない根底の想定を見つけ出すには、習慣や思想が全く異なった人間集団の観点から接近するのがもっとも易しい方法である

と言う。ここで、原文の ideas を「思想」としたけれど、「ものの見方」あるいは「事物の解釈の習慣」とでもいうべきかも知れない。「習慣や思想」は一括して、ものへの取り組み方と言ってしまった方がいいのかも知れない。とにかく、著者は、ある集団で当然とされていることは他の集団では必ずしもそうではない、ということに注意しているわけである。以下の論述で、ギリシア人とルネッサンス人や近世西欧人を対比する場面で、具体的な内容が明らかになってくるはずであるが、序文でも、簡単な例を挙げている。すなわち、

このこと具体例を与えると、ギリシア人はかれらの幾何の公理や公準では、かれらのもっとも根本の想定である合同について何一つ言及しなかったけれども、この想定を注意深く排除している幾何からかれらの幾何を見直してみると、合同こそがギリシアの幾何のもっとも根底にある想定として、その形式や力、さらに限界に至るまでの決定的な役割を果たしていることが明らかになる

と書いて、この段落を終える。今は、これ以上の詳しい議論をしても仕方がないであろう。

さて、序文の最後の段落で、著者は、以下の論述は理解の探索のためのおのれの冒険の一部について述べたエッセイであると、この書物の性格を説いている。美術の歴史的な研究では見過ごされがちな長期的な問題を扱っている試みとして興味を惹くようだったら嬉しいというのである。

なお、「序文」のつぎは「結論」に目を通す予定であるが、「序文」（と、実は、本文の脚注をも）見てわたくしが疑問に思ったのは、著者 Ivins は、「科学と仮説」「科学の価値」などのポアンカレの一連の仕事ではなく、なぜ、エンリケスの書物を利用したかということであった。ポアンカレの書物の翻訳は岩波文庫にあり、ずいぶん昔に読んだことがある¹。書棚のどこかに黴にまみれて残っているはずだが、

ポアンカレ：科学の価値（岩波文庫 33 - 902 - 3）

¹むしろ、なぜ、エンリケスの書物が日本語に翻訳されなかったのかを問うべきかも知れない。

が最近復刻されたので、改めて買い求めて読んでみた。「科学と仮説」は本屋にはなかったが、探せばいずれ本屋か本棚で見つかるだろう（なぜか、本棚には

Henri Poincaré: La science et l'hypothèse
(Flammarion, Paris 1968. ISBN 2-08-081056-1)

がすぐ見つかる位置にあった)。いずれにも、空間概念の形成に関して、筋肉感覚や視覚の役割を論じた部分があり、これらの書物が書かれた 20 世紀初頭におけるアインシュタインの相対論の衝撃が偲ばれる。

これらについては、後に、第一章を眺めるときに、エンリケスの書物や他のものも含めて論じたい。もちろん、数学者としてポアンカレの方がエンリケスよりどうだとかいう話ではないし、もともと数学的な意味での技術的な詳細は表に出す話題でもない。さらに、Ivins の書物の延長上で、空間と数学や美術の関わりとなるとエッシャーや、さらに、最近の CG も当然考慮しなければならないだろうが、いくらナイーヴを標榜していても身の程を弁えていないわけでもなく、あるいは、ナイーヴだからこそ適当と思ったところで勝手な打ち切りもできるというわけでもある。

9. (07.1.27) 結論の冒頭の段落に、著者は

私があわただしく、しかも、うわつつらだけを語ってきた長大な歴史の結果はというと、直観、知的習慣、思想、知識、理想のほとんどすべてについて、われわれが古典ギリシア的なものと思っているものからの乖離であった

という文章を置く。この主張自体は本文に立ち入らなくても、ここまで説明してきたことで予想は付くであろう。ここで、「われわれ」とは 20 世紀前半の西欧の知識人のことである。他方、わたくし(たち)は 20 世紀前半の西欧人と同じ教養を身に付けているわけではないから、古典ギリシア的なものと言っても浅薄な印象しかないことは白状しておかなければならない。なお、古典と訳したのは原文では ancient である。古代というと、意味が違ってしまわないか、と思ったからである。いずれにせよ、完全な形で著者と感情を共有できるはずはないが、著者の意図はなぞることはできるだろうし、そうすれば、著者にある程度の共感を抱けるだろう。幸い、著者は、次の段落でギリシア的なものの意義についてやや踏み込んだ要約をする。

われわれが古典ギリシア人から負っているものがいかに多いか、また、かれらの思想の継続、復興、さらに再生についてずいぶん語られているが、これら論議のほとんどは、「黄金時代」、それも、この場合、特定の歴史的な時期の特定の場所、アテナイ、の数百年に及ぶ時代という伝説の名残、に基づいているように思われる。

もちろん、「われわれ」は上と同じ意味である。しかし、著者は、続けて、この「われわれ」を批判して

こう言う人たちは、われわれが他の人たちや時代はもとより、われわれ自身にも、実に多くを負っているのだが、それらについての知見はほとんどないのである。

と言う。もっとも、原文はもっと迫力のある表現であった。例えば、「他の人たち」は other peoples であり、peoples は、特定の文化文明を体現している歴史的あるいは地理的な人間集団である。政治的な意味を籠めて現代なら民族とも呼ばれるような集団から、職人集団や、あるいは宗教団体、学校、特定企業の職員集団まで、いろいろと思いつく。著者は、ギリシア人ばかりが「われわれ (= 20 世紀前半の西欧人)」の文化的文明的先祖ではないことを自覚していない、と批判しているわけである。わたくしたち、つまり、21 世紀初頭の日本人はもちろん、現時点の西欧人も、文化的文明的先祖はもっと多様化している。

著者は、続く文章で、

滅多にはっきりとは指摘されないことだが、思想というものは語や句だけのものではなく、内容や関連、含意があるものであり、しかも、これらは新たな組み合わせで用いられると基本的に変質してしまうものである。句が成り立っている文脈や想定が変わると、その内容や性格も変わってしまう。

と言う。まことにもっともな注意である。なお、「思想」は原語では ideas であるが、まさに、この文章の文脈からは「理念」「想念」「思い」「考え」あるいは「思潮」「時代精神」などいろいろと思いつく。仮に、最初から日本語で書くとしたら、別な語彙を選んでの文章の編成にしたらどうかと言えない。ともかく、著者は、論理的帰結として、

思想の年齢は、思想が有効性の明言であった時からこんなにも遠くなってしまうと、思想の健全性に疑問を投げかける。

と述べて、第二段落を閉じる。要するに、思想はある特定の文脈で明確な価値や有効性があるものであるが、時間が経ってしまい、当初の文脈がもはや成り立たなくなってしまうと、同じ思想を持ち出すことは、むしろ、有害かも知れない、と言っているようである。思想にも、消費期限ないし賞味期限があることに留意せよということであろうか。先人の「思想」をキーワードとして利用するのは便利ではあるが、安易に行うことは、確かに、誠実に自分の言葉で語ることとは両立しないと、わたくしも思う。

まだ、「結論」の三分の一にも目を通したことになる。

10. (07.1.30) さて、結論の第三段落の冒頭で、著者の時代、つまり、現代の性格を要約して、

ギリシア人の世界と違って、われわれが生きている世界は静的ではなく、不連続でもない。われわれが知っており、また、研究しているのは、移り変わる形である。

と言う。もちろん、「われわれが生きている世界」は、20世紀前半の欧米世界が中心のはずであるが、もはや「わたくし（たち）」の世界とも相当に重複しているようでもある。また、著者の青年期からの半世紀近くでも二つの世界大戦があり、その間の価値の転換は激しいものであった。確かに静的な要素はどこにもないが、かと言って、突然何の前触れも無く変化が起きたとも言えないようである。「移り変わる形」は、原文では forms of transition であり、われわれ=わたくしたちが動的な世界に生きていることを意味しているらしい。決して仏教的諦観に近いものではないのである。実際、著者は引き続き文章で、

このエッセイの執筆中に爆発した3個の原子爆弾は、爆発した場所以上に、古典の思想とは両立しない。

と言う。本書前書きの日付は1945年12月だから、3個の原子爆弾のうち、2個は、8月初旬に広島と長崎の上空で爆発したものに違いない。3個目は気になるが、7月に行われたというアリゾナでの実験のようである。まだ、戦争継続中であり、事実そのものが機密であって報道されなかったかと思っただ、戦争終了後何らかの報道がなされたのであろう。なお、翌年7月には、米国に接収された戦艦「長門」などを標的艦としたビキニ環礁での実験が行われているが、いずれの場所も、地理的にも歴史文化的にも西欧世界の範疇に属さなかったところであるから、確かに著者が想定する「古典」つまり古典ギリシアとは馴染まない。しかし、著者は、このような激しい破壊は静的なギリシア的思想と相反すると言おうとしているようである。かくて、著者は、整理して、

このように、思想の根底にある公準が完全に変化してしまったのであり、この変化とともに、数学から美術までの、また、その間にあるあらゆるものを籠めての基本的なギリシア的思考方は、はなはだ示唆に富む興味深いものではあるとは言え、歴史的遺産の一部に過ぎないものになったのである。

と続ける。ここで、思想としたのは原文では thought であり、体系としての思想全体とみるべきであろう。考え方としたのは notions である。ideas を含め、適切に使い分けるのは難しいが、比較的個別性具体性の高いものを見方を指すと考えるべきであろう。しかし、西欧世界がなかなかギリシア的なものに対する思い入れをなかなか払拭できないことも事実である。著者は、続けて、

今だに見られるギリシア思想の大多数は、キリスト教の宗教思想や実践の枠組みとして通用しているものであるが、そこではすっ

かり姿を変えている上に、われわれがギリシア人に関する昔からの思い違いとも全く両立していない。ギリシア人が本当はどんなであったかについては滅多に認識されることはないのである。

と言う。正直のところ、わたくしは意味を把握するのに大変苦労している。キリスト教がギリシア思想の影響を受けて神学を整備したことは納得できるし、西欧世界では、すくなくとも半世紀前はキリスト教信仰は盛んであったと思われるし、今日でも、キリスト教的世界観に基づいた政治的行動は、特に、アメリカの場合、随所に見られる。キリスト教はギリシア的なものだけで成り立っているわけではないが、著者の言おうとしているのはそういうことではなく、むしろ、ギリシア的思想を便宜的に取り込んでいるだけではないか、ということかも知れない。古典ギリシア人の実態を思い、また、これら思想の本来の文脈を考えると、おかしいということだろうか。わたくしが悩んだのは、「思い違い」と「両立」である。西欧人のギリシア人についての描像が必ずしも実態を表していないという意味で「思い違い (misconception)」というのなら、それは理解できる。しかし、それと「両立」しないということは、キリスト教におけるギリシア思想のありようを具体的に知らないと判断できないことである。

著者は、さらに、補足して、

ギリシア人の思想の残りについては、若干の実際の知見、例えば、ユークリッドの幾何の知見などは、通常の生活に役立つものであり、今も生き残っているが、しかし、初等的機械的実用性より高水準の大半のものは、この進展する世界では有用ではないために切り捨てられている。

と注意している。ユークリッドの幾何の評価には異論がある向きもあろう。著者は序文でユークリッドの記述が明晰ではないことに言及しているが、一方、ユークリッドの幾何は実用性だけではないことも確かである。最近の研究では、ユークリッドの原論の評価は、後世の理想化から脱皮し、むしろ、著者の主張に多少近寄ってもいるようであるが、それでもユークリッドの幾何が、幾何を技術的知見の集積から数学と呼ばれるのにふさわしい学問体系として意識したものであるということができないのではないだろうか。しかし、概してこんなものだろうということは、少し考えてみれば、著者が本書のどこかで言っていることではあるが、ギリシア人が二千年数百年昔の古代人である以上当然ではある。

ここで、著者はギリシア人の問題点を指摘して、次の文章で、

ギリシアの倫理的思想の多くでは広範な奴隷労働に基づいた想定が暗黙のうちになされている。こうした（倫理的）公準は、およそ考える人にとって、名門校の教えがこれらの倫理的思想の上に

あれほど魅力的に作り上げられてはいても、そのほとんどを無効化するものである。

と言う。公準とは postulates である。日本語として、この文脈では熟していないと思われるが、このままにしておく。ギリシアというか古代地中海世界が奴隷を前提としていたことはよく知られており、優雅な自由民が社会的思潮を作り上げていたことは想像できるし、かれらの著作のさまざまな思想や理想が、いわば美辞麗句として、名門校の教育のモットーとして掲げられていたことも想像が付く。言われてみればその通りという感じではある。日本の場合だと、儒教だとか仏教から来た標語が多いと思われるが、キリスト教系ミッションスクールは同じ問題を抱えることになるかも知れない。

著者の否定的な言説は、さらに続く。まず、肯定的な見解として、

前向きの知的な職業で人生を送っているものにとって依然興味を惹くギリシアの思想家は、エレアのゼノンやプラトンのような人たちであろう。かれらは際限のない質問を繰り返し、弁証法を実行したが、解答をほとんど与えることもなく、また、体系も作らなかった。

と言う。ゼノンは逆理で有名だとわたくしは思っていたが、大学新入生相手のセミナーでは知らない人が多かった。きちんと読んだ本というわけではないので善し悪しはわからないが、昔、本屋で見つけた

千代島 雅：アキレスと亀 — 時間の哲学と論理 —
(晃洋書房。2005 ISBN4-7710-1613-5)

は、ゼノンの逆理の一つを論じている。実際、ゼノンの逆理は著者の立場によって、いまだにいかようにも論じられるようなところがあるようで、知らない方が健全かも知れない。Ivins の著書を読み、ギリシア人の空間感覚が接触筋肉感覚に基づくという説明を聞いた後では、ゼノンが無限、連続、運動を把握するのに極めて不器用であって、實際上把握できなかったことが、植民地の人であっても、この時代のギリシア人の限界として納得できるように思われるが、ゼノンの逆理を論じる人たちは、そんな身も蓋もない議論をしているわけではない。

また、プラトンの著作では、ソクラテスが対話者の論点の欠陥を質問の形で穿り出して、結局、一方的な思い込みによる結論が成り立たないことを示して言ってよいであろう。もとより、プラトンの貴重な思想は、現実には虚構であり、真の存在であるアイデアが仮の姿で現れているだけだ、ということのようだが、これは、やや、形を変えながらも、現代の数学者に広く支持されている思想でもある。例えば、

Roger Penrose : The emperor's new mind
(Oxford University Press. 1989 ISBN 0 14 01 4534 6)

の第10章 Where lies the physics of mind に、典型的な純粋数学者の考え方が詳述されている（翻訳「皇帝の新しいところ、みすず書房」があるが、手元がないので書誌データがわからない。ネットで調べてください）。ただし、アイデアの学問として数学を捉えることは、数学を静止した対象の関係の記述として把握することのようでもあり、疑問を持っている数学者も少なくはない。まして、応用系の人たちには数学者であるかどうかを問わず無縁の発想であろう。

後は、否定的な面しかない。要するに古すぎるのである。つまり、著者は、

ギリシア人の科学と教条は、息絶えた歴史の希薄な空気の中に消えてしまった。創造的な美術では、ギリシアの思想は、すでに絞り尽くされてしまったという簡単な理由で捨て去られてしまった。それらは何の新味ももたらさないのである。まだ、工房で用いられてはいるが、それは凡庸な者の無害で空虚な決まりに過ぎない。

と言い切って、この長い段落を終える。ところで、最後の文章は、石膏デッサンのことを指すのだろうか。しかし、石膏デッサンの像は、必ずしもギリシアではないと思うし、半世紀前のニューヨークなどの美術学校の教程を調べないと何ともいえない。ちなみに、「凡庸な者」としたのは原文では uncreative であり、少し前の「創造的」と対をなしている。

ところで、今回、結論を丁寧に眺めてみて、この段落の冒頭のいくつかの文章は、原爆の開発が実際にどういう体制で行われたかを考えてみると、今、つまり、21世紀初頭の世界情勢とからめても、第二次世界大戦の意味として恐らく本書の著者が全く想いもしていないような相当に微妙な深読みができることに気がついた。例えば、

Hoddeson, Henriksen, Meade, Westfall: Critical Assembly
(Cambridge University Press, 1993. ISBN 0-521-44132-3)

や John von Neumann の選集

F. Brody & T. Vamos 編：The Neumann compendium
(World Scientific, 1995. ISBN 9810222017)

(またはノイマン全集第6巻) 所収の

Defense in atomic war

などを見られよ。著者 Ivins もやはりギリシア以来の思想を正統思想としている文明の中で生きていたと思う。

結論は、まだ、1ページ余り残っている。

1 1. (07.02.02) 結論の第四段落で、著者はギリシア文化を要約して、まず、

ギリシアの合理主義は、先行するものに対しての前進は大きかったとは言え、純粹思想の領域で破綻してしまい、また、美術や行動の領域でもそうであった。ギリシア人はあらゆることに批判的ではあったが、みずからの前提や論理は、いずれも欠陥があったが、批判の外であった。かれらの演繹法は、せいぜいのところ同義反復であって、袋小路に導くだけであった。

と言う。専門家が決して思いつかない言説であることは間違いがなく、このように、ギリシア人の限界が見えるというのは、著者がギリシア人に一体化していないからであろう。実際、著者は、続く文章で、

それから逃れるには、何らかの注意深い冒険的な帰納法が必要であったし、その正当化や材料は論理の外にあった。

と言い、さらに、

現代最大の懐疑論者が言うように、「心にもさまざまな理があるが、理性はというとそんなことは何も知らない」のである。

と、この段落を纏める。上の方の文章は、一瞬、ゲーデルの不完全性定理を思い起こさせる。ゲーデルの不完全性定理は、最近、

ゲーデル： 不完全性定理 (岩波文庫 33-944-1)

として出版された。訳者の林晋・八杉満利子両氏の詳細な解説は、力点をヒルベルト計画との関係の解きほぐしに置き、俗な安易な解釈を戒めている。著者 Ivins は何か文献を引用しているわけでないので、俗であろうがなかろうが、そもそもゲーデルの仕事を知っていたかどうか。むしろ、ここは、Ivins 自身が本書で説明しているその後の歴史的展開を指しているのであろう。

一方、最後の文章は、わたくしの無知さを思い知らされたものである。引用文は、恐らくは、音（ルケールアセレゾン、クラレゾンヌコネポワン）を尊重してか、本来の仏語のまま

Le coeur a ses raisons, que la raison ne connaît point

である。恐らく、近世以降のフランス系の哲学についての知見がある人なら、この句は、最大の懐疑論者や、また、発された文脈も籠めて、誰でもが知っていることなのだろう。実際、パスカルの *Pensées* が出典である。ところで、この句がここに置かれている意味は何だろうか。この句は、端的には、さまざまある情緒と理屈は関わりはない、ということだろうが、ギリシア文化の限界との関連ではどう解釈すべきか。ギリシア人にはギリシア人の感情があり、それがかれらの論理を制約していたということは既述の通りであり、納得できる。しかし、著者は、現代の人間まで考慮に入れると、ギリシア人にも現代人にも感情は共通のものがあるけれども、それらは実は論理では把握できないものだという風に、この文章を解しているのだろうか。

第五段落は、ほぼ全部引用である。著者は

ある意味でこの物語を総括するものとして、Werner Jaeger の注意がある：アリストテレスの「西欧の知的指導者としての歴史的な重要性は、ヨーロッパ文化における独立した哲学的業績の発展が彼に対する500年にも及ぶ闘いの形をとってきたという事実によっても、確かに少しも減じることがない。現代の観点から見ると、彼は、しかし、伝統の代表者に過ぎず、われわれ固有の問題や知識の自由で創造的な進歩を象徴するものではない。」

と書く。脚注が付されていて、

W. Jaeger: Aristotle (Oxford University Press, 1934), p.368

とある。アリストテレス学者はもちろんアリストテレスについてもほとんど知らない身として、そんなものかなとしか言いようがない。Jaegerは何者かと思ったらWikipediaに記事があった。姓から察しが付くように、ドイツ系の人で、Ivinsが引用したのは英訳のようである。Hitlerの体制に馴染めず、1936年合衆国に移住して、シカゴ大学ハーヴァード大学を経て、1961年に73歳で亡くなっている。Ivinsとは交流があったと思われる。

結論には、まだ、最後の段落が残っている。こういう奇妙な読み方をしてるのは、普通本を本格的に読もうと決める前に、前書きを見たり、目次や序文、結論を斜めにさっと見て、見当を付け覚悟をするのに倣ったのである。したがって、文章ごとに立ち止まるようなことは避けなければいけないことではあった。

12. (07.02.05) 結論の最終段落で、著者は本書の議論をまとめて、

考慮に値することは、この歴史の流れにおける二つの決定的な瞬間、第一は、15世紀早期、再発見された古典的な形式への崇拜が始まったとき、第二は、17世紀の初期、復興したアリストテレス主義の影響力と残酷さが頂点に達したときであるが、このときに、多彩な芸術家アルベルティと建築家かつ技師デザルグがいたということである。かれらは、自分たちにとっては職業の上での実際的な問題と苦闘しながら、かれらが革命的とも想定されるべき第一歩を踏み出し、それがゆくゆくは中心射影と断面の遠近法となり、そこを経て非計量的な幾何学という順序についてのもっとも高度に一般化された科学に至ったのである。

と、最初の文章で言う。内容は本書で詳述されていることではあるが、西欧思想史とでもいうべきものに知見がないと、17世紀早期云々のことは、少なくともこれだけでは、よくわからない。しかし、世間の風潮というべきものが無条件のギリシア礼賛に傾きかけたとき、現実の問題を直視していたアルベルティやデザルグが、単にギリシアの幻想に惑わされなかつただけでなく、それを乗り越える論理、経験、実績を備えていたと言っているのはわかる。

また、この段落も実際のところ英文のままの方がよいような気もする。例えば、crucial を「決定的」としたけれども、原文が decisive あるいは critical などではなかったのは修辭的以外の理由もあったのではないだろうか。また、of their arts を「職業の上で」としたのは文脈上この方が適當であるように思われたからである。本書のように、本義の広範な意味内容が arts に籠められて論じられているのに、特定の語が選ばれてしまうと、本来、意識すべきであろう意味の共鳴が完全に失われてしまう。他言語に移すというのは解釈行為であり、観測行為として、ある種の不確定性原理が働くというべきであろうか。同じことは、「科学」とした science にもある。ここでは、「知識」とした方が自然かも知れないと思う。

最終段落の最後の文章は、著者が本書に籠めたメッセージのようである。すなわち、

振り返って見れば、かれらの発見というものは、西欧がギリシアの伝統という禁圧的な重荷から自らを解放し、論理的な方法と哲学的な正当化を備えた新しい伝統を作り出すという長い争いの過程でも、もっとも「決定的な戦い」と言えるもののうちにあったようである。

と言う。以上で、結論は終わる。ここで、「論理的な方法と哲学的な正当化」とは、英文では、a logical apparatus and a philosophical justification であり、不定冠詞 a は西欧近代文明もそれなりに相対化されて意識されていることを示しているようでもある。わたくしの解釈であるが、この部分は、より技術的には、無限と運動の認識の質の転換を指しており、それが、結局、西欧近代の創出が、数学、特に、解析学に基づいてきたという事実に対応している。

なお、例えば、本屋なり図書館なりで本書を手にとって読もう、あるいは、買おうと決断する前には、大体、前書き、目次、序文、結論を斜めに眺めるであろう。ここまでの記事は、そういう行動に倣ったつもりだが、やや脱線をしてしまった。

ところで、このような Ivins 流の西欧文化史が、どうして、日本文明の秘密を解き明かす鍵になるかも知れないと、わたくしは思うに至ったのだろうか。その理由は、著者の論理構成の仕方である。すでに述べてあるが、著者はエンリケスの著書を読み、空間感覚は触覚的なものと視覚的なものとに大別されることを知っていた（これは、わたくしの想像では、青年期の相対論の衝撃がもとになっており、その頃はドイツにいたようであるから、もともとはエンリケスのドイツ語の本を読んだのではないだろうか）。後年、版画部の責任者としてメトロポリタン美術館に勤務するようになってから、西欧美術史の通史を展示物によって自ずと体感するようになり、違和感から共感まで、さまざまな感慨を覚えるようになったに違いない。Ivins は、この感慨を自覚し、正当化するために、合理的な説明を試みようとした。特に、デュー

ラーの版画については、遠近法の狂いを理解するために、アルベルティから射影幾何までの遠近法の歴史や理論について深く学び、その結果を（本書より専門性の高い）考察に反映させたようである。ここで、さらに一歩進めて、ギリシア美術に覚えていた違和感の説明を試み、それを遠近法に関する知見と融合して、西欧文化史として整理したのが、本書というエッセイであろう。

ギリシア美術についての違和感は重層的であって、第一に、一次資料が十分に伝来していないこと、第二に19世紀のギリシア理想化というイデオロギーによる研究成果の偏りがあり、著者は、これらをまず払拭した上で、違和感の本質が、ギリシア人と現代西欧人の空間感覚の差異に基づくことを主張する。著者は、接触筋肉感覚と視覚とを対比させ、それぞれの感覚に拠る空間認識の特徴を、ここが大切なところだが、簡単な実験によって、実証する。実は、本書の第一章の具体的な内容が、この両感覚による空間認識の特徴の整理である。本書の前半は、この整理結果を利用して、ギリシア人の空間認識が接触筋肉感覚的なものであり、それに起因する空間認識の限界がギリシア人の文化社会学術などあらゆるところに及んでいたという主張とその検証の試みである。その際には、ギリシア美術やギリシア文化についての一次資料の喪失や冷静な評価の不足も検討の対象になるのである。

こういふと、生理的な感覚が非常に高度な文化社会をも規定すると著者が言っているようであり、確かに、そういう面もあるが、大事なことは、接触筋肉感覚あるいは視覚という生理的感覚と空間認識との関わりを客観的に把握しようという試みと実証実験があり、それらに基づいて、接触筋肉感覚と視覚の差異として対比可能な現象を分離して、ギリシアと西欧近世におけるこれら現象の現れ方に観察を集中させていることである。もとより、純粋に接触筋肉的あるいは視覚的と分類される社会集団があるわけではなく、また、個体では検証可能なものでも集団にはどう反映されるのかは明らかでない。したがって、著者の該博な知識と経験を反映させた、観察された種々の現象の比較解釈は本書の重要な論点ではあるが、検証困難な感情的な議論が遂行されているわけではない。実際、著者は美醜の判断への立ち入りは慎重に排除している。

今日の水準で考えると、著者が頼った簡単な実証実験は、脳科学的あるいは心理学的生理学的により精度と客観性の高い知見として整理されている可能性があり、また、個体での感覚が集団にどう移行するかについても、相当の知見が集積されているに違いない。したがって、著者の論証の可否は、これらの観点からも検討されるべきであろうと思われる。さらには、生理的感覚も接触筋肉感覚や視覚以外にも空間認識や時間認識に影響を及ぼすものがあるであろう。それらを複合的に扱うことも、あるいは、個々の感覚にのみ着目して扱うこともできるに違いない。今日的水準でのこれらの知見を、高度の文化社会現象の解釈に応用することがどの程度行われているのであろうか。一種の演繹原理を明示し、それらを具体例によって検証し、対象の性格

の規定を実証するという知的な姿勢は、恐らくは、弁護士のものに違いない。このような手法は、ギリシアと西欧近世以外についても適用可能ではあるまいか。そうだとすると、演繹原理となるべき空間感覚の特徴の抽出と検証が、そのための第一歩になるだろう、というわけである。

13. (07.02.11) 順序としては、第一章を眺めることになるが、しばらくぶりに母の見舞いに実家に行くことにして、やや慌ててもいたせいか、Ivinsの著書は結局持参しなかった。たまたま、空港売店で、

村上隆：芸術起業論。幻冬舎。2006。ISBN4-344-01178-3 C0095

を見つけた。早速購入し、機内で読んだ。村上氏は芸術家であり、本書の読者の想定もアニメ作家などを含む芸術家志望の人たちであろうか。わたくしは老境のナイーブな数学者であり、村上氏の著書によって触発される要素は多くはないはずであるが、このブログの底流ともいうべき「日本文明の秘密」の一端を氏がご存知であるらしいことはその活動から推察できることでもあって、興味はあったのである。そういうわけで、わたくしの読み方は、芸術云々からやや離れてしまうのは仕方がないことではある。こういう観点から、この本のキーワードを挙げると「文脈」index ぶんみやく@「文脈」という語であろう。例えば、(p.35,5-13行, p.158,12-14行)

欧米で芸術作品を制作する上での不文律は、「作品を通して世界芸術史での文脈を作ること」です。…それが「観念」や「概念」なのです。これこそが価値の源泉でありブランドの本質であり、芸術作品の評価の理由にもなることです。くりかえしますが、認められたのは、観念や概念の部分なのです。

芸術の世界だけでなく、どの業界にもどの分野にも特有の文脈があります。が、「文脈の歴史のひきだしを開けたり閉めたりすること」が、価値や流行を生み出します。

とある。実際に、氏が日本というものを意識して活動していることは、

「安易に外国におもねらなくていい。日本人としての記憶を騙してはならない。日本の核心となる部分だからこそ世界に普遍的な表現をあみださなければいけない」

自分のリアルな感覚を信じることを軸にしたい、と出てきたのです。

日本の文化を欧米に伝えるには、西洋の味の模倣をするのではなく、日本の味のまま濃くするべきなのです。

という条 (p.154,10-13行, p.155,1-2行) で明らかであるが、

第二次世界大戦で無条件降伏をした日本は、アメリカの支配の下に敗戦国がとらされる責任領域内で民主化されました。その民主

化の過程で、日本には階級社会がなくなりました。
ここが欧米と日本の差を生んだポイントです。

とあるように (p.110, 5-8 行), はなはだ冷静でもある。特に、「アメリカの支配の下に敗戦国がとらされる責任領域内で」の文言は、「戦後民主主義」の本質を的確に突いている上に、もし、欧米が民主主義の先進国であるというのなら、その次の文章は相当な皮肉にもなる。240 ページあたりに、氏の感慨が漂っている。実際、わたくしもそんな感じを抱いている。

なお、氏は、原爆投下による日本の敗戦に言及した後、氏の仕事の背景を説明して、

何もかもが一瞬でなくなってしまうこと。そこから何かを新しく生み出すということ。戦後の焦土の時代から生まれ続けている日本の「かわいい」キャラクターは、アメリカのディズニーの影響を受けていることは明らかですが、「何もかもなくなったところから新しい命を誕生させたい」という願望から来ているかもしれないのです。

と言っている (p.221,14 行-p.222,2 行)。「」内の心情は、日本古来からのものでもあるというのだが、この心情から村上氏は出発したのであろう。このブログでのわたくしの関心に近いのは、しかし、この心情の意味と起源をどう説明するかである。

もちろん、村上氏の書物は芸術論であり、芸術家としての成功について論じており、さらに、芸術家の養成について述べている。氏固有の条件下でのみ意味を持つことも多いであろうが、氏の視点論点は分析し、整理しておく価値があるだろう。

14. (07.02.24) 第一章の内容は著者 Ivins の論述の根拠をなすものである。Ivins の論証の組み立ては極めて堅牢のように見えるが、論理的な基盤はこの章で述べている接触筋肉感覚および視覚によるそれぞれの空間認識の特徴の差異にある。したがって、この章の内容が今日的な批判に耐えないようであれば、第二章以降の議論の説得力も相当に削がれてしまう。

第一章の標題は「眼と手」である。著者は章の最初の文章を

わたくしの冒険は、接触筋肉的および視覚的な直感それぞれの器官としての手と眼を使つての簡単な自家製の実験から始まる。

と書く。実験は、当然、読者も容易に追試できる水準のものであるが、実験結果の解釈については著者に同意できるかどうかは明らかなことではない。著者自身は、すぐ続けて、

これら実験の結果が明らかで当たり前のことのように見えるかも知れないが、これらの含意には著しい興味がある。

と言う。したがって、実験結果の解釈の部分が非常に重要なわけであるが、著者が利用しているのは、1930年代までの医学、心理学、社会学などの知見である。また、著者や読者個々人という個体における実験をある文化社会のものに拡大移行することが正しいかどうか議論の余地があろう。さらに、どちらかの感覚の一方のみで空間的直感が構成されていると著者が言っているわけではない。しかし、著者は、自家製の実験から、接触筋肉的あるいは視覚的感覚の優劣が文化社会の性格に反映しているという著者の主張の説明ができるというわけである。

著者は、まず、眼について、視覚が基本的に連続的な感覚であり、鮮明不鮮明の境界も判然としないということに注意を喚起している。

眼がやや早く動くということでない限り、意識の連続性には断絶は感じられない。もちろん、視るということは選択的な意志活動だから、このような断絶は多いし、大きいのではあるが。視野に物が入って来ると、段階的に徐々に完全に意識されるまで進行する。

これは概略的な一般論である。しかし、この書物の興味深いところでは、引き続き、実証実験というべきものを説明しているところである。

15. (07.03.18) Ivins は簡易的な実証実験を次のように説明する。

前方を見ながら、手を両肩の線よりも後方まで一杯に伸ばす。手先は、見ることはできないし、視覚的にも感じることはできない。しかし、腕をゆっくりと前方に振り出してみると、見るようになるよりもずっと早くから、視覚的に手が意識できているということがわかるのである。

ここは文意の流れでは、まだ切れ目ではない。しかし、原文を日本語に直そうと試みると、困惑を覚えざるをえないことがある。空間的な関係と時間的な関係を、日本語、特に、大和言葉ではほぼ同じ言葉で表す場合が多いが、そのため、こういう場合に適切な語彙を探して苦しい思いをすることにもなり、局所的に語彙を英語から日本語に置き換えるだけでは、文章の全体の論理的な構成に素直に従えなくなってしまうのである。英文だって時空は渾然としているのではないか、と言われるかも知れない。しかし、例えば、before you という語を、誤解のないように、in front of you あるいは prior to you とか earlier than you と言い換えるのは不自然ではないように思われる。当ブログのここまでで説明してきたことと関わりがあることであるが、もとより、この手の事柄でも議論の内容を感覚的な水準に留めないようにするのは専門家の出動が必要ではあろうから、ナイーヴ（プロフィール参照）なわたくしには手に負えないことではある。

ともかく、著者は上記の文の内容を整理して言う。

前方への腕の振り出し早期のある位置で、手の視覚的な意識が、腕が静止している間はないが、腕の運動が開始されれば直ちに生じるというところがある。

著者は、さらに、色彩や形状への意識を籠めて、再び腕の振り出しを観察している。この観察の内容は、引き続き著者の筋肉接触感覚についての観察と併せて、著者の考え方がよくわかるところである。詳しく説明するためには、さらに、著者の観察内容を紹介しなければならないが、なかなかブログにこまけていられない事情がわたくしにもある。このままでは中途半端を承知で、取りあえずの公開しておく。

16. (07.03.26) やや脱線のようなではあるが、先週の金曜までアメリカ中西部の端、シンシナティを訪ねてきた。用務先はシンシナティ大学で、今更ながら「共同研究」のためである。

この大学は、学部学生2万人、大学院生5万人(!)の中堅大学である。4年近い昔に訪ねたときの工事中の雑然とした状況とは一変していた。昼飯の際の雑談で、今や大学は大産業だ、商品は学位で、顧客は外国人学生だ、と皮肉な言い回しをしたファカルティがいたが、確かにその通りかも知れない。

ホストは中国人、在米20年余り、すでに米国籍の人だが、大学院生に関して、アメリカ人学生は学問が好きで来ているが、中国人やインド人は資格取得のためだけに来ているので、よくないと言っていた。アメリカのどの大学でも似たような状況らしく、ホストにとっては昔日の感もあるのだろうが、わたくしの意見は少し違う。日本人の影が極めて薄くなっていること、それは少子化だけが理由ではないことは韓国人はたくさんいることでわかるが、このことを勘案しつつ、二十年くらい先の世界やアメリカの様子を考え、また、日本や日本人の有りようを想像して暗澹たる想いを覚えた。そのことはホストには口にはできない。

さて、シンシナティはオハイオ河沿いの物資の集積地として古くから栄えていた豊かな町で、その名残はダウントウンに今も残る古い建物の意匠などにも見ることができる。ただし、今日ではダウントウンは、シンシナティ本拠の国際企業の高層ビルや高級ホテルのある一画とその近くのオハイオ河河川敷のフットボールやベースボールのスタジアム辺りの一帯を除くと、荒れており、せつかくの歴史ある佇まいが瀕死の状態にあることが残念である。都心部に富裕層が居住するような条件も成り立たなくなって久しく、そのため、このような建造物を維持管理する能力がとうに失われてしまったわけである。しかし、オハイオ河対岸やハイウェイからのダウントウンの光景などはなかなかのものである。町自体は、対岸のケンタッキー州北部と一帯になって繁栄しているようである。

一般に、アメリカの都市がこんな状態になってしまったのは、フォードのせいだ、奴が車を売りたいために郊外の生活のよさを喧伝して都市を殺してしまったのだ、という意見もあるようではあるが、今更そんなことを言って

も始まらない。要は、都市というものをどう再定義し、都市での生活をどう再構成するかにあたって、社会的な規範性を導くような市民間で共有されるべき生活実感がなくなっているのだろう。しかし、郊外の小規模のコミュニティは、このような共有感覚が人種国籍に関わらず形成できるような印象もあるので、敢えて言えば、「アメリカ文明」の基層には、メソポタミア以来の「古代都市文明」とはまた違う、何か素朴なものが残っているのかも知れない — まあ、ナイーヴ（プロフィール参照）なりの感想だが。

今のシンシナティの場合、ダウントウンは夜は閑散としているが、それでも昔からの劇場などはダウントウンの近くにまだ残っているようだ。とは言え、用務先が大学であれば、幸い、公共交通機関のバスが意外と整備されているので車のない訪問者がダウントウンに宿をとってもホストの世話にならなくても大学との往復はできるようである。

短い滞在であったが、前半は、郊外の、サバティカル休暇中のホストの同僚の住宅に転がり込んでおり、大学との往来はホストの世話にならなければならない。後半、家内が来て、ダウントウンのホテルに移って、やや自分で動けるかなと思うようになったところで、今回の滞在は終りになった。「共同研究」の方は、先方のクォーターの境目の忙しさや関連国際研究集会の窓口を引き受けているための忙しさなどで、形になるような進展はなかった。メールの交換で仕上るしかない。

また、家内が着いてからの週末にレンタカーで四半世紀ぶりにウェスト・ラフィエットを訪ねてみた。ナビつきのレンタカーを借りたが、そのことが裏目に出たところもある。四半世紀前には旅行に出る前に全米自動車連盟（AAA）のオフィスに出向き、詳しい道程図を作ってもらい、旅行の全体像を頭に入れていたが、今回は時間もないこともあってナビをつけてもらったのだが、そのため、全体像のわからない旅行となり、ナビの情報の古さによって混乱しても、適切な補正ができなかった。局所的な情報がいくら詳しくても、それだけでは駄目という単純なことではあるが、具体的には何時間分かの損をした。しかし、安全が第一で、そういう意味では何事もなかったのはよかった。田舎を走っていたためもあるだろうが、走行は楽であったが、いまだに右のふくらはぎには長時間運転の痛みが残っている。

ラフィエット側からワバッシュ川対岸のウェスト・ラフィエットを望むと、パーデュー大学の建物群が圧巻で、本当に大学は大産業になっていると思った。大学の敷地内や周辺の様子は随分変わっていたようだが、住宅街の部分はそう変化はしていないようだった。また、住宅街とは言えないが、かつて我々が住んでいたアパートもほぼそのままであった。雪が解けたばかりのせいかアプローチは必ずしも清潔とは言えなかったが、当時の誰かがいまだに住んでいるはずもなく、かつての旧居のドアを確認したのみである。

ウェスト・ラフィエットには、まだ知人はいる。まだ、引退せず、教育を続けているという人もいる。ただし、週末は旅行中ということで会えなかつ

た。して見ると、老骨に鞭打ってというわけでもなさそうである。訪ねることができた知人も、すでに引退していたが、各種のヴォランティア活動で夫婦とも結構急がしそうであった。かれらの家の庭は最近整備しなおしたようで、庭師というのは、かつての大学の同僚、数学教室の元教授だったそうである。この庭師教授は、実解析という数学の分野では高名な人であり、また、四半世紀前わたくしの居たときには、廊下の角の窓の二つあるオフィスを占めていて、ドアには、Best Teacher Award のポスターが貼ってあったことを覚えている。退職後、二年間、大学の庭園設計の講義を聴講し、今や庭師として通用しているという。知人の庭は、友人料金でやってくれたそうであるが、簡素な、石畳と芝と樹木の配置に工夫のある、日本庭園とはまた違う、曲線を多用したものであった。全体的な（またもや！）写真を撮って来なかったのが惜しまれる。

さて、こんな話が当ブログのテーマと関係があるのかと問われたら、実は、あるのである。ただし、明示的にあるのかと言われると、即答しがたい。

17. (07.03.30) 講談社の宣伝誌「本」(平成19年4月号)で

大澤真幸：量子力学とともにある「歴史哲学テーゼ」

という記事を偶々見つけた。量子力学は Ivins の意識にはなかったように思う。量子力学は、相対性理論が大域的な宇宙論に関わっているのと違い、超局所的な微細な現象を論じるものなので、空間や美術という本質的に大域的な話題とは縁遠いからかも知れない。とは言え、Ivins を読み直す上では、量子力学も念頭に置くべきことかなと思ひ、上掲の記事の標題に惹かれ、目を通して見た、否、正確には目を通して見た。なかなか Ivins の本に戻れないと思いつつも、せっかくだから大澤氏の記事について感想を記しておきたい。

上掲の記事は、しかし、わたくしのナイーヴさ（プロフィール参照）を思い知らされるだけであった。実際、連載記事の一回分であるようで、わたくしには未知の前回までの流れもある。また、大澤氏は記事末尾の紹介によると社会学専攻の（多分若手の優秀な）大学教員であり、素養の質がわたくしとは全く違う。記事の下敷きは、ベンヤミンの「歴史哲学テーゼ」（という論考）と察せられたが、まず、ベンヤミンとは何者であるかがわからない。何回か聞いたことはあるようにも思うし、本屋の店頭で関連する書物の存在に気づいていたようにも思うが、特段の関心を覚えたことはない。手近に亡父の蔵書の

The New Encyclopaedia Britannica
Volume 2 Micropaedia/ Ready Reference
15th Edition (1994)

があったので、あたってみた（Wikipediaなどを参照する手もあったが）。恐らく、ベンヤミンは Benjamin, Judah P と Benkei（弁慶のことである）の

間にある項目 Benjamin, Walter であろうと思われる。1933 年すなわち 40 代以降パリに移り、ヴィシー政権下のフランス脱出に失敗して仏西国境の町で自決した人であるが、20 世紀前半でのもっとも重要なドイツの文芸批評家と目されているとあった。また、美学者ともあったから、この人が件のベンヤミンとすれば、大澤氏の関心が社会学に留まっていなかったということも併せて推察されることになる。

しかし、大澤氏の記事は、ベンヤミンが量子力学的な思想によって歴史認識を論じたとは言っていないようで、むしろ、ベンヤミンの主張について、量子力学的崩壊を利用して多々ありうる歴史的な可能性のうちの一つが必然的に選択されるという形でレーニンの革命思想の理解や説明ができるという風に、大澤氏が独自の解釈を与えたということを述べているように、わたくしには思われた。量子力学と歴史認識を結びつけるのは次元の違う議論のような印象も否めず、したがって、論理的には任意の結論が成り立つような記述になってしまう恐れもないわけではない。冒険ではある。ところで、大澤氏は記事中で、自由意志と歴史認識とを関連付けている。Roger Penrose は、重力場の量子化の問題と人間の脳活動と結びつけ、量子力学の不確定性原理を自由意志の根源として強調している。Penrose の見解自体の当否は不明であるが、大澤氏の「自由意志」には Penrose 的な含意があるというわけではなさそうである。連載の他の回の記事に関連の議論があるのかも知れない。

さて、そろそろ Ivins の本に戻りたい。第 1 章は比較的易しいところなのに、この体たらくでは後が大変である。

18. (07.04.07) 形ばかりというきらいもあるものの、Ivins の著書に戻ろう。ブログ記事 (15) で触れたことだが、Ivins は、対象が静止している限り視覚的に意識できないが、少しでも動きがあると直ちに認知できるという臨界的な位置があることに注意を払った。そして、続いて次のように言う。

手がこの範囲から前に振り出されるにつれ、徐々に手の形や色ははっきりとしてくるが、いずれもが、目を動かさない限り、完全には決してならない。鮮明な像が得られる視角の小ささは、本文の一行のある短い語をじっと眺めると、両側の語の活字が急速にぼやけてくること、また、どの辺りからぼやけだし、さらには完全に見えなくなるかもはっきりしないということに注意するだけでわかるはずである。

われわれは、絶えず、特に意識することもなく、眼を動かすことができ、また、動かしているので、普通このような視覚の鮮明不鮮明への移行を気にすることはないが、実は、人混みを行き来するたびにそうしているのである。

第二の文は、視覚の社会的な意義にも繋がりそうではあるが、Ivins の全体的な論調ではこのようなことは強調されていない。一方、第一の文章に相当

する原文には脚注があり、W. S. Duke-Elder の *The Book of Ophthalmology* (St. Louis, 1933) 所収の Wertheim 曲線の記事を引いている。わたくし自身も、上で指示されたように一語を凝視してみたが、そう言われればそうかも知れないという程度の効果しか経験できなかった。また、横書きではなく縦書きの場合はどうかと思い、その場合も試みたが、鮮明にピントが合う領域は円形に近いような印象を覚えたが、確たるところはわからなかった。正確な実験には、やはり管理された環境が必要なのであろう。いずれにせよ、わたくしのは老人の眼でもあり、基本通りに反応しているかどうかは明らかではない。この点は、著述時の Ivins も似たようなものではなかったかという疑いもあるけれど、そこは周到に当時の眼科学の標準的な教科書で補強しているというわけであろう。

ちなみに、Wertheim でネット検索をしてみたところ、眼科学の Wertheim 曲線と思われるものはなかなか見つからず、最初に統計力学や物性物理学系の論文が出てきたり、科学ジャーナリスト（らしい）Margaret Wertheim やその著書を論じたブログに行き当たったりした[「ヴェルトハイム」では見つからなかった]。もちろん、Wertheim という名前の人は多数いるわけで、まして、百年近い年月も計算に入れなければならないのだから不思議でも何でもない（ただし、W. S. Duke-Elder は今も検索できるが²）。

しかし、視覚関連の部分は脳の研究でも極めて進んでいると聞いているから、上記の件に関しては精密な知見が得られているはずである。実際、そのような内容らしい項目も多数ヒットしたが、学術雑誌記事は大学内からの接続ならともかく外からでは読むことができない。また、仮に読めたとしても直ちに理解はできまい。ただし、技術的詳細の理解は重要ではないので、それよりも大局的な問題意識が直ちに把握できるだろうかというのである。したがって、専門家の要領のよい解説がどうしても必要になるだろう。とは言え、Ivins の見解を今日の立場で見直すための必須の条件は、このような脳科学の進歩を取りこむことではある。

ところで、わたくしは不勉強でもあり（ナイーヴの属性の一！プロフィール参照）、Margaret Wertheim の著書は見たことがない。ネット上の書評を瞥見した限りでは挑発的な内容のものが多いらしく、面白そうではある。しかし、わたくしの現況ではわざわざ注文するのも憚られる。

Ivins の視覚に関する分析はまだまだ続き、次に、色彩の認識と視覚との関係を示す簡単な実験を紹介している。

19. (07.04.15) 視覚と色彩の関連について、Ivins は別の簡単な実験で確かめられるとし、

²実は、

Stuart Brown: *Conceptions of inquiry*, Routledge, 1981

で、Ivins の *Art & Geometry* が論じられている。関連して、Duke-Elder の著書での Wertheim 曲線の該当箇所も示されている。

暗くした部屋で、赤色の光点を、肩の線よりも後方から、動かさずに前方を凝視している目が鮮明な像を得るところまで、ゆっくりと振り出して行くと、意識されるに伴って、この点はさまざまに変化する

と言う。やや具体的には、つぎの文章で、

光点は、突然にではなく、徐々に意識されるようになる。それも、振り出しのどの時点で意識されるようになったかをはっきりと言うのが難しいくらい徐々に意識されるのである。光点は振り出されるにつれて段々と輝きを増す。この振り出しのあるところで、すごいことが起きる。目が最初にぼんやりとした明るい点を認めるときには、この点は特徴のない灰色をしている。さらに前方へ動いていくうちに、この点は、色彩を変じ、真っ赤になる範囲に入ってしまう。

という説明をしている。確かに、追体験できる現象ではあるが、導くべき解釈は、なかなか難しい。

わたくしは、視野の検査を受けたことがあるが、これは白色の球面に白色光の輝点を写し出し、どの位置で最初に認識したかを手元のスイッチで記録する方法のものであった。輝点の光度には変化はあるが、色があるわけではない。もともと視野の限界を決定するのが検査の目的であるからである。光点の鮮明さは確かに視野の中心部で増すように思われたが、老眼でしかも乱視の入った近眼ともなると、定かではない。わたくしは、もはや、この類の検査で標準的な結論とは無縁になっているわけである。

ところで、この検査機器の設計には、今日の脳科学の研究成果が反映しているに違いない。Ivins の挙げた現象は、脳内のどういう細胞現象に対応しているのか、今日の水準で、この本を読もうと考えるなら、このことは知らなければならぬことであり、Ivins に倣えば、眼科学の最新の教科書を参照することが考えられるが、前出の記事で注意した通り、教科書が簡単に理解できるはずもなく、いずれにせよ、眼科医に知己を得て、いろいろと教えてもらわなければならないことである。

Ivins は、引き続いて二節ほど視覚について論じてから、接触筋肉感覚の検討に入るのだから、今しばらく視覚の話が続けなければならないのだが、ここで、わたくしは唐突に、

岩田誠：臨床医が語る脳とコトバのはなし。日本評論社、2005
ISBN 4-535-98261-9

という書物を思い出してしまった。この本は、確か、日本航空の機内誌連載の養老孟司氏の「旅する脳」に、わたくしの昔の勤務先の大学の言語学系の研究者との共同研究の話があり、そこで、この方に問い合わせ、ご教示い

ただいたものだったと思う。言語に関することが中心で、視覚について丁寧に論じられているわけではないが、絵画化の話題もあるようではある（つまり、この本は積んであるだけなので）。しかし、視覚と接触筋肉感覚対比において、両感覚の差異を、個々の人間におけるものとしてではなく、社会化されて文明や文化の基層をなすものとして把握すべきだというのが Ivins の主張である。このような主張を検討するためには、視覚や接触筋肉感覚の言語化についての知見が不可欠であろう。岩田氏の上掲の書物は、いずれ参照しなければなるまい。

20. (07.05.23) Ivins は、次に残像を論じている。ところで、たまたま Scientific American の Weekly Review が配信され、SCIAM OBSERVATIONS (<http://blog.sciam.com/>) というブログ（項目：Philosophy, Science and the Arts, Mind Matters）に、2007年4月10日付で、

Selective Vision: The Brain's Spin Machine Starts Early

という記事 (Davis Dobbs) があることに気づいた。ここでは、Susana Martinez-Conde 博士による

Anticipating Reward: More Than Meets the Eye

が掲載されていた。ラットによる視神経への刺激と報酬を組み合わせた実験に基づく新知見の報告を紹介したものである。実験の全貌は不明であり、当該記事の信頼性も直ちには判断できないが（というのは、参照すべきサイトに自宅からは入れなかったの）、視覚を論ずるにあたり、今日では緻密な準備が必要であることはわかる。

余り、言い訳にはならないが、(主観的には) ここ一ヶ月大分忙しい日が続いたので、この記事の続きを書くのをすっかり忘れていた。その間、もと同僚の脳の神経系の電磁的構造を専らに研究している男と、昔の勤務先の建物の廊下で遭遇したりで、当節のそういう知見を学べるかと思いつつも、それも後回しになっている。切りがないので、とりあえず公開するが、誰かに見てもらいたいというよりは、一段落させるという意味である。

残像については、Ivins の知見はいずれ紹介しておきたい。

21. (07.05.23) ところで、先日、今となっては、これも一ヶ月近い昔だが、その前日とは打って変わった穏やかな春の日差しに誘われ、街に出たものの丸善の美術書コーナーで小一時間本を眺めてしまった。遠近法やアルベルティの関連で手に取ったのは、次の二冊である。

石鍋真澄：ピエロ・デッラ・フランチェスカ。平凡社（2005）

ISBN:4-582-65205-0

アンリ・フォション：ピエロ・デッラ・フランチェスカ。

白水社（1997）ISBN: 4-560-03867-8 （訳・原章二）

高額な書物で、わたくしの現状では手が出せない。そもそも、今は、丁寧に読んでいる時間がない（と、これは、一ヶ月前の感想である）。

特に、石鍋氏の著書は、相当の厚みがあり、また、付録に、当ブログの4で言及したピエロの「絵画における遠近法」の抄訳と挿図の一部が納められている。石鍋氏はフィレンツェで長い間過ごされたようでもあり、ピエロについて学ぶのにはよい書物であるという印象を受けた。

一方、原氏の訳書は、もともと Focillon 教授の 1934-35 年の講義に基づくとある。教授は亡父の師匠であり、亡父の遺品を捜せば（そして、この作業もそろそろ手をつけなければならないのだが）恐らく聴講していたであろう当該の講義のノートが出てくるかも知れない。

余計なことだが、亡父は、Focillon 教授にアイデアを「盗まれた」というようなことを言っていたことがあり、これも亡父の残したメモ類を精査すれば、該当年代のものに書かれている可能性がある（1930 年代の後半である。亡父が Focillon 教授を恨んでいたというわけでもない。実は、Focillon 先生の死後も、なお、先生のお世話になったこともあったようでもある。いずれにせよ、中世美術だと思われるが、講義中で名前は挙げられなかったものの、アイデアの本源が日本人学生であったという言及はあったそうではある）。アイデアを「盗まれた」のは亡父だけではなかったとも言っていたから、師弟関係というのはそういうものかも知れない。

違う分野の話でも、アイデアの剽窃は、頻繁と話題になっているように思われる。乱暴な言い方をすれば、この辺はお互い様で、多少は着想を盗まれても、なお、本体は揺るがないというような洞察こそ学者の本領というべきであろう。むしろ、自信があればこそ、そこらは大らかに考えた方がいいかも知れない — ただし、「盗まれた」アイデアの先を大幅に展開して見せなければ、「盗んだ」者の「勝ち」になってしまうけれど。Focillon 教授の件も、亡父の話から浮かび上がって来たのは、冷静に考えれば、Focillon 先生の老残ともいうべき姿であった。

ところで、上掲の講義録に戻ると、ピエロに関する知見としては、この講義は、訳書のもとになった全集収録本の編集の際に注記が加えられているにせよ、いかにも古すぎるのではないだろうか。ただ、不思議なことにこの本を見ながら、山口昌哉先生を思い出してしまった。先生には随分お世話になった。先生は、京都の日本画家山口華楊画伯のご子息であり、実際、晩年の先生ご自身がスケッチ帳をいつも手元に置いておられたことが記憶に残っている。

多分、Focillon — 亡父 — 山口先生という連想だったと思うが、山口先生から伺った昭和 30 年代初期の亡父の姿は、辻佐保子さんが「ぴよこぴよこ蛙」と形容されたものに、まさしく符合した。

22. (07.06.02) Ivins は ... 論じている（以前の記事の補足的言い訳）。

相変わらず、言い訳にはならないが、実は、九月中旬に開かれるノボシビリスクでのワークショップに招待されていた。数ヶ月前から、その準備で他の

ことに緊張が続かない。ワークショップの原稿の下書きの一部は、近々、ホームページで公開するつもりだが、当初の目論見通りには進行しては来なかったというのが正直なところである。ちなみに、ワークショップの会場ソボレフ研究所、旧ソヴェート連邦の数学者セルゲイ・リポビッチ・ソボレフの名前を冠したものである。事実、ソボレフは、ここで、人生の後半を過ごした。この機会に墓参りくらいできそうだと考えている。

わたくしの学問的出発点は、吉田耕作先生のもとで、アメリカ数学会が翻訳したソボレフの著書を購入したことであった。ソボレフの後年の著書に、わたくしの論文が挙げられていたのを見たときには、当然ある種の感慨を覚えた。しかし、当該の論文は不満足な段階のものであって、引用されること自体、不審な感が否めなかったので、むしろ、当時のソヴェート連邦の、そして、恐らくは現在のロシアでもそうだと思われるが、人海戦術による数学研究の実態を垣間見たような気もしたのである — まあ、人海戦術とは、恐らく、言い過ぎで、教授を頂点とし、周辺に指導的研究者群が控え、その下に、多数の大学院生やポスト・ドクターらが参集する、ピラミッド構造の研究教育体制を指すとも言うべきか。ソボレフは疑いもなく、フランス人のいうマンダラン（満大人＝清朝の満州人貴族。転じて、大教授）であった。

こういう話が、ここで試みている Ivins の読み直しと関係があるのか、と問われれば、大いにあると答えたい。「なぞなぞ」めいた言い方をすれば、その「こころ」は（われわれの事実認識について）根源的（radical）に考えるということである。

脱線ついでに、やはり「こころ」と関係があることなので、一言。

ホームページとブログは特に連携させるつもりはないのだが、ホームページで、長山靖生氏の「不勉強が身にしみる」（光文社新書）に言及し、その際、感想として、いわゆる「文系人」の「理系」素養の不足はわれわれの不利益に直結するので、激しく指弾されるべきだと述べた。数日前の毎日新聞に、まさに、実例への言及ともいうべき記事があった（元村由希子記者：たばこの危険、牛肉の不安（発信箱 5 月 30 日）：<http://www.mainichi-msn.co.jp/eye/hassinbako/news/20070530ddm002070061000c.html> 政治家はもちろんだが、言論関係者、メディア関係者もナイーヴ（当ブログのプロフィール参照）なのは、われわれ一般人にとって危険なのである。

元村記者に続く方々が現れることを期待したい（元村記者もいわゆる文系ではある。福岡総局におられた頃、九大学内でお見かけしたことがあるが、すでに、よい記事を書いておられた）。

23. (07.06.25) 自転車の前輪がパンクし、いろいろあった結果、結局、チューブを注文した。行動範囲がしばらくの間狭まったが仕方がない。

ところで、Ivins の方は、20 回目の記事から全く進んでいない。言い訳だけは多々重ねているが、意味のあることではない。ともかく残像の話で中断した。まだ言い訳は多々あるのであるが、心理的にも大きいのは、かなり丁

寧な引用を行っていることである。とにかく、やっと本文第二ページの一番下のパラグラフに差し掛かったところである。逐語的な引用は意味はないとして、要約を心掛けよう。このパラグラフで、Ivins は、

「残像」の事例として、明るい赤色模様の凝視後に補色の模様として認識されること、白色格子で区分された黒い四角の凝視後、白色格子が灰色の点滅として認識されることを挙げ、色調 (hue) の認識が模様の色彩面積や照度、隣接面積の色彩に依存する

という意味のことを言う。この辺りも、今日では詳細な知見が得られているはずのところである。わたくし自身、例えば、後半の格子の件では、新井仁之氏による錯視の数理的研究 (ウェーブレットを利用したもの <http://www4.ocn.ne.jp/>) 実際、最新の映像技術では、残像や錯視やらの知見が応用されており、当然、これらに関して、安定な効果の再現性の条件や管理も知られているに違いない。しかし、だからと言って、Ivins はもう古すぎるといふことにはならない。ここは視覚の特徴を述べているのであって、残像とか錯視があって、それらが人間の認識に及ぼす影響が問題である。それらを意図的に利用することは、だまし絵などで昔からあったし、遠近法もその一種には違いないわけである。

事実、Ivins は次のパラグラフで、

距離や運動に基づく視覚的效果、遠くのは小さく明るさも落ち、一方、近くのは見るものの位置によって形が変わる。光の量によって風景も変わる。また、平行線も遠方では交わるように見える

という趣旨のことを言う。もとより、これらがどこまでが空気中の光の散乱の効果であり、また、視覚に基づいた脳内処理であるかは分離して理解しておく必要はあるだろう。

要するに、視覚の対象は、眼を頂点とする (本来は2個の無限円錐が脳内処理で1個のものに補正された) 円錐様のものの内部にあるものであり、それらは、無限遠方を含む境界の近傍では大きさの縮退ないし変形を受け、ぼやけ、また、一般に、光の量や視認する際の条件の影響を受けるという風にまとめることができるであろう。

次に、Ivins はいよいよ筋肉触覚的な感覚の特徴について述べる。

24. (07.06.25) 6月24日付けの毎日新聞書評欄に、養老孟司氏による

佐藤優：地球を斬る (角川学芸出版) 2007

の書評が載っていた。同書がインテリジェンス、事実認識と事実解釈が主題であるらしいことは、書評記事から察しが付き、そういう意味では、本ブログの趣旨や底流とも関わっている。早速、購入しようかと思ったが、そうす

ると一日掛けて読んでしまうことは想像が付く。しかし、この週末には、(22回目で言及した)ノボシビリスクの九月の集会の講演概要だけでも準備しておかなければならない。とまあ、こんな理由で、概要は24日午後からの半日をかけて何とか仕上げた。ただし、原稿全体ができていないのだから、依然見込み、あるいは予定、期待、希望というような性格の代物ではある。

そういうわけで、今朝(25日朝)、丸善に立ち寄ったら、件の書物が店頭においてあった。しかし、傍に、

加藤周一：日本文化における時間と空間(岩波書店)2007

があり、こちらの方が当ブログの問題意識に近いかと思い、つい加藤氏の書物を購入してしまった。佐藤氏の書物は、こういう次第で、今日は購入を見送ったが、あとがきだけは立ち読みした。

後で、思い返してみると、以前、加藤氏の書物はどこかの本屋の店頭で手に取り、どうしようか迷った記憶が蘇った。価格も一応の理由だったと思うけれど、そのときは買わなかったのだった。改めて、同書所収の略歴を見ると、加藤氏は医学部出身のようであるが、いわば、事情あつての消去法での医学部選択であったのかも知れないと、ふと思った。著者は大変な碩学に違いないが、情緒に流され過ぎているという印象を受けたからである。実際、斜めに見た限りでは、本書で一番重要なのは第三部であろう。加藤氏は、ここで、まさに、わたくしが疑問を抱き解明したいと密かに考えているところ、つまり、「今=ここ」についての指摘をしている。しかし、その内容は関連する表面的現象についての論評ばかりで、肝心の根源については、長大な第一部第二部を含めても、全くと言っていいほど踏み込んでいないようである。

もちろん、それは簡単なことではなく、恐らく、この著者にしても、分析や総合に必要な視点や論理を結局のところ十分に構成できなかったということではあろう。いずれにせよ、日本文化の鍵が時空観念であり、それが「今=ここ」に集約されることは、多かれ少なかれ、自分で考える人なら誰でも気づいていることであろう。現に、わたくしさえもその程度のことはわかっている。「今=ここ」時空は、現実的なこととして、損得は大問題になるかも知れないからそれなりの対策が喫緊の課題だろうが、善し悪しを論じること自体には意味はあるまい。つまり、経済や行政の問題としては重要かつ深刻かもしれないが、倫理の問題としては二次的であろう。そもそも「今=ここ」ということはどう抽象化されるのか、対立する時空概念にはどんなものがあるのか、そのような時空認識が成り立つ根源的な構造は何なのか。さらに、観察下の現象について「今=ここ」時空認識が純粋な形で解釈できる場合は稀であろうが、そのような場合、どう考えるのが理に適っているのか。これらの問題が整理されてある程度は解決されていなければ、論理的な説得力のある議論の展開はできない相談になってしまうわけである。

比較するのも変な話だが、佐藤氏の書物もわたくしの根本的な疑問に触れているわけではない。しかし、佐藤氏の書物は、あとがきを見ただけだが、

視座の移動という極めて重要な鍵語を提起している。しかも、その記事と自分の経験とを突き合わせ、その上で、何がしかの判断ができるし、少なくとも議論はできそうである。一方、加藤氏の書物は、著者の学識・経験の前にひたすら平伏することを求められているようで、そうせずに、読者が生き活きとした立居振舞いで応ずることは想定外なのではないだろうか。本書が刷を重ねよく売れているらしいのは、加藤氏のファンが多いということだろうし、出版社や本屋にとってはありがたい著者に違いない。しかし、わたくしはたとえば、折角買った本なのに読みきれぬだろう。精読すれば考えが改まるということはあるかも知れないが、何よりも書名に強く印象付けられてしまった自分の予断の甘さに自己嫌悪さえ覚える。

25. (07.07.12) 視覚はもちろんのこと筋肉感覚についても今日の知見は、Ivins が利用できたものよりも遥かに詳しく精密になっている。しかし、個々の感覚と脳内部位の活動との対応関係が詳しく追跡できるようになったことが、これらの感覚が惹き起こす空間意識に関する理解を直ちに進めたと言えるだろうか。それは、また、別なことなのではないだろうか。つまり、ハードの構造は大分わかってきたが、だからと言って、ソフトが理解できるようになったとは言えないのではないか。まして、個体の水準での知見や理解が空間認識としてある集団に共有されるための条件も別な話ではないか。前置きが長くなったが、Ivins の筋肉感覚について観察は、まだ、検討しておく価値があるというわけである。

Ivins は、第1章の前三分の一程度を視覚に関する議論に充てた後、第23回所収の視覚についての摘要を踏まえてのことであるが、論点を筋肉感覚に関するものに移して、まず、つぎのように言う (p.3)。

さて、手で探るときに感じられる接触筋肉感覚を検討すると、種々の視覚的な効果すべて、つまり、遠近のぼやけやくっきり、景色の跳び、ぶれ、あるいは切れ目のない移動といった一切のこととの対比ではどんなことがわかるのだろうか。疑いもなく、接触感覚は、それ自体恐ろしく複雑ではあるが、視覚に比べると、確定的、単純、かつ、大きさについても限定的である。

筆者の語彙の力では、この部分を的確な日本語に直せなかったが、特に、この最後の文章にある一連の句は、原文では、definite, simple and restricted in gamut である。要するに、触るということによって得られる情報は、対象の位置による変形や濃淡、ぼやけはなく、非常に安定しているが、他方、接触表面の詳細に関しては、手や指に対応して平均化され、一定の範囲の構造しか把握できないと言い、まさに、この点に、視覚と接触感覚の本質的な差があると言うのである。

Ivins は、さらに、この内容をいろいろな事例を検討して敷衍する。

ところで、かつての勤務先の大学のスポーツ科学センターか何かの報告書で、今となっては何年か前だが、筋肉感覚は視覚に比べると実時間で脳内活

動の測定を精密に行うことに困難があって活動部位の特定がなかなかできないという記事を読んだ記憶がある。そのときは核磁気共鳴装置の関係で、運動中の測定実験が難しいからということかと思ったが、今は一般的にどのようなだろう。仮に、ヘッドギア状の測定器を装着しても運動状態での安定的な測定には限界があるだろうし、ノイズの除去や測定ソフトの開発は簡単なことではないだろう。いずれにせよ、Ivins の観察にも必ずしも古過ぎとは言えない面もあろうというわけである。さらに、Ivins の古典ギリシア文化についての解釈は、これらの観察に基づいてのことでもあり、その当否の検討のためにも Ivins の見方を確かめておく必要がある。第 1 章の内容紹介を以下の記事で続けて行きたい。

なお、指先の動きなどをデジタル信号に変えて遠方で再現することは、内視鏡手術や高温高圧下などの極限状況でのさまざまな工作などで行われているようではある。しかし、この場合は、脳を経由した生体の処理情報がデジタル化されているわけではなく、むしろ、医師や技師などの操作員が、指先運動の計算機シミュレーションに基づいた作業用器具を、操作訓練を重ねた結果として、ほぼ指先が現場にあるかのように使いこなすことが可能になっているということのようである。

また、デジタルに制御される義肢というのもあるらしい。脳にまで運動の意志を直接的にフィードバックしているわけではなくて、義肢と肉体の接続部分での筋肉の動きを利用し、失われている部分への神経伝達による情報を直接間接に捕捉して義肢の運動を引き起こすということであろう。つまり、このような義肢の制御はデジタルであっても義肢の運動は人体からのアナログ的な情報に基づいて可能になっているということだろう。義肢の着用者は相応の訓練は必要であろうが、要するに、目的が的確に限定されている限り、脳内の信号処理の詳細を知らなくても人体の運動を再現することができるというわけであろう。

しかし、このように、ある意味で接触筋肉感覚に属する人体運動の部分を、本来の脳内処理を暗箱化しての、いわば工学的なシミュレーションで再現できるということは、ある社会の共通の空間認識を考察する上では、議論をあらゆる方向に持ち運んでしまう可能性もあることには留意しなければならないだろう³。さらに、妙な連想だが、鯛の大群が微妙に変形しながら全体として統一性を保ちながら回遊するのを思い出すと、個体だけの知見では見当違いな議論になりかねないのではないかと考えてしまう。

26. (07.07.25) 丸善の店頭で、

Richard Dawkins : 神は妄想である (早川書房)

<http://www.hayakawa-online.co.jp/product/books/112163.html>

³実は、BMI は、むしろ、脳の活動のメッセージ信号によって義肢などを制御しようということのようである。

に気づき、手に取ってみた。大部の書物であり、恐らく英文版が文庫版であるだろうと思い、探したらあった。

Richard Dawkins: The God delusion (Black Swan 2007)

<http://richarddawkins.net/godDelusion>

もちろん邦訳の方が読みやすいが、訳本では原著の重要な部分が編集で落とされてしまうのが常であり、また、携帯の便を考えて、こちらの方を購入した。ただし、邦訳の訳者あとがきは非常によく書かれていて、改めて、アメリカの知的環境が困難にさらされていることに思いが及ぶ。最近のアメリカが、有力とされる大統領候補に信仰告白を強要することを怪しまないなど、宗教的には中世ともいべき雰囲気ますます強まっていることも思い出した。

なお、邦訳には索引がない。英文文庫版でも15ページに及ぶ索引が付いている。邦訳は極めて大部である。索引を欠くのは決定的な瑕疵であり、実際、英文版を探したのはこのためでもあった。ところで、訳者あとがきでは邦訳で割愛した部分として、いわば宗教的駆け込みセンターとでもいべきもののリストを挙げている。Dawkinsが読者への主張、説得、さらに援助を籠めて同書を著したであろうことを考えると、本来は原著のリストに国内の該当組織（や、さらに、韓国や中国のもの）も加えた形のもを付すべきではなかったか。リストを割愛したことは、それが単に読者に興味なかろうとか日本では関心が少ないだろうという理由だけでは、軽薄・軽率と判断されても仕方あるまい。また、翻訳する以上は日本では関心が少なからうという姿勢は執れないはずである。実際、このところこそ掘り下げて論ずることが原著者への礼儀でもあり、また、面白からうと思う。

いずれにせよ、しばらく旅行の折に携帯するということになりそうである。実は、丸善では、もう一冊

岡田英弘：日本人のための歴史学 (WAC BUNKO 2007)

<http://www.web-wac.co.jp/publish/bunko.html>

を見つけ、購入してきた。著者については、以前著書を読んだことがあって、いわゆる感覚的な常識に流されず、極めて論理的に議論を運ぶ人だという印象を持っていた。論理性の高さは党派性の強い読者から反発を買いかねないところでもあるが、本書は、しかし、過去の書物の改版であるらしく、記事の初出の時期は必ずしも最近ではない。第1章、第2章および第5章の内容は基本的に時間経過に対し安定していると思われる。第3章、第4章は難しい。第4章の記事は初出の時期が古く現在と対応しているようでもない。中国を見る時間単位は数百年であるとすれば、10年程度の記事の古さは問題になるまいが、こういう歴史的時間単位はどう推定・算出するのだろうか。

「新版へのあとがき」は多分新しいところだろうが、著者はお生まれが昭和6年で、なお、旧制高等学校・旧制東京大学とあるから、早生まれでないなら、七年生の高等学校だったか中学4修で高等学校に進まれたのか、戦後

の混乱期にそんなことができたのか、余分なことをいろいろと考えてしまった。その後の学問的経歴は大変立派である。そして、最後のことば：

私はこれからも、分野別の歴史の壁を無視して、人を驚かせ続けるだろう

は素晴らしい。前後したが、「はじめに」と「結びに代えて」は重複するところがある。本書の概要とは言えないが、基調をなす慨嘆なのだろうか。

なお、わたくしは岡田氏の仰るように、日本史を中心に据えて世界史の教科書を編み、かつ教えるようにすることに賛成である。恐らく、14,5世紀までは、国内史が主、朝鮮史（岡田氏に従えば、韓国史）が副、そして、中国を含む東部アジア史が第二副（例えば、唐をカラ（＝韓）と読むことから推察されるように、日本への中国の影響は韓半島を主に経由しているのだから）。このころから、元や関連しての中央アジアや西南アジア。15世紀後半から大航海時代の波及による西欧史の取り込み。以後、江戸期は再び世界の縮小。ただし、江戸末期以降明治の説明として、西欧史への言及は不可欠。これ以降、日本史を世界史の文脈で整理しなおせるか。要するに、こうしない限り、日本人が国際的に通用する視点を持ち得ないからであり、実際、こういう形で「世界史」を自分なりに再構成して世を渡っている人も多いのではないだろうか。

27. (07.07.28) ドーキンスの邦訳に関連して、索引が欠けているのは決定的な瑕疵だと前回の記事で述べた。本来、Ivins の著作を論じているのに脱線続きであるが、索引云々について説明を加えておこう。まず、何を隠そう：

今野 浩：カーマーカー特許とソフトウェア：数学は特許になるか
(中公新書、1995)

に、「工学部の教え」というコラム記事があった。概ね10項目の「教え」が挙げられているが、著者は、駒場から本郷・工学部への進学式の折の工学部長の訓示の即物性に文化的衝撃ともいえるべき強い印象を受けたと言うのである。「教え」の中に「索引のない本は読むな」というのがあった。他にも、「納期を守れ」とか「結果的にうまく行ったものが正しい」などという、何というべきか（Comment dirais-je? Ah, ...）「大人の知恵」満載のまことに有難い「教え」であった。しかし、これらを文言として明示化してあったということは、これまた何というべきか、流石であると思う。なお、当時、わたくしは（今野氏の経験したのとは違う大学の）工学部の共通講座担当をしていたが、この「教え」に触発されて、学生がレポートの提出に遅刻したときに、君、納期を守らなければ、と言うと、何の言い訳もせずに引き下がったことを覚えている。今野氏の進学先は、工学部の伝統的な（主流）学科ではなかったはずではあるが、当時の高度成長期の日本では（作りさえすればよかったかも知れず）、工学部と言えども、その本来の環境条件の恐ろしさ（つまり、

事実を直視して — 事態に振り回されて — 妥協することが（許され）ない、ということだが）を感知する機会はなかったのかも知れない。例によって余分なことに嵌ってしまった。

さて、Dawkins の著書であるが、邦訳が索引を欠いていることを論じたのは、上掲の「工学部の教え」だけが理由ではない。実際に、索引を見れば、著者の考えがよくわかるのである。例えば、索引には、Zen も Buddhism もない。Hinduism はある。Hiroshima というのもある。Nagasaki はないが、von Neumann はある。ただし、Alan Turing は von Neumann と共に「計算機の父」とよばれて然るべきなのに同性愛者として排除されたという件で出てきている。実際のところ、Dawkins の主張自体は当人のものとしても決して目新しいものではない。要所を検討すれば通読しなくても大体わかると考える人は多いであろう。そういう際にも索引は有効なのである。なお、わたくし自身は索引を Dawkins の meme についての論述（の最近の進展）を知るのに利用した。

なぜ、索引がなくても書物が成り立つと考えるのか、あるいは、なぜ、索引が邪魔だと思ふのか、というのは、実は、われわれの「空間認識」と深く関わることなのである。

もっとも Ivins の本にも索引がない。薄っぺらな本だからかも知れないが、しかし、話題は時間的にも長大で事項も多様である。索引がないために随分苦労した記憶がある。読み捨てるものには索引は要らないが、知的な検討を加えたいという書物には（よほど短いものでない限り）索引がないのは困りものである（真面目な読者は自分で作るであろうが、それは読者の解釈でもある）。

28. (07.07.31) 「シンガポールで知った華僑の複雑さ」という節が、岡田氏の書物「日本人のための歴史学」(26 回の記事参照)にある。ここで出てくるラッフルズ・ホテルというのは、わたくしは泊まったことはないが、トランジットでシンガポールに半日いたときに付設の喫茶室で紅茶を飲んだように記憶している。このときはシンガポール航空（南回り！）でフランスに行ったのだが、湾岸戦争 index わんがんせんそう@湾岸戦争中で結構複雑な経路を経て、パリに着いた。もう細かいことは忘れたが、チャンギ空港に自動小銃を抱えた兵士がいたことは印象に残っている。余分な話だが、フランスの滞在先の都市で、湾岸戦争期間中は、盛り場も警官（実は、CRS）の巡回が頻繁で何の心配もなしに夜の散歩ができたのに、戦争が終わった途端急に警官の巡回がなくなり物騒になったことを覚えている。しかし、まだ、あの頃は、危険の察知や危険察知後の回避行動の決定が十分に早くできたので、これといった被害はなかったが。

脱線のようなのであるが、もう少し続けたい。

次にシンガポールに行ったのは前世紀の末のある年の 12 月であった。確か、このときだが、リー・クアン・ユー（李光耀 — うろ覚えだが）氏の自叙

伝が出版され、本屋に並んでいた。中文版と英文版の二種があり、いずれも覗いてみたが、内容に若干の違いがあることが中身の写真から推察され、正直のところ、好奇心が刺激を受け、購入するのなら両方と思った。要するに、「昭南市」当時の帝国陸軍の残虐行為関連の写真が違ったのである。「華人社会」というシンガポールも政治的には「華人」の主張だけでは成り立たないところがあるのかとの思いが一瞬脳裏を掠めたというわけである。しかし、身の安全を考え、結局、手を出さなかった。亡父から聞いた、敗戦後数年経ってからのパリで、来仏したばかりの某日本人哲学者がキオスクでニューヨークタイムズとプラウダの両方を買ったために尾行が付いたという話を思い出したのである。亡父からは、この時期のこととして、戦前の大日本帝国のころの扱いと落差の話もあって戦争に負けるということはこういうことなのか思い知らされた、ということも聞いた。前世紀末のシンガポールが日本人がびくびくしなければいけない場所であったかどうかはともかくとして、公園の芝生を斜めに突っ切っても警官が飛んでくるところではあったのだから、やはり旅行者は余分なことを避けておいた方がいいに決まっている。リー氏の英文版の自叙伝は後日（日本橋の）丸善で見かけたが、中文版の方は気づかなかった。ところで、数年前、これはケープタウン大学からの帰路のトランジットだったが、南洋大学の知人と会った際には、大学内の華僑会館というべきものを見せてもらった。中華人民共和国の台頭がシンガポールでの華人意識を高めているような気がする。

岡田氏の上掲の書物の冒頭は「考古学は歴史ではない」という文章である。何か、本論とのつながりが悪いような気もしたが、「考古学」が物的証拠を解釈で関連付けながら論述を構成するのに対し、「歴史」は、できるかぎり「当時の記述＝一次文献資料」をもとに（今日的解釈を）改めて論述するものと解すると、亡父が、かつて秦以前の「中国史」は信頼できる一次文献資料が全くない以上信用することができない、「焚書坑儒」を馬鹿にしてはいけない、中国の歴史は意外と新しいかも知れない、と言っていたことを思い出す。考古学的遺物と、史料的に跡付けられる「現代に至る中国」とが関連付けられるかどうかは全く自明ではないのである（亡父はフランス中世を対象とする「[西欧語風には]考古学者」であった。文献も重視はしていたろうが、対象物をより重視していたように聞いたと思う）。もとより中国の歴史に関して正準とされる意見ではないと思っていたが、岡田氏の書物を読むと、亡父の意見は案外正鵠を射ていたのかも知れないという感想も覚える。まあ、この類の話題は、文明の単一起源か複数起源かといった夕食後の酔いに任せての雑談の一端でもあったのだが、亡父はメソポタミア単一起源説であった。しかし、かつての文明の当事者と現代の国家国民との間に直接的な系譜関係があるかどうかは不明であっても、この類の話題にはどうしてもナショナリズムが絡んでくる。しかし、中華帝国の基礎を作り上げた秦が西域起源であることは確かなことなのだから、いわゆる中華文明が結局はメソポタミアの系

譜に属するというのは、中華主義には反するけれど、本来の自然な発想ではないだろうか。

実際、古代中国やメソポタミアなどの「道路、都市、帝国」という三つ組の統治体系が、決して自明ではないことは、これらが古代日本では発達しなかったことから推察できる。そうだとすると、「同時多発的」に各所で発生したと考えるより、どこかで最初に発明されて伝播したと考える方が自然ではないかと、わたくしも思う。ここで特に重要なのが道路である。道路は都市間を結ぶとともに、一都市の設計は道路をまず基本として行われる。都市は城壁で囲まれていたが、都市内では道路に沿って家屋の壁面が連なり、道路に囲まれた区域ができる。この区域では家屋の道路と反対側部分には私的内庭という空間がある。また、城外からの複数の道路が会するところが広場として公共性を帯びる。そして、都市間をつなぐのは道路であり、道路によって結ばれた都市群として「帝国」が成り立つという次第である。

都市内で道路が区域に優先するという関係は、現に、今日の西欧の都市も中国の都市もそうである。京都は京町家はそのような都市と道路の関係を反映していると見られるが、その他の日本の都市は一般に道路ではなく区域が中心である（札幌も例外ではなく、設計した島判官が京都に倣ったとはいうものの、例えば、北十条西八丁目はブロックであって、北十条西八丁という道路が中心にあるわけではない）。それはどうしてなのか。このような「発明」が日本を除いて旧大陸ほぼ全体に伝播定着したのはなぜなのか。彼の地では騎馬や馬車が主要な交通手段であったのに、日本では、基本的に徒歩であったからなのか。あるいは、日本では、「都市」は実は「都市」ではなく構造的には「田畑」であり、「道路」は実は「畦」だからなのか。

こういった疑問は、実は、随分前から持っていて、多分、40年近い昔、パリでの文化衝撃の一部なのだろう。当時のフランスのテレビのニュース放送ではキャスターが喋りまくるだけで現場や資料の映像がほとんど使われておらず、一方、当時の日本のニュース放送では映像にアナウンサーの説明がかぶるものが標準的だったので、その対比が印象的であったのである。自分なりの解釈では、表音文字体系（一次元系・聴覚）の文化と表意文字体系（二次元系・視覚）の文化の違いと考えたが、実際はどうなのだろう。一方、最近、日本にせよ、西欧にせよ、テレビのニュース放送は外観の上では大きな違いは少なくなっているようにも思われる。都市と道路の関係も、背後にはこういう認識系の相違があるのではないかと漠然とはあるが、ずっと思って来た。「古代都市」が発明品であるとする、受け入れて定着したところ、日本のように、7世紀ころに確かに伝播したのにとうとう定着しなかったところには、どういう差異があるのか。

十年以上前に Ivins の著書を読み、それから何回か見ているが、この本から、空間認識が長年の疑問解消の鍵ではないか、という示唆を受けた。少なくとも、視覚、触覚という鍵語をもとに、日本人の空間認識を整理したら、

疑問解決に繋がるような知見が得られるのではないか、まあ、そんなつもりで Ivins を改めて読んではいらぬのだが、まだ、第 1 章の半ばまでくらいしか紹介できていない。

29. (07.08.03) 蒸し暑い中を自転車で走り、結局、天神に出て、丸善に立ち寄り、店内を一巡りして、

猪瀬直樹：空気と戦争（文春新書）

ISBN 978-4-16-660583-5

http://www.bunshun.co.jp/book_db/6/60/58/9784166605835.shtml

を見つけ、多分、汗まみれ故の遠慮があったのだろう、早々に購入してしまった。もちろん、店頭で、要所は確かめたつもりではあるが、帰宅して、「はじめに」を見ながら。「戦前の日本＝今日の北朝鮮」云々とある件で、著者略歴を確かめてしまった。実は、別に、この点に引っ掛かったわけではない。気になったのは、こういう史観が定着したのは高度成長の 1960 年代からだろうという件である。猪瀬氏に異議を申し立てているわけではない。ただ、猪瀬氏は、60 年代、反安保闘争、高度成長、東京オリンピックといった鍵語に引きずられ過ぎているのではないかと、思ったのである。大局的には、猪瀬氏のご指摘通り、戦前・戦後は連続しているものであり、実際に、戦前の「山の手の生活水準」がようやく実感として回復したのが 1960 年代、池田内閣のときではなかったか、とわたくしは想像している。現に、昭和 15 年に開催予定であったオリンピックが昭和 39 年に開かれたのも、つまり、日本政府周辺の関係者が拘っていたからだろうという意味で、こういう観点からは象徴的である。また、戦前戦後を通じての連続性を示す例としては甲子園中心の高校野球の運営の精神も忘れるわけには行かない。

なお、本書「はじめに」の冒頭では、新聞記事の資料的価値の低さへの注意が喚起されている。洋の東西を問わないことも知れない。それでも、40 年近い昔のことであるが、わたくしのフランス文化衝撃には、彼の地の新聞記事に過去記事、それも何年も前のもの、への参照が付されていることもあった。少なくとも「一日経てば新聞紙」というような精神で記事が編集されているわけではないことはわかった。特に、このような記事は条件法や仮設法を多用したものも多く、決して読みやすいとは言えない上に、過去の、しかも、何年も前の記事が引用されていても当時は、まず、図書館に行かない限りどうにもならず、紙面のアクセサリーみたいな印象もあった。今日なら、わざわざ図書館に行かなくても、ネットで過去記事が見られるのだから、これは親切である。しかも、記者が参照として挙げていることは読者が検索するのは違った意味合いがある。いずれにせよ、この経験も、彼我の事実認識、時空認識の差に思いを馳せさせるものではあった。

次の第一章の内容が大変面白い。少し前に、月刊誌「文芸春秋」に帝国海軍の状況を論じた対談特集があったが、猪瀬氏が高橋健夫氏から聞きだした話

の方がはるかに面白い。面白い点はいろいろあるが、なかでも、東条英機陸相が「泥棒せいと言うことか」と反応したということは、陸相という行政官の立場上当然であったろう。他方、文春の上掲の特集に関して、どうして造船技術者（ご存命なら当時の海軍技術将校を含め）の見解を聞こうしないのか、疑問に思っていた。軍縮条約の障害になったという帝国海軍の艦船や装備自体が当時の世界的水準に比してどの程度のものであったかの評価がないのである。装甲にせよ推進機関にせよ、そして恐らく火力・主砲にせよ、喧伝されていたほどには、質的に大したものではないということを当事者は知悉していた可能性があり、したがって、本当に、ただ、トン数とか隻数といった外形的なものの比率だけで海軍が動いていたのかどうかを知りたいところであった。当時の日本の技術水準は、兵器製造に関しても問題山積であったことは、関係した技師の備忘録を眺めれば、直ちにわかることである。もちろん、わたくしも中学時代に、落ちた三機のグラマンからは二機再生できたそうだが、落ちた零戦は何機集めても一機も再生できなかったという話を、元航空兵の教員から聞かされた。ガソリンタンク内壁にゴム膜があるのかもそうだが、戦闘員たちはシステムの限界として結構冷めていたのであろう。しかし、これらが当時の日本の技術水準での精一杯の努力による到達点であったことは、ずっと後に、某自動車産業の元役員の手記で拝見するまで気づかなかった。ここは微妙なところなのだが、わたくしは昭和初期の帝国大学の水準というものは高く評価している。世界相対的には、今日よりも高いかも知れない。実際、湯川・朝永の両先生も、この時期の京都帝国大学のご卒業であり、しかも、京都帝国大学は（国内）一般的には東京帝国大学に次ぐとされていたのである。実際の仕組は、例えば、両先生とも第三高等学校というように、むしろ高等学校の方であったのかも知れないので、帝大間の評価はともかくとして、この頃が学問という仮想的な世界では、日本が世界の第一線にようやく到達したと言える時期であったろう（高橋氏は昭和13年卒、大分遅い。先ごろ亡くなられた宮沢喜一氏はもっと後のはずである。しかし、この頃の卒業生までは、中学校でも高等学校でもしっかりとエリート教育を受けていたはずである）。しかし、個別には少なくとも一部は高水準であっても、全体的にシステムとして活かすとなるとどうなのか、その点には強い疑念がある。しかも、このシステムとしての不全性の問題となると、今日も全く変わってはいまい — それこそ、日本文明の謎である。

同書第二章も興味深い。この内容自体はよく知られているようである。「模擬内閣」の審議の経緯が紹介されている。ただの「模擬内閣」ではなく、「模擬統帥部」との交渉を伴っていたことが興味深い。案外、当時の「模擬統帥部」の人たちの手記こそ検討に値するのではないだろうか（第1章で言及されている「原田菅雄少佐」のこともある。いずれにせよ、システムとしての機能不全は別であるが）。

第三章、第四章は実は独立した話題ではない。その通りと言いたいが、現

在に繋がる話でもあり、また、隠棲の身としては、当事者諸侯に頑張ってくださいとしか言えない。しかし、よくわかっていればいいわけでもない。問われるのが行動であるところが難しい。

相変わらず、脱線続きではある。

30. (07.08.18) 鎌倉行きの機会に、先日購入した Dawkins のペーパーバック (26 回の記事参照) を携行し、機内で読み始めた。

文庫版は先行した単行本に補正を加えてあるようで、Preface to the paperback edition に事情が説明してあった。ちなみに、以前 (27 回の記事参照) 索引に Zen も Buddhism もないと言ったが、文中にこれらへの言及がないわけではないことは (この記事を書き始めたときには目を通してあった 60 ページまででも) わかった。しかし、仏教は (儒教も籠めて) Dawkins は考察の対象から外しており、その理由を

Indeed, there is something to be said for treating [other religions such as Buddhism or Confucianism] not as religions at all but as ethical systems or philosophies of life (p.59)

と述べている。儒教はともかくとして、仏教、少なくとも、いわゆる鎌倉仏教の分派の一部に関しては、Dawkins の論理構成とは異ならざるを得ないが (そして、恐らく、遥かに複雑精緻な議論を要するだろうが、結果としては)、Dawkins が現象として導いている宗教の持つ本質的な問題点は認められるように思われる。

ところで、ペーパーバック版には販売用の惹句が帯に印刷されていた。その日本語を眺め、全く意味を成していないことにあらためて気づいた。わが国の出版関係者にさえも知力の低下が現れていることを示す一例なのだろうか。惹句は、冒頭に「タブー視されかねない神の存在」とある文章から始まるが、まず「」内の語は文言として成り立たない。当該の文章は当然文字通りの支離滅裂である。しかも、惹句の次の文章では、「科学的見解をもとに神なき世界を論破する」とある。ここでも用語・用法は基本的に不正確である。「神なき世界」とは何か。「無神論 (の世界観)」のことなら、はっきりとそう書くべきことではあったが、一方、それを「論破する」のだから、本書の主張とは正反対のことになる。「神なき世界」は、実は、「一神教の世界観」とすべきであったのだろう。販売側は、惹句にはいわば「気分」を推察させる程度の効果があればよいと考えたのかも知れない。それが単なる軽率さゆえであって、決して想定される読者への一種の侮りの感覚 — 作者みずからを含むおよそ人間というものに対する不誠実さ — が背後にあるわけではないというのなら幸いである。

さて、Dawkins が問題視するのは「創造主としての神」であり、それに基づく世界観である。しかし、「創造主としての神」にすでに多義性があるので、著者は周到に議論の対象となる「神」の概念を規定している。著者が展開し

ようとする論述がデリケートな反応を予想させるだけに、著者の意図が誤解・曲解されることのないように極力感情を排した冷静な議論の遂行を担保しておくための当然の準備である。しかし、「創造主としての神」ではまだ抽象的過ぎる。実際、わたくしはカトリックのミッション系の中学・高校で学んだから、「神の存在証明」についての議論を「宗教」（わたくしたちの時代には「社会倫理」と言ったが）の時間に結構討わした記憶があり、この類の話題には無知ではないし、また、現在は少年の頃には思いつきもしなかった意見も持っている。英文で読んで、「神」の種別に応じた用語 theism, deism, atheism さらに agnosticism という区別があることを知ったが、少し解説が要るかも知れない（関連して、Dawkins, p.73 に、「神」への態度に基づく「スペクトル分布」の示唆がある）。

このうち、deism は「理性神」主義と訳されることもあるかと思うが、物理的時空（宇宙）や物理法則の原因として想定される「実体」である。宇宙の（支配）法則はアイデアであるが、それが「理性神」というわけではなく、この法則の想定上の「著者」（という実体）が「理性神」なのである。しかし、「理性神」の役割は宇宙史的にはここまでであって、以後は「理性神」が死んでいたとしても構わないし、少なくとも何人であれその人生にはもはや関わらないのである。deism は 18 世紀の啓蒙主義時代の思想であるらしく、Dawkins はアメリカ合衆国建国の父たちが世俗主義者であり、心情的には（無神論ではなかったにしても）deism に近かったであろうことを、かれらの残した記述などから跡付けている。実際、アメリカの独立戦争とフランス大革命は理念的に無関係ではなく、他方、大革命が啓蒙主義の影響下の指導理念で遂行され、反カトリックであり、現に、カトリック施設の徹底的な破壊を伴っていたことも事実である（後年相当数が再建されたが）。しかし、宇宙法則に「著者」が想定されるべき理由はないし、「著者」を想定しなければならないというのは関係者の思考習慣に基づくことであろう。theism は、これに対し、万物の創造主であり、人間はもちろん万物を常に支配・管理している「神」を想定するものである。上述の中学・高校時代の記憶であるが、このような「神」に対して要請されるべき属性が極大であるような「神」（の候補）は、(Dawkins が批判するように同義反復的な論証を経て) 多くとも一個しかあり得ない（あるいは、ないかも知れない）という議論をまず行ない、ついで、各属性については極大原理の成立条件を検討して少なくとも一個はあるはずという主張をし、かくて（というのは、この辺は論理を超越してしまうのだが）、全智全能普遍遍在の「神」の存在を主張するということであつたと思う。子供心にもいかがわしいもので、「神の存在」など理詰めを考える振りなどせずに単に「神を信じているから」と言えば、その限りでは、文句の言いようもあるまいとは思ったものである。もちろん、その際は、宇宙の創造云々が実はどうでもよいことになるはずであるが、そうすると個々の宗派の拠っている經典の正統性に問題が生ずることも否定できないので、この辺に

知的操作は欠かせないとされた理由があったのであろう。こういう「神」を (Dawkins の用語ではないが)「信仰神」ということにすると、「神」について否定的でない場合でも、「信仰神」の領域と「理性神」の領域は区分しておけば、「信仰神」の領域は個人のものであるとして充足するのではないか、という考え方も成り立つであろう。このような姿勢は agnosticism (不可知主義) というものである。Dawkins は、しかし、この立場について、さまざまな根拠を挙げて合理性を否定している。Dawkins の鍵語は evidence (検証された事実・証拠) であり、そのような事実の蓄積としての「進化論」であり、「無神論」(つまり、「神」概念の不要性) である。宇宙法則の探求や理解に想定上の「著者」としての「理性神」には必然性がないし、また、「信仰神」は、倫理とは直接関わっているわけではなく、「民族浄化」などを例に挙げて、むしろ、倫理的に有害なことのほうが多いと言う。このような立場を Dawkins は atheism と言っている。要は、evidence のみに基づいた合理的な立場をとるのか、evidence を「超越」した感情的な立場をとるのが問題であり、Dawkins は前者の選択とその意義を説こうというわけなのであろう。

実は、Dawkins の本はまだ4分の1程度しか目を通していない。しばらく旅行が続くので、今月の末には読み終えてはいるだろうが、わたくしが抱いた疑問のいくつかについては Dawkins の議論を承知するところには至っていない。もともとのブログの趣旨からは脱線気味でもあるが、関連する多くのヒントもあり、これらを含めて、続きはいずれ(=必ずしも次回というのではなく)論じたい。

31. (07.09.03) 講演原稿の作成で忙しい時期に、わざわざ書くこともないのだが、Dawkins の God Delusion や類書の関連で、Scientific American の News Letter (8月19日付け)に、Skeptic 誌の編集者 Michael Shermer の公開状 http://sciam.com/article.cfm?chanID=sa006&colID=13&articleID=423C1809-E7F2-99DF-384721C9252B924A&sc=WR_20070821 が掲載されていた。

Dawkins 以外にも、Sam Harris, Daniell Denett, Christopher Hitchens が公開状の宛先である。Dawkins の著書以外は眺めてもいないので判断が付かないが、文脈から察せられることは、最近のアメリカの過度とも言える宗教的雰囲気への批判書であろう。Dawkins の著書も主要な標的がアメリカの一般市民読者であろう。

著者等がこの公開状にどう答えるかは待つしかないが、傍観者として見ても、結構考えさせる点がある。公開状は、Skeptic 誌は Dawkins らとも近い立場かと思われるのに、相当に紋切り型で、しかも、趣旨としての外的を外しているようにわたくしには思われたが、Skeptic 誌の詳細も、また、Dawkins 以外の著者も全く知らないのだから、こういう感想は公平とも言えない。

Shermer は次の5点を挙げている：

- 1) Anti-something movements by themselves will fail.
- 2) Positive assertions are necessary.

- 3) Rational is as rational does.
- 4) The golden rule is symmetrical.
- 5) Promote freedom of belief and disbelief.

公開状本体でこれら5項目は敷衍されている。公開状とは言うが、本当の対象は、アメリカの知的に穏健な大衆なのだろうか。上記の1) 2) 3) は見出しだけでもわかり易い。しかし、Dawkins が強調する evidence (のみ) に基づく立場への言及はない。Dawkins の主張の中では「意識の覚醒」が採り上げられているが、Dawkins のもともとの意図とは少し違う形のように、正直のところ、わたくしも、この点で「意識の覚醒」を経験した(こういう見方もあるのか、という程度ではあるが)。4) 5) は、ほぼ同じことを意味するのだが、4) では、Martin Luther King, Jr. の "I have a dream" からの引用がある。

四半世紀前にアメリカにいたとき、毎週日曜の朝のテレビで牧師らしい人が派手なパフォーマンスをしているのを見て、わたくしの素朴な宗教観と馴染まないものを覚えた。こういうパフォーマンスはアメリカの神学系大学では今や普通になってしまったのではあるまいか。日本でも、先日経験した、さるキリスト教会での中堅の牧師の司式はかなり派手なものであった。ただ、別な機会に経験した老齢の牧師の司式は淡々としたものだったから、牧師次第なのだろう。カトリックの場合は、式服自体が豪華な雰囲気醸成を醸しだし、また、挙止動作も儀式化されていて、仏教(宗派にもよるが)の儀式と共通するものが感じられる。恐らくは、遠い古代の何らかの共通の儀式習慣まで遡れるのだろう。余計なことだが、さる法事の際に、禅僧の拝礼の形を見て、亡父がイスラムのものと同じだ、と言っていたことを思い出す。禅がイスラムの影響下で成立したということではないが、より古いところに何らかの共通の宗教習慣があったのではないかということにはなる。

脱線した。アメリカの場合、西部劇で見るとような、小集落の人たちが集まって素朴な礼拝をするのが基本だと思っていたけれど、テレヴァンジリズムは、ますます盛んになっていると聞く。さらに、教育における進化論の排除や実質的な創造神話(Intelligent Design)の導入などの動きに歯止めが掛からず、このことが、アメリカの未来や、したがって、アメリカの重要性に鑑みれば、世界の将来に不安を投げかけているというのが、少なくともアメリカ以外の知的な人たちの懸念であり、Dawkins の著作は、その流れに棹差しているものとわたくしは思っている。そういう意味で、この公開状の評価は難しい。

32. (07.09.12) 今は、ノボシビルスクにいる。便の関係で、まず、ウラジオストック Владивосток (ヴラディヴァーストク) 空港脇のホテルに一泊し、翌日ノボシビルスク Новосибирск (ナヴァシビーリスク) 行きの便に乗るという旅行だった。機体は、ツポレフ Ту по лев (トゥポーリフ? トゥパリョーフ?) 154, 形式番号は新潟からの便と違って

いたようだが、いずれも古く、しかも、離陸前にかかなりの滑走を必要とした。新潟の場合だと、滑走路の端まで行ってようやくしかも角度を付けずの離陸という印象があった。ウラジオストック空港は余裕があったからと思うけれど、全体の感じは、やはり、いかにも重そうであった。後部に三基のエンジンがあり、ボーイング727のコピーといわれたこともあったような記憶がある。ボーイング727は姿を消して久しいが、こちらは健在であった。Туполовの発音がわからなくて持参した辞書を調べたが、тупой（トウポイ）という形容詞が見つかった。語義は、丸みを帯びた、鈍い、重い、ということのようである。無関係ではあるまいが、派生語らしい туполобность（トウパローブナスチュ）という語もあり、愚鈍という意味だそうである。Туполовがどんな意味なのかはロシア人に聞いてみなければわからない。

実は、今回の旅行のために、大昔の教科書

S. Khavronina: Russian as we speak it,
(5th ed., Russian Language Publishers 1976)

を持参したが、キリル文字を覚えているだけで、数も断片的にしか思い出せない。この本は、ニーナ・パタポーヴァの教科書がある程度マスターした人を対象にしていると序文にあり、パタポーヴァは二冊本だったか三冊本だったかは思い出せないが、大学に入った年の最初の期末試験後の秋休みのほぼ一箇月をかけて一冊目は済ませた記憶がある。当時は真面目で気力も充実していたことを考えれば、時間の使い方としては、今や跡形もなくなってしまったような、こういうことよりも、もっと有効なものがあっても知れないと思うこともあるが、それは、また、その後のどこかで、いわば、ぐれてしまったからであるのかも知れない。

とは言え、なぜロシア語を自習しようとしたのかは、言語一般に興味があったせいもあるが、当時のソヴェート連邦の科学水準は非常に高く、また、ロシア語文献が比較的安価であったこともある。また、クラスの中にやや年齢の高い人がいて、かれがロシア語をある程度身に付けていたように振舞っていたことに幻惑されたこともあるかも知れない。ところで、現在訪ねているところは、かつてのソヴェート連邦で軍事科学研究の拠点都市として投資が行われたところであり、今も、形を変えた研究所群が並んでいる。先日、昼飯の折に、同僚のドイツ人と、軍事科学研究と言いながら、純粋科学の高度の研究も遂行されていたのには驚くしかない、などという意見を交した。実際、非公開の研究も随分多かったであろう。我々は公開済みの研究成果しか知らなかったわけだが、それらから察しても、研究水準の高さを想像するのは難しい。アメリカの場合も同様で、非公開の研究成果は極めて多い。日本を除けば、ほとんどの国が同様だろう。公開されている研究成果は、少なくとも、国家レベルでは問題にされない、あるいは、むしろ、外交戦略の一環として、文化・技術交流の際の武器としての効果の期待の方が高いという性

質のものであるのかも知れない。

日本は法律で、科学研究成果の公開を義務付けている公開性の極めて高い稀有な国である。そのためだけではなかろうが、先端的な科学研究が、外圧、特に、アメリカからのものによって阻害された事例がいくつかある。その場合、単に、アメリカなどの競争力を将来にわたって殺ぐ可能性があるからというよりも、アメリカなどの非公開研究と衝突している可能性もあっただろう。なかなか難しい問題だが、科学研究成果の公開度を差別化しようとなると、その判断基準が必要になり、それは、研究の当事者には任せられないものである。研究政策、研究方針、研究達成度、その他の研究体制の管理の問題はもちろん、研究における価値の判断と評価が鍵になる。一方、研究成果の公開性を義務付け、透明性を高めるということは、一見、もっともらしいが、しかし、重要な判断の機会を放棄することでもあり、研究当事者や研究管理者など関係者の責任感の喪失や退廃を招く面があることも忘れるべきではあるまい。言い換えれば、研究における civilian control を真面目に考えなければならぬであろう。civilian とは、「健全なる素人」でもあるが、価値や方向性への洞察には狂いがないことが要請される。先端科学技術開発も、国の金、つまりは、血税を用いて行われている以上、国家の存立が掛かっているわけで、兎戯に類した扱いをすることは許されないという側面であろう。さらに、研究成果公開の場合に限らないが、他国と違う体制をとっているときは、その体制のまま他国の体制と競合ないし遭遇した場合には、体制間の比較的共同に見えるところまでで他の体制についての理解が止まってしまう、体制の違いから生ずるさまざまな可能性について全く想像が及ばないということがある。このような認識の不足が危機を招いた例もあるし、これからも起こりうることである。

話をもとに戻すと、ノボシビルスクの研究所は、まさに、ロシア語を学ぶ動機であったと言ってもよい場所であった。ロシア語はほぼ完全に忘れてしまったが、思うことはいろいろある。

付記（平成 24 年 2 月 1 日）：最近、世界的な論議を呼んでいる鳥フルの変移の研究公表についてのアメリカ側の考え方を表明したサイトを今頃になって見てみた。なお、日経電子版の 2 月 1 日付の記事もある。

33. (07.09.26) よる年波には逆らえず、ロシアから帰った後、数日間ぼうつとしていた。それでも最低限の用は足し、彼岸の連休は、また、旅行であった。

Dawkins は携行したが、漸く 5 分の 3 を少し超えたところである。とまれ、Dawkins は「神」の非存在、むしろ、不要性について論じた後、「宗教」の起源を進化論の論理に馴染むように、meme のいわば暴走によるものという説明を試みている。例証として南太平洋の島嶼でかつて猖獗したという船載品教 (cargo cults) を検討している。つぎに、人が善をなす所以、つまり、道德の根源が、「神」あるいは「宗教」とは無関係であることを論じている。特

に、宗教家の主張、つまり、「神」が「見て」いるから「善」をなさなければならない、あるいは（ところが）「善」「悪」の基準は「神」に定められている、などには矛盾が含まれていることを指摘している。どうも粗雑な紹介だが、正直のところ、この辺りはそんなものだろうなという感覚で目を通していているからである。

Dawkins は宗教的信仰と正邪というか人間の道徳的規範との関係を論じ、両者は関係がないことを、旧約、新約の聖書を引いて論証する。引き続き、Zeitgeist の変容を論じた章の内容を考慮しても、旧約聖書の記述にある ヤーヴェの指令や当時のユダヤ人社会の慣習の今日的基準での非道徳性は、Dawkins の記述に従う限り、救いがたい。しかし、そういう指摘にもかかわらず、Dawkins は、まあ、敢えて言えば、偽善的に振舞う。つまり、旧約の「非道徳的な論理」そのものが現代のあの地域の混乱の原因でもあることを、Dawkins は明晰に理解しているにも拘わらず、他の箇所と違って、明示的に指摘していないのである。Dawkins には意見はあるのだろうが、本来の目的を考えれば、こんなところで筋違いの波風を立てるのは馬鹿げていると考えたに違いない。

ともかく Dawkins は読み終えてはいないのだが、いろいろと余分な感想を覚える。以前、翻訳にけちを付けたが、実際、どっぷりと西欧文脈に漬かっていて、簡単に日本語に翻訳が利くものではない。ここまで読んだ範囲では、最近の日本と西欧とが対立する卑近な事例、例えば、鯨の話は出て来てはいない。類似例から行くと、Dawkins は、食用ないし（人間＝捕食者の）生存上の必然性があれば可、しかし、興味本位の殺戮ならば不可となるのかな、という気もするが、Dawkins の論法では、鯨を食用にするのがそもそも変であるとか他にも食い物があるだろう、という議論の立て方も排除できないようにも思われる。なお、わたくし自身は、鯨肉の記憶は、敗戦後しばらくの間の配給品（だったと思うが）鯨肉ベーコンのせい、余りよいものではない。要するに、美味しいとは思わなかったが、少し後だったと思うが、亡父が結構頻繁と帰宅途中に買って来た尾の身の刺身の方は評価している。

脱線した。Dawkins が西欧文脈だから一方的で不都合だというわけではない。Dawkins の書物は、アメリカの現在の社会の雰囲気の問題視しているものであり、当然、本来の標的はアメリカ人である。しかし、アメリカの影響は、例えば、日本や韓国の一部の宗教的環境にも及び、危険な地帯に、独善的で不毛な使命感に基づいて赴いて命を落とす青年が生じている。それらは自業自得と言ってしまってもできるが、実は、日本で四世紀前に起きたことにも近い。当時の宣教師たちを思うと、かれらが殺されることになったのは望んでというか、自業自得であったと言えるだろう。しかし、かれらに従った町民や農民たちの殺戮を惹き起こしたという責任を意識していただろうか — もっとも、ほぼ一世紀前から列島をおおっていた宗教的熱情の残滓がキリシタン宗門に集結したのかもしれないが。ともかく、キリスト教の「聖人」には普遍的な価値があるわけではなく、「教会」という「官僚組織」を前提にして初

めて意味を持つ「階梯」であることは理解しているつもりだが、一般に「殉教者」を「聖人」にしてしまうことには疑問を覚えないわけではない。

もちろん、Dawkins は、人間が人間として価値のある、つまり、「道義的な規範性」が満たされているような、生を享受する上で、宗教はむしろ有害だということを詳細に説いている。しかし、それが十分に公平な形で行われているかどうかは、その説得力に直結しているのである。

34. (07.09.28) このブログでは、Ivins に従いつつ、少なくとも 2500 年昔の古典ギリシア人と現代に至る日本人との比較に徹するつもりだったが、大分脱線している。反省せざるを得ない話である。脱線して来たのは、説明はしないが、まあ、仕方のない事情もある。幸い、論理的には、Dawkins の考え方は相当参考になるかも知れない。例えば、「meme」である。ただし、meme の実証性には疑問が付きまとう。遺伝子と違って、生物の個体水準ではなく、しかも、「人間社会」以外では発現しないというのが、最大の難である。Ivins の指摘も、人間社会に関することであるから、Dawkins の meme 理論が、例えば、最近の脳科学の成果と関連付けられ、しかも、ここが大事だが、集団的認識の説明として有益であるということが検証されれば、という留保は付けなければならない。

その Dawkins であるが、数日前 (9 月 27 日) の New York Times 電子版に

Scientists Feel Miscast in Film on Life 's Origin

http://www.nytimes.com/2007/09/27/science/27expelled.html?_r=1&ref=science&oref=slogin

という記事があった。Dawkins が、ビデオ・インタビューに応じるにあたって、事前に交した約束と違う形で利用されることがわかったと言って抗議したことから始まる記事である。実は、これは ID 関連では毎度のことであって、わたくしは Dawkins が甘かったと思うが、NYT の記事の書き方に現代アメリカ社会の難しさが見えてくる。ID (Intelligent Design) 説を唱える連中が詐欺的な行為をしていても、NYT は他の記事でもよくあることではあるが、一見公平を装うばかりで、恐らくは販売政策上の理由であろう、紙上では非難どころか曖昧な主張に終始する。例えば、進化論に組みしなかった、あるいは、ID に近い主張をしたという理由を挙げて大学でのテニユア (常勤ポスト) が得られなかったと主張する人たちの言い分を紹介している。一流を目指す大学で科学的に検証できない理論に基づいて地位が得られるはずはないのだが、そのことが理解できない人がいて、しかも大声を出して相手にされている。こういう現代アメリカ社会とは、難しいものである。

なお、NYT の記事は、他の新聞同様、玉石混交である。しかし、現在の特集記事

Choking on Growth (Part II)

<http://www.nytimes.com/2007/09/28/world/asia/28water.html>

は結構面白かった。現在の中国、特に、華北域での地下水位の低下と地下水の汚染の問題の深刻さの指摘である。地下水は、基本的に閉鎖水系であり、一旦汚染されてしまうと浄化はほとんど不可能に近い。地下水汚染は日本でも極めて深刻であるはずだが、華北の深刻さの程度がよくわからない。井戸は、十年前には数メートルの深さで十分であったが、今や、二百メートル程度の深度がないと実用にならない、ということの意味も、日本の都市を考えると、この程度ならという感もある。ただ、中国に行きさえすれば農業だろうが工業だろうが万事解決という時代は、かくも基本的な部分に難がある以上、再現の見込みの薄い、遠い昔のことになってしまったということは想像できる。

華南からの計画中の水路が完成すれば問題は改善するのだろうか、そもそも、華南域が黙っているのだろうか。正直のところ、かつて（シンガポール上級相の）李光耀が示したという、中国は黄河を中心とする華北域と長江を中心とする華南域と、（さらに、香港・台湾をも含みうる）沿岸域に三分割されるのが（歴史的地理学的）必然であるとする見解もあながち無視できそうもない。まあ、これは言い訳のしようもない完全な脱線というべき感想ではある。

いずれにせよ、何だかんだ言っても、NYTには、結構大局観のある記事が載るものだと思う。

35. (07.09.30) 先週末は、仙台で社団法人「日本数学会」の秋季総合分科会というのに出席していた。何時ごろから過去の人になったか反芻し、苦い思いを嘯み締めながら、いろいろな話を聞いた。今更不勉強を悔やんでも仕方がない。

ところで、数学会の年会は別にある。しかし、総合分科会も実質的に年会であり、内容の実態は年会と変わらない。わたくしも、かつて、数学会の雑用は若干やり、その結果、総合分科会の廃止などを含め、運営についての意見も多少は持つようになってはいた。しかし、幸か不幸か「全共闘世代」のクーデターというべきものもあって、運営と言えほどのものには関与せずに来た。そもそも「クーデター」云々は、かれらの「大学改革」の経過に対する不満の現れでもあったのであろう。かれらより数年年長のわれわれは、まさに、「大学改革」の推進・実施に当たった（せいぜい「C級」ではあろうが、それでも銃殺ないし絞首相当の）戦犯と看做されていたわけである。

こんな時期に、なまじ意見を持っている人間が多少とも学会の運営に関与するような機会があったら、ひたすら消耗しただけであつたに違いない。学会の運営というのは対内的・対外的な能力が問われるのであり、業績がなければ話にはならないが、業績があればよいと言うものでもない。よい意味での政治的能力 — 役割の自覚と課題の理解、特に、課題解決や懸案実現のための努力と集中 — が不可欠であり、業績はこの能力を支えている基礎的な資源と考えるべきかも知れない。別に数学会に限らないことではあろうが、こういうわけで、学会の幹部であるためには、私的印象ではあるが、指導者と

しての素養と訓練が要るのである。

ところで、数学会の秋季総合分科会では、(該当者があれば)「関孝和賞」というのが授与される。今回は、フランスの高等科学研究所 (IHES=Institut des Hautes Etudes Scientifiques) に授与された。IHES は名称が示すように数学の研究だけを行っているところではなく、現に、授与式に出席した現在の所長は生命科学の分野に関心のある人らしかった。授与式では、数学会理事長からの授賞理由の説明演説に引き続き、IHES の所長の受賞感謝の答礼演説があり、さらに、駐日フランス大使館の科学参事官から補足演説があった。最後に、群馬県藤枝市からの副賞に伴う市長の演説が付いた。

これらの儀式的次第が結構面白かった。関孝和は江戸幕府の勘定方の下級官吏であった。御家人として、あるいは関家としては、今の藤枝市と縁があったが、墓は都内にあり、三百年忌の法要が来る 12 月始めに予定されている。関は和算を大いに発展させた人であり、その数学的業績には、今日の言葉で言えば、微分積分学及び代数学 (特に線形代数) の結果において、同時代の西欧の水準を凌駕するものがあった。そういう点を評価・顕彰して、日本数学会は、関の名前を付した特別賞を設けているわけである。

数学会理事長の授与理由は、数学会の立場上、当然であるのだろうが、IHES における数学の研究と日本の数学研究の関わりに主眼があった。わたくしの理解では、日本の数学研究は、IHES で行われていた数学研究のどの分野にわたっても強い関わりがあったとは、実は、言い難いのであるが、双方の、言わば、得意とする分野では、深く、かつ、相互的な関係が成り立っていると評価することができる。理事長は、もちろん、この緊密な関係の分野について主に述べたのであるが、それは、理事長自身が業績を挙げてきた研究分野ではないと思われる。

IHES 所長⁴の答礼演説は実に周到なものであった。関孝和の人物や業績についての的確な理解を口頭で述べるだけでなく、関の和算の一部の文献を画像で示し、さらに、関の墓地を訪れた際の献花の写真も示した。また、IHES という研究所の概略と歴史および今後の展望を概観し、その上で、日本の数学者との関わりを、今や伝説的とも言える数学者たちの写真を提示しつつ、説明した。さらに、IHES は数学以外の科学分野でも日本の研究と関わりがあることを述べ、例えば、所長の専門領域にも言及して、その方面での最近の日本との研究上の関わりも臨場感のある形で述べた。

その後の駐日フランス大使館科学参事官の演説は、当初、科学参事官が登場する理由がわからなかったものの、フランス政府がこの受賞を日仏関係という枠組みで整理していることを説明するものであった。聞き漏らしたが、科

⁴みっともないが、訂正と補充をする。IHES の所長は、Bourguignon という人で、幾何学者であった。実は、何回か見たことがある。痩身短髪の軍人のような印象があったが、年とともに様子が変わるの当然か。10 年間所長をしているわけでもある。それにしても、理事長の紹介のとき、何を聞いていたのだろう。IHES の記事は、日本数学会の「数学通信」12-3 (2007) にあった。詳細は、IHES のホームページにある。EC の枠内で運営されているようである。日本との関係では、関孝和賞や Gromov の京都賞などが示されている。その他、寄付金団体や理事会などの情報も見ることができる。

学参事官は IHES の所長と近接分野の研究者であったのかも知れない。数年前には、確かに、生命科学の研究者が参事官を務めていたと思うが、交代しているようであり、調べればわかることながら、ここでは余り重要なことではない⁵。とまれ、科学参事官は、来年は日仏修好 150 年であり、そのような折に、IHES の受賞は慶ばしい、というようなことを言って、演説を締めくくった。

藤枝市長の演説は、副賞の関孝和の小さな銅像を授与するための簡単なものであった。

これらの儀式次第のどこが面白かったのか。各氏の演説の鍵語を選んでみると見えてくるものがある。考えてみていただきたい。

数学会理事長の演説の鍵語は、「関孝和賞」「数学」「数学のある分野」「IHES」と整理できる。IHES 所長の演説の鍵語は、「関孝和」「IHES」「科学」「数学」「日本の数学者」「日仏科学交流」と整理できる。科学参事官の演説の鍵語は「日仏交流」「日仏科学交流」である。藤枝市長の鍵語は「関孝和」であろう。

36. (07.10.14) 10 月も半ばになり、日仏学館での西洋美術史のクラスが再開された。もつともデューラーと遠近法について薄っぺらな関心を抱いて以来、多少は体系的に西洋美術史について習っておこうかと思いついてからだから、漸く一年というところだろうか。今回は、女性講師の最近のフランス旅行、特に、パリで観てきたばかりの展覧会の報告が主で、残りの時間は、ジョルジオ・ヴァザーリの話になった。予定では、ヴァザーリでフィレンツェの画家の話は終り、その後、ヴェネツィアに移ることになっている（詳細は http://www.ifj-kyushu.org/jp/cours/2007/html/_2.html）。

帰り道、久し振りに丸善に寄り、いろいろと立ち読みを繰り返しながら、

古田博司：新しい神の国（ちくま新書 2007）

ISBN978-4-480-06386-1 C0230

を買って帰った。著者のことは知らなかったが、「神の国」に森喜朗代議士の有名な言葉が連想され、目次をざっと眺め、裏表紙の略歴を見、出版元が筑摩書房であることを考慮して買ったのである。奇妙な言い方だが、出版元によっては読まずに中身の想像が付くところもあるし、それなら、立ち読みの斜め読みで十分である。

とまれ、この本は数時間で読み終えた。著者は下関市立大学に在職していたというのだが、かつて伝え聞いたあの大学の雰囲気とは異質の内容であった。

本書の冒頭の章は、ハワイ大学朝鮮研究所（正式名称は不明。調べようはあるが、手間を掛けるほどのことはないだろう）滞在の話である。ところで、

⁵それにしても、なぜ Bourguignon を生命科学と結びつけたのかわからない。IHES のホームページを見ると、最近、この方面の研究が勢いを得ていることは想像がつくが、一方、Bourguignon を調べると、そちらの方面に開口を広げたくも言いにくそうである。むしろ、科学全体を見回す学識経験者のような役回りにあるようである。して見ると、周到な演説ができるのは当然か。軍人のような印象というのは、エコル・ポリテクニク出身だから当然か。学生時代には、カトールズジュイエにナポレオン時代の士官服でシャンゼリゼーを行進したのだろう。

後の章を、読み進めて行って、著者が朝鮮半島の近代史が専門であることがわかった。韓国滞在が長く、しかも、中国語、ロシア語に通じ、英語にも問題がないようだから、この地域についての研究をするための道具は整えられているわけである。著者が朝鮮や中国に関して述べられていることは、まあ、そんなものだろうとは思いますが、かと言って、われわれは現在の政治的世界に生きており、そこでは、さまざまな誤解や思い込みが幅を利かす。少なくとも日本の方から見ると、日本側の勘違いの原因が、日本そのものに対する思い違いから来ているのだとすると、まあ、なにをかいわんやではある。

第一章の扉に、李承晩の銅像の前で寛ぐ著者の写真がある。それで思い出したが、イラクのフセイン体制打倒後のアメリカの占領行政は、日本の場合より、亡命していた李承晩を連れてきた韓国での米軍占領統治の方が近かったのではないかと感じたことがある。北の金日成にせよ、南の李承晩にせよ、肝腎の朝鮮半島内に真の意味での地盤が存在していなかったということが、その後の朝鮮半島の混乱と困難の一因ではなかったかと思っていたが、古田教授の説明では、もっと根深いものがあるようである。ただ、教授の説明に従えば、李承晩夫人がオーストラリア人であったことは深刻ではなかったであろう。前後するが、第一章で面白かったのはハワイ出雲大社のことであった。神道がこんな風になるのか、ということであるが、してみると、最近の明治神宮での有名な芸能人の挙式の様子など、まだ神道の変容の可能性としては大したことはないというべきか。

ところで、第四章は「日本文明圏の再考」という。この内容は、当ブログの趣旨に関わるはずである。日本文明の現象的な特徴として「写実性」を挙げている。(別な章であるが)日本文明の重要な現象的な伝統として「茶化し」(Teazation! ”to tease” と絡めてあるのだろう)を指摘している。いずれも明確な概念規定は、すくなくとも、この本では行われていないが、例は多数検討されている。「写実性」は(欧米流の)「現実性」と似て非なるものであるとは述べられているが、欧語に直すと、いずれも realism になるというところで止めてしまうのでは困る。実際、今日、日本語で書かれたものでも、母語が日本語以外の人たちにも読まれる機会は多く、したがって、日本語でしか通用しない議論だからといって、「気分」さえ伝われば十分とは行かないだろう。特に、本書は外国との関連を論じている以上、この点には緻密な配慮が必要なのではないか。少なくとも、「写実性」についてはより詳しく分析し、「茶化し」との関連を明らかにすべきだろうと思う。例えば、「写実性」は、「木ばかり見て森を意識できない主義」という面もあるようだが、当節の言葉でなら「オタク性」と解した方がよいのではないか。すると、「茶化し」とは、茶化される対象の「オタク性」を暴いてみせる行為という説明ができるかも知れない。

「写実性」との関連で、中国に関する本を二冊思い出した。一冊は、

中野美代子：龍のいるランドスケープ (ベネッセ。1991)

であり、もう一冊は、

Samuel Y. Edgerton, Jr. : The heritage of Giotto's geometry
Art and science on the eve of the scientific revolution
(Cornell University Press, 1991)

である。中野教授の本は手元になく、記憶だけだが、確か、16,7世紀のヨーロッパの採鋳技術の書物だったと思うが、原書の挿図の和漢の訳書での扱いの比較が示してあったように思う。和書の場合は、原書の挿図のうち、技術に関わる部分の詳細を正確に表し、したがって、そのような器具の実際の製作に供しうるものであったが、明・清の訳書では、器具を操作する人間に重点が置かれ、器具そのものは不正確に写し取られており、この点について、中野教授が詳細に論じておられたと思う。また、唐土の男女交合図も何枚か示されていたと思うが、浮世絵の精緻さには到底及ばないのは当然としても、むしろ、はなはだ稚拙なものであったように思う。行為そのものは抽象化され、交わる男女それぞれの社会的関係に注意が移っていたのかも知れない。そういうのも考え方ではあろう。

また、Edgerton 教授の書物は、第8章

Geometry and Jesuits in the Far East

において、イエズス会士が宣教上有用な文献の翻訳に当たって挿図の処理に苦慮したことが述べられている。原図版と中国における翻訳にある図版とが掲載されており、翻訳図において原図のうちの必ずしも本質的とは言えない人物像が強調され、図版の本来の意図、つまり、器具の技術的な説明を与えるということが全く理解されていなかったことがわかる。標題にもかかわらず、和書の図版は挙げられていないが、著者が利用できた図書館には和書が収蔵されてはいなかったのであろう。そして、同書 266 ページには、

Ricci and his successors in Beijing constantly begged Rome to send more astronomers, but they never asked for competent European-trained artists. Nevertheless, Ricci's superior and overseer of the Eastern missions, Father Alessandro Valignano, did appreciate the necessity of furnishing the new churches with holy images. Taking his cue from the Franciscans in New Spain, he prudently urged that indigeneous artisans be trained to combine their native craft with the principles of Renaissance chiaroscuro and linear perspective. Unfortunately for the Beijing mission, Valignano decided that Japan, not China, should be the training center, and so directed Father Giovanni Nicolao (1560-?) to found a Japanese "Academy of St. Luke," where local converts might be taught to draw and paint in the Renaissance manner. This decision, as yet unevaluated by modern historians,

was more crucial than anyone at the time imagined. Perhaps it even played some role in the differing paths taken by China and Japan in the oncoming Industrial Revolution.

というパラグラフがある⁶（原注は略）。（同書では、この後に、さらに重要な指摘が続くが、別の機会に論じたい）。

古田教授の著書に戻ると、第六章で、「別亜」を論じている。要するに、中・韓と日本とは、社会構造の基本が違い、異質だというのである。併せて、福沢諭吉の「脱亜」を論じており、福沢は朝鮮人と深く交際して異質さに気づいたのであろうが、「脱」の前提となっている一体性はもともとなかったと、教授は指摘する。まあ、「日本文明」というものがユニークな価値を持っている存在という意識があれば、「別亜」であろうが「脱亜」であろうが、どうでもよいだろうし、また、「入欧」などを唱える必要ももともとないと思う。しかし、そういう「文明」としてのアイデンティティが確立されていなければ、こっちでなければあっちということにはなる。関連して、古田教授は、さらに、「和を以て貴しとなす」という句についても論じているが、この句は少なくとも二箇所大きく扱われているが、それぞれの捉え方には整合性がないように思われる。これは編集者の見落としか。

なお、「あとがき」の文言は大変重い。上で、古田教授の履歴の一端に言及したが、さればこそと思わせるものがある。教授のいう「別亜」とは東アジアへの独善的な思い入れは単なる片想いであり、相思相愛とは本質的に相容れない — それが成り立つための基本的な条件を欠いている — ものであるということであろうか。28回の記事で言及した、岡田英弘教授のご指摘とも通ずるものがある。

また、Giovanni Nicolao について検索したところ、かなり見つかった。例えば、

<http://redalyc.uaemex.mx/redalyc/pdf/361/36100202.pdf>

は英文 14 ページであるが、興味深い。標題は、

Nagasaki an European artistic city in early modern Japan

である。early modern という用語が面白い。他にも、種々見つかった。追々検討して行きたい。

37. (07.10.15) 日曜日の午後、天気に誘われて自転車で外出、特に、当てはなかったが、田島、荒江、藤崎、百道と走り、博物館で「鴻臚館とその時代」という特別展を覗いてきた。二十年来続いている福岡城址での鴻臚館発掘調査の報告を兼ねた出土品と、併せて、同時代とされる 6, 7 世紀から 11, 12 世紀くらいまでの朝鮮半島から黄海・東シナ海沿岸の大陸一帯、さら

⁶自分でコメントするのは憚られるが、文中引用内の Academy of St. Luke については、Wikipedia に記事があった：http://en.wikipedia.org/wiki/Accademia_di_San_Luca ただし、1593 年創設というから、引用の文脈は適切ではないだろう。

に、日本列島・白河の関辺りまでの関連文物が展示されていた。特別展の図版目録は購入しなかった。

そういう事情で、展示物は福岡市や福岡県関連のもの以外にも東大の総合博物館のものがあったり、正倉院のもの複製があったり、韓国の博物館から借り出されて来たものもあるなど、当初、想像していたよりは、内容があり、多様性があった。ただし、展示の仕方が適切であったかどうかは疑問がないわけではない。

感想は特にない。主な印象は二点、第一に、意外とよい状態で出土したものが多いな、というのと、第二は、今の福岡市は数百年に及ぶ埋め立ての結果、往時「博多の津」であった入り江や湿地の様子は明らかではなくなってしまっているが、昔から陸地だった辺りは、何かしら古代の事物や建物の痕跡が残っているものだな、ということである。この地域は、大昔から、基本的に「都市」ともいうべき性格を備えていたのか、ということでもある。

興味深かったのは、今では、博多湾から遠くなってしまっているが、大宰府を囲む防衛線としての城砦の中に、南（つまり、有明海方面）からの敵の侵入に備えたものがあったことである。ただし、これは、展示物からではなく壁面の説明パネルからの知識である。また、何もこの特別展でなくても、少なくとも、地元で育った者には常識なのだろうが。

ここで思ったことは、つまり、この時代は、玄界灘を超えての大陸との交流、あるいは、玄界灘を中心としての朝鮮半島南部と北部九州や本州西端を含む交流圏（文明圏）があり、唐の文物は、この経路で日本に伝わるとというのが当時の主流ではあったろうに、一方、東シナ海を五島列島経由で有明海に至る経路もそれなりに重要で無視できなかったからこそ、南への防衛線が敷かれていたのだろうか、ということであった（わたくしは、「唐」を「から」（つまり、「韓、高麗」）と訓ずることは、大陸との交流の主流が玄界灘経由であったことの名残だと思っている。しかし、「呉」を「くれ」と読むのはなぜだろう。まあ、「高麗」を「こま」とも読むが、これもなぜか。「駒」、あるいは、朝鮮半島産の馬からだろうか。すると「こ」とは何か。「ま」は「馬」の音からに違いないが。）。

もう一点、興味深かったのは、福島県内の郷土博物館の収蔵品の弩（いしゆみ）の部品であった。弩は、オリンピックのアーチェリー競技などで使われる洋弓と同じ思想のもので、日本で通例用いられてきた弓と違い、機械的に弦を引いて矢に与える反発力を強め、したがって、比較的小型で、しかも、強力な武器になるものである。和弓が比較的大型で、また、照準を合わせるのにも熟練が必要であろうことを思うと、弩は、武器としては和弓よりも優れていたのではないかと思われ、日本になかったようなのは知られていなかったからだろうと思っていた。しかし、坂上田村麻呂の時代でも使われていたようなのである。それなら、「防人」も備えていたかも知れず、九州北部から部品が出土してもおかしくはないが、そのような事例はないようではある。

弩が普及もせず跡形もなく姿を消したということは一体どういうことなのか。要するに、必要性が急速に失われたのであろう。確かに、小型の和弓は狩猟用としては洋弓より汎用性も利便性も高かったであろう。しかし、一般には、必要性がなくなったからと言って完全に放棄されるとは限らない。現に、和弓の技術は、弓道として、今でも伝承されている。平城・平安朝期の人間の考え方を、今日の水準で忖度することは困難だが、一旦は導入されたことが明らかであり、しかも、世界的には標準的なものに近い技術や知見であって、長い年月の間に消えうせてしまうというものは、他にもあるに違いない。それなりに変形や修正を加えられ、今日まで生き残っているものとの差異はどこにあるのか。いろいろと疑問が浮かぶ。

少年の頃に、中尾佐助氏らの小麦や米の伝播に関する本を何冊か読んだ記憶がある。今の知見でも維持されている説かどうかはわからないが、米の文化(culture = 耕作!)と小麦の文化を、随伴する野菜や畜産を籠めて、把握すると、両者の違いが鮮明になると書かれていたと思う。両者が混合している地域もあるが、基本的には、小麦は北方のものであり、米は南方のものである。たしか、菜種や大根などの十字花植物は小麦とセットであり、芋、稗、粟などは、米とセットであったと思う(芋は、また、別な広がりを持っているが)。さて、記憶にないのだが、古代都市や武具、騎馬の習慣については、どうなっていたらう。羊、したがって、羊毛は小麦に、絹や養蚕は米に伴っていたであろう。豚や牛、水牛もある。(ネット上で、したがって、信頼性はどうかと思うが、)日本列島の米のDNA分布の方が、朝鮮半島のものよりも多様性に富んでいるという記事を見たことがある(つまり、米の文化は東シナ海経由で最初に日本列島に伝わり、それから北上したのだらうというのが含意である)。これが事実であるならば、要するに、日本列島には非常に古くから米を基層とする文化があり、その上に大陸系の文化が伝わったという想定も成り立つであろう。しかも、朝鮮半島北部を経由してきたはずの文化は小麦系のもではなかったか⁷。つまり、米ではなく小麦を伝えたのではあるまいか(時代が下がるが、元寇の際、蒙古・高麗連合軍は農具を持参していたという。どのような農耕を想定していたのだらうか)。当然、在来種の小麦に関しては、恐らく、朝鮮半島の方がはるかにDNA分布は豊かではあるまいか。そこで、弩であるが、これは、小麦に随伴していたのではないか。以前疑った発明品としての「古代都市」も小麦の文化に属するのではないか。米の文化には和弓はあったが弩に相当するアイデアはなかったのではないか。うどんは辛うじて残ったが、パンは消えてしまったのではないか。

⁷米作の伝来に関する記事が、『試行私考 日本人解剖』第3章(特に(2) <http://sankei.jp.msn.com/culture/academic/080310/acd0803100830006-n4.htm>)にある。最近の研究結果が述べられていると思われるが、朝鮮半島経由説が有力とのことである。しかし、もともと長江域で米作を担っていた民族が北方の有力民族に圧迫されて米作を携えながら移動して行ったとすると、その主な(一次的な)行き先に朝鮮半島が入っていると考えべきなのかどうか。南方経由というのも無視できないともある。陸稲と水稲とは共存する文化体系は一致しないと思うが、いずれにせよ、米だけみていけばよいというものではないはずである。この連載の次回以降が待たれる。

以上は、いわゆる「常識」には反するけれど、検討すべき要点は明白であろうと思う。さて、実際のところはどうなのか。

38. (07.10.26) 狩野永徳 (1543-1590) の展覧会が京都国立博物館で開かれている。たまたま豊橋に行く予定があったので、途中下車をして、展覧会を覗くことにした。

狩野永徳に関しては、もう40年以上前になるが、亡父から、永徳の樹木図と同時代のイタリア画家、例えば、ミケランジェロなどの壮大な人物像とを対比させる話を聞いたことがある。傑出した人間が輩出した時代という点では共通ではあるが、なぜイタリアでは堂々と英雄的な人間の行動が描かれ、他方、日本ではただならぬ様子の巨木が描かれたのか、亡父が、世界観の相違などを含めて試みた説明の若干は聞いたことがある。実際は、この時代に生きていないとわからないことであろうし、だから、どうだというものでもあるまい。この時代の鍵人物の織田信長は、確かに、日本史の常識では突出しているように見えるけれど、世界標準という発想のもとでは、一体どうだったのだろうか。もちろん、信長の後に残った人たち、秀吉にせよ、家康にせよ、かれらには、信長の事跡を、否定的ならばともかく、正確かつ好意的に記述しなければならないというような動機も必要性も全くなかったわけだから、信長の実像が後世に伝えられている通りであるかの判断は難しい。秀吉関連でも、信長同様、むしろ非好意的な記録しかわれわれの手元には残されていないはずで、この点は、連綿と続いた家康系統の話とは全く違うと思わなければならない。ただ、同時代の永徳の作品に、信長や秀吉（の時代）の雰囲気を感じ取ることはできるかも知れない。

一体、何を言いたかったのか。要するに、16世紀後半という日本の（いや、日本に限らないが）不思議な時代を知るためには、狩野永徳の作品の醸し出す雰囲気に浸るのがとても重要だろうということである。ところで、わたくしが火曜日の午後に狩野永徳展を覗いたのだが、大変な人気で、中でも、米沢にある「洛中洛外図」の前は、係員が「立ち止まらないでください」と観覧者の列に声を掛けている状態であった。しかし、それでも一応は眺めることができたのだが、画面が思っていたよりも、金箔の雲や霞で覆われていて、多数の人物が描かれているとは言っても、足利義輝 — 織田信長の時代の都の全体像が生き活きと表されているという印象は薄かった。永徳が描いたのは実像ではなく、理想とした心象風景だという意味の説明があったが、そうかも知れない⁸。

ただ、描かれている細部は精密に当時の状況を反映しているというから、そ

⁸今頃になって気づいたことではあるが、阪急の四条から河原町に向う地下道の四条の改札口のすぐそばの壁面に、高津家本の洛中洛外図の陶板が竣工記念としてはめ込まれている。慶長末から元和初（つまり、1600年前後）の作者不詳のもの（複製）だそうだが、応仁・文明の乱から1世紀半を経て町衆の手で復興した三条から四条の界隈を描いたものという。興味は、町屋の配列であり、並行する道路に沿いつつ背中合わせの町屋がどうなっているかに興味を持って、眺めてみると、どうも住人だけの共有地というか、私的空間があるように見えた。現行の形に近いだけに、永徳の洛中洛外図より市街地の描写としては信頼できるのではないかと思われるが、どうなのだろうか。

う思って見ると、例えば、京町屋は古代都市のアイデアの名残では、というおのれの見解（28回参照）に疑問符を付けなければならないかな、という気にもなる。つまり、洛中洛外図の庶民の家々と思われるものは、道と思われるものに沿って並ぶ商店群だが、店舗部と居住部とが明晰に分かれているようではなく、また、並行する道沿いに背中合わせに商家の列が描かれているのを見ると、これらの商家の列の間に、それぞれの商家の私的空間となるべき空き地、つまり、中庭が描かれていないのである。今日に残る京町屋は一体いつ成立したのであろうか。また、関連しての疑問だが、今日でも残る京都の位置指定の仕方、東西、南北の道路と方向を与えるという指定法は、いつごろからなのか。

洛中洛外図に続いて、若干、建物群を含む風景図が展示されていた。洛中洛外図でも得た印象であるが、建物、特に、屋根の比例がおかしいものもあった。また、遠近法は遠方のものが若干小振りという以上には見ることができず、むしろ、伝統的な逆遠近というべき、遠めの方が大きめになる描写もあったと思う。永徳の時代は、キリシタンも周辺にいたはずだが、かれらから西欧の絵画技法は伝わってはいなかったのだろう。そう言えば、唐獅子の図案も西欧の影響があったとは少なくとも素人目には思われぬ。

巨木の図が展示されているところは、意外とゆっくりとしている人が少なかった。観覧者も、皆、ここまでで疲れてしまっていたのかも知れない。繪図にせよ、フランク・ロイド・ライト収集品の老松図にせよ、原図を仕立て直したものであろうが、それでも立派なものであった。唐獅子図もそうではあるが、今となっては、もとの姿は想像することも難しい。また、作品完成直後の絢爛たる様を復元すると、印象はずいぶん違うだろうと思う。もちろん、画像の大きさも重要な要素である。コンピュータ上でシミュレートしたものをしかるべき大きさに投影することにより、当時のそれらしき感覚の一端を味わうことができるかも知れない。

ところで、永徳は過労死したらしい。特に、最高権力者からの注文は納期の厳守はもちろん作品の出来栄によっては処刑も覚悟しなければならなかったであろうからストレスは大変なものであったろう。このような忙しさの中で新しい世界観や技法に関心が向くものだろうか。確立した主題と技法で大作を次々とこなすということになっていたのではないだろうか。

39. (07.11.01) Dawkins の The God Delusion を何とか読み終えた (26回, 27回, 30回, 33回, 34回の記事参照)。旅行のついでに読み、特に、ノートやメモも取っては来なかったから、読後感は散漫にならざるを得ないが、基本的に、英米の文脈でなければ成立たない著作であると感じた。Dawkins は「無神論」の勧めとしてこの本を著したわけだが、前提は飽くまでも現代イギリスの宗教的環境であり、また、現代アメリカの宗教と社会の事情である。したがって、日本の文脈では、この本は、そのままでは成り立たない。宗教観の相違というものがある。しかし、それにもかかわらず、実は、何よりも

功利的な観点からであるが、この本は我々にとって非常に重要かつ有益な書物であると思う（ただし、英文で読まなければならないが）。要するに、英米文明とは何か、また、かれらと深く交際するにはどう振舞うべきかという点について、実に、貴重な示唆を与えてくれるのである。Dawkins が英米の伝統的価値観に対して挑んでいる論争の組み立て自体が参考になるであろう。

アメリカの場合、社会の主流にキリスト教系の過激な原理主義的な影響が見られ、そのことが国際的にもさまざまな問題を引き起こしていることは、アメリカ人以外には常識と言ってよいだろう。しかし、Dawkins に従えば、政治的な英米連合の強化の過程で、アイルランドを除いて宗教的には概して穏健であったイギリスにもアメリカ流の宗教観の芽が持ち込まれているという。英米双方の政権が交代すれば様子が変わるのかどうか。

イスラム諸国の宗教的原理主義が世俗的な主張と結びついて政治的な力を持つようになったのは、もう四半世紀以上昔からだが、もともと宗教的原理主義の蔓延はイスラエル絡みの形で恐らくキリスト教（プロテスタント）系のもの過激化が先行し、それがアラブ諸国の国内事情や反植民地運動などと重なって、イスラム原理主義を刺激し過激化させたのだらうとわたくしは理解していたが、Dawkins も、そういう見解を否定はしない。最近の「対テロ戦争」が内実は「宗教戦争」であるとさえ言い切っている、私見でも、イスラム諸国も、特に、強権的な国では、国内統治上、宗教的原理主義を抑圧して来ているはずだが、キリスト教原理主義者はそうは理解していなかったように見える – この辺は、人権の抑圧と宗教的自由の阻害の両面で、西欧的理理念からの攻撃に対しもともと脆弱なところでもあるが。

Dawkins は、「（「経典」）宗教は経典の絶対化と現実社会と経典の乖離という矛盾によって必然的に過激な原理主義を内包するものであり、原理主義が暴走するかどうかは人々の宗教観に依るわけではあるが、「宗教」の無意味さを承知していれば、あるいは、むしろ、そういう知恵の持ち主であれば、原理主義の罠に陥ることがないと説く。「経典」宗教の原理主義は、墮胎、安楽死、異性愛、同性愛などにも関わり、アメリカでは医者が襲撃を受けたりしている。もとより、「生命」の問題は「宗教」の基盤になるものであるが、「宗教」に拠って「正しい解決」が得られるというものでもなく、むしろ、「宗教」に拠らなくても温和な経験主義や結果主義の立場で適切な「解決」の模索ができることを Dawkins は述べる。ここで、Dawkins が比較的楽観的に見えるのは、英米の場合は、こういう生命に関する感情的な問題が「宗教」の枠組で整理されているからであろうか、一旦、宗教の桎梏から離れれば機械的に処理されてしまうというようなことなのであろう。しかし、そう簡単ではないのではないか。宗教的感情を偽装した「人権」主張が、少なくとも「宗教」に対して中立ではないという意味での庶民のレベルでは、在来の「宗教的規範」の対極ともいえるべき方向に振れてしまうこともあり得ると思われる。

とは言え、「宗教」に絡み取られてしまうことの危険は、Dawkins の言うど

おりである。そこで、Dawkins は、判断力が発達していない幼時には中立的な宗教環境を保証することが大事であり、過度の、あるいは、不適切な宗教的教育による特定の教義の刷り込みは絶対に排除しなければならないと言う。中でも、さまざまな手段を弄して、地獄や煉獄の恐怖を子供に植え付けることが行われているが、これは、幼児に対する性的虐待よりも残酷な行為だと Dawkins は言う。実際、地獄・煉獄の恐怖を植えつけられた子は、成人してからもしばしば悪夢にうなされる例が多く、他方、性的虐待の方は成長や環境の変化の過程で忘れられてしまうことが多いのだそうである。わたくしも、幼児の頃はなぜか死の不安があり、日曜学校で聞いた地獄の話は気になったものである。小学校高学年の頃、虐待というわけではないが、スキー合宿で引率の大人に寝起きの際に性器をくすぐられたことは覚えているが、その人に対する侮蔑感を覚えただけであった。

しかし、子供たちを宗教的環境から完全に隔絶することにも問題があるだろう。社会の現実には宗教が存在するのだから、少なくとも中学生くらいには宗教についての知識を持たせることが望ましいのではないか。わたくしはカトリックのミッション・スクールで、小学校から高校を出るまで教育を受けた。小学校は女子修道会経営で、宗教に偏っていたのか、学力的には問題が多く、みずから選択のできたことではなかったが、大分損をしたかも知れないと思う。一方、中学・高校は、わたくしが在籍した頃はドイツ人司祭が校長であった。後に、先生が某総合文芸誌に載せたエッセイには、学校の教育が主題ではあったが、ミッション・スクールは信徒獲得のための「方便」であるという意味のくどりがあった。鮮明に覚えているのは、こうして得た信者は、まだ、贋物であって、二世三世と世代を重ねて、初めて本物になると書き進めてあったことである。つまり、ドイツ人の先生には宗教は文化であり文明なのであった。アメリカ人の神父なら、また、別のことを書いたかも知れない。

わたくしはカトリックには感染しなかったが一種の免疫はできた。そして、このことが一番重要なことだったと思っている。後年、子供たちを同じ系列のミッション・スクールに通わせた。オーム真理教の事件の頃、子供の学校の校長が、「調べたところ、系列校を含めて、卒業生でオーム真理教に加わったものはいません」と誇らしげに言ったことがあるが、それは当然である⁹。ミッション・スクールで学べば、宗教に感染するか一種の免疫ができるかのどちらかであり、いずれにせよ、新興宗教には「ただちには」跳びつかない。わたくしの中学・高校の同級生の中には仏教系の某有力宗教団体の有力幹部がいるが、もともと家庭の宗教であったのであろう。

さて、Dawkins は、最終章の最後の節 The mother of all burkas で、人間に限らず、一般に、生物の知覚が進化論的生存に必要な範囲 Middle World に限定されていること、したがって、知覚できる範囲の外側に広大な物質の広

⁹後に聞いたところによると、関西にある系列校の卒業生には感染者がいたようである。

がりがあり、いみじくも生物学者 J.B.S.Haldane が言うように、そこは我々が想像できるようなことより遥かに奇妙なもので満ち満ちているに違いないと注意している（Haldane が何者か知らない。文脈上、どうしても調べて置かなければならないのだが）。標題のブルカというのはモスリムの女性が身にまとう頭からすっぽりと裾まで覆う黒衣で丁度目の位置の辺りに横に数センチの切れ目が入れてあるものである。モスリムの女性抑圧の象徴ともいうべきものであって、まことに怪しからぬと Dawkins は言うのだが、翻って、われわれが外界を認識するのは、丁度ブルカの細い切れ目から覗き見ると同様で、ほんの僅かな範囲しか垣間見ることができないのだ、と言う。そのような狭隘な知見に基づいて偏見に満ちた行動をしていることを自覚しようではないか、というわけである。この知覚の範囲外を多少とも探ろうとすると

Outside this range even our imagination is handicapped, and we need the help of instruments and of mathematics – which, fortunately, we can learn to deploy (p.407).

ということになる。この後、さまざまな生物種の例を引きながら、文末のパラグラフは、

How should we interpret Haldane's 'queerer than we can suppose' ? Queerer than can, in principle, be supposed ? Or just queerer than we can suppose, given the limitations of our brains' evolutionary apprenticeship in Middle World ? Could we, by training and practice, emancipate ourselves from Middle World, tear off our black burka, and achieve some sort of intuitive – as well as just mathematical – understanding of the very small, the very large, and the very fast ? I genuinely don't know the answer, but I am thrilled to be alive at a time when humanity is pushing against the limits of understanding. Even better, we may eventually discover that there are no limits (pp.419-420).

である。

この Dawkins の著作を通じて、現代イギリスの知的エリートの、規範的な、価値観や信条を読み取ることができるであろう。イギリスというのは大したものである。

40. (07.11.02) ポルトガルという不思議な国がある。かつてスペインと世界制覇を競ったが、今日ではイベリア半島（そもそもイベリアとは情けない？）の片隅にひっそりと閉塞しているかのように見える。もちろん、かつての名残で、ポルトガル語は今日でもブラジルのような大国で用いられ、また、アンゴラやモザンビーク、マカオ、ゴアでも生き残っているに違いない。東チモールもそうであって、インドネシアとのごたごたの経緯も、旧オランダ領と旧ポルトガル領の宗教や言語に基づく困難があったに違いない。

ポルトガルと日本との関わりは、カトリックの宣教史と密着しており、当時のローマ教皇の裁定により、地球を半分に分け、西方をスペイン、東方をポルトガルに振り分け、カトリックの宣教についても、イエズス会はポルトガル、フランシスコ会はスペインと、いわば、縄張りが決められたことと関係している。考えるまでもなく随分勝手な話だが、人間と言うのは、「神」の権威を借りた振りをしてまでも、そういう行いをするものなのであろう。現に、この教皇の裁定は、ポルトガル自体がスペインの支配下に入り、その結果であろうか、フィリピンがスペインの勢力下に入り、また、フランシスコ会による日本への宣教師派遣など、言ってみれば、力関係でどうとでもなるような代物でもあったわけである。

ポルトガルは世界史上では日本とは格違いの大国である。今日では零落しているように見えるが、そう思うのは大間違いだと、わたくしは考える。むしろ、衰亡零落という先行きが見えている現代の日本にとっては、ポルトガルの有りようは、既述のように格違いではあっても、大変重要で参考になると（少なくとも）わたくしは思う。決して否定的に見ているのではない。ポルトガル人の知人は多いわけではないが、右往左往しない芯の強さのようなものが共通して認められ、その点に感心しているわけである。もっとも近代のポルトガルは、比較的最近まで独裁体制が続き、徴兵年限も長かった（何十年か前、サラザール体制下で、2年と聞いたように記憶している。4年(!)だったかも知れない。この話を聞いた頃の EEC 諸国の兵役や軍事教練の期間とは比較にならなかった。). 中南米の現況を見ても、スペインやポルトガルの文化には専制を招きやすい要素も秘められているのであろうか。

ところで、36 回の記事のコメントに Giovanni Nicolao について検索した旨、付記し、その際、下掲の Curvelo の記事を挙げた。改めて読んでみると、なかなか面白く、冒頭で、ポルトガルについていい加減なことを書いたのも、その感想ではある。一方、記事には、16 世紀末の日本周辺の事情にも触れられており、専門家には周知のことではあろうが、狩野永徳展で感じたささやかな疑点解消のヒントもあった。永徳の安土城の屏風絵は不明になって久しいが、東西交流の象徴ともいべき南蛮屏風や、さらに、Nicolao が長崎に開いたであろう西洋絵師養成所（36 回引用の Edgerten 教授の言う「日本版 Academy of St. Luke」）も言及されていた。マカオと長崎の往来は決して容易なものではなかったはずだが、イエズス会にとっては、ほぼ一体として扱われていたようでもある。

南蛮屏風はキリシタンの終焉期（1590 年代以降）に多数制作されたというが、作者名はほとんど伝わらず、ごくわずかが狩野内膳（1570-1616）らの制作と分かるだけという。狩野内膳の南蛮屏風には九州国立博物館に収められているものもあり、鬼原俊枝氏の丁寧な解説が

<http://www.nishinippon.co.jp/news/museum/special/050906.html>

に見られる。内膳の南蛮屏風では、神戸市立博物館にある重要文化財に指定

されたもの

<http://bunka.nii.ac.jp/SearchDetail.do?heritageId=82976>

が有名である。また、旧三田藩九鬼家の蔵品であったものがリスボンの国立古美術館にある。後者は、論文

Alexandra Curvelo: Nagasaki. An European artistic city in early modern Japan.

Bulletin of Portuguese/Japanese Studies, 2 (2001), pp. 23-35
(pdf)

<http://redalyc.uaemex.mx/redalyc/pdf/361/36100202.pdf>

に図版として掲げられている。狩野内膳の名が伝わっているのには、いろいろな事情があったであろうが、もともと、内膳は有力な画家であつたらしく、豊国祭礼図屏風

<http://bunka.nii.ac.jp/SearchDetail.do?heritageId=22904>

などが知られている。上掲の九州国立博物館の解説では、内膳は遠近法も学んだらしいというのだが、解説で指摘されている上掲の豊国祭礼図屏風を眺めても、画像が小さいせいか明らかではない。しかし、内膳が荒木村重の家臣（の子）であり、高山右近との連想で、キリシタンとは無縁ではなかったかも知れないという気はする。ただし、正統作図法による遠近法は緻密な計算を必要とし遠方を小さく描けばよいというものではないので、もし、遠近法が認められるというのなら、屏風絵の下書きに痕跡があるはずではある – 下書きが残っているかどうか。

散漫な記事になってしまった。今、唐津近辺に行ってみると、すでに7,80年昔のことではあるが、あの辺りに上海在住の欧米人の別荘がかなりあったことがわかる。かれらは恐らく上海長崎の航路を利用したのであろうが、西欧人の眼からは、九州北部から揚子江沿岸（＝長江下流域）までは一体として意識されていたのであろうか。16世紀末、17世紀初頭はどうだったのだろうか。秀吉の名護屋城も近くではあるが。

付記：「遠近法」をどう定義するかによるのだが、Alberti 以来の「正統作図法」は、南蛮屏風には見られないとのことを、さる専門家から伺った。Albrecht Duerer も、「正統作図法」（とその延長の技法の理論構造）を正確には理解できなかったとされるのだから、仮に、宣教師に画家が混じていたとしても、それが直ちに本邦に遠近法の伝来を意味するものではないだろうが、南欧のどのような知的世界が日本に伝わっていたのかは確認する必要は、依然としてあるだろう（平成22年7月18日）。

41. (07.11.10) 恐らく狩野永徳展の人混みで拾ってきた風邪が何とか抜けたところで、巻に出、天神の丸善で

町田宗鳳：人類は「宗教」に勝てるか ― 一神教文明の終焉

NHK ブックス（日本放送出版協会 2007）

ISBN978-4-14-091085-6 C1314

<http://www.nhk-book.co.jp/shop/main.jsp?trxID=0130&webCode=00910852007>

を見つけ、Dawkins の著書（取り敢えず、39 回参照）とも関連すると思い、購入してきた。ただし、やや逡巡した上であった。宗教を論ずる未知の著者とは慎重に接するに如くはないからである。結論から言えば、わたくしは判断に苦しんでいる。部分的には良書に分類できるところもあるが、全体としては、特殊な立場を表明する宗教書であって一般性は薄いと言える（例えば、題材は内外の事例から選んであるようだが、一方、本書の内容は、それを英語を含む外国語で書き表すことに耐えられるのかどうかは検討に値しよう）。実際、宗教書と解して、初めて、本書における概念規定の曖昧さや論理の混乱、事実認定の不備、引用や注の不足などを、何とか許容できるかも知れないのである。つまり、本書は、Dawkins の著書の場合のように、自然哲学者特有の厳格な概念規定に基づき、引用や注釈を多用して、論争を前提に慎重かつ周到に書かれているわけではない。少なくとも、本書の標題は適切ではなく、端的に「無神教の勧め」とある方がよかったであろう。

そんなわけで、本書について雑多な感想は精粗いろいろとあるのだが、特に意見として記して置くべきことがあるか、また、本ブログの本来の趣旨である「日本文明の時空感覚」の抽出に関する明白な示唆の有無について報告ができるかどうかとなると迷わざるを得ない。とはいえ、Dawkins が、(想定する読者も含め) 知識も関心も少ないとして除外した、仏教に基盤を置く立場からの宗教論ではある。概略ではあるが、一応私見を述べておこう。

まず、著者であるが、経歴は複雑とも言えるが、宗教家としては偉い人らしい。宗教的体験というか回心の程度も深そうである。当然、わたくしには、本書の記述はある水準から不可知の世界に入ってしまった、そんなものだろうと思われるものもある一方で、何とも判断のしようもないというものもある。そう言えば、随分昔の経験だが、亡父の勧めで、

鈴木大拙：「日本的靈性」（岩波文庫）

を読んだ（正確には、読もうとした）ことがある。靈的体験あるいは宗教的境地の部分については、全く歯が立たなかった。靈的な「位」というものがあるのか、とつくづく思ったのだが、今も、「位」は下がりこそすれ上がったはずはないから、やはり途方にくれるだろう。町田氏の書物では、この本を直接引用しているわけではないようだが、「妙好人」に触れている箇所（p.168）がある。類似の話題は「日本的靈性」にもあったと思うが、この境地が全く想像もできなかつたためか強く印象に残っている。ところが、本書の著者はサービス精神に溢れているためか、卑近とも言える事例を引きながら、このような宗教的境地の説明に務めるのである。しかし、そういうところが往々

にして（わたくしにもわかる）不正確な解釈に基づいており、困惑が増すわけでもある。

さて、本書は6章から成り、他に、プロローグ、あとがき、参考文献がある。索引はない。しかし、目次は、各章の概要を伴ってはいる。章の標題は、第一章（エルサレムは「神の死に場所」か）、第二章（世界最強の宗教は「アメリカ教」である）、第三章（多神教的コスモロジーの復活）、第四章（無神教的コスモロジーの時代へ）、第五章（〈愛〉を妨げているのは誰なのか）、第六章（ヒロシマはキリストである）である。

プロローグは著者の宗教的遍歴を中心とした自己紹介である。第一章は、ヤヴエ（あるいは、アッラー、つまり、Dawkinsの言うアブラハムの神）の宗教の長短の概説であり、著者が望ましいとする「扉を叩く者にのみ開かれればよい」という、宗教と人との関わり方のわけが示される。事例も豊富で、体験の裏づけもあって、実に、印象的な記述に成功している。中でも、紹介されているエルサレムの宗教事情、特に、キリスト教諸派の対立抗争など、まことに驚くしかない。長に関する記述はさておいて、短については、Dawkinsも挙げているが、この著者の引く例はより衝撃的である。

第二章は内容的に問題が多い。結論を容認する場合でも、著者の主張にそのまま沿ってというわけには行かないというべきだろう。基本的に気になるところは、語義が明確に規定されていないこと、事実認定に疑義があること、特に、注がないことだが、一方で、主張そのものは、それでも、いかにももっともらしく、また、われわれの日頃の感情とも合致する点が多い。要するに、この章は内容的に筆が滑りやすいところであり、気を付けて読まなければならない。この章からの直接の引用（孫引き）は避けた方がよいであろう。章の後半は、ギリシア語のビオスあるいはゾエを引き、道元や竜樹などの仏典を引いて、「個体的生命」と「永遠につながる〈いのち〉」との相違に言及している、これは改めて第三章で一神教的コスモロジーと多神教的コスモロジーの文脈で論じられる。

第三章では、「アメリカ教」に具現される「一神教的コスモロジー」に対比され、その不足を補うものとして、「多神教的コスモロジー」が論じられる。著者の考えに従えば、前者は父性原理・男性原理・垂直原理であり、後者は、母性原理・女性原理・横断原理に基盤を置くものと整理され、また、近代文明の困難は一神教的コスモロジーの限界に他ならないということになる。近世の世界史は、一神教的コスモロジーによる多神教的コスモロジーの破壊と征服であるが、一神教の世界にも基層にあった多神教の名残はあり、近代文明の矛盾の解決には多神教的コスモロジーの復活が不可欠だと著者は言っているようである。近代日本の困難も、本来立脚している多神教的コスモロジーを捨てて無理に一神教的コスモロジーに添おうとしたからだだと著者は指摘している。

第四章、第五章は、宗教的内容である。第四章は、「無神教」という「神」

を不用とする宗教的境地の説明であり、グノーシス派やスーフィなどの神秘主義や華嚴經の四種法界を引き、また、俳句、和歌、墨絵、さらには、レノンのイマジンなどを挙げながら、説明を試みている。まさに、霊的な「位」が要求されるところで、わたくしには、こんなものかな、としか言いようがない（町田氏は、「霊的な「位」」という用語は使っていない）。第五章は、「無神教」とは〈愛〉の体験である、と言い、潜水家、登山家の神秘体験を〈愛〉の体験と解釈される例として挙げる。また、ノーベル平和賞受賞者の行為には〈愛〉と解することができるものがあることを、マザー・テレサやユヌスの場合を挙げて説明している。鍵語は「自己との共存」、「自分をありのままに受け入れる」、「祈りの力」といったところであろうか。分析的な把握ができるような説明は与えられておらず、こういうものを一瞬のうちに把握できるかどうか、霊的な「位」の有無を示すものであろう。

第六章は、第四章、第五章に比べると、平明である。基本的には、標題の通りと言いたい、広島や長崎の人々が贖うべき「原罪」とは誰のものなのか考えると、何というか、かれらが、まさに、高い霊的な境地にあるべきこととしか解釈のしようがない。もともと、それなりの高みにあったとしても、何か変である。第六章の残りは、さらに、素朴にかつ散漫に話が拡散する。説明が適切で同感できる場所もあれば、事例の解釈に疑義を覚える場所もあり、要するに、まだらである。

さて、Dawkins の主張の場合、理想とする人の生き方、信条、規範性があり、その実現のためには「神」は不用である、というのが、根本である。そして、「神」が放棄できるということを知ることが、宗教の弊害の解消のための切り札でもある、というように纏められるだろう。この著者の場合、理想とする人の生き方、信条、規範性というものが浮かび上がってこない。「無神教」という宗教的境地にたどり着くところから、すべてが始まるのである。既成の宗教の弊害の指摘は、Dawkins のものと似ているが、敢えて、著者の用語に従えば、Dawkins の主張は「個体的生命」のものであり、著者の立場は「永遠につながる〈いのち〉」に近いのだということであろうか。ただ、本書の論述は感覚的に過ぎ、何らかのしっかりした議論のためには、この本の直接的な引用はできないと考える。

4 2. (07.11.29) もう二週間近い前になるが、天神徘徊の折、本屋に立ち寄り、

鈴木大拙：大雪 禅を語る

—世界を感動させた三つの英語講演—

(重松宗育：監修・訳)

(アートデイズ 2006)

ISBN4-86119-066-5

を見つけ、英語講演のCD付きというので買って帰ってきた。前回（41回）の記事の町田宗鳳氏の書物に触発されたのかも知れない。実は、英語講演と

いうことで、易しいのではないか、と思ったこともある。実際、浅いといえば浅いのかも知れないが、基本的には仏教の素養がほとんどない聴衆を前提にしての講演であるためか、わたくしにとっても取り付きやすいところがある。少なくとも、前回に触れた「日本的靈性」よりは抵抗が少ない。実は、本屋に立ち寄ったのも「日本的靈性」を探すためであった（以前、持ってはいたが、イラン人の留学生に、仏教のよい解説だが持って行くかと言ったら、欲しいというので進呈してしまった。正直のところ、彼の日本語力で読解できるかどうかは疑問ではあったが）。たまたま上記の書物を見つけ、しかもCD付きで、文字通り、大拙師の警咳に接することができるというのである。文庫本よりは遙かに値は張るが、こっちを買って帰ってきた。

講演は三つ収められている：

1. On Zen Philosophy (1958年3月10日 Wesley College)
2. Christianity and Buddhism (1958年3月9日 American Buddhist Academy)
3. Shin and Zen (1958年3月16日 American Buddhist Academy)

これらに、重松宗育師による各講演の翻訳と大拙師の英語講演活動の意義を含めた解説がある。さらに、大拙師の年譜が付されている。CDは第一講演のみである。実は、大拙師は歴大な英語講演を残されたようで、上記三講演はそのごく一部に過ぎないという。特に、American Buddhist Academyのものは連続講演であったようであり、収められてはいない講演の内容に言及している箇所があって、こういうところは注が欲しかった。

形式上のことでは、校正漏れであろうが、解説やあとがきの文中に若干の変換ミスや語法の乱れがあった。気になったのは、むしろ、英文の体裁である。使用されている活字体がこれでよかったのだろうか。また、重要な語彙をゴシックで組んであったが、斜体の方がよかったのではないか。総じて、英文のページの与える印象は、欧文文献としては、違和感を覚えるものであった。行送りの際の単語の分綴に問題があるものもあったが、論外と言うべきであろう。

当節、フォント類は計算機上で生成できるであろう。そして、組版も、こうして生成したフォントを忠実に再現して行えるはずである。日本で印刷される欧文文書は多かれ少なかれ選択しているフォントに問題があるのではないかと、ふと思った。そう言えば、かつての勤務先の紀要再編の際、当時の編集長の判断で、英文や組版を英国の印刷屋に任せたことがあり、その結果、体裁が一変したことを思い出す。まさに英文の文献であるという印象を真っ先に与えるようになったのである。この印象がなければ（西欧圏の読者には）眼を通そうかとは思ってもらえないのだから、これは実に重要なことであった。本場の英文印刷の長い伝統は決して伊達ではないわけである。

実は、これらの英文講演の部分は、帰省のJAL機内で眺めていたので、改

めてフォントが気になったのかも知れない。座席前のビデオ・スクリーンには航路図が表示されるが、地名の日本字（漢字）のフォントがいつも気になっていた。大きすぎるし、字形のバランスが悪いし、現代日本語ではもはや使わない用字もあっておかしいのである。新聞や週刊誌などの紙媒体はもちろん、広告やゲーム類のビデオ媒体の画面でももっと明瞭に判読しやすいフォントが開発され利用されているのに、と思っていた。これは、恐らく日本国外の漢字圏への外注のためではないのか、フォントの指定を怠ったか、あるいは、関係業者の担当者が深く考えなかったためではないかと思いがたつた。日本の印刷業者は日本語のフォントについては極めて発達した感覚を備えているに違いないが、欧文フォントとなると十分ではない場合も多いだろう。漢字圏の印刷業者も自国で使われるフォントについては優れたセンスは発揮できているに違いないが、日本語での漢字フォントが別物という意識はないだろう。日本側の担当者もグラフィック・デザインの重要性を全く認識していないということは十分にありうるだろうし、また、航路図についても本質的に重視していないということはあるだろう。さればこそ、こういうところで一工夫を考えるより、こんなものだろうということに済ませているかも知れない。その背景には、乗客だってそうであるかも知れないのだし、第一、日本文の読めない乗客もいるだろうという考えがあるのかも知れない。しかし、意味がとれなければなおさらデザインが優れていることが要求されるのである。結論としては、改善の余地があるのだから改善すべきだということだが、そういう思いが、上掲書物の英文部分を見ながら湧き上がってきた。

さて、肝腎の書物の内容であるが、靈的な「位」の低い身（41回記事参照）としては、余り確かなことは言えない。短い文言のうちに相当に内容が籠められていることはわかる。斜め読み水準でのわたくしの要約はほとんど意味はないのだが、一応記録しておく。

講演は、いずれも大拙師 88 歳のときの英語のものであるが、CD 化されている第一講演を聴く限り、明晰な発音で、術語として特殊な耳慣れないものがあるのは当然ではあるが、総じて、非常にわかりやすい。本書所収の英文のものと比較しながら聴いていると、確かに若干異同があるが、文法的誤りとも思われないうところもあったので、編者には変更部分と理由を注記して欲しかったところではある。第一講演では、大乘および上座部（小乗）仏教の違い、釈迦の出家の経緯、悟りし者としての釈迦、両仏教の救済の意義の相違、羅漢、菩薩、禅の概略、慧能、などを説き、そして、禅の本質を言葉で説明する試みがなされる。鍵語は、right seeing（正見）らしいが、suchness あるいは is-ness（ありのまま）という、原始仏教から、ある意味で、禅にも通ずる事物事象への姿勢が説明されている（らしい）。

第二講演は、キリスト教を仏教を含む他宗教との関係で相対化して理解する話のようである。大拙師の説くような形でキリスト教が終始して来ていれば、Dawkins が問題視しているような殺伐とした事例も稀であったろう。ま

た、大拙師は、と言うよりも、仏教の立場では、創造神話は形式的なものに過ぎないようで、もっぱら生の救済あるいは覚醒に関心が集中しているようである。仏教とキリスト教では生の把握の仕方が違い、当然、生の葛藤の解決の仕方も違うわけだが、特に、決定的な差異は、キリストの磔刑の評価に見られる。仏教の立場では、磔刑そのものが、衆生済度、苦悩の解脱として即復活と解されるのであり、三日後に改めて肉体として復活するには及ばなかったというのである。大拙師は、キリスト教のうちのマリア信仰を高く評価している。マリア信仰は、キリスト教に女性原理を加えるものであり、キリスト教固有の男性原理を補うものであると指摘している。これは、まさに、町田氏の指摘（41回記事参照）にあることである。また、日仏学館の美術史の講座（36回記事参照）で学んだことであるが、大きなマントを民衆の上に広げている聖母マリアを描いた絵画も多数ある。大拙師のこの講演は、極めて明晰で、キリスト教に対する見方も過激なようには見えない。要するに、suchness, is-ness の精神でキリスト教を眺めているので、改宗や宣教というわけではないということであろう。

第三講演は、禅宗と浄土真宗の話である。禅宗は直観力、智慧を重んじ、真宗やキリスト教は情緒をより重んじると分析されている。この講演は非常に難解だが、面白く、いろいろと考えさせる。「わたくし」とは何か、「生きる」とはどういうことか、「本願」(hongan) というアイデア、など。そして、凄いいことが書いてある：

When this hongan takes form, it becomes all kinds of things. If I Buddhistically explain Christianity, Christ is the personification of this hongan, and Amitabha in Buddhism corresponds to Christ and God. Amitabha is the personification of this hongan, this primitive power. ... (p.80. 訳：pp.74-75)

Amitabha は阿弥陀である。

この講演は、すでに半世紀前のものになった。大拙師はアメリカの知識人にもそれなりの影響を及ぼしたと聞いており、実際、重松師の解説にもいくつか事例が引かれている。しかし、その実態はごく表層に留まっているのではないか。果たして、アメリカの主流に仏教はどれほど受け入れられたのだろうか。仏教的世界観への理解というようなものが多少とも深まったのであろうか。アメリカの理想というようなものへ多少とも影響が及ぶというようなことが将来ありうるのであろうか。

それはそれとして、Dawkins（例えば、39回の記事参照）が仏教を考察の対象から外したのは、むしろ賢明であったというべきだったかな、とも思う。いずれにせよ、第三講演の最後の方の大拙師の述懐が、アブラハムの神の民に理解できるようであれば、まあ、よかったのであるが¹⁰。

¹⁰Obama アメリカ合衆国第44代大統領の Inaugural Address（西暦2009年1月20日）の中に、We are a nation of Christians and Muslims, Jews and Hindus, and nonbelievers.

ところで、本ブログの本来の趣旨から言えば、suchness とか is-ness は、加藤周一氏指摘の「今=ここ」という、日本文明の特徴とも言える現実認識と通ずるところがある（24 回記事参照）。禅の影響でこういう世界観が強まったとか行動哲学として整理されたというようなことがあったと言えるのだろうか。何らかの意見を構築するには学識が不可欠なのだろうが、多少のヒントを含んでいたかも知れない加藤氏の本は既にブックオフで処分してしまった。

4 3. (07.12.25) 南蛮云々と言えば、随分前のことになるが、

井上章一：南蛮幻想 – ユリシーズ伝説と安土城
文藝春秋（1998）
ISBN4-16-35340-6

を購入し、そのまま眼も通さずに本棚の隅に 10 年近く置きっぱなしにしていた。たまたま出てきたのだが、著者が今でもこの書物で述べている説を維持しているかどうかは不明である。しかし、素人にとり、時間の経過は余り問題にならない。まして、わたくしはナイーヴ（プロフィール参照）である。そんなわけで遅ればせながら読んでみた。

本書は 5 章立てである。第 1 章、第 2 章は、天守閣の起源について論じている。主役は、信長の安土城である。第 3 章は、織部灯籠にまつわるキリシタン伝説、第 4 章、第 5 章は、百合若伝説について論じている。いずれも標題にある「南蛮幻想」ともいうべき、昔からの諸説がある話である。「あとがき」で著者は、この論考の狙いを述べている。これらの話題について正面から著者がもっとも適切と考える見解、確かに、そういう見解はあったには違わず、また、それが考察を導いてきたことも疑いようはないものの、それらを緻密に展開するという姿勢を著者はとろうとしたわけではないようで、むしろ、先人のさまざまな見解をいろいろと挙げて、それらがある種の時代風潮に即したものであったということの観察記を書くことにしたようである。2 段組 450 ページ余りの大部の書であるが、索引はない。各章に大量の注釈が付されてはいるが、執筆の動機や体裁からも、本書を学術書と考えるのは適当ではないだろう。

ところで、大概の和書に索引がないということには日本人の時空認識の習慣が反映していると見ることができるだろう（ただし、本ブログの本来の主役でもある Ivins のエッセイにも索引はない。一方、同じ著者の

Prints and visual communication,
MIT Press, 1953

We are shaped by every language and culture, drawn from every end of this Earth. という一節がある。宗教信者の配列順も興味深い。Bhuddists がいないことが気になった。Hindus の中に含まれているわけではないだろうし、まさか、nonbelievers に包括されているわけでもあるまい。また、Inaugural Address は国内向けとは言いつつ世界を存分に意識して構成されている。作文者の問題かも知れないが、Obama 氏自身の意識を映し出すものかも知れない。（日本の）仏教団体はアメリカでこれまでどんな活動をしてきたのだろうか。— そういう印象を受けた。

には索引がある。ちなみに、わたくしの手元にあるこの本はシンシナティ美術館図書室が不用本として古本屋に売り払ったものであった。シンシナティについては16回記事参照)。

27回の記事で「索引のない本は読むな」という「工学部の教え」の1項目を紹介した。確かに、書物は的確な知識の収蔵庫と考えられる。当然、検索の便の保障は不可欠であり、したがって、索引が整備されていなければならないのである。特に、重要なものがある事項についての概念規定、つまり、定義に相当するものであり、その箇所は必要に応じてすぐに見つけられなければならない。科学技術書は標準的な参照文献として辞書のような読み方もするので、この意味での索引は必須ではあるが、上掲の書物のような場合でも決して時間の経過とページのめくり方が並行するように読むわけではない。実際、この書物では諸説の比較が重要な論点なのだから、それぞれの説の概要が示されている箇所を再読する必要性が生ずることもあり、そこにすぐに戻れないと困るわけである。電子メディア化された書物なら索引は不要かという点、これも結構難しい。検索にノイズが入ることは容易に予想できるので、やはり、この場合でも最初から適切な索引を作っておくべきであろう。なぜ、一般の日本人は、索引がなくても平気なのか、そこが問題である。

脱線続きだが、索引が付いている場合でも日本(人)の習慣の特異性を覚えるのは、地図帳の索引の場合である。相対座標を用いるか、絶対座標を用いるかということであるが、日本の場合、索引対象の地名は、索引では、通例、地図帳の該当ページと各ページに割り当てられている格子の記号で指定する。つまり、地図帳ごとの相対座標である。他方、欧米の(しっかりした)地図帳の場合、地名の経度緯度が索引に載せられる。相対座標が併記される場合もあるが、基本は、絶対座標である。何か出版上の規定か基準があるのだろうか。いずれにせよ、世界観に大きな違いを齎す効果があることは明らかであろう。

国内のことでともそうである。例えば、福岡市と高知市のどちらが北に位置しているのか、それは往々にしてデフォルメされている日本地図ではなかなか判定できない。北緯の比較に意識が及ばなければ、わからないことである。内外の都市の位置関係となると、明白に、経度緯度の情報が必要になる。最近声高に「地球規模」云々と言い立てているけれども、その前提となる知的条件は旧態依然というか局所的思考に適応したもののままなのである。

ところで、都市の地図帳の場合は、用途も、その都市に関わることに限定されているので、絶対座標にこだわる理由は希薄である。ただ、位置指定が道路と区画のいずれを基本にするかは、利便性の観点から無視のできない要素であろう。日本の場合、行政的には区画を中心に管理されている上、それぞれの道路に公的な共通原則による名称が付されているわけではない。名称が付されている場合も、管理者による原則である。したがって、例えば、巻末に主要な施設の位置索引を設けても、施設固有の情報である、区名、道路名、

番地を与えれば十分というわけには行かない。丁目地番の指定では、なかなかたどり付けられないことは日頃経験することでもある。なぜ、こういうことになっているのか、それを知るのが、当ブログのそもそもの動機ではあった。

さて、井上氏の「南蛮幻想」に戻ろう。余分なことを論じてしまった上に、実は、まだ、最初の二章しか目を通していないので、少なくとも今回の記事では余りきちんとは書いておくことはできない。

なお、これらについては、本書の出版時点では存在しなかった書物がある（ただし、井上氏は早期の原稿を見ているかも知れない）：

NHK スペシャル「安土城」プロジェクト・辻 泰明：
信長の夢「安土城」発掘
日本放送出版協会（2001）

滋賀県安土城郭調査研究所（編集）：
図説安土城を掘る－発掘調査15年の軌跡（大型本）
サンライズ出版（2004）

滋賀県安土城郭調査研究所編著：
安土城・信長の夢
サンライズ出版（2004）

最初の一冊は、NHKのドキュメンタリー（NHK スペシャル）として映像化されたものの書籍版であるという。第二の書物は未見だが、最後のものは本屋で見た。最初の本は持っていたが、ブックオフであったと思うが、処分してしまった。CGなどを見て、やや解釈が過ぎるのではないか、娯楽映像と考えるのならともかく、解釈に至る過程をもっと丁寧に記録しておくべきではないかと思ったこともある。「南蛮幻想」も似た運命を辿るはずなのだが、場合によってはブックオフより高値が期待できるかも知れず、古本屋を選択するためには一応は読んでみなければならないわけである。

というわけで、「南蛮幻想」の最初の二章を、これら書物と比較しつつ読むことはできないが、それは余り問題にはなるまい。と言うのは、いずれの内容も、わたくしの本来の関心から若干ずれているのである。端的に言えば、いずれも「城」とは何かについての定義がない（ただし、言うまでもなく、安土城の発掘記録では不用である）。これらの議論では「安土城」は戦闘に備えての城砦ではなかったということが暗黙裡に前提とされているようであるが、かと言って、それが「神殿」あるいは「寺院」であると言い切っているわけでもない。しかし、「安土城」に「神殿」や「寺院」固有の内陣思想のようなものを認めようとするならば、一体、「安土城」は何なのか。そもそもどういう概念領域に属するものなのか、それが明確にされてはいない。

「城」というものが、南蛮、明、あるいは李氏朝鮮の影響によるものであったにせよ、また、純国内的に発達したものであったにせよ、そもそもの比較

の対象や基準が漠としていては、議論にはなるまい。確かに、今日残っている、あるいは、信頼のできる記録にある「城」は数が限られているし、さらに、一種の様式が共通にあるように見える。大名がすべて「城」を作れたわけではないし、また、話題の「天守閣」のない「城」もあるが、しかし、われわれは「城」というと大体こんなものだろうという姿を思い浮かべることができる。ただし、われわれの「城」に対する考えにどんな限定や留保を置かなければならないのか、例えば、16世紀後半の基本的なアイデアとわれわれのものが整合しているかどうかについては、別の話である。まして、海外の「城」となると一般にはほとんど知識も感覚もないということになるだろう。

そうだとすると、影響があるかどうかを論ずる前に整理しておかなければならないことが多々あるはずである。実際、城砦のような世俗的な建築に、例えば、キリシタンの影響があったとすれば、他の世俗的な建造物にも当然あったであろうと考えるのはおかしくはないことではないだろう。さらに、体系や思想としての影響と技術的な細部や工夫という形での影響は分けて考えなければならないであろう。建築面でも、織豊期の海外交流によるものが技術的な細部には残ってはいないということは言えないのではないだろうか。

井上氏は体系や思想という面に関心を集中させておられるようである。しかし、こういう話は、まさに、井上氏が力説されるように、よほど緻密に概念規定がなされ論点が整理されていない限り、論議を行うときの流行や風潮に左右されてしまう面が強そうである。そもそも概念規定や論点整理が疑義なくできるような話なら、こういうエッセイ自体が成り立たないのだろうが、そこまで言い切ってしまうと非常に空しい。

また、井上氏のご紹介の議論は、江戸期のものはあるけれど、実際に「城」が建築された時期から見れば比較的后年のものであり、そういう意味では、建築時の臨場感を伝えてはいないかも知れない。井上氏が行うべきことは、実は、こういう臨場感のある場を再現することであり、氏独自の観点から「指図」の詳細な検討を、他の「城」や海外の「城砦」の図面と比較しつつ行い、その上で「学説史」というべきものを論ずることではなかったかと思われる。

44. (08.01.05) 井上章一氏の書物は持たずに年末の帰省旅行に出たが、途中でたまたま

James T. Enns: The thinking eye, the seeing brain : explorations
in visual cognition,

W. W. Norton and Co., 2004 ISBN 0-393-97721-8(pbk)

という本を見る機会があった。ペーパーバック版で、本文400ページ余り、他に、文献、索引、補注、図版などが付いた大部の書物であるが、大学の学部課程の教科書として編まれたものである。

引用文献を見た限りでは、Ivinsの書物は引用されておらず、また、かつ

て、わたくしが（例えば、ウェーブレットの理論などを通じて）存在を知り、ペーパーバック版を当時の勤務先の大学の研究科の蔵書として購入した

David Marr: Vision: A computational investigation into
the human representation and processing of visual information
W.H.Freeman and Co., 1982

も文献表にも索引にもない。しかし、索引には、遠近法はあり、Alberti の透視図法が論じられている。ちなみに、David Marr をネットで検索してみたら、記事はかなりあり、本ブログの趣旨とも関わりがありそうな、しかも、遥かに高度と思われる記事も見つかったが、ここでは、まあそういうことだけである。

さて、上掲の Enns の書物、第 1 章 What is vision science? は一応目を通した。vision science は決して一筋縄では扱えないことはわかるが、18 ページの What is vision for? という節の冒頭で

We have now reviewed what vision is not. The recurring themes of this book will be that vision is constructed (as opposed to faithful), that it is active (rather than passive), that seeing is based in the brain (rather than in the eye), and that thought is intimately linked to vision (rather than standing alone). But none of these themes tells us directly what vision is for. ...

とある。この部分を一言で表すのは、前後するが、視覚に伴う illusion を論じて、結局、illusion と扱うのは適当ではない、実は、

... rather than continuing to use the term illusion to describe vision, we will find more helpful to think about vision as a "construction project".

という著者の主張であろう（6 ページ）。

第 1 章は、書物全体の概略と、さらに、北米の大学の学部教科書として、扱われている話題の特徴、どういう専門分野に進むことができるか、さらに、それぞれの専門家になるためにはどのような資格が要り、また、どのような訓練を受けなければならないか、及び、どんな職能団体があるのか、などの解説が詳しい。実際、23 ページに

[...] one of the purposes of this book is to convince you that further study (perhaps even a career) in vision science is worthwhile

とある。北米の大学は基本的に一般教養に力を入れており、専門性を高めるためには大学院課程が必要とされるが、しかも、その選択は学部課程と直結していない。特に、この本で扱っている「vision science 視覚学」のような総

合性の高さが要求される分野には、このような体制が適しているようである（ここでの趣旨ではないが、北米の大学と日本の大学の構造の違いは承知し整理しておかなければならないだろうし、事実、この違いを曖昧にしたままでは、国際比較を論じても意味はないだろう）。

第1章の紹介記事に拠ると、この本は、学部課程の書物とは言え、専門性があり、また、Ivins の書物から60年経っている。Ivins が homemade experiments (第15回記事参照)によって示した視覚の特性については、脳活動との対応を伴う形で、本書の残りの章に述べられているようである。本ブログの課題は、この本で述べられているような最近の知見で Ivins の観察を読み直したとき、なお、Ivins の洞察が生き残るかの検証である。

他方、Ivins の重要なテーマは接触感覚と視覚とが空間認識に引き起こす差異であった。接触感覚に関連しても、視覚の場合に相当する最近までの研究の蓄積があるだろうから、それらを扱っている、わかりやすい文献を見つけなければならない。

4 2008

4.4. (08.01.05) 井上章一氏の書物は持たずに年末の帰省旅行に出たが、途中でたまたま

James T. Enns: The thinking eye, the seeing brain :
explorations in visual cognition,
W. W. Norton and Co., 2004
ISBN 0-393-97721-8(pbk)

という本を見る機会があった。ペーパーバック版で、本文400ページ余り、他に、文献、索引、補注、図版などが付いた大部の書物であるが、大学の学部課程の教科書として編まれたものである。

引用文献を見た限りでは、Ivins の書物は引用されておらず、また、かつて、わたくしが（例えば、ウェーブレットの理論などを通じて）存在を知り、ペーパーバック版を当時の勤務先の大学の研究科の蔵書として購入した

David Marr:
Vision:
A computational investigation into the human representation and processing of visual information
W.H.Freeman and Co., 1982

も文献表にも索引にもない。しかし、索引には、遠近法はあり、Alberti の透視図法が論じられている。ちなみに、David Marr をネットで検索してみたら、記事はかなりあり、本ブログの趣旨とも関わりのありそうな、しかも、

遙かに高度と思われる記事も見つかったが、ここでは、まあそういうことだけである。

さて、上掲の Enns の書物、第 1 章 What is vision science ? は一応目を通した。vision science は決して一筋縄では扱えないことはわかるが、18 ページの What is vision for ? という節の冒頭で

We have now reviewed what vision is not. The recurring themes of this book will be that vision is constructed (as opposed to faithful), that it is active (rather than passive), that seeing is based in the brain (rather than in the eye), and that thought is intimately linked to vision (rather than standing alone). But none of these themes tells us directly what vision is for. ...

とある。この部分を一言で表すのは、前後するが、視覚に伴う illusion を論じて、結局、illusion と扱うのは適当ではない、実は、

... rather than continuing to use the term illusion to describe vision, we will find more helpful to think about vision as a "construction project".

という著者の主張であろう (6 ページ)。

第 1 章は、書物全体の概略と、さらに、北米の大学の学部教科書として、扱われている話題の特徴、どういう専門分野に進むことができるか、さらに、それぞれの専門家になるためにはどのような資格が要り、また、どのような訓練を受けなければならないか、及び、どんな職能団体があるのか、などの解説が詳しい。実際、23 ページに

[...] one of the purposes of this book is to convince you that further study (perhaps even a career) in vision science is worthwhile

とある。北米の大学は基本的に一般教養に力を入れており、専門性を高めるためには大学院課程が必要とされるが、しかも、その選択は学部課程と直結していない。特に、この本で扱っている「vision science 視覚学」のような総合性の高さが要求される分野には、このような体制が適しているようである (ここでの趣旨ではないが、北米の大学と日本の大学の構造の違いは承知し整理しておかなければならないだろうし、事実、この違いを曖昧にしたままでは、国際比較を論じても意味はないだろう)。

第 1 章の紹介記事に拠ると、この本は、学部課程の書物とは言え、専門性はあり、また、Ivins の書物から 60 年経っている。Ivins が homemade experiments (第 15 回記事参照) によって示した視覚の特性については、脳活動との対応を伴う形で、本書の残りの章に述べられているようである。本ブログの課題

は、この本で述べられているような最近の知見で Ivins の観察を読み直したとき、なお、Ivins の洞察が生き残るかの検証である。

他方、Ivins の重要なテーマは接触感覚と視覚とが空間認識に引き起こす差異であった。接触感覚に関連しても、視覚の場合に相当する最近までの研究の蓄積があるだろうから、それらを扱っている、わかりやすい文献を見つけなければならない。

45. (08.01.06) 井上章一氏の「南蛮幻想」(第43回記事参照)の続きの章であるが、人間ドックの検査の待ち時間に読み始め、結局、その日のうちに目を通し終えた。第三章は織部灯籠、第四、第五章は、百合若伝説とユリシーズを論じたものである(なお、改めて、「あとがき」を見ると、わたくしが43回の記事で、まあ、いちやもんをつけたことに対して、ちゃんと予防線が張ってあった。頭のいい人はこれだから…)。

さて、第三章だが、著者も手を付けてみて困惑したに違いない。内容に直接的なコメントをすることはむずかしい。しかし、章末にある

鎖国と禁教が、どのようなキリシタン・イメージを、もたらしたのか。邪教観にもとづくキリシタン幻想は、どういったかたちで展開されたのか。それをしらべれば、旧幕時代の想像力をめぐる、人類学的な研究も可能になるだろう。この観点が、軽視されてきたことを、ざんねんに思うゆえんである。

という一節は、恐らく、問題提起として、本質的に違いない。これは、本書の論述を通じて痛感されたことであろうし、井上氏がその直後に述べておられるのとは違う意味かも知れないが、まさに、この指摘にこそ本書の価値であろう。本書刊行後十年を経ており、井上氏自身の研究がすでに発表されているのではないかと思う。この話題は改めて論ずるに価しよう。

第三章に関連しては、京大考古学教室のキリシタン墓碑の発掘の話が、先年、京大博物館で現物の展示を見ただけに、興味深かった。また、新村出博士は、第四、第五章でも、いわば、隠れた主役の一人のような感があるが、この方は、何と言うか、「食えない爺」だなど思ったことがあり、川端康成の『古都』を巡る逸話は面白かった。新村博士を「食えない爺」呼ばわりするのは、賞賛の辞である。実際、中型日本語辞書『広辞苑』には、新村博士の初版時の長文の編者の詞が収められているが、そこでは、初版の刊行時期が「現代かなづかい」の導入期と重なった事情もあり、正書法の安定についての言及かたがた、「現代かなづかい」で『広辞苑』を編纂していることについての釈明が述べられている¹¹。わたくしが(不遜にも)感服したのは、促音の「っ」

¹¹またもや、みっともないことに、新村博士の「広辞苑」序文について訂正が要るようである。第6版が天神の丸善に山積みになっており、先ほど、序文を立ち読みしてきた。「ある」を「居る」、「やうに」を「様に」と書いてあったと思われる痕跡はなかった。その上、「広辞苑」初版は昭和30年であった。しかし、促音の「っ」を除いて「現代かなづかい」固有の表現と認められるところはなかったから、全体的な印象が間違っていたわけではない(「広辞苑」の前身という「辞苑」の序文かも知れないが、「辞苑」を見る機会があったのだろうか)。第6版では、初

を除き、文中に「現代かなづかい」と判断できる箇所がなかったことである（例えば、字音語を多用したり、「いる」などは「居る」などと表して「居る様に」）。想像であるが、新村博士は、内心では「現代かなづかい」を支持してはおられなかったのであろう。恐らく、岩波書店編集部に渡された原稿では「っ」の部分も「つ」と書かれており、「歴史的仮名遣」と判断されるべきものではなかったのではないだろうか。皮肉というか、しかし、『広辞苑』が「現代かなづかい」の定着に果たした役割は極めて大きかったと言えるだろう。

第四、第五章であるが、基本的には、第一、第二章の安土城関連の記事と同種のアプローチ上の難があり、業界の噂話の域を出ないと言えるのではないかと思う。実際、第五章後半の金関丈夫、中村忠行らの諸氏の研究の紹介の段になって、ようやくまともな議論に入ってきたという感がある。ただ、ウアテキストがいくつかあり、また、どこにあったにせよ、ギリシア以前に遡らねばならず、当然、メソポタミアの文献資料が引かれるべきだろうし、恐らく、今日では、そのような論述もあるのだろう。口承説話がもととすれば、いずれにせよ、どこかですっぽ抜けてしまうだろうが。

また、キリシタン関連では、日本国内の事情だけで判断するのは恐らく正しくない。イエズス会にせよフランシスコ会にせよ、世界布教の一端として極東の布教があり、そのまた一部として、日本布教があったはずである。したがって、百合若伝説とユリシーズ説話がキリスト教の宣教を通じて関わっていたかどうかの判断は、他の土地、例えば、中国での宣教の実態とも比較して論じておかなければならなかったはずである。また、その場合には、キリシタン弾圧による文献の亡失というような困難も少ないだろうから、より実質的な議論ができたであろう。

拙見であるが、本来、井上氏に論じていただきたいかったのは、学界の議論の傾向が国粋か欧化かという社会的な風潮の影響を受けるということよりも、むしろ、どうして、ここで扱われた話題については、当時の論者たちが、それも博覧強記で知られた人たちを含めて、当該の話題をめぐる全体像を描こうという努力を最初にせずに、いきなり細部の議論に飛び込んでしまったのか、ということであった。とまれ、本書の刊行から十年を経ていることであり、そのような趣旨の論述も、すでに、されているかも知れないが。

なお、キリシタンの影響が話題になるのは、井上氏が扱われたものの他に、和算などがある。特に、ユークリッドの『原論』が舶載されて来たかどうか、また、その場合、どの版が来ていたのかは、興味のあるところである。マテオ・リッチらによる漢訳が残っていることから、恐らく、日本にも来ていたとは思われるが、詳細はわからない。膨大な海外史資料を精査する必要があるのだろうが、後年の蘭学関係でも、当時のオランダ語が今日のものと違う

版の序文の「昭和 30 年」の後に西暦の「1950 年」が字体の大きさを落として添付してあったので、初版の序文に若干の編集は加えてあったかも知れないが、仮名づかいに影響が出るような編集ではなかったのだろう（仮名づかいに影響は出ないが「出来る」というのがあったから、そんなにいじってはいないと考えるべきだろうが）。

点があって、下訳自体が簡単ではないという話を聞くと、前途は多難なのだろう（ちなみに、南アフリカ共和国の言語アフリカーンの場合だと、アフリカーンは聞き取れるが話せないという北ドイツ育ちの男が、ドイツ・オランダ国境に近い土地で育った友人なら何とか話すこともできると言っていたことを思い出す。文書ごとに方言が違う可能性もありそうである）。

付記：それにしても記憶というのは信頼できないものである。他人の「思い出話」は、裏づけとなる文献史資料（今の場合なら「広辞苑、できれば、その初版」だが）が伴わない話は、まあ、今のあなたにはそうなんです、としか言いようがないことは承知していたが、自分の経験したはずのことでもこんなにあやしいとなると、今のわたくしにはこうなんです、と聞き直るわけにも行かず、考え込まずにはいられない。特に、このブログにも、記憶だけに頼った記事がいくつかあるが、大丈夫かな、と思わざるを得ない。

なお、わたくしが「広辞苑」を持っていたのは高校生時代で、ずいぶん経ってから、つい先頃まで勤務していた大学に赴任したときに「広辞苑」は、いろいろな辞書として研究室常置の消耗品として購入したことは覚えている。それでも、大学の購入印が押してあったので、退職時に捨てるに捨てられず、自宅に運んだはずなのだが、どこにあるのやら。実際、Webster や Petit Robert は使ってきたが、「広辞苑」は自分で「日本国語大辞典」を購入してから、ほとんど使ったことがない。新村博士の序文にも触れてはあるが、要するに、中途半端なのである。

46. (08.02.04) なかなか当ブログに記事を書き込めないままほぼ一箇月経ってしまったが、金沢の友人のお誘いに応えるべく今更ながらの数学的考察を試みたりで、結構忙しい日々が続いたこともある。

とは言え、一月末の金沢でも肝腎の話そのものの完成度は低いままだったが、ノヴォシビリスクの講演時（32回記事参照）には見落としていたことの若干については補充や修正の目処が立ち、戻ってからの数日の計算や考察を経て、そういうことだったのかと漸く思い至ったものもあった（ホームページには論文めいたものが今のところ臨時に貼ってあるが、その改訂版という形でも、いずれ公開はするつもりではある）。ホームページとブログは別とはプロフィールで言ったことながら、敢えて、符牒めいた言い方をすれば、こういう（数学的）考察も（予感ではあるが）当ブログで遂行中の一種の ontological arguments の一端というか基礎になるはずのものではある。

符牒と言え、Enns の The thinking eye, the seeing brain (44回記事参照) の第二章を金沢への往復中に読み出したが、この章は、CAT, PET, ERP, MEG, MRI, fMRI, TMS 等、符牒の山から始まる。いくつかは、そのうち解説するが、人と話をするときのことなどを思うと、これらの符牒が日本語文脈でも実際上そのまま多用されていると言え、これらが英語名称の略だということを認識するだけでは不足で、対応する日本語も調べておかなければならない。

この章で符牒が山をなしているのは、視覚学の具体的なアプローチ法や現在の考察の方向性や得られている結論の概略を紹介しているからである。

人間の脳の機能や活動についての理解が20世紀初頭以来どのように得られて来たかを示す表(カラー図版)が同書の末尾に載せられているが、20世紀の後半になってから、前出の符牒で略称される技法が導入されるようになり、脳についての理解が格段に深化したことがわかる。実際、この表に従うと、CAT以下は、すべて1970年代以降の測定技法を指すものであり、それ以前は、基本的に、脳梗塞その他の病変や戦傷や事故による脳の障害に関係する行動観察や病理学的研究によってしか脳活動の実態を調べる方法がなかったわけである。例えば、CATやPETは1970年代、ERPは1980年代、MRIが1990年、MEGが1995年、TMSが2000年とあり、最近の脳研究の状況が革命的に激変していることが推察される。当初は、エクス線利用の、測定自体に相当の問題があるものから、(少なくとも視覚関連については)血流の実時間測定が可能な磁気利用の比較的手軽なものに、測定法も進化し、多様化して来ているようである。当然、2000年以降にも新たな測定技法が開発され利用されているであろう。

しかし、これら機器による測定法は、費用も嵩み、取り扱いも熟練を要し、しかも、非常に限定的な状況でしか利用できないという難はあり、そういう意味では、よく管理された条件下での行動観察による知見は、依然重要であり、また、新たな示唆を産み出し続けるのものであると、Ennsは強調しており、特に、学生が、視覚現象について具体的な興味を拡大する上では、このような行動観察が推奨されている。

このような接近法は、empty box approach というらしく、Ennsは、19世紀初頭のThomas Youngという若い(駆け出しの!)眼科医の観察に基づいた洞察的知見を例に挙げて、

By no means peculiar to the study of vision, it is an approach used in all sciences. The "empty box" refers to the inner workings of a structure that cannot be observed directly.

と言っている(p.35)。さらに、続けて、

[Empty boxes] push our understanding of what we are studying well ahead of what we can already see. They enable us to know what we are looking at when we finally see it.

と述べる。当たり前なことではあるが、道具が先にあるわけではない。知りたい、調べたいという欲求がまずあって、それに伴う知恵の働きや働かせ方があり、そこで初めて道具が工夫されるわけであるが、もっとも重要な道具は、常に、研究者本人の知恵なのである。

実際、Ennsも、少し、後で(p.40)、

Let's try to keep in mind [, ...] that our most important tool is still our own brain – the very brain whose visual functioning we are try to understand. The new technologies and gadgets are just that: tools to help us think.

と述べている。直後に、

Some philosophers have argued that this recursive process, of the brain trying to understand itself, places a limit on how much we will ever be able to know.

と書くが、そうは言うものの、限界はあるとしても、まだまだ遠い先の話だと追加している。これは、

Roger Penrose: The emperor's new mind,
Oxford University Press, 1989 (Penguin Books, 1991)

の基調をなす思想を思い出させる。Penrose の書物が準備されていたときと昨今の脳科学の状況はずいぶん違うだろうが、研究者の洞察という点ではどうだろうか。もちろん、(本ブログの影の主演) Ivins となると、前出の Enns の図版では、観察記録法としか言及されていない時代のものであり、洞察の質しか問題にはできない。

さて、Enns の第二章であるが、視覚に関連する脳活動を脳の解剖学的構造などと結びつけた技術的な解説の紹介が主な内容である。しかし、言わば、その前説ともいべき雑談だけで、既に、相当に長くなってしまった。改めて、再論したい。

47. (08.02.17) わたくし自身の所用というわけではなかったが、長崎・雲仙に日帰りで行つて来た。ついでというわけではないが、原爆資料館の脇の駐車場に車を入れ、平和公園まで歩いて降りてみた。途中で爆心地公園がある。

この公園の入り口に、死児を横抱きに抱えた女性のブロンズ像がある。像の台座の右側の隅に「平成九年六月吉日 富永直樹作」とある。帰宅してから、ネットで「富永直樹」を検索してみたが、長崎県出身(大正2(1913)年生、平成18(2006)年没)の彫刻家で、芸術院会員、平成元年文化勲章受賞という人ということであった。さらに、作品のブロンズ像が、いわば、高さ1cmあたり10万円くらいの値段でネット上での取引が提案されているようでもあった。その上、彫刻家として単純に芸術家に分類できるわけでもなくて、実用性・経済性に行き届いた配慮を巡らした工業意匠家でもあったようである。

富永直樹の作品は、資料館のすぐ近くにもあったが、しかし、彫像の象徴性に秘められた構造の複雑さは、爆心地公園のものの方がはるかに深いと思われる。ネット検索では結局わからなかったが、作者の製作メモのようなも

のは公表されているのだろうか。長崎市の依頼に応じて、作るべき像についての作者と長崎市とのやりとりなどは記録に残っているのだろうか。

この像は、長崎が核爆弾の投下によって甚大な被害を受けてから50年を経たところで、その記憶を改めて留めようという意図の下に行なわれた爆心地とその周辺の整備事業の一環として建てられたものである。像の脇に、和英双方の言語で像建立の意義を説明すると思われる文章を（先年暗殺された）長崎市長伊藤一長の名で記した看板がある。この看板の形では数年で劣化してしまい、場合によっては、腐食ゆえに一旦撤去された後に更新のないまま忘れられるということも起きるかも知れない。伊藤市長の文言も台座に銅版（か、あるいは石版に刻み込んだもの）の形で張り付けるべきではなかったかとも思った。この点では、資料館脇の教師と生徒たちの群像の方がはっきりしているようにも見える。もっとも、像の意義を明示的に説明しないというのが作者の意思であり、したがって、台座には必要最小限の文言、正面下の「1945 8.9 11:02」と上記の作者名だけを付したということだったのかもしれない。爆心地公園の整備の意義を述べるのが市長の辞の本来であって、像そのものと直接は関わってはいなかったのに、像の脇にたまたまあるものだから像と結びつけて読んでしまったということだったのかもしれない。看板の素材上の問題が解消するような解釈というか反省ではないが。

前後するが、ネット検索では、富永直樹の訃報記事も見つかったが、信仰を明示的に示唆するものではなかった。作品群は全体としては実に多岐にわたったテーマを扱っており、決定的なことは見えては来ないが、若干の作品から、キリスト教、特に、カトリックへの造詣が並々ならぬものであったであろうという想像はできる。また、少なくともネットで概観した限りでは、観音も地藏も作品にはないようである。

ところで、公園の彫像であるが、見上げて咄嗟に聖母子像を思った。しかし、母とおぼしき女性が両手に抱えているのは右腕を下に垂らした死んだ児である。もとより、いかに周辺が日本のカトリック教徒の聖地であっても、市立の公園に特定の宗教色を出すわけにはいかないだろう。被爆時に焼失したという近くの橋は、その数年後、欄干にさりげなく十字架型の窓の開いた今のものに再建されたようではあるが。

この女性像には正統なカトリック図像学の立場で聖母マリアを規定している基本的な象徴は一切付されてはいないと思われるが、作者は長いスカートの一面に薔薇の花を浮き出させていた。一瞬、「薔薇の聖母」という言葉が脳裏を過ぎり、帰宅後「薔薇の聖母」をネット検索したが、その限りでは、この像のスカートに散りばめられた薔薇の花の意味を的確に理解できるような説明には逢着しなかった。一方、死んだ児は幼子イエスよりも十字架から下ろされたイエスを思わせ、この像は、聖母子というよりもピエタと考えるべきものに違いない。そうだとすると、俗人にとってはここが重要な点であるが、この母子像は復活を予期させるものも含意していることになる。ついで

にというか、像の両脇にはそれぞれ一羽の鳩がおり、合わせて二羽ではあるものの、聖霊という連想もきかないわけではない。

カトリックの本来の文脈で、アイデアとして、このような（「薔薇」の）聖母マリアと幼児形の降架後のキリスト（と聖霊）の組合せを、彫刻なり絵画なりに表したものが一体あるのだろうか、あるとしたら、どういう場を意味しているのだろうか。こういう感想も覚えたが、答えを知ったところでどうというものではないかもしれない（まあ、日仏学館での西洋美術史のクラス（36回記事の枕部分参照。まだ、今期は一回残っている）の後での質問の種にはなるが）。

当初、この像は爆心地に建てられるはずであったと言う。反対があって現在地になったそうであるが、それはそれとして、爆心地に建つべきものであることを十分に意識して作られたことは、この像のメッセージ性を上のように解釈してみれば、明らかである。像建立の意義の文言について上で云々したが、爆心地に建てられるものであればこそ余計な文言は一切不要であり、そもそもいろいろと忖度したことが的外れであったに違いない。また、この像には、41回記事で言及した町田宗鳳氏の広島や長崎の解釈に通ずるものがある。

この記事は、（すでに寄り道だらけの）当ブログの本来の趣旨からは新たな道草であるが、全く、無関係というわけでもない。

付記：なお、爆心地近辺の松山町は被爆によって当時同地にいた住民は防空壕に避難していた女兒一名を除いて全員即死状態であったという。上の母子像のような状況は事実としてはありえなかったのであり、このことも、母子像が実はピエタであり、復活を希求するものであることを示唆していると考えべきことを示していよう。なお、第13回記事で引用した村上隆氏の感慨も無関係ではなさそうである。

48. (08.03.07) Enns の視覚学の教科書を（44回46回に）引き続き論ずるつもりだったが、先日、丸善の店頭をうろついていて、

石飛道子：ブツダ論理学五つの難問
講談社選書メチエ（講談社 2005）
ISBN 4-06-258335-6

という書物が目に留まった。著者の履歴を見ているうちに、40年近い昔の北大の光景、理学部本館は金網を被ったままだったし、工学部の建物は大正期の雰囲気漂わせた白タイルのものだったし、ばらばらと言えればばらばらだが、文系の軍艦講堂は赤茶けてはいても古い建物ではなく、一方、隣接する古河講堂は明治期の木造の建物だが、なぜかこれらが吹雪に耐えている姿を思い出してしまった。

「まえがき」の文体も気に入る、さらに、立ち読みを続けたところ、142ページに『「自己」を説く人々が用いる文』という表現があって、その前後の文脈との関わりにも興味が沸いた。結局、買って帰って、そのまま読み続けてしまった。

著者に従うと、本書は、龍樹が「方便心論」で展開している釈迦の論理の解説を収めたものであるそうで、「方便心論」は著者のホームページに訳出しているとのことであった。しかし、本書出版の後に、宮元啓一氏と共同で解説書が刊行されたようで、ホームページにはもはや「方便心論」を訳出したもののテキストは残っていなかった（ただし、宮元氏を「畏友」とやや年少の著者が呼んでいるのは日本語の習慣には合っていないであろう）。本書は、すでに3刷を重ねており、また、石飛氏のホームページのアクセス数も大層なものであるので、こういう方面の話題に関心を持っている人は多いということの現れに違いない。しかし、本書の内容は決して易しくない。実際、本書18ページで著者は、

(…) わたしは今まで誰も語ろうとしなかったこと、そして、これから誰も語ってくれそうもないことについて話をしよう。それは完成された論理学の話である。ブッダの教えを伝える阿含経典の中から龍樹が見つけ出し『方便心論』の中に隠しておいた論理学である。それをわたしが見つけ、さらに、足りない部分を阿含経典から補って一つの論理学体系としたものである。だから、これは龍樹とわたしの共同作業によって導かれた「ブッダの論理学」なのである

と言う。こう聞くと、著者はブッダや龍樹と同格の大宗家であることを主張しているように聞こえるかも知れないが、著者の真意はそういう方向のことではなくて、ブッダが説いた生のありかたについての論法における本質的と考えられる論証構造を抽出しよう、そうして、この作業こそが実は龍樹の『方便心論』の重要な要素であることに気づいたので、龍樹の考えを、こういう立場で整理しよう、ということのようである。実際、上の引用部分に引き続き、

(…) 倫理と論理は一枚の紙の裏表である。ブッダが倫理である表の面を語ったのなら、わたしは裏面を語ろう。龍樹のように、表から透かして裏の論理を見るのをやめて、はっきり紙をひっくり返してしまうことにする。

と著者は言い、著者の主要なアイデアが「倫理」と「論理」とを分離して論じられる、あるいは、論ずべきであるということの発見であって、こうして、ブッダ・ナーガールジュナ（龍樹）の論法、すなわち、因果の法、の構造をはっきりと記述できると言うのである。

著者の意図は（何とか）わかった。しかし、著者はこの企てに成功したと言えるだろうか。その判断は難しい。形式的な議論としては十分ではないと思われるが、そういう議論はもともと学術論文として展開すべきであろうし、本書での論述が多少とも空転しているという印象を与えたとしても、先行するであろう学術論文では緻密に論じられているかも知れないのであって、ま

さに、著者の言う読者の水準に応じてのブツダ流の変幻自在さがあるおかしくない。

わたくしは論理学には全くの門外漢である。仕事上は、もちろん、正しい論理の援用には努めてはきたが、それは直観論理とよばれるべきもので、本書の第一章で紹介されている「演繹論理学」の範疇内のものに過ぎない。しかし、このような論理の基本的な性格が「静的」なものであり、時間経過を内包する動的なものを扱えないという批判は理解できるつもりである。とは言うものの、動的なものの扱いについては、「論理」の基本構造にそのような機能があるべきであるか、あるいは、「論理」の対象の「意味」にそのような機能が付されるべきであるか、あるいは、その少なくとも二つの立場が成り立つことに留意が必要であろう。現に、数学も、幾何学や代数学は基本的に静的な性格のものであって、運動を扱うためには微分積分学が待たれたわけであるが、微分積分学は幾何学や代数学が成り立つような数学的概念の世界よりは、ある意味で狭いところで成立しているとも言えるのである。したがって、と言うか、怪しげな自己言及的な議論を承知で、予見というか偏見を述べれば、動的な論理を静的な論理の世界のうちに構築できるのではないかという感じはする。

「ブツダの論理学」は、時間要素 — 因果 — を含むものとして、本書第二章において、五つの「難問」の解説の形で述べられる。すなわち、

1. なぜ西洋論理学では因果を語ることはできないか
2. ブツダはどのようにして一切を語るのか
3. 語りえぬものには沈黙せねばならないか
4. 因果の道を行くものはなぜ愚か者であってはならないのか
5. 因果の理法によって生きる者には自己は語りえないか

が五難問であるが、例えば、第一問には「生ずる性質のものは滅する性質のものである」という風に、各問に、いわば、副題が付されている。第四問には「自己を愛しく求めるものは他を害してはならない」と付されており、上掲『「自己」を説く人々が用いる文』が論じられている箇所でもある。これらの「問題」から、「論理学」が、単に、シンタクスを規定する文法として扱われているわけではなく、記述されるべき内容やその意味に踏み込んで捉えられていることが推察される。事実、著者は「ブツダの論理学」を「因果の理法」として、認識論と存在論（という、これまたややこしい議論）との関わりで把握すべきことを強調している。順序としては、「因果の理法」が、まず、あるいは、とにかく、あるので、それを説くため、つまり、見だし従うためには、「ブツダの論理学」に依らねばならず、また、「ブツダの論理学」に依らなければ「因果の理法」がわからないということなのであろうか。そして、この全体が、それこそ、「一切」ということだろうか。

とまれ、第一章で著者は古典ギリシア以来の西欧論理学が静的であり、時間要素を含まないとして批判し、命題論理の真理値の計算で、命題式（著者

の記号で)『「甲」*「乙」』(すなわち、『「甲」または「非「乙」』)が古典的な西欧論理には現れないと指摘し、西欧論理の不備の証拠とする(著者は後に量子子を含んだ命題式にも言及しているが、不完全性を論じているわけではない)。

これに対し、著者は、基本公式(「ブッダの公式」p.57)

- (1) これがあるときかれがある
- (2) これが生ずるからかれが生ずる
- (3) これがないときかれがない
- (4) これが滅するからかれが滅する

を抽出し、これに基づく「ブッダの論理学」は、因果を論ずるものとして時間経過を含むものであるが、さらに、時間変化に中立な場合を含むものであると言っているようである。かくて「ブッダの論理学」は西欧のものを包括しているとされるのであるが、わたくしの「印象」としては、しかし、著者が抽出した「ブッダの公式」は断片的で、このままでは、論理学の構文型式としては十全ではないのではないかと思われる。また、「因果の理法」そのものと一体であるようであり、十分に「論理学」と言いうるものかどうかには依然論議の余地があるのではないかとも考えられよう。

さて、上記「ブッダの公式」を一層形式化しようと考えても、原典の文脈も知らず、また、既述のように、論理学に門外漢であるわたくしは、少なくとも現段階では「妄想」以上の見解は持ち得ない。もっとも、現に、「妄想」は若干抱いてはいるのだが、ここで、わたくしの「妄想」と思われるものを敢えて展開しておくことはないであろう。実際、最近、

中村元：論理の構造

青土社 2000

上 ISBN4-7917-5805-6

下 ISBN4-7917-5806-4

という大部の書物の存在に気づいたので、いつになるかわからないが、わたくしの「妄想」の展開を試みるのは、この書物に目を通してからにしたい。

49. (08.03.22) 例のごとく、道草と脱線で居場所も不明になってきた。「因果」というと、どうしても、「時」とは何かという、「時」の把握についての昔からの問題が念頭に浮かび、また、causality という語を思い出す。

48回の記事で、石飛氏らが(「方便心論」を經由して)抽出したというブッダ・ナーガールジュナの論理学について、妄想以上の見解を展開するのは、中村元：「論理の構造」という大部の著作に目を通してからにしようと思った。ところで、先日、天神の丸善をうろついていたら、Dover のペーパーバックの七割引販売というのがあり、つい、調子に乗って三冊購入してしまった。そのうちの一冊が、

Hans Reichenbach: The direction of time
Dover (1999) (University of California Press, 1956-1971)
ISBN 0-486-40926-0(pbk)

である。実は、「数学者」は、「静的」な学問に勤しんでいるためか、「時」とは何かという問を深刻に考察する必要に迫られず、数学者どうしが数学的話題に絡めて「時」について論ずることはないと言ってよい（このことが「数学者」がナイーブとされる所以かもしれない）。「時間変数」は「発展方程式」と呼ばれる微分方程式系に含まれているが、しかし、それは系が指定された段階で、すでに本質的に所与のものである。「時」が問題にされるとすれば、個々の発展方程式を定式化する際であろうが、その作業は、極端なことを言えば、「健全な」数学者にとっては与り知らないところである。しかし、時系列で生ずる現象を理解あるいは管理しようというのは通常的人間的営みであり、専門的な数学に沈潜しているときの数学者を除けば、およそ人間誰でも「時」にはそれなりの関心があるに違いない。

すでに論じてきた Dawkins の著作（例えば、39 回記事参照）でも、46 回記事で言及済みの Penrose: The emperor's new mind でも、あるいは、Enns の教科書（46 回記事）でも「時」は論じられている。論じる姿勢や視点はさまざまであるが、できる限り、最近の関連研究の成果を反映させようとしているようである。

Reichenbach の上記の書物は、著者の死後夫人によって編纂された半世紀以上前の著作であり、しかも、著者は予定していた最後の章は結局書くことができなかったという。著者は、科学哲学者、論理学者であったようだが、本来の業績については、わたくしは知らない（Wikipedia に、日本語の記事もある）。哲学とえば、わたくしの手元には、大分前に入手した教科書

Glenn Shafer: The art of causal conjecture
The MIT Press (1996)
ISBN 0-262-19368-X(alk.paper)

という本もあるのだが、ほとんど目を通してはいない（上記 Reichenbach の書物は、この本の文献表に入っている）。

さらに、

Igor D. Novikov: The river of time
Cambridge University Press (1998)
ISBN 0-521-46737-3(pbk)

というのがわが本棚にあった。購入したときの状況は思い出せないが、ほとんど読んでいないことは確かである。著者は（もとはソヴェート連邦の）宇宙物理（天文）学者で、この本自体は（少年向けの？）ロシア語書物からの翻訳である。翻訳時には、著者は、コペンハーゲン大学に移籍済みであった

ようである。物理的な「時」だけを論じているわけではないようだが、相対性理論の素養が反映していると期待される。上記、Reichenbach では、統計物理への傾斜があるようであり、物理的な「時」も決して単純ではないことは推察される。

さて、Reichenbach の書物であるが、第 1 章は The emotive significance of time という標題で、全体の基調をなしているらしい。この章をざっと眺めた限りでは、古来からの西欧の伝統的な「時」の感覚、過ぎ去り流れ去るもの、あるいは、ただの想いであって現実ではないもの、背景にある死の恐怖に言及した後、著者は、このような感覚的な「時」の捉え方を批判して（乱暴な引用だが）

Dissatisfied emotion has frequently been projected into logic.
(.....) The fear of death greatly influenced the logical analysis which philosophers have given of the problem of the time. [The belief that they they had discovered paradoxes in the flow of time (...)] functions as a defense mechanism ; the paradoxes are intended to discredit physical laws that have aroused deeply rooted emotional antagonism. (p.4 第二段落)

と言う。著者は、具体的な議論の肉付けのために、パルメニデス、プラトン、ヘラクリトス、ゼノンなどから（さまざまな物理学的知見の増大・深化を経た）カント、ベルグソンなどに至る哲学者の事跡を論じているのだが、Being と Becoming という鍵語が（恐らく、この類の議論では常識なのだろうが）頻出する。わたくしの連想は、これも古い本だが、

Ilya Prigogine:
From being to becoming - Time and complexity
in physical science
W. H. Freeman and Co. (1980)
ISBN 0-7167-1108-7pbk

に飛んでしまう。48 回の記事との比較で言えば、Being は石飛氏のブッダの公式 (1) (3) に関わり、Becoming は (2) (4) に関わるのではないかという印象はある。ただし、「死の恐怖」と「時」との感覚的な同一視となると、ブッダ流の解釈とは噛み合わないことかも知れない。

Reichenbach は、しかし、

A brief consideration shows that the study of time is a problem of physics. Emotive reaction to time flow cannot determine the answer to the question : What is time? (p.8)

と言い、また、改めて、

There is no other way to solve the problem of time than the way through physics. (p.16)

と言う。Reichenbach は、以降で、brief consideration の中身を展開して見せるのだが、わたくしは、まだ、全体の三分の一強（つまり、第2章の半ばまで）しか目を通していない。しかし、この本は思っていたより遥かに面白いというのが、ここまでの感想である。これから論じていきたい。

いずれにせよ、Reichenbach の言う通り、「時間」という概念は、物理学できちんと展開されているものなのだから、感覚的・心理的な把握の際も、物理学的な「時間」の生理的な処理の過程—これも科学の対象である—を参照して行なわれなければ、意味のある議論にならないであろう。

50. (08.04.16) Enns の続きを途中まで書いてはあるのだが、47回の記事を済ませた辺りで、近郊の進学校の校長にならないか、という話が飛び込んで来て、最終的に先方の理事会で承認されたのが3月28日、そして、4月1日に辞令交付を受けて、校長ということになった。

全く違う世界から来ただけに、文字通り、場違いの「上から目線」と受け取られないよう注意しているつもりだが、見当が違うかもしれないのは「目線」だけにあるわけではない。とまれ、学校経営上の全責任を負い、当然、それを保障するだけの権限を持つだけに、「見当違い振り」が、「新任校長の限界」として差し当たりは許容される範囲内にあるようならば、今後はやって行けるだろうという感はある。この件には、もう、これ以上立ち入らない。

しかし、ともかく、このお陰で、ほぼ毎日片道半時間電車に乗るという機会が生じ、これは本を読むためには最小限の纏まった時間ということになる。Enns の教科書や関連すると思われる脳科学のテキストなども、こういう機会に読もうと考えているが、今は、Reichenbach の The direction of time (49回記事参照) を持ち歩いている。引継ぎのための分を含め、すでに15往復したが、そんなに進んでいるわけではない。したがって、まだ Reichenbach の思想を論ずるまでには至っていない。まあ、片言隻句、例えば、

As in so many other points, the superiority of a philosophy based on the results of science has here become manifest. There is no logical necessity for the existence of a unique direction of total time; whether there is only one time direction, or whether time directions alternate, depends on the shape of the entropy curve plotted by the universe. (p.128)

などに感心しているだけである（文脈の説明なしの引用は乱暴だが Boltzman の気体力学関連でのエントロピーと時間交替についての考察を論じつつの Reichenbach のコメントである）。

ともかく新任の校長がこなさなければならない儀式の数々は八割方終わった。最初の土曜の午後は暖かい日差しの中、学校から西鉄の駅まで歩いた。道草

さえ食わなければ概ね 30 分くらいあれば十分ではないかというのがバスでの印象だったからでもある。

途中に、石橋文化センターというのがあり、立ち寄ってみた。庭園にはチューリップが満開であり、さらに、奥に入ると、もちろん、時節柄、桜が満開で、すでに散りかけていた。かつて八女にあつた坂本繁二郎画伯のアトリエが移築されており、それが公開されているというので、ついでに覗いてみた。1 階部分しか入れなかったが、恐らく本来の作業場、つまり、アトリエ、は 2 階なのであろう。外観からは、ある壁面のほとんどがガラス窓で埋め尽くされていたが、基本は、古典的な日本家屋である。構造上、夏は暑く、冬は寒かったであらう。寝起きは母屋でしていたとしても、真冬や真夏の制作は相当の苦痛であつたらう。

順序は前後するが、石橋美術館では、この土地に縁のある昭和期までの洋画家たちの作品をグループ毎に整理して展示していた（もっと知る美術・展一講座編）。重厚で気品のある作品ばかりだったのは、収集政策が明確だからであらう。

文化センター内の楽水亭で昼飯を食べたが、注文した定食でも藍胎漆器のトレイに地元の窯元（乾太郎窯、和泉重山釜、馬場勝文陶工房？）の焼いた食器が並び、味も満足の行くものであつた。

5 1. (08.05.13) 結構忙しい日々が続き、しかも、連休中にある人に会つたが、その後、(仔細に検討してもみたが) これと言う理由もないはずなのに、文字通り、徒な感情の荒みを覚えたという、いまだかつてない経験をした。人の話を聞くに際しての余裕というか「遊び」相当のものが、いつの間にか、極めて狭隘になっていたということなのであろうか。ここで気づいてよかったという意味で、むしろ、その人には感謝しなければならないのだが。とは言え、拳句の果てに、風邪まで引き込んだという次第で、何らかの思索に費やせる時間はしばらく作れなかった。

日常雑記の類は書くつもりはないので、当然、この時点では、本来、特に、書くべきことがあるわけではない。Reichenbach (49, 50 回記事参照) も持ち歩いているが、通読さえ終えていない。漸く、第 5 章の The time of quantum physics の半ば過ぎをうろうろしているだけで、著者の思想性が染み込んで来たわけではない。それどころか、"genidentity" という fantastic というか、esoteric word に逢着し、どう発音すべきかもわからないので、遭遇するたびに取り乱してしまう。手近な辞書にもなく、思い切って、ネットで検索したら、もとはドイツ語で Kurt Lewin の就任論文 (Habilitationsschrift) で最初に用いられたのだそうである (1922 年)。Kurt Lewin というのが、また、大変な人であつたらしいこともわかったが、横にばかり拡がっていくのも適当ではない。

"genidentity" には、何か、邦訳があるのだろうか、それはわからなかった (英文のネット記事を調べたのである。和訳ができるというので試みたが、混

乱は増すばかり)。内容的な説明は、Reichenbach が初めの方でやっていた (p.37-38) :

Moreover, there would be no unique identity of a physical object in time. This physical identity of a thing, also called genidentity, must be distinguished from logical identity. An event is logically identical with itself; but when we say that different events are states of the same thing, we employ a relation of genidentity holding between these events. A physical thing is thus a series of events; any two events belonging to this series are called genidentical. ...

ずっと後で、上記引用中の最後の文を受けて、

Speaking of things and speaking of events represent merely different modes of speech. When we wish to translate one of these modes into the other, we must be careful not to use a mixed language (p.224).

と言い、引き続き、thing language の "This tree is old" を例にとり、event language では、"The first events of the series constituting this tree are separated by a long time stretch from the present event" と換えなければならないと言う。

もちろん、これらは 50 回同様の片言隻句を取り挙げているだけであって、Reichenbach の思想の解説には程遠く、また、時間概念の説明との関わりも何もわからない。目を通したと一応言うためにもあと 30 ページは必要だし、しかも、その最後の 2 ページは、未亡人による著者生前の学術論文の要約であり、原著論文は長いものではないらしいが、探し出すためには大学の図書館に行かなくてはならないだろう。

付記。実は上で言及した原著論文 (Annales de L'I.H.P., 13-2(1952-53) 所収) は 50 ページある仏語論文である。genidentity についても言及があり、K. Lewin が導入した語と言っている。genidentité と書いているが、してみると仏語ではジャンダンティテと発音するのだろうか (ジュニダンティテではあるまい。gen は genre の gen ?)。問題は英語の場合のアクセントの位置である。なお、大学内であれば、インターネットでこの論文は閲覧できる。

52. (08.05.25) Reichenbach の書物 The direction of time に一通り目を通したが、何度も言ってきたように (第 49—51 回記事参照)、片言隻句に感心するばかりで、肝心の時間についての著者の主張はおぼろげにしか記憶に残っていない。

著者の主張における大前提は、物理学の最新成果を通じてしか「時間とは何か」という問に正しく解答することができないということであり、マクロ

からミクロへ遡り、つまり、古典力学、熱力学、統計力学、さらに、量子力学における因果律を検討し、確率論的接近を加味した上で、因果律から時間の内在的方向性を導くという構成のようである。ところで、少しばかり最初から読み直してわかったのは、本書が、実は、時間観念、因果律、決定論、自由意志という枠組を現代物理学からの批判に耐えうる形で確認することを目指しているらしいということである。実際、改めて気づいたのだが、第1節の末尾 (p.17) で

... it will turn out that physics can account for time flow and Becoming, that common sense is right, and that we can change the future. But the proof requires the use of scientific method. Even the meaning of the terms "time" and "becoming" can only be understood by a common sense which has assimilated the results of scientific thought.

と言っている。この最後の文章が肝要なところで、この意味を敷衍することが本書の動機に他なるまい。しかし、著者の死により、最初の文中の that common sense is right, that we can change the future という部分の論述は完成しなかったことになる。第2節では、日常的な時間感覚の分析から始めて、6点ほど、時間感覚に伴う特徴的な項目を挙げ、これらの意義を詳細に解説している。これら6点は、以降の議論での留意点でもあり、また、物理学理論を反映させて明確化して行くべき事項というわけである。そして、結局、

Our analysis of time, therefore, is concerned with a clarification of meanings. (p.23)

と言う。引き続き文章が大変面白い。すなわち、

It is a problem of explication, that is, we have to construct precise concepts to replace the vague ones thus far used. In an explication, the vague concept is called the explicandum, whereas the precise concept is called the explicans. The aim is to find an explicans which, put into the place of explicandum, justifies the use of the statement in the context of human behavior. (p.23)

と述べている。余計な感想だが、昨今の日本社会に顕著な傾向、すなわち、正確な語義を伴う語彙 (explicans 相当) を「難しい」と称して曖昧で包括的な用語 (explicandum 相当) に置き換えたがる風潮と対比すると、今の日本が不真面目で不誠実な、したがって、極めて危険な姿勢を強めていることに気づかざるを得ない。今の日本の風潮は、本来きちんと説明ができ、事実、かつては説明されていたことに対し、説明を省略し、あるいは、拒絶したいということの反映であると考えられることができるからである。

さて、Reichenbach に戻ると、しかし、少し後で、

An explication can never be proved to be strictly correct, for the very reason that the explicandum is vague and we can never tell whether the explicans matches all its features.(p.24)

と言い、要するに、explicandum を explicans で置き換えて、大方の文章の「真理値」が変わらないことが重要だと言っている（つまり、より曖昧、不正確になるようなことは論外だというわけである）。かくて、

Explication is therefore the method by the use of which we eventually succeed in understanding the meaning of a concept too involved to be accessible to direct understanding. (p.24)

と述べる。これも片言隻句の類と言ってしまえば身も蓋もないかも知れないが、著者の分析的な考察姿勢がよくわかる。以降の古典力学以下の因果律の検討でも考察の意味の明確化に十二分に力を注いでおり、また、議論の性質上、それは不可欠な作業でもある。

わたくしは、本書に爽快感を覚えるのであるが、それは、著者がこういう語義を明確化しようとする意図と過程を鮮やかに見せてくれているからだろうと思っている。

53. (08.06.30) 急いで処理すべき案件がいくつもあり、本当は Reichenbach どころではないのだが、とにかく6月中に1回は記事を更新しておきたいというやや不純な動機で記している。

Reichenbach も読み直してみると、さすがに著者の論法の基本的な構造は大分わかって来たなという思いはある。念のために、まず、52回の記事で触れた6点 (pp.20-23)

1. Time goes from the past to the future
2. The present, which divides the past from the future, is now.
3. The past never comes back.
4. We cannot change the past, but we can change the future.
5. We can have the records of the past, but not of the future.
6. The past is determined; the future is undetermined.

を掲げておく。これらは「時間」についての常識的な見解であるが、Reichenbach は徹底的な分析を加えて、「時間の向き (Direction of time)」が暗黙のうちに前提されているからこそ成り立つものであって、したがって、「時間の向き」を規定するものではないことを露わにする。

Reichenbach の基本的なアイデアは、「時間の向き」と「時間の順序」の区別を明確につけ、「時間の順序」を「因果の順序」に帰着させられることの指摘にある。順序の原語は order であるが、「時間の順序」という場合は、我々の語感とも合うが、「因果の順序」の場合は、むしろ「因果の秩序」とする方がよいようにも思われることがある。ところで、「因果の順序」は、物理的な

事象の関係である因果関係を表し、客観的な記述ができるものである。この意義について、Reichenbach は「時間の順序」を「因果関係」で定義すれば、それによって、時間の構造に物理学的な事態が反映していることを明らかにしたことになり、したがって、茫漠とした「時間の順序」ということに説明 (explication) を与えたことになるのであると言う。実際、この部分の英文の構造は複雑で、if 節を If we define time order ... として、主節では we have shown ... と現在完了形で受けている。(もう英文法の細かいことは忘れてしまったが) define の時制は仮説法現在なのだろうか。とにかく、こうして、上記 1-6 に、伝統的な解釈の放棄や因果関係の確率論的理解が必要とされることにはなるが、正確な意味づけができると Reichenbach は言うのである。

時間の順序を因果の順序に帰そうとする試みは Leibniz にまで遡るのだそうであるが、Einstein の相対性理論の完成までは決定的な形での定式化はできなかつたと Reichenbach は言う。特殊相対論の時空構造は Lorentz 変換で規定されるが、事象の時間順序は事象が因果関係で結ばれているときにのみ Lorentz 変換で不変なのである。したがって、時間順序には因果関係では記述できない要素があるとする立場では、Einstein の相対性理論や Lorentz 変換とは相容れないことになり、当然、相対性理論や Lorentz 変換が表す物理的事実を受け入れることができない。これらの理論をせいぜい単なる記号の組合せ程度のものでしか把握できないことになってしまうことになるが、もちろん、それでは「時間とは何か」という問に取り組んでいることにはならないわけである。

Reichenbach は、因果関係それ自体を帰着させるべき他の関係を探るという分析的考察を行なう。そして、

This analysis will enable us to solve the problem of the direction of time, a problem that cannot be solved in the framework of Einstein's theory of relativity, because it requires a transition from strictly causal relations to probability relations (pp.25-26).

と言うのである。

なお、Reichenbach は「順序 (order)」と「向き (direction)」の違いを例を挙げて説明している。(左右に無限に伸びる) 直線の場合だと、直線上の(異なる) 2 点 A, B について、点 A が点 B の「左にある」という関係に着目すれば、直線上の点に順序が定められること、一方、点 A が点 B の「左にある」と B が A の「右にある」ことは同等であって、「右にある」という関係でも順序が定まる。しかし、これらの順序は、3 点 A, B, C の並び方は「左にある」という順序で指定しても「右にある」という順序で指定しても、直ちに翻訳ができるという意味で、構造的には同等である。一方、Reichenbach は第二の例として、整数の大小を挙げる。整数 m が整数 n より「大きい」ということに基づいて整数の全体に定められる順序と整数 n が整数 m より「小さい」ということによって定められる順序とを取り上げ、こ

れらは構造的に異なるものであること指摘している。すなわち、0「より大きい」整数は2乗しても0「より大きい」が、0「より小さい」整数は2乗すると0「より小さい」という性質を失ってしまうのである。つまり、「より小さい」という順序によって整数の全体に「向き」も定められていることになるわけである。この例は「向き」に特別な順序に伴う内在的な構造が反映していることも示していると考えてよいであろう (p.26)。

同様のことが「より早い」と「より遅い」との間に成り立っているかどうか、「時間の向き」と言う際の核心ということになる (p.27)。

54. (08.07.12) Reichenbach の議論を続け、「時間の順序」と「時間の向き」(53回記事参照)を論ずるための「因果の網」というアイデアを検討しなければと思っていたが、諸般の事情で、後回しになっている。この事情のうちには、先日の日曜に久留米往復をしたこともあるが、その際、時間調整に立ち寄った天神の丸善で、

岡田英弘：日本史の誕生 (ちくま文庫)

ISBN978-4-480-42449-5 C0121

(筑摩書房 2008)

を見つけた。その日の往復の車中だけでは読了とは行かなかったが、もう一往復の合間に一応読み終えた。

26回、28回の記事で触れた岡田教授の著書「日本人のための歴史学」と同工異曲の点もあるが、本書の内容の方が的確である。教授は、「歴史」というものはどういうものであるかをまず論じ、それを踏まえて、「日本史」、特に、「日本」の成立について述べておられる。教授は、第十三章「歴史はものの見方の体系」において、歴史を

人間の住む世界の、時間軸と空間軸の両方に沿った、しかも一個人の直接 [...] 経験できる範囲を超えた、言葉による説明

と定義している (p.332)。読点が多くて見にくいようだが、「人間の住む世界の言葉による説明」に意味を限定する修飾句が挟まれているのである (さすがに煩いので一箇所 [...] とした。ここには「、」があるが、これはない方がいいと思うということである)。この章で展開されている議論は極めて妥当なものであると思われるが、政治的感情に振り回されている者には受け容れるのは難しいかも知れない。

教授がここで描き出しておられる歴史世界は、「教科書」的なものとは一致しない。しかし、わたくしは、大筋において、極めて論理的なものであると思う。「古事記」の扱いなど、言われてみれば、なるほどと思う (ただし、古事記の価値が全く減じるというわけではないだろう)。本書は、もともと概ね15年前に出版された単行本を文庫本に仕立て直したもののようであり、その際、新たに本質的に加えられたものはないようであって、文体を改めたことと若干の整理が主な改訂点であるようである。

内容的な要点は、

「国家成立」を記述する「歴史」の本質的な政治性
「中国史」の性格を規定したものは司馬遷の「史記」である
「中国史」と言われるべきものは秦の始皇帝から始まる
「南船北馬」の解説
「秦」から「唐」に至るまでの「中国史」の概要
「中国史」の一部としての日本列島を含む東北アジア史
「日本」の成立は「白村江」の敗戦による「韓」半島との絶縁
「日本史」を規定したものは「日本書紀」である
「日本語」の成立

と言ったところであろうか。

岡田教授は、紀元前数世紀から紀元後七、八世紀のユーラシア大陸の東半分をほぼ視野に収めて論述されており、書かれていることは、あらかた腑に落ちる。いくつか疑問がないわけではないが、その多くは教授自身が踏み込んではおられないところでもある。「南船北馬」の話は大変面白かったが、それだけで「中国古代史」を説明しきれものなのかどうか、そういう印象も覚えるが、「秦」の始皇帝より前のことは証拠書類も残ってはいないのだから考古学的事物の解釈として何を言ってもいいようなことであるとすると、問題にするのも馬鹿馬鹿しいことになるのかも知れない。

ところで、この本で強く印象に残ったのは、

瀋陽—北京—瀋陽—平壤—釜山—対馬—壱岐—博多—難波

という水路、特に、「瀋陽—平壤—釜山」が、本質的に内水面で航行できるというご指摘である。ただし、私的感想であるが、「博多—難波」の部分は、教授のご指摘は違うのではないかとも思った（第七章、第八章）。

要するに、博多から、博多湾外に一旦出て、遠賀川河口域を経て、関門海峡を通過するという、潮流上も問題の多そうな航路よりも、博多からも内水面経由¹²で、瀬戸内海に出たのではないかと思ったのである。具体的には、那珂川水系を遡り、筑後川に移り、さらに、日田辺りで、大分川水系に移って別府湾に出るというのが、「韓半島」での航路を参考にすると、自然ではないだろうか、ということである（現状は、上流のダムのために流量はいずれの川でも激減しており、往時を偲ぶことができない）。しかし、こう考えると、教授の論法では、「邪馬台国」の位置が九州北部の那珂川か筑後川沿いのどこ

¹²先日同僚と昼食中に河川交通が話題となり、かつては（つまり、明治の頃までは）久留米から博多に川伝いに荷を運んでいたという話が出た。筑後川水系の宝満川を利用したらしい。兩岸から船を引くことも行なわれ、短い距離の陸路で川から川（例えば、宝満川から那珂川や御笠川）へ移すことも行なわれたという。船越などという地名に残っていると。宝満川から那珂川への運河開削の試みもあったそうだが、土砂堆積がはなはだしく放棄されたのだという。もちろん、近頃は上流のダムやさらに里山への杉の植林などで保水性が減り、したがって、往時の水量が想像できるような状態ではないが。

かということになってしまう。別に構わないことではあるが、へえーという感はある。

もう一点加えると、「日本語」の成立のくだり（第十二章「日本語は人造語だ」）も面白い。現在の日本語の難は、「国語教育」において日本語の特性が十分に意識されていないことかも知れない。さらに、日常的な用法では、恐らくは、日本語が漢文を基底においた言語モデルに従って成熟してきたためではあるが、「時制」の感覚が甘いことが問題であろう。この意味は、過去や現在を語尾で区別することに神経を使っていないということを指すつもりではない。文脈で補正が利く範囲のことなら問題視する必要はないからである。だが、日本人がその言語の特性を正確に把握していなかったとしたら…。

今、上で、うっかり、「いなかったとしたら」と書いたが、こういう西欧語起源の語法についても「国語」の時間できちんと教育されているのだろうか。これも一例だが、西欧語で発達している仮設法や条件法のさまざまな用法に対応する日本語の表現は、先人が苦勞した翻訳を通じて、何とか成り立っているはずである。このような語法が日常的に用いられるというのは各種の微妙な条件に基づく契約が支配している近代社会の宿命である。当然、日本語の語法としての日常化も、日本人がしたたかになり、簡単にはだまされないようにしていくためには不可欠なことであろう。決して勧めているわけではないが、影響力の強さを考えれば、「難関大学」などの入学試験の国語の問題として、この手の入り組んだ論理を駆使し、ときに帰謬法の論証に他ならないというような文章を読み解かせるようなものが多出してもよいのではないかと思われる。

55. (08.07.30) 多少時間ができたこともあり、先日、福岡市立美術館で開催中の『ボストン美術館浮世絵名品展』というのを覗いて来た。暑さのせいだけではないと思うが、大変な疲労感を覚えた。京都の『狩野永徳展』(38回記事参照)でもそうだったが、人混みの程度は比較にならなかったのだから、体力が落ちただけなのかも知れない。

確かに「名品」に富んでいたが、何らかの展覧会で既に見ていたものも多かった。今回、最初に印象に残ったのは、奥村政信「駿河町越後屋大浮絵」であった。1745年頃の三井越後屋の店頭風景を「浮絵（遠近法）」で表した大振りの浮世絵であるが、解説は簡単で、どの程度の水準の「遠近法」であったかは直ちには明らかではない。ただ、描写は緻密で、店頭の梁に打ち付けてある燕の巣板に実際営巣されているところまで描きこんである。政信は「浮絵」などの浮世絵の新機軸の創始者だという。

ちなみに、1745年は将軍吉宗が将軍職を家重に譲った年でもある（吉宗は大御所として、さらに、ほぼ6年君臨した）。時期的には、政信と青木昆陽らの活躍期は重なるようであり、当然、蘭書の影響を受けたのであろう。なお、脈絡は特にないが、啓蒙主義で有名な百科全書は1751年頃から数学者ダランベールらによって編纂されている。ダランベールと言えば、パリのノー

トル・ダム寺院の前の広場の地下に、ローマ帝国の頃のイル・ド・フランス、つまり、ルテシア、の浴場跡発掘の資料館があるが、ここに、ダランベールの「出生証明書」なるものが展示されていたことを思い出す（かれは、広場東側にあつて、大革命以降は軍の病院に転用された Jean Le Rond 寺院の前に木箱に入れて捨てられていたという。宮廷内の不倫の子であつたらしいというようなことが説明されていたように思うが、記憶は確かではない。この捨て子が Jean Le Rond D'Alembert と名づけられたのは、発見場所からであつたようである¹³）。

『ボストン美術館浮世絵名品展』に戻ろう。遠近法と言え、時代は下がるが、18世紀後半の司馬江漢の銅版画が二枚示されており、また、言うまでもなく、19世紀前半の広重や北斎の風景画もあつた。室内を描いたものでは、同じ頃（1831年頃）の国芳「大江山酒隨之図」（ただし、「隨」はコザト偏ではなく手偏であるべきもの）も「遠近法」に従っている。

他に滅多にお目に掛かる機会がないものとして、下絵や版本の類が展示されており、特に、広重の下絵は的確なデッサン力が知られて印象深かつた。

ところで、数日後、

島村昇・鈴鹿幸雄他：『京の町家』（鹿島出版会、1971）

（SD選書 59. ISBN4-306-05059-9 C1352）

を天神・丸善の店頭で見つけた。出版から40年近くを経ている古い本であるが、15刷を重ねたのが、2003年、つまり、5年前である。わたくしは、今日の京都の市街を「古典世界の古代都市」の名残と思ひ込んできた経緯もあるのに、「京の町家」なるものについては、感覚的なこと以上は知らないなど思っていただけに、早速購入して目を通して見た。

昭和40年代の中京区夷町一帯の「町家」の現況を建築学的知見を加味して整理した報告と位置づけられると思う。著者等は当時の住宅公団の現職職員として、団地設計にあたつておられたからであろう、職業的動機も反映した臨場感もあつて、なかなか面白かつた。ただ、当然のことながら、「町家」そのものの成育史を論じたものではないから、「古典世界の古代都市」の名残であるかどうかの示唆は得られなかつた。せいぜい京都の商業都市としての発展の中から、いわば、自然発生的に生じたかのような記述があつただけである（pp.12-13）。

とは言え、堅固な坊条構造が先行していればこそであつて、室町期以降発展したとされるあちこちの商工業都市の街並みも、まず、街道があつて初めて成り立つものではなかつたか。この意味で、こういう「都市」の構造には日本固有の文化的特性を超えた部分があるのではないかという想ひはある。

¹³ダランベールの出生証明書説明文の抜粋（パリ・シテ島地下博物館）

Le célèbre écrivain, philosophe et mathématicien Jean Le Rond d'Alembert a été un "enfant trouvé" le 16 novembre 1717, dans une boîte en sapin, sur les marches de l'église Saint Jean le Rond, d'où son nom.

「1717年11月16日名前のもととなつた寺院の通路で縦箱入りで見つかつた子である」とある。

というわけで、この本の眼目は、むしろ、大正時代から昭和 40 年代に至る半世紀、特に、敗戦後の四半世紀の文明の変転に対する京の町家の変貌の記述にあると言えるだろう。淡々とした記述のようでも、著者たちの団地設計の課題と直結していたことに違いなく、住民たちの知恵の記録には留まらない分析が施されている。また、用語の表記が（古い本なのに）建築の素人から見ると斬新に見え、詳細を読み分けることができたわけではないものの、印象的であった。

このときから 40 年を経て、夷町一帯は今どうなっているのだろうかと思ひ、グーグルマップで見emたら、町家は大分消滅しているようである。低層高密度住宅地というものが成立した種々の条件が今日では維持されておらず、他方、現代の産業社会に相応しい住宅や都市と言っても、かつての条件下では深刻に考慮するには及ばなかったために人間には生物学的限界があるということへの配慮を欠いたまま、ここまで進行して来たわけで、まだ、現代本来に適合したスタイルは確立していないのだろうし、そのことが必然的に雑然とした現代の都市景観を産み出しているのだろうと思う。ただし、待っていればいずれよくなるというような単純な話ではないのではあるが。

56. (08.08.31) 8月も記事の更新のできないまま 31 日を迎えた。公私共に忙しかったからだとさえいえばそれまでだが、脱線が続いたために路線を元に戻そうとするには、勉強をし直さなければならず、そのためのまとまった時間ができなかったのである。

挙句の果てに、わずかにできた時間的余裕を利用して、鎌倉との往復をし、帰途、羽田で

亀山郁夫・佐藤優 : 『ロシア 闇と魂の国家』(文春新書 2008)
ISBN978-4-16-660623-8

を購入し、三分の二は目を通した。4月刊行の本だから、本屋の店頭をしょっちゅう眺めていれば気づいたであろうが、漸く手にしたというところか。残りの三分の一は、今日、機内で読んだ。数日前に小学校のときの友人が亡くなり、今夕の通夜だけは何とか都合を付けて出るようにしたからである。この件は別な機会にでも触れることがあるかも知れない。導師の読経の後での説教はなかなかよかった。故人の家の菩提寺の住職を継いだばかりとのことではあるが、故人の妹さんの言うように（ということは、実は、ものすごく）頭のいい人なのであろう。それに経を上げる声もよかった。

上記の書物に戻ると、これには、対談形式であるという書物としての致命的な限界があり、その上、わたくしのように、ロシア文学や昨今のポスト・モダンだ何だという風潮に通じてない者には、そんなものかな、としか思わざるを得ない点多かった。しかし、第3章「霊と魂の復活」というのが基本的に凄い内容を伴っているらしいことは想像できた。例えば、182 ページから 183 ページに掛けての佐藤氏の発言は考えさせる。特に、

ロシアについて理解するには、知ではわからない信仰に最後は「命がけの飛躍」をしなくてはならない。これは確かです。もっともこれは、日本について理解するためにも、最後には「命がけの飛躍」をしなくてはならない。

という句は佐藤氏の思索の質を推察させる。実は、この章は、総じて斜め読みではなく、丁寧にノートをとって、文献にあたるなり、考察を巡らすなりの努力を払う価値があると思う。何分、32回の記事で触れた程度のロシア体験しかない身には荷が重過ぎる。

ところで、221ページの亀山氏の発言に

記号学者のロトマンも、ロシアは〇と一の二進法だと言ってますね

というのがある。ロトマンとは、恐らく、Brian Rotmanを指すのだろうが、この人のことが突如この文脈で出て来るのも意外な気がした。

まあ、8月中の記事の更新を目指した取り留めのない話ではある。ところで、上掲の書物に触発されて、遅まきながら、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」(亀山訳、光文社文庫)に目を通していているところである。

57. (08.09.25) 55回の記事で言及した「京の町屋」の本と同じときに、

アーサー・コーン：都市形成の歴史 (SD 選書)
鹿島出版会 1968

を購入した。通勤に際し持ち歩いてしたが、最近目を通し終わった。原書は、

Arthur Korn: History builds the town
Percy Lund Humphries & Co., Ltd., 1953

である。手元の訳本は、ほぼ10年前、1999年16刷であるが、恐らく、重刷の必要はもうないのではないか。内容的には、邦訳の標題は不適切であるが、まあ、それに釣られて購入した人間もいたわけではある。とまれ、都市がどう形成されてきたか、なぜ都市が現われたか、その構造の原型はどのようなものであったか、そういう基本的なことについては、本書には説得力のある議論は展開されていない。

本書はもともと60年前の出版であり、思想的には、恐らく20世紀前半1920年代から30年代のものなのだろう。翻訳からも40年を経ているが、翻訳の時期は、日本では随所にニュータウンが出現しようとしていたころである。その時代にはそれなりの意義はあったのであろう。背景の思想は、東京や札幌のオリンピックに伴う都市改造にも無関係ではなかったであろう。ただし、札幌の場合など、先年、地下鉄の真駒内駅に降り立って四半世紀の間の変転に驚愕したことを思い出す。つまり、われわれは、この手の都市改造思想には深刻な欠陥があることも今や経験しているのである。

少し話しが先に行き過ぎた。本書を購入したのは、もとより、「都市」は自明な形で発生したものではなく、その発生は一種の発明であろうと考えていたからで、本書標題は、そういう経緯を示唆するものだったからである。しかも、「訳者あとがき」（訳者の星野芳久氏による）にもその趣旨の仄めかし（p.163）：

本書の特徴は著者が第一章の序説で述べているように「都市を創造しその構造を決定してきた、時代を超越した社会の真の力」を理解させようとしていることである。（…）本書の価値を高めているのは、正にこの一点にあるといえよう

があったからである。結論から言えば、すでに述べたように、本書にはそのような洞察は見られない。際立つのは、イデオロギーであり、20世紀前半の思想圏に属すると述べたのは、やや辟易する想いがあったからである。

一番の欠陥は、都市の栄枯盛衰を事実に基づいて記述しようとする姿勢が希薄なことである。先に、理論があり、理論の適用例としてある都市のある時期を切り取って論じる。その際、不思議なことだが、都市住民の人生の長さや個々の建物の供用期間、さらに、都市や都市群を含む地域の栄枯盛衰を支配する時間の違いが十分に意識されていないようなのである。人間の基本的な時間単位は30年から50年、政権の場合はもっと短い、長くても10年か。他方、建物は石造となると100年から150年くらいだろうか。都市の寿命はどのくらいだろうか。政権数代分だろうか、つまり、せいぜい30年から60年。これらのアイデアを曲がりなりに検証しようとするにはどうしたらよいのだろうか。また、現実には、これらを基調として、それぞれの時代固有の事情が働いているのだろうが、それをどう腑分けしていくか。本来は、このようなことこそ論じられるべきであった。

都市というか、一般に、社会に混在する種々の時間が適切に扱われていないことは予てから気にはなっていた。そのような結果のささやかな例が上述の真駒内駅前である。本書で紹介されている20世紀中葉の各種の大規模プロジェクトについても、半世紀以上を経て現在どうなっているであろうか。ソヴェート連邦の都市建設や運河開削の話題もあったが、ソ連さえ今はない。

一方、同じく言及のあるニューディール政策の象徴ともいえるべき TVA はどうなっているのだろうか。TVA は Tennessee Valley Authority の略らしいが、wikipedia にも記述がある。それによると、後年のレーガン大統領の原点も1964年の共和党全国大会での TVA 批判演説であったらしい。

58. (08.10.19) 56回記事で言及した Brian Rotman の著書は何かでかれの考えに気づいてから三冊ほど目を通した。それらの言わば要約とも言えるものが、かれのサイトに貼ってある。すなわち、

Will the digital computer transform classical mathematics ?
Phil. Trans. R. Soc. London, A, 361 (2003), pp. 1675-1690

であるが、雑誌論文本体の pdf ではないせいか、若干の不備（つまり、typo）があるようである（今これを書いているのは電子的にも掲載誌を閲覧できる環境ではない）。5年前で少し古い気もするが、技術的なことを論じているわけではなく、もともとこの程度の時間の経過に敏感な話題ではない。なぜなら、問題の本質は「無限」概念の把握のしかたにあり、したがって、その意味で、当ブログの趣旨と関わっていることにはなる。

Rotman は、論文の冒頭で

Technology is permeated by mathematics.

と言う。これが、実際、工学の本質であることは工学部勤務の間にわたくし自身教わったことである。Rotman は、しかし、しばらく後で、

The reverse relation, less obviously, is also the case: mathematics is permeated by technology, by the traces and effects of machines and apparatuses that have surrounded and impinged on it throughout its history.

と言う（後半の文中の it は mathematics である、念のため）。途中が省いてあるので、相当に抽象的だが、要するに、現実世界において合理的な効果を産み出す具体的な各種の手段、機械類、その他、車両、工具などと、観念世界において展開されている数学とが、実は、昔から相互に深く絡み合っているということに注意を喚起しているわけである。

これだけだと当り前のことを殊更に問題にしているように見える。背後にあることは人間が「現実世界」を、ここで「現実」と言っても、それ自体錯綜していて、必ずしも自然現象の織り成す世界だけで済むわけではなく、それらの中で生起してきたさまざまなもの、人為的な生成物や廃棄物なども含んでいるはずではあるが、そういう「現実世界」をどう認識し整理しているかという問である。空間認識や時間認識への関心も、この文脈に属しているわけではある。

Rotman は、Saussure や Peirce、さらには、Eco と関わりのある記号論的な考察をしているとのことであるけれども、わたくしが関心を持ったのは、Rotman による「数学者」が「数学をする」という行為の分析である。関連して、Chris Mortensen らの批判も見たが、この人の考察も不思議な内容のものである。Mortensen はオーストラリアのアデレード大学の名誉教授で、かれのサイトには不可能図形の詳細な紹介があったが、久しぶりにみたら、今は、人文社会学部（哲学科）のサイトに貼られてあった。さらに、こんなのもあった（ちなみに、アデレード大学のホームページにはノーベル賞受賞者5名の写真が載っている）。

なお、関連する話題は

杉原厚吉：立体イリュージョンの数理（共立出版 2006）

ISBN4-320-01805-2

にある。この本は遠近法の数理についても詳しい。

脱線した。Rotman が何を言い、また、Mortensen がどんなことを考えていたかを紹介する余裕がなくなった。結構勉強しなおさなければならないこともある。基本は、20世紀初頭までの古典的な数学と世界把握の関係を、数学をするという行為を「記号論的に」問い直してみよう、さらに、上に挙げた Rotman の論文の場合なら、電子計算機を介在させることにより、現実世界と数学との関係を再論すべきであること、さらに、現実の電子計算機は Turing 器械と違って「有限」なので、そのことを配慮した議論を試みてみようということであろう。

しかし、通信工学者 Slepian は、Von Neumann 講演の記録

Slepian, David : Some comments on Fourier analysis, uncertainty and modeling, SIAM Review 25 (1983), pp. 379-393.

において、例えば (p.389) ,

Our models of physical phenomena are merely games we play with symbols on paper, manipulating them according to well-defined rules. Certain quantities in our models will correspond, we hope, to observable measurable entities in the real-world situation we are attempting to describe. I call these principal quantities of the model. Almost always, however, there will be other quantities or constructs important to the model that have no counterpart in the real-world situation under study. I call these secondary constructs of the model. It is my contention that in useful, trustworthy models the principal quantities must be insensitive to small changes in the secondary constructs.

と言い、引き続き、

Rationality of quantities is a secondary construct of a model.

さらに、

Continuity is also always a secondary construct.

と言いつ切る。これら数学的概念は、現実世界を扱うための副次的な道具であると言うわけである。これは古典的な数学観とは相容れないが、われわれが現実をどう認識し、現実をどう合理的に働きかけていくか、ということ巡っての考察であり、より具体的な感覚に裏打ちされているのだろうが、Rotman らの思弁的な考察とも無関係ではあるまい。

59. (08.10.26) 中途半端な話で終始してしまっているが、58回の記事で触れたアデレード大学のサイトはなかなか興味深い。ここでは「不可能図形」

を扱っているのですが、杉原さんの本にも触れたのだが、だんだん遡っていくと、Brunelleschi だ、Alberti だということになるのだろうというわけで、久し振りに、Ivins の書物を手に取ってみた。

第6回の記事で示した目次にあるように、Ivins は、第5章と第6章で Alberti や「正統作図法」を論じている。しかし、わたくしの記憶違いか、Brunelleschi が何をしたかは明示的に書いてはない。確かめたところ、Rotman の著書

Brian Rotman : Signifying Nothing – The Semiotics of Zero
Stanford University Press. 1987.
ISBN 0-8047-2129-7

にあった (p.15)。Brunelleschi によるというサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の堂内からのサン・ジョヴァンニ洗礼堂の透視図と、洗礼堂を重ねた図が示されているが、図の出典は明らかではない。ちなみに、58回で触れた Mortensen らによる批判的な論文は上掲書に対してではなかったはずだが、今、論文が手元にないので確かめられない。

余計なことだが、わたくしは Ivins から空間認識と文化社会の関わりを示唆を受け、遠近法に関心を持つに至るまで、フィレンツェには全く興味がなかった。観光で訪ねたこともない。去年はシエナに行く機会があったけれど、結局、旅費の手当ての関係でノヴォシビリスクを選んでしまった。その頃は、今みたいにこんなに時間がなく、また、海外に旅行なり出張することがほとんどできないという立場になるとは予想もしていなかったけれど、こうなってみると、無理をしても、イタリアに行き、少なくとも二週間ぐらいはいるべきであったと思う。とまれ、そんなわけで現物に基づいて論ずべきことが皆上滑りになってしまうのは仕方がないが、それでも先年の『フィレンツェー 芸術都市の誕生』展は、京都で観た (2005 (平成 17) 年 2 月)。この展覧会に合わせたと思われる『芸術新潮』の特集号 (第 56 巻第 1 号, 2005 (平成 17) 年 1 月号) があり、その 42 ページには、角度は違うが、サン・ジョヴァンニ洗礼堂の写真が載っている。上記の展覧会も、Brunelleschi の透視図関連の模型が出ているかという期待を抱いてはいたのだが、その点では残念であった。

実は、先週の通勤の車中では

マネッティ：ブルネッレスキ伝 付グラッソ物語
中央公論美術出版 1989
ISBN 4-8055-0187-1

を読んでいた。大変面白く、あわてての下車で車内に傘一本を忘れてしまった (結局、出ては来なかった)。この本の 70 ページから 71 ページにかけて Brunelleschi が (古典古代の知識の再発見であったかも知れないが) 留保は付けてあったが) 独力で「科学的」な透視図法のアイデアを得たことを延べ、次いで、72 ページから 74 ページにかけて、上述のサン・ジョヴァンニ洗

礼堂の透視図が話題にされている（訳者の浅井朋子氏はマネッティに従って、「洗礼堂」をより包括的な「教会」と訳出されている）。本書は、Brunelleschi の天才振りを描いているのであるが、随所で、周辺の関係者の無能や無責任、あるいは、嫉妬などが対比される形で示されてもいる（例えば、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のクーポラに関連しての 114 ページの記述）。

119 ページでは、Brunelleschi のアイデアの本質を理解せず、独善的な半知解な解釈で、Brunelleschi の指示通りに施工されなかった建築について

評判がよく、自ら理解力があると信じていた一市民が、この種のこと非常に一生懸命になり、自己表明したことが、この小さからぬ不都合の原因となった

とある。

ところで、サン・ジョヴァンニ洗礼堂の透視図の話については、この方面の碩学は別なご意見をお持ちらしい。さすがに、古典的な重要な話題である：

辻茂：遠近法の発見
現代企画室 1996
ISBN 4-7738-9615-9 C0070 P3090E

辻茂：遠近法の誕生－ルネッサンスの芸術家と科学
朝日新聞社 1995
ISBN 4-02-256839-9

に言及と記述がある。

いずれにせよ、以上についてわたくしなりに咀嚼して何がしかの見解を抱くに至っているわけではない。

60. (08.12.01) 「不可能図形」と言えば、昨日、久し振りに天神の丸善を覗いたときに、

杉原厚吉：だまし絵の描き方入門
誠文堂新光社（2008）
ISBN978-4-416-80862-7

を見つけた。杉原教授の書物については、第 58 回の記事でも言及したが、この本は、その書物とは異なり、読者対象に（多分）小学校高学年の児童も含まれるように工夫されているようである。実は、同じ書棚に並べて、杉原教授の関係の書物

杉原厚吉：へんな立体
誠文堂新光社（2007）
ISBN978-4-416-80752-1

杉原厚吉：すごくへんな立体

誠文堂新光社（2008）

ISBN978-4-416-80831-3

が並べられていた。こちらの方は紙工作用型紙の集成という感もある。いずれも出版から余り時日が経っていないのに、重刷の様子から評判のよさが察せられる。「だまし絵」は理屈を説明しており、やや難しいかとも思われるものの、もう版を重ねているのかも知れない。

さて、「だまし絵」の方であるが、著者は末尾で

… 数理工学では、だまし絵の構造を探り、技術としての描き方を導くことまではできますが、そこに芸術の香りを盛り込むためにどうすればよいかについては答えることはできません。その部分は、読者の皆さんご自身の工夫と努力にゆだねるしかありません。…

と述べている。まさにその通りであろう。「工夫と努力」とは言うものの、実は、センスというか、一種の文化的背景のあることではあろうし、さらに「大芸術」を目指すなら、つまり、普遍的な感動を呼ぶものが作れるかどうかとなると天分めいたものも要るだろう。

今のところ仔細に検討する時間を作れないのが残念だが、ざっと見た限りでは、「だまし絵」は非常にわかりやすい説明で満ち溢れているようである。実際のところ、上に引用した杉原教授の見解のように、この手の話は技術的にも理論的にも切りがないようで、タイリング（図形敷詰め tessellation）にも複数のタイルの形を許す場合や、さらに、aperiodic tiling のように、規則性の記述の困難なものもあり、関係する理論的背景は、数論、群論のような伝統的数学から Fourier 解析や確率論のような現代数学の最先端にまで及んでいるようである。芸術的感興を呼び起こすかどうかは別として、理論的および技術的応用の広がりも留まるところを知らないと言えるかもしれない。もちろん、「だまし絵」にはそういう余分なことは書かれていない（文献も全くない）。

ところで、先日、

下村耕史（訳編）：デューラー「測定法教則」

中央公論美術出版（2008）

ISBN978-4-8055-0578-6

が出版された。三浦伸夫教授による「数学史におけるデューラー」という解説も付されている。下村教授は、「測定法教則」の各書についての周到な解説を与えられているが、三浦教授の解説の部分と併せて、今のわたくしには具体的な見解を構築しようとするだけの余裕はない。

特に、245 ページ以下に、Ivins による Duerer の遠近法理解への批判が紹介されており、それは当ブログの本来の種本の Art & Geometry（プロフィー

ル及び第1回記事参照)ではなく, Ivins の諸論文や, それらの集成である主著ともいうべき書物

William M. Ivins, Jr.: On the rationalization of sight
Metropolitan Museum of Art, 1938
Da Capo Press, Inc. 1973

に基づいていて, Ivins の批判の全貌を知る上でも, 大変ありがたい.

61. (08.12.27) ネット上の書評記事に触発されて, ウンベルト・エコの書物

Umberto Eco: セレンディピディティー 言語と愚行
而立書房 (2008)
ISBN978-4-88059-342-5 C1010

を購入し, 目を通しつつある (つまり, 読了はしていない. どうでもよいことだが, それでもネット上の書評者が満足に通読もしていないらしいということはわかった. まあ, 書評記事が前書き, 後書き, 目次や最初の章の斜め読みだけで書かれている例は極めて多いわけで, 極端な場合, 著者の主張と正反対のことを要約してしまうことさえあるのだが, そういう極端な書評ではなかったことは特記しておきたい). なお, 本書には詳細な索引が付されているのはありがたい.

エコの著書は以前「薔薇の名前」だったと思うが, 読もうとしたことがある. 読んだのかも知れないが, 修道院の古写本を巡る殺人事件か何かの話だったかな, という程度の記憶しかない. やたらに錯綜していて難しかったような気がする. この本については, 上掲「セレンディピディティー」の訳者の谷口伊兵衛氏が解説書を書いておられるらしい. 谷口氏は履歴を拝見すると, エコから直接教えを受けられただけでなく, 地中海世界をしっかりと研究されたようである (しかも, 私事ながら, 愚息の大先輩に当たられるらしい).

そこで, 本書だが, エコは一体何を言いたいのか, それを的確につかまえるのがむずかしい. 中世の西欧キリスト教世界の信仰の元となった聖書とそれに付随するさまざまな伝承や作り話を論じているのだが, エコが言っているらしいことも, どこまで信じていいかが, まず, わからないのである. いろいろな引用もあるが, ほとんどが聞いたこともない文献のことである. 嘘か真か, はたまた, 著者が示唆しているような影響が及んでいたことなのか, 今の状況と余りにも違う話になると, ひたすら恐れ入るだけになってしまう. ただ, 文学研究, 思想史研究の愉しみというか醍醐味のようなものは臚げながら伝わってくる. わたくしのような素人は, ただ漫然と口を開けているだけではあるが, ここはその昔の誰その説のかくかくしかじかの部分をもじったものだとか, この話はその後でこうなったとか, そういう類の話題を接ぎながらある文明についての何百年かの時間経過を描き出して見せてくれることはわかった.

エコは、キリスト教世界と無縁な文明的伝統、つまり、インド以東の言語現象にも、キリスト教世界からの認識や解釈への言及の形で触れてはいるが、それらは本質的な意味は持っていないようではある。最後の章は、「ジョゼフ・ド・メートルの言語学」というのだが、ジョゼフ・ド・メートルとは何者かと思ひ、この語でネット検索をしたところ、本書の書評をしているブログが冒頭に出てきただけで、後は、フランス料理屋やワインばかり、相当に腰を据えないと正しい情報に辿り着けそうもないので、当てずっぽうで Joseph de Maitre に検索語を変えたところ、やはりそう簡単に的確な情報が得られるような様子はなかった。しかし、パリに Rue Joseph de Maitre という街路があり、その写真を掲載しているブログがあることはわかった。

エコがどういうつもりで、こういうエッセイを書いているのかは結局はわからずじまいではあるが、この手の、純粋に西欧世界の歴史に密着したものを、異文化圏のわれわれが、西欧文脈に属さない言語を通して、理解することは結構難しい。かと言って、英語なりイタリア語なりを通してでは、内容からのメッセージを挑戦的に読み取ることもできなくなってしまうだろう。本書の場合、恐らく、基層にある関心は、言語とは何か、言語と人間の世界認識との関わりはどうあるべきか、ということなのだろうと思われる。そして、言語、それが自然言語であれ、人工言語であれ、あるいは、神からの言語であれ、そういうものが可能だとして、そういうアイデアとの格闘の様子を、聖書の記述を発端とした西欧世界の伝統の中で、読み取ろうという試みであろう。

われわれの立場では、現に、こういう伝統から無縁な文明に生きているのであり、エコの論述に刺激されて、エコには望み得なかった視点を加味して、同種の問を発し、かつ、その解答を試みるというのが本書への正しい接し方であろう。さらに、もう一言、加えると、もし、続く時代を考慮した続編を用意するとするならば、どうしても数学を論じなければならないだろう。

実際、ライブニッツへの言及はあるが、エコが紹介している人工言語や言語論は、基本的に、語彙全体の規定のみで言語が構成されているという思想に基づいているようである。しかし、語彙間の演算規則、文法やら各種の語法上の慣用やらから成り立つはずだが、それらを伴わない限り、言語というものは成立しない。数学は、その意味で、典型的な言語であるが、自然言語と数学との根本的な違いは、自然言語は経時的に運用されるのに対し、数学の運用は時間的には静止していることである。別な言い方をすれば、自然言語の場合は、「命題」の「真偽」を検証する機能は内包しておらず、また非言語手段での検証の余裕も実際上十分ではないけれども、数学の場合は、この検証が完了していない限り、成り立たないということである。しかも、メタ数学に拠れば、数学が内包しているはずの検証機能そのものが実は機能不全ではあるのだが。

脱線気味であるが、本書に戻ると、実は、訳者に詳細な解説や注を要所要所に施していただきたかったと思う。翻訳自体が解釈行為であり、それだけで

十分ではないか、というお考えかも知れないが、読者が、著者を交えて、訳者とも対話するという形態の書物があってもいいのではないかと思うのである。

最後に、一箇所孫引きをする（125 ページ、メートルの引用から）：

原則に影響を及ぼもしない変化が、ひょっとして同一性を滅ぼすというのか？ゆりかごの中の私を見た人が、ひょっとして今日でも私を再認するというのか？それでも私は当時と同じ自分だという資格があると信じるものである。そして、言語でも同じことなのだ。つまり、言語はいつも同じなのだ、これを話す人びとが同じである限りは。

これは、言語の *genidentity* の指摘であろう（51 回記事参照）。

付記：（このブログ記事に G 氏から）コメントをいただいた：

読者です。いつも楽しく読ませていただいております。メートルで気になったのですがジョゼフ・マリー・ド・メーストルという思想家もいます。私はエーコの本を読んだわけでも、専門でないのでくわしいことわかりませんが、一応念のため御知らせします。

以下、若干調査をした結果を掲げる：

G 氏のコメントに基づき、Joseph de Maistre を検索したところ、英文ウィキに http://en.wikipedia.org/wiki/Joseph_de_Maistre が見つかり、さらに、マニトバ大学にホームページが置かれていることもわかった。多分、s は読まず、現代フランス語ならば i をシルコンプレクスを付けて綴るのだろうから、エコの書中のメートルは、この人かも知れない。エコの文脈では、フリーメーソンやテンプル騎士団の話の虚構性を指摘した人だということが重要なのだが、上記 wikipedia の記事や、そのリンク先のマニトバ大学のホームページの記事では、そのような記述が de Maistre にあるのかどうかは直ちにわかるような状態ではなかった。して見ると、パリの街路名は、文字通りの「先生通り」なのだろう。Rue des Ecoles の近くにあれば、間違いのないところだろうが、手元にパリの地図帳がなく、確認できない（が、これまたネットで検索すればいいだけのことではある）。

上のコメントの補充。Rue Joseph de Maistre をネットで探したら、パリ 18 区、モンパルナスの近くにあった。かつてパリに住んでいたころ、18 区はいかにも遠くて、とても歩いては行けなかった。Rue des ecoles は、ほぼ毎日の散歩道だった。ネットの地図検索で、この街路はすぐ見つかったが、Rue de maitre という名の街路は引っ掛からなかった。

5 2009

6 2. (09.01.03) 年末の数学科の同期会の翌日、丸の内の丸善をうろついていて、

James K. Galbraith: The predator state
How conservative abandoned the free market and why liberals should too
Free Press (2008)
ISBN-13: 978-1-4165-6681-0
ISBN-10: 1-4165-6683-X

が山積みになっているのに気づいた。

あれ、この人、亡くなったのではなかったっけ、と思いつつ、まあ、その程度の関心しか持っていないというのに、購入してしまった。Acknowledgements (と言うか、日本風には「あとがき」に) 父親の病床での会話への言及があり、さらに、本文中に、my father, John Kenneth Galbraith 云々 (p.22) とあって、文字通り、不明に恥じ入るばかりであるが、考えてみれば、父親の著書も見たことはあっても読んだことはなかった。

そんなわけで、著者やその背景については、本書を通じて得られる以上の知見は全くないのであるが、序文を括る文章 (p.xiv) :

... A price of accessibility is that the evidence behind some of the strongest factual claims made here cannot be laid out in full; I rely on the reader's trust that, while errors are certainly possible, claims are stated in good faith, based on what I believe to be true. For my part, I found the task of writing in plain English and without habitual load of notes, charts, and tables extremely difficult. It certainly forced me to try to clarify my thought, and I hope that I have, to some degree, succeeded at that.

が、当然の釈明と言うべきではあろうが、まず、よかったのもある。

本書の執筆動機は、ハリケーン Katrina に伴う New Orleans の破壊に、現代の合衆国のシステムの崩壊を示す現象が見えたとして、その分析をすることであったという。脱稿の時期は、2007年11月以前であり、索引を見ても、次期大統領 Barack Obama 氏への言及はない。しかし、本書の内容は少なくとも最近四半世紀の、あるいは、むしろ大恐慌以来の、アメリカを中心とした政治経済史に関わるのだから、この期間内での全体動向 (トレンド) の把握に間違いがなければ、一二年の時間単位での揺らぎは副次的な重要性しかないとも言えるだろう (本書が大統領選挙のためのある陣営の政策提案に関係していた可能性はあるが)。

ハリケーン Katrina の被害とは何を意味するか。著者に拠ると、合衆国の公的システムの弱体化、具体的には、軍の補給、工兵、さらに、気象観測の部門の劣化の現れ (erosion of capability) であるが、それは、長い時間を掛けての、合衆国システムの民営化移行の結果であり、公的関心の低下に留まらず私的利益の優先 (predation) が、迅速な復旧を妨げ、さらに被害を拡大したと捉えるべきであるというのである。そして、その端緒は、四半世紀以上前の Reagan 革命 (1980 年) であったと言う。本書には、もとより、鍵となる経済学派や経済学者の名前が挙げてあるが、後に論じたい。

本書は、200 ページ強、三部 (全 14 章) から成るが、まだ、第一部の中ほどしか目を通していない。したがって、何か感想を述べられる状態ではないが、「市場」の万能視というアイデアの難を論じていることは明らかである。それを現在に至る合衆国の政治や経済の動向と絡めて述べているわけで、経済学や政治学の一般的な常識の欠如に加えて、合衆国の国内事情にも通じていない身としては、なかなか理解しがたい内容ではある。しかし、扱っている話題は、われわれの周辺にも多かれ少なかれ似たような現象は観察される事柄なので、類推というか、それなりに関心は持てるわけでもある。上での引用でも示唆されているが、概念の明確化には努力が払われており、また、そうしない限り、呪文「市場」あるいは「自由競争」によって金縛りになった身を解き放つこともできない。

著者の根本的な指摘は、経済学的な理念である「市場の自由」と政治的な理念としての「自由」とが四半世紀来合衆国では混同されてきて、その不適切さが看過できなくなっており、今や是正のために行動すべきであるということのようである。前半については、目を通した範囲でも、断片的ではあるが、著者の指摘の現象に同意できるところが多い。後半の、提案されるであろう具体的な是正策となると、まだ、目を全く通していないのだから、何も言えない。

とまれ、「市場の自由」という理念は抽象的な理想的な学術的概念であって、現実に成立するものではない。したがって、政策の根拠とする場合は、理想概念と現実との距離を正確に測定できるということが前提にならなければならないし、当然、その際は、社会的な観念だけでなく時間概念も伴わなければならない。しかし、政治社会の文脈では、保守派やリベラル派を問わず、それだけの緻密さや忍耐強さはなく、類似品で具体的な解釈が代替される。それが、著者のいう freedom to shop というわけであろう。そして、行き着く先は、「金があれば何をしてもよい」という社会ということになる。そういう一端として、片言隻句の類だが、今のわたくしの立場上、興味を惹いたものを挙げると (p.18),

... In a "free" capitalist society, with private schools and universities able to admit whom they please and charge what the market will bear, the freedom to choose one's profession becomes

in part the freedom to become what one can afford to become.

つまり,

It is not the calling that does the choosing [...], but the person who chooses the calling he or she can pay for.

要するに, 才能や訓練よりも, 金が物を言うというのである。しかし, 政治家や企業家はいざ知らず, 数学者や物理学者はそうは行かないとも言う。かくて (p.18),

Money cannot buy an appointment in a physics department, and for this reason, physicists constitute a group whose public values are not entirely to be trusted.

ということになる。

63. (09.01.12) The Predator State であるが, その後, 通勤の往復にぼつぼつと読んでいる。ようやく第一部に目を通し終えたところである。多少詳しく紹介すると, 第一部は, 標題 Another God that failed のもとに 6 章ほど含む。すなわち,

1. Whatever Happened to the Conservatives ?
2. The Freedom to Shop
3. Tax Cuts and the Marvelous Market of the Mind
4. Uncle Milton's War
5. The Impossible Dream of Budget Balance
6. There Is No Such Thing as Free Trade

である。何せろくに基本的な知識もない者(つまり, わたくし)が斜めに読み飛ばしているだけだから, 理解の程は大いにあやしい。ちなみに, 62 回の記事で言及していたのは第二章までの内容である。

第3章, 第4章は, 「Reagan 革命」を主導した Supply-side Economists と Monetarists を巡る経済政策の, 少し古い言葉で言えば, 「総括」である。たまたま 1982 年から 83 年に掛けて中西部インディアナ州の Purdue 大学にいたので, 第3章で扱われている税の簡素化のことは, 合衆国に納税していたわけではなかったから直接の関係はなかったとは言え, 滞在先の地方メディアでも論じられていたことをうっすらと記憶している。Purdue から受け取っていた金で何とか生活できていたためか, この短い期間でもドル一円のレートが乱高下していたことは後で知った。

実際に経済や政治の現場に関わっていたわけではないから, 著者が述べていることについてはそんなものかなという感慨しかないが, 恐らく, 経済学の基本的な素養のある人にとっては, そう不思議なことが書かれているわけ

ではないのだろう。要するに、合衆国の内部的な政治情勢と経済政策が密接に関わっており、しかも、国内の諸事情は、一応読み込まれているにせよ、国外の状況は管理外であること、さらに、政治的に、選挙、特に、大統領選挙、を意識して政策が導入されるので、短期的な、つまり、目先の効果の追求になること、あるいは、選挙民の感情に訴えやすいものになることなど、そう言ってしまうと身も蓋もなくなるようなことはわかる。

第3章以下、4章、5章を読むと、そこでは、第二次世界大戦後の世界経済史について、実際、扱われているいろいろな事件は、わたくしも断片的には耳にしたり、あるいは、経験したりしてきたわけだけれども、それらについて、結果論的な、つまり、政策立案者の意図や期待とは大幅に違った展開になってしまった事情の分析や、その意味の説明が試みられていることがわかる。もちろん、根底には著者の思想があり、また、経済政策の本来のあり方についての頑とした信念がある（前の方の章に、そのことを表した文章があったのだが、少し時間が経ってしまったせいか咄嗟には見つけられなかった — 経済政策の目的は国民全体の福祉 well-being の向上にあるというような趣旨だったと記憶している）。

また、Bretton Woods 体制の効果、その終焉の意味、固定相場制から変動相場制への移行、国際競争、(そして、執筆段階では、サブプライムローンの問題のある程度の分析まではできていて、金融危機の予測など) 実は未だに生々しいところもあるけれども、大変面白い。結局、難しいのは、経済理論を現実の世界に当てはめることであり、その際、政治的な動機が優先しがちなために、混乱が生じてしまうのは避けられないということのようである。しかも、その結果として、アメリカの国際競争力の継続的な劣化が生じているとは... .そして、1980年代の日系企業群の「成功」は、いわば、その間隙にうまく乗ることができた、つまり、当時はそういう能力があったというわけでもあるらしい。

もちろん、経済政策では、何というか学術的な硬直性に引きずられ、政治的状况のもとで、おかしなことが生ずることもあるようである（というか、それが常態か）。第6章では、Smith や Ricardo の古典的な交易理論を扱っているが、もちろん、わたくしはきちんと勉強したこともない話であって何とも意見の言いようのないことではある。著者は

I can say flatly: Ricardo was wrong. Comparative advantage has very little practical use for trade strategy. Diversification, not specialization, is the main path out of underdevelopment, and effective diversification requires a strategic approach to trade policy. ...

At the same time, it remains beyond dispute that Smith, at least, was right. ...

と言う (p.70) . Smith のどこが正しいかは著者の言説に当たるしかないが, Ricardo の理論とされるもの comparative advantage は二国間でしかも生産上は独立した品目についての話であって, 全く現実的でないことは, 実際の世界を観察すれば素人にも直ちにわかることではあるが, 「自由貿易」というイデオロギーの背景にあるのが問題だというわけである.

さらに, Bretton Woods 体制崩壊以後の, ラテン・アメリカやアフリカの事例を挙げて, (国際金融と「自由貿易」の関係を検討した後で)

Here free trade showed its ultimate consequence: the choice between dissolution and civil war.

と言う (p.80) . 東欧圏でのチェコスロヴァキアの解体やユーゴスロヴァキアの内戦や解体も, この線で解釈できるのだそうである. 「国際金融」の実態が, 関係者の資質は

In these circumstances, bankers do what people of means have always done: they trust their own system of beliefs and their affinities of politics and class

という状態 (p.74) であり, したがって, 短期的過ぎ, 視野も狭いという実態に合わない融資条件が課されるようになったというわけである (後半は事実への直面に誠実でなければならないという意味で, 批判する側も留意すべき点ではある).

第6章の終りの方では, 中華人民共和国の国際経済上の存在が重くなった理由を分析している. 著者は, 公私にわたって, 中国と深い関わりがあるようであるが, 米中両国民にとって二国間の貿易はいずれにも利があることを指摘した上で,

[...] And this much is certain: the Sino-American marriage of convenience is not the product of comparative advantage, and it did not emerge from free trade.

と述べている (p.86) .

第二部は, The simple economics of predators and prey という標題である. まだ全然目を通していないが, 言葉からの類推では, かつて多少とも関心を持った Volterra-Lotka の方程式系が連想され, そういう観点を加味して読めるかなと期待している.

64. (09.01.12) 昨日は, 長崎歴史文化博物館に行ってきた. 企画展『バチカンの名宝とキリシタン文化』が12日で終了するからである. ここには, ヴァチカン美術館の蔵品フラ・アンジェリコの「聖母子像」(1435) が出品されているというので, それをお目当てに行ったわけである. 思っていたより小さな絵であったが, 様式性の高い実に美しいものであった. もとより, 保

存や修復の状態も最善なのであろうが、もう少し近くで（50センチでよい）じっくりと拝ませていただきたいと目の悪い身としては思った。不謹慎ではあるが、ビノキュラーを持参すべきであったろう（展覧会訪問の一般的嗜みでもあるはずだが）。

今回は天候もあやしく、JR九州の（白い）「かもめ」で往復したが、これはJR九州の車両としては早期に国際デザイン賞を受賞したものかも知れない、というのは、先日利用した「リレーつばめ」と違って電源がなかったからである。片道おおよそ2時間そう遠いわけではないが、福岡に赴任してからほぼ四半世紀、長崎に鉄道で行ったことは数えるくらいしかない。車やバスと違い、途中で書き物ができるのが鉄道の長所だが、揺れを考えるとPCが使えるとありがたいと思う。指定席には電源が欲しいところである。

さて、上記展覧会であるが、去る11月24日に行なわれた「列福式」の関連行事であり、当然ながら、キリシタン弾圧関連の資料の展示が充実していた。購入した図録は帰りの車中で眺めたが、五野井隆史教授の論考「元和大殉教への道 — 禁教令発令後の長崎とキリシタン」、越川倫明教授の「悲しみの聖母を巡って」以下、いずれも興味深かった。越川教授の文中には、「聖母連祷」とされる祈りの句が引用されていたが、そう言えば、小学校時代（当時横須賀にあった清泉女学院）には確か毎日昼休みに廊下に跪いて、「めでたし聖寵満ち充てるマリア…」と唱え（させられ）たものだったと思い出した。口先はともかく頭の中では全く別のことを考えていたことを覚えているが、非信者であり、また、子供でもある以上、誰もがそんなものではなかったかと思うけれども、しかし、このことを誰かに言って確かめたことはない。「われらを試みに遭わせ給え」というような句もあったと思うが、今となっては残念なことに詳細は覚えていない（もちろん、調べればすぐにわかることだが）。越川教授ご引用の「聖母連祷」は細部ではこれとは一致しない。

五野井教授の記事で興味深かったのは、1610年代半ばより前は、禁教令の傍ら、一種の地方ルールのもとでキリシタン関係の施設が残っていたことである。特に、この時期に破壊された施設のうち、韓国虜囚関係の教会もあったというので、かねてより抱いていた疑問が蘇った。つまり、16世紀末の秀吉の朝鮮出兵の際には、キリシタン大名も多数加わっており、当然、宣教師も同行したのではないかという疑問である。日本に連れてこられた連中の中に滞在中キリシタンが生じたのはわかる。中には帰国したのもいたであろう。かれらはどうなっただろう。今回の列福式には韓国からの列席者もいたはずであるが、教会所属者という以上の意味は、列福された人びとの名簿を見る限り、なかったのではないか。恐らくキリスト教信者は（さまざまな経路によって）往時の李朝下にもいなかったわけではあるまいが、弾圧があったのではないかと想像はしている。確かに、展示されている世界地図からは、朝鮮半島に関する西欧世界の知見が極めて貧しいものであったことは推察されるが、だからと言って宣教の対象として意識されていなかったというわけで

もないだろう。

五野井教授の記事でもう一点印象に残ったのは、元和大殉教で列聖（つまり、カトリック教会にとって本質的な貢献があったと）されたのが52名、処刑されたのが55名で、この差3名が、いわば、天国に行けるということを楽しんでいなかったと判断されたらしいということである。殉教図は多数展示されていたが、処刑場を取り囲む群衆が晴れ着を着ていて、絵だからなのか、それとも実際キリシタンが豊かだったからなのか判断が付きかねていた。しかし、上の記述から、処刑場に信者が晴れ着で参集したということには、危険を承知でというよりも、天国の門が開かれる機会だからという思いがあったのではないかと、思い当たった。その上、300年を経て、「旧家」から重要なキリシタン史料が発見されているようだが、一体かれらの先祖は何を考えていたのだろうか。

往時の日本がもともと実に不思議な環境にあって、それが異世界からの刺激に絡んで、さらに明らかになったのがキリシタン現象であったと思わざるを得ない（今や、カトリック系のミッション・スクールでは信者である教員の確保が九州でさえも困難になっているというのだから）。

65. (09.01.22) 先週は週央に東京に行く用務があり、用務内容はなかなか得がたい経験をすることであった。ついでに、(修士論文までご指導いただいた) 恩師の生誕百年記念として、師の academic grandsons が組織したチュートリアルとワークショップを覗いてきた。時間的都合で、聞いた講演は2件だけだったが、一つは、わたくしの学位論文の主査の人のもので、かれは正真正銘の師の academic son だから、わたくしは実は academic grandson なのかな、などと思った — もっとも学位の授受と繋がっている academic genealogy は（日本では特に）意味がないかも知れないし、「数学」なら、今でも旧帝大級の大学の大学院の教授ででもない限り、直接の academic descendants は作れないと言ってもよいわけである。問題は「先祖」の方だが、海外留学をした初代の教授たちの師筋（学位の主査）を確認しないと、われわれの多数が（西欧、つまり、世界の）近代科学史の系譜に、この意味で、載っているかどうかはわからないことになる（例えば、誰それは、Sophus Lie の学問的末裔であるとか、わが学問的先祖には Gauss がいるなどとは言えないわけである）。

東京往復の飛行機には The Predator State を持って乗ったが、そうそう機内で読めるものでもなかった。さて、この本の第二部は、4章から成る：

Part Two : The Simple Economics of Predators and Prey

7. What the Rise of Inequality Is Really About
8. The Enduring New Deal
9. The Corporate Crisis
10. The Rise of the Predator State

第 63 回の記事の末尾で予想したような, Volterra-Lotka 系, つまり, 捕食者と被捕食者の競合関係を追跡して平衡状態の有無を論ずるといふ話に近いものではなかった. もとより, 経済現象, 交易現象は, 捕食者と被捕食者という把握が正しいかどうかは別として, 基本的に多数の要素間の相互競合関係を時系列的に論ずるのが本来だろうが, 要素数が多すぎたり, 時間差や地域差による相互作用効果の分析的な評価が困難であったりして, なかなか信頼に足りるモデルが構築されて来ないという事情もあるのだろう. まして, 企業経営や経済運営の現実となると, データ変動に基づきつつ対応を繰り返していくわけだから, このような反応機構の構造の問題もある. そして, 経済活動の目的や目標はそもそも何かと考えると, 一定の期間ごとにしかるべき利益を上げることに尽きるわけだが, 経済活動の当事者は人間であり, その場は人間の社会であるということが, さらに, 事情を複雑にする. しかし, だからこそ, Volterra-Lotka 系とは言わないものの, 政治・経済現象を記述する特徴的な基礎方程式系(「総合経済モデル」)が開発されるべきではないかと思う. それは, 古典的な経済理論, 例えば, 63 回記事で言及した Ricardo の交易理論の水準のものではない. 他方, 実際の経済取引はさまざまな技術を駆使して行なわれている(だろう)が, それらのうちの原則度・原理度の高いものは基本的に反映するように構築されていないようでは基礎方程式系とは言えないだろう(例えば, ウェブ上の仮想経済世界的设计原理は「総合経済モデル」を導き出すための十分な内容を持っているか).

ずいぶんと突飛な感想だが, 今まで目を通したところまでで, こんな感想を覚えた. 本書は, 随所に著者の感情が表出した, 非常に党派性の強い記述のものであるが, まず, 第二次大戦後のアメリカの政治経済史の概説として, 非常に面白い. もちろん, 冒頭にあるように, 今日関心が動機であるが, そのためには, どこで軌道が「ゆがんだ」かを探り出さなければならないのだから, 優れた概説史が先行しないようでは話にならないだろう.

さて, 第 7 章では所得の格差 *inequalities* を論じているが, 賃金格差と収入の格差は区別しなければならないことを強調している. 賃金格差は, 労働の報酬に関わることであり, 労働市場を想定して賃金が決まるとしても, 失業率が低いときには賃金格差が縮まるものであり, 当然, 好況のときには, 格差が縮まり, 経済活動の効率が増加し, 一般的な生活水準の向上が見られることに, 近年の事例を引きながら, 注意している. これに対し, 収入 *income* の格差は, 非労働的収入, 特に, 金融資産の運用によって生ずるもので, 生産活動とは無縁であり, むしろ, このような収入を偏重する者(の階層)がバブルの発生など正常な経済活動を阻害するものであるという. そして, 例えば, この章の最後では,

Why should we care? An economy that moves from bubble to bubble is unsustainable, and bubbles of this kind create a particular kind of wealth, vastly greater than any other in our

society. ... They therefore foster a particular concentration of economic power in the target companies and in their banks. Economic power naturally translates into political power.

と述べて、

And so one has to ask, Are the people most favored by an inflating market also those best suited to govern the country and, by extension, the world?

と問う。つまり、

The deepest issue raised by the inequality of economic incomes is, therefore and as ever, the distribution of political power.

と整理し、

That word [=Oligarch] reflects a general understanding that private persons with such wealth cannot be expected to serve any interest other than their own.

と指摘する (p.102)。Oligarch とは、ここでは the people most favored by an inflating market を指している。かれらが predators として指弾されるのである。そして、こういう簡単なことを覆い隠してしまうような認識の慣習、それを著者は myth (of Free Market) と言うのだろう。

ただし、第7章で労働を論ずるにあたって、著者は、

Work is unpleasant, and the motivation to do it efficiently is, under all normal conditions, associated with some prospect of gain. That must mean hierarchy: differential pay for seniority and responsibility and promotions for performance.

と言う (p.94)。戦時などの例外もあるが、との注意はあるが、unpleasant という決めつけには抵抗を覚えた。

第8章以下が、恐らくは個人的な恨みも絡んでか、非常に生き生きとして、臨場感も感じられるのだが、すでにこの記事も長くなりすぎた。続きは、別の記事にしたい。

なお、Obama 大統領の Inaugural Address で述べていることは、本書とつき合わせて眺めると、なるほどと思われる点が多い。つまり、ここまでの経過は、リベラル派にとっては大筋で共通了解になっているのだろう。就任演説の前の方では、米国経済の悪化を

a consequence of greed and irresponsibility on the part of some

と指摘し、一方、後の方であるが、market について

Its power to generate wealth and expand freedom is unmatched.

とも述べている。就任演説では、アメリカ革命の父(=the father of our nation とある) Thomas Paine のことを教えてもらったりで、大分勉強になった。

66. (09.02.01) 一月も終わり、James K. Galbraith の本も何とか目を通し終えた。当然、65回の記事の続きを書いておくべきだが、通勤の途上にかけて、少し眺めて、うつらうつらという状態なので、前の方はどんどん忘れてしまうという次第で、まとめることは結構困難な作業とわかった。

第2部残りの3章であるが、そんなわけで、The Predator State に目を通し終わったときには完全に朦朧とした状態になっており、ただ、後々の章での繰り返しも多いので、改めて拾い読みをすれば思い出す点も少なからずあった。著者は、第8章では、Reagan 革命以来、格差は確かに凄く広がったが、何だかんだ言っても、あの George W. Bush 治下でさえも(つい最近までの)米国は繁栄していたし失業率も低く、賃金水準も上昇に転じていたと述べた後で(本書は一昨年暮に脱稿している)、

How can this be? What accounted for the resilience of the American economic model? How does it happen that the model worked out so well, in general terms and for so long, as it did, surviving the abuse of monetarists, supply-siders, and free-marketeters?

と問う (p.103)。そして、答えの鍵は、

very robust institutions created more than a half-century ago by the New Deal and its successors.

と言う (p.103)。この institutions の概要を次に説明するのだが、本質的には、かつての社会主義国、特に、共産体制末期の東欧圏の soft budget constraint に近いものだと言う。ただし、

... They are, rather, hybrids, even chameleons: private economic activities supported, leveraged, guaranteed, and regulated by public power; public institutions aided, abetted, and buttressed by private money. They are elements of an American social welfare state but dressed up, in characteristically American fashion, in the guise of a market system.

と注意する (p.104)。in the guise とあるように、実態は、"free-market" economy ではないのだが、逆に、むしろ、"free-market" 性の強調がされてきたと言うのである。

米国版 soft budget constraint の具体的な内容は、military, agriculture, health care, higher education, social security, housing などであったと言い、これらが Reagan 革命後の過程で変質しつつも、

Overall, the New Deal survived Reagan quite intact, and the economy recovered – partly led by housing, partly by technology, partly by military spending. This was not because the conservatives around Reagan succeeded but because they had failed.

と観察する (p.114)。著者は、章末で、かれらについて、

Rather than defeat the system, they decided to join it. And turn it to their own purposes. Without saying a word.

と言っている (p.114)。

こういう紹介の仕方では切りがないのだが、素人の浅ましさを、簡単にまとめられない。別に記事がまだ必要なようである。

実は、ずっと後の方、第3部の最後の章では、改めて、国際貿易を論じているが、そこでは Bretton Woods 体制崩壊後も、ドル体制が維持された理由をいくつか挙げて説明している。米国の世界の安全保障や世界経済における特殊な位置が関わっているらしいことは容易に想像が付くことで、また、その理解が的確でない限り政策に誤りが生ずるということも納得のいくことではあるが、しかし、こういうところは verbal なままでは、大変面白い、感心したと思っても、それだけでは説得力が生ずるわけではない。つまり、何をすべきかがわからないわけである。かと言って、技術的詳細に立入ったところで、恐らく、見えてくるのは考察対象のデータの限界くらいかもしれないので、やはり、行動には直結しない。要するに、結果を見てからの論証がそもそも精緻に行なわれているのかどうか、立場によって解釈が多様になる理由を探るには、まず、この辺の検討が必要なようである。もちろん、われわれのレベルで心配するようなことではないのかも知れないが。

67. (09.02.10) 先日来、いろいろと優先度の高い行事があり、その間を縫って、北九州市立美術館の『特別公開ボッティチェリ「聖母子と天使」イタリア美術とナポレオン』というのを覗いて来た。

展示品中、15世紀の絵画は、ボッティチェリとジョヴァンニ・ベリーニ「聖母子」で後は時代が下がり、それこそ切支丹時代の洋風画と時代的に重なるもので、作者たちは長崎やマカオの絵画工房の絵師たちと系譜の上で繋がっているのかも知れない。

この特別展示は、何か、三題噺のようなまとまりのない標題が付いているが、実は、コルシカのフェッシュ美術館の所蔵品の公開であった。ボッティチェリ云々は嘘ではないが、比較的初期の作品であるらしく、先日長崎で見たフラ・アンジェリコのものに比べるとはるかに大きな板絵ではあったものの、壮麗という点では見劣りがした。比較しての話だが、象徴性だけではない、まあ、世俗画に近いとも言える。ベリーニの方はボッティチェリのものよりも大分小さいが、作品の状態はもっとよかった。

ところで、三題嚙の標題と言ったけれど、もともとのフェッシュ美術館の性格なのだろう。展覧会としても散漫な感じであって、さんざん迷った挙句、図録を購入しなかった。したがって、詳細は不明なままであるが、この美術館は、要するに、ナポレオンが中心の美術館（博物館）であるらしい。フランスではルーヴルに次ぐ規模であると解説にあったから大博物館なのだろうし、現に、展示品では、ナポレオン関係のものが興味深かった。デスマスクもあり、別の壁面に貼ってあった小学生の感想文では、少し開いた口から歯が覗いているとの指摘があった。わたくしはといえば、死んだときは禿げていたなと思った程度なので、小学生の方がはるかに鋭い。

なお、この特別展示の仏文の標題は

Collections d'oeuvres italiennes, napoléoniennes et impressionnistes corses

であった。ところが、展示品の解説では、ナポレオン関連のところが十全ではなかったように思う。図録を購入しなかったことが悔やまれるところである。フェッシュ美術館がナポレオン・ボナパルトの叔父のジョゼフ・フェッシュ枢機卿のコレクションをもとにしていることはわかった。母方であったと記憶するが、枢機卿を出す一門は名門のはずであり、コルシカ島の位置からフランスやイタリアと深い関わりがあったであろう。一方、ナポレオンとカトリック教会の関係もあり、ナポレオンを中心とした前後百年くらいの歴史記述と地理等の図表のパネルを展示してほしかったところである。系図も断片的で、例えば、ルイ・ナポレオンの遺児（元皇太子）、19歳でアフリカ東部で戦死したらしいが、そこだけを述べられても困ってしまう。そもそもナポレオン関連のものは美術品や工芸品としての価値よりも本当は過ぎ去った過去の歴史資料としての価値の方が大きいと考えるべきものなのだろうから、少なくとも、そういう同時性の「ストーリー」—— 一種のノスタルジア —— を伴っていることが大切なはずであろう（もっともボルドーの裁判所内の確か少年法廷の壁面に、戴冠式の際のナポレオン1世の大きな絵が掛かっていたことを思い出す。作者は記憶していない。この建物の取壊し前の一般公開の折に見たのだが、裁判所自体が博物館的な性格も持たされていたと思われる。建替えられた新（といっても十年以上経ったと思うが）裁判所ではどうなっているのだろうか）。

ところで、北九州美術館へは高速バスで往復した。車内で、Galbraith を若干眺め直したりしたが、前回66回の記事がその「成果」(!)であった。まだ、しばらく続けないと紹介は終わらないが、やや疲労気味である。

よりタイムリーなものとしては、手元に届いたSIAM NEWSの第42-1号（Jan/Feb.2009）に去る11月18－19日にNew Brunswickで開かれた

”The Economic Crisis and the Future of Financial Engineering”

に関連する Rene Carmona と Ronnie Sircar の記事 Mathematics and the Financial Crisis (p.2) があった。関連する数理系の優秀な人材を擁してデリヴァティブ取引など金融工学を駆使した結果が経済危機を招来したとして、金融工学の専門家, "quants" というらしいが、かれらは戦犯扱いだが、実際は大間違いで、金融工学を正しく使いこなせなかったというような金融機関の構造が問題であり、かくて、その記事は、最後に

... Banks are restructuring their modeling teams to make them independent of traders and have them report directly to management. The problem on Wall Street and in the ratings agencies has not been the excessive influence of science and mathematics. The problem has been too little mathematics.

と述べている。もちろん、ここでの話題は技術的な当否に関するもので、predation は直接は関わらないが、しかし、65 回の記事での「明後日方向の」感想とは関わることである。実際、SIAM NEWS の記事中のパネラーの写真説明にそのうちの一人 (Mark Davis) の言として

It's not a realistic way of modeling things. When the house falls down, you can't say you're fine because you're in the half that didn't fall down. [The one that did] brings down the value of what's left.

が引用されている。

68. (09.02.17) いつまでも James K. Galbraith の書物の周辺をうろろしてられないので、まさに、脱兎の如しではあるが、残っている部分を処分してしまおう。

言うもでもなく、この本で一番重要なのは第3部 Dealing with Predators である：

11. The Inadequacy of Making Markets Work
12. The Need for Planning
13. The Case for Standards
14. Paying for it

理解の程度ははなはだあやしい上に、一応読了してから時間も経ってしまい、さらに、現下の世界の経済情勢の急展開やオバマ大統領のもとでの米国の経済政策の動向など具体的な状況が先行している中で、この書物の読後感が薄れてきたことは白状しなければならない。

極めて、大雑把に言えば、大恐慌以来の New Deal やその後継政策の意義を再評価し、その新たな継承を図ることが、いわば、New Deal 以降の政治経済政策の綻びに乗じて取られてきた保守派の反動政策による米国社会の破壊、

つまり、経済格差の増大に基づく不平等性の増大や社会的安定性の喪失など、問題の解決策になるということではある。見ていない書物を挙げて、「つまり」と言うのは憚られるが、要するに、James は父 John Kenneth Galbraith の *The New Industrial State* の本旨の線に戻れと言っているようである。もとより、親孝行の、あるいは、親を尊敬しているから、という単純なことではなくて、世界観、社会観、経済観、人間観を父親と共有しているからであろう。基本は、生身の人間たちが作り上げているアメリカの社会が、その成員たち、つまり、アメリカ市民が満足を分かち合いながら、相応の豊かな生活をおくれるということを保障するように経済政策はあるべきだということであろう。もちろん、今日では、「アメリカ」というのを「世界」と読み替えられれば理想であろうが、少なくとも「世界の一員であるアメリカ」と読み替えなければならないと著者は強調している。

さて、間を全部跳ばして最終章（14章）まで行くと、著者は、世界経済とドル体制の当面の維持に意義があることを前提に、つまり、そのような分析結果を得て、米国の取りうる政策についての留意点を3点挙げている：

- 1) ドル体制のもとでの米国は世界経済上特別な位置にある
- 2) 財政および軍事の両面での安全保障に深い関係があることが分析の結果明らかになったと考えるので、各国が信頼を置くに値する集団的な軍事安全保障体制を作り上げることが米国にとって有利である
- 3) 米国内の適切な経済政策は重要であり、投資を呼び込み、ドル体制の維持に有効である。

なお、第2点に関連しては、

A system based on U.S. investment and leadership in a system of collective security might – and here the word might is carefully chosen – have a stronger argument for the continuing financial support of the wider world.

と言っている (p.205)。ただし、「テロとの戦い」が無為な政策であったことが明らかになったように、

... So, plainly, the effort to continue with a world financial system based on the perception of U.S. power risks coming to an end sooner or later.

と指摘している。集団という所以であろうが、一方で、米国が中心でなければならず、そういう安全保障体制をどう構築できるのだろうか。やはり、「当面の」という断り書きは要りそうだが、それは仕方ないからなのか。

第3点については、合理性があれば対米投資は増大するので、合理的な政策性を進めようではないかと言い、

A program of planning and of standards, particularly if it is aimed at providing a new generation of investment goods to the

world and especially if that generation of goods is itself directed at meeting the challenge of climate change, could in fact move the world back toward a dollar-centric system, preserving the leadership position of the United States and thus the country's capacity to lead effectively.

と言う (p.205)。ここで、standards というのは、規制のことである。もとより、上に挙げた「アメリカ市民が満足を分かち合いながら、相応の豊かな生活をおくれるということを保障する」ために有用なものを指す。

とまれ、こうして著者は、まだ、アメリカは壊れきってはいないとして、以下の課題に答える力が残っているはずだと言う。すなわち、

The world needs a financial anchor: the United States provides one. The world needs a scientific and technological leader: the United States has been, is, and can continue to be that leader. The world needs a country with the capacity to innovate, change, define the course of economic development going forward. That has been the historical American role.

である (p.206)。

そして、

From that point of view, and so long as this opportunity may exist, then – to borrow once again from Margaret Thatcher – is there any alternative ?

として、最終章を終える (p.207)。

もちろん、以上はアメリカの話である。しかし、日本にも predators は潜んでいよう。アメリカ型のものではなく、日本固有の種であろう。したがって、アメリカでの対策がそのまま有効であるという保障はどこにもない。predator を、日本種も包括するように、正確に定義しなおし、アメリカ種と日本種を明確に分類してみせた上で、翻訳なり解説なりを試みないと、この Galbraith の書物は少なくとも日本向けには、もし、著者が最初から日本の政治経済状況を念頭に書いたとしたら決して意図することはなかったに違いないような間違ったメッセージの発信になってしまう。

predator をどう定義しなおしたらよいだろうか。自らとその所属する直接の集団の利益を図るために自らの影響力を利用しつつ公的規定の運用や公的組織の運営を図る者というべきか。公的性格を偽装した利権の受益者と言い換えるべきか。アメリカ種の predator は Galbraith の説明では「政商」的要素が強そうだが、日本種では必ずしもそうではない。ソヴェート種、ロシア種や中国種ではどうか。まだ、定義が甘く、判定条件が明確ではないから、深く立入ることはできない。

69. (09.02.20) 58 回記事で言及した杉原教授の著書

杉原厚吉：立体イリュージョンの数理（共立出版 2006）

ISBN4-320-01805-2

を先週末の旅行に携行し、数日経ったところで漸く目を通し終えた。きちんと書いてある本は、やはり、気持がよい。

この旅行自体は、実は大変情けないもので、急逝したかつての同僚の葬儀に片道七時間掛けて往復したものであった。古刹の住職と大学の教員との二足、いや用務的には三、四足、の草鞋を履いて頑張って、そうして、死んでしまった。彼の死については何とでも言えるだろうが、弔電で済まらずに、わざわざ通夜と葬儀に顔を出したのは、まあ、わたくしなりの想いがある – ことさらにそう言うまでもないことだが。

先代が遷化してわずか5年である。彼からは、先代、つまり、父上には自分は到底及ばない、と何回か聞いたことがある。葬儀の朝は、やや早めに着いたこともあって雪のちらつく中を本堂の周りを少し歩いてみた。墓域の石垣のうちには先代と彼が親子で積んだ石も混じっているのだろう。本堂の脇に、慈悲観音の銅像が立っていた。寄進者はほとんどが女性のように、かれの奥さんの名前もあったから、建立の時期から察して、新婚の頃であったのだろう。彫刻家の名前は確かめられなかったが、大変よいお顔の観音様であった。

住職の通夜、葬儀というのは大変なものであった。かれは、まだ、住職としての格が高かったとは思われないから、これでも相当に略式だったのであろう。檀家総代の苦渋に満ちた挨拶や弔辞を聞いていると、住職の果たすべき役割や住職への期待が、いわば、地域の浮沈と一体化しているということの察しが付く。学界に対する貢献を考えても同じことではあるが、かれは、その一身にさまざまな期待と、また、それに応えるという責任を負っていることを自覚しておくべきであったろう。まだ、死んでしまうなどという贅沢は本来許されてはいなかったのである。

さて、杉原教授の本であるが、一応章立てだけ挙げておく：

- 第1章 遠近法
- 第2章 遠近法と射影幾何学
- 第3章 立体視の三つの原理
- 第4章 遠近法と錯視
- 第5章 視点のマジック
- 第6章 凹凸逆転の術
- 第7章 不可能物体の描き方
- 第8章 不可能物体の作り方
- 第9章 不可能な物理現象の創作
- 第10章 両眼立体視とイリュージョン
- 第11章 運動立体視とイリュージョン
- 第12章 鏡のマジック

わたくしにとっては、遠近法関連の最初の2章だけで当座の用は足りると思っていたのであるが、一泊二日片道七時間、いくら故人を偲び旧交を温めつつ夜更けまで飲むというようなことがあっても、相当の部分に旅行中だけで目を通してしまう。後は、通勤の行き帰りで読み終わったわけだが、その結果、実は、最初の2章だけでなく、第5章、さらに、第12章も、今、ぼつぼつと準備を始めた八月の集中講義の参考になることがわかった。

この本を読むのには、立体幾何と（3次元ではあるが）線形代数の素養が必要である。しかし、いわゆる理系志望の高校生であれば十分にこなせる内容である。実際、かれらには、受験問題集で細切れの問題を、何とか機械的に処理することだけに時間を費やすのではなく、こういうストーリーのあるものにもしっかりと取り組んでほしいと思う。もっとも、素養として要求されるものは、本来、理系志望の高校生でなくても、ある程度の教養人ならば当然身につけていなければならないはずのものであり、今の日本ではわざわざこの程度のことまでも断らなければならないのだと思うと、何とも嘆かわしいことではある。

70. (09.02.23) 実は少し前になるが、天神の丸善で

宇沢美子：ハシムラ東郷 — イエローフェイスのアメリカ異人伝
東京大学出版会. 2008.

ISBN 978-4-13-083050-8

という書物を見つけ、購入してあった。もちろん、手に取ってばらばらとめくり、興味を覚えたからであるが、著者の「宇沢」という姓に惹かれたことも否めない。著者は慶應義塾大学の教授であるが、まあ、「正統的」とでもいうのか、数学者を含むロバートな日本の知的階層というものを連想したこともある（実は、はなはだ屈折しているけれど、わたくしもこういう層とは無縁ではない）。案の定というべきか、宇沢教授の場合は、さらに、アメリカのリベラリズム（やフェミニズム）も同時に重なっていて、それらはこの本の「あとがき」を見るだけで基本的には確かめられることであるとも思う。もって廻った言い方をしたが、本書を手にとった段階で、その内容のある程度見切ったかなと思った感がなかったわけではないのだが、それは勘違いであって、実際、この本は大変面白い。以下に、個人的にそう思うに至った感慨も述べるけれども、それとは全く独立に、激賞に値すると思う。何というか、わたくし如きが口にできることではないのだが、アメリカというものの姿が実によく見えると、その…、想像するのである。例えば、本書54-55ページのリンカーンに関する記述を見ると、100年前と今も「アメリカ合衆国」という仕組の根幹は変わっていないのではないか、という感に襲われる。

ハシムラ東郷というのは、ウォラス・アーウィン Wallace Irwin という白人諷刺作家が作り出した「日本人学僕」(Japanese Schoolboy)であり、1907年35歳として、米誌に登場したという。作者アーウィンは、ハシムラ東郷を

装って当時の米国についての一種の底辺から見えるであろう景色を描いたというのである。著者は、ハシムラ東郷が登場する前史ともいうべき時代、作者の体験、ジャポニズムから排日運動、さらに、太平洋戦争中の状況、さらに、今日ハシムラ東郷が完全にも忘却されてしまった事情の分析を行なっている。

ところで、1907年に35歳という、ハシムラ東郷の生年は1872年明治5年となる。東郷よりは10年ほど前になるけれど、わたくしの祖父も1896年から1900年の間は在米ということが慶応義塾の塾員名簿から判断できる。塾の正科を卒業したのが1891年12月ということも友人を介して入手した福沢研究センターの資料でわかった。このとき18歳であったから、東郷は祖父とほとんど同年輩ということになる（この点に関連して、本書164ページにある野口米次郎の履歴の記述には塾の史料による検証があってもよいだろう）。亡父の最晩年の片言隻句によると父親の遺産をもとに写真家を目指してフィラデルフィアに渡ったというのだが、今のところ確かめようがない（友人からは調査方針のヒントをいくつかもらったが、時間がなくなってしまった）。祖父は、塾員名簿には、日米直輸出入商とあるが、実態は、日本人学僕ではなかったかという気がしないでもないのである。ともかく、塾員名簿には1901年には横浜の貿易商として載っており、関東大震災の年の11月末に世を去っているが、そのときには、震災でも（後年の戦災でも）壊れなかったという洋館の邸宅を建てている。祖父の死後やがて店は倒産し、邸宅も人手にわたってしまった。この邸宅のことも含め、亡父は最晩年まで少年時代のことを滅多に話題にはしなかったように思うが、わたくしも余り関心を持ってはいなかったということもある。そのためか、この邸宅はわりと最近まで残っていたというのに、わたくし自身は見たことがない。祖父の名残としては、セットとして残っていたとはとても言えないが、わたくしの幼時でもイニシャルの刻まれた銀の食器があったような記憶があるから、これは「学僕」として住み込んだ家があったとしても矛盾はしないだろう。

また、母の叔父、つまり、わたくしにとっては大叔父、も慶応を修えてすぐにニューヨークに渡っているが、時期としては二十世紀初頭であろうか。渡米直前に撮影された両親や兄弟姉妹、つまり、わたくしの曾祖父母と祖父や大叔母らとの家族の集合写真が残っており、祖父が帝国大学の学生服で大叔父は三つ揃いのスーツ姿であった。してみると、祖父は高等学校を卒えており、大叔父は二十歳前であったろう。大叔父が「学僕」生活を送ったかどうかは定かではないが、異人種間結婚をし、関東大震災の折には家族で鎌倉の「海浜ホテル」に滞在していたらしいことは幼い頃に母の遠縁の婦人たちから聞かされた話から見当が付くが、大叔父たちの人生の詳細を記憶している人がどれだけ残っていることや。かれらの孫たちも大叔父が欧州からの移民と同様の入国をしたかのように思い込んでいる様子があった。敗戦後、この大叔父たちからの荷物がずいぶんと生活を助けてくれたような気がするが、

一方、大叔父がなかなか米国に帰化できず悩んでいたという話も思い出す。大叔父夫妻は確かわたくしが小学校二年のときだったか鎌倉でほぼ一年過ごした。日米野球とか日米水泳、さらに、大相撲などに連れて行ってもらった記憶がある。印象的だったのは、滞在中利用していた部屋の襖などは、実は、わたくしたちが破いたりしてしまったままだったのだが、大叔父夫人、つまり、大叔母が手に入った包装紙や千代紙やさまざまな色彩のある紙片を上手に使って、キルトというかパッチワークというか、そういうものに仕立て直してしまったことである。

ところで、本書の第6章、第7章は、排日運動から戦時下の反日とハシムラ東郷やアーウィンの小説「日ノ本」とが論じられる。LとRを聞き分け発音し分けることは確かに日本語で育ったものには難しい。大方は文脈で見当が付くから、そう神経質にならなくてもよいとしてもである。「日ノ本」の解説では、背景にLとRの発音の問題もあったようだが、実際、大戦中に、日系人を取り調べるに際し、一世か二世かを見分ける、むしろ、聞き分ける方法として、確か、LALAPALUZEと発音させるというのがあったと、これは上述の大叔父から聞いたと思う。もっともLとRとが混在していたかも知れないし、UはOOであったかも知れないが。

本書の最後に、結語に替えてとして、ウォラス・アーウィンの手紙が引用されている。「常識というもの」のあるべき姿が読み取れるようで、本書の著者も共感を覚えておられるのであろう。実際、一旦定着したステレオタイプを払拭するのは大変難しい。例えば、日本や日本人に対するものを払拭していくためには、まず、われわれ自身が日本や日本人をよく知っていることが基本であるが、それを実行すること自体が意外と難しい。中途半端なことを続けると、内外のステレオタイプを増殖し、さらに、厄介なことになりかねないと思う。

71. (09.03.15) 多分、昨秋の鎌倉行きの際に購入したのであろう、有隣堂のカバーを纏ったまま長い間卓上に積んであった

郡司ペギオ-幸夫：時間の正体 デジャブ・因果論・量子論
講談社 2008
ISBN978-4-06-258422-7

を最近持ち歩いている。しかし、通勤途上で目を通すには、本書は極めて難解である。取り敢えず、本書でいう「時間」とは、「感情」あるいは「欲望」に基盤を置いた「主観的時間」というべきもので、実際、「観測者由来の内的時間」というものに力点を置いているようである。したがって、著者は、例えば、Reichenbachが試みたように（例えば、53回記事参照）、まず、「物理的時間」の意義を確立した上で、その上に展開される各種の時間を論じようというのとは異なる接近法を選択しているように見える。本書がなぜ難解

なのか。理由の一端は、この著者の接近法が予め訓練を受けた読者以外にはなかなか通用しないというところにもあるのではないか。わたくしのような、言わば、通りすがりの読者は戸惑いを覚えがちな表現や記述が多いということもある。定位する、封緘する、などという言葉が不思議な使われ方をしていくことには、むしろ違和感を覚えるが、余りにも未熟すぎる読者なのであろうか。本書は、各章の文献表は付いているが、索引を欠いており、このことは、やはり欠陥であろう。

こんなわけで一向に捗らないので、ようやく3分の1程度に目を通したところであって、本来、とても記事を書ける状態ではない。それでも、「あとがき」と目次の項目と、さらに、第1章以下、第4章の半ば過ぎまでは一応見た。本書の難解さは、これだけ見ても、構成の方向性が明確に見えて来ないことである。それだけ困難な主題であり、あるいは野心的な試みなのであろう。

例えば、第1章では幽体離脱という言葉が出てくる。第二章では、デジャブ (deja-vu) が論じられ、しかも、これらについては実験も行なったという。他方、デジャブに対比される心理現象としてジャメブ (jamais-vu) への言及がある。デジャブやジャメブは仏語の時間経過副詞であり、そういう意味に近い経験というのは、わたくしにもある。しかし、第2章での著者の説明は、そういうわたくしの経験と符合しない。当然のことながら、その分析を論じるくぐりを見ても、そういうものなのかという以上の感想には及ばない。それでも著者が言おうとしていることは何となくわかるような気がする。まあ、わたくしが教師として学生に接する場合であったなら、言葉足らずだ、君は一体何が言いたいんだ、きちんと概念を確立し語彙と定義を定めて明晰に書き直せ、と指示したであろう、というようなところだと思う。

評価が難しいのは第3章である。これも何となくわかるのだが、実は、「因果集合」を論ずるために導入された「ジープ」という語に引っ掛かった。どう綴るのか、と思ったわけである。索引が付され、ついでに原語が併記されていれば、そういうことかと思っただけかも知れないが、そういう書物の組み立てではなかったということはある。そして、いまだに、「ジープ」とは何かわからない。ただ、言及されている文献があり、それ、つまり、

Fotini Markopoulou. The internal description of a causal set:

What the universe looks like from the inside

Comm. Math. Phys. 211, 559–583 (2000)

をダウンロードして読んでみた。第3章の論述は基本的にこの論文に準じているようであり、Markopoulou が (数学のカテゴリー論を援用して) 定式化した evolving sets が「因果集合」のジープにあたるのであろう。そして、これらが Heyting 代数をなし、したがって、対応する論理は (Brouwer 起源の構成的数学の論理、すなわち) 直観論理であって排中律が成り立たないというようなことが述べられている。本書第3章には、さらに、著者の解釈や敷衍が加えられているということがわかった。「ジープ」であるが、Markopoulou

には sieve とある。ただ、この手の議論は、Markopoulou が最初ではないようなので、ドイツ語の Sieb が元であった可能性はある。ただし、そうだとすると、ジープとすべきではなかったか。

薄っぺらな読み方をしている人間がいい加減な感想を重ねるのはどうかと思うが、かくて、「因果集合」には「位相」が入り、当然、「解析学」が成り立つ。「因果集合」間の「連続写像」や「コンパクト性」が話題になり、また、「不動点」が論じられているのであろう。一体、これらにはどのような物理的な意味が付されているのか。

さて、本書であるが、まだ、あと第5章～第7章が残っているが、そこでの議論の基礎になっているらしい文献へのアクセスができるのかどうか、できなかったら？それは、必要が生じたときに考えたい。

72. (09.03.27) 前回記事の郡司氏の書物の続きであるが、Markopoulou の論文を眺めたついでに、Reichenbach の

Les fondements logiques de mecaniques des quanta

Annales de l'I.H.P., 13, 109–158 (1952-1953)

を思い出した。関係する Reichenbach の著書については、ほぼ1年近い前に論じた記憶があるが(52, 53 回記事参照)、何だか尻切れトンボのままで終わってしまった。上の論文は、Reichenbach が亡くなっていなければ書物に収めたであろうとされる内容の少なくとも一部が論じられているということであったが、忙しさにかまけてすっかり忘れていた。しかし、Reichenbach の「時間」論は、郡司氏が注力していると想像される「主観的時間」あるいは「時間感覚」の解明の試みではなく、「物理学的時間」の理解を目指したものである。

上記論文の116ページ中葉で、Reichenbach は

Je ne crois pas qu'il y ait des questions soit-disant philosophiques exemptes de traitement scientifique. Si la philosophie s'occupe des problèmes de la structures du monde, elle doit abandonner l'idée de dériver cette structure d'une intuition alléguée en des vérités éternelles. Les vérités philosophiques d'hier sont devenues les erreurs courantes d'aujourd'hui.

と述べ、そして、

Le philosophe qui veut contribuer à rendre comprehensible l'univers ne peut aider le physicien qu'en cherchant la forme correcte d'une question, mais pas en cherchant la réponse.

と言う(アクセントを省略してしまったので仏文としては正しくはないが、要するに、

宇宙理解への哲学者の貢献は問題を正確に定式化することであって、解決を図ることではない、

と言っている)。具体的には、

C'est-à-dire, sa contribution consistera en une analyse logique des problèmes, qui sépare le contenu physique d'une théorie des additions sous formes de définitions et qui clarifie la signification de mots au lieu de prescrire des formes de pensée.

と説く。つまり、

明確な定義によって物理学的な内容を付随的なものから切り出すような論理的な分析こそが仕事だ

と言うのである。わたくしも基本的に同意する。

郡司氏の著書は、「物理的時間」ではなく、恐らくは「生理的時間」に主眼があるのだろうが、そうであっても、自然哲学者である著者は、やはり、Reichenbach の言うように、語義を明晰に定めることによって晦渋な論議に陥らないようにしてほしかったと敢えて言いたい。例えば、160 ページ 5 行目から 13 行目に至る 9 行で、

時間様相とは、歴史的変遷のある積分である。過去とは、この現在に至るまでの歴史の集積であり、現在の運動の積分であるとも考えられる。したがって一般化されたA系列は、次々と起こった、かつ、起こるだろう現在の運動を畳み込んだ形式でなければならない。だから、A構成は束のすべての要素に対し、集合を見出しかつその内部操作を忘れる操作と定義されるのだ。空間における積分は面積として値を持つが、それは図形の境界を指定できるからだ。時間についてはどうか。この現在以前を過去とするとき、現在はすでに移動していく。未来の現在という集合概念を絶えずこの現在へと回収する「現在」は、不定な境界に関する積分という性格を、一般化されたA系列に与えることとなる。それは、幅のない抽象概念としての境界線が、その実、面積を有し、広げられるということを意味する。

と述べる。A系列、一般化されたA系列は、この前に難解ではあるが説明はある。しかし、この文章から明確な意味を読み取ることができるだろうか。もちろん、何となく言いたいことはわかるような気がする。だが、鮮明には伝わらない。「積分」という用語に必然性があるか。「畳み込む」というけれど、これにも技術的なニュアンスがある。末尾で、「面積を有し、広げられる」と言うが、何のことか。要するに、比喩的な言葉遣いで読者の想像を掻き立てるとするのは、論理的な姿勢ではあるまい。用語としても、「A系列」あるいは

は「B系列」というのは安易であって好ましくない。ただし、これは著者が McTaggart を借りたというのだから、歴史的な事情もあることではあろう。実際、著者は数学を援用して、これら二つの「系列」の再解釈を試みているのであり、論理化の意図と努力は認められるのである。

だが、著者がこれらの「系列」について論理化・数学化した試みの内容について著者が「日常語」（に近いもの）で与える解釈とが整合していないのではないかと思われる。例えば、上に引いた一節が晦渋なのはその表れではないかと思わざるを得ない。恐らく、著者が学術論文として発表したものを読めば、はるかに明晰に説明されているのだろうとは思うが、一方で、著者が「日常語」水準で記述を試みているものの方が本来の心情に近いものであるかも知れず、そうだとすると、論理化・数学化が著者の本来の意図とは違う方向で行なわれてしまっているのかも知れない。

いずれにせよ、この書物の第4章から第6章に書かれていることを素直に考えると、実は、以下のようなことではないかと思われるが、さまざまな修飾が施されていて、よくわからないところがある。

そんなわけで、確信を持って推定ができていないわけではないが、著者が「時間」、つまり、過去・現在・未来を論ずる考察対象は、（前後関係という）半順序（ \succ と表そう： $x \succ y$ を x は y よりも前にあると読むことにする）が定義された離散集合（実は、有限集合）であって、しかも、完備な分配束（束はソクと読む）をなすものと考えられる。この対象の束を X と（われわれの記事では）名づけて置こう。Markopoulou の evolving sets は、この束 X に構造を定めるものであるが、郡司氏は一旦その構造を離れて、A系列、B系列としての X の解釈を論ずる。そのために、この束 X にグルーピングと称する操作を導きいれている。この操作は、 X の個々の要素（元）に依存する。そこで、 X の（任意の）要素 a をとり、 a に関するグルーピングを定めるために、 a の過去の集合、つまり、 X の元であって a よりも前にあるもの、つまり、 $x \succ a$ をみたすような x の全体 a の過去集合 $Past(a)$ をまず考える。 X から $Past(a)$ を引き去った集合を $X(a)$ としよう。 $X(a)$ の元 y と $Past(a)$ の任意の元 b との下限、つまり、 y よりも b よりも後にある $X(a)$ の元でもっとも前にあるもの $y \vee b$ が X の元として確定する。 b を $Past(a)$ の中でいろいろと動かしたときの $y \vee b$ のうちのもっとも後にあるものは $y \vee a$ に他ならない。つまり、 $y \vee b \succ y \vee a$ である。なお、 $y=y \vee a$ となるのは $y \succ a$ のときに限る。郡司氏は（少なくとも書物では）ことさらに注意してはいないようであるが、この事実こそ氏の議論の遂行の上で重要なことであったと思われる。

さて、 $X(a)$ の元 y, z について、 $y \vee a = z \vee a$ が成り立つとき、 y と z は同じグループに属するとする。つまり、 y と同じグループに属する $X(a)$ の全体を $G(y)$ とすると、 $y \vee a = z \vee a$ すなわち $G(y)=G(z)$ となることに他ならない（ y と z とが同じグループに属するということは数学的な意

味での $X(a)$ の同値関係になる). したがって, $X(a)$ はグループの直和集合として表され, さらに, $\text{Past}(a)$ を加えて, X 全体の分割, すなわち, X の a に関するグルーピング (X の商集合といわれるもの) が得られる. なお, 郡司氏の書物では, この間の事情を図を多用して説明している. また, X を B 系列, グルーピングを一般化された A 系列として論じているけれど, すでに述べたように, McTaggart の時代はともかく, 少なくとも今日の段階では, このような名称自体に価値があるとは思われない. 束というアイデアもその時代には知られていなかったのである.

つぎに, X の半順序をグルーピングに移植しよう. グループ $G(u)$ と $G(v)$ とは, $u \succ v$ のときは $G(u) \succ G(v)$, つまり, $G(u)$ は $G(v)$ より前にあるとするのである. このことは $u \vee a \succ v \vee a$ の前後関係が移植されるということであり, この決め方では, 常に $G(u)$ は $\text{Past}(a)$ より前にある. したがって, a に関するグルーピングでは, グループは, 常に, $\text{Past}(a)$ (と一致しない限り, そ) の後にある.

このように考えると, 郡司氏の言う現在が移動して行くということについてのグルーピングの別の見かたが可能になると思われる. 現在が移動して行くということを束 X の部分集合であって, その上では半順序 \succ が全順序になるようなもの, 通例, 「連鎖」といわれる元の列, の指定と理解すると, この連鎖の各元に関するグルーピングを考えることにより, グルーピングの列が得られる. しかし, このような考察に基づく解釈の方向は第5章で郡司氏が試みているものとは異なっているようである

73. (09.04.18) 郡司氏の書物 (71回72回記事参照) に否定的なことを言うばかりでは能がないと思っていたところ,

清水義夫: 圏論による論理学 高階論理とトポス
東京大学出版会 (2007)
ISBN 978-4-13-012057-9

という書物を見つけた. 圏論 (カテゴリー論) は大昔学生の頃に入り口だけ習った気がしたが, 定式化のために言葉を準備するだけのアブストラクト・ナンセンスという印象もあり, また, 古典解析に近いことを仕事にしていたので, 必要は感じなかったこともあって関心は特に持っていなかった. 情報系の人たちがトポス・トポスと騒いでいるときも, まあ, 聞き流していたので, この方面のことを自発的に勉強しようなどとは思ったこともなかった. 郡司氏の書物が乱暴な書き方のものという印象を抱かせなかったら, 関連書を見つけても手に取ることもあり得なかったかも知れない.

ただ, 上記の書物も通勤の往復にしか目を通していないので当然読み方はいい加減である. その上, 長い時間持ち歩いている割には進まないし, 前の方は忘れるし, 自慢にならないことだらけだが, この清水氏の書物が明晰に書かれており, しかも便利で適当と言える本だということはわかった. 東京

大学教養学部教養学科の学部後期生（科学哲学）および東洋大学大学院文学研究科（哲学専攻）向けの講義ノートをもとにしているわけだから、読者には数学的訓練としては高校の数学、それも恐らく文系とされるもの、以上は全く期待はしていないはずであろうが、記号の羅列を丹念に追う忍耐力だけは不可欠であろう。

そんなわけで、きちんとまだ目を通して終えてはいないのだが、目次の主なところだけを掲げておこう：

序

第1章 関数型高階論理

第2章 トポス

第3章 トポスの基本定理

第4章 プルバック関手 f^* の右随伴関手 Π_f

第5章 リミット，空間性トポス，限量記号

結び

他に、付録と「はじめに」「おわりに」とあり、もちろん、索引つきである。技術的な内容としては、第1章で、いわゆる λ 高階論理の紹介、第2章では圏論の概説とその特別な場合としてのトポスの紹介と λ 高階論理のトポスとしての解釈、第3章では、言語としてのトポスを論じ、トポスの基本定理といわれるトポスの構造的剛性というべき性質の検証を行ない、残りの章は、主に、補充的な話題を扱っている。

このうち、「序」と「結び」が本書の（少なくとも著者がこだわりたい）内容の理念的な整理と照応を与えているわけで、著者はもちろん決して勧めてはいないと思われるのだが、圏論やトポス、高階論理の技術的詳細に関心がなくても、「序」と「結び」だけを読むと著者が説きたいとしていることがおおよそ伝わってくる。具体的には、「序」において

知識論への哲学的な関心をもつ方々にとっても、高階論理やトポスについてその基礎的な事柄を眺めておくことは、大変有意義なことといえる。実際この著書は、その背後にこのような問題意識を強くもっており、したがってこの様な問題意識をもっておられる方々をも念頭に置きつつ、関数型高階論理やトポスの基礎的な事柄の要点の解説を試みている（p.2 冒頭）

とあり、その後で「普遍論理」について論じ、その候補としてトポスが挙げられるということを述べる。「結び」では、普遍論理の条件として（詳細の再録は省略するが）(1) 汎用性をもつこと (2) 汎通性（または対称性）をもつこと (3) 自然性をもつこと、の3点を挙げ、この本で示した技術的な詳細と対照させつつ、トポスがこれら3条件を満たしていることを説明している。

なお、清水氏が例示しているトポスは、Boolean topos であり、郡司氏が扱っているであろうトポスは、恐らく Heyting topos とよばれるべきもので

あろうから、まだ、これで用が足りたわけではなさそうではある。

74. (09.04.28) 清水氏の書物(73回参照)を含め新幹線車中でこなすべき資料を持ちながら、博多駅の売店で

小林泰三：日本の国宝、最初はこんな色だった
光文社新書(光文社 2008)
ISBN 978-4-334-03478-8

を見つけ、購入した。清水氏の書物に疲れた際の気分転換というつもりだったが、岡山あたりで読み始め、その後、近鉄に乗り換えてからも読み続けて、結局は宿で読み終えてしまい、今、感想を記しているという次第である。小林氏の書物は、氏が手がけてきた日本の古典的な美術作品、中には実際上失われてしまっているものも多いが、そういうものをデジタル技術を用いて復元し、なお、その復元結果に拠りながら、くだんの作品が描かれた時代を想起しつつ、翻って、現在の我々を想うという贅沢な内容のものである。

本書は冒頭に「デジタル復元の基本」という図版つきコラム様のものがあり、引き続き、「はじめに」とあって、以下

- 第1章 大仏殿は最新モード—東大寺大仏殿
- 第2章 鮮やかな闇—地獄草紙
- 第3章 無常観にズーム・イン—平治物語絵巻
- 第4章 飛び出す襖絵—檜図屏風
- 第5章 醍醐の花見にお邪魔します—花下遊楽図屏風

とあり、最後に「おわりに」という文章がある。各章に注はあるが、全体としての本書には索引はない。

小林氏の仕事のいくつかは実際 NHK の放送で拝見した。特に、第3章で言及されている平治物語の箇所は記憶にある。大仏殿が聖武天皇のもとでの建立時には実にきらびやかなものであったろうということは、近隣諸国の仏像の様子を考えれば想像が付く。

実際、わたくし自身、ずいぶん昔だが、確か法隆寺の宝物殿であったと思うけれども、復元された馬具や武器の展示をみて、7世紀8世紀の武人たちが醸しだしていたであろう派手な様子を想像して新鮮な感動を覚えた記憶がある。実際、当時の人たちの感性を現代の我々の思い込みで判断はできないなど思ったわけである。また、その場には、埼玉県で出土した「ワカタケル銘入りの鉄剣」のレプリカもあり、それを見て、腐って膨れ上がった鉄片中に散在する金片を集めて、それらしい字を組み上げるという作業の危うさを一つまり、重要な解釈行為であり、復元に至る過程を各段階での判断の根拠ともども詳細に記録に留めておかなければならないことなので—感じたことは今でも覚えている。

当初がどうであれ、日本では時代に応じた変質を受け入れて来た、つまり、むしろ定期的な修復作業によって当初からの雰囲気を持しようとはして来

なかった，という理由の方が知りたいところであるが，それは本書で論じられていることの次の段階のことであろう。

先走ってしまったが，小林氏は，利用しうるあらゆる知見を動員して，創建時の東大寺大仏殿の内部と考えられるものを復元し（第1章），あるいは，顔料の剥落劣化著しい「地獄草紙」の制作当初と推測される場面を復元して（第2章），往時の感覚を想像している。もちろん，その際，多大のご苦労があったことは想像に難くはないし，事実，そのごく一部については小林氏自身の記述がある。第4章は狩野永徳の檜図屏風の本来の姿を探る話である。

狩野永徳の檜図については以前原型を復元してみたら面白そうと記事（38回）に書いたことがあるが，少なくとも当初の図柄というか当初の構想の復元の試みは小林氏によってなされていることはわかった。問題は大きさで，当然のことながらインターネットやDVDなどのメディアだけでは不足で，四面にしかるべき大きさのスクリーン（状のもの）を置いた場所でデジタルの特性を生かした実験を伴った投影展示が必要になるだろう。この点では，若干様子が違うとは言え，先年出光美術館で公開された「伴大納言絵巻」の展覧に伴っていた拡大画面，あれもデジタル復元をもとにしていたと思われるが，のような試みを思い出す。ただし，興味や趣旨には違いがあるわけで，伴大納言絵巻の場合だと，拡大することにより，丹念な細部の描きこみを見せることを目指していたのであろう。檜図の場合だと，畳の敷き方，天井，光線の入り方，その他を総合した場を作り上げて，季節天候や一日の光線の変化が画面に及ぼす効果などを追体験できると面白そうということになる。

第5章は小林氏がデジタル復元を最初に試みた屏風絵の話である。この作業が極めて総合的な知識と経験を要するものであることが述べられている。小林氏は，日本美術の鑑賞のキモは「参加する視線」だと繰り返し強調されている。小林氏の作業は，まさに，「参加する視線」を縦横に生かしてなされてきたわけである。この観点は，当ブログの密かなテーマ，日本文明の秘密に近づき，その本質を明かしたいという大それたものに密接な関わりがあるはずである。もとより丹念な整理と分析に基づく概念構成を，それも，経時性，空間性を十分に考慮した上で，試みるための重要な素材であるに違いない。

75. (09.04.28) せっかく資料を持ちながらも帰りの車中のために

竹内薫（嵯峨野功一構成）：理系バカと文系バカ

PHP新書（PHP研究所 2009）

ISBN978-4-569-70643-6

を京都駅で購入し，途中で居眠りをしたが，三原駅を通過するころには読み終えてしまった。前回に触れた小林泰三氏の書物よりもはるかに気楽に読めたということではある。

竹内氏は「文系バカ」の典型を「論理的な考え方のできない人」あるいは「その場の空気に流されやすい人」とし，「理系バカ」の典型を「周りの空気の

読めない人」あるいは「思い込みが激しく他人の意見を聞かないタイプ」とする。両典型は、いわば、対極にあるわけで、読者が、その間のどこに位置づけられるかを判定する基準として、それぞれに、10項目挙げて、該当するか否かを問い、その結果によって、「文系バカ」度、あるいは「理系バカ」度を、まあ、読者に自覚させようという試みを第1章で行なう。

もとより、洒落のようなものであるし、実際には、教育や職業、経験などの効果もあるわけだし、人生は常に新しい経験の積み重ねであろうし、その意味では、人間の一生は勉強の継続のはずである。竹内氏は、むしろ、こんなちやちやな分類で人間の可能性を決め付けるなという主張をされているのだとわたくしは思う。一方、しかし、現実の日本社会は必ずしもそうではなく、特に、国の要路を占める人たちが「文系」であることを、現在の世界が文字通りの「理系」原理、それも極めて高度のものに従って動いているときなのに、こういう状態が続くようなことを問題視しているわけである。そして、必要とされるのは、文理に偏らない素養を備え、技術的洞察を伴う分析力に基づいた大局観を備えた総合的な判断力を、特に、行政や国会の指導層に求めている。そして、この現象と密着していることではあるが、影響力の強い主要メディアが圧倒的に「文系人間」によって構成されているために受発信する情報の内容の偏りは深刻な問題であるというのである。もちろん、わたくしは竹内氏のご指摘やご提案に、大筋において賛同する。特に、「顔の見える」スーパーエリート官僚を育てよ、という意見は大変いい。ただ、日本の官僚制度は（まさに文系的としか言いようのない「無謬性」原則で組織されており）官僚個々の人格というものを否定していて、表向きは、官僚機構全体の中の歯車としか個々の官僚を捉えていないのではないだろうか。過去の行政の不備について形式的な責任をたまたま不備が発覚した時点での行政責任者に問うのみであったりする。そういう意味では、スーパーエリート官僚というような「個人としての責任」をとることが想定される官僚というのは、日本的には、形容矛盾のような気がする。もちろん、そこが問題なのだが。

わたくし自身は職業的には理系人間の棲息する辺りで暮らしてきたが、文系バカ的特性の強い者であり、一方、亡父は、竹内氏の判定基準が過去に遡って有効であるかどうかは不問とした上で、その基準に従うと、ほぼ典型的な理系バカであったなと思う（亡父は（欧米語でいうならば）「考古学者」であった）。しかし、まあ、こういう奇妙な注釈を入れるところは、わたくしにも「理系バカ文化」がしっかりと身に着いている所以だろう。また、こういう意味では、郡司氏の書物に、「比喩的な言葉遣いで読者の想像を駆り立てるといっては論理的な姿勢ではあるまい」（72回記事）と書いたのも、わたくしの典型的な「理系バカ」現象であったということにはなる。

この本の提言は極めて深刻である。先に軽い調子で読むことができたと言ったが、中身は極めて重い。日本の将来は、もはや、ほとんど絶望的であると言わざるを得ない。実は、わたくし自身、もう随分前だが、現代日本の課

題のうち、かなり重要なものに、「良質な科学ジャーナリスト」の養成がある
と思ひ、たまたま、その頃関わっていた数学系研究科の設置趣意書に、常識
的な「数理科学者・数理技術者・数理教育者の養成」というのに加えて「数
理ジェネラリスト」の養成とか、対応して、学位（博士）の授与基準のうち
にも「数理系学問の価値の認識や興味を広げる上で貢献する仕事」というの
を書き込んだ。研究科出身者の就職先としても、研究機関や企業だけではなく、
出版社を含むメディアなどを想定していたつもりであった。実際、当時の
工学部で設置案の説明をしたときに、この箇所が工学部長が一番興味を示
したところでもあった（「理系」と一口に言っても、理学部系と工学部系では
随分違うし、農学系、医学系もまた違う。「臨床医は基本的に文系でなければ
務まらない」とは、最近、さる臨床医学の教授から聞いたばかりである。）

しかし、研究科設置後、実際の学位審査で、このような基準が「正当に」扱
われたことは、少なくともわたくしの在職中には、とうとう起きなかったよ
うに思う。本書の終わりの方で、竹内氏が触れている若手研究者が二足の草
鞋を履きそなった話などを考えても、やはり、「理系研究室」を支配してい
る価値観の狭隘さが問題の根底にあるわけである。だが、実際のところ、「価
値観の狭隘さ」は「理系」に限らないことであって、つまり、ある段階で刷
り込まれた「思い込み」のまま、その後の人生を過ごしていけるといふ、極
めて安易な、あるいは、本質的には固定的な、現代日本の社会の反映でもあ
ろう。

「良質な科学ジャーナリスト」というと、いや、そういう人たちは結構い
たし、今でも、それなりにいるのではないか、という意見もあるかも知れな
い。しかし、わたくしの言いたいことは、大前提として「科学ジャーナリス
ト」の厚い層があることであり、かれらは必ずしも文筆活動をしていないか
もしれないが、教育から研究まで、そして、行政や政治に至る社会生活の全
体に関わっていて、そして、そういうひとたちのうちに、まあ、竹内氏流に
言えば、バランスのとれた見識や知見の持ち主で、科学に関して大局を誤ら
ない発信ができるという「良質」な人たちがいるということである。飽くま
でも、科学系のジャーナリズムを確固とした形に構成していかなければなら
ないのだが、供給元でさえ、こんな調子では、何とも言いようがない。

付記： 本書で指摘されていることと類似の現象としては、直近のこと
であるが、日本のメディアでは「豚インフルエンザ」という用語を廃して「新
型インフルエンザ」と言い換えるようになってきていることも挙げられよう。
しかし、海外メディアは Swine flue のままであり、重要なことはWHOも同様だ
ということである。想像するに、日本メディアの言換えは国内の食肉業者へ
の配慮のためではないかと思われるが、そのために国際的には通用しない不
正確な用語を使うというのは、本末を転倒しているのではないだろうか。日
本のメディアは重要かつ必要な説明を放棄して、しかも、国際的には通用
しない内容の報道をするということは、風評被害を起こしたとして批判される

ことを過剰に恐れているのではないかとさえ思われる。そのような姿勢がそのまま通るとメディア関係者が思い込んでいるとしたら、それは彼らが日本語であれ何語であれ瞬時に世界中で読まれ、それによって日本の現況が判断されているという現実が、全く理解できていないということを示唆する。毎日新聞のネット版で起きたことが教訓として生きていないのではないかとということでもある。もちろん、わたくしの拙い、読者の数を期待しているわけでもないブログ記事も、当然のことながら、そういう意味では仮に欧米語で準備したとしても、内容が変わるような、あるいは、変えなければならないような、書き方はしていないつもりである。

付記の付記：先ほど、「豚フル」関連の会議があって、それは「新型インフルエンザ対策」という標題で召集されたものであり、実際、思い返してみると、「新型インフルエンザ対策の策定について」云々という会議が以前から何回か開かれてもいた。「新型インフルエンザ」は動物起源のインフルエンザが人から人への感染をするように変異したことが確認されたときに呼びかえられるのだという話であり、厚生労働省の対策本部だか委員会だかの用語だという話である。ならば、「理系」起源の言葉かということそう単純ではないだろう。しかも、もともとは高病原性のインフルエンザ・ウィルスを前提に詳細なマニュアルが作られていて、その方針での予備的な訓練や広報も行なわれてきたが、今回の「豚フル」の病原性は高くはないらしい。そこで、高病原性想定「新型インフルエンザ」対策のマニュアルに忠実に従ってしまうと、かえって妙なことになりかねないということもわかった。そもそも「新型インフルエンザ」と呼びかえるということがどういうつもりのものであったかはわからないことではあるが、恐らく「委員会」の意図は逆であって、想定される危険なインフルエンザに取り敢えず「新型インフルエンザ」という符牒を施し、その内容が明らかになった段階で、それに相応しい名称をつけるという、暫定的なものとしての「新型インフルエンザ」という提唱ではなかったのか。「豚フル」を「新型インフルエンザ」と言いかえるとは、まさしく本末転倒であるが、こういう言語習慣の恐ろしさがメディア関係者に認識できていないことが、まさに、絶望的なのである。

76. (09.05.05) 連休の一日、好天に誘われて、「国宝三井寺展」（福岡市立博物館）と「福澤諭吉展」（福岡市立美術館）とを梯子した。

「三井寺展」は大学時代の友人から届いた招待券を使ったが、これは彼に大いに感謝しなければなるまい。智証大師円珍帰朝 1150 年記念展とのことであつたが、大変迫力があつた。福岡の展覧会としては、混んでいたと言ってよいだろう（福岡が、大阪、東京での展覧会の後の最終）。凶録も購入した。秘仏とされるものまで拝観できるのだから、ありがたいというか何というか。

御骨大師像、中尊大師像を拝み、黄不動尊の画像や彫像を拝み、その他、もろもろの史料というか経典というか、そういったものに圧倒される想いがあつた。しかも、「新発見」という不動像もあり、11 世紀余りの歴史の重みをつく

づく感じた。ただし、さすがに経年のゆえに、塗装は落ち、あるいは、色彩は変質し、また、画像は、さらに、巻き皺たたみ皺も目立ち、新羅明神の画像の一幀（聖護院，図録75）は余りにも暗くて脇に置いてあった写真パネルと見比べながら、この辺りに脚があるのか、顔はどこか、と見当を付けてみた次第であった。絵師や彫師は経年変化を計算に入れて制作にあたっていたとは思われるが、(74回記事の)小林氏流に考えるならば、デジタルな手法で、制作時の姿を想像させることも可能であろうし、(さらに、小林氏は論じてはいないが) デジタル複製に経年変化による効果を(短時間で)追体験させる工夫もできるであろう。

いくつか非宗教的な感想もある。円珍は空海の血縁であったらしく、また、入唐に当たっては藤原良房の援助を受けている。はっきりとはわからないのだが、仏教と当時の支配階級との血縁上の密着度が想像される。一方、藤原氏は蘇我氏という往時の仏教の保護者を倒して権力を手に入れたわけであるが、そのことがどう反映しているのか。三百年の時間を経れば皆一緒というわけでもないのではないかという気もする。例えば、円珍の入唐航路は、南回りである。往復とも博多を経由しているが、朝鮮半島沿いではない。その意味は、朝鮮半島の支配勢力、高麗であったと思うが、それと日本や唐との関係がこじれていたからではないか。そして、円珍の帰途の航海を導いたという「新羅明神」である。明らかに仏教の神格ではないことはわかるのだが、それでは、一体、何者なのか。しかも、非常に重要な役回りにある。

調査すればすぐにわかることであるが、ナイーブを標榜していることをいいことに述べれば、要するに、円珍は帰化人の系統であり、それも新羅に縁があったということなのではないだろうか。つまり、「新羅明神」は円珍の一族の守り神であったに違いない。これから推察できることは、当時の朝廷は(天皇家も藤原家も含めて)実は帰化人によって仕切られていたということであろうか。(例えば「高句麗史」が中国史に属するのか韓国史に属するのかなどを含め)中韓両国の歴史学者の見解の先鋭的な衝突が見られるという話を聞くが、「高句麗」の支配層が現在の韓国人の祖先であったかかどうかは学術上の問題として論ずる余地があるとしても、往時の政治関係に関しては「高句麗史」はともかく「高麗史」は(狭義の)「中国史」には属してはいなかったであろうということも、こんなことを状況証拠として想像することができよう(もっとも、岡田英弘氏の著書(26回記事参照)に従えば、「中国史」とは独立の「日本史」も、成立してようやく二世紀余りの頃である。「朝鮮史」は、後年の「元」による支配もあり、まだ、真の意味で成立しているとは言えなかったかも知れないが)。

もう一点、感じたことは、「新羅明神」も一例なのだろうが、「本地垂迹」ということ(敢えて言えば、哲学的あるいは神学的な)重要性である。平安期の仏教理解は、そういう形で行なわれ、「つい最近」の、「神道原理主義者」による「廃仏毀釈」運動まで、われわれの先祖は、仏教の優位のもとで土着

の（神道系の）神々の意味づけを行なってきた。仏教の優位を認め、その体系の中に土着の神々を体系化するという発想は、よく考えてみると実に素晴らしい。仏教思想には間違いなく、宇宙性、普遍性が認められる。他方、後に「神道」として体系化されるまで、土着の神々には普遍性は劫も認められなかったのである。抽象的な価値としての「生」という発想も「原始神道」にはなかったのではないか。「原始神道」は原始共同体の独特の共感の儀式化であり、説明は一切不要であったろう。そこを仏教が整理し、独特の宗教観が、本地垂迹的な仏教理解として定着したのであろう。

これは全くの素人の想像だが、幕末の「神道原理主義」は実は宗教改革に近いものであったのだろう。不幸なことに、政治的かつ国際的な状況が、「神道原理主義」に nationalistic（多分）な過激な要素を加えてしまい、本末が狂った結果としか思われなことが続出した。かくて、われわれ百年後の子孫にとっても失ってしまったものが実に多かったと思わざるを得ない。「三井寺展」の感想としては奇妙に見えるかも知れないが、円珍もゆったりとした「本地垂迹」の思想の実践の中で生きていたわけである。ただ、解説などから想像する限り、円珍は、テキストも重視し、論争にも強かったようである。寺門派、山門派といわれても、具体的には、それぞれの系統から、どのような宗派が出てきたかは知らないで、何とも言えないが、円珍自身も「仏教原理主義」とでもいうような純化の傾向も秘めていたかも知れない。

つぎに「福澤論吉展」であるが、これは難しい。「一万円札」の肖像画はご愛嬌としても、「福澤」（先生）はまだ「生きている」ということが、公平公正に考えると、この「展覧会」の難しさである。

まあ、個人的な感慨（70回記事参照）もあって、興味深い展覧会であったし、福澤先生の「偉さ」はよくよくわかった。同世代の人間の中では、間違いなく突出していたのであろう。そして、実によい弟子たちに恵まれた。そういう時代だったのだよ、誰でも（一か八かとは言いながら）偉くなれば恩師のこゝを持ち出すのだよ、というような話を突き抜けていたことを示す説得力のある史資料が展示されていた。

現在の職務関連の感想であるが、「為他の気概」ということを今のわたくしは仕事の上で強調するようにしている（自分のことはとりあえず棚上げである）。しかし、具体的な見本がない限り、ただの「他人事」であり「綺麗事」に過ぎない。そういう意味で、福澤先生の考え方、そして、生き方（の基本）を模範と仰ぐことができる慶応義塾の人たちは幸せであると思う。

個人的には、今や近い身内に塾員がいるというわけではないけれども、福澤先生のこととあれば、ぜひ見に行こうという気持はあり、三井寺展の後、そのまま自転車で大濠公園まで走ったというわけであった。

77. (09.05.10) 当ブログの趣旨からは脱線と言いついてしまうのは正しくはないが、そう見えても仕方のない話題であるが、先日、

石川吉紀：「英語」力は人間力

川喜多コーポレーション．展望社（2009）

ISBN：9784885461989

を現在の勤務先の図書館の新作図書コーナーで見つけた。著者の石川さんは、わたくしにとって、「よっちゃん」としか呼べない小学校以来、中学高校までを含めて、の一年先輩である。今も鎌倉に帰る折りには犬を連れての散歩のたびに昔から同じところにあるお家の前を大概通る。もっとも高校卒業後噂は聞くことがあっても直接お目に掛かってはいないので、例えば、白髪になっておられるのか、まだ、黒々とした髪なのか、そもそも頭髪の残存量がどの程度なのかを籠めて、一切、見当が付かないことではある。余分なことだが、石川さんが勤務先の学校で要職にあったときの校長は、氏の同級生であった。一体、どう呼び合っていたのだろう、とは、まあ、実家に帰ったときに話題になったことがある、一年違いとは言いながら、小学校時代から家族ぐるみでお付き合いをいただいていたので、例えば、母がわたくしのことをこぼすと、石川さんの母上がヨシノリは一年上なのに云々とおっしゃって慰めてくださったそうである。「名門校」の要職にある石川さんにそんな時期があったなんて生徒たちには話せないねなどと母と話したことがある。母が元気な頃の話だから10年以上昔のことである。石川さんの著書には、この類の自伝的部分は一切ない。

本書の内容は、日本の教育、特に、中等教育、それも、普通科教育の中で、英語教育を初めとする語学教育をどう考えるべきか、という著者の経験を反映させたご意見の表明である。こういう書き方をすれば明らかなように、著者は、中等教育段階での英語教育は飽くまでも中等教育としての本旨に沿って行なわれるべきであると主張する。つまり、知的体力の養成のための適切な訓練の一環としての英語教育であるべきであり、それゆえに、言語としての英語と区別して、わざわざ「英語」という表記をしておられるのであり、「英語」力は人間力とおっしゃる所以でもある。

わたくしも著者のご意見に全面的に賛同する。それどころか、こういう意見を殊更に述べ立てなければならない背景にある伝説、つまり、かつての日本人が長時間「英語」を学んできたのに英語を話せないのは教育法が間違っていたからだという説そのものにも疑念を持っている。この説の実際の理由は、不勉強であった連中がおのれの不勉強を糊塗するためにこういう表現をしていたこともあったのではないかとも思うが、何よりも英語であれ日本語であれ自らの言葉によって主張すべき内容を深めて来なかったということがあるのではないかと思う。さればこそ、中等教育の一環としての「英語」教育という姿勢を確認することが大切であろう。わたくしの恩師は昭和初期の（旧制）高等学校（＝前期高等教育）の「理甲」（第一外国語＝英語）だったのではないかと思われるが、先生の英語力は大したものであった。亡父は、同じ時期の（別の高等学校の）「文丙」（第一外国語＝仏語）であったけれど、母の遠縁の米国人の青年が最晩年に訪ねて来たとき、サーヴィス精神のゆえな

のか、小一時間英語でいろいろと昔話を試みていたという記憶がある。認知症のゆえに（痴呆というべきなのだが）話の辻褄は全くあってはいなかったけれど、大正期の（旧制）中学（＝中等教育）の英語教育の質の高さを思わざるを得なかった。もとより、70年前と今日とでは中等教育や前期高等教育をめぐる環境は全く違う。しかし、中等教育の一環としての語学教育をしっかりと施された上に、若干の実用上の補いを受ければ（つまり、飽くまでもこの順序で推移すれば）、内容のある受発信を何語であれ滑らかなに行なうことができるという基本は、今も変わってはいないだろう。ただ、かつてとの違いでもっとも深刻なことは、今は、大学に入ってから適切な、つまり、（国際基準として要求される）かれらの知的水準に適合した言語教育、つまり、知的交渉を支えるのに必要不可欠な水準のもの、が、英語を含め、一般に希薄になってしまっていることである。

ところで、本書を読み始め、いくつも鋭い表現があることに感心し、先生稼業40年、一筋縄では行かない生徒たちや父兄たちといろいろあって鍛えられた成果と察し、充実した仕事をしてこられたのだろうと改めて思った。上にも一端を紹介したが、割と「硬派」の見解がずばっと述べられている。最後の方まで読んでみると、昔の校長のグスタフ・フォス（Gustav Voss）先生の言葉や様子が思い浮かんできた。学校という社会が実社会の厳しさや毒を取り除いた仮想社会、「アマイ社会」であり、それを認識して教育をしなければならぬし、現にそうしているのであるという意味のことは、フォス先生が、毎朝だったと思うが、朝礼で我々に、「君たちは『おくに』に役立つ人になるんだよ」という言葉同様に、強調されていたことであつたと思う（後半の文言は、後に、フォス先生の書かれたものを見ると、To train a good citizen！という校是の趣旨を背景にしていた言葉のつもりであつたらしい。今は、men for others！というのを学校のモットーにしているらしい）。

実は、学校は「アマイ社会」であるという認識に関しては、学校が現実の社会の反映ではあるが、それをモデルとしているわけではないということだけは、一般に、ともかく意識はされていることは確かである。しかし、学校は実社会とはほぼ別物として設計されているということ（本書の著者流に言えば、学校はモノであるということ）がきちんと理解されているかどうかという点になると、残念ながら、日本の通常の社会、行政や言論を含めて、そこでは十分ではないように思われる。つまり、日本的には、学校「も」一個の完結した社会であり、それが「現実の社会」とは違うことは当然という考えはあるにせよ、学校と現実の社会とはどう違うのが正しいのか、また、それはなぜなのか、というようなことは、きちんと考え込まれてはいないように思われる。— まあ、この部分は、今回の記事が当ブログの趣旨とどう関わっているのか確かめるつもりもあって、敢えて付け加えてあるところではあるが。

付記：余分なことながら、先日妹が犬の散歩の折に、たまたまゴミ出しに出てこられた著者に遭遇したとかで、妹経由でご本の贈呈をいただいってしまった。当記事を書いてから大分時間が経っているが、恐らく、著者は本記事の存在はご存知あるまいが、深甚なる謝意を呈したい。

78. (09.05.29) 雑然とした日々が過ぎているが、八月に予定している「対面授業(集中講義)」の準備を(細々とでしかないが!)始めてもいる。

ところで、清水氏の書物に関しては、読み直してもいるのだが、その結果、(73回記事では)少々褒めすぎたかなとも感じている(わたくしなら、こういう記述はしないという箇所がかなりあるのである。また、第1章に、モンターギュ文法を論じているところがあるが、日本語の文を例にとるべきではなかったか。細かいことでは、Marry という「人名」に抵抗を覚えた。ちなみに、同書「はじめに」の末尾の方に

…とはいえ、いろいろと不備な点多々あると思われる。この点は、読者の皆さんからの忌憚のないご批判をいただけたらと願っている。

と書かれている(p.ii)。再版、重刷、改訂の機会がなかなかないのが昨今ではあり、簡単には「ご批判」を生かせないかも知れないと思う。その上、少なからぬ見当違いの「批判」が寄せられることもあろう。そんなとき、一般に著者というものは、苦笑いを浮かべつつ慇懃に、あるいは、内心の困惑を抑えつつ表情を変えずに、無視することが、まあ、デフォルトに近いのかも知れないが)。

一方、Lewin-Reichenbach の genidentity (例えば72回記事)に関しては、トポスの枠内で明晰な定義ができると思うに至った。

郡司氏の書物(71, 72回記事参照)も片付けたいのだが、なかなかその時間がとれない。ともかく、いろいろな考察のきっかけになったのだから、随分前のことながら、氏の本が目にとまったという serendipity を悦ばなければなるまい。

先日、天神の淳久堂(ここも今や丸善同様、DNP傘下だが)で

Robert Kaplan & Ellen Kaplan: The art of the infinite – our
lost language of numbers

Penguin Books 2004

ISBN-13:978-0-141-00886-8

ISBN-10:0-141-00886-

5

というのを見つけた。立ち読みで、第8章 Back of Beyond に、遠近法の描画、つまり、格子枠を通して花瓶を写生している画家の絵と Leon Battista Alberti という文字、及び消失点に向かって逶減していく床面タイルの平行線間隔を定めるための「対角線」の図が目に入った。結局、購入し、この章

(と序章 An Invitation) だけ目を通した。第8章は射影幾何の紹介だが、印象深く、よく述べられている。いずれにせよ、この辺りのことは「対面授業」に取り込まなければいけないと考えていたところではあった。

そんなこともあって、また、Ivins の Art and Geometry (第1回～第25回記事くらいまで参照) を思い出し、第5章、第6章をざっと見てみた(目次は第6回記事)。結局、第60回記事で触れた

William M. Ivins, Jr.: On the rationalization of sight
Da Capo Press (1973)

を見ておく必要があると感じ、下村耕史教授からいただいたコピー(お茶の水女子大の蔵書の複写に下村先生の書き込み付き!)を引っ張り出してみた。上掲 Ivins の Art & Geometry 第6章の Alberti の実験的考察についての記述は何度読み返してもよくわからなかったが、On the rationalization of sight, pp.17-18, の挿図(図4~17)を見て、初めて鮮明に理解できた。

さて、On the rationalization of sight で、Ivins は、まずルネッサンスが視覚の合理化、つまり、視覚情報の合理的把握の端緒になったと概説ないし解題で言い、そして、この視覚の合理化こそがまさに近代科学文明を導いたと強調する。視覚情報の合理的把握においては遠近法(正統作図法)に基づく視覚情報の論理的理解と版画によるその正確な再現性が基本であると言っている。この稿では、引き続き、Alberti, Viator, Duerer それぞれの著作における遠近法の論述についての解説を行なって、画像情報の論理化について具体的な説明を展開している。

概説の冒頭で、著者は

For some time past [Ivins] has been pursued by the notion that the most important thing that happend during the Renaissance was the emergence of the ideas that led to the rationalization of sight (p.7).

と言う。もとより、rationalization of sight ということには説明が必要であり、それは著者が以降に展開することではあるが、ここでは pursued by というのが、寝ても覚めても取り付かれているという感じで、いい。

概説の最後では、

From being an avenue of sensuous awareness for what people, lacking adequate symbols and adequate grammars and techniques for their use, regarded as "secondary qualities", sight has today become the principal avenue of the sensuous awareness upon which systematic thought about nature is based (p.13).

と言う。引き続き文章で、その経緯を

Science and technology have advanced in more than direct ratio to the ability of men to contrive methods by which phenomena which otherwise could be known only through the senses of touch, hearing, taste, and smell, have been brought within the range of visual recognition and measurement and thus become subject to that logical symbolization without which rational thought and analysis are impossible.

と説明する（この文章は、「モンターギュ文法」というか構文解析の点では、わくわくするくらい複層化されているが、極めて明晰である）。最後の文章で、以降に解説するルネッサンスについて、その意義を

The discovery of the early forms of these grammars and techniques constitutes that beginning of the rationalization of sight which, it is submitted, was the most important event of the Renaissance.

と述べるのである。

79. (09.06.08) 一二月前に注文しておいた

Mario Carpo & Frederique Lemerle ed. :
Perspective, projections, and design: technologies of architectural representation
(Routledge, 2008)
ISBN13:978-0-415-40204-0

が届いた。これを「発見」した経緯の詳細は忘れてしまったが、確かネット検索で、Jeanne Peiffer 教授の論文を探しているときに、教授の報告

Jeanne Peiffer : Constructing perspective in sixteenth-century
Nuremberg

を収めたシンポジウム報告集として、本書をヒットしたのだと記憶している。報告集自体はもともと仏文で公刊されていた。冒頭の Acknowledgements に

Cahiers de la Recherche Architecturale et Urbane, Paris
(Editions du patrimoine et Centre des monuments nationaux,
2005)

の第17集の英訳であるとの記述がある。14論文を収め、上掲の Peiffer 教授のものは第5論文である。寄稿者は、建築家、歴史家、建築史家、科学史家、ソフトウェア開発者、美術史家、計算機科学者といった人たちであり、編者による序文では

... The original project was prompted by the awareness of an extended field of interaction between the new digital technologies of vision and the history of perspectival representations. Recently developed tools for digital imaging offer new ways to investigate and analyze traditional perspectival renderings. ...

とある。実際、第3論文

Martin Kemp & Antonio Crimsi: Computer vision and painters' visions in Italian and Netherlandish art of the fifteenth century

では、Masaccio の聖三位一体（サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂）および Jan van Eyck のアルノルフィーニ夫妻像（ナショナル・ギャラリー）、Robert Campin のウェルレ祭壇画（プラド美術館）を、原寸の画像と、いくつかの想定に基づいたコンピュータ・ソフトによる画像とを比較して論じている。例えば、マザッチオの遠近法は、厳格な計算に基づくというよりも、心理的な遠近法というべきものであって、聖三位一体が現出するアルコーブの床面や天井の格子が正方形であるか長方形であるか簡単には決定できないことが示されている。ファン・アイクおよびカンパンの画中には凸面鏡とそこに映し出された光景が描かれており、ソフトを利用して、特に、窓枠やドア、ベンチの線などがどのように映るべきかを示した上で、実際の絵との比較を行っており、ファン・アイクの場合は、恐らく、視覚的效果を優先して、本来あり得ない形に描いているがカンパンの場合は相当に正確であるという。ところで、光学器械が早くから利用されていたのではないかという意味で、ブルネレスキ・アルベルティ以来とする伝統的な遠近法の展開史への疑念を示しているサイトがあることを以前教えてもらったが、そこでは上記ファン・アイクの上の絵画中にある凸面鏡内の光景などが例に挙げられている。しかし、Kemp らの論文にあるコンピュータ・ソフトを利用した画像解析の結果に従う限り光学器械云々の先行性という主張には無理があるようである。

第3論文に引き続き、

Mario Carpo: Alberti's Media Lab

という論文があるが、まだ、目を通し終えていない。前記 Peiffer の論文を含め、本書所収の14論文中、目を通したのは、じつは、第3論文だけである。

80. (09.06.14) 前回(79回)記事で紹介した論文集中に Alberti を論じたもの

Mario Carpo: Alberti's Media Lab

があることはすでに述べた(同書 pp.47-63)。行き帰りの電車内でのあやしげな読み方ではあるが、この論文が、また、すばらしく面白い(と思った)

疲労がたまった身には、読もうとする意欲を維持するためには、往々失敗に終わるそれなりの努力が要るものなので).

論文の冒頭で、著者 Carpo は

At the end of Middle Ages, Leon Battista Alberti, the universal man of the early Renaissance, aimed at identical reproduction of almost everything: (... , in short) of almost every manifestation of art and nature.

と言う。しかし、関心という点でも技術という点でも、時代とはあっておらず、当然、Alberti 自らがいろいろな工夫をしなければならなかったわけであるが、多くの場合、目論見どおりの効果が得られたとは言いがたいと述べる。だが、

Yet Alberti's often odd machinations highlight one of the most significant turning points in the combined histories of art, science, and the media, which is one reason why they deserve closer scrutiny. Alberti's technological predicament also curiously resonates with our understanding of today's digital revolution (...).

と注意する(実際、末尾の (...) には , as will be shown below. とある)。

Carpo は、Alberti が手書き写本の時代に育った人間であったためか、「複写」の信頼性に懐疑的であり、特に、画像や図面の(手に抛る)複写には価値をまったく置いていなかったということに注意している。Alberti は、しかし、建築家であった以上、図像自体の意義は承知していて、したがって、画像情報を、直接的な図像の形で残さず、分析的な座標情報とそれらからの再現手段の記述情報に分解して、例えば、顧客への伝達に用いたという。事例として、ローマの測量図(Descriptio urbis Romae)を挙げている。しかも、Alberti のこの発想は平面的な対象だけでなく、形状把握の困難な立体的な彫刻像の処理にまで及んでいたという。まさに、現代の「立体複写」の先取りであるが、この基礎にある Fourier 変換や Radon 変換の基本的なアイデアは思いつきようもなかった時代である – 今風の後知恵ではあるが、これらの数学的理論も Alberti を遠祖と仰いでもおかしくない、あるいは、遠近法 – 射影幾何の展開の延長上にこれらがあるのだから、そう考えるのが正当なのかも知れない。

やや脱線したが、Alberti のこだわりの背後にあるのは、「真実」あるいは「事実」をどう Alberti が捉えているかということであろう。Carpo は、この点は余り問題にしているようには見えない。むしろ、Alberti の外にある「事実」、文字通り、客観的事実というべきものであろうが、Alberti はそれを観察ないし観測によって解釈の形で把握して、しかも、その解釈は、そのまま第三者と正確に共有できるよう、管理可能に整理して、Alberti の内の「事実の把握」となったであろうという、その過程の方に着目している。大切な

は、「事実」の構造に立入った整理を試みていること、上述で言えば、再現手段が関わる場所である。当世風には、「情報」のデジタル分解と再現アルゴリズムが Alberti 流の「事実の把握」ということにはなる。

Carpo は、論文の最後の段落で、

It is too soon to tell if, or rather when and where, digitally driven differential reproduction will first start to dismantle the visual and social practices that have been imposed on us by four or five centuries of mechanical standards. When this happens, the dominion of the identical will also be over, and, as mechanical reproductions begin to fade from our technological and cultural landscape, we may have to learn again some visual skills and practices of visual cognition that were common before the rise of mechanical indexicality. And as we try to anticipate and to interpret the forthcoming revival of the algorithm, and the concomitant decline of the mechanical index, we may realize, oddly, that Alberti and his real mentor in such matters, Aquinas, could show us the way. For they could probably understand today's digital revolution. Many of today's late modernists evidently cannot.

と述べている。ああ、Aquinas かという想いではあるが、Aquinas については、漠然どころか全く知っているとは言えない（Copleston の Penguin 叢書本は持っていたはずだが）。なお、could show us はむずかしい。仏文ではどうなっていたのだろうか： *auraient pu nous montrer* かしら。

81. (09.06.29) 先週6月21日の日本経済新聞の書評欄に、

藤井直敬：つながる脳（N T T出版，2009）

ISBN 978-4-7571-6042-2 C0045

が紹介されていた（ただ、評者はちゃんと読んだわけではないらしい — 新聞書評の常ではあるが）。

当ブログでは、William M. Ivins, Jr. の筋肉接触感覚と視覚に基づく空間認識の対比の議論に触発された議論を展開したいというのがそもそもであった（第1回記事～）。ただ、個々の脳レベルでの筋肉接触感覚や視覚についての話と、ある社会や文化が、そういう感覚に基づいた空間認識の傾向があるというのは、全く別の話である。しかも、これは個体水準での脳の活動について詳細な知見が得られたとしても、集団となり、ある社会や文化の空間認識のこととなると、検証可能な形の議論が可能なかどうか見当も付かないと思っていた（今も、まあ、そう思っているが）。その上、Ivins の話は70年前の知見に基づいている。本質的な洞察を伴っているかどうかとも、厳格には不可知ではある。

もちろん、最近の脳科学が長大な進歩を遂げ、脳の各部について司っている機能が詳しく知られていることは、(薄々ながら) 承知しているつもりである。だが、Ivins が着目したような意味での、視覚に基づく空間認識と筋肉接触感覚に基づく空間認識の構造の違いが、脳活動の相違としての的確に説明できているのかどうかとなると、これは個体水準でも未達なのではないだろうか。まして、複数の脳が関与する社会的な空間認識となると、アプローチ自体の意味さえ問題になり、本書の著者の言葉を借りれば、「ファンタジー」(172 ページ) の域にさえ到底届きそうもないと思ってはいた。

そこに、この標題の本である。跳びつかないわけではないのだが、著者の略歴を拝見し、例によって、「はじめに」と「おわりに」を見ただけで、わたくしが無知ただけで、著者の藤井氏が大変な人であることがわかった。上に触れた関心とはやや違うが、そしてどう違うかは分析して見せる必要はあるだろうが、著者は「社会的脳機能の解明」という、より広大な文脈に属する課題に果敢に挑戦しているところであることがわかった。本書で著者は研究の背景や経過を述べているのである。

本書を読んで、まず、感心するのは、著者の並外れた言語使用の感覚の鋭さである。しかも、その鋭さを「意味」を的確に、かつ、深く把握するために行使する。つまり、言葉遊びに嵌まり込んだり言葉に酔ったりはしない、要するに、銜うところが全くないのである。例えば、「はじめに」には副題「脳科学はヒトを幸せにできるか」が付されている。一般化して言えば、研究をするということや研究者であることの意味、したがって、研究内容の価値を意識していることが伝わってくる。

本書は序章、第1章～第6章の6+1個の章からなる。序章では、理化学研究所に移って「社会的脳機能の解明」を課題とするに至るまでの研究者としての私的葛藤の若干を語る。さて、著者は(縷々述べた後)「社会的脳機能」を

自分のやりたいことを実現するために、社会という目に見えない
構造を上手に操作し、さらにその場の空気にあった正しい振舞い
を選ぶための適応的な脳のはたらき (16 ページ)

と定義する。「定義してみせる」と言うべきかも知れない。このように、語義を明確にして論ずることは、有効な研究の遂行上不可欠であり、また、今の場合なら、読者を著者の論旨にヒントを得たかもしれない勝手な妄想に陥らせないための最低限の手続きではある。一方で、しかし、著者が人それぞれの立場による自明と非自明の区別ができることを示しており、ジャーナリストとしても極めて優れた素質の持ち主であることを示唆する(わたくしはそうではないから、こういう韜晦な言い方をする)。とは言え、定義だけでは何もできず、実際、この定義の機能的側面というべきもの

自分を取り巻くあらゆる環境の中で、一瞬の内にもっとも適切な
行動をとること (18 ページ)

を抽出して、2頭のサルを使った実験を考案し、実行し、記録し、分析している。その内容は、第2章に述べられる。しかし、著者は、ものごとを根源的に考えようとする人らしく、まず、第1章「脳科学の四つの壁」で、著者の思想を（恐らく）存分に展開しようとする。実際、この章は面白いし、本書の中でも、もっともページ数を食っている。簡単に紹介できないのは残念だが（と言うより、メモが取りにくいくらい考えさせられたので）、ここで、まさに、研究をするとはどういうことか、正しい研究姿勢はどうあるべきか、これらが単に論文を書くためではなく、何らかの新しい知見、それも（できることなら）有意義な知見を得ることではないか、そして、それを阻む種々の「壁」が論じられる。ただ、著者は意外と楽観的である、と言うのは、「壁」の性質を的確に捉えることが崩し方に通ずると信じているからであろう。特に、博士号を取得したばかりでいよいよ自分の足で立とうという若い研究者には（専門分野にかかわらず）この章はお勧めである。

本書の技術的な内容は主に第2章に述べられている。とまれ、「社会性脳研究」という課題への取り組みの姿勢として、

何らかの形にするには大事なものを確保して枝葉は切り捨ててい
かないと何も始められません。全体像があれば細部は後からいく
らでも詰められますからね（84 ページ）

と言う。そして、実験を設計するために、「適応機能」を

予測困難な他者を含む現実社会環境で最小のリスクで最大の利得
を得るための行動選択の仕組

と定義して、2頭のサルを対象に実験し、観測し、結果を分析する。手法の選択についても説明がある。著者の開発した「慢性多電極記録手法」というマイクロマニピュレーターに付けた微小電極をサルの脳に刺すという侵襲的手法とモーションキャプチャ装置を組み合わせた「多次元生体情報記録手法」（MDR）という自由度の高い実験手法を用いたという。「慢性多電極記録手法」は、原理的には脳のどの場所からも神経細胞の同次記録が可能であり、信号の時間分解能が高く、脳部位特異的な活動記録が可能という、脳波やfMRIなどの非侵襲的手法にはない特徴があるという（95 ページに手法の比較表がある）。

前頭前野（左半球背外側一）と頭頂葉（エリア5）に電極を刺したのだそうである。いずれも皮質連合野とよばれる高次認知機能に関わる領域だというが、このままでは、まあ、わたくしには実感の沸くような文章ではない。だが、2頭のサルを使った実験の結果、前頭前野のベースラインの持続的活動の変化が社会的文脈を反映し、サルの社会活動の変化が引き起こされている可能性があり（110 ページ）、頭頂葉に関しては、他者との関係性に基づく認知様式の変化という新しい発見があったという（118 ページ）。121 ページに、

自分の行動を変化させるような社会的に意味のある他者が相手でなければ頭頂葉は変わらない[...]. つまり、頭頂葉は主観的で頑固なのです。

と述べ、この結果が

個体ごとの主観的な社会環境認知の仕方によって、世界の意味が変わる (121 ページ)

ということを表していることに注意を喚起している。

引き続き、著者は従来の研究結果、特に、道具使用の場合の頭頂葉の神経活動に関連し、従来の入来篤史氏らの観察では

頭頂葉における神経活動様式の変化を各個体の身体イメージの拡張という視点で捉えてき[...]. た (125 ページ)

が社会性課題を加味した著者の実験によって、さらに、

頭頂葉が見せるフレキシブルな反応特性は自己の身体的認知に限った機能ではなく、むしろ自己を中心として他者の身体や環境情報を表現する、より一般的な社会的空間認知機能を表現している可能性がある (126 ページ)

という解釈が導かれると言う。

以上の実験の結果、著者は、結局、

抑制というものが社会性の根本にあるのではないかというのが実験を通じて到達した僕の考えです。本書でみなさんに一番お伝えしたかったことは、この一言です。Homo Confuto (我慢するサル) としてヒトを捉えることで、おそらく脳研究は大きく開いていくのではないのでしょうか (128-129 ページ)

と言う。肝腎の2頭のサルに対する実験の紹介を省いてしまったが、そういうことであり、しかも、脳の神経活動の形で検証されていることが大切どころである。

第2章の残りで

ヒトとヒトとの相互作用は、抑制だけでは説明できないのではなか？協調だってあるのでは？

という疑問を検討しており、サルにもチンパンジーにもヒトのそのような協調行動は観察されないことから、抑制性がより根源的であると言う。抑制性と社会的適応性を論じ、

選択的抑制コントロールが社会的適応知性 (135 ページ)

であると結論し、以後の研究をこの線で行なうとしている。

(長大になったため、第3章～第6章は別稿としたい)。

82. (09.07.13) 前回(81回)の記事の続き、藤井直敬氏の著書の後半の(一部の)話である。

第3章、その標題は、「壁はきっと壊せる」であるが、そこで、著者は、サルによる実験を予備的段階であったとして、四つの取り組み、すなわち

1. 大規模記録手法開発による汎脳機能理解
2. 主観的脳内表現の客観的理解
3. 社会的意思決定のメカニズム解明
4. 脳機能からみた社会の仕組み解明

を挙げ、進行中、計画中のことを述べる。特に、後半の3, 4は極めて大きな課題であり、普通の研究者なら、せいぜい2を念頭に、3, 4に至っては夢想することもなく、1に集中するだろう。恐らく、著者の場合も当初はそういうことであったのだろうが、1の研究の成果を検討しているうちに、研究の視野が拡大したのだろうと思う。ただ、その芽はもともとあったことなのだろうから、著者の formation (フォルマシオン、仏語的に) の質の高さが伺われる。

さて、ここでも著者は、大局観を重視した研究姿勢の基本に遡り、

脳の広範囲から神経活動を記録し、ネットワークレベルでの脳機能を関係性という視点から理解するために、今できる最善の方法は、脳の広範囲にまばらに、しかも数多くの電極を配置し、そこからの神経活動を慢性的に記録するという手法だと僕は考えます (139 ページ)

と言う。ここで、「関係性」という語には傍点が打ってあり、また、「慢性的」というのは医学用語であって一定時間継続的にという感じの意味を持っている。具体的には、ElectroCorticogram (ECoG) 電極を利用して、神経細胞群の集団としての挙動を示すという LFP (Local Field Potential) を測定したところ、予期していた以上に多くの情報が得られたのだそうである。ここまでが大体四つの取り組みの1. (の少なくとも半分以上) に相当するらしい。

1. を(いわば)完了させるためには、こうして得られたデータの解析が課題なのだそうで、まだ、試行錯誤中とある。それでも、ダイナミックなネットワークシステムとしての脳内伝達メカニズムの一端を覗いているのだと感じている(144 ページ)境地には達しているようである。

2の課題はもっと難しい。

「感情」と「情動」を(とりあえずの)鍵語として、定義を挙げ、検討しているが(145 ページ)、脳活動の観測上は、区別することは当面有益ではないとして、両者を情動または情動反応として議論を進めるとしている(147 ページ)。後に、152 ページで「感情」を

情動を含む無意識下の認知システムの処理結果を意識的に取り扱うための主観的認知ラベル

と定義する。

この定義は、情動というメカニズムが環境や社会への適応機能を併せもっているため、原因と結果というような単純な構図で説明することはできない(148 ページ) こと、ヒトの場合の「構造」の複雑さゆえに、感情が、本質的に生死に関わるような重大な意味をもたない、自分自身が勝手につくりあげた主観的なものである可能性があるという考察を踏まえている。この定義に基づいて、著者は、社会的要素を組み込んで、情動システムや感情システムの脳内活動をどう観測するか実験法のアイデアを検討している。こういうところが、操作性のある脳科学研究ということなのだろう。

なお、ここで、著者が指摘する感情レベルでの原因と結果の不明瞭ということは、主観的ないし心理的な時間の解釈の立場では非常に深刻なことのほずではある。

(この項続く — 忙しすぎて、藤井氏の書物を持ち歩いていないので、当分記事の補充ができないので)。

83. (09.08.01) 前2回の藤井直敬氏の書物を差し置いて、最近の経験に基づく観察を記しておきたい。

現在の勤務先の高校生がさる国際的な(まあ)学力コンクールの世界大会に日本代表の一員として参加し、優秀な成績を取めた。日本チームも今までの参加チームより高位の成績を取めたという(文部科学省のサイトに関連する記事があると聞くが最近多忙のため未確認である — 文末の付記参照)。

地方のことであるし、勤務先の学校や設置法人の意向もあり、帰国後に表彰や記者取材や、さらに、知事への表敬訪問まであり、優秀な生徒の驥尾に付しての同席の機会が例によってわたくしにも生じた。

印象深かったのは記者の取材であった(ただし、どのような記事になったか未確認である)。新聞紙面を構成している世界観が取材姿勢に現われていて実に興味深く、当ブログの趣旨にも関連すると思われ、記録しておきたいと考えたのが今回の記事である。

取材は新聞二社と系列の大学の学生広報誌の記者たちによって行なわれた。質問は、主に、二紙の記者から行なわれたが、かれらの設問の組み方から新聞社が読者に伝えたいとする世界像が浮かび上がってきたのが、列席者のわたくしには大変面白かったのである。

どう面白かったを説明する前に、わたくしの理解の範囲で、状況を述べておこう。今回の大会は50回目の世界大会であり、ドイツで開催された。参加国は約百カ国、各国6名ずつのチームで、参加者生徒数は六百名に及ぶ。滞在期間は約二週間、二日目、三日目に、それぞれ三題ずつの問題を解き、最終日に表彰が行なわれ、成績によって、金銀銅のメダルが授与される。したがって、大半の期間は交流行事や自由時間である。滞在は、近隣大学の夏季

休暇中のドーミトリー（寄宿舍）を利用し、食事はヴァイキング形式であったという。滞在の部屋割りは基本的に国別であったようで、各チームにガイドというかそれぞれの国語を理解する世話係が付いていたそうである。問題や成績に関する技術的なことを述べれば、これだけの参加国に公平に出題が可能になるような配慮がある。すなわち、国別の教育内容を前提に、技術的な知識水準は限定されていて、発想力や構想力、洞察力が験される形である（ただし、参加した生徒に訊いたところ、事前訓練で相当に効果は上がると思うということであった）。そして、生徒たちが母国語で受験できるような事前準備が周到になされている。成績評価についても、恐らくは、解答の完成度の高さが最優先される形ではあるまい。また、最終日の金銀銅の評価も上位何割に金、つぎ何割に銀というように行なわれている。もとより、このような運営の仕方は、世界大会の本来の目的を反映したものであり、これについては、対応するサイトやあるいは日本国内の対応する機関のサイトにある。上記文部科学省のサイト内の記事がわかれば、迎えることができるだろうということ、ここでは詳述しない。

さて、このような大会に日本チームの一員として参加し、金メダルを持ち帰った地元の子がいるとしたとき、どのような記事を構成すべきか、それが新聞社の課題である。新聞社が、この場合に、読者に伝えたいとする描像が記者の設問から垣間見え、同時に、尋ねようとしなかった部分から新聞社の読者観も見えてくると思う。もとより、この件は、関連するサイトを見れば、詳細な状況を知ることができる。だが、そのような行動をするであろう人は極めて限られている。他方、記事から関連サイトを探ろうとする人もいるかも知れないが、日本の新聞の場合、そのためのサービスを提供しないのが習慣である。したがって、新聞記事はこの件に関して読者に完結した印象を与えることが主眼ということになる。ただ、完結と言っても、記事の長さに依存する。

記者が尋ねたことは、開催地はどこだったか、事前に何をしたか、問題は難しかったか、賞をもらったの感想はどうだったか、コンクールを終えた後仲間とどんな話をしたか、家族に連絡したか、家族の反応はどうだったか、将来の進路は何か、小さいときからこの面での才能はあったと思うか、家族兄弟も同様か、何かほかに趣味があるか、来年はどうするか、ということであった。同席したわたくしが、エクスカージョンではどこに行ったか、街を歩いたか、他国の出席者と交流したか、食事のときはどうだったか、参加国はどのくらいか、世話はどんな風にしてくれたか、というような質問を補ったように思う。つまり、記者の関心は、世界大会の趣旨や意義、参加して好成绩を挙げることの意味といった行事本来のことには向わず、眼前にいる少年だけに向って、その実、その彼に関心があるのではなく、彼が首からぶらさげている金メダルだけに用があるわけである。もちろん、それが悪いと言っているのではない。記事の三分の二の部分はそれでいい。だが、残り

三分の一では、この「快挙」の意味や意義に触れられるような取材をしてほしかったと思う。

この場合に限らないが、全体像を示すべきことを忘却し、現象のごく一部にだけ焦点を絞って、そこだけに光を当て、残りは闇の中に留めてしまっているような記事が、結果的に作成されてしまう場合は多いであろう。どうしてなのか。どうして（現代日本では）それで構わないとされているのか。そこが問題であり、まあ、当ブログの密かなテーマでもある。

ところで、上記の世界大会であるが、このコンクールの性格もあるのであるだろうが、決して、参加国チームの成績が、それぞれの国の一般的な教育水準を反映しているとは言えないであろう。日本チームの場合でも、複数年連続して代表に選ばれている生徒も多く、また、今までの代表チームを通算しても、生徒の所属校は極めて限られている。また、既述の通り、出題内容も特別である。こういう場で好成績を挙げることには、確かに意義はあるが、それだけで（国や社会が）満足することはできないわけである。

付記：この新聞だけではないと思うが、産経の7月末の社説に関連記事があった。この手の「学力」コンクールでの「好成績」は必ずしも国の教育力の質を意味しない。後者は教育行政だけの問題ではなく、社会の雰囲気が大きく、その雰囲気を醸し出すのに影響力があることを自覚している人たちには社会の今についてだけでなく、将来についても責任があるわけである。なお、当該のコンクールについて文部科学省の報道発表があった。隣接する分野のものについても同様。（平成21年8月9日追記）。

84. (09.08.16) 藤井直敬氏の「つながる脳」を中断して大分時間が経ってしまい、改めて読み直さない限り、きちんと思い出せないことも多くなった。とりあえずは、メモに従って、前（82回記事）の続きを埋めておこう。

本来の反射的な情動システムが新皮質に覆われて感情という言語的認知ラベルが貼り付けられて高次認知システムの一部として取り扱われるようになったと藤井氏は主張するのであるが、つまり、整理して、151ページで、

私たちの感情は、それが意識上に現れた瞬間には、すでに情動とそれに関係する文脈情報が無意識下の認知メカニズムによって評価され、それに対応する特定の「感情」という言語ラベルがきちんと決定されていることとなります。

と言っている。かくて、

意識に上った後の感情は、すでに言語的なラベルを貼られているので、発現した感情について自分の言葉を使った主観的解釈が可能です。しかし、どうしてそのような評価が下されたかについては、全く説明がつかないこととなります。

と結論し、藤井氏は、さらに、感情の起源に関して、

ヒトのその複雑さを考えると、一意に決定できないだろうというのが僕の立場です。また、決定できない以上、起源を求めることが科学のコストとして意味のあることとも思えないのです。

とクールに突き放している（152 ページ）。

このような考察を経て、(すでに、82 回で述べたように) 藤井氏は「感情」を

情動を含む無意識下の認知システムの処理結果を、意識的に取り扱うための主観的認知ラベル

と（とりあえず）定義したのである（152 ページ）。以上を踏まえて、情動や感情を社会性実験に組み込んでみようというのであり、二頭のサルを利用した実験の延長上での研究プランが述べられている。

つぎに、さらにややこしい問題、社会的意志決定のメカニズム解明を論じているが、「自由意志」という、日本の伝統的社会ではあまり表だって論じられて来なかったテーマが関わっており、ここでも言葉の意味を明確化する努力をまず払った上で、藤井氏の立場が示される。

自由意志とは、行為者としての私たちが、行為を自らの意志でコントロールできるのか、という問いで、それに対しては、大雑把に決定論と非決定論、そして両立主義の三つの考え方があります。（156 ページ）

と説明した上で、

自由意志の定義次第ですが、僕には存在そのものが明らかな気がします。なぜなら、() ヒトという予測不可能なものが集まっている社会もまた予測不可能であり、そこには因果関係で完全に支配された世界というものはあり得ないと思うのです。つまり、脳が宇宙のすべてを知って完璧な未来予想を行っていないかぎり、予測不可能な行動を選択する可能性をもつという意味での自由意志は否定できないと考えるのです。（157 ページ）

と述べる。ところで、自分が自分の行動を意識する前に脳が活動を始めているということに関連して、

脳科学者にとっては、無意識下だろうが意識下だろうが、意思が決定されて、それが実行されるまでの脳内プロセスを追いかけることが重要なのだと思います（158 ページ）

と藤井氏は言う。要するに、手が着けられるというわけだが、こういうプラグマティックに見えるけれども、実は本質的な攻撃点を見つけだす著者の嗅覚がすばらしい。意志と意思の使い分けがされているところにも、微妙な思想的な考察レベルの違いを含ませているのであろう。そして、引き続いて、

この意思決定メカニズムの解明には、やはり社会的要素を組み込む必要がとを考えています

という。実際、社会的要素を欠いた課題だけでは十分な結論が得られないとする示唆的なサルでの事例を注意している。その教訓的なフレーズとして

ヒトが合理的でないという理由の一つとして、社会的要素は非常に大きいのではないのでしょうか。

という。「合理的」の内容を論じておかなければならないが、サルの場合なら報酬と罰則だけで説明できるはずの行動の単純さが必ずしも実現されないことに対応しよう。もとより、社会性研究は簡単なことではなく、

腰を据えて研究の仕組みから整備しないといけないのです。()。意思決定メカニズムの一部だけとってきたり、社会性フレーバーをちょっと付け加えたりするような小手先の研究では、本質にいつまでたっても辿りつけません。(159 ページ)

という。著者は研究の方向性に自信と確信をお持ちのようであるが、一方、(ここで批判の対象として) 挙げられているような動向の研究者もいないわけではないのであろう。

実は、この章の残りの部分や次章以下で、もっと重要な、しかし、現段階では、speculation に留まっていることが述べられていたと思うのだが、印象がやや薄れてしまった。それこそ斜めにでも見直さないと続けられない。

81 回記事で言及した「ファンタジー」云々は、これから顔を出すことである。サル 2 頭の実験の繰り返しに基づく知見から、ある種の人間社会の空間認識の構造を「つながる脳」的観点で捉えなおそうとする企てまでには、気の遠くなるような距離があることではある。

85. (09.08.18) ところで、実は、最近持ち歩いているのは、やや大部の書物

Samuel Y. Edgerton, Jr.: The Heritage of Giotto's Geometry
– Art and Science on the eve of scientific revolution –
Cornell University Press, 1991
ISBN 0-8014-8198-8

である。この書物は何かの偶然で随分前に手に入れたはずだが、例の如く、部分的にしか目を通していなかった(既述。36 回記事参照)。先頃、放送大学文京学習センターの対面授業の折りに、資料として持参したうちの一冊でもあった。このときは、本書の第 8 章

Geometry and Jesuits in the Far East

だけを利用するつもりであった。なお、この表題の Far East というのは適当ではない。明末清初のイエズス会士 Matteo Ricci らや徐光啓の活動を述べてはいるが、先行していたはずの日本布教についてはほとんど言及がない。つまり、今日の語義でいう Far East に当たらないであろう（し、記述の偏りも心配される）。他方、明清等に関する部分については、中野美代子教授の著作と突き合わせてみなければならないと思っているが、手元に今はない（36回記事を見られよ）。

わたくしは、著者の Edgerton がどのような人であるかは不承知なのであるが、勤勉なエッセイストながら独創的思索家という分類には馴染まないという印象を受けた。本ブログのもとになった Ivins とは違うのである。

さて、本書の内容であるが、序章、終章のほかに、8章ある。すなわち、目次は

Introduction Geometry, Renaissance Art, and Western Culture

1. Sicut haet figura docet: Conceptualizing the Third Dimension in Early Medieval Picture Making
2. Geometrization of Pictorial Space: The Master of the Second Painted Modillon Border at Assisi
3. Geometrization of the Supernatural: Fra Lippo Lippi's London Annunciation
4. Geometrization of Terrestrial Space: Inventing Pictorial Conventions
5. Image and Word in Sixteenth-Century Printed Technical Books
6. Geometrization of Heavenly Space: Raphael's Disputa
7. Geometrization of Astronomical Space: Galileo, Florentine Disegno, and the "Strange Spottedness" of the Moon
8. Geometry and Jesuits in the Far East

Epilogue

となっている。ほかに、謝辞、索引、文献表が付いている。

さて、Introduction と Epilogue から著者の見解が推察される。それは、大体において、西欧ルネサンス美術におけるユークリッドの幾何学の意義を論じ、特に、明や清の思想と対比して、西欧ではユークリッドの幾何学原本が神による世界の創造の記録の論理的な解釈として把握されていたから、これから科学が生じたが、明清を典型とする非西欧世界では、ユークリッドの原本が17世紀初頭の漢訳によって紹介されるまで知られていなかったことからわかるように、世界を論理的に把握する習慣はなかったため、体系としての自然科学が成立しなかったというようなことであろう。

例えば、Epilogue の第2節 (p.288) には、

... [A] fundamental difference existed between Renaissance Europe and Ming-dynasty China in this respect – not only China but all non-Western cultures everywhere in the world at that time. As we have seen, a unique tradition rooted in medieval Christian doctrine was growing in the West: it was becoming socially de rigueur for the privileged gentry to know Euclidian geometry. Even before the twelfth century, the early church fathers suspected they might discover in Euclidean geometry God's very thinking process. In other words, geometry, along with arithmetic, astronomy, and music, sister arts of the ancient quadrivium, was believed to speak the language by which God first inscribed his natural laws of the universe.

とある。

こう書くと、特に問題があるようには見えないかも知れないが、わたくしは感心しない。果たして思想上社会上の規範性だけの問題なのか、また、そうだというのなら、そこを踏み込んで分析すべきであったろうと思ったからである。かくて、Ivins と比べると、著者が独自の観察に基づいた説得力のある切り口を示していないこと、そして、その結果であろうが、繊細さに欠けていることが、どうしても否めない。ブラウズした限りでは、本書には興味深い図版も多いし、話題の扱いも標準的なようで手堅い印象はあるのだが、まさに、こういう点に不満はある。

86. (09.08.27) 先日の日曜に広島往復の用務があり、往路、博多駅の売店で

ビートたけし・村上隆：ツーアート

光文社 知恵の森 2008.

ISBN978-4-375-78521-5

を購入した。売れていますと店頭にはあったけれど、半年以上前のもので再版でもなかった。しかも、もともとは4年前の単行本（ぴあ株式会社、2005）であり、その文庫化であった。実際、論じられている話題の時点が昨年後半以来の経済危機を反映していないと思ったのだが、この時間差に気付いたのは、この記事を書こうと思ってからである。

村上氏の著書「芸術起業論」は13回記事で論じた。これも数年前の著書で、もとより、氏のスタンスはこの程度の社会変動では変わらないと思うし、ビートたけし氏の方も、本質は時間経過でそう簡単には変わらないだろう。

実際問題として、この人たちの対談風出版物をどう料理するかは非常に難しい。一体、この書物が対談なのかどうかはさて置いて、ビートたけし氏と村上隆氏の「文」の文体は全く違う。ビートたけし氏と村上氏とは格が違うというわけではないだろうが、少なくとも、村上氏はビートたけし氏に対して

は謙り、一目も二目も置いているが、文体の違いはそういうことだけでは説明できない。ビートたけし氏の文体は、荒っぽい感じもあり、感覚的である。しかし、氏がもともと漫才師であるということは強調されているので、明白な計算に基づいているはずでもある。一方、村上氏は、また、別の計算があるのだろうが、語義の管理に注意を払いつつ、比較的丁寧な文体を用いており、例えば、英語に翻訳することも難しくはないと思われる。

ところで、本書は、冒頭の口絵で、まず、両氏の、漫才風舞台衣装で並んで立ちながら、それぞれに違う方を眺めているという、上半身の写真があり、続いて、ビートたけし氏の絵画数葉、村上隆氏の絵画数葉とあり、それから両氏の先ほどの写真の全身像が示され、下半身はスラックスは足元に落ちていてトランクスと毛脛が露われるという風になっている。本書の内容や姿勢を要約しているとも言えるかも知れない。題名にあるツーアートもたけし氏のツービートというグループをもじったものであることは言うまでもない。

本書は一応五章立てで、各章はビートたけし氏と村上隆氏の節が交互に並ぶ。細かく紹介することはできないが、章立てならば、次の通り：

- 序 章◎たけしとたかしのアートな出会い
- 第一章◎そもそも、アートってなんだ
- 第二章◎ところでアーティストってどいつだ
- 第三章◎どーしたら、アートは生まれる
- 第四章◎アートとにっぽんを考える

「アート」や「アーティスト」の定義に到達しているわけではないが、「アート」の必要条件が日常性の延長からはみ出したものであることは両氏の共通了解ではあるようだ。ただ、はみ出し方が論理的で計算ずくのものであるか偶然でいけば目利きの結果であるかは議論がある。「アート」と「アーティスト」の関係もよくわからないが、まあ、議論の筋からは、「ビートたけし」氏自身がまさにアートでありアーティストであるということになるのだろうとは想像ができる。実際問題として、わたくしはビートたけし氏をテレビのいくつかの番組といくつかのエッセイを通じて知っているだけで、非常に頭のよい人だとは思っているが、わざわざ金を払って芸や作品を鑑賞したことがあるわけではなく、わたくし自身の実感に基づいた観察はない。要するに、ビートたけし氏については何とも言いようがないのだが、そういうわたくしの貧しい「ビートたけし」体験でも、氏自身をアートとして把握することに拒絶感はない。敢えて言うのなら、氏が計算ずくでこう振舞っているのか、偶然、たまたまそうやって来ているのか — 氏自身はこちらだと言うだろうが —、その辺はそばでよく見ないとわからないのだろうが。

村上氏の立場は、13回記事で論じた「芸術起業論」より古いせいか、もっとよく見える部分があるとともに、未整理の部分もあるようではある。いずれにせよ、昨今の経済危機で多少環境が一時的にせよ変わっている可能性があるが、趨勢としては、世界と日本の違いについての指摘の本質は変わらない

いだろう。

最後の章の最後の節は、「アートとはなにか？」という問題に戻り、この標題でそれぞれの見解が述べられている。で、結局何か。両氏の共通項を強引にまとめると、今の自分の生の確認だろうか。

87. (09.09.05) 天神の丸善に久しぶりに寄ったところ、興味深い書物

溝口明則：数と建築 — 古代建築技術を支えた数の世界

鹿島出版会 2007

ISBN 978-4-306-04495-1 C3052

が目にとまった。著者は大変な碩学とお見受けするが、ホームグラウンドは建築史、しかも、長年アンコールワットの遺跡救済事業に携わってきているという。このようなことが著者のこの見識構築の重要な契機になっていることが、実際、「あとがき」から推察される。

さて、「はじめに」の冒頭で、古代の大建造物を目の当たりにして沸く基本的な疑問、つまり、なぜつくられることになったのか、どのような構想に従い、どのような過程をを踏んで実現したかということは、全体としては、現在でもほとんど未解決といっていだろうと指摘する。なぜか。この疑問に答えるためには、その文明の全体を対象とするような、輪郭が見通せないほどの視野が欠かせないからである、と著者はいう。このような大問題であるが、それをこの本のテーマとして著者は採り上げようという。しかし、ここには著者のアイデアがあるので、

しかし、いきなり答えを求めようとするのではない。問題を限定

し、設計の技術について採り上げることにしたい

という (p.3)。そして、設計技術の核心が各部に適当な大きさを与えるということなのだから、したがって、大きさを制御するという方法に焦点を絞ろうという。

かくて、「古代の数学」と関わるはずであるが、著者は「古代の数学」についても原理的な検討を加える。

前後したが、目次を掲げよう：

序

はじめに

数学史における「数学」について

第一章 比例の背景

一 遺構のなかの「比例」

二 比例とは何か

三 古代の「数学」

四 古代ギリシアの「数」と比例

五 結び — 比例と分数、数学と計算術

- 第二章 ウィトルウィウスの比例概念
 - 一 ウィトルウィウス「建築書」の比例
 - 二 完数制とシュムメトリア
 - 三 建築家と「比例」
 - 四 結び 一 古代設計技術における比例の特殊性
- 第三章 数の操作・数による操作
 - 一 実用算術と数学
 - 二 黎明の演算
 - 三 ことばとしての数
 - 四 「長さ」を「面積」に加える
 - 五 数と「単位」と度制
 - 六 これは数学ではない
 - 七 結び 一 数を巡る三つの様態
- 第四章 古代の計測技法
 - 一 ものさしとは何か
 - 二 ウィトルウィウスの技法
 - 三 木割書の記述から
 - 四 結び 一 長さの制御ともものさしの技法
- 第五章 比例・美・設計技術
 - 一 再び比例について
 - 二 比例的解析の諸問題
 - 三 ハルモニア
 - 四 三分損益法
 - 五 東西の一二音階
 - 六 結び 一 比例と美の特異な結びつき
- 第六章 勾配を巡って
 - 一 「角度」の概念
 - 二 勾配制御の歴史的技法
 - 三 勾配決定の技法と「比例」による解釈
 - 四 結び 一 数の背後にある技術の世界
- 第七章 幾何学図形と建築
 - 一 かたち/幾何学
 - 二 幾何学の発生
 - 三 原幾何学
 - 四 幾何学の数学への吸収
 - 五 かたちを表すことば/幾何学と原幾何学
 - 六 結び 一 幾何学以前の世界
- 結び

さらに、以上に、

付章 ピラミッドの設計技術
一 ピラミッドの既往の分析研究
二 ピラミッドの構造
三 勾配決定の方法
四 多様性を許容する勾配決定法
五 宗教制とその後の展開
六 結び
あとがき

と続く。注は付いているが、索引はない。

目次を見るだけで、実に、示唆に富んだ内容であることは明らかである。

第一章第三節はさらに五つに細分され、古代エジプト、メソポタミア、古代ギリシアの「数学」の対比について注意している。前二者は数や図形を扱う経験的で直感的な操作が洗練されて成立した「術」であるのに対し、古代ギリシアのものは数や図形の特徴、法則性を論証的に扱うものであるとして高く評価する（現代の常識的）見方は、目的と数を見る視点における両者の立場の違いというものを看過していて、よくないと著者は指摘している。そもそも、

数を扱う行為がただちに数学であるという捉え方は、技術の実態を正しく理解するには問題である見方である

と著者は注意する（p.34）。ここで著者は「技術」として古代の、あるいは、当該のそれぞれの時代のものを指している。

なお、著者は、プラトンに従って、「計算法」あるいは「実用算術」、「数学」として、実用的な数値の処理に重点を置く立場と理念的な数概念の展開を重視する立場を（便宜上のながら）二つに区分している（後に、「非数学」という様相をも展開する）。

「比」について、著者は内外の関連文献を広く漁った上で、分数に相当するアイデアはメソポタミア、エジプトをはじめ各所の古代文明に現れるが、古典ギリシア世界では「数」が1の分割不能性のアイデアの上に組みあげられており、分数を「数」として認知する代わりに、比というアイデアが成長し、さらに、比例という（数の間に限定されない）関係性を表すアイデアが確立したと整理している。「比例」に数の扱いの上での本質的な普遍性があると思いをこむのではなく、文明相対的に理解すべきものだということである。

第二章は、「比例」を文明相対的に理解すべきことを示唆するために、ウィトルウィウスの『建築書』で展開される古典ギリシア由来の比例論と、唐招提寺金堂の柱間距離に展開的に見出される完数制を対比して論じている。挿入された図版に従うと、金堂を正面から見ると8本の柱が並んでおり、柱間距離は、左から 11,13,15,16,15,13,11（尺）であって、完数というわけで、基準長さの「ものさし」によって制御されたことを示している。柱の並びは左

右対称だが、「比例」で決定されるのなら、間隔が整数値をとる必然性はない。しかも、特徴的な数値が整数であるような古代の建造物は日本に限らずに多いという。「比例」ではなく「ものさし」だというわけである。ただ、「完数制」の適用を述べた建築の一次古文献は日本でも発見されていないそうである。

そこで、著者は、数の操作について第三章で詳細に論じ、その論議を踏まえて、「ものさし」、つまり、度制の本質を明らかにする試みを第四章で展開する。第三章では、まず「単位分数」の操作について述べているが、ここに示されている見解が著者独自のものであるかどうかはわからない。「比例」や1という数のアイデアに伴う分割不能性について補充となる論述ということであろうか。数の進制と「単位分数」による量の把握とは異なるものであり、「単位分数」は分配という行為に密着しているのかも知れない。つぎに、著者は、数が言葉でもあることを想起している。これには実質的な意味があるのであり、

数は確かに独立して演算の対象として扱われる瞬間をもっているが、同時に、数が形容する対象が演算の行使を限定するものとして、背後で機能している。数に付随する意味や限定を与える名詞(対象)の存在は実用算術と「数学」の区分にも関わる問題である

としてまとめられている (p.92)。実は、今日でもより抽象度の高いところで似たような指摘が可能であろう。物理や工学では、時間、距離、質量の「次元」というアイデアが方程式の扱いで必須であるが、数学ではスケール変換を通じてすべて無次元化してしまう。その結果、方程式の解は一見現実の世界への配慮なしで論じられることになるのである。ともかく、

古代技術は対象に即した存在であり、つねに対象を操作することを前提にしている。この過程で数の運用が関わっても、関心は、結局、数そのものではなく対象に向けられている

ことを注意している (p.95)。長さや数との関わりは、おのずから数えるという行為を保証している独立した個体対象の場合とは違うとは言え、当初は、特定の個体と結びついていたであろう。デジタルなどの長さの単位呼称はその名残かも知れないが、著書は

その後、強大な専制国家が成立するにしたがって制度化され、「長さ」の基準であることだけを目的とするもの、つまり「ものさし」が発明されることになった。公定尺が成立し、飛躍的に厳密さを獲得した時代は、人類が始めて強力な王権をつくり上げた時代である

と注意をする (p.96)。ところが、

長さはものさしを経て数に換算される。[...] 演算を介して、長さを数として制御することで、飛躍的な厳密さを獲得したのであ

る。しかし、実際に長さを制御する場面は、すべてを数的操作とみなしてしまえるほど単純ではない。度制の単位が付随する数も、長さを形容する性格と自身の独立した性格という二重性をもっている。したがって、数に関心が注がれる場合と、数が長さを形容する範囲に留まる場合とがありうる

と著者は言うのである (p.97)。例として山田寺金堂址が論じられているが、いずれにせよ、このような発想は数学者には想像しがたいものである。

著者は数と数との関係のように見えながら現実には数値化を伴わない操作もあることに注意している。アナログの世界というのでもないが、具体的には後に挙げられる曲尺の使い方などが例になるのだろうが、

このように、数を手がかりとしながらも演算を介さない操作を、仮に「非数学的な操作」と呼ぼう。数学や実用算術は、現実の世界から数を抽出し、数と数との関係に置き換え、数そのものを操作（演算）の対象とする。これに対し、「非数学的な操作」は演算とは無関係であるから、数学の世界にも実用算術の世界にも属さない。数学や実用算術の世界では、数に対する認識の相違があっても、ともかく数を主体として扱う場面を必ず伴うのだが、「非数学的な操作」における数は、何ごとかを形容する状態に、最後まで留まっていると考えることができる (p.99)

と著者は指摘する。この「非数学的な操作」が著者のアイデアなのであろう。著者は「数へのまなざしの変換」という語を使っている。この観点をもつことこそが古代の建造物の設計原理を正しく理解する鍵であるという思想に著者は到達されたのであろう。もとより、このような「非数学的な操作」が成立し信頼できる結果が導かれることは、例えば、曲尺の使用法のように、実は、数学的原理によって担保されていることが多いであろう。だが、それは著者流に言えば、「比例」関係を「発掘」するのと同様に、後世の解釈ということになるのだろう。

第四章以降の紹介は別稿にしたい。

補注 (9月18日): 「完数」というのは西欧語では何と訳すのだろうか。「完」を integral とすると、「完数」とは integral number, つまり、いま、普通には「整数」という訳語をあてるものになる。英語では、「整数」は integer と言うが、形容詞 integral あるいは whole で言及されることもある。だが、「完数制」を whole system とか integral system と呼ぶことは、もちろん、できない。

88. (09.09.07) 溝口明則氏の著書「数と建築」第四章以降であるが、87回記事で紹介した目次にあるように、第四章は「古代の計測技法」を論じ、特に、その第一節「ものさしとは何か」はさらに五つの小節に細分されて詳説されている。ものさしと度制は深く関わっており、

…「長さの基準」は、歴史の段階で区分される二つの様態をもっている。前期は人体の各部を利用して、場面に合わせて「長さ」を再現する工夫の時代である。これは部族共同体の歴史的段階に相応する。計測の基準となる人体の部位は、一見してものさしの成立を示すように見えるが、人体の一部であることで個体差をまぬがれることができず、それぞれの個体に帰属した長さの基準に留まっている。「人体尺」と呼ばれるが、これはまだものさしといえない。

これに対し、専制国家成立以後の時代は、起源として人体各部を用いた前史の成果に基づいてはいても、個体を越えた普遍的な長さの基準を獲得し、さらに雑多な人体各部から抽象化された基準どうしのあいだに、簡単な整数の換算関係を成立させている。個々の人体から離れた超越的な基準と体系化が実現している。

と説明する (p.120)。

「ものさし」として、他に、目盛りのないものさし、すなわち、現場尺、モドゥルスへの言及がある。ウィトルウィウスの『建築書』にもモドゥルスを用いる技法があり、著者は、それらが「比例」とは相容れないアイデアであることを注意している。そして、

技法の実態は、目前の特定の長さをそのまま分割の対象にしているのであって、対象を数に置き換えるという過程を経ずに行なう操作、「非数学的操作」である

と述べる。このことは「木割書」にある曲尺の用い方でより明白になるというのであるが、この使用法は、まさに、線分上の点の比の平行線による保存という比例原理に基づいている。技法として確立していく過程で、数学的な証明がなされた、あるいは、試みられたということはなかったであろうが、技法の信頼性を検証する手続きはあったはずである。もとより、その場合、該当する板を切り出して重ねたというようなことで十分であったはずだが、しかし、目視によってもっともらしい結果が得られているということでは満足は行かない話だろう。

この章の結びでは、

…ものさしの本質は、絶対的な長さの基準を体現することであり、そして、この基準にしたがって各場面の長さを数に置き換えて表現し、数の支配下に置くことである。しかし、以上に述べてきた技法は、ものさしの目盛りを介さずに長さを制御することが可能であったこと、そして、目盛りをもつものさしであっても、ものさしの本来の意義と離れたところで、長さや大きさを制御する使い方がありえたことを示している。

と著者は言う (p.133) . 最後の文の「本来の意義云々」は曲尺の使用法のことである。さらに、

… 技法を復原し、設計技術の実相を解読しようとする立場にとって、結果的に比例的な性格が認められるとしても、比例的であることだけを指摘することに積極的な意味があるとは思えない

と述べる (p.134) . そして、

ピタゴラス学派が構築した世界認識に対し、この種の技法を支える世界認識は、無自覚で素朴なものかもしれない。しかし、本当に理解しておくべきことは、両者の背後にある世界の見方が異質なものだということである。私たちは優劣を問わず、彼我の相違だけに注目すべきである。

とまとめている (p.134) .

ここで、ピタゴラス学派云々は、プラトン、ユークリッドといった古典ギリシアの数学観とされるものに繋がるのだが、考えてみれば、古典ギリシア人は筋肉接触感覚的な空間認識の世界に生きており、「無限」や「運動」のアイデアは認識できなかった。敢えて言えば、古典ギリシア人は、まさに、著者の言う「非数学的操作」の世界に生きていたはずなのである。それでも「比例」についての萌芽的アイデアを発見し、相当程度に展開することができたかもしれないが、無限を認識できなかった以上、「比例」の本質を完全に明らかにすることは不可能であった（これが Ivins の基本的な主張であり、また、後述の Eli Maor の書物 *Trigonometric Delights*, 特に、その第九章、でも注意されていることである）。古典ギリシア人にも「ものさし」や「モジュール」に基づく「完数制」の方が自然ではなかったかと思う。まして、実際の建築作業は奴隷たちが行なったとすればなおさらであろう。

第五章では、やはり黄金比が話題の中心になる。他方、ピタゴラス学派の比例のアイデアは音楽、弦や空気筒の基本振動数の関係から生じたということもあり、この点についての検討も加えられている。特に、三分損益法という古代中国の編鐘の十二律音階が詳しく論じられている。春秋時代に遡る内容の「記録」があるというが、古過ぎるのではないだろうか。考古学的遺物は解釈次第であるとするれば、この「記録」に即するのは、建造物と「比例」との関係と同じようなことになりはしないだろうか。いずれにせよ、この章の眼目は、

ギリシア文化圏の外の世界の遺跡に対峙したとき、私たちはそれぞれ
それぞれの文明でそれぞれに異なる、独特の文脈のなかに美の問題が
位置づけられていたであろうことを、つねに予想していなければ
ならないのである

ということに尽きる (p.70) . その通りだと思う。

ところで、この章には、(目盛りのない定規とコンパスによる) 黄金比の作図法が紹介されている (p.146. 図 9. コンパクト建築資料集成・第二版からの転載)。この方法は、直角の夾辺の長さが 1 と 1/2 の直角三角形を作り、その斜辺に着目して、一方の頂点から 1/2 の距離までの部分を斜辺から除いた残りの長さが黄金比の値 (の逆数) になることを利用したものである。ちなみに、この作図法は、

H. E. Huntley: The divine proportion – A study in mathematical beauty
Dover Publications, 1970

にもある (Chapter 2. The divine proportion. Fig. 3 p.27)。

さて、第六章は、「角度」の概念が古代建築に見られるかということ論じている。「角度」のアイデアは、そもそも天文学起源であり、建築では誤差管理が困難過ぎて利用されなかったのだそうである。勾配の制御は、ピラミッドにせよ屋根にせよ、古代建築では不可欠であるが、角度の概念とは無縁であり別物であったという。この章の「結び」で、

勾配を制御する技法について、世界各地に残る痕跡を整理した。いずれも角度に依存することなく、水平方向の長さとは垂直方向の長さを用いるだけで、勾配を十分に制御している。そして、エジプトの「セケド」と日本建築の軒勾配の決定法では、単位寸法を水平か垂直にあて、残り一方の長さを調節することで制御している。

とまとめている (p.202)。もちろん、三角関数の正接か余接として (今日では) 理解できることを行なってはいたのだが、少なくとも建築技術上は、「角」というアイデアが抽出されて用いられていたわけではないというわけである。実際、著者は

Eli Maor: Trigonometric Delights
Princeton University Press 1998
ISBN 0-691-05754-0

の一節

It would be ludicrous, of course, to claim that the Egyptians invented trigonometry. Nowhere in their writings does there appear the concept of an angle, so they were in no positions to formulate quantitative relations between the angles and sides of a triangle. ... We may therefore be justified in crediting the Egyptians with a crude knowledge of practical trigonometry – perhaps "proto-trigonometry" would be a better word – some two thousand years before the Greeks took up this subject and

transformed it into a powerful tool of applied mathematics (pp.8-9).

を二箇所に分けて引用し、... の後の部分を強く批判する（ただし、著者が引用したのは邦訳書であるが、少なくとも引用部分の文意は上の文章とは必ずしも一致していない。邦訳書は手元がないので、念のために英文のものを示しておいた。... は Chase の論考の引用（孫引き！）が入る。引用された邦訳でも削られている）。

著者の批判は、Maor の主張に向けられているわけではない。より一般的なものである。第一に、

古代技術を理解しようとする試みに潜在する問題は、技法という次元で工夫された制御の方法を、近代数学の概念によって翻訳することで、まったく異質な相貌をつくり上げてしまうことである。技術の問題を捉えようとするとき、私たちが注意深く、つねに留意しておかなければならないことは、数の背景に実体が控えているということである。にもかかわらず、対象を一方的に数や図形に抽象して注目し、実体の存在を省みようとしない解釈が横行している

と言う (p.202)。そして、これは「捏造」(p.203) だとまで言うのである。著者は、建築史の立場から指摘しているのだが、数学的手法で「現実世界」に働きかけようとするときも、モデルの数学的整合性ばかりを優先してはいけないということであって、当然、対象について優れた知見や経験が望まれることになる。こう考えると、相当に重い指摘であることが改めて感じられる。

著者の批判の第二は、『「学問は価値が高く、術は価値が低い」とする価値基準』(p.203) に関するもので、もちろん、このような卑屈な精神自体に価値はないはずなのだが、著者は、

この価値観はすでに古代ギリシアにおいてははっきり主張されており、ギリシア思想を手がかりに構築してきた近代の価値観にも大きな影を落としている。本来、別な方向を向いていた二つの世界を一方の側から見て価値の優越を判断し、この観点から古代エジプトなどの初期文明に、できるだけ高い評価を与えようとして、「非数学的な操作」のなかに「数学」を見出してしまふ。しかしこれは、傲慢な態度というべきではないだろうか

と著者は言う (p.203)。なぜなら、

人類が… 長期にわたって少しずつ洗練させてきた技術の体系は、それ自体のなかに価値を見出すべき独立した対象であ[り]、ありのままの技術を採り出すことには大きな困難を伴うが、このなかに自立的な価値を見出そうとすることこそ、現代の設計技術史研究にとって必要不可欠な姿勢である

からであると言うわけである (p.203).

(この項続く)

89. (09.09.08) 溝口氏の書物の残り, 第七章, 結び, 付章, あとがきをざっと論じておこう.

まず, 第七章であるが, 建築は幾何学的造形には違いないので, 過去の建造物を理解しようとするとき, つい, 今の完成度の高い幾何学の発想で, 解釈してしまう. しかも, 今の幾何学は, 古典ギリシア以来の限られた文明環境で成長してきたものである. このような解釈の姿勢には根本的な不備があるということに気づいたのが, 著者の出発点であった. そこで, 著者は, 古代建造物の遺跡よりも古い過去まで遡って, 幾何学の成立について, その前史から吟味を始める. 今日では幾何学の主要な構成要素になっている種々の対象, 円, 直線, 方形などの原型が日常用具から建造物に至るまで(幾何学という夾雑物を意識せずに)使われてきたことが先行するのであり, このような「非数学的操作」を正しく見抜くことが少なくとも古代建造物の設計原理を復原する上で一番大切であるというのが, 著者の得た結論である.

この章の終わりで, 著者は

私たちは, 歴史を転倒して見ていたことに気づきつつある. 先行する「幾何学図形」こそが幾何学という学問を生み出す素地であったはずなのである. 幾何学と建築形態を結び合わせ, 比較しようとする古典主義の作法に学ぶことも重要だが, 「幾何学形態」をも生み出した専制国家の時代の建築や都市の生産の方法, 形態の制御の方法こそが, 素朴ではあってもはるかに普遍的な性格をもっていることにもっと注意を向けるべきである. 古典主義以前に遡る図形と計測技術の長い歴史, 数学や幾何学が発生する以前の歴史は, 古代の都市や建築を生み出してきた技術の時代である. これらの技術の様相は, 技術史研究にとって, じつは最も重要なテーマだと思われる.

と述べている (p.221).

なお, 著者は古代ギリシアの幾何学について

古代ギリシアの幾何学は, 具体的な計測の技術から離れ, 一般的な法則の発見に向かい, この過程で, 具体的な数が扱われることがほとんどなくなっていくように見える. 辺の長さが同一である, あるいは「角」が同一である, など, 計測が終了した時点から証明が始まるのであり, 具体的な計測値が問題になることはない. 精度を問題にしはじめれば, 実際の計測という行為で「同一」などはありえない. 計測の誤差を問題にするのではなく理念として「同一」を認め, ここを考究の出発点とするから, 古代ギリシアの幾何学は, 一見して計測という現実の行為とかけ離れた世界の

出来事のようにみえる。しかしこの学問の成立の背後には、実際に行われた計測という行為の、膨大な経験が横たわっている。

と指摘している (p.215)。これは実に重大な指摘で、実際、辺や角というそれぞれ同じカテゴリーに属するもの二者について同一の長さをもつとか同一の角度をもつという判定をどう行うのか考えると、絶望的になる。古典ギリシア人は漠然と両者を（運んできて）並列して比較すればよいと考えていたのであろうか。もちろん、それでは同一性の確認はできない。今日でも、仮に、理想的な計測器が開発されて無限桁の測定が可能になったとしたところで、それによって、二辺が同一の長さをもつかどうかの判定は原理的にできないことである。そもそもこのような理想的な計測器によっても所与の辺が測定可能であるかどうか、また、測定可能であっても測定値のすべての桁が一致しているかどうかの判断はどうするのかなど、困難はいくらでもある。つまり、古典ギリシアの幾何学は、基本的に、理念（記号）の論理演算で構成されており、しかも、それにもかかわらず、なお、平行線公準のように、空間の形状についての洞察を含むものであった。これは、数学の本性的なもので、古典ギリシアの数学に限らず、今日の現代数学でも基本的には変わらない。ただ、今日では、さすがに、数学の限界というか取り扱い方の習熟が進んだと言えるし、著者の言葉を借りると、「数学」「実用算術」「非数学的操作」の間の距離が測れるようになってきたと言えるだろう。

さて、「結び」で、著者は

古代世界の数を扱う方法は、私たちの常識とは意外に距離がある。普遍的と信じられていた数学こそが特殊であり、その背後に本当の普遍性をもつ世界が横たわっている。設計技術史の研究が本当の普遍性をめざし、また具体的な技法を、この普遍性のうえに立って検討すべきなのは、もはや明らかなことである。

と述べ (p.230)、さらに、末尾で、

古代技術を真に理解するためには、強い意志をもって数学以前の世界に留まりつづけることが必要なのである。

と言う (p.232)。間を飛ばしたが、多分そうなのだろうと思う。付章は、ピラミッドの設計技術を、数学に毒されないように論じたものであるが、注や引用文献から推察すると、著者自身としては未発表の部類に属するのではないか。

90. (09.09.08) 「錯覚ワークショップ」という集会を覗いてきた。

代表者の杉原厚吉教授（例えば、第60回記事参照）の目配りの広さが伺える副題”横断的錯覚科学は成立するか”のもとで組織された研究会であった。プログラムは、明治大学先端数理科学インスティテュートのホームページにある。詳細はそれを見ればよいのだが、興味深い話題が多かった。

特に、梶本裕之準教授（電気通信大学）の「錯覚とバーチャルリアリティ」では、「触覚」を「体性感覚」と「皮膚感覚」に二分した上で、触覚の錯覚を錯触ということを教わった。「皮膚感覚」は皮膚表面に近いところで感じられるもので、英語なら、tactile、体性感覚は腱に掛かる力感の知覚ということであって、muscular となる。つまり、日本語で触覚的とは、すなわち、tactile-muscular ということになるが、学術的には、haptic というのだそうである。触覚の考察はアリストテレスに始まるのだそうだが、一応、出典箇所と文脈を確認しておいた方がよいだろう。

梶本準教授の話題は皮膚感覚に絞られていたが、内容は、視覚の研究を通じて得られた三原色（RGB）と同様のアイデアを、触覚の場合にも、いわば「触原色原理」が成り立つのではないかという想定を検証を試みている研究の話である。研究の動機は、触覚の engineering であって、遠隔地の real な感覚の再現を工学的に目指すものであるが、そのための基礎研究の報告であって、大変興味深かった。

とまれ、こうして触覚によって認識されている外界世界の数学的構造が一步一步明らかにされていくわけであろうが、それと、人間の意識、特に、ある文明社会の空間認識が触覚的であるとか視覚的であるというような判断の可否の可能性の成立までには、多大の距離がある。Ivins のテーゼ、つまり、古典ギリシア世界は触覚的であり、ルネッサンス以降の西欧社会は視覚的であったとすることに数理的な検討を加えられるかどうかとなると、道は極めて遠いのだろう。そもそも、そういうことがなぜ問題になるかということも丁寧に検討しつつ説明をしなければならないことのようなのである。

この意味で、友野典男教授（明治大学）の「認知的錯覚と意思決定 – 行動経済学の視点 –」という講演も示唆に富むものであった。ただ、対象が個体なのか群れなのか、あるいは、群れのサイズの範囲はどうか、というような話題になると、批判や検証に耐えるような定式化がなされていない印象で、まあ、この印象も錯覚かも知れないが、お話としては面白くても、行動原理の提案や、教育や訓練のための参考になるかと言われると、はっきりしない。恐らくは、現実的な文脈での「認知的錯覚と意思決定」の事例を丹念に収集することが先行するのだろうが、その場合、「認知的錯覚」の定義をはっきりさせ、階梯があるというのなら、判定条件や判定法を明確化し、その分類に基づいての収集でないと、他の分野の結果と対照させ解釈するということはできないだろう。人間の社会や行動に密着している話題だけに困難は大きいと思うけれど、だからこそ、明確な定義と判定法が確立していないと議論としては成立しないのではないかと思う。

他にも非常に興味深い講演が、特に、視覚（や味覚）について行なわれ、そのうち、いくつかは、例えば、杉原厚吉教授の講演のように、すでに当ブログで実質的に言及しているものもあったけれど、新井仁之教授（東京大学）の錯視の話と関連して、心理学者の北岡明佳教授（立命館大学）の講演が、お

そらく、さすがというのが正しいのだろうが、面白かった。ただし、ここも個体での錯視が集団的あるいは社会的にどのような心理的効果を持ちうるかということは、検証方法を籠めて、議論が必要だろう。まあ、ナイーブならではの勝手な感想だが。

91. (09.09.14) 前回記事の「錯覚ワークショップ」の梶本准教授の報告中で参考文献に挙げられていた

樋口貴広・森岡周：身体運動学 – 知覚・認知からのメッセージ
三輪書店 2008
ISBN 978-4089590-319-6 C3047

を入手したので目を通して。著者の樋口氏はバックグラウンドが心理学である健康科学者、森岡氏は理学療法の背景がある健康科学者で、リハビリテーションの指導にお詳しいとお見受けした。そういうわけで、本書の基調は、リハビリテーションの現場で働いている人たち（セラピスト）が備えるべき基礎的な素養を提供するということであって、例えば、わたくしのような素人が単なる好奇心を満たすために覗くというのは失礼なことかも知れない。それに、各章に挙げられている文献の数は膨大で、いちいち参照しようとする、これも素人の手には余るのである。

さて、本書は6章から成り、他に、樋口氏、森岡氏が、それぞれ「はじめに」と「おわりに」を寄せている。章立ては、以下の通り：

- 第1章 知覚・認知と身体運動の不可分性（樋口・一部森岡）
- 第2章 知覚の顕在性、潜在性と身体運動（樋口）
- 第3章 知覚運動系という考え方（樋口）
- 第4章 身体と空間の表象（樋口）
- 第5章 運動の認知的制御（森岡）
- 第6章 運動学習（森岡）

() 内は執筆者である。各章は、さらに複数の節に分けられており、各節は、また、小節からなる。

本書標題やその副題、さらに、章の標題から、本書の基本的な鍵語として、「知覚」「認知」を抽出できるだろう。実際、「はじめに」の冒頭に、

知覚・認知と身体運動の間には、真に不可分な関係が存在する。
知覚・認知に関する知識は、身体機能に関する生理学的・解剖学的な知識と等しく、ヒトの身体運動を理解するうえで欠くことができない知識と認識すべきである。

というテーゼが掲げられている。「おわりに」には「身体運動学とリハビリテーション」という副題が付され、著者二人が

共通認識として述べてきたことは、環境における知覚・認知と身体運動の不可分性である

と記し、さらに、「21世紀のセラピスト」の臨床的態度への注意と期待を述べた後、本書が

旧来の運動学の補完的な書であると同時に、それに対するささやかな挑戦である

と締めくくっている。

そこで、何よりもまず、本書における「知覚」と「認知」の定義の確認が先決である。知覚は

感覚器官を通して外界や身体内部に関する刺激を受容し、中枢神経系において刺激に関する情報を処理していく過程、およびそれにより生ずる主観的経験を意味する

と定義されている (p.2)。この定義が検証のための操作可能性という点で問題を孕んでいることは明らかであり、後半は客観的検証が可能な形に修正するか、除いておくべきであろう。実際、著者も内容的には二つの異なる要素、情報処理のプロセス (前半)、主観的 (意識的) 経験 (後半) から成り立つとしている。後半は、まさに同語反復を内包したことになり、当然のことながら、この辺りの議論は実は何とでもなりかねないことになってしまうわけである。幸い、ここは、ほとんどが現象の二次的な解釈の段階で要求されているようで、したがって、本書の主張としての具体的な知見には影響は薄いようである。また、そうでなければ、梶本氏などの工学者が現実に触覚のモデルを構築する際の参考にはならなかったであろう。

著者のために一言加えると、恐らくは読者への配慮のためであろうが、著者は「知覚」と「感覚」とをほぼ同義として扱うと断っている。なぜなら、両者は主観的経験として同一だからという。

つぎに、認知は

環境世界に意味を与えるプロセスである

と定義されている (p.3)。より具体的には、

知覚、注意、記憶、表象、象徴、言語、そして判断といった高次脳機能が統合的に関与 [している]、これらの高次脳機能を動員し、身体を介して「知ること」である

と説いている (p.3)。この「定義」には、「知覚」が用いられており、さらに、「身体を介して」という限定がなされている。したがって、「知覚・認知と身体運動の間には、真に不可分な関係が存在する」と言われても、これだけでは、何か新しい知見が得られているという期待には繋がらない。むしろ、言語感覚の甘さに不安を覚えてしまうのである。

もとより、当ブログの本来の趣旨から言えば、本書のアプローチは非常に重要であり、特に、第4章は標題から、当ブログの構成上、本質的な重要性

を持つことが期待される。ところが、諸般の事情から、まだそこまで目が届いていない。他方、ここまで目を通した部分に関して言えば、しばらく前に読んでいた藤井直敬氏の書物（第 81, 82, 84 回記事参照）で否定的に扱われているものが、若干の議論の根拠として強調されていたり、一方で、藤井氏の書物で道具の使用関連として（サルの）脳部位の発火位置の特定など具体的な知見が得られているものに、ヒトとサルの相違はあるものの、検証可能性に疑義のある解釈が引用されていたり、と、結構、その…、疲れる展開になってしまったのである。さらに、いくつかの厳格な条件が知られている現象における用語が、一種の類比であろうが、拡大適用されているようであったり、当方も曖昧ゆえ見過ごしがちではあるけれども、余り感心できないことがあるような印象が否めない。

「業界」による習慣の違いがあることは重々承知しているし、わたくしは完全に「業界」外の間人である。だが、共通語としての論理性を否定し、さらに、用いている言語が業界内方言かも知れないという自覚と自省を失ったら、われわれは他者を説得できるだろうか。

いずれにせよ、肝腎の第 4 章に目を通してから再説する。

9 2. (09.10.23) 前回の「身体運動学」の続きであるが、第 4 章に入る前に、第 3 章の内容に言及しておこう。第 3 章は、「知覚運動系という考え方」という標題のもとで、「生態心理学」の考え方の紹介に充てられている。この立場では、身体運動は脳の指令によって制御されない、すなわち、身体運動は身体の特性と環境の特性の相互作用によっておのずと一意に決定されるとするので、

初学者の理解を促すために、やや誇張的に表現すれば、身体と環境の「相性」で身体運動が決まるとというのが生態心理学の発想である (p.85)

のだそうである。著者の樋口氏は必ずしも生態心理学の立場に賛同しているわけではないが、一定の評価はしており、それは、知覚と行為（身体運動）の循環論、つまり、知覚と身体行動が真に不可分な関係を構築していることを明らかにしたことでありとしている。経緯はともあれ、動きの中で発生する知覚情報（あるいは、動くことでしか得られない知覚情報）がいくつか観察されており、ここでは、dynamic touch や optic flow といわれるものが例示されている。リハビリテーションにおいても重要な役割を占めているようである。

とまれ、著者は、生態心理学的知見が著者のような認知科学者にも示唆的な知見を与えるとして、三点挙げている：

- 自己組織的な原理が働く運動パターンは認められる
- 運動制御のモデルは環境と身体の循環的相互作用を含めた全

体的システム

☒ 動きの中で創発される知覚情報は身体運動の制御に重要である

ここで、☒は、身体運動が脳によって制御されるわけではないとするときの運動の契機の説明として生態心理学では（当記事では紹介しなかったが）「自己組織化の原理」というものを持ち出してきていることに対応する。

この章の第2節では、視線行動と身体運動に関する種々の研究を紹介し、視線行動と身体運動には強固な時間的・空間的關係が存在していることがわかるとしている。もちろん、この文言だけでは自明に近いので、これは「工学」の可能性の指摘と読むべきだろう。だが、当ブログの出発点である接触感覚的（tactico-muscular）と視覚的（visual）とを緻密に論ずる上では重要な切り口が、この辺りの観察にあるようにも思われる。

さて、第4章であるが、樋口氏は、標題「身体と空間の表象」のもとで、40ページ割いて、以下のようなトピックを論じている（ただし、樋口氏は第2章にページ数をもっとも割いている）：

第1節 身体の表象

身体図式の特徴 — 身体図式とは、身体図式と身体イメージ、身体図式を支える神経活動、身体図式と道具、半側空間無視 — 物を取り込む身体図式、空間の左右を規定する身体図式。

第2節 空間の表象 — 身体との接点

「手の届く空間の表象」 — 手の届く空間だけを無視してしまう半側空間無視、触消失の症例と空間表象、物を取り込む身体図式 — 触消失への影響、棒が届く範囲全体が近位空間として表象されるのか、まとめ — 手の届く空間の表象。

「移動する空間の表象」 — 障害物の回避動作にみる空間の表象、障害物を回避するための予測的な動作修正、遠位空間の視覚情報と障害物回避、遠方の障害物に対する視知覚判断の正確性、狭い空間の表象と身体図式の役割、まとめ — 移動する空間の表象。

ここには重要な鍵語が顔を出す：「表象」「身体図式」「身体イメージ」「手の届く空間」「移動する空間」「近位空間」「遠位空間」。そして、機能障害の症例観察が背後にあるので、「半側空間無視」や「障害物回避」など。

まず、表象とは何か。脳内における感覚情報の統合の場だという（p.110）。感覚情報のうち、身体情報に関する表象、身体表象を、身体図式と呼ぶのがポピュラーだという（p.110）。つまり、身体の状態を知覚するための実に多様な情報を整理し統合するプロセスだというのである。「表象」とは本来厳格に定義されるべき語であろうが、こういう状況では考察の指針以上の意味を持ち得ないかも知れないと思われる。現に、というのもおかしいかも知れないが、表象の初出箇所には、表象が representation という英語に対応するものであることが示唆されている。ただ、わたくしの立場としては、こういう

用語法は困惑極まりないことで、確実に観察されている部分を、何というか、流行に流されやすい解釈的解説から分離して抽出しなければならないことにもなり、これも変な言い方ではあるが、素人の手に余ることもある。

ところで、樋口氏は、身体図式は運動認識の比較基準となる内的モデルとしての姿勢図式を（姿勢制御だけに限定されているわけではないので）プロトタイプとしていると言う (pp.110-111)。また、「身体図式」と「身体イメージ」を区分して

身体図式の活動自体は潜在的であるのに対して、身体イメージは主として意識化された内容を問題とする。この点を誤解しないことが重要である (p.111)

と言う。したがって、樋口氏に従えば、身体図式は、実は、単なる「表象」には留まらないことにもなる。事実、实在システムとしての検証の試みのようであるが、若干の神経機構の話題も紹介されている。なお、身体図式と道具や半側空間無視の話題は、本書とは違う文脈ではあるが、藤井直敬氏の書物「つながる脳」にも紹介されている。関連しての「妄想」として、剣の達人などは剣先や刃先でも「感じられる」のではないかと思ひ、(達人かどうかは別として) 剣道を専門とする体育教員に聞いてみたところ、現に、竹刀の使い方などを含めて、近い感覚はあるようである。イチローも、動体視力の話はよく耳目に触れるが、本当は、さらに、バットによって空間認識ができているのではないだろうか。

この章の興味は、やはり第2節である。脳内機構は、身の回りの空間とそれ以外の空間を別々の存在として「表象」しており、身体部位に近接する空間が「近位空間」、それ以外の空間を「遠位空間」と呼ぶのだという。英文では、前者は peripersonal、後者は extrapersonal と形容されるようだから、この「訳語」は実は適切ではないかも知れない。遠近というと、here と there、あるいは、ココ、ソコ、アソコというような言語による遠近感覚と関わりそうであるが、その辺の事情は用語からは想像できない。ともかく、「近位空間」の研究は、手の届く範囲や顔の周辺の「表象」が中心になり、また、種々の観察例から、「近位空間」と「遠位空間」は独立して「表象」されている可能性が高いのだそうである。この節の前半部の「まとめ 一 手の届く空間の表象」では、三点にまとめて、

第1に、空間の表象は単一構造ではなく、少なくとも身体に近接した空間とそうでない空間とは区別して表象されている。[...] それぞれが脳の異なる領域で表象されている可能性 [が] 示唆 [され] ている。

第2に、空間の表象には身体図式が深く関わっている。[道具が] 身体の一部として身体図式で表象されると、それらの外在物の近接空間までもが、手の届く空間として表象される。

第3に、手に棒を持つことで手の届く範囲が拡大した場合、棒が届く範囲全体が手の届く空間として脳内で表象されるのではなく、空間に作用する場所、すなわち棒の先端付近部に手の届く空間が投影される可能性がある。

と言う (p.132-133) .

この節の後半は、「移動する空間」の「表象」を論じている。眼目は、観測者の移動によって「近位空間」が安定していないことの効果の検証であり、視覚情報の関与の確認である。歩行中の障害物回避の実験データに基づいてのことのようだが、議論そのものは inconclusive に留まっているらしい。

本書の叙述のように、総花的とも見える解説はありがたい反面、著者と興味を必ずしも共有しない素人としては、接近法上の思想が見えないところが物足りない。ファンタジーなのか著者の想いなのか、あるいは、著者のいわばウリなのか、その辺の区別が伝わってこないのである。研究者によって用語の内容が異なるという指摘をしてはいるのだから、著者の用語を明晰に定義した上で、「この研究者はこの語をこの意味で使っているが著者の定義とは違うので著者の用語に書き改めるところなる」という手続きが不可欠であったろう。そして、そういう混乱が重要な鍵語にみられたら、困ってしまうのではないかのである。まあ、こんなことを言うのは、わたくし自身の自省が足りない証でもあろうが。

さて、本書には、後、森岡周氏著の二章が残っている。身体運動と情報処理過程としての脳内部位との対応を論じているようであり、ここも一応目を通してから改めて検討したい。

93. (09.11.22) 『身体運動学』はまだ二章残っているが、先月の月末に掛けて片付けるべきものを優先しているうちに、別の書物を持ち歩くようになり、進んでいない。最近持ち歩いているのは、

ハルトムート・ベーム：デューラー《メレンコリア I》

三元社。2005。(加藤淳夫・訳)

ISBN4-88303-146-2

である。本文は100ページ、それに訳者あとがきが29ページ付いており、あとがき末尾には、1994年4月とあったから、10年後の本書は訳者の教授職退職を機会に装いを改めたものなのであろう。本書には、この画題が属している西欧の神学や哲学の文脈についての解説を含んでおり、デューラーの仕事の意味を知る上で有益な書物であることはわかったが、論述内容の当否はわからない。ルネッサンスだけでなく、西欧中世への詳しい言及があるので、恐らく信頼できる議論がなされているのであろうとは考えている。実際、具体的な点になると、教養や素養を要することでもあり、訳者あとがきは、その補いとして便利ではあるが、読者としてはそれなりの感想を持たなければ

ならないわけなのに、漂流感が漂う印象しかない。きちんと論じたいとは思
うが、今は、用意がない。

この間、東京往復の用務があり、併せて、東京国立博物館の「皇室の名宝
展」(第二期)を覗いて来た。第一期の方も行きたかったが、時間が自由にな
らず、これは図録だけの付き合いとなった。第二期では、聖徳太子像(唐本御
影)が見やすい位置にあり、意外と明るい色彩だったのが印象に残った。こ
れは聖徳太子と周りの二子の比例が白銀比(つまり、2の平方根)からなる
という解説を柳亮氏の『続黄金分割』という書物で見た記憶がある。もとよ
り、比例の検討は写真や複製ではなく現物に当たって行なわなければならない
ので、果たしてどうかは知らない。図録自体は宅急便の手配にしまい、
まだ、到着はしていない。

他には、「蒙古襲来絵詞」があり、これも丹念に描かれているようではあ
ったが、どうなのであろう。見たときに開かれていた箇所は、元の兵たちに無
謀な突撃をする騎馬の武士の惨憺たる有様と、防壁の上に並んで座る武士た
ちとその前を過ぎる騎馬の武士の姿であった。こちらには竹崎季長の名も付
されていた。元の兵士たちであるが、肌の色や顔つきがさまざまで、絵師が
どの程度の意識で描いたかは不明だが、かれらが元の支配地のあちこちから
動員された連中であつた可能性はあるのだろう。実際、蒙古塚は至るところ
にあり、元の兵士の恐らくは多数の溺死体を埋葬したものであつたらうから、
絵師が全くの空想で描き分けたわけではないだろうとは思ふ。ただし、文書
の形の記録に言及があるかどうかは知らない。印象に残ったのは、「春日権現
絵巻」である。大変状態がよく、場面の多様性や物語性も驚くべきものであ
つた。数日後NHKの放送で解説を見る機会があつたが、なるほどという感じ
がした。こういう絵巻はどの程度の光線量のもとで鑑賞されることが想定さ
れているのかは知らないが、非常に微細な模様まで描きこんでいることを考
えると、非常によい条件下での実行が前提になっているのだろうと思ふ。素人
なりの無責任な意見であるが、「蒙古襲来絵詞」の水準の絵師の技術と「春日
権現絵巻」や「伴大納言絵詞」のような絵巻での絵師の技術水準には大きな
差があるのであろう。絵師の詳細な系統図は基本的なものに違いないが、都
の絵師だけでなく地方の絵師まで籠めての師弟関係や技術水準の評価を伴つ
た詳細な系統(樹形)図表のようなものがあるかどうか知らない。免許皆
伝式の師弟などの系譜は、近世のものはあるに違いないし、恐らく、日本絵
画史を学ぶ上では最初に知らなければならないことなのだろうが、放浪の絵
師もいたかも知れない。

この東京往復のときは、上記メレンコリア I の本の他、

宮崎興二：「かたち」の謎解き物語

彰国社、2006

も携行した。宮崎先生の本は何冊か知ってはいるのだが、この本は気楽に(そ
して恐らくは多少の酔いととともに)書かれたようで、話は面白いが、それで

どうしようとなると、全部調べなおさなければならない。副題は「日本文化を○△□で読む」と言い、決して容易な話題ではないのだが、文体の調子からか、○と△（実は、▽）でワルシャワの公衆便所の女性用と男性用の区分記号を思い出してしまうというような不真面目な読書に終始した。書物中で、平山諦先生の「和算の誕生」（例えば、ちくま学芸文庫）の記述を挙げて、和算への切支丹の影響について言及している箇所がある。わたくしのいい加減な感想では、平山先生の見解は間違っているとは決して思わないものの、見当としては不足があると思っている。マテオ・リッチらが明や清に伝えた洋算の水準と違いすぎるからであり、宣教師たちが日本に西洋数学を持ち込んだという証拠を、マカオかゴア、あるいは、ヴァティカンで見つけ出す努力が先行すべきなのではないかと思っている。ここで、宮崎先生の重要な指摘は、(プラトンの) 正多面体への体系的な興味を和算家が持っていないかっらしいということである。宣教師たちは日本に当時の西洋数学を持ち込んだかも知れないが、それらが適切な訳語を欠いたためか日本に定着することはなかったということの意味するのかも知れない。つまり、もともとの基本的なアイデアを欠いているものは伝来しても簡単には定着しないということのようである。いずれにせよ、洋算が宣教師と共に伝来していたかどうかについては、ユークリッドの原本から航海術の基本に至る幾何のアイデアの痕跡を内外の史資料で確認することが先決であろう。

さて、『身体運動学』であるが、森岡周氏担当の第5章第6章は非常に綿密な記述から成っている。今回は奇妙な記事になったので、『身体運動学』は次回にしたい。

94. (09.12.08) さて、「身体運動学」の第5、6章であるが、これらは節立てを詳しく紹介する価値があると思う。

まず、第5章「運動の認知的制御」の節立ては次の通りである：

第1節 情報器官としての身体

身体を通して獲得する情報とその情報処理

身体受容表面とは何か？

一次運動野における運動感覚情報処理

神経可塑性と情報化システム

神経の情報処理と異種感覚統合プロセス

第2節 運動の認知的制御システム

運動の認知的制御

運動行動のための認知処理と並列分散処理機構

行為のための認知機能

感覚系から運動系への座標変換

上肢動作の認知的制御

手の到達・操作に関する運動制御

内的言語化による運動産生システム

手の運動におけるミラーニューロン・システム
道具操作における片手および両手の運動制御システム
歩行の認知的制御
歩行の運動制御システム
歩行制御における神経可塑性

このように、細かく、見出し、小見出しが付されているので、説明を加えるまでもなく、内容はこれらから推察できそうである。実際のところ、一言での的確な紹介は難しいくらい内容は多岐詳細にわたり、しかも、基本的にブロードマンの脳地図（例えば、Wikipedia に記事がある）と運動感覚情報の処理機構との具体的な対応をつける努力が払われている。

第1節では、最初の方で (p.151) ,

身体は運動を出力するための実行・支持器官であるが、同時に外界と脳をつなぐ情報器官でもある。運動の実行あるいは身体の支持に伴い、身体は受容表面としての情報源となる。

と言っている。そして、身体の感覚受容器には運動制御に関して重要性がないとする旧来の神経生理学者の主張を批判して、

[足底の] 感覚情報および [足の] 関節覚情報などの変化（差異）に基づき、それに応じて姿勢制御のための関節運動や筋出力を巧みに操作しているこのプロセスには、身体が受容表面として関与していることがわかる。この際、ヒトは環境と意図的に関係性を結ぶにあたって、自己にとって最も関心のある関係性を選択している。これはあらゆる環境の中から、現在の自己に必要なものを情報化する作業である。これには大脳皮質における注意機能が大きく関与しているが、その注意と身体から受ける感覚入力を結ぶことによって、脳内で意味ある情報に変換しているのである。

と言う (p.151) .

152 ページ以下の神経可塑性に関する記述も興味深い。155 ページ末尾では

差異の認知には注意システムが不可欠である。… 変化しないものは、ヒトのほうでそれに対して能動的に動かない限り知覚されない。認知は一貫して自己の方向付けを観察者として主体者自らで行う。認知プロセスにおける身体と環境との相互作用は「情報」として組織化されるのであって、すべての感覚が情報化されているのではない。ヒトが主体的に自らの内部において表象化した環境から生まれる差異によって情報はつくられ、それが神経可塑性に大きく影響する。

と言っている。ここで「表象化」という語が出てくるが、これが樋口氏と同じように使用されているのかどうかはわからない（第92回記事参照）。

第二節は、脳地図との対応で一層深入りしている。ところが、上の小見出しを見ていると、二三気になるものがある。例えば、「感覚系から運動系への座標変換」とは何を言おうとしているのか。これはどうも引用元の文献の用法らしく、座標系と言いつつ、明確な定義がなされていない。ただ、感覚系は視覚空間の「座標系」であり、運動系は視覚空間内のターゲットに到達するまでの到達運動に対応するものらしい。つまり、視覚情報から到達運動が実現できるような処方箋を作り出すことで、これは大脳皮質の運動前野でなされているというのである。この辺りは、当ブログの基本テキストの Ivins の考察を見直すときに、筋肉接触感覚的空間認識と視覚的空間認識との違いに関連して、(第 92 回記事で言及した第 4 章第 2 節と同様に) 重要なポイントかも知れない。

他方、「ミラーニューロン・システム」という語が出てくる。この語に出会うと藤井直敬氏の書物(第 81, 82, 84 回記事参照)を読んだ後だけに「引いてしまう」のである。ヒトの脳においてもミラーニューロンは発見されているとあるが、引用文献を見ると、論文ではなく、概説のようであり、その刊行年代から察して、今から 10 年以上前であったかも知れない報告に言及しているのではないだろうか。したがって、この 10 年の間の研究成果を承知しているはずの専門家が評価を留保しているアイデアに基づいた議論については、観察された行動報告を別として、その解釈に関わる部分では当否の判断を保留しておくのが素人としては正しい態度であろう。つまり、「引いてしまう」ことの正当化である。

この章は決して読みやすくはないが、それは、著者なりの選択ではあろうが、恐らくは、基本的に二次情報に基づいて執筆されているからであろう。

95. (09.12.23) 「身体運動学」第 6 章は最後の章である。ここの目次を紹介したい。

第 6 章 運動学習

第 1 節 運動学習とは何か？

運動学習の定義

第 2 節 運動学習の諸理論

発達・行動心理学に基づく学習の諸理論

古典的条件づけ理論

オペラント条件づけ理論

認知・表象理論のはじまり

運動学習理論の展開

知覚動作サイクル

誤差検出・修正モデル

閉回路理論

スキーマ理論

生態学的視点

アクティブタッチモデル
第3節 運動学習の神経科学
運動学習の神経科学的基盤
運動学習に関連する脳領域
シナプス可塑性
ニューラルネットワーク
長期増強と長期抑圧
運動学習の神経科学モデル
強化学習モデル
教師あり学習
教師なし学習

以上が、ほぼ45ページで展開される。

第6章第1節は、定義と銘打ってある。まず、「学習」を陳述的記憶に基づくもの（認知学習）と手続き記憶に基づくもの（運動学習）に大別し、しかし、前頭葉野を中心に両者は関連しており、完全に分離されているわけではないと注意する（p.194）。

定義というけれど、しかし、議論の基礎としての運動学習の定義がきちんと与えられているわけではないようである。著者は何人かの著者の関連する提案を併記した後で、

脳の中の経験によって得られた運動行動モデルに対して、現実で起こりえている経験を通して、モデル側を修正するプロセスが運動学習である。したがって、そのプロセスは目に見えない脳内プロセスを示しており、直接的に運動学習を測定することは不可能である。

と言い（p.196）、測定、分析する手法についての言及を経て、認知科学の発展で運動学習のメカニズムが明らかにされつつあると述べて、それらをまとめてであろうが、

対象物の操作特性を、その操作前にあらかじめ脳内で模倣、シミュレーションできる内部モデルを練習や訓練によって脳内に獲得していくプロセスであり、その記憶を経験によってダイナミックに更新していくプロセスこそが、運動学習である

と言っている（p.196）。このような記述姿勢は印象が散漫になってしまい、ナイーブな読者の立場では歓迎できないということは指摘しておきたい。

第2節は、標題の通りであるが、比較的時間の経った話題が多いようで、そういう意味では、著者の実験室での追試をもとに論述がなされていてもよかつたのではないかと思われる。

実際のところ、本書は決して読みやすい本ではなくて、この辺りまで目を通そうとすることには相当の疲労感を覚えてしまった。基本的な理由は、著

者と対話をしているという感がなかなか生じなかったからである。それはこの書物の性格上已むを得ないことであって、感じ方など読者の勝手かもしれない。そもそもがわたくしの無責任な見解ではあるが、書物というものは単に著者の勉強の成果をまとめたノートを整理したのを見せれば済むものではないはずである。著者の考察や検討を「存分に」加えたものを、独断が過ぎてもいいから、見せてくれた方が素人には面白かったろうということである。

ところで、第3節で紹介されている議論は示唆に富むものが多い。実際、文献表を見ると、著者独自の研究を反映しているようである。さらに、脳の各部との関連でのことではないだろうが、適切な数理モデルでのアプローチが可能であるような話題も論じられている（図6-29、図6-30）。

96. (09.12.24) 先日、勤務先の系列の大学の図書館の新作書コーナーで見つけた本である。

長島陽子：中国に夢を紡いだ日々ーさらば「日中友好」ー
論創社 2009
ISBN978-4-8460-0865-9

253 ページあるが、基本的には読みとばせばよい本で、貸出期間は三ヶ月であるが、通勤の車内で読了し、休日を挟んですぐに返却した。

副題の「日中友好」に「」が付されているところが、本書の要点であって、内容は、中国に対して決して否定的ではない。むしろ、中国人に対する尽きることのない興味を述べることに著者の重点がある。

今日的な意味での「中国」がいつごろ成立したのかは、取り立てて中国に関心を持ってこなかったわたくしには見当が付かないが、明か清かその辺りだとすると、辛亥革命はともかく、1949年の共産党の革命は、この意味での伝統的な中国の社会とは違う基盤で遂行されてきたものと思っていた。しかし、「太子党」などのことを伝え聞いて、共産党の革命と言えども、伝統的な革命同様の社会基盤を背景にして成立したのではないかと想像していたが、本書の記事を見ると、やはりそのようであるらしい。これは不思議でも何でもないことで、政治的関心を持つ階層というものが成立する条件に想いを馳せてみれば、「労働者・農民」と言っても、実際は、支配欲、権力欲の自覚があつての話だから、きわめて限定的に理解しなければならないのは当然のことである。

「日中友好」ということについては、日本側関係者と先方の関係者の理解の相違が明白であることも、これも考えてみれば、当然なのだが、日本側の関係者が気づかないか、気づかない振りをしているか、そこが面白い。著者は、いわば勝手に、文革に共感した余り、この辺の構造が否応なしに見えてしまったようである。

もちろん、基礎にあるのは、日本人の一般的な世界観や現実との直面の仕方があり、対応する中国人のものに比べて、現実の世界への対処の様相が違

うことである。どちらがよいかという問いは無意味だが、どちらが効果的か、あるいは、有利かという検討はできるであろう。常識的には、中国的姿勢の方が有利なようであるが、他者の認識という点になると、日本型も中国型も、裏表の感がある、どちらも多様な世界をわたっていく上では難があると思われる。要するに、対等かつ独立な他者というものの存在が基本的な感覚から欠落しているという点で、両者は共通の弱点を持っていると思われる。

中国の場合、深刻と思われるのは、この形の他者認識が国内行政にも反映していることのように、あれだけの人口とあれだけの面積を持ちながら、実質は連邦に近い運営がされているとしても、原則が連邦制ではないことである。国土の広さは、経度で表すと、東経 75 度から 135 度の範囲にあり、東西の経度差は 60 度、すなわち、時差にして 4 時間、に及ぶ。北京時間は、東経 120 度の南中時を基準にしており、東の端とは時差で 1 時間以内だから問題はないにしても、西の端とは 2 ないし 3 時間の本来の時差がある。ウルムチ辺りでは、本来の生活時間と役所の時間がずれているという話を聞いたことがあるが、不自然とは思わないのだろうか。シンガポールが北京時間を採用していて、隣接諸国と時差があるのも、華人の世界観の反映なのであろうか。また、中央政府の統治行為の正統性は、われわれの場合のように、代議制民主主義によって担保されているわけではない。中国共産党の統治の正統性は、憲法でも、直接の文言上はともかく、実質は、まさに、「天命」に拠るとしか理解できないのだから、1949 年の革命も古典的な中華帝国の成立（つまり、易姓革命）と変わらないように見える。ただし、このようなことが明示的に本書に書かれているわけではないが、いわば、こういう不自然な体制維持や統一のための政治的な接着剤として、「反日」が有効利用されていることへの不満と危惧は述べられている。

本書で書かれているのは、例えば、著者から 500 メートル以内にいるような中国人たちの姿である。著者の話題は、1960 年代の初めからつい 10 年近い昔の時期までのおよそ半世紀にわたっており、特に前世紀末から今世紀初頭の 10 年間が詳しい。その後も、中国は著しい経済発展を遂げており、著者の友人たちの境遇もさまざまに変化したと思われる。中国人たちが内部の矛盾を克服して全体として幸福な生活を実現できるかどうか、それは何とも言えないが、かれらが幸福にならないとしたら、周辺のわれわれまで籠めて、一体、どうなるのだろうかと思慮することは相当に恐ろしい。いずれにせよ、他国のことであり、ただ眺めているしかないことではあるが、多少の誘導的注文は付けてもよいだろう。そうだとすれば、このごろは、われわれも余り耳にしなくなってしまったが、まず、中国人に、君たちは生きるということはどういうことだと考えているか、人は何のために生きるのか、という問いを発する辺りから始めるべきかも知れない。

最後に、本書の章立てを紹介しておく：

まえがき

- I はじめての訪中で折り紙つきの親中派に
 - II 文化大革命支持で党除名
 - III 二度目の訪中、文革の見直し
 - IV 改革開放、天安門事件、「日中友好」との訣別
 - V 江沢民反日政策への疑問、「拉致」の打撃
 - VI 幻想の「日中友好」
 - VII 中国点描
- あとがき

97. (09.12.30) 東京行きの飛行機に乗る前に空港の売店で見つけた本である。相当にいかがわしいものではないかと思いつつも購入したのであった：

小倉紀蔵：日中韓はひとつになれない
角川 one テーマ 21 (角川書店 2008)
ISBN978-4-04-710172-2 C0295

実際、表題はもっともであるが、時宜的には、現在の首相が「東アジア共同体」なるものを唱えている。さては、異義の申し立てかと思ったら、本書の出版はほぼ一年前であり、しかも、版を重ねてきたわけでもないようである。むしろ、最近になってようやく注目され始めたので、本屋の店頭に並ぶようになったのかも知れない。そうだとすれば、やはり、首相の提唱への異議が評価されていることになる。

しかし、本書の内容は、そう単純なものではない。著者はもともとドイツ文学を修め、メディア業界に近いところで働いた後、韓国に留学して韓国哲学を研究したという、50歳前後の気鋭の大学教員であるらしい。

例によって、「はじめに」と「終わりに」に最初に目を通した。「はじめに」の冒頭で、

東アジアという実体はまだこの世界に存在しないが、中国・朝鮮半島・ヴェトナム・日本を本書では、狭い意味での東アジアと呼ぶことにする。

日本と、日本以外の東アジアはかなり異質である。日本は、(日本以外の)東アジアを理解できない。

そして日本が東アジアを理解していないということすらよく理解していない。

しかしそれとは別に、近年、日本が急速に東アジア化しているというのも事実なのである。

日本はこのまま東アジア化してゆくのか、それともその反動として、東アジアから離れてゆくのか。

と問い、この問題について「平易に語る」ことが本書の目的であると宣言する (p.2)。

これは難解な文章である。まず、著者は「東アジア」という実体はないとしながらも核としての「東アジア」を地理的に限定してみせる。ところが、この核内の一部である「日本」は「東アジア」とは無縁だと言い、それにもかかわらず、急速に「東アジア」化していると言う。つまり、「東アジア」が多義的に用いられており、このままでは、恣意的に語ることはできても読者の蒙を啓くべく「平易に語る」ことは不可能であろう。冒頭の要約という点を割り引いて、本書の本体で、このままでは多義的な「東アジア」を明晰に定義し直して分析的な議論がなされるのであろうと一応期待して、次に進むことにした。

まず、わかるのは「東アジア」というのは、歴史的な概念らしいということである。歴史的というか、古典的、前近代的、近代的、後近代的とでもいうべきものかということが、用例から想像される。

古典的な「東アジア」は、東シナ海と日本海を結ぶ線の西側、つまり、中・韓・越であり、鍵は、孟子 - 朱子の「性善説」（と科挙）であるという。ここで、社会の構成原理としての性善説と統治原則としての性悪説が解説される。性善説は革命説とセットでないと説明できないとし、孟子の思想を敷衍して

革命を正当化する思想としては「すべての人間の本性は善である」という洞察があったからだ。すべての人間は本来的に善であるから、実質的に王と王でない者の根本的区別はなくなる。誰でも王になれるのである。善性を失ってしまった「間違った王」を除き、新しい道徳的な王が革命を遂行することができる理論的根拠は、ここにある。

と説明する (p.41)。

このような見解はナイーヴな我が身には結構悩ましい。そもそも統治とはどういうことか、とわたくしは問う。結局、統治とは、人を支配すること、個々人の意志に反した行動を強制し、場合によっては生命財産をも要求することである、とわたくしは理解している。

性善説であろうがなかろうが、統治者と被統治者は同じ人間である。そこで、統治者が統治行為を遂行できるとする根拠は何か。それは統治者には、単なる個人である被統治者を越えた権限が付与されているからであり、したがって、問われるべきことは、この権限の根源であろう。そのようにナイーヴなわたくしは思い、それは、つまり、統治の正統性を担保するものは何か、と問いなおして理解できると考えた。そして、わたくしの整理では、太古においては、統治者は神を装い、中古においては、神との距離を認めつつ、その代弁者となり、神の存在が希薄になるに連れ、一旦は、自らを人でありながら神でもあるかのように振る舞いながら、ついには、神なるものは民の意志なるものの代替と解されて、統治者は民の意志を付与される者であり、そのための儀式としての選挙を伴う今日の西欧型の代議制民主主義の形態に連なるものと考えていた。

もとより、統治権限の付与の方式を問題にしているので、統治の目的は善政であるというような問いを発しているわけではない。つまり、この考えは、飽くまでも、統治の正統性をどう担保するかという観点からのものである。

ところが、性善説に基づく統治理論は、このようなナイーブなアイデアには載らない。統治者は本質的に神の代行者であり、誰もがその資格を持っているという風に理解できる。統治者は道徳性によって実は天の代行者を務めるのであるが、しかし、天（＝神）とは何かという議論は不要なのである。

しかも、性善説は実際は科挙の理念的根拠を与え、かくて科挙を通じて身分上昇と強固に合体していたというのである（p.42）。かくて、著者は

重要なのは、性善説が単なる机上の空論ではなく、社会の動態と強く結びついていたという事実である。

と言う（p.42）。以上、要するに、平易な言葉で性善説を説明して

みんな本当はいい人なのに実際は努力しないでダメな人も多い。
ダメな奴は努力（克己）しない奴だ。そのような奴は社会という
梯子から転落するのが当然だ。

とする厳しい思想だと言う（p.42）。

他方、統治には技術的な側面があり、これは上述のわたくしのナイーブな段階の話ではなく、運営上、つまり、行政としての側面に関わるべきものであるが、本書の著者は、これは性善説では仕切ることができず、旬子に遡る法家思想、つまり、性悪説が性善説国家の行政原理であったと述べる。

このように、「古典的な東アジア」を思想的骨格として性善説を備えた地域と規定した上で、その隣接域である日本を含めて「常識的な東アジア」に拡大して、その主要な要素、日本、中国、韓国、北朝鮮、およびそれらの相互関係を概観する。そして、

本当の性善説というのは、[...] 人間の上昇志向と破壊衝動、そして社会的な革命を基礎づける、ダイナマイトのような思想なのである。そして、日本人は、そのことを全く知らないのである（p.55）。

と何度も言う。著者は韓国で学んだ人であるためか、韓国に対する眼差しは温かいが、過剰な性善説社会からの脱却が課題であると考えているようである。日本も本書著作時の政権が「東アジア」化への転回を始め、その間の参議院選挙の結果は、「東アジア」化否定の表明になったと評価しているが、先の総選挙の結果はどう評価するのだろうか。表面的な言葉で「東アジア」を論ずるべきではないことは理解できたが、総選挙の勝者が「東アジア共同体」を提唱していることでもあり、選挙結果が、「価値重視」から「手続き重視」への回帰、つまり、実質的な「東アジア」否定の継続であるとする、ここには奇妙な矛盾が生じていることになる。本書は、上述のように昨年の出版であり、先の総選挙に関する著者の見解は含まれていない。

最後の第六章は『「東アジア共異体」へ』と銘打って、今後の「東アジア」についての著者の思いが述べられる。まず、著者は「東アジア」とは関係性を表す語であって、日常的常識的な語彙で地域的なまとまりを示したものに過ぎないことを注意する。つまり、何らの実体がないものだと言うのである。そして、

中国という存在の中心性を前提とした共同体概念をつくりたいというのなら話は別だが、そうでないなら、新しく立ち上げる東アジアという概念は、近代的な主権概念や境界という思想から自由でなくてはならない。

と言う (p.157)。中国と東アジアということに関しては、

中国の覇権がおそろしいから東アジアから脱出するのではなく、逆に中国の覇権をコントロールしなくてはならないから東アジアという関係性を立ち上げなくてはならないのである。

と強調する (p.159)。

著者は、なぜ「共同体」でなく「共異体」という耳慣れない言葉を使うのか、その点を詳しく説明する。著者は、共同体を志向していないわけではない。しかし、「共」はよいが「同」の醸し出す危険性の指摘である。

すべての成員が「同」を至上の価値としてまとまろうとすると、そこでは「同」でないものへの敵視・蔑視・排除という論理と感情が、強く介在してくるに違いない。そして「同」の価値を掲げる主体が権力を掌握するという構造ができあがった場合、「同」こそが道徳であって、それ以外は不道徳であるという性善説的なメンタリティが醸成され、それによって終わりのない抗争が繰り広げられることになるのは目に見えている。

と著者は言い (p.170)、このような関係性こそ避けなければならないと述べる。そこで、共異体、つまり、

文字のごとく、「共に異なる体」という意味である。互いにすべての点において差異の存在を認め合い、それを性急に「同」にしようとせず、しかし、何らかの形で「同」を成している、つまりばらばらではなくひとつのまとまりが全員に意識されている、そのような関係性として東アジアを立ち上げてゆくのである。重要なのは、「違いを重視する」という点であって、最初から「同」を至上の価値として掲げてしまうと必ず紛争が起きてしまうのである。

と言う (p.171)。ただ、これでも決して簡単ではあるまい。なぜなら、著者は、一方で、

東アジア共同体論者は東アジアのことがよくわかっておらず、またさしたる関心がない者が意外に多い反面、アンチ東アジア共同体論者には東アジアのことをよくわかっており、また多大な関心がある者が多いという事実

があることを指摘している (p.167) からである。

だが、それでも東アジア共異体は早急に作ろうとしなければならない。そして、それを為すべき人間は、新しい人間観 - 多重主体主義 - の持ち主であり、国として中心となるべきなのは韓国以外にはないと言う。この場合の「東アジア」は、日・中・韓・越・北朝鮮であるが、消去法だけの選択ではなく、積極的な理由もある。

追記：関連する記事として、岡田英弘氏 (第 26 回, 第 28 回), 古田博司氏 (第 36 回) の書物の感想を挙げておく。なお, 第 32 回記事も参考までに。

付記：

日本海が「東アジア」の境界であったということは、「東アジア」に文化的政治的意義を被せると意味が明らかになる。つまり、歴代の中華帝国と冊封関係にあった地域、それは、軍事的政治的に歴代の中華帝国の影響下にあった地域であるが、その境界が日本海であったということである。かくて、確かに、日本はこの意味での「東アジア」(つまり、中華冊封圏)に属していたということは、近代に至るまで、白村江の敗戦以降は、実は、一度もなかった(元寇の際が一番近かったわけではあるが)。当然ながら、船載された漢籍の解釈も(実習を欠いた机上のものとして)全くの自己流ということになり、性善説が理解できるはずもなかったわけである。「東アジア」という語の二義性の所以であるが、地理的位置関係と政治的軍事的関係とを混同してはならないわけである。しかも、ややこしいことに、ここに第三者として「西欧」が関与してくると、つい混同が自然なように見えてきてしまう。

さらに、統治の正統性を、統治権限の付与の過程に重きを置くか、統治の様態に重きを置くかによって弁別したり理解したりということになると、抽象的な形で古典漢籍の統治理論理解による基準、それは純粋に日本的な理解に基づいたものに違いないのだが、近代以前の日本には、それしかなかったと言えるだろう。しかし、統治の正統性についての日本の実態は、実は、統治権限の根源を歴史性と伝統性に求めるものであった。それゆえ、権限の付与の過程に重きを置くという発想そのものがそもそもないような中華世界起源の基準で判定すれば、日本流は、常に、いかがわしいものとなるものであったに違いない。ようやく、西欧との遭遇によって(西欧流の手続き重視の統治権限の構成に対する基本的な理解とともに)、従来の日本的統治原理が、実は、確かめられたと考えるべきであろう。しかし、日本流は常にいかがわしいという刷り込みは、西欧原理に近い基準に対しても発動してしまうところがあるようである。

6 2010

98. (10.01.13) 出身校同窓会から送られてきた会報を見て、

加藤陽子：それでも、日本人は「戦争」を選んだ

朝日出版社 2009 ISBN 978-4-255-00485-3

を読む気になり、購入した。この本の評判の高さは承知していたし、書評記事も見かけたことがある。ただ、中・高校の歴史研究会の生徒相手の集中授業がもとであったことを同窓会報を見て知るまで食指が動かなかったのである。特に、日本近代史、しかも、20世紀前半の話になると、生々しい点も多く、政治的思惑が絡んでいることが通例なので、読みにくいのではないかと思っていた。

しかし、本書は、目から鱗が落ちるとでも言うか、日本近代史を扱った書物に感じていた不満を相当に解消させてくれるものであった。著者が、「はじめに」の末尾（008 ページ）で、本書は

中高生のみならず中高年の期待も裏切らないはずで

と宣言されていることには心より同意する。実際、本書の特徴は、歴史哲学というアイデアがあって、それは人間の社会や国家がどのような原理に基づいて生成発展しているかということへの一般的な関心の表明であるけれども、この立場があるからこそ、現在のわれわれもその中で生きている日本近代史の記述を評価や価値判断を先行させずに為すことができたということであろう。著者は一流といわれるのに値する人であると思う — とは言え、わたくし自身は三流であるので、判断の当否は保証しかねる点もあるが。

同窓会報の記事に触発されたと冒頭に述べたが、実際、中・高校生向けの連続授業がもとであったことが本書の性格を規定したところも大きい。著者も感心していたが、わたくしも驚いたところがある。例えば、著者の問い掛けに対して挙げられる回答の試みの中に、実際は、相当部分偶然であったのではあろうが、わたくしなど、漸く最近になってこうではないかと思うようになっていくことを、ずばりと指摘しているものもあった。これからの視点の位置や考察の方向性を思うと、かれらが世に出た後で、こういう回答をしていたことを思い出してほしいものである。

これだけ評判が高く、最近でもネット上で著者の対談記事が見られるような本について、わたくし如きナイーブな人間が論評をすることは憚られることではある。しかし、当ブログの趣旨で言えば、「戦争」は、ある文化・文明の時空認識を、それも極めて明確に、反映するものである。したがって、著者が「戦争」を切り口に日本の近代史を記述しようとするのは、歴史的事実として戦争が大を占めていたということとは、本質的に違う価値があることだと思ふし、むしろ、敗戦後、戦争についての見方に極めて強い制限が掛けられていたことを思うと、ようやく日本人も戦争を相対化することができ

るようになったという証左なのであろう。もちろん、そのためには上で歴史哲学と言ったように、日本に局限されない判断の原理を掲げ、かつ、それを受け入れなければならないわけである。しかも、そのようなことは、今日の全球的、つまり、世界性が前提の時代には当然だと思うのだが、しかし、そんなことはしたくないとする「純粹主義」とでもいう立場 — 一種の選民意識 — も依然あり続けるだろうとは思ふ。

この本では、第4章、第5章が圧巻である。それぞれ、満州事変と日中戦争、太平洋戦争を扱ったものであるが、この難しいところをこれだけ淡々と描ききった歴史観が素晴らしい。第5章では著者は「靖国」の問題の直前で留めている。これが例のA級戦犯の合祀云々だけでは済まない側面があるとは思っているが、この辺は下記の読売新聞のアンケートに代行させたのかもしれない。

400ページ、最後の節は「あの戦争をどう見るか」と銘打たれて、2005年10月27日付の世論調査のグラフが引用されている。「中国との戦争、米国との戦争をどう考えるか」、「日本の政治指導者、軍事指導者の戦争責任問題は十分に議論されたか」という設問に対する回答分布の円グラフである。著者の詳細な論評は示されていない。実際、これは難しい設問である。

特に、第二の設問は、責任の対象が明示されていないから、このままでは答えようがない。極東裁判で、戦勝国に対する敗戦国としての責任は問われたと考えれば、残っているのは、国民の生命財産を毀損したことに対する責任追及であるが、この設問の意図は、そういうところにあるのだろうか。選択肢自体も曖昧で判断が付かないのである。

いずれの設問も、日本の軍事ならびに政治指導者は「愚か」であったか、ということ問うのであれば、結果から見て、しかりと答えることができるように見える。しかし、この設問の回答選択肢の文脈から察すると、かれらが「愚か」だったからこそ、このような設問が成り立つことになったのでもあり、万一、「愚か」でなかったとしたら、それはそれで別な深刻な困難に面していたであろう。

前後するが、第4章には、日本切腹、中国介錯論という副題が付されている。これはまことに腑に落ちるが、胡適の論だったという。詳細は本書を見ていただくしかないが、蒋介石にせよ、胡適にせよ、あるいは、汪兆銘にせよ、中国とはどういうものであるかということについて明確な共通の認識を持っていたことがわかる。相違は、国民党と中国共産党との関わりをどう処理するかということであったようである。

これに対し、日清戦争前から、日本の指導者群には、日本とはどういうものであるかということが明確ではなかったのではないかということが浮かび上がってくる。水野広徳の話が出てくるが、この手の達観が朝野を含めて日本の指導者群にあれば、日清はともかく、日露の戦後処理にせよ、その後の大陸進出の様態にせよ、大分変わっていたであろうと思われる。実際、日本

海の不凍港云々と言っても、千島列島から台湾までの島嶼をすべて抑えていたのだから、国際海峡がいくつかあっても、戦時には十分に対処できたはずであり、朝鮮半島自体直接支配の必要はなかったのではないかと思う（実際、千島列島から台湾、澎湖島までというのは、とても後年の日本人の挙動とは整合しない戦略判断で、かねてより疑問に思っていた。著者に拠ると、アメリカの研究者で感心している人がいるそうだが、してみると、わたくしは密かに明治政府には英国人の外交顧問がいたのではないかと想像していたが、そういうようなことはなかったのだろう）。

もちろん、事態ははなはだ複雑であったろうが、そのような複雑なことに対処するコストと直接支配やらそのための保障のための軍事的コストを比較すると、どちらが合理的であるかはわからない。もとより、感情の満足の問題はあるが、一方の満足は他方の不満であり、それはまたコストを高める。つまり、明確な日本像の設計がなかったから、ひたすら拡散し、多大のゴミを撒き散らしつつ、雲散し、霧消してしまったのであろう。明確な自画像が描けていないという点では、今の日本も大いに怪しいものである。

本書に、まあ、敢えてケチをつけるとすれば、索引がないことである — 歴大な数の人名地名、そして、事件が登場するのに。

99. (10.02.11) 勤務先校の入試業務も一段落し、そろそろ種々の年度末行事、例えば、卒業式などの式辞原稿を用意しなければならないのだが、今は、なぜか通勤電車内では、数年前の論文原稿を眺めている。ほんのわずかだが、それでも進行するのが厭らしい。少なくとも、以前、投げ出さなければならなかった理由が少しだけわかった。この後どうするかは目論見どおり進むかどうかだが、とりあえずは「Fourier の数学」という、これも本来はそろそろ目処を付けなければならない、何年か前に依頼された原稿のどこかに反映させられればいだろうと今は思っている。ただ、資料の確認や、場合によっては、討議のために九大の伊都キャンパスに行く必要がときどき生ずるのだが、その時間の捻出ができない。

ところで、少し余裕ができたせいか、最近何冊か本を購入した。昨夕は、帰路の駅ビル内の本屋で

竹中平蔵：竹中教授の14歳からの経済学 経済を良くする方法を
考える

(東京書籍 2009) ISBN978-4-478-80408-5

という本を見掛けたので、早速購入した。この本は昨年9月初旬出版の1刷、売れているとは言えないのかも知れない。14歳から、とあるけれども、実際は、高校生相手の「竹中塾」なるものの経験が下敷きになっているようである。勤務先校にも14歳の少年たちはいるけれど、エスカレーターで降りると、そのうちの何人かが改札口脇のコンビニで気楽にも漫画本の立ち読みをしていた。

時節柄というのも変だが、竹中教授は諸悪の根源のように扱われているけれども、こういう本が田舎の場末の本屋にも出ている、あるいは、場末の本屋だからこそ出ているというのは、いつぞやの小倉紀蔵準教授の書物同様（97回記事参照）何がしかの潮流変化が起きていることの反映かも知れない。

いずれにせよ、半世紀近い地方生活をしていると、地方の疲弊が、俗に言う「小泉・竹中政策」の帰結などというような根の浅いものでは決してないことがよくわかる。実際、否応なしに理解できるはずのことなのだが、地方の疲弊の本質は、恐らくは過去四半世紀以上前からの種々の政策の不適切性によって、そして、それは当時の政権党だけの責任というのではなく、感情的な印象論で安易な東京中心主義をほびこらせてしまった、政財学官やメディアの責任でもあるのだが、結果として、地方経済からその自律性を奪い取ってしまったということにあるのである。

「小泉・竹中政策」には地方の自律性の回復を図る側面もあるとは見ていたが、即効性や的確な方向性はなく、また、感情的な印象論の持つ慣性は根強かったし、その上、特に、目先の生活が掛かっているだけに、「小泉・竹中政策」への反発は激しかったろう。当然、反動が起きるわけである。もちろん、この本の出版時期では、まだ反動の内容は末期の自民党政権段階のものを除いて未定であった。そういう意味で、本書には、今となっては、「引かれ者の小唄」ともとられかねない面もあり、大人にとっても不思議な興味がある。

目次を掲げよう：

- 1 「経済」に興味を持つ君たちへ「経済」とは何か？
 - 2 驚異的な成長を遂げた日本 日本経済 120年の歩み
 - 3 問題は何か？その解決策は？ What's the problem? What's the solution?
 - 4 経済を良くする方法を考える 競争と機会の平等
 - 5 「売りたい気持」と「買いたい気持」 経済分析の基本的枠組
 - 6 経済の成長に必要なこと 労働・資本・技術について
 - 7 君たちが生きる社会 グローバリゼーションとデジタル化
- あとがき

第1章は動機付けであり、重要な内容を含む。小見出しを挙げると、

夢と希望とサム・マネー 夢を実現するために、前に進む勇気を！
リーダーを目指せ 成績がよいだけでは医者になれない 「徹底的に考えること」 リーダーとしての小泉元総理 パッションと、その裏にある人間らしさ スマートな握手とは？ 「経済」とは「世の中のあり方」 経済は大切だ 経済のない1日はない
「絶対的な正解」はない

となる。この章は、実は、第7章と照応している。第7章の小見出しを挙げると、

世界経済に起きた二つの大問題 グローバリゼーションとは 「デジタル化」とは デジタル化で何が起きるのか 貧困から抜け出せない国が増えている 地球環境問題解決のために 世界的金融危機の発生 デジタル化がもたらす格差問題をどう解決するか

となっている。

第2章は日本経済史概説、第3章は郵政民営化の経済学的背景、第4章から第6章までは、経済学の初歩の解説である。中学生高校生相手にきちんとした説明をするということは並々ならぬ見識と学力を要することであり、本書のように、そのような成功した解説は、当然ながら、大人にとっても得るところは極めて大きい。もとより、異を唱えたい箇所が皆無というわけではないが、論理的な構造は実にしっかりしており、さすがである。

第3章は、経済的合理性という点では、わたくし自身のこの問題の理解とほぼ一致している。しかし、政治的には反動の嵐が吹き荒れたところでもある。経済的合理性がきちんと担保されての反動であればよいであろう — 竹中氏自身が、「絶対的な正解」はない（上記）というのが経済なのだから。

前後したが、第1章は、竹中氏のハーバード大学経験と小泉元総理を念頭に置いたリーダー論である。医師志望のアメリカの学生の話が出てくるが、背後にある医師養成制度や医療制度の日米の差の説明がないと理解が困難な点もある。数年前、シンシナティで世話になった中国系夫婦の双子の娘は、一人は、MIT、もう一人はジョンズ・ホプキンスに進学したが、どちらかは「社会貢献」の追加が条件になっていたという話を聞いた（16回記事参照）。確か、弁護士事務所で規定時間働いたということだったと記憶しているが、母親からは娘に行く行くはどこかのメディカル・スクールに進んで欲しいと思っていると聞いたが、父親の方は、娘の前で、好きな道を歩めと言っていた。母親は、他方、名門のメディカル・スクールにはストレートAの成績でないと受け入れてもらえないのだが、自分の姪はYaleに行って懸命な勉強をしたのにAは数えるほどしかとれなかったと言って、名門大学の学生の水準の高さについての心配をしていた。

アメリカで優秀な少年少女が医師の道を目指すのは、一因としては高報酬な最先端医療への参入を目指すこともあるのだろうが、一方で、医療保険制度の不備もあり、オバマ政権が苦闘しているように、アメリカ固有の問題点もあるわけである。竹中氏は日本の医療制度も経済的な観点からは規制の緩和をすべき点が多いと考えておられるようだが、もちろん、ない袖は振れないという意味で、経済的合理性は無視はできないが、それだけではないはずである。

100. (10.02.27) 実は、少し前だが、

池田晶子：死とは何か さて死んだのは誰なのか
毎日新聞社 2009 ISBN978-4-620-31927-8

を天神の丸善で見つけ、なかなか目を通すための時間を作り出せないままに放置していた。たまたま昨年2月に急逝した友人を偲ぶ会合が金沢で開かれるということが伝えられてきたので、その往復に読めると思い、そのつもりでいた(69回記事参照)。ところが、長く闘病を続けていた母が世を去り、金沢行きは中止、そして、内輪だけでとは言え、母の葬儀に注心していたから、この本をようやく開く気になったのは、帰途の機内であった。

著者の文章に最初に接したのは雑誌『新潮45』の連載であったと思う。後年、「帰ってきたソクラテス」か「さよならソクラテス」として刊行されたものだろうと思うが、鮮明な語り口は印象的であった。ただし、内容は全く記憶にない。

もう1点、記憶に残っているのは、これも『新潮45』だったと思うが、さる死刑囚との往復書簡であった。余りよい読者ではなかったから、毎号確実に読み続けたかどうかは定かではない。後に、単行本化されたいらしい(「死と生きる 獄中哲学対話」)が、それは目にしていない。実は、本書に概要というか経緯を述べた

言葉は、いのちである

という標題の文章があった(pp.213-218)。218ページで、著者は

我々の生死は、じつは、言葉においてのみある。言葉以前に生死はなく、言葉以後に私はない。言葉と存在のこの悩ましい共犯関係は、逆に、我々を、生死の呪縛から解き放つ。

(…)

脈々と続き、繰り返し巡るこれら考える人々の言葉、「誰が」生きているだろうか。「誰が」死んだことがあるだろうか。巡る言葉に宿られる我々の魂が、不滅かどうかを私は知らない。しかし、言葉の力を信じる限り、「人間の身に可能な限りの」、最大の自由を得ているのだと、私もまた、信じている。

と言っている。

前後して脈絡がない紹介だが、本書の最後の章は、

存在の謎は、果てしなく

という標題で、

死とは何か — 現象と論理のはざままで

という著者の絶筆というか、ついに語られなかった講演原稿(口述であったというが)が収められている。

この記事自体は、一部を会議の合間に書いた。空き時間に医学部図書館を散策し、雑誌棚に「死の臨床」(日本死の臨床研究会)53号54号を見つけた。ああ、こういう研究会もあるのかと思ったが、製本されたものは奥の書庫にあるのであろう。会則に拠ると、この会は

死の臨床において患者や家族に対する真の援助の道を全人的立場
より研究していくこと

を目的としているという。雑誌は研究会の講演記録という体裁だが、特に、54号は年次大会のプログラム・予稿集でもあり、研究会活動を概観するには都合がよい。わたくしも母を送ったばかりであり、介護の当事者は妹だったが、この研究会の意義は理解できるし、さらに、何がしかの感慨も覚える。この研究会の活動に今後目配りをしておく価値はあろう。

もとに戻ると、本書の著者は、「死」と「死体」とを明確に区分し、さらに、「他人の死」と「自分の死」（一人称の死）とを識別して、誰もが前者のみしか語り得ないという指摘をしている。「他人の死」も「二人称の死」と「三人称の死」とを分けている。「一人称の死」は自分の死であるが、したがって、生きている限り知りえないものであり、そういう意味では「一人称の死」は存在しないと言う。「二人称の死」は親しい人の死であり、追憶その他の感情と密着して、いつまでもそれらが存在するという意味で死が成り立たないと言う。「三人称の死」は、まあ、「死」と「死体」とがほぼ一致していることになるのだろうが、確かに、これらの複層の「死」を一括して扱うことができるとするのは、無理である。

しかし、わたくしの意見としては、著者が何と言おうと、生物学的な死は絶対であって、著者が強調するような「哲学的な死」の不可解性は、「哲学する」人間が生き残っている限り意味はあるかも知れないが、かれらが絶滅したら何も残らないわけではないだろうか。今は、少子化の時代である。何がしかの公的な地位にあった人は、直系の子孫以外でも記憶はあるかも知れない。もちろん、そういうのは例外ではあるが、非直系の記憶など当てにならないものである。そういう場合、死んでいるのか記憶のうちに生きているのか、一体どちらなのか。

ところが、直系の記憶も当てにならないことは、今般、母の葬儀の折に出てきた関係者の思い出話でよくわかった。わたくし自身が深く関わっているはずのことが全くわたくし自身の記憶になかったり、また、それぞれに記憶していることが重なり合わない部分であったりということが、つくづくと感じられた。とすると、「生きるとはどういうことなのか」という昔ながらの問いが、現に、90年以上曲がりなりにも生きてきた人の「死」を眼前に、改めて問題になる。これは「二人称の死」ではあるが、そう捉えているはずの人たちが、それぞれに違う話を物語るのである。「二人称の死」の場合でも、人格的な総体を確認する手立ては失われてしまっていて、記憶している人たちの想念のうちで「故人」が勝手に成長していくくらいはある。だが、長く会っていない友人でも似たようなもので、再会して思い込みの偏りに愕然とすることがあっても、再会の機会がなければ、それは「二人称の死」と同じことではないだろうか。

ところで、この「死とは何か—現象と論理のはざままで」において、著者は著書「14歳からの哲学」の読者である医師志望の高校生から寄せられた感想文を引用している（238 - 239 ページ）。わたくしは、著者のよい読者とは言えないから、この著書の標題は聞いているが、実際に手に取ったことはない。勤務先の図書館にはあるが、取りあえず、目次だけでも眺めようと帰り道に本屋に立ち寄ってみて、想像以上に大部であることに驚いた。この引用に関して、著者は、絶賛している。すなわち、

生とは何か、死とは何かという、この永遠の謎についての問いを、
医者と患者が共有して、共にこれを問うところにこそ、我々の将来、
未来の可能性が見えてくるはず

であるとして（240 ページ）、このことがこの高校生にはわかっていると感心している。

翻って、わたくしの業務上のサービスの一環を思い起こす。勤務先の医学科志望の生徒たち相手に、受験前の面接指導をする機会がある。今年の方は、もう終わってしまったが、著者の仕事を二三予め読んでおくべきであったとつくづく思っている。面接指導と言っても、服装がどうか立ち居振る舞いがどうかというようなことをやっているわけではない。志望理由や質問の想定内容を志望者と議論して、かれらのマニュアル型の思考を解きほぐすことが主眼なのである。

医師を志望する理由を聞いてみると、大概、人の命を預かり、救う大切な仕事だから、あるいは、身内の病気が医師の献身的な治療で治ったことに感激したから、といった答えが返ってくる。医師家庭の出身者も多く、親が医者でその後姿を見て格好良いと常々思っているの、というの少なくともはない。しかし、実は、この年齢だと長い間病院には行ったことがないというのが普通でもある。要するに、医師の仕事の実態についての意見となると、相当部分が人から聞いたものをそのまま伝えて来るだけで、インパクトが少ない。

そこで、何か本人独自の物の見方が反映した独特の意見が引き出せるように、まあ、お手伝いをしているつもりである。例えば、医者は命を救うというけれど、それでは、ホスピスの医者というのはどういう役を果たすのか、とか、病気を治すのが医者の務めだというのはなら、例えば、わたくしの年齢になるともう病気は完全には治らない、そうすると医者は何をするのか、あるいは、医者とは何か、患者とは何か、と言ったようなことを聞いてみる。もちろん、どういう医者になりたいのか、臨床医か研究医か、とか、ちょっと視点を変えて、医療行政全般を概括するような立場の医師もいた方がいいと思うか、それとも、自分の専門分野に特化した医師だけでも医療はうまく廻ると考えるか、といった類のことを議論している。

生徒が戸惑ってしまうと、どこの大学もいい学生を選び出したいと思って入学試験をするわけだから、受験生が困惑して答えに詰まるようなことを意図的に試問するようなことは絶対にはないはずだ、君たちがのびのびと思うと

おりに答えることが大切だと言って、帰ってもらうのである。今年はまだ結果が出ていないので、事の次第は判然とはしないが、去年は回答に一種のオーラが生じた生徒たちが何人かおり、かれらはしかるべき医学部に進学した。この意味で、著者が引用文の高校生を激賞したことはよくわかる。恐らく、面接試問に、一人当たり、少なくとも1時間を掛けられるのなら、ほぼ正確に適性の判断ができるだろうが、それが10分しか掛けられないとすると、本当に大事な部分にはせいぜい数分しか充てられないことになる。そこで光って見せることは決して簡単なことではないのだが。

さて、著者は考えることが好きであり、常識について考えて、それを文章に著しているので、著者の営為は本来の意味の哲学であり、当然、著者は哲学者と分類されるべき人ではあるが、「哲学者」はアカデミックな含意があるので、自分は「文筆家」と称しているのだそうである。著者は、自分とは何か、生きるとはどういうことか、死とは何か、存在するとはどういうことかと問い、考える。そして、すべては言葉であり、言葉であるが、考えるということは言葉の向うにあるとも言う。共有の言語を超えた概念を論ずるので、考えることは新しい言葉を要求するのであり、それは個々の哲学者の思考の反映であって、難解なのは哲学者の思考を追体験しないからであり、それができれば、実は、易しいのだと言っている。著者の考え方を知るためには、著書を全部読む必要はないだろうが、しかし、特有の文体は、読書としての楽しみを保証してくれることも事実である。

さて、副題の「死んだのは誰なのか」とは、著者の墓碑銘だというのが、墓参の気があるわけではなし、まあ、どうでもよい。考えてみれば、一般に、著者と読者の関係は、著者が読者とは異なる時代に暮らした人であっても、読者にとっては上述「二人称の死」のような意味で生きている、あるいは、復活したことになる。さらに、この著者のように、個人生活の一部を開陳しているようでも、それが本当の著者の姿に対応しているかどうか、それもどうでもよいことである。本書には、著者の自筆原稿の写しや愛犬と収まったポートレートなどが載せられてはいるが、それが何なのかも実はわからないし、また、読者にとってもどうでもよいことなのではないか。

101. (10.03.26) 先日、私用で首都圏と往復したときに、

佐藤光：マイケル・ポランニー「暗黙知」と自由の哲学
講談社 2010
ISBN 978-4-06-258457-9

を横浜駅の有隣堂書店で購入した。そのときは、もう一冊

齋藤孝：国語力は数学力
集英社, 2010
ISBN 978-4-08-781422-4

も購入し、こちらは帰りの機内でほぼ目を通した。この本は、(中学・)高校生には役立つ内容と思い、週明けに、勤務先の図書室に寄贈しておいた。本書で紹介されている「数学力」は、ものごとの engineering の際に有効かつ強力に発揮されるものである。つまり、本書は高校中級程度までの数学の骨格を借用しての「思考の合理的運用力」を述べている。一般的には常識であるべきことなのだろうが、「数学者」の研究現場となると、要領ははるかに悪いのが普通だろう — 少なくともわたくしのような三流の場合には。

さて、ポランニーの方だが、この本はずっと持ち歩いているのにちっとも進まない。ようやく、第一章を終えたところだが、まずは、一応、目次を掲げよう：

序章 現代世界とマイケル・ポランニー

1. はじめに — 相対主義を超えて
2. 生涯
3. ポランニーはどのように読まれてきたか
4. 本書のプラン

第一章 自由の哲学

1. ポランニーのリベラリズム
2. 二つの「二つの自由概念」 — ポランニーとバーリン
3. 自生的秩序 — 市場システム、法システム、科学システム
4. 「多中心性問題」
5. 市場システムと自由
6. 「道徳的反転」

第二章 経済学

1. 貨幣サークルと雇用量の決定
2. 「中立性の原則」
3. ソ連、ナチス、戦時経済体制をどう見るか
4. ポランニーの「ハーヴェイ・ロードの前提」
5. 完全雇用が可能とする自由貿易

第三章 知識論

1. 「個人的知識」の目的と構成
2. 批判的哲学の批判
3. 「分節化されたもの」と「分節化されないもの」のダイナミクス

クス

4. 知的情熱と共同性
5. 信仰と懐疑
6. 「生きて在るもの」を「知る」ということ

第四章 「宗教の受容」への道 — 科学、芸術、そして宗教

1. さまざまな意味 — 「指示」・「象徴」・「隠喩」
2. 芸術の力

3. 「観察すること」と「受容すること」
 4. 福田恒存「人間・この劇的なもの」への寄り道
 5. 宗教的欲望の本質 — ポランニー，福田，エリアーデを結ぶもの
- 終章 暗黙のリベラリズムの可能性
1. リベラルなケインズ主義者の社会経済学
 2. 個人的で人格的で暗黙の知識の役割
 3. 「道徳的反転」，「宗教的反転」，そして宗教の回復
- 補論 「自由」をめぐるカールとマイケル・ポランニー

さらに、詳細な註と文献が付されており、最後に、「あとがき」がある（が、索引はない。まあ、一般に、電子化の暁には「鍵語の表の添付」が索引代わりになるのだろう）。

本書が難しいのは、もとより、マイケル・ポランニーという人が「万能人」と呼ばれるのに相応しい人であり、したがって、その思想の全貌の解釈や紹介という作業そのものが困難を極めているからである（と「あとがき」にもあった）。もちろん、現代思想とか哲学に関心の深い人は、マイケル・ポランニーについては百も承知だろうが、わたくしは、せいぜい「暗黙知」という言葉を耳にしたことがあるくらいで、それがマイケル・ポランニーに発するものであるとは知らなかった。そういうわたくしのような無知の人間から見ると、序章の内容は到底わかりやすいとは言えない。仕方のないことであろうが、序章自体が、全体を読み終えてから、改めて読み直すべく構成されているので、本書の全体の要約にはなっていないのである。節の標題から察しが付くように、マイケル・ポランニーの知的放浪というか拡大の様子はわかる。だが、著者は、序章では思想の中身の紹介には、まだ、立入らない。「暗黙知」についても、序章では言葉を滑らせるだけである。「あとがき」では、マイケル・ポランニーの思索の射程は「暗黙知」をはるかに超えており、

特に、ポランニー哲学の核心部を語るには、その一風独特の宗教論を欠かすことはできない。暗黙知は、強く深い宗教性を帯びた自由の哲学のための背景にすぎない、あるいは、暗黙知の理論は、宗教的な自由の哲学のなかに位置づけられて初めてその本来の意義を獲得する、とさえ言ってもよいと思う。

と著者は言う（pp. 279 - 280）。こういうマイケル・ポランニーの全体像に少しでも肉薄したいというのが本書執筆の動機であったようである。

取りあえず、第一章だけでも論じておきたい。なお、齊藤孝氏の上掲書で勧められている Venn 図や各種の図や表を多用しての説明を経済学者である佐藤氏は当然のように試みている。

その第一章であるが、上掲の目次で明らかなように、解説あるいはむしろ「批評」というべきであって、著者の佐藤氏の教養の反映である。読書を「批

評」という形にまとめるという営為が、名曲の鑑賞ではなく、演奏に似ているということだろう。当然ながら名人の演奏を味わうためにもそれなりの素養は必要なのである。そこで、お前（つまり、わたくしのことだが）は、マイケル・ポランニーの曲を佐藤氏の演奏を通じて味わうだけの素養があるのかと問われたら、答えに窮しかねない。何しろマイケル・ポランニーの文章を一つも読んだことがないのである。まあ、今回は、取りあえずの出会いであろう。

佐藤氏は、マイケル・ポランニーのリベラリズムについて最初に論ずる。解説に拠ると、西欧リベラリズムには、大別して、ミルトンやロックに端を発する英米系とヴォルテールやアンシクロペディストらによる大陸系とがあり、特徴としては、(わたくしの理解したところで一言に整理してしまえば) 英米系は歴史主義、大陸系は原理主義ということになる。そして、英米系には非一貫性が不可避であり、他方、大陸系は非一貫性は希薄であるが、ナチズムやコミュニズム、スターリニズムを内包しているものでもあった。マイケル・ポランニーのリベラリズムは、そもそもがナチズムやスターリニズム批判の上に立脚しているので、英米系に近いものではあるが、それだけでは律しきれない（と、佐藤氏は言っているように思う）。例えば、

リベラリズムの内部矛盾を回避するためのもっとも重要な思想的支柱をバークの伝統主義あるいは保守主義のなかに見出していることである (p.40)。

と言い、著者がわざわざ注を付して強調もしている。わたくしにとっては、ロックと違い、バークと言われても符牒に過ぎず、本書文献表にバークはなかったから、完結した文言ではない。佐藤氏は、ポランニーの『自由の論理』の序文から

… 私的個人主義は公的自由の重要な支柱ではない。自由社会とは開かれた社会 (Open Society) などではなく、一群の明確な信念 (a distinctive set of beliefs) への完全な献身を旨とした社会なのである

を引用している (p.41)。ここで、重要な鍵語は a distinctive set of beliefs であることは間違いがないが、詳細な解説を要するところである。しかも、著者は、

ポランニーのリベラリズムの特徴は、過去や現状への固執を旨とすると思われがちなバークの伝統主義や保守主義への肯定的な言及にもかかわらず、科学的創造に典型的に見られるような改革や革新を最大限に尊重するリベラリズムでもあるという点である

と注意を喚起している (p.41)。

次の節で、著者は、ポランニーの「公的自由」と「私的自由」という「自由社会」の特徴づけの二分法に触れ、「積極的自由」と「消極的自由」というバーリンの二分法との関係を論じている。またまた新しい符牒の世界だが、多少とも読み返さないと、この辺の議論は続けられない。

(以下、別項)

102. (10.03.26) 佐藤氏のポランニー解説の第一章(第101回記事参照)の続きであるが、ポランニーの自由社会の定義を要約して、佐藤氏は

…ポランニーが強調しているのは、自由社会の礎石は、通常のリベラリストを含む多くの人々が考えがちのように、私的あるいは個人的自由などにあるのではなく公的自由にある、私的自由ということなら全体主義社会もまた十分に充足させうるのだということだ

と言う(p.42-43)。もちろん、「公的自由」「私的自由」という本質的な鍵語の分析が課題になる。本書中から、つまり、佐藤氏の整理した文言を探すと、

その主観的な意図はともかく、客観的な意味で社会的機能を果たしうる行動や思想の自由—これが公的自由の差し当たりの意味である(p.44)。

さらに、

逆に、それが私的欲望の満足を目指すものであれ、諸個人の行為が社会的機能への通路を絶たれているとき、それは私的自由ではない(p.44)。

と言う。後者は全体主義社会でも成立しうるというわけである。佐藤氏によるポランニーの主張の要点は、

しかるに、世の多くのリベラリストは、本末転倒にも、自由社会あるいは反全体主義社会を構想するにあたって、私的自由を基本あるいは究極目標として、その上に公的自由を積み上げようとしている。こうした思想は、実は、全体主義者、ファシスト、共産主義者にとって少しも脅威ではないのであり、多くのリベラリストは自分で自分の墓穴を掘っていることになる

となっている(p.45)。

引き続き、バーリンの「積極的自由」と「消極的自由」への言及があり、「公的自由」を含めた Venn 図(図1-1, p.48)が示されている。問題は「公的自由」の内容であるが、「自生的秩序」という鍵語が新たに現われ、ポランニー自身の定義を要約して、

だれの手も借りず、社会の成員自身の自己調整・相互調節・相互調整に基づいて自生的に、「自然に」形成される秩序が「自生的秩序」であり、それに対して、それが、独裁者であれ、官僚機構であれ、なんらかの特権的存在の指令や命令に基づいて形成される秩序を、ポランニーは「組織的秩序」と呼んだ。

とある (p.50)。そして、「自生的秩序」の典型として、市場秩序、法秩序、科学秩序が挙げられ、相互調整の類型として、諮問、競争、説得を示して、表 1-1 (p.55) にまとめてある。

論理上の必然であろうが、「自生的秩序」成立のモデルの考察として、「多中心性問題」が次に紹介されている。ポランニーのモデルは機械的なものであるが、著者は、経済学的な解釈を（数式群を形式的な装飾として）与えて見せている。「多中心性問題」には

完全に形式化されるもの (completely formalized),
全く形式化されないもの (completely unformalized),
理論的に形式化されるもの (theoretically formalized)

の三種があることが特に興味深いと著者は言う (p.62)。暗黙知の理論、つまり、

われわれは語るよりも多くのことを知ることができる (p.64)

というアイデアが、ここにあると言うのである。しかし、「自生的秩序」「多中心性問題」と考えてきても、ポランニーが十分な議論を展開し得たかについては、著者は疑問符を付けている (p.69)。

第一章最後の節で紹介されている「道徳的反転」の議論には凄みとしか言えないものがある。著者の深い思想性が垣間見られ、他方、わたくしとしても、腑に落ちるといふか、同意納得できる点が多かった。うまく片言隻句でも引用できるとよいのだが、実際問題として、孫引きに類する紹介をこれ以上重ねても仕方がないようにも見えて、立入らない。ポランニーの著書を読み込んで、わたくしはこう考えると言うべきなのだが、まあ、それはできない相談なので、相当の誤解を覚悟しつつ、解説書を読みながら、共鳴点を探っているわけである。

103. (10.04.20) 佐藤氏のポランニーの第2章「経済学」についてコメントを書くべきだが、たまたま

日本テスト学会編：「見直そう、テストを支える基本の技術と教育」

金子書房、2010

ISBN 978-4-7608-3412-9

が送られてきた（わたくしは当該の学会の会員でもある）。実は、本日は、平成22年度全国学力・学習状況調査の当日であり、現在の勤務先校は調査対象として抽出されている。本書の第6章でも、この「全国学力・学習状況調査」への言及がありそこで指摘されていることは、当ブログの関心の対象である「日本人」のものの見方見え方に直結しているので、寄り道を試みようというわけである。

学校教育に限らないこととは言え、特に、学校教育では、授業とテストとは深い関わりがある。また、各種の資格試験や入学者選抜のための試験など、日本の社会は試験と切っても切れない縁がある。それなのに、「試験」というものについてきちんと論じている場が少ないというのが、かねてからの印象であった。入学試験なども出題や採点を試みるまでもなく誰にもわかるはずのことだが、それによって得られるのは受験者の順位表であって、その順位付けには多大の期待は込められているものの、実際のところ、その期待の当否は、受験者各個人に対するものではなくて、せいぜい合格者の集団に対しての統計的な意味が主のはずである。そんなようなことを思っていた頃、たまたま、米国の教員養成大学で使われていた、テスト関連のことを網羅的に扱っている教科書を目にした。教師になったとき座右に置いておくべき書物であると強調してあったと思う。それでは、日本ではどうなっているのかと気になった。ところが、教育養成系の大学勤務の友人に問い合わせたところ、テストに関する体系的な研究や教育を行っている場さえもが教員養成系の大学にはないという話に文字通り愕然とした。何と、日本の学校教育の現場では、勤と経験だけでテストが編成されていて、したがって、感覚的な意見以上のものが存在し得ない環境であることがわかってしまったわけである。

日本テスト学会の存在を知ったのは、少し後であったが、当初の趣意書から察するに語学教育の関係者が中心になって創立されたようである。当然、国際的な広がりがあり、知識・技能に関する話題も、日本限定の視点のものではないことは明らかであった。日本テスト学会は、その後、「テスト」を製品検査なども含み得るように、広義に定義し直してしまったようだが、主眼はやはり学校教育にあると思われる。わたくしは現勤務先校に赴任してから、思い切って、日本テスト学会に入会したが、忙しすぎて、年会などにはとても参加することはできない。しかし、本書のような基礎的な入門的文献が向こうからやってきたのだから、入会は正解であった。

さて、前置きばかりになってしまったが、本書本体の目次を示そう：

- 第1章 見直そう、テストを支える基本の技術
- 第2章 テスト作成と採点の工夫
- 第3章 学力の経年変化をとらえる方法
- 第4章 出題領域を広げる工夫
- 第5章 テストの役割分担の仕方
- 第6章 日本の学力調査と欧米のアセスメント

第7章 未来の学力テストのあり方

各章は、まず、数節を費やして、原則的な説明を行い、やや立ち入った内容を問答形式で補充している。話題は多岐にわたり、また、最新の海外事例の紹介も含まれ、当然のようにさまざまな符丁が用いられるのだが、索引があるのはありがたい（用語集があったらもっとありがたかったであろう）。

第1章は総論であるが、日本の社会では、相当に専門性の高い人たちに限定しても、常識とされてはいないのではないか。本来、政治家、行政家、文筆家には、当然の務めとして、心得ておいてほしいことであり、かれらが「無知な一般民衆」に迎合せずに、説明し説得しなければならないような事柄が含まれている。テストは、悉皆調査であっても、統計処理を前提とした技術的な根拠が検証されるべきものではあるが、そのことをいかに説明し説得するかとなると、それには、説明する当事者が心から納得できていなければならないことである。日本の一般社会においてテストをしっかりと理解することに微妙な難しさがある所以ではあるが、このままでいいわけではあるまい。

第2章以下は、いわば、各論であるが、今更ながら、学ぶことが実に多かった。例えば、国際学力比較で話題になる PISA がどのように設計されているか。背後にある検定理論によるテストの簡便化の解説など。なお、本で行われている「全国学力・学習状況調査」についての言及が第6章にあったと述べたが、アメリカの学力テスト NAEP と比べたとき、アセスメントなのかアチーブメントなのか曖昧で、目的をより明確化する必要があると指摘されている（61 ページ）。こうなった理由は種々想像されるが、先に注意したように、テスト理論そのものが日本のエリート層で常識化されていないということの反映かもしれない。

総ページ数 80 ページ余り、価格も 1100 円（＋税）という書物である。テストとは何かと考えるためには手頃であり、広く読まれるべきではないだろうか。

104. (10.05.03) 佐藤光氏の著書の第二章はマイケル・ポランニーの経済学についての解説に充てられる（101 回、102 回記事参照）。まず、佐藤氏は、マイケルが物理化学の研究をしながら、すでに、経済学の論文を書き、さらに、著書『完全雇用と自由貿易』（1945 年）もあることに注意している。当然、経済学者としてのマイケル・ポランニーについて論じなければならないが、従来十分ではなかったとし、「研究の礼儀作法」からいっても「検討の作業」を行わなければならないというのが佐藤氏の立場である（p.80）。

さらに、[氏の見解では]（…）ポランニー経済学には、今日の経済学の水準や経済状況の点からも無視し得ない重要な論点が含まれている（p.81）

ということなので、『完全雇用と自由貿易』をもとに、

ポランニー経済学が今日の経済学や経済の現実に対して持つ積極的な意義を探る (p.81)

というのが第二章の内容になる。ケインズの一般理論のポランニー流の咀嚼と解釈ということであるらしいが、そのさらに佐藤氏による解説というわけである。ケインズの議論は愚か、経済学のイロハも知らない身としては、そうなのかと思えないが、多少追いかけてみよう。

経済学的には常識なのであろうが、いくつかの簡易化のもとであるが、家計が保有する貨幣量が利用され財貨となり、かく循環するので、家計の保有する貨幣量と（一年間の）循環回数の積が年間の流通する財貨の総額、つまり、国民総生産であり、これは国民所得でもあると整理されており、さらに、この関係を分析するために、雇用量の合計が雇用係数、すなわち、一年間の生産を行なうための労働者数、と国民所得との積であることから、雇用量が、実は、雇用係数と家計の保有すると循環回数の積に他ならないということを示している。

つぎに国民所得の決定についての考察が紹介され、それが民間の投資需要によるものであることが示される。このために、鍵語として、既出の、国民所得、雇用量、雇用係数に加えて、消費需要、投資需要、消費性向、貯蓄性向、労働供給量、労働人口、完全雇用、国民生産が導入され、「性向」とは消費需要と国民所得の比であり、他方、「投資性向」という鍵語はないけれども、定義をするなら、(国民所得のうち投資に回らなかったものが貯蓄されるとして) 投資需要と国民所得の比になるであろう。そして、完全雇用は、労働供給量と国民所得の比が雇用係数と一致したときに実現されるということになる。投資需要と労働供給量は外生的であるとするが、これが、素人の浅ましきゆえに、よくわからない。さらに、完全雇用を実現するためのケインズ政策の具体的な選択の話題に至り、さらに、課税額、公共支出額、財政赤字額と鍵語が増える。

鍵語として現われるパラメータのうち、どれが engineering の対象となるのかがはっきりと見えないのである。政策的なものだと言い切ってしまうとそれまでなのだろうか。佐藤氏はこれらの関係を数式の形に整理されているが、ポランニーの原典では実際のデータに基づいての論述でなされているという。

等式として数式化された関係式が、かくて、本章にはさまざまに現われるのだが、いずれも静的な状態、つまり、平衡状態での話であり、パラメータ自体が動的な過程を記述できるように設定されてはいないように見える。以下、この章の解説をそう思って眺めると、数式化を図るよりも、原著者のように、文章と実際のデータによる叙述の方が適切なようにも思われる。つまり、ここで示されている数式は、いわば、高校化学での化学反応式に相当するものであって、物理化学であれば、反応の過程を論ずるための反応拡散系といわれる偏微分方程式系による記述に相当するものではないようである。そも

そもマクロ経済学にそういうアプローチがあるのかどうか不承知ではあるが、反応の過程を正確に把握できてこそその engineering なのだから、ポランニーがケインズ政策について限定的な立場をとったということは、物理化学の素養があった以上、十二分に理解できることであると思う。

105. (10.06.01) 佐藤氏のポランニーの解説書は持ち歩いているのだが、いろいろと気が散り、さっぱり進まない。

実際、先月は、久しぶりに数学を再開し、本当はそんなに時間がとれるわけでもなかったが、ささやかな一文をまとめてホームページには貼り付けた(論文化するには、どこかで討議が必要だが、時間が全くない)。とまれ、支離滅裂に見えるだろうが、本来の意図というか、拡張の方向を確かめるために、

D. コックス他：グレブナ基底と代数多様体入門 イdeal・多様体・アルゴリズム
シュプリンガー・ジャパン 2000

も持ち歩いてはいる。これは数学専門書だから立ち入らない。

もうこれも一月前になるが、東京に用足しに出たついでに、丸の内の丸善で

James D. Watson : Avoid boring people
Vintage Books, 2010
ISBN:978-0-375-72714-6

を見つけ、購入した。この本も背囊中に入っている。著者 James Watson は、いろいろと物議を醸す物言いの人であり、この本の中にも問題発言はないわけではない。全部に目を通したわけではないというか、最初の2章しか見ておらず、後眺めたのは、ページをめくったときに目に入った箇所だけである。

最初の2章は、少年時代からシカゴ大学を卒えるまでの話だが、大恐慌から太平洋戦争の終結までと言ってもよい。大学院に進む直前までの話である。

経済的困難にもかかわらず、James に注がれた両親の厚い想いが目映いくらいである。家族の信仰の話も出てくる。アメリカ中西部の入り組んだ移民社会が実感できない身には、そんなものなのだな、としか言えないが。そして、父親から仕込まれた鳥類観察という趣味。

序文 (Preface) に

Skipping high school's last years led to my never learning how to type, and even today I generate left-hand-written versions of the first drafts of all my writings.(p.xi)

とあるけれど、この経緯は第2章に出てくる。アメリカの大学の独自プログラムの凄さもあり、学長の見識や権限、そして当然責任の重さも伝わってくる話である。実際、前書き (Foreword) 冒頭に Robert Maynard Hutchins と

いう名前が現れる。この人が実は James の父親の Oberlin College 時代の知己で、30 歳でシカゴ大学の学長になり、いろいろな改革を行い、そのうちのプログラムの中に、高校卒業なしで奨学金つきでシカゴ大学に受け入れるというものがあつた。James が、それに応募して、家族ぐるみで準備をして、合格したという話が第 2 章にある。シカゴ大学の凄みを示す話は、まだまだある。

各章の最後に、章のまとめというか短めの文章がいくつか並び、辛辣なような、親切なような、決して単純ではないものばかりである。例えば、穏健な方の例として、第 1 章末尾から、

4. Accept only advice that comes from experience as opposed to revelation

Listening to my elders just because they were older was not the way I grew up. Preadolescent exposure to my relatives' views that the New Deal would bankrupt the United States and that Hitler would halt being an aggressor after conquering England left me with no illusions that adults are less likely than children to utter nonsense. For the most part, my parents tried to provide rational explanations for why I should think a certain way or do a certain thing (...). By then I was conditioned to accept my father's disdain for any explanations that went beyond the laws of reason and science. (...) It is no coincidence that so many religious beliefs date back to times when no science could possibly have accounted satisfactorily for many of the natural phenomena inspiring scriptures and myths. (p.18)

ここで、(...) として略したところには重要な例示があるのだが、著者の言いたいことは通じるだろう。この両親にして、この子、つまり、著者、ありきという感は強い。翻って、自らの親としての立場を振り返ると、忸怩たることになる。

標題の Avoid boring people と銘打ったまとめも何箇所かある。著者が価値の薄い単なる儀礼的な交際を心底嫌っていることがよくわかる。日本の社会では、場合によっては、実質的に boredom を味わうことが仕事のような人たちも多いが、この著者には日本での生活は不可能かもしれない。

とまれ、そんなわけで、佐藤光氏を通じてのポランニーの勉強は進まない。やはり、歯ごたえがあり、難しいのである。

しかも、こないだは天神の丸善の閉店セールに立ち寄ったついでに、

清水真木：これが「教養」だ（新潮新書）

新潮社, 2010.

ISBN978-4-10-610361-2 c0210

を見つけた。これは基本的に読み流したが、しかし、最終ページに、科学研究費補助金・基盤研究（C）による研究成果の一部であるという文言を見つけ、確定申告の時に経費の計算で困るのではないかとちらっと思った。

冒頭から、慇懃な（無礼とまでは言わないが、嫌みな、やや上っすべりの）文体なので、何者かと思って、著者経歴を眺めたところ、40代前半であり、この文体の種明かしが「あとがき」にあった。内容から察して、ドイツ思想史がご専門かしら。

おそらく、この本の主張は、

第4章 教養を生まれたままの姿で掘り起こそう

が要約になっているのだろうと思う。特に、211ページ以降に著者の「想い」が集中しているようである。恥ずかしい話だが、ピースミールという言葉でここで覚えた。216ページで、清水氏は

しかし、ピースミールに問題を解決する決疑論的な能力としての教養、つまり、本来の意味での教養の方は、現代の社会で生き残るでございましょう。

と言っているのである。決疑論というのも変な言葉だが、カタカナと違って、成分はわかる。ピースミールが難しいのは、ミールであって、辞書には載っていない。案の定、古い言葉の名残のようで、もともとは、食事する時刻を意味するらしい。カール・ポパーの用語として有名になったそうである。文系世界のお約束というわけであるらしい（だからどうなの？）。

ところで、肝心の「教養」の本義であるが、清水氏は

公共圏と私生活圏を統合する生活の能力

つまり、

一人の人間が帰属している複数の社会集団、組織のあいだを調整する能力

と言い、さらに、噛み砕いて、

生活の交通整理をするための「自分らしさ」のことである

と言う。現象としては、

教養というものは、市民社会とともに発生した居心地の悪さ、市民社会のマイナスとでも言ったらよろしいのでしょうか、そういうものを打ち消すために必要とされたものであった

と述べる。市民社会が崩壊したということだが、居心地の悪さはしっかりと残っている。そこで、決疑論的な問題解決の能力—教養—が今まで以上に重要になると清水氏は主張するのである。

支離滅裂な記事になったが、一ヶ月に一回はブログを更新したいということではある。

106. (10.07.03) 現在の職務のことは深くは書かないようにしているのだが、記事の更新ができないアリバイに、原則から、若干外れてみた。

昔のことであるが、勤務先の大学のFDなるもので、テーマ別の小グループに分かれたときに、教育学部の教授と隣り合わせた。あてがわれたテーマやどんな議論をしたのかは全く記憶にないが、この教育学部の教授と雑談を交わした時、「学校経営」がご専門とのことだったので、私立学校の財務状況などをお調べになっているのですか、とお尋ねしたところ、お返事が理解不能であったことだけが強く印象に残った。「経営」という語を、われわれが通常連想する語義範囲とは違う使い方をしているな、ということはわかったが、その的確な意味は想像もできなかった。

現職に就いて、初等中等教育の世界では、「経営」という言葉を、業界の符牒として、通常の世界で言うなら、ほぼ「円滑な運営」という程度の意味で使用しているらしいとの見当は付いたが、このような業界固有の特殊な用法を得々と用いるという精神構造は、特に、初等中等教育は社会との連携が本質であるだけに、まことに感心できないことだと内々思っていた。とは言え、「学級経営」「学年経営」という組合せは、違和感を伴い、意識を掻き立てるという効果があるかも知れず、むげに否定的に扱うべきだというものでもない。また、「教育経営」も大仰だが同様の効果があろう。ただし、「学校経営」はいけない。

長々といやらしい文章を綴ったが、最近、某総合研究所から文部科学省委託のアンケート調査が舞い込み、ある項目の選択肢に「学校経営」というのがあり、このようなことを想起してしまったのである。別の項目では「運営」も尋ねており、このままでは、語義が特定できない。実際問題としては、「学校経営」という選択肢のある項目は回避できるものであるから、実は、どうでもよいようであるが、日常語とのずれのある用語を、注記なしで、用いるのは、校正ミスでないとするれば、独善であろう。

ところで、「学校経営」は教育界固有の符牒ではないかと言ったが、法令上の規定があるのであれば、公的な用語であり、問題はないと人は思うであろう。そこで、学校教育法、学校教育法施行令、学校教育法施行規則を「経営」という鍵語で検索してみたが、これらの法令規則では、「経営」は、われわれが通常理解している意味に限定されて用いられており（例えば、学校教育法127条、136条）、また、「学校経営」という語は検索できなかった。これに対し、「学校運営」は、学校教育法42条、43条にある。また、「運営」は109条にある。施行規則には「運営」が7件あり、そのうち3件が「学校運営」という形で現れる（43条、49条、66条）。これらは「運営」という語にわれわれが籠めている意味と違わない用いられ方をしている。

アンケートに関連して教育行政にも詳しい同僚の先生にぼやいたところ、「学校経営」にはきちんとした定義があります、とのことで、教育界の長老のエッセイを紹介された。それによると、教育界での「経営」という用法は明治大正期の古い翻訳語法の名残らしく、一般社会で「経営」の内容がだんだんと狭まり特定されていく過程の影響を受けなかったようである。長老は、さすがに近年では「学校経営」という言葉には不備が目立ち「学校運営」が適切であるということ、一旦は、注意される。その上で、「学校経営」がいい、あるいは「学校運営」の方だ、というような「言葉の遊び (sic !!)」の範囲に議論を留めてはいけない、概念としての内容を分析すべきだと述べる。そこで、自説を展開されるわけだが、結論としては、「学校経営」は理念的なものであり、「学校運営」は実体的なものであるということのようである。法令規則に、「学校運営」が現れ、「学校経営」が用いられないのは当然のことであるということが、この長老の論述から非常によく理解できた。「学校経営」という語は業界の内部に留めておくべき語であり、軽々に外部に出してはいけないのである。

付記： 私立学校の立場では、言うまでもなく、「学校経営」と「学校運営」は峻別されるべき用語であり、前者は、基本的に法人レベルのことであり、例えば、生徒募集政策や学則定員数、あるいは、教員配置などの（公的）補助金の確保につながる判断などをも含めた、通常の企業などと恐らくは変わらない意味での、高度の「経営観」を前提にしていなければならないものである。つまり、上述エッセイで理念的なものとして強調されている「学校経営」とは全く違うはずのものである。それならば、公立校に対してだけなら、こういう用語が許されるのか、と問われると、categorical には、私立と公立の学校に内容的な差があるべきではない以上、もちろん、否でなければならない。しかし、行政的慣行というものがあって、「公立」と「私立」は、そもそも範疇を異にしているというのが、日本の行政の現実ではある。「公立」校には、基本的に、現代日本語の意味での「経営」という概念は存在し得ないのである（さらに、付記2に引用の北川氏インタビュー参照。本質的に「経」がない事情が示されている。つまり、「公立校」には「運営」はあっても、本質的に「経営」とは無縁であるとの批判がある。少なくとも三重県は対策を試みたというのがインタビューの趣旨である。）。それでも、ネット検索をしてみると、「経営品質」という考え方を公立高校の運営に持ち込んだ試みもあるようであり、関連した書物も出版されている。実際、上述のエッセイで「学校経営」として強調している理念は、「経営品質」に属するものようである。

付記2：付記に関連して、

岡本政耿・中沢薫（編著）：経営品質導入で学校が劇的に変わる
学事出版, 2007
ISBN978-4-7619-1312-0 C3037

を入手した。第1部で、岡本氏に拠る経営品質というアイデアの解説がされている。カタカナ語の羅列で、いちいち原語と思われる語を思い浮かべ、その語に相応しい文脈を想像しながら読むという芸当をせざるを得ず、非常にくたびれたというのが正直なところである。多分、対峙してのセミナー形式ならもっとわかりやすいのだろうし、実際、これはセミナーの配布資料に手直しを加えたものであったのだろう。第3章：「組織開発の鍵～気づき」は、結局、組織開発が組織に属する人間開発であり、人間の類型に応じての方法論の話が書いてある。わたくしも同僚の顔を思い浮かべながら読み、どう役立てられるかへも思いを馳せた。第2部は、県立高校の現場への「経営品質」の導入の話であり、第1章で、中沢氏が解説を行い、第2章で現場の教員が細かい説明を与えている。最後に、三重県の知事であった北川正恭氏のインタビューがあり、これは面白かった。例えば、

本来、経営の経は家を建てるときの”設計図”くらいの意味だそうですね。ですから、「経営」とは「こんな家を建たい」、「こんな屋根の家にしたい」、そういう設計に基づいて正しく家を建てることを「営む」ことを言うのです。ところが、中央集権では、その「経」の部分を全部国に握られて、国に言われたことを正しくやるだけが地方の仕事であって、それ故、説明責任も全部国にあるということになるわけです (p.171)。

と言っている。「中央集権」を「公立高校」と読み、「国」を「県」あるいは「教育委員会」と読み、「地方」を「各高校」と読み替えられるであろう。実際、北川氏は、そのように読み替えてみせて、各校に「経」の部分の責任を持たせよう、そのために、「経営品質」というアイデアを三重県立高校に導入しようとしたのだと言っている。

ここで行われた、歴史的に西欧起源の語に漢字を充てて和訳を作り、今度、その和訳の漢字に、古典的な漢文脈からの解釈を加えて、西欧の原語にはないニュアンスを加えるという操作について、どう評価すべきかは難しい。それを日本語の魅力とするのが正しいのだろうが、

柳瀬尚紀：日本語は天才である (新潮文庫)

以外に正面切って論じたものを見たことがない。複数の大文化言語の接点で歴史を育んできた言語における借用語において発生する固有の言語現象なのだろうが、それが日本語のような現代社会を担保しているような近代語で起きる場合に、例えば、北川氏のような発言が成り立つのであろう。裏返して言えば、この発言は、英語にも漢語にも翻訳不能であろう。(平成22年8月24日)

107. () 本来ならば、ポランニーの話に戻るべきなのだが、ここに来て、雑事が集中しており、注釈やら解釈やらを加えるような読み方を、一応、心

がけている手前、なかなか作業ができない。他方、もう半年近く前に購入して、そのままになっている（比較的軽めに見える）本もあり、これも片づけなければならない。軽めとは言ったけれど、先に論じた「つながり脳」（81回、82回、84回記事参照）の藤井直敬氏の著者である：

藤井直敬：ソーシャルブレインズ入門 <社会脳>って何だろう
講談社、2010（講談社現代新書 2039）
ISBN978-4-06-288039-8

当ブログの趣旨（プロフィール参照）の（社会的な）時空認識の構造を論ずる上でのもっとも基本になるであろう考察となるはずであるが、現段階では、もちろん、うっすらと光が射し始めたというところだろうか。

とまれ、まず、上掲書の本文を差し置いて、「はじめに」と「おわりに」を見てみよう。

「はじめに」で著者は明晰に本書の意図と内容を説明する。断片的であるが、いくつか著者の文言を引用しよう：

ソーシャルブレインズとは、ごく簡単に言えば、「僕たちが社会の中で生き抜くために必須の脳の働き」と説明できます（p.4）。
ソーシャルブレインズとは（）「脳が社会に直面したときにいかにふるまうか」という意志決定のしくみと言ってもよいかもしれませんが（p.4）。

本書では、まずソーシャルブレインズとは何かを定義し、その機能を実現するために必要とされる個別の機能要素を脳科学がどのように扱ってきたのか、そしてその限界についてもお話しします。その後、それらの機能を統合することで初めて実現されるソーシャルブレインズという複雑なシステムを理解するため、つまり限界を突破するための考え方や僕自身の取り組みについてお話ししましょう。そして最後に、そのようなソーシャルブレインズという機能を前提として、社会と人がどのようにあるべきかを考えてみようと思います（p.8）。

「おわりに」で、著者は<社会脳>研究の動機をより深い立場から反省する。「おわりに」の冒頭で、

どうして、社会が科学に投資しなければいけないのか。わたしたちが科学し続けてきたモチベーションは何だったのか（p.223）。

と著者は問う。出版の時期から逆算して、例の「事業仕分け」の衝撃が反省のもとにあったに違いない。実際、科学研究は重要な仕分け対象であった。ただし、著者は、そのことを明言も示唆もしていない。もともと、こういう原理的な反省があればこそその<社会脳>という発想ではあったのだろうが。

著者は上の問いに対し、

わたしたちが科学する理由は、”自然が怖い”からなのではないかという解答を用意する。「脳も、他の臓器と同じく自然の一部」と考えて、多少の議論の末に、著者は、

しかし、わたしたちにはもっと怖いものがあります。それは自分です。自分を理解することが切実な要求としてわたしたちにつきまとうのは、その動作原理がよく分からないからでしょう。いくら考えても、自分自身のふるまいの理由は、後付けでしか理解できません。そんなもどかしさが、脳科学への興味とつながっていることは、みなさんも実感されているのではないのでしょうか。

と言う (p.225)。そして、

科学は、そのような分からないものへの何らかの対処を約束するための投資なのだと思います。… 自分を照らして、社会を照らす手段としての科学を目指すのがソーシャルブレインズ研究なのだと考えるに至ったのは、本書を書いたおかげです。…

と結論する (p.225)。科学研究のために公的な援助を受ける以上、公共性への自覚が不可欠なのは言うまでもないのだが、確かに、その辺りが無反省のまま、いろいろな研究が進行してきたことは確かであろう。しかし、やはり、研究の本当の動機は好奇心であり、それに、公的な価値があると確信し自覚できるからこそ、公的資金への要請ができるというのが筋ではないだろうか。

公的な資金と公的な価値とは一体ではあるけれど、そして、わたくしも、もちろん、著者の研究成果が極めて高い公的な価値を有することになるであろうことは疑ってはいない。著者は科学への投資の意義を問う形で設問を立てたけれども、研究成果が利潤を生むことを前提にしての話を意図はしていないだろう。そもそも、特定の課題への「投資」と研究の価値とは、成り立つべき時間単位が全く違うのだから。つまり、公的な価値は必ずしも金銭的な価値を意味するものではないので、この限りでは、例の「事業仕分け」は、せいぜい一二年の時間単位のことなのだから、原理的には全くかみ合わないことではある。ただし、「研究」の公的な価値を問うということは必要なことであり、この点で、「科学者」が専門性を盾に独善性を発揮し、挙句の果てに傲慢になったりすることはあってはならない (32 回記事、特に、その末尾部分も参照)。

さて、本書の本体であるが、5章立てになっている：

第1章 ソーシャルブレインズとは何なのか？

第2章 これまでのソーシャルブレインズの研究 — 顔、目、しぐさ

第3章 社会と脳の関わり — 「認知コスト」という視点

第4章 僕はどうやってソーシャルブレインズを研究しているか

第5章 ソーシャルブレインズ研究は人を幸せにするか？

— 幸せとリスpekトの脳科学

実は、まだ全部に目を通してはいない。できるだけ早く、次の記事で論じたい。

付記：世代的なものかも知れないが、第2章に、脳が外界イメージも一体化して反応することがあることを説明するために、ペプシマンというのが出てくる。CMのキャラであろうとは思ったが、身体の部位が自由に伸縮するという描像が咄嗟には浮かばない。念のためにネット検索で確認したが…。付

記2：人はなぜ科学研究をするのか、ということに関して、ほぼ二世紀前のドイツの（数論）学者ヤコービの有名な文章がある。

… Il est vrai que M. Fourier avait l'opinion que le but des mathématiques était l'utilité publique et l'explication des phénomènes naturels; mais un philosophe comme lui aurait dû savoir que le but unique de la science, c'est l'honneur de l'esprit humain, et que, sous ce titre, une question de nombres vaut autant qu'une question du système du monde.

(Jacobi: Gesammelte Werke, Band I の抜粋。) フーリエは数学の主な務めは公的有用性でありなかつく自然現象の解明であるとするが、ヤコービは、フーリエほどの学者なら、科学の唯一の目的は人間精神の名誉であり (le but unique de la science, c'est l'honneur de l'esprit humain), そのもとでは、数論の探求も世界の成り立ちについての探求も同じ価値があることは、知っていてよかつたはずだと述べている。この引用自体は、

J.-P. Kahane et al.: Fourier Series and wavelets, Gordon and Breach Publishers, 1995 ISBN 2-88124-993-0

からの孫引き (pp.46-47)。なお、フーリエ自身の業績が大陸では評価されず、英国で、例えば、Kelvin 卿により評価されたのもこういう事情があつたのだろうか。

ただ、「科学の唯一の目的は人間精神の名誉である」と言っても（もともとの出典が誰なのかは未調査。なお、Kahane はこの部分を英語で繰り返して見せているが）、19世紀前半の話である。今日のように、科学研究に国の税金が投入され、「公共性」が問題にされる時代となると、「(当該国における) 科学の唯一の目的は (当該国の) 国民精神の名誉である」のか「(当該国における) 科学の唯一の目的は (当該国の) 国民経済への寄与である」というようなことにもなりかねない。このことを良いとか悪いとか言っているのではない。19世紀前半と21世紀初頭では事情が違ふことも忘れるわけには行くまいというだけである。

ただし、Kahane の引用は20世紀末であつた。Kahane は古典的なフーリエ解析学者であるが、共産党系の政治活動でも知られており、ヤコービの指

摘に同感するところも大きかったであろう。だが、数学、それもフーリエ解析なしでは世界が全く機能しないという時代、つまり、数学は世界の成り立ちの解明を主目的とするというフーリエの思想どころか、現代世界は数学の上に成立するようになってすでに時日が経ち、しかも、そこでは数論的成果が、また、不可欠なのである。そして、もちろん、こういうことになったのは、もとは軍事という極めて局限化された、それこそ当該国だけの動機であったには違いないものから、人間精神の名誉の蓄積とは言いがたいものの、数学の普遍性というべき性格が働いて、数学的知見や技術を前提とした現実世界の運営が急速に実現されてきたのである。

このような世界の数学化は、ここ四半世紀以内からのことと言ってもよいだろう。しかし、これは急に起きたのではなく、当然、その前に水面下の動きともいうべき準備期間があったはずである。つまり、それが20世紀後半の文明的な意義であったろう。そして、現在の日本の状況、つまり、バブル崩壊以降続く長い睡眠は、20世紀後半の日本がその時代の文明的な意義について自覚できなかった—それにも理由はあるはずだが——ということの当然の帰結に他ならないということになる。

108. (10.07.31) 藤井氏の「ソーシャルブレインズ入門」の続きである(107回記事参照)。目次は前回の記事で示した。

第1章は、脳についての基本的な知見の紹介であるが、まず、個体における脳研究の成果を概観し、特に、脳が機能を増大させてきた仕組みが、

大脳皮質の持つ基礎的構造をいかに使い回すかというのが、進化的に見た脳のとった戦略なのです

と指摘する (p.18)。具体的には、基礎として、大脳皮質に存在するカラム構造が六層のネットワーク構造を作っていることに注目し、

カラムは、もともと汎用性を持つ機能単位であったものが、進化もしくは発達過程で、必要に応じて最適化されることで異なる機能を持つようになった

ので、

カラムも適切な情報の入出力を設定してやれば、いろいろな機能を実現できる汎用性を持っている

と考えられると言うのである (p.20)。そして、大脳皮質の厚みがヒトもサルも余り変わらないことから

ヒトの脳が皮質の能力を拡張するのに、皮質層構造の垂直方向の拡張はほどほどにして、横方向への拡張をとったことが明らかでしょう

と言う (p.22)。つまり、

カラム構造を基本ユニットとして採用することで脳はスケーラビリティを確保した

と要約できるのだという (p.22)。これは結構面白い示唆に富む指摘で、やや無責任な感想をわたくしが付け加えれば (どうせ、そうでしかないのだが)、脳は歴史主義者であって原理主義者ではないということになるのではないだろうか。一方、著者は、

新しいものを作るより、すでにあるものの数を増やして新しい機能とスケーラビリティを確保する脳の進化的解決方法は、脳の進化だけでなく、ヒト社会の発展とも非常に似た解決方法です

(p.23) に着目し、若干の事例を挙げて、

おそらくそのような方法は、過去の進化的遺産を活かしつつ新しいものを構築するために最適なのでしょう (p.23)

と述べる。

この後、組織学的な脳に関する基礎知見として、ブロードマンの脳地図を概説し、以後、脳の機能に話題を転じている。すなわち、

脳の領域間がどのようなネットワークを構築し、そしてそのネットワーク間をどのような情報が流れているか、各領域が、そしてネットワーク全体がどのような処理機能を持っているか知らなければなりません

と言うのである (p.28)。そして、「モジュール仮説」、つまり、ブロードマンの脳領野を一個の機能単位、つまり機能モジュールとして把握し、モジュールの働きを個別に理解するというアイデアに言及し、この仮説が神経科学の発展に寄与した事情を説明しつつも

モジュール仮説を用いた議論では、脳の一ヶ所に特定の機能を当てはめようとしがちなため、脳内の階層構造を意識しにくい

という難を指摘している (p.30)。つまり、本来なら領域と領域とが結びついて高度の機能が実現されているはずなのに一領域の内部のことだけの議論で「安心」してしまいがちだというのである。

ところで、藤井氏の着想の素晴らしいところは、以上の、個別の脳水準のところから、他者との関係性に踏み込もうという度胸があることである。ネットワークとか、認知コスト、さらに、ルール (=「わたしたちの行動を抑制する環境条件」, p.136) という重要な鍵語が登場する所以なのであるが、これは不本意ながら、来月の記事に回そう。

付記：ルールの定義における最重要な語は「抑制」であると著者は言っている。抑制とは何か。著者に従えば、

抑制というのは、わたしたちが何かの行動を行うか行わないかという意思決定に重要な働きです。このプロセスは、脳内で行われているはずで、誰かが外部からわたしたちのふるまいの一つ一つを操作しているという考え方は、あまり現実的ではありませんから。

ということである (p.137)。なお、

わたしたちの脳内の意思決定のプロセスは、基本的には、たくさんの可能性を絞り込むプロセスだと言えます

と述べる (p.137)。

109。(10.08.09) 藤井氏の「ソーシャルブレインズ入門」を終えてしまおう (107回, 108回記事の続き)。前回の記事では、第1章もまともに紹介していないのだが、大分時間も経ったので、第2, 第3, 第4の各章もすっ飛ばして、第5章まで行ってしまおう。

この中では、第3章 (pp.120 - 161) の「認知コスト」(脳内のエネルギー収支バランス) というアイデアが非常に面白い。著者は、例えば、

脳内の行動規範を更新するときには、脳はしかるべき認知コストを支払わなければいけません。脳は、じつはギリギリのエネルギー供給しか受けていないので、それを嫌がるのは当然ですし、そのコストの増大を嫌う脳が外部に対して保守的になるのは自然なことです

と説明している (p.129)。そして、さらに、

認知コストをできるだけかけることなく、自分にとっての最適な社会環境を維持することが、わたしたちのソーシャルブレインズの第一原理と考えることに無理はないように思います。これは、あらゆる人が保守的傾向を持つことを、うまく説明してくれます。なぜなら、認知コスト的に見るならば、脳自体が構造的に保守的なのですから。

と補う (p.129)。ある意味で、この観察の実用的な帰結が、

この認知コストという、見えないコストの押しつけあいのしくみが、じつは社会的駆け引きの原理なのかもしれない

と著者は考え (p.130)、

人を動かすときに、相手の脳内の認知コストバランスを考慮に入れると、いろいろなことがクリアになり、行動の戦略性が高められるはず (p.130)

というわけである。こういう認識がサルの実験から得られたところが興味深い。そして、

このような視点でサルを見て、さらにヒトを見ることで、僕は認知コストという脳内のエネルギー収支バランスに、ヒトのさまざまな社会行動を説明するポイントがあるのではないかと考え始めたのです。つまり、ヒトは目の前の問題に対して、その解決に必要な認知コストバランスを勘案し、行動を決定しているのではないかと考えたわけです。もともと[…], 脳内のエネルギー供給はあまり潤沢ではありませんから、わたしたちの脳はできることならば脳内にすでに構築されている既存の方法に依存したいと考えるのは自然なことのように思えます。そのような認知コストを削減したいという圧力が常に脳内に存在し、各個体の行動選択に特有の志向性を持たせていると説明することで、サルの保守性も、ヒトの保守性も一元的に理解できる気がするのです (pp.134-135)。

という。こうして、前回記事の末尾で言及した社会的「ルール」も「認知コスト」で理解できると考えられるとする。というのは、

社会のルールも、結局は各個人の脳がそれを支えることで作っているということに気がつくのではないのでしょうか (p.138)

つまり、

「社会というものは、上位個体でなく下位個体がそれを認めることで成立している」という一面を忘れてしまうと、社会的なルールというものが一方的に天から降ってくるものであるという、誤解を生み出してしまいます。ルールが振ってくるように見えるのは、わたしたちが生まれたときに、すでに社会は存在していたからに他なりません (pp.138-139)。

ところで、

ルールはわたしたちの選択肢の幅を自動的に狭めてくれます。これは、無限の可能性から一つを選ばなければならない場合と比べて、はるかに脳のエネルギーバランスにとって有利な条件です。… (p.139)

というわけである。

この著者の思考は深く、一節一節が含蓄があるのだが、断片的でも一々引用しては切りがない。ところで、著者は、世論の問題を提起し、社会的ヒステリーというべき事例をいくつか挙げ、さらに、ユダヤ人虐殺の責任を問われたアイヒマンの例の分析や、ミルグラム実験、スタンフォード監獄実験などの例を検討して、

わたしたちの行動が、いかに脆弱で相対的なフレームに乗っているかということが浮かび上がってきます。ある行動は、あるときは正しく、次の瞬間には間違っているかもしれません。ルールは曖昧で、行動の社会的意味づけも、そのために非常に曖昧です。それはすなわち、社会の中で、わたしたちが絶対的に頼れる行動指針は存在しないことを示しています (p.158)

と言い、法や宗教の可能性を検討した後で、さらに、

ソーシャルブレインズは高い文脈依存性を持つため、脳の内にも外にも絶対性を持ってません。[...] 社会のあらゆるシステムは、物事の価値や意味が状況によって変化する脳に対して、原理的に何一つ絶対性を示せないのです。つまり社会の抱えている絶対性に関係する問題点は、わたしたちのソーシャルブレインズの特徴をそのまま反映していると言っているかもしれません (pp.159-160)

と述べる。そこで、難問であるが、

すべての脳に共通する絶対性を持たず、常に文脈依存的にしくみを変化させるソーシャルブレインズを理解するために、絶対性、再現性を重視する科学はどのように対処すればよいでしょうか (p.160)

と問いかける。その試みの一端が、第四章で紹介される。ここは、当然、『つながる脳』(81回, 82回, 84回記事参照)と重複するところが多い。いくつかの鍵語、「関係性」、「多次元生体情報記録手法」を挙げておこう。章末で、著者は、

わたしたちは、自分をとりまく環境から独立することはできません。自分自身もそのネットワークの一部として周辺とつながっているのです。そして、実験操作を行うということは、その内部から環境に対してさまざまな関係構造を操作することであり、ソーシャルブレインズ研究としては、その操作に対する観察対象の変化を観察し、そのしくみを理解するということになるのではないかと思うのです (p.192)

と記す。

そして、最終章である。ここで、著者はソーシャルブレインズ研究の哲学を展開する。章の頭で、著者は、

幸せと科学という何だか胡散臭い怪しい響きがありますが、結局のところ社会が幅広い科学分野に投資し続けているのは、人が幸せに生き続けるための方策を探るためなのだと思うのです。そして人が、社会が、まだ幸せになっていないなら、その可能性が

ありそうな分野を選んで投資が続けられているのではないでしょう
か (pp.195-196)

と述べる。この省察は例の「事業仕分け」の影響なのだろうが (107 回参照),
胡散臭いかどうかはともかくとして, 日本文化の文脈で育った人ならではの
感慨ではあるまいか。そして, 「幸せ」の内容の分析には立入らず, それには
上述の相対性に基づく理由もあるのだろうが,

僕は人の喜びや幸せは, 個人の中にあるのではなく, むしろ他者
との関係性の中にあるのではないかと思うのです (p.198)

と言う。そして,

そのような関係性がわたしたちの気持ちに影響を与えるのはなぜ
でしょうか (p.198)

と問う。そこで, 著者は, 「リスペクト」という概念を提起するのであるが,
まず, ルネ・スピッツの「ホスピタリズム」という実験観察の報告を引用し,
母子間で行われる当たり前のコミュニケーションの有無が乳児の生存率に多
大な影響を及ぼすことに注意して, 他者との関係性の基礎が母子の関係性に
あると考え,

母親の与えてくれる関係とは何でしょうか。それは存在そのもの
を無条件で認めるという態度です (p.206)

人と人との関係性の始まりが母子関係にあるのは間違いないでしょ
う。とするなら, 母子関係の構造が人のコミュニケーションの根
幹にあったとしても, おかしくないでしょう (p.206)。

と注意し, これより,

このことは, わたしたちが行き続けるために, 自己の存在を肯定
してくれる関係を持つ重要性を意味しているのではないでしょ
うか (p.207)。

と指摘する。実際, アメリカの最近の報告が Scientific American の 7 月 28
日付配信の News にある:

Katherine Harmon : Social Ties Boost Survival by 50 Percent

(ただし, 「Social Ties」 が「他者との関係性」と同等であるかどうかは検証
を要する)。

さて, 著者は「リスペクト」という概念を説明し,

僕は, この「人が人に与える, 母子関係に源を持つような無条件
な存在肯定」をリスペクトと呼んでいます, リスペクトの流れ
を考えることが, 社会の中での個人の幸せの根幹にあるのではな
いかと思います (p.208)

と宣言する。「リスペクト」の性質は結構難しい。

欲しいと思っただけではもらえないこと — これがリスペクトの持つ、とても重要な性質なのです。つまり、リスペクトは自分自身で作ることはできず、他人に強制することもできないのです (pp.208-209)。

要するに、男女の愛のような双方向性のあるものとは違う。しかし、

愛とリスペクトの関係を考えるなら、愛の前提条件としてリスペクトが必須であると考えることが妥当だと思います (p.209)。

というのが著者の主張である。

「リスペクト」について要約すれば、

まず、リスペクトは個人のレベルでしか発生しませんし、それが個人に帰属するうえに、一方通行の性質を持ちますから、双方向的なネットワークを作りません。二人の間で、お互いがお互いにリスペクトを著したとしても、それはあくまで二人の間にそれが存在するだけで、それ以外の人にはまったく意味がありません。とすると、そこで、二人が表現しているのは、「私はあなたの存在を百パーセント肯定していますよ」という場であり、それが二人の間に流れる文脈に反映されると考えます。それによって、二人の間にはそれがないときとは異なる、特有の社会的文脈が生まれます。そして、その文脈に応じて、わたしたちは適応的な行動を選択するのです (pp.209-210)

ということになる。人間関係は、母子関係から始まるように、「リスペクト」から始まるとは言っても、「リスペクト」が成り立っているような関係ばかりではない。そして、

リスペクトのある社会文脈では、相手は自分の利益に考慮を払ってくれるのに対し、それがない場合には、相手の利益優先で物事が進む場合が多々あるからです。つまり、自分が考慮しなければならぬ社会的文脈の変数が増えることになります。これは、認知的に大きなコストとしてわたしたちの脳にのしかかってきます (p.213)。

と注意をする。ところが、現実の社会はどうか。

個体間のリスペクトの敷衍によって、明らかに社会が必要とする認知コストは減ることでしょう。しかし、ルールが一般化したようには、リスペクトは社会に広まっていません。それはなぜでしょうか (p.213)。

と著者は問い、一応の解答として、

おそらくリスペクトを前提としない経済優先型の行動戦略がもたらす利益が、認知コストの削減から来るメリットと比較して大きなものであるからでしょう。つまり、他者とのコミュニケーションにおいて、リスペクトという利益に直結しない態度より、戦略的に効率を重視した態度でふるまう方が、短期的には経済的利益が得やすい構造があるからです (pp.213-214)。

と説明する。だが、

しかし、気をつけておかなければならないのは、リスペクトの欠如が与える影響は短期間では出てこないことです。おそらく、その欠如はボディブローのように社会を徐々に疲弊させるのではないかということです。それは、個人のレベルで、関係性欲求の不全という形で浸透し、さらに認知コストの増大という形でわたしたちを追いつめます (p.214)。

と指摘する。著者の言うことは腑に落ちることではあるが、状況を正確に把握することが何らかの対策を、いわば、社会ルールとして、想定するうえでも大切であろう。社会ルールが長い時間を掛けて出来上がってきたように、ここでも進化論的な時間が必要なのだろうか。ともかく、著者の言うとおり、

他者との関係性の欠如は経済的成功では保証されません。そのため、リスペクトのない社会というのは、人々の心が荒廃していくのではないかと思います。… 現在の日本の状況を見ると、それがそのまま起きているような気がするのです (p.215)。

となるが、著者は、利益追求と他者へのリスペクトの共存の実現のうえで、ソーシャルブレインズの研究が一石を投じうるものになることを信じていると言うのである。著者や続く人たちのご健闘を祈りたい。

110. (10.09.94) またまた、寄り道だが、八月最後の土曜日に、天神のジュンク堂で

東裕紀 (編) : 日本の想像力の未来
クール・ジャパノロジーの可能性
(NHK ブックス. 日本放送出版協会 2010)
ISBN 978-4-14-091163-1 C1330

を見つけた。丸善が博多駅に移動するために閉店になり、ここはいつも混んでいるが、市の中心部の知的文化センターがここだけだとすると、福岡市はややこしいことになっていくだろう。ネットでの購入が一般化するのはいいが、結局、browsing できる場所が限られ、かくて、こういうことが全国で起きてい

るわけだから、電子書籍化が進まざるを得ないのではないか（ただ、その場合、本書とも関係するが、ダウンロードが世界中何処でも可能なことを踏まえると日本語文献の世界戦略という発想が同時に必要であり、これは優れて日本政府が責任を負うべき知財戦略に属することなのだが、現在の政権与党も「イマココ」への執着が強すぎ、この意味での戦略観は欠いているようである）。

厄介なことは、日本の場合、ネット化の進行が、地域性の拡大ではなく、東京の拠点性を強める方向に動くことで、その真因はまだはっきりとわかってはいないのではないか。要するに、非線形現象の（まあ）「悪しき」例として、暴発、爆発といったショック現象を招来する方向に動いているのではないかとということである（ただし、判断のためには日本の一極集中の持つ非線形構造の的確な分析が先である）。現下話題の「地域主権・地方分権」という水準のことでは必ずしもなく、数理学現象の論理的帰結として、一極集中化は全組織の何らかの形での「崩壊」を早晚導く可能性があるということであるけれど、こういうことを正確に論じるだけの素養は、現在の政治科学、経済科学、あるいは、広く社会科学系の人たちには希薄なのではないだろうか。

さて、本書は、今年の春に東京工業大学世界文明センターで開かれたシンポジウムの記録とあるが、学術書の体裁とはとても思われぬ。それはともかく、「はじめに」において編者の東氏の経緯の説明があり、シンポジウムの参加者のうち、大塚英志氏のパーツがご本人の申し出により削除されているということで、記録としては不完全なのだという。したがって、大塚氏の経歴は本書に載せられておらず、わたくしには氏が何者であるかの見当も付かない（後で Wikipedia で調べたが）。討論記録に相当するものも本書には含まれており、その場合、本来は存在したはずの発言群を削除して成り立たとされるものは、何なのだろうか。

いずれにせよ、本書を眺めてみて、老人の、しかも、門外漢には、極めて難解な書物であることがわかった。つまり、もともと（上掲大塚氏のことにしても）説明が要るようなら入ってくるなというような場のようである。それでも若干は引っ掛かる部分があるし、世代間の perception gaps というようなものに興味を持てば、そういう面では話が通じないことにこそ意味があるのだから、まあ、見ておく価値はあるだろう。

目次は「はじめに」に続いて、

第1部 日本の未成熟の力

第2部 クール・ジャパノロジーの条件

と分かれ、最後に、河野至恩氏の

[総括] ポップカルチャー言説の「視差」から考える

がある。

第1部には、キース・ヴィンセント、村上隆、黒沢清、宮台真司の各氏の寄稿と、編者の司会のもとでのこれら四氏による討議「日本的未成熟をめぐって」が収められている。第2部には、ジョナサン・エイブル、ヘザー・ボウウェン＝ストライク、シュテフィ・リヒター、宮台真司、毛利嘉孝の各氏の寄稿と、クッキー・チュー氏の司会によるこれら五氏と編者の討議「もう一つの日本学 批評、社会学、文化研究」が収められている。

この本を掲載の順序に忠実に目を通すのは難しい。最初に、河野氏の[総括]を見た。もちろん、細かいことは身に染みてこないが、最後の数ページ(pp.276 - 278)に非常に重要な指摘があることは強調しておきたい。特に、

… ローカルな発信をグローバルな文脈に乗せていく行為は単純なものではなく、むしろ制度的なさまざまな障害や制約を意識しながら、地道な実践を積み重ねるなかでのみ実現するものである。その意味で、翻訳などの知的基盤、(…) 人的ネットワークの整備など、現実的な取り組みを続けることは重要である。… (p.277)

そして、最後のパラグラフが大切である。後半はシンポジウムの意義付けを演繹したものであるが、このパラグラフの前半では

しかし、この問題はそうしたプラクティカルな問題にとどまらず、言論のフレーム、理論の視座の問題でもある。ここで問題になっているようなさまざまな言説の差異のありかについて正しく理解するには、それぞれの置かれた文脈について熟知する必要がある。また、そこで求められるのは、複数の視座を往還しながら考える姿勢だと思われるからだ。

と言っている(p.277)。そして、ばらばらの言説の拠って立つ視座の間の「視差」測定の機会になり、この「視差」測定からクール・ジャパノロジーが始まるとまとめている。

つぎに目を通すのは、どの記事でもよかったのだが、宮台真司氏の「一九九二年以降の日本のサブカルチャー史における意味論の変遷」(第2部)を眺めてみた。

宮台氏はわたくしにとっては名前は聞いたことがあるという程度であり、氏の論考は見たことはない。先日、学校にはそれぞれの「らしさ」があって、いくつか例示があって、「麻布なら頭のよい遊び人」(だったかな)とか、という話を聞いたけれど、宮台氏はまさにその典型的なのだろう。で、肝腎の記事だが、老人には完全にお手上げである。いくつかの鍵語があり、ナンパ系、オタク系、それから、セカイ系、バトルロワイヤル系、などと続く。何か、渋谷の変貌と絡んでもいるようで、もともと田舎者のわたくしには、あの辺りは全くわからないし、したがって、あの辺りで生起した局所現象がどの程度普遍化されるものか実感を持って判断できない。つまり、地方都市で物真似現象があったとして、それが単なる物真似なのか、それとも本質において渋

谷的な現象が生起しているのか判断ができないのである。いずれにせよ、JRから井の頭線に向う渡り廊下でよく見掛ける、真剣に眼下の交差点の人の流れを見詰めている旅行者の気分であった。だが、この記事の文脈のごく一部に関わるだけだが、現在の勤務先校が確立した時代が『巨人の星』や『明日のジョー』の時代、

主人公たちが強い上昇欲求を持つのは階級的位置ゆえだというわけです (p.192)

と対応していることは、マルクス主義的な枠組が時代の雰囲気完全に作っていたわけではないにせよ、ほぼ明らかであることに思い当たり、それがたとえ矮小化されていても、まあ、時代精神の反映であったとすると、今日の宮台氏のいう「ポストハルマゲドン」の時代における私立中高校（その…麻布クラス！の）の主導的な雰囲気は何なのか、それと学校としてどうあるべきかということの乖離の程度というか、乖離の制御可能性はどうかと考えてしまう。宮台氏の記事の最後の方は特に示唆に富むように思われるのだが、的確に文章を抜き出すのはむずかしい。例えば、末尾で、

いわゆる「クール・ジャパン」のクールとは、簡単に言えば、この社会的文脈を無関連化する機能にあるのではないか。そこに焦点をあてて、人々が直感的に有用性を実感するからこそ、クール・ジャパンなのではないか。(p.208)

と言い、

「クール・ジャパノロジー」というのは、…、あえて意味を見出すならば、「社会的文脈の無関連化機能に注目をするジャパノロジー」ということではないでしょうか。

と結んでいる (p.209)。宮台氏の売りとも言うべき基本的なアイデアのようだが、もう少し言葉を精密に定義して使ってほしい。このままでは物は言いようという水準であり、行き着くところは仮にあるとしても相当に苦しいのではないか。

次に、拾い読みをしたのは、黒沢清氏の「日本映画と未成熟」と村上隆氏の「アート界における”クール・ジャパン”の戦略的プロデュース法 Mr.の場合」である（いずれも第1部）。しかし、流石に読み方の順序に問題があったか、完結した印象は得られなかった。村上氏については、このブログで何回か触れている（13回、86回記事参照）が、黒沢氏は映画も見ていないので論評のしようもない。前にあるキース・ヴィンセント氏の「日本的未成熟の系譜」が氏なりのストーリーを語っており、それと付き併せて、ある程度の見当を付けるしかないが、もちろん、最終的には、自分の目で作品を見なければならない。ところで、このヴィンセント氏の記事だが、

日本文学を勉強する理由の最良の一つは、大人であることと子どもっぽさというものが何に由来するのかという私たちの暗黙の了解事項を、再検査する機会を私たちに与えてくれるということにあります (p.19)

と姿勢が纏められている。次のパラグラフの冒頭では

なぜでしょうか。それは、日本の近代性の下に横たわる成熟化と発展の概念が、じつに長い間、単にナイーブで無邪気な目的だけでなく、日本の知的かつ文化的状況に関する重大な疑問でもあったからです。… (p.19)

という分析を試みている。以下、若干の定評のある文学作品を引用し、結局、

そもそも一つの文化の全体評価にこのような精神分析的な理由づけを適用することにじつに大きな問題があるのではないのでしょうか (p.26)

と言い切っている。そして、処方箋を示唆して、実際の行動が、村上隆、黒沢清両氏の表現活動に見られるとして、両氏の仕事の分析を行なっている。村上氏自身の書いたものは何回か当ブログでも扱ったが、第三者であるヴィンセント氏の分析には上の文脈から来る実に興味深い指摘が含まれている。黒沢氏については作品を見ていないのだから、他人の意見であろうと、そういうことなのだという以上の感想はない。さらに、斉藤環氏の評論を巡っての議論が出てくるが、クイア (queer?) という鍵語が存在することがわかったものの、ほとんど理解不能であった。

第一部には、さらに、宮台真司氏の記事「「かわいい」の本質」と討議「日本的未成熟をめぐって」がある。宮台氏の記事は、上掲の第二部の記事について具体性を強めた内容のものであると言ってしまってよいのではないか。いずれにせよ、大変難解な記事ではある。「討議」であるが、もちろん難しい。指をくわえてひたすら眺めているというのが正しいところで、何か、口を挟める要素がこちらにあるかという、皆無である。拾い読みの感想としては、黒沢氏の発言中の

…、アニメーションの制作というのは、…でき上がった作品に対しての責任はすべて作者が負わざるを得ないわけで、随分と成熟した思考が必要とされるんだろうなと思います。まさに、そこには、小説とか絵画とかと同じレベルの古典的作者が存在している。それからすると実写の映画というのは本当に適当な作業ですね。あきらかに表現形式として未熟だという気がします (p.104)

が面白かった。「討議」は全体として難解極まりないのだが、このようにわかりやすい文言を拾っていくと、他にも結構ある。抽象的なところでは、東氏の発言中の

…，現実から解離した虚構的なイメージ，社会的な文脈からの距離こそが、「日本的なもの」の中核にあるという認識は共有でき[た] (p.128)

という表現や，宮台氏の「かわいい」論を踏まえて，村上氏の示唆する

本質的に「かわいい」ものは死である (p.129)

というアイデアがある。「討議」の末尾の東氏の日本的受動性の謎の提起も面白い。

第二部は，一部は見たが，全体としては，別記事にした方がいいだろう。

111. (10.09.10) 前回に引き続き、「日本的想像力の未来」の第二部を見よう。第二部所収の記事は前回に挙げ，このうち，宮台氏のものはずでに紹介した。

第二部冒頭はジョナサン・エイブル氏の「クール・ジャパンの不可能性と可能性」である。この記事は，まず，

「クール・ジャパン」と「クール・ジャパノロジー」を考えるにあたり，これらの言説の中にあるのは「クール」そのものの説明です。なぜ，日本の国内外で同じものが同じように「クール」なものとして消費されているのでしょうか。(p.135)

と問い，

…，世界各地である種のもものが「クール」だと言われているということは，やはり非常に重要な共通点がそこにあると考えられるのではないのでしょうか (p.136)。

「異なる地域でクールとされていても，そこに共通のクールさがあるわけではない」という可能性はもちろん高い。しかし，その可能性があるならなおさら，まずはそこで言う「クール」を定義しなければ，差異も同一性もともにとりにがしてしまうことになるだろうと私は考えます (p.136)

と言い、「クール」という概念の定義が必要だとにする。これは論点を整理する上での重要かつ基本的な手続きである。しかし，日本の習慣では，ついこの辺りは共通理解があるものとして，その中身を確認しないまま，細部の議論に入り込んでしまうことが起きがちである。挙句の果ては議論が宛てもなく漂流してしまう（例えば，45回記事参照。特に，末尾の井上章一氏の「南蛮幻想」所収の切支丹事跡関連研究史のわたくしの評価を見ていただきたい）。実際，「クール」の場合についても，NHKの番組への言及があり，そこで扱われている「クール」は明確な定義がはっきりしない。ただし，エイブル氏はこの番組を直接は視聴したことがないそうで，比較的好意的な予想をしている。

さて、エイブル氏は、「クール」という概念には「ある特定の社会システムの中において流通している」二つの意味、「情動」と「歴史的な意味」が含まれていることを指摘し、これらの分析を行なうことになる。情動に関する意味は、情動を欲望とも言い換えられるとした上で、

つまり、未知なもの、理解不可能なものが生みだす憧れこそが「クール」の含意になります (p.137)

と言う。このままではただのエキゾティシズムのようだが、エイブル氏もつと踏み込んで

何かが「クール」であると感じるとき、そこで起こるのは、それが何であるか具体的に理解しないままフェティッシュへ転化させる動きです (p.140)

と、アメリカでの現象の実情を紹介しながら、指摘する。ここで、重要な鍵語「オタク」への言及がある。引き続いて、「歴史的な意味」の検討があり、「クール」がもともとはラグタイム・ジャズの「ホット」の対照として生まれた「クール・ジャズ」に遡り、しかも、

…クール・ジャズの「クール」は、即興的で超然としており、社会によって押しつけられた役割から自らを隔離する形式でした。それは、内省的なひきこもりというよりは、むしろ個人の自由をえるために自らに枠をはめるアイデンティティそのものを拒絶することを意味していました (p.146-147)

と想起する。かくて、「政治と歴史のポストモダン的な否認と関わっている」と言うのだが、こうなると一応堅実な社会生活を送ってきた（つまり、多分、モダンな）老人にはひたすら難解である。

前後するが、エイブル氏は、

「クール」とはこの世界の現実からの隔離の形式なのです (p.145)

として、九鬼周造の「いきの構造」とよく似た面もあるという指摘をしている。

さらに、現在の世界的な「クール・ジャパン現象」の「クール」は一つ目の意味、未知へのフェティッシュだろうと言う。エイブル氏は、また、オタクは「クール」かという重要な問題を提起している。以下、微妙な言葉の使い分けが不可欠な論述が展開され、末尾で、

もし、「クール・ジャパノロジー」というものがありうるなら、それは（…）「クール・ジャパン」を非「クール」化していくような批判的な行為の中にあるのだと思います。クール・ジャパンの熱を冷ますことによって、批評的な観点を見つけるのです (p.160)

とまとめている。非「クール」化は、「クール」の歴史的な意味に従って、ホットな「クール・ジャパン」に対するものであるとしている。

エイブル氏の「クール」の定義は、先に見た宮台氏の「社会的文脈の無関連化機能」という整理とは重なるようでもあるが、どう重なるのであろうか。もちろん、こういう問いは「クール」ではないであろう。野暮というべきかも知れない。野暮はいきの対語であることは知っているが、九鬼周造の議論に野暮の分析があったかどうか記憶していない。とまれ、こうしてひっそりとパソコンに向かっているわたくしはオタクということになる。「クール」でもない身としては、どうも「社会的文脈の無関連化機能」という表現は字面に酔ってしまっている印象がある。「独善」とか「ひとりよがり」という言葉との差別化が不十分ではないか。やはり、社会的文脈との関連があってこそ「クール」が成り立つのではないかと、そういう印象を覚える。実際、次のヘザー・ボウエン＝ストライク氏では、アメリカの青年の「クール」理解に関してだが、社会的文脈との屈折した関連性が注意されていると思われる..

つぎの記事は、ヘザー・ボウエン＝ストライク氏の「プロレタリア文学の可能性」であるが、彼女は、プロレタリア文学の研究者でもあり、「クール」ではないと断ってから、「クール・ジャパン」あるいは「クール・ジャパノロジー」のイデオロギー的面をまずみようと言う。「クール・ジャパン」が日本政府の肝いりで推進されたこともあり、そして、このことは、実は、このシンポジウムの客観性の検討も避けて通れない課題にしているはずではあるが、彼女の姿勢は健全である。彼女の授業 Lost and Found を受講する学生たちを通じて、日本への関心が学生のキャリア・アップのためではないことに注意して、これは前掲エイブル氏も同じことを言っているが、

「クール」とは「生産的でなければならない」という状態から離れていることです。または、離れているように見えることです。平成の日本文化に興味を持つ受講生たちは、それを自分のキャリアと関係するものとしてはとらえていないようだと言いました。そして、無関係だからこそ、それは「クール」なのです。(p.164)

と観察する。「蟹工船」ブームの解釈を、この文脈で試みるが、余りはっきりとした結論は示さない。

さらに、ドイツの研究者、シュテフィ・リヒター氏の記事「ヨーロッパにおける「クール・ジャパノロジー」の兆し」がある。彼女は、まず、自分が基本的にモダンな素養から成っているが、行きがかり上、日本のポップ・カルチャーと関わることになったことを断るが、したがって、「クール・ジャパン」よりも欧州における日本研究の歴史的経緯の中でのポップ・カルチャーの位置づけ、つまり、「クール・ジャパノロジー」の分析に傾斜している。日本研究を三段階に分け、表に整理している (p.174)。後に、さらに補強して、「古典的ブルジョア主体」「大衆消費文化的主体」、さらに、「オタク」と分ける。

「オタク」については、美的要素と経済的要素からの接近を挙げ、前者については、「すべてのものを記号化し、また、記号として感覚する態度」だと述べ、後者については、「ヒッキリなしに実験して新しいものを作り出す態度」だと言う (pp.178-179)。そして、

いずれにせよ、特定の美的／メディア的文化的配置 (disposition) としての「オタク系 way of life」は、現実に対する新しい知覚や行動様式と併行していますので、これに批評的な眼差しを向ける「クール・ジャパノロジー」も相応な概念装置を必要とすることは確かです (p.179)

と言い、オタク系文化を巡る議論の重要性を指摘する。この記事では、さらに、「クール」を分析するが、エイブル、ボウエン＝ストライク、宮台の各氏の分析とは色合いが違っているようにも見える。

つぎに、毛利嘉孝氏の「トランスナショナルな「理論」の構築に向けて日本研究と文化研究」がある。毛利氏の論点は、やや高いところにあるようで、地域研究としてのジャパノロジーを論じ、重要な鍵として、「理論」の普遍性と特殊性、その応用可能性と不可能性の問題があるとする (p.218)。例えば、

「理論」と名づけられたものが、フランスやアメリカなど西洋諸国で独占的に生産されている。この単純な事実にも何も疑問がないような学問の体系というのはそもそも何なのか。「理論」は、しばしば、すべての時代や社会にあてはまる一種の普遍性を持っているとされます。それに対して、「理論」の「応用」という実践は特殊性の中に囲い込まれてしまっている。この「理論」と「応用」、「普遍性」と「特殊性」、「西洋」と「非西洋」の非対称的な関係が問題になってくるわけです (pp.219-220)

と言っている。「理論」と「応用」 theory and practice と対比させて普遍と特殊を論ずるのはいかにも西洋的であるが、わたくしも、この二元論的姿勢の意義は承知している。ただ、一般的な語法としてのわたくしの感覚では、「理論」と「応用」を「普遍性」と「特殊性」という関係に対比させるのは、いずれも包含関係と解されるからよいが、西洋と非西洋は排反関係とも見えるのでおかしい。むしろ、このおかしさが直感的に先行して見えてしまったために、前掲の文化研究への言及が起きているのではないかとも思われる。実際、直後で

では、なぜ西洋の理論が日本の社会に応用できるのかという問いです。実はこれには答えがある。それは日本の社会が十分に西洋化されている、むしろ西洋以上に西洋化されている側面がたくさんあるからです (p.220)

と言っているのだが、言葉の使い方としては、ここにも奇妙なところはある。「西洋化」の意味が定義されていないのである。とは言え、延長上に原則的な問いがある。すなわち、

理論が理論として成立するための最低の条件は、日本なら日本から提出されたある一つの理論が、少なくともいくつかの複数の日本以外の社会で適応可能であるということです。…少なくとも日本と同じような経済的政治的状况のある先進国で、説得力のある応用可能な理論が生み出されれば、それこそ理論と呼べると思います。…単純なテーゼでも構わないので骨太の理論を生み出すことができるかどうか、ジャパノロジーの今後を批判的に考える上でのまず一つの鍵でしょう (p.223)

述べる。「まず一つ」という以上二つ目があり、それは

大学や知識人のありよう、そして知識生産の制度についてです (p.223)

と言う。「大学や知識人」はもはや基本的にナショナルではなく、例えば、

一九九〇年代以降のカルチュラル・スタディーズの中心的なプロジェクトは、ナショナルな枠組みを越えつつ、かつアメリカ中心主義ではない、対抗的なグローバルなネットワークを形成しようとしていたことだと思います (p.224)

が挙げられ、「知識生産の制度」とは伝統的学術誌の堅固で保守的傾向が反映しやすい査読制度の批判であり、つまり、

既存の制度とは別に、アジアの研究者なり日本の研究者、あるいはジャパノロジーと関わっている人間の中でまともな出版プロセスをつくっていくことが真剣に要請されている気がします (p.225)

ということである。

第二部の最後はクッキ・チュー氏司会の東浩紀、ジョナサン・エイブル、ヘザー・ボーウェン＝ストライク、宮台真司、毛利嘉孝、シュテフィ・リヒター各氏の討論「もう一つの日本学 批評、社会学、文化研究」である。副題は、討論参加者の背景を表すのだろうが、字面からもかなり白熱した討論であったらしいことはわかる。何か結論めいたものが得られたかどうか、少し考えてみないとわからない。

付記：前回、本書は学術書とは言えないと書いた。内容的にエッセイ集だからということではない。基本的には体裁の問題なのであり、瑕疵として索引を欠いているということがこの印象の最大の理由である。この意味は、共通の鍵語の最小限の整理も不十分ではないかということである。また、内輪の

議論のせい、文献提示が十分とは言えないのではないと思われる記事もあった。いずれも、素人が読み飛ばしての印象である。改めて勉強しようと思ったなら、それなりの接近法はあるのだろう。追記：Le Monde のネット版にヴェルサイユ宮殿における村上隆氏の展覧会の記事があり、付随して、村上氏へのインタビュー記事がある：

http://www.lemonde.fr/culture/article/2010/09/11/les-fleurs-de-murakami-chez-le-roi-soleil_1409678_3246.html

村上氏は、この展覧会での出品作の選定が周到な計算に基づいたものであることを述べ、さらに、一般に、氏の作品の制作意図が、実は、上で論じられている意味での「クール」とはまさに正反対のものであることをインタビューの後段で、明確に強調して述べている（平成 22 年 9 月 15 日）。

112. (10.09.19) まだ、そして別の寄り道だが、

川人光男：脳の情報を読み解く BMI が開く未来
朝日新聞出版、2010. ISBN978-4-02-259969-8

を天神のジュンク堂で見つけ、早速購入した。BMI すなわち Brain-Machine-Interface という脳と機械をつなぐ技術の展望を述べた書物である。91 回～95 回の記事で扱った樋口貴広・森岡周両氏の「身体運動学 – 知覚・認知からのメッセージ」と内容的に若干重なるところはある。

この本で最初に目を通したのは、例によって、序章、続いて「あとがき」だが、いずれも余り示唆には富んでいなかった。次に見たのは、第 1 章「BMI が開く未来」である。BMI の考え方と応用技術の紹介があり、脳活動の種々の補助装置として広大な未来が開けていることが述べられている。特に、脳活動について個体レベルではなく集団レベルでの管理や制御の可能性も開けるわけで、薄気味の悪い部分もある。これらについては後の章で改めて論じられるはずである。最後の節に、

将来の産業化については、いまからよく考えておく必要があります。BMI の研究者がよくいうのは、「脳深部刺激や人工内耳のようにはいけない」ということです (p.23)

という条がある。関連技術の日本発の発見がアメリカで先に特許になり産業化され商品化されてしまった事例を引いているわけだが、アメリカばかりを意識する話ではあるまい。また、似たような事例は BMI 以外にも山ほどあるはずである。関連する研究者や企業が日本を元気にするために頑張ると決意を示すことは、まことに有難いことだが、こういう人たちの気概が空転しないようにするためには、日本発の発見や研究が産業化や商品化に結びつかないような事例の詳細な研究を行ない、必要なら、その結果に基づいて、知財の保護や管理のための法体系の整備を図ることである。血税を投じて遂行され

ている研究開発については、果実があるとしても、その部分の確保まで研究者や開発者に要求するのは間違いであろう。

第1章の次には、第7章「BMIにつながるまでの道のり」を見た。この章は非常に面白かった。ついつい現在の職務、つまり、進学校の校長という立場、を反映させて読んでしまうのだが、この章は生徒たちの姿勢のためにも非常に参考になる。実際のところ、わたくし自身の遅すぎる後悔の念 — つまり、度胸も覚悟も足りなかったという点での — とも絡むことであるが…。

先日講演を聴いた現勤務先の卒業生の若手の脳科学研究者の場合も同様であろうが、大学入学後の最初の数年というものを、基本的な勉強のために有効に使えたかどうか、それは、実は、高校の最終学年をしっかりと物事の基本とは何かについて考えながら過ごせたかどうかと密着しているのであるが、このことは、種々のブレークスルーを伴う基本的な業績を挙げることに強く関わっていることだと思う。実際、このことが学部の後期から大学院での課題発見や設定で深い選択が可能になる条件なのだろう。ただ、それだけでは不足で、好結果のためには、本人の能力や種々の幸運というか巡り合せ、さらに、多少の挫折に挫けない確信と度胸や覚悟が不可欠な条件だろうと想像する。

もとより進学先の大学がこういう環境を保障してくれることも大事なことなのだが、このためには「熾烈な受験勉強」が必要だと信じられており、その過程で、例えば、高校最終学年で将来の大成のためには不可欠な、物事の基本ということについて考えを巡らすことがおろそかになり、せっかくの才能を十分に開花させようという萌芽的な経験もないまま、世に出るといことが起きがちではあるまいか。

さて、第7章であるが、川人氏の学生時代から今日に至るまでの研究履歴の紹介である。いかに自分の感性に合う基本的な課題を選び、それに忠実に行動してきたか、そして、よい師や同僚に恵まれたこと、もとより、塚原教授の御巢鷹山遭難死のような不幸な事件もあったけれど。

Marr の Vision の話も出てくる。Marr の議論は、脳科学研究のパラダイムになっているのだろう。川人氏は、脳における諸計算の「計算理論」に関心を持たれたわけである。かくて、この章の最後の節では、

BMI 技術は応用だけでなく、システム神経科学を根本的に変革する新しい研究の道具立てになりつつあります。(p.226)

と言う。要するに、

これまでの研究方法は、仮説主導で、相関が主な道具で、データを解釈するものでした。これではごく限られた場面での状態を調べているだけだし、そもそも仮説の枠内のことしかわからないため、とてもではないが満足できない [ものです]。(p.227)

だというわけであるが、今や、

仮説から発想するのではなく、あるがままの現象を虚心坦懐に見る、すなわちデータにもとづいて、脳活動や行動のダイナミクスを予測し、脳内情報を実験的に操作して、因果律を含めて理論やモデルをする方向性 (p.227)

の流れにあって、それは BMI やその基礎技術による貢献であると言う。つまり、脳科学が自然科学になりつつあるということで、これは楽しみである。実際、先日聞いた（上述の）研究者の話も、脳内での反応部位の特定だけでなく、反応に関わる酵素の特定やその反応機構の計算化学（つまり、量子力学）に基づく（スパコンによる進行中の）長大な計算を伴う確認の作業などを伴っており、その話では BMI 的な発想は今のところ顔を出してはいないようではあるが、要するに、脳科学が plausibility を競う段階を抜け出ていることはよくわかった。

第二章から第六章までは別稿にしたい。

113. (10.09.23) 前回 (112 回) に引き続き、川人氏の「脳の情報を読み解く」を見よう。

改めて、章立てを記すと、

序章 20XX 年
1 章 BMI が開く未来
2 章 脳の働きと人工感覚器
3 章 BMI を実現させた技術
4 章 神経科学が変わる
5 章 超能力と BMI
6 章 倫理 4 原則
7 章 BMI につながるまでの道のり
あとがき

であり、このうち、2 章から 6 章までを除いては、前回は触れた。偶然とは言え、1 章と 7 章を見ると、ほぼ著者の言おうとしていたことは伝わってくるような気がする。もちろん、各章ごとに細部があり、当然、感じ取るべきことも違いが出てくるのではあるが。

2 章では、脳の概略や神経細胞の構造と働き、人工内耳、人工網膜や人工視覚、さらに、侵襲的あるいは非侵襲的な測定技術の話が述べられる。侵襲的な測定のためには、電極と神経細胞の位置関係が安定していることが基本だが、その実現がはなはだ困難であるとされる。この辺の話は、藤井直敬氏の「つながる脳」(81~83 回記事)にも言及があったが、川人氏は、挿入電極の困難さに触れた後、

軟らかくて、細くて、コイルのように巻いている電極ができないものか夢見てしまいます。その夢の電極は脳組織が動くと一緒に

動いて、相対運動は起こさず、生体防御反応も引き起こさないの
で、何十年たっても記録と刺激の能力は落ちないようなものです
(p.44)。

と踏み込む。方向性は示されているというわけであろう。

実際、脳神経科学の研究開発の核は測定技術の進歩にあるようで、侵襲的な測定の突破口が上述のような夢の電極である一方で、非侵襲的あるいは侵襲度の低い測定法の開発も急速に進んでいるようであり、この章の末尾でいくつか紹介されている。

第3章、第4章は、脳内の神経回路の信号を読み取って、その信号の意図を機械的に実現する話題と言ってよいであろう。概略的には、すでに前回に見た第7章に示されている。いずれにせよ、現在進行形の話であり、臨場感が伝わってくる。

臨場感と言えば、第5章は著しい。冒頭に「脳文化人」の話が現れ、現在メディアで流通している「脳科学」の情報が決して良質ではないことの指摘がある。このような不正確な情報流通の担い手を「脳文化人」と著者は呼び、かれらを研究履歴やH指数に基づいて選別すべきだと言っている。関連するサイトの紹介もあり、ちょっと覗いてみたが、このサイトの利用は著者の主張のように簡単ではないように思われる。確かに、例えば、脳神経科学の現状を極めて適切に紹介できるような、そういう良質な科学ジャーナリストの養成は日本の昔からの課題であり、このブログでも言及したことがある（75回記事参照）。

ところで、第5章の主要な話題は、脳神経科学の研究プロジェクト、特に、脳科学研究戦略推進プログラム（脳プロ）、の紹介である。一般的な話になるが、日本の研究の先行投資戦略政策の不備によって生じている「10年の遅れ」を、いわば新たな発想で、部分的に解消しつつあることが、いくつかの具体的な事例に基づいて示されている。また、これらが高額な商品開発に繋がる可能性があるだけに、特に、外交などの政治判断による「妨害」あるいは「支援不足」を危惧している（p.151参照）。例の「仕分け」もそういう一例になりうるのだが、根幹にあるのは、やはり、自前の良質な科学ジャーナリズムが日本で成立していないことではないだろうか。

また、「脳プロ」に限定されたことではないが、現場ならではの重要な指摘

(…) 一つの研究機構、一つの研究室だけで複数の分野の最先端研究者を抱え込むというのは、限られた研究予算で大学や公的研究機関を支えなければならない今の日本の状況では、たいへんむずかしくなっています。かといって、多くの研究室にただ研究費を分配しただけでは、誰も責任をとらずばらまきになってしまうおそれもあります。

したがって、中核拠点をきちんと定めて、強いつながりのネットワークとして複数の参画機関を組織する脳プロのようなやり方は、

先端分野の研究開発を限られた資源で行うための賢い方法の一つ
と思います (p.136)

もある。

さて、6章の「倫理4原則」であるが、重要な内容なので別記事にしたい。

114. (10.09.24) 川人氏の「脳の情報を読み解く」の6章「倫理4原則」
を見よう (113回 112回参照)。BMI技術について種々の実際の治療への応
用例を挙げた後、著者は、

神経科学者がいちばん重要だと考えることは、電気刺激を含めて
BMIの使用により神経回路が変化することです。これはBMIの
発展に伴って考えなければならない、最も重大な倫理的課題でし
ょう。脳そのものを変える可能性があるのです (p.162)

と指摘し、

脳が心の座であることは誰もが認めています。義手義足をつけて
も自分が変わるとは思えませんが、脳に新たな神経回路が付け加
わるということは脳が変わるということで、それはちがう人にな
ることだという考え方がなりたつわけです (p.163)

と言う。より技術的な説明がある:

BMIでは[脳内病巣の外科的]切除よりもっと激しい変化が脳に
起こる可能性があります。脳の中に、新しい神経回路ができた
ときにどんな影響を及ぼすのか、本当のところはよくわかりません。
たとえば、その回路がごく小さいものだとしても、ほかの神経細胞
に信号が伝わるとしたら、神経接続部であるシナプスの可塑性や
ダイナミクスを通して脳全体に影響を及ぼす可能性があります。
シナプス可塑性は、特定の神経につながる神経細胞のシナプスの
つながりがよくなったり、あるいは今までシナプスがなかった特
定の神経と神経細胞の間に新たにシナプスが作られたり、あるい
は逆にシナプスがなくなることなどによって、神経回路が変化す
ることです (pp.164-165)。

その上、

BMIを使い、脳活動の制御が可能になれば、さまざまな分野で、
まったく新しい応用が考えられそうです (p.168)。

例えば、

リアルタイムfMRIニューロフィードバックなどの脳活動の制御
法の開発が進めば、人間ならではの脳の高次の働きにも及ぶ可能

性があります。脳は手足の動きだけを制御しているわけではあり
ません。記憶、学習、複雑な思考や行動、すべてを司っているの
です。特定の社会的感情、上下関係、報酬予測、意思決定など、脳
内のさまざまな情報を取り出してきて制御できるようになれば、
自分の脳を随意的に制御できる可能性もあります (p.169)。

もちろん、よい面も多いが、しかし、わけのわからないことも起き得るであ
ろう。自分の脳を随意的に制御できる可能性は、他人の脳も制御できる可
能性とどれほど違うのか。「エンハンスメント」や「マインドリーディング」の
可能性を排除できない。倫理原則が重要なゆえんでもある。

ここに、「脳神経倫理学」といわれる分野の喫緊かつ本質的な重要性があり、
「脳プロ」において生命倫理の研究者、佐倉統氏（東京大学）が加わっている
意義と価値がある。そして、佐倉氏と著者に拠る「BMI 倫理 4 原則」が提起
された。雑誌『現代化学』の本年 6 月号に詳論されているようだが、今の勤
務先では閲読できず、確認はできていない。

さて、その 4 原則は、

1. 戦争や犯罪に BMI を利用してはならない
2. 何人も本人の意志に反して BMI 技術で心を読まれてはいけ
ない
3. 何人も本人の意志に反して BMI 技術で心を制御されてはい
けない
4. BMI 技術は、その効用が危険とコストを上回り、それを使用
者が確認するときのみ利用されるべきである

となっている。導入にあたって、アシモフの「ロボット工学 3 原則」を思い
浮かべたとある。アシモフの 3 原則は、SF 小説中に登場したが、その当時と
違い、ロボットは、人型に限定されず、また、一般的になった。無人探査機
や戦闘ロボットなどが登場する昨今、アシモフの 3 原則が実質的にはどの程
度尊重されているかは検証しておく必要があるだろう。また、必ずしも脱線
という感想ではないが、例えば、「ロボット工学概論」といった基礎的な講義
では、ロボット前史ともいうべき、カレル・チャペックの小説やアシモフの
小説なども含めた先駆的な発想について、必ず、しかも立入って、論じてお
いて欲しいと思う。

BMI 4 原則については、詳論は確認できていないと述べた。しかし、著者
は、これらはたたき台であり、議論を喚起させたいとおっしゃっている。そ
こで、不勉強なまま、いくつかの感想を述べておきたい。

まず、はっきりわかることは、この 4 原則が、現代日本の物の考え方を強
く反映していることである。したがって、このままでは十分に他の文明に属
する人たちの多くの納得を得られないかもしれない。では、他の文明とは何
か。一つはアメリカ型のもの、そして、比較的近そうなのが、欧州型のもの

である（細かく言えば切りがないかもしれない）。この意味で、4原則の英訳をもとにした、英語、できれば各欧州語も含めた文脈での議論は不可欠である。他に、現代の世界で有力な異質の文明としては、他にも、アラビア語圏や中国語圏などのものがある。当然、4原則をこれらの言語に翻訳し、それぞれの言語圏の文脈で論じておかなければならないと考える。

実際、著者は、アメリカにおけるBMI技術の開発において国防省の補助金に拠っている部分が多いことを危惧している。つまり、BMI技術が戦争に直結しかねないことを心配しているわけである。さらに、このことは、第二第三の原理とも抵触する要素を内包するわけである。また、著者は触れてはいないが、BMI技術の根幹部分が非公開化される可能性があり、かつ、非公開部分の一部が、例えば、日本における研究などを通じて公開されるような場合、妨害を受ける可能性も大きい（32回記事参照）。BMI技術に限らず、最先端技術の戦略性に伴う利害については敏感でなければならないわけである。

倫理原則が不可欠なことは明らかである。しかし、主張の「正しさ」が現代日本文明特有の文脈に依存している限り、それは国際的には通用しない。倫理原則は国際的に有効なものでなければならない。そうでない限り、われわれは自分たちの研究さえ防衛することができないことになる。実際、わたくしが倫理4原則の1にすでに覚える不安は、戦争と犯罪を同列に扱っており、そこには、戦争とは犯罪であるという暗黙の含意があることである。そして、この暗黙の含意が現代日本特有の文脈であり、英語だろうが、アラビア語だろうが、中国語だろうが、少なくとも現代のこれらの言語圏の文脈では、戦争自体は主権の本質を構成するものという理解があるはずで、戦争が犯罪という含意はないことを、現代日本人は忘れがちである。しかし、戦争が行為として犯罪性の高い要素を含むことは当然のこととして国際的に認識されている。したがって、「戦術兵器におけるBMI技術の使用は戦争犯罪である」といった類の表現は国際的に有意なものとして可能だし、また、そういう表現を選択すべきだろうと考える。BMI技術が国家主権と絡んで用いられる場合の扱いは非常に難しいと思う。

BMI技術は、脳を短時間で効果的に改変する技術である。原則的には利用は「やむを得ない場合に限る」べきであり、倫理原則の4の意味は大きい。そして、この部分が国際的に通用することは明らかである。倫理原則は、全体として、この「やむを得ない場合」以外の使用を排除することを担保するためのものであり、一方、「やむを得ない場合」を可能な限り正確に定義する努力を続けるべきであろう。

115. (10.10.09) 本来は別の記事を準備していたが、どうせ脱線ゆえ、次回回しで、昨日天神のジュンク堂で見つけた

今野浩：スプートニクの落とし子たち

理工系エリートの栄光と挫折

ISBN978-4-620-32007-6（毎日新聞社 2010）

の読書感想文に差し替えよう。今野氏の著書は27回記事で「工学部の教え」を論じ、なかんづく「索引のない本は読むな」という「教え」の重要さにわたくしは同感していると述べた。さりながら、本書には索引はない。内容的に、技術書ではなく、自伝的小説であり、見方によっては、老人の繰言であるからだろう。実際、

スプートニック・ショックで始まる理工系拡充は、その後の技術王国を生み出した。しかしその一方でわが国の人材配置は歪められ、世の中は二流官僚と三流政治家のやりたい放題になってしまった。

と嘆じて、著者は

老兵は、本来なら理工系に進むはずの人が、単にお金だけが目当てで、金融機関や商社をめざすのではないことを願うばかりである。

と、本書を括る (p.204)。

本書は、昭和34年都立日比谷高校を卒業し、そのまま東京大学教養学部理科一類に入学し、さらに、工学部応用物理学科に進学した人たちを中心に、日本の「ベスト・アンド・ブライテスト」のはずの一人の人生に焦点を当てた、自伝的部分もあるのだろうが、やや屈折した小説的読み物である。内輪にすぎるとは思わないかとは思いますが、原稿に目を通した同期生との会話 (p.180)でのやりとり

「いわば俺たちの青春小説だな。読んでいて俺たちにも青春があったんだと思ったぜ」「あったさ。あったに決まっているよ。でもみんな爺さんになっちゃったよな」

という辺りに本書の特徴は尽きるのだろう。いずれにせよ、「ベスト・アンド・ブライテスト」であっても、皆大変な苦勞をして来たということは想像が付き、一本書で具体的に書き込んでいるのは、まあ、二人だけであるが。

ところで、昭和34年度入学生の話というのに、不思議なほど、入学翌年の60年安保闘争のことが出て来ない。本書中には、わたくしが実際に知っている人たちが多数登場するが、そう言えば、かれらからも安保闘争で何をしたというような話は詳しく聞いたことがないように思う。実際に本書中に名前が出てくるが、文一から経済学部に進み（当時は文二は文学部系で、文三はなかった）、その後、結局、大蔵省に行った人もいて、わたくしも学生時代には多少の関わりがあったが、この人からも聞いたことはなかったと思う。われわれは昭和36年入学だったから、まあ、駒場は闘争の後の抜け殻のような雰囲気だと思い込んでいたが、実は、東大の学生たちは、当時でも本質的にノンポリだったのかも知れない。

この人たちのときは、理一550人だったそうだが、先輩たちからお前たちは水増しだと言われたと、やはり、本書中に名前が出てくる人から聞いたことがある。われわれのときは理一750人くらいだったと思うから、かつての

400人台の頃に比べると、二倍近くに水増しされており、今は、三倍に水増しされているわけである。ただし、少子化が進み、人口分布も変わっているから、かつての各地の帝国大学に地元の秀才を集めるという基本構造が崩壊しており、そういう意味では、地方の旧帝国大学が質的に痩せ、その分が中央部の旧帝国大学や高度成長期に力を付けてきた首都圏の私立大学を太らせるという形にはなっているのだろう。

とまれ、あの頃の日比谷は凄かったと思う。越境入学が常態化していたと言うが、実際に学区内に居住していた生徒がどのくらいいたか知らないが、当時、鎌倉から通学していた人がいたように、それだけの価値はあったように思う。高度成長期に大学を増員し、したがって、高校も進学校化していく過程で、旧制以来の名門高校が固有の文化を失ってただの進学予備校化したために、本来の差別化が希薄になり、それが結局は学校群となったのだろう。その結果生じた多数の私立進学校は、ごく一部を除いて、しかし、文化の面で、旧制以来の都立高校の代替にはならなかったのではないか。

本書に戻ると、主人公は慶応の普通部から東大理一に入学し、工学部応用物理学科を経て富士製鉄に入社したという人であり、その波乱に満ちた人生を描き出そうというわけである。わたくしより僅か二年年長の人たちの話であり、わたくし自身の知人も多数登場するだけに、読み方が甘くなるころはある。プロの小説書きなら、こうは書くまいというところは、もちろん、随所にある。

そして、著者は恐らく意識してはいないと思うけれど、日本の「ベスト・アンド・ブライテスト」のある種の視野の狭さもよくわかる。それはそれとして、本書は大人の世界を覗きたがっている田舎の「秀才」少年たちにはぜひ読ませたいと思う。

付記：もしやと思い、主人公の名前でぐぐってみたら、本書中で言及のある論文がヒットした。本書で、仮名というのは、ご家族の名前なのか。

付記：今井氏は、スプートニクショックの結果、理工系ブームになり、結果的に我が国の人材配置がゆがめられたことを慨嘆しておられる。しかし、このような強迫観念による「優秀な人材」の特定分野への集中は、程度問題を別にすれば恐らく他国も同様であろうとは言え、日本では繰り返し起きているなどと思う。しかも、地方差、時間差があるようである。

実は、先日、ある事情で近くの自衛隊駐屯地を訪問した。そこには、かつての勤務先の分校が敗戦後の一時期あつたことがあり、その記念石碑が残っているが、隣接の都市計画道路の関係で移設ないし撤去の話もあるというので、分校の頃の事情をご存じの大先輩とご一緒して、様子を見に行つたのである。大先輩は旧制中学校から新制高校に移り替る時期に中等教育を終えておられ、したがって、軍の学校は無縁であつたが、駐屯地内の資料館で展示を眺めながら、かつて学会にいくと数年年長の方々は海兵の最後くらいの人たちが多かったなあ、あの頃は（戦争末期でさえも）中学の最優秀の連中は

海兵に行ったんですね、と言っていた。戦争末期は軍船もろくに残っていないし、まともな教育が残っていたのは軍の学校だけだったかとも思われる面もあるけれど、優秀だから軍人という雰囲気は特に地方には強くあったのであろう。だが、優秀なはずの軍人が国家社会や国民生活を壊滅させたことも否定のしようのないことであり、社会システムや文明の性格上保険の掛け方が不足していたという面もあったろうと考えると、人材配置の偏りの恐ろしさが日本の場合一旦証明されてしまっているのに、そのことの認識が不足したままで過ごしてきたな、とつくづく思う。

ただ、戦前の軍が優秀生徒を吸引していたのは地方に強い現象であって、都会では旧制高校・帝国大学のコースの方が標準であったと聞くから、生活水準も関わっていたのかも知れない。ただし、海兵や陸士の志願者の生活水準や文化水準が決して低かったわけでもないし、西欧化された出身階層の人たちもいたのだから、余り深入りした議論ではない。

問題は、実は、戦前でも、また、高度成長期でもなく、現在の様子である。いわゆる進学校に勤務していることもあり、しかも優秀とされる生徒が集まっているだけに、進路の偏りは絶対に起こさせたくないのだが、地方のせいか、医師志望者が実に多い。それも、医師家庭の出身者ではない子たちにてである。確かに、医療は全人格的な参加が要求されて、満足できる仕事であり、決して綺麗ごとではないだけに、わが子が召命感を覚えて医師になりたいと言ったら、親がどんなに反対しても翻意させることはできないものだ、かつて友人から聞いたことはある。

しかし、そんな人がたくさんいるはずはないし、召命感も勘違いだったということはあるであろう。万一、わが子は「優秀」だからとして医師への道を勧め、子供も早くからそのつもりになってしまっていると、そして、それが勤務先の学校だけの風潮ではないとすると、国全体としては何かとんでもないことになりそうな気がする。医師は軍人と違って集団としての権力や武力は持っていないから、安全だとは言えない。医師免許のあるフリーターだらけになるという程度なら、まだいい。しかし、中山敬一氏ではないが、ほとんどの医師は高度化されたルーティンワーカーでなければならず、ところが、医師免許は国家資格ゆえ、当然、海外ではそのままでは通用しないから、「優秀層」がルーティンワーカー化し、国を導くべき「クリエイター」層の喪失や質の低下は、医師たちの生活基盤も壊してしまうのである。

116. (10.10.12) これは115回で跳ばした記事ではないが、当ブログの本筋に関わる、しかし、困惑すべき経験をしたばかりなので、一言（したがって、115回で次回とした記事は先送りとする次第）。

本日は週日ながら、勤務先の秋休みということで余裕があり、久しぶりに自転車で市の中心部の街に出た。週末にさるイベントが開かれるという会場を、この機会に探してみようと思い、住居表示に従って近傍と思われる辺りに行くことにした。

住居表示に関しては、以前の勤務先時代に、学生と一緒に検討したことがあり、それは当に我々の空間認識の方式と関わっているはずのことなのだが、最近、さらにややこしくなっていることもわかった。[参考：街区丁目グラフ (Radix 39 (2004))].

さて、住居表示では、『甲乙丙 x 丁目 p 番 q 号』という形をとり、「甲乙丙 x 丁目」が町名であり、「p 番 q 号」がその町内での住居表示となる。上掲の論考は、「甲乙丙 x 丁目」の x の指定の仕方に特に規則性はないらしいことを、グラフ理論を用いて確かめたものだが、「p 番 q 号」における数 p, q については、当時調べた行政資料によると指定法に原則があるとされている（ただし、p を振るための基礎のグラフ構造も一通りではないはずなので多少の恣意性は避けられないだろう。x の指定法ほどの恣意性はないとしても、十分に整理されているとは言えないはずである）。

ただし、「x 丁目」自体は大きな塊なので、わりと大きな道路ごとに隔てられたブロックではある。しかし、たまたま見つけた「y 丁目」($y \neq x$)から「x 丁目」にたどり着くのはそう容易ではないことは、経験上、誰もが知っているだろう。さらに、統一された規則性があると言われても、その規則が宣伝普及しているわけでもなし、「(p-1) 番」を見つけても「p 番」がすぐに見つかるというものでもない。たまたま自転車で移動中だったので、10分程度の彷徨で済んだが、徒歩だとそうは行くまい。いずれにせよ、住居表示は現地の地理に暗い人にとっては即効性のあるものではないようである。とまれ、この結果、この辺りが一二年前とは様変わりして、路地裏に色とりどりの小さな店舗が並ぶようになっていたことがわかった。

ところで、「(p-1) 番」を偶然見つける前に工事中の箇所を通った。そこに掲げられていた工事標識には、「甲乙丙 x 丁目 r 番地」と記してあり、もちろん、これは「住居表示」ではなく、本来の「地番」なのであろう。空き地の工事中であったから合理的と言えれば合理的だが、行政上は、総務省（系統）の管轄か法務省（系統）のものかで生じた相違であるのだろうが、何と云うべきか。

さて、最近さらにややこしくなったというのは、道路に「愛称」を付すということが行われだし、くだんの「甲乙丙 x 丁目」近辺も、「x 丁目」が面する東西に走る比較的大きな道路に（例えば）「優勝道路」という名前が付けられ、それを表示する（大き目の）シールが要所要所に貼られるようになった。その上、ここの原則が不明で困るのだが、どこかにある東の端を起点に、何メートルかの間隔で、この道路の南側には「優勝道路南 2 s (偶数)」、北側には「優勝道路北 2 s+1 (奇数)」と印刷された（小さめの）シールが貼ってあった。しかし、このような番号類には、公的な裏づけはないのではないか。また、このような番号は何を表しているのだろうか。起点からの距離なのだろうか。このような番号に基づいての法的経済的な取引は成り立ち得ないであろう。こういうことを思いつき、実行に移した（半官半民的団体に属

す) 人たちの気持ちは想像がつかないわけではないが、このままでは混乱を倍加するだけではないだろうか。西欧の道路では、道路の一方の側に奇数番、他方に偶数番が振られているが、あれは「戸口」の順番ではないだろうか。さればこそ、ブロック全体がビルに変わったりすると、以前の戸口番号が合体して、そこは 10-20, A Street となってしまうのではないか(天神の地下街では「間口」の広さに拠らずに店舗ごとの番号に対応した偶奇原則が適用されているが、店舗の交替で「間口」が変わることがあり、欠番が生じているようである)。今の場合のように、電柱や立ち木に「優勝道路南 100」などと貼られても何らかの意味があると気付く方が稀ではないだろうか。

実際、「優勝道路」から小道を「甲乙丙 x 丁目 p 番 q 号」を尋ねて一步入ってみると、小道の一つ一つにも、「愛称」が付けられていて、その名のシールが角に貼ってあった。どうも「町興しの」発想で、こういうややこしいことが行われているようだが、利便性が上がったようでもない。原則が明白でなく、かつ、それが私的なものであり、その土地の空間認識の方式と整合していないことが混乱の一番の原因だろう。京都の市街とは違うのである。

ともかく、目的の「甲乙丙 x 丁目 p 番 q 号」は見つかったが、今回のアクセスのためには、周辺を若干探索し、目印となる曲がり角を確認しなければならなかった。ちなみに、この確認では、x, p, q に関する情報は何もなかった。鳥瞰すれば明らかであっても、狭い路地をうろうろするだけでは位置の確認は難しいものである。

付記：土地(地面・地籍)の整理の方式は、一般的に対象をどう認識し整理するかということが背景にあると考えている。自治省一総務省が、街区、住居番号に従った住居表示と併せて町名変更を行ったものの、他方、国土交通省は地籍に与えている番地は維持しているのは、本来は、土地の用途まで籠めた全面的な整理が前提になるべきところを、省庁間で協議ができたところについての整理が行われれば十分であると「考えられている」からであろう。道路に愛称を付すのは、行政的には、文字通り、ご愛嬌以外のものではないと「されている」に違いない。このブログの本来の趣旨からは、まさに、「考えられている」あるいは「されている」のはなぜかが問題なのである。接触感覚的か視覚的かと分類するならば、あるいは、幾何としては、metrical か projective かと問うならば、手近なものにしか関心が注げないと言う意味で、少なくとも日本の行政文化は、接触感覚的なものに近いとは言えるようである。しかし、Ivins に従った結果、

Wao! Way of the Japanese administration turns out akin to
the classic Greek culture ! So in the very depth, the notorious
Japanese system is very western !!

と叫ぶわけにも行くまい。なぜなら、行政に限らず、対象に対して接触感覚的だけでなく、対象に関心を持つべき集団までもが接触感覚的に選択されて

いるようであり、そこが、日本語の用法では「顔見知り」の範囲とすると、そして、日本人は握手をしないから、人間関係は接触感覚的ではなく視覚的であるようにも解されるので不思議と言えれば不思議であろう。他方、肝心の対象については、対象自身に切り込むのではなく、ある時点で獲得された対象についての「解釈」で、対象それ自体を代行させてしまい、「解釈」の更新は習慣化されていないようであって、この点が西欧文明とは異なるようである。そして、

われわれは、なぜ、そうなのか、なぜ、それで賄えると思ひこんできたのか、

その辺が知りたいところなのである。

付記2：平成23年1月5日付けの「日本経済新聞」朝刊文化欄に、宮崎県延岡市北方町の高見和嗣郎氏の『町に十二支 時計回りに地域区分、日本唯一の「まるごと」使用』という記事がある。これは、街区の設定より一段上位の分類の話であるが、大変興味深い内容のものである（平成23年1月5日、ただし、記事はネット版の日経で確認した）。

付記3：産経ネット版の黒田勝弘記者の「ソウルからヨボセヨ」（平成23年6月11日付け）に興味深い記事がある。韓国が住所表示を従前の（日本型の？）街区指定から道路指定に改めたというのである。韓国が昔からの（つまり、大韓帝国以来の）伝統に回帰したということのように書いてあったが、当時の土地や住居所有の法的管理の形態はどうだったのだろうか。もともと日本の方式が世界的には極めて例外的なのだと思うが、付記4：平成23年11月24日付の西日本新聞1面コラム「春秋」に、近くアンカラ市（トルコ共和国首都）の一街路に日本人名が付されるという記事が載っていた。先日のトルコ東部の地震で亡くなった難民支援活動家の宮崎淳氏の功績を称えて、アンカラ市長が提案されたそうである。いずれ、アンカラ市議会の議決を経て、しかるべき記念式典が開かれるのだろう。こうして、宮崎淳氏は、トルコの歴史に関わった人として、いわば神格化された人物群に加わったわけである。かつての日本では、共同体に貢献した（あるいは崇りをなした）と考えられた人は「神」として祀られ、特に、功績著しい（あるいは崇りが大）とされた人は祭神として神社が建てられた。神社は神域を伴い、基本的に、結界の外の世界であり、この点で、道路や広場のように、共同体集落の物理的構造を決定しているものとは違う。道路（やその結節点の広場）が先か、区画や街区が先か、といった関心が、歴史・文化への意識に直結していると考えられるゆえんである。ところで、これは、この「春秋」の記事を書かれた記者には、想像もつかない感想かも知れないが、それでは困る。記事冒頭は

外国を旅行すると、人の名前を付けた「通り」に時々出会う

と、あたかも外国旅行の風物詩のように始まる。しかし、片側が、偶数、あるいは、奇数に統一された戸口番号と言い、そこに垣間見える日本の有様との相違を、なぜだ、どうしてか、と思って、初めて、他の文化との関わり方に厚みが出てくるのではないだろうか。宮崎氏がどういう意識でトルコ東部の難民支援活動に携わって来られたかは今となってはわからない。しかし、文字通り、名を残したということの意味が、彼我でどう異なっているのかは考えておく価値はあるだろう。

117. (10.10.24) 先送りした記事である。情けない話だが、先月、勤務先の定期テストでカンニングが立て続けに発見され、しかるべき処分が必要になった。

そういうこともあって、そもそもカンニングとはどういう行為であるのか、なぜ不正行為として処罰の対象になるのか、そういうことを考えてみたい。

わたくしは調査したことがないから、文明の種類によって、この類の行為に差があるかどうか的確なところは知らない。それにもかかわらず、どうも関係がありそうだと示唆するような話は何回か耳にした。ただ、カンニング行為を認識しようとすることに価値を認めるかどうかとも絡むので、事態はそう単純ではない。そういうことを承知の上で、文明と「カンニング」との関わりを論じてみたい。しかし、文明中立的な「カンニング」の定義がそもそも可能かどうかは不明であり、したがって、これからの議論の当否については何も保証はできない。

そこで、まず現象としてのカンニング行為を念頭に置いて出来る限り抽象的に考えてみよう。カンニング行為の前提は「検定」という作業である。「検定」の意味もあわせて確認しておこう。

[検定の定義] 検定の対象は、資質や能力に関連したもの、より端的には、ある条件で管理された学力などの能力である。検定の趣旨は、被検者にこれら検定対象の力を発揮するのに相応しい標準的な環境を提供して、その発揮の程度を見ることである。検定は、技術的な理由で、検定作業に要する時間は制限され、さらに、力の発揮の程度が数値化に馴染む形に設計されることが多い。すなわち、検定作業の結果は数値化されて出力される。そして、一般的には、その数値に基づいて、被検者間の相対的な順位付けが結果として得られ、検定は終了する。検定の適切度は、こうして得られる数値化に基づく順序付けと被検者の力との対応関係の精度の高さで評価される。

[カンニング行為の定義] カンニング行為とは、検定の最終的な結果である順位付けに検定作業の標準手続きを意図的に逸脱して影響を及ぼし、上位の順位の獲得を目指すものである。こうして得られる結果は所期の検定作業で得られるであろう検定結果とはかけ離れたものであるのが通例であり、特に、検定すべき資質や能力に関して適切な情報を全く含まないものである。カンニング行為は、検定結果の信頼性をゆがめてしまい、しかも、そのゆがみは意

図的に引き起こされたという意味で、検定結果に不可避免的に含まれるであろう誤差とは性質が異なるものである。以上をカンニング行為の定義としよう。

さて、検定が行われるのは必要だからである。その際、検定の目的は、能力や資質に基づく力を状況に応じて適切に評価することであるが、基本は、これらの力の実質の判定である。評価結果を数値化し序列化するのは、いわば、応用上あるいは便宜上の要請であって、数値化した結果自体に単独での意味があるわけではない。したがって、カンニング行為の結果には何も価値あるものが含まれないはずである。能力や資質に基づく力に受検者が自分なりの確信を持ちうる状態ならば、検定にその確認を求めようとするのが受検者の関心であるはずであり、したがって、そのような場合には、カンニング行為という発想さえもが想定されえないであろう。つまり、当人の知識なり技能なりの実質的な水準と質の検証が主眼であって、態様に依存する検定から結果される点数は副次的な意味しかないはずなのである。

このように考えると、カンニング行為が行われてしまうのは、受検者が検定の意義を能力や資質の評価と捉えずに、結果である相対的順位の高さや数値の大きさに重点を置いている場合である。それはどういうことなのか。

検定として、例えば、ある種の公的資格に関する資格試験の場合を考えてみよう。この資格に基づく業務・権限を行使するためには、しかるべき専門知識と訓練と経験が要求されるとすれば、資格試験は、これらの知識、訓練、経験が資格に相応しい水準に達していることを確認する目的で実施されるわけである。この確認は一定の数値基準の形に変換されて行われるであろう。そして、カンニング行為は、この数値基準を満たすことだけを目的として、本来の資格に要求される水準とは無関係に、あるいは、むしろ、その水準に到達していないことを予測しているからこそ、実行される。かくて、資格試験が本来目的として検定したい知識、訓練、経験の水準には達していないが、数値的には資格試験が要求している水準を満たしているという検定結果が得られるということが起き得ることになる。もちろん、このような場合、カンニング行為の結果は深刻である。すなわち、公的な資格に基づく業務・権限を行使するために相応しい能力を備えていないにも関わらず、能力を備えているかのような検定結果に基づき、そのような業務・権限を行使する資格を得た場合、不適切な権限行使は当然のように生ずることになる。すなわち、このようなカンニング行為の結果として、甚大な社会的不利益の発生が予想される。要するに、このようなカンニング行為は明白に犯罪に分類され、検定試験中に未摘発のものであっても、カンニング行為の証拠が確認された段階で、資格剥奪を含め、刑事的にも処罰されなければならないであろう。

なお、資格試験のうちには、運転免許試験のように、免許取得者が当然承知しておくべき知識をフィルターとして必ず出題することもある。これはカンニング行為とは違うが、試験設計上の要件でもあろう。わたくしの記憶では、アメリカ中西部での運転免許試験で、凍り道でのハンドルを滑っている方

向に切るべきことと濃霧中ではフォグランプではなくヘッドライトを使用すべきであることを確認する問いがどの設問グループにもあった。実際は、グループごとの設問はもともとすべて公開されており、検定段階でいずれかの設問グループが指定されるわけではあったから、基準点が獲得できない方がどうかしているとは言え、どのグループにも含まれている設問は、この地域で車を運転するためには絶対不可欠な知識というわけである。

他方、入学試験のように、検定試験の合格数が予め想定されている場合のカンニング行為がある。この場合の不利益者は、カンニング行為で不当に検定水準を満足した「受験者」によって排除された、本来の「合格者」である。もちろん、このようなカンニング行為は適切ではないが、内包している意味は公的資格の場合とは若干異なろう。本来の意味での期待されている結果（つまり、無事に卒業すること）が出るまでに時間が掛かるといふ事情もあるであろうし、また、試験そのものが誤差を相当に含んでいる可能性も否定できない。さらに、合格者も多少の水増しをもって選別されている場合も多い。このような場合のカンニング行為は、もとより肯定されるべきものではないが、カンニング行為の犯罪性の多寡というべきものは、入学試験の設計やカンニング行為の具体的な技術的詳細にも依存するであろう。とは言え、入学試験の場合には、資格試験と違って、合格定員の制限が予め想定されており、カンニング行為によって数値的に表現された成績結果の順位が混乱すれば、定員枠から排除されたカンニング行為のなかった受験者は被害者である。だが、それが無条件に社会的損失の大きさにつながるかどうかは検定自体の適切性など別の要素も考慮すべきかも知れないというのである。

カンニング行為は摘発されてしまえば、事後処理はほぼ機械的であろうが、問題は摘発されなかったカンニング行為であって、それらがどの程度であるかの評価が不可欠であろう。入学試験に限ったことではないが、検定試験の実施主体にとっては、完全な形での所期の成果の達成の阻害になる以上、カンニング行為の介在の可能性は、出題の工夫や実施体制の整備を通じて、可能な限り排除しなければならない。入学試験の場合には、不摘発のカンニング行為の可能性を見込んだ上で、なお試験が成り立つように、試験の管理設計を行っておくことが大事である。

最後に、冒頭に言及した学校内の試験におけるカンニング行為の問題がある。社会的影響は、この段階では決して大きくないが、教育の現場における行為であり、行為者の学習観や学習習慣の不適切さの反映であると考えられる。不適切な指導や放置によってはカンニング行為が習慣化する可能性が高く、後々非常に深刻な形で、本人及び社会に被害が及ぶことがあってもおかしくない。それでは、カンニング行為を摘発した場合、どのような指導を行うべきか。

冒頭でカンニングと文明の関わりがあるのではないかと述べた。逸話的なことで、検証や研究文献の有無は不明だが、西欧圏の某国の大学ではかつて

は定期試験の際に監督は不要であったというが、東アジアの某国から大量の留学生を受け入れるようになってから、少なくともこれら留学生が加わる試験では監督は置かなくても隣席との間に目隠しを設けるようになったということを知ったことがある。この話を東アジア某国の学生の道徳性の水準の話と捉えると本筋を誤ってしまうだろう。つまり、これは善悪の話ではなく、まさに、文明の性格の話だと考えるべきだろう。背景にある事情は、もともとの某国の学生たちと東アジア某国からの留学生たちが定期試験に寄せている関心の方向性が違うということだと思われる。しかし、カンニング行為は検定の価値を失わせるものである以上、そして、定期試験という形で学力検定を行う以上、隣席との間に目隠しを設けるといふ某国の対策は限界はあるとしても基本において極めて合理的なものと考えられる。

最近のわれわれの社会も東アジア某国と距離的にも非常に近い姿勢で定期試験類を眺め始めているようにも思われる。だが、これは必ずしも日本の伝統的な姿勢ではなかったのではないか。旧制の中学校では定期試験に監督が付かなかったとも聞く。もとより、カンニング行為が存在しなかったわけではなく、摘発することに価値を認めなかったのであろうが、つい最近まで随所にそういう文化が残っていたはずである。もし変質したとしたら、なぜか。いつからか。この点に切り込まない限り、カンニング行為の萌芽を少しも減らすことはできないのではないかとわたくしは考える。

付記：長々と抽象的な言辞を弄したが、先月の場合は、気候要件も無視できまい。どうも今年は猛暑のせいか生徒たちの気力の低下が見られ、ひいては規範意識の低下があったようである。昨年は見られなかったカンニング行為の発生の原因を直接的に猛暑に求めるのは、現在のところ検証の方法を欠いており、適当ではないだろうが、気候的要因という可能性も排除はできないだろう。

付記2：唐突であるが、さらに付言。「入学試験」などについて、従来、わたくしは、これは出題や採点に伴って深刻な技術的限界があり、したがって、それによる誤差を適切に制御することが不可欠であると考えてきた — もとより、現実に行われている日本の入学試験を巡る思想というか信仰は、このような誤差の存在さえ認めないものであることは承知しており、むしろ拙見の趣旨はそのような「思い込み」が不自然でおかしいということである（「入学試験学」）。ところで、「カンニング」ということを念頭に置くと、入学試験に際してのカンニング行為の実行可能性の難易は本質的な問題ではなく、「入学試験対応」ということの醸し出す姿勢そのものが入学試験の本来目的と矛盾した要素を含んでいることに思い当たる。例えば、大学の入学試験の場合、出題範囲や出題の仕方について、一般の高校生が対処できるように、学習指導要領準拠という規制がある。入学試験が基本的にこういう精神で構想されるのは当然だろうが、大学は高校とは違う以上高校向けの学習指導要領の水準で自足するような精神を入学者に期待しているわけではない。ところが、「高次

の「カンニング精神」というものがあり、それに毒されてしまうと、(本来の目的を二の次にして) 当座の用務に最適化してしまう。つまり、入学試験の場合だと、入学後のことは想定外のまま、とにかく合格するというに最適化するということが起こりえる。この方が常態に近いかも知れない。もちろん、理由はゴマンと探せるだろうし、また、実際いくらでも耳にすることができる。とまれ、一番怖るべきことは、「これは試験に出ないから勉強しなくていいよ」、あるいは、「これは最近の試験には出ないからもう要らない」といった決めつけを受験勉強時に刷り込まれてしまうことである。すなわち、受験勉強が「試験合格」という結果に価値を集中させることを誘導しており、これが「カンニング行為」を引き起こす素地になる。入学試験で出題範囲や出題方法を限定することは已むを得ないことではあるが、「理想的な入学試験」では、学習内容や学習姿勢の質こそが問われなければならないことであり、また、中等教育の重点も静的な学習ではなく動的に知見の拡大を常に心掛ける学習姿勢の涵養という、「カンニング行為」がもともと無意味なものでなければならぬ。

付記3：勤務先校の同窓会東京支部総会に出席し、さらに、同窓会の梯子で、出身学科の同窓会懇親会にも顔を出した。同窓会長は、さる大学理学部の教授である。乾杯の音頭に際し、近著の紹介をされた。その中には、「カンニングの原理」「合コンの原理」「芸能プロダクションの原理」などが登場するという。厳格な数学理論を俗っぽく解釈することができて、その俗っぽい近似がこれらの名称の原理である。詳細は先生の近著をご覧いただくしかないが、困った副作用もあったという。「カンニングの原理」は数学上の基本的な定理、すなわち、行列式において行または列が一次従属であれば、特に、隣接する二行または二列が同じであれば(つまり、隣を丸写しすると)、その値は0になることを極めて印象的に述べたものであるが、これは学生によく定着して、他の科目の試験などで、行列式の計算で、「カンニングにより0である」という解答が頻出して、事情を知らない先生たちが困惑したのだそうである。学生たちは、カンニングは人名由来だと思ったのかも知れないが、『「カンニングの原理」により』としておけば、もっとよかったのか、あるいは「****のカンニング原理によれば」とすればよかったのか何とも言えない(****には、前述の同窓会長の名前が入る)。これは非常にレベルの高い笑い話である。しかし、付記2で言及したような「暗黙裡の高次のカンニング精神」こそ、その愚かしさを誰にもわかるように印象的な説明と例示が必要なのだが…。

付記4：平成23年度入学試験(京都大学個別学力試験)において携帯を利用してのカンニングがあったというので、巷は騒いでいる。「カンニング」という語でネット検索を試みたが、本記事はヒットしなかった 嬉しいような寂しいような…。ところで、

かどや ひでのり：「学習の動機づけ」からみたカンニング
日本高専学会誌, 15(3), pp.97-102 (2010)

という記事を見つけた。論文自体もダウンロードできる。学校内のカンニング行為について、その行為には価値がないにもかかわらず、なぜ止まないのかということを論じている（平成 23 年 3 月 5 日）。

付記 5：関係のあるようなないような内容であるが、The Chronicle of Higher Education の 2011 年 11 月 3 日付けの記事に

The China Conundrum

American colleges find the Chinese-Student boom a tricky fit

というのがあった。アメリカのかなりの大学が資金確保に背を腹に替えられなくなっている事情と中国の青年たちの希求と、そして、仲介業者と、さらに、勉強に対する姿勢とが絡んだ問題点を述べている長文の報告である（平成 23 年 11 月 4 日）。

付記 6：部屋を整理していたら、「學士會会報」888 号というのが出てきた。平川祐弘氏の「一石二鳥の教養教育は可能か」という記事があった（祐は、本来はネでなく示を偏とする）。文末に、東大教養学部になってからカンニングが無視できない現象として現れたこと、さりながら、その横行が比較的近年の精神的頹廃と並行していたと推測されることが述べられている。かつて（紛争後であったけれど）東大工学部を会場にして学会年会が開かれたとき、教室の机が古いものであったにもかかわらず美しく保たれていたことに（つまり、当時の私大の教室では常態であったような机がいたずら書きや類似の切り込みで痛み切っていたのと違っていたので）何というか、流石東大工学部、要するに、かれらが日本を支えているという矜持の一端を見たように思い、理学部系の我々は感心したことがある。しかし、平川先生がご指摘の異様な現象が一方で駒場では横行していたとすると、評価は難しい（平成 24 年 1 月 11 日）。

付記 7：アメリカ合衆国東部の名門大学で 5 月に行われた期末試験で大量の不正が見つかったという報道があった。日本の国内紙でも報じられたが、もちろん、NYT にも記事がある。現在、調査中だそうで、結果待ちではある。結果によっては、深刻なことになるようで、関係学生について、

“They’re threatening people’s futures,” said a student who graduated in May. “Having my degree revoked now would mean I lose my job.”

という卒業生もいるようだ。日本だと有耶無耶になりかねないことではあるが、予想される処分は、

They face the possibility of a one-year suspension from Harvard or revocation of their diplomas if they have already graduated, and some said that they will sue the university if any serious punishment is meted out.

と上記記事にある（平成 24 年 9 月 2 日）。

118. (10.11.27) 気付けば 11 月も末、来月の放送大学文京センターにおける「対面授業」の準備もあって時間が足りない。昨年は夏に行かない、出席者を叱責者に転じさせるという始末であった。思うような準備ができなかったことも原因の一つだが、まことに申し訳のないことであった。もう一因は当ブログの趣旨に関わることであり、後ほど論じておきたい。

今年はどうか。いろいろな機会に断片的に話したり書いたりしたことをまとめればよさそうだし、昨年ファイルもある。だが、筋を通すことが大切なので、そこには依然として「思想」と「調査」と「考察」が必要である。もちろん、結果的にしかるべき量にならなければならないのだが、材料は十二割くらい持ち、授業シナリオは事前に八割方完成していて、二割くらいを出席者の顔を見ながら調整するということができれば一番よい。で、何が足りないのかというと、基本的に「調査」と「考察」である。「思想」は、まさに、当ブログの趣旨に密着しているのだが、その検証をするための「調査」は、実は、「思想」の性格に拠ってなのだが、文献の孫引きや曾孫引きでは不足があることをつくづく感じる。では可能な限り一次資料に近いものが利用できるかということ、そもそもそういう訓練を受けてもいないし自らに課しても来なかった。したがって、他人の言説のつまみ食いをしながら自説のようなものを組み立てようというのだから、そのようにして多少とも出来上がったものがあつたところで、第三者の目にはなかなか納得の行くものには見えてこないだろうということになる。その上、孫引きや曾孫引きは、先人の誤りを増幅しかねない危険も大きいので、何かそういう危険性を凌駕する直観が不可欠なのだが、さて…。

多少具体的なことを述べよう。このブログは、Ivins の書物 *Art & Geometry* に示唆されて、われわれの時空認識を論じたいとして始めた。その Ivins は、デューラーの版画に見られた遠近法の狂いが気になり、それをきっかけに、古代ギリシアから近代西欧世界に至るまでの空間認識の変転を、主に美術との関わりを通じて、「アマチュアなればこそその観点」から分析し、その一端が上掲の書物になった（第 1 回～第 15 回記事くらいまで。後の回からは彷徨中。なお、プロフィールも参照）。わたくし自身は、随分昔の Petit Palais でのデューラー版画展を偶然覗いたことから、Ivins の書物を思い出したのであつた。ただし、遠近法云々ということではない。展示室の外側の売店にあつた *Underweysung der messung* の仏訳書と思われる黒表紙の書物に一瞬興味を覚え、デューラーは画家なのに幾何学書を著していると思ったのである（この書物は手を出さなかったもので、特定できない。時期的に Jeanne Peiffer の同名の書物 [刊行 novembre, 1995] のはずはない。表紙の色もページ数も違う）。デューラーの *Underweysung* は邦訳があり、それには数学史の観点の解説も付されている（下村耕史：デューラー「測定法教則」、中央公論美術出版。数学史解説（三浦伸夫））。なお、Petit Palais の版画展は、確か展示室は細長

い一室で壁面が大きな展示ケースになっていてガラスの向こう側に多数の版画が並べてあった。人が多かったのと展示ケース内だけが辛うじて照明されているというような薄暗さが印象に残っているというような次第で、展示自体、今、西洋美術館で開かれているもののように親切ではなかった。

ところで、この *Underweysung* は、ガリレオ・ガリレイやケプラーにも無縁ではなかったし、さらに、マテオ・リッチを経由して、清朝初期には北京にまで（一応）及んでいたらしいという。デューラーは微分積分学の準備にまあ関わったとも言えるようではある。そして、微分積分学の成立、特に、ニュートンの場合、自然認識の構造と微分積分学との関係が重要であろうと思うに至ってはいる。

なお、その後、さらに、時代が下がり、また、間を飛ばすと、フーリエの仕事に至り、その延長上にケルヴィン卿の、例えば、積分器の提案があり、その系譜上に、ヴァンネバル・ブッシュの微分解析機がある（電算機によって駆逐されてしまったが）。フーリエの自然認識は、ニュートンとは質的に異なっていると思われるが、それはうまく説明できるものなのだろうか。

このようなことを対面授業で話題にしたいと考え、昨年も試みたが、今年も再度試みようというわけである。どう筋を通すべきかが課題であるが、それを「職人の知恵」で括ってみようと、提出済みの授業案では、書いた。だが、「職人」も「知恵」も多義語であり、「職人の知恵」を限定定義しないと話が始まらない。叱責は覚悟の上だが、できれば納得の方がよい。むずかしいのは、話を飾るためだけではないのだが、一応、美術作品や工芸品などへの言及が不可欠で、他方、数学を、計算手段としてではなく、思想の展開という形で把握した経験があることが望ましい。その上、話の必要上、話題は広範囲に及び、さらに、標準的な数学観とは言えないような数学理解を提案することも起きうる。決して、受講者を混乱させたいと考えているわけではないのだが、ことがら自体は古典的なものだけに固定観念は普及しており、標準とは異なるかもしれない解釈や、話題が広すぎて直観が効かない部分が多いと、それらは苛立ちを招きやすいものであるということも知らないわけではない。

119. (10.11.30) 週末に勤務先の系列の大学で外交シミュレーション・ゲーム（宮家外交ゲーム）の授業が行われる。昨年は、少しだけ覗かせてもらったが、前提となるシナリオは時節柄民主党政権の外交政策をモデルにして作成されていた。

関係すると思われる要素をチーム化して学生たちを割り当て、当初シナリオから出発して、以後の変化は、各チームがそれぞれに合理的と判断する行動とそれらの相互干渉に基づく修正などに基づいて展開され、一定のゲーム上の時間経過の後の状態を求めようというものである。昨年は、指導の教授たちと小一時間おしゃべりをしただけで退散し、事後、結果を耳にした。予測されていたのは、概ね一二年後の日本を巡る内外の情勢であったが、幸か

不幸か（文字通りどちらとも判断できないのだが）、予測通りの展開にはなっていない。恐らく、大きな理由は、中国の挙動がきちんと読みきれなかったことにあるのだろう。とは言え、この外交シミュレーション・ゲームのチーム編成の中には、中国人留学生を主体としたチームもあり、日本人学生だけだったら恐らくこうはならなかったと思われる予測に至ったとも言える。

今年のシナリオは当初の計画では半島情勢と聞いていたが、最終的には、イラン問題になった。シナリオは現実の世界を全く無視はしていないが、それぞれのチームが選択できる行動範囲がそれなりに限定されるようにモデル化がされている。半島情勢は現在熱くなってしまうっており、遠隔地の事象のように見えるイラン問題を選んだのは正しい姿勢だったろう。ただ、ここもプレイヤーは数多く、域内というか欧米中近東に限定されない。重要なプレイヤーとして、新登場の域外の大国があり、さらに、北朝鮮も絡んでいる。残念ながら、ことしの外交ゲームは、中学生の修学旅行の引率出張中で覗きに行くことが出来ない。

実は、勤務先の社会科教員や高校生にもこういうイベントがあると呼びかけておいた。しかし、現在までのところ、わたくしのところには反応は届いていない。確かに、外交ゲームの判断の当否には時事問題に強い関心があるかないかは決定的に違いない。一方、高校生に複数の言語の新聞を日頃から読んでおくようにというのは無理があるだろう。しかし、ネット上では実に多数の言語が行き交っており、中でも、英語情報が多い。英語は一応学習中なのだから、日本語の新聞だけでなく英語の新聞抄録を眺めているだけで、並以上の感覚は身に付くはずである。そして、外交ゲームに（オブザーバー）参加をすれば、海外の同世代のごく普通の青少年なら持ち合わせているに違いない直感的な対外感覚が育ち始めるのである。もちろん、ネット上の相当部分不正確な英語は避けろという指導はあるかもしれないし、さらに言えば、英語情報だけではバイアスが掛かることも間違いはないが、後々、一線で仕事をする場合、英語以外の言語、特に、日本周辺ならば、中、韓、露、さらにタイ語やインドネシア語など、習熟の程度には差を付けざるを得ないにせよ、そういう言語が日本語英語に加えて受発信できれば、圧倒的に有利になるわけである。

そういう意味で、社会科の先生からも生徒たちからも反応が届いていないのは大変残念である。先生の方は週末でも採点やら何やらで忙しいのかも知れない。生徒はどうして来ないのか。宣伝が足りないだけなのか。それとも単に志が低いだけなのか。後者ではないことを望みたい。

勤務先の系列の大学の水準では「外交ゲーム」は難しいのではないかと、という意見もあるかも知れない。しかし、これは自分たちでものを見ること、それに基づいて考えることを要求するゲームである。健全な常識が育っていること、思い込みがないことが、きちんとした結果が出てくるための条件だろう。昨年の事例は、日本人学生だけの固定観念に振り回されていたら、少な

くとも、かれら程度の社会経験の水準だけだったら、出てくる蓋然性の小さいものであった。しかし、中国人学生のチーム参加があったことが固定観念を破ったとも言える。勝負を付けることが目的ではないだけに、つまり、状況に基づく結果予測の一助にするというのが主な役割なだけに、対抗戦というようなものを組織することは困難だろうし、また、見物人の期待する方向にチーム参加者による事態進行が添うとも限らないので、ショーとしても成り立ちにくそうではある。

しかし、われわれは予定調和の世界に生きているわけではない。ただ、適切な知識と姿勢を欠いては未来作りに参画することができない。予定調和の世界に生きているわけではない以上、常時、自らの未来を更新する、つまり、未来作りに参画するという、そういうことができなければ、われわれは結局のところ生きていくことはできないのである。さればこそ、進学校を標榜する学校ならば、生徒たちはこの手のシミュレーション・ゲームの価値を直観的に感じ取らなければならないと、わたくしは考えている。ゲームの結果自体が重要なのではない。ゲームが変化する多重的な局面を支配する因子の存在というものを知ることが大切なのである。そういう意味で、生徒たちから反応がなかったのは大変残念である。

120. (10.12.03) 修学旅行の新幹線の中で、

梅棹忠夫・小山修三：梅棹忠夫 語る
日本経済新聞出版社，2010
ISBN 978-4-532-26097-2

を読んだ。この本は日経の書評で知り、すぐに購入したのだが、しばらく二の次になっていた。寸言であれ、片句であれ、どの箇所をとっても凄い。この本は、しかも、視覚性も重視した編集がしてあって、要点が印象に残りやすく工夫されている。「梅棹資料室」に収められている中学時代（旧制、しかし、始点は今も同じ年齢だが）からのノート類を見ながらの対話記録であったとのことだから、このような視覚的効果もノートに見られる精神を再現しようという試みの結果だろう。例えば、大きな字で印刷されたところだけを拾っていくと、

自分の目で見とらんから … 現地で見ていないはずなのに、どうして見えないのか … 見せかけにだまされるのならまだいい … あれは思い込みや

は、和辻哲郎『風土』への手厳しい批判である (p.27)。

大きな字にはしてないが、[イタリアは]

「見せかけの文化」やな。だからデザインが非常にいい。彼らの哲学として、「見せかけこそ本質である」。見かけがよければモノもいいという思考がある。(p.33)

との梅棹発言を承けて、小山氏が

君ら汚い格好せんと、スーツにネクタイして、きちんとしてろ。
(p.33)

という「民博」時代の梅棹館長の館員への指示を思い起こしている。

京都人は行儀がいいですよ。「きちんとしていない」とあかんとい
うのがあって、白衣なんかで歩くのは、ものすごく行儀が悪いと
思った。(pp.33-34)

との説明が梅棹氏から続く。

どうも雑な読み方で致し方ないが、梅棹流に言えば、引用するという精神
に問題はあるのだろうが、

なぜ自分のオリジナルな観察を大事にしないのか (p.129) …自
分の経験を客観的に記述するという習慣がなかった [んやろうな]
(p.133)

という恐ろしい指摘があり、さらに、「民博」の現況が念頭にあるのだろう
が、恐らくは、昨今の日本全体が)

やんちゃがないんやね。みな、こぢんまりとできあがってしま
うてるのかな (p.144)

であり、

批判されると、非難されたように思ってしまう (p.145) … 信ず
るところを貫かな、しかたない (p.145) … 評判を非常に気にす
る (p.145)

と慨嘆されている。言うまでもないことだが、一貫したアイデアのもとでの
指摘になっている。われとわが身を振り返ってみても、ここで指摘されてい
るような姿勢をとっている限り、人まね以上の仕事は決してできない。問題
は「インテリ道、近代武士道、samuraization, …」の文脈では人まねでも精緻
性が高ければ評価されるということかも知れない。もとより、やんちゃであ
り、信ずるところを貫いても、今度は能力や運の問題はある。しかし、満足
感の質は違うだろう。

前後するが、「民博」の「五箇条のご誓文」というのが凄い。総合性という
のが具現していた人だなとつくづく思う。この五点とは

ふかい学識、ひろい教養、ゆたかな国際性、柔軟な実務感覚、ゆ
きとどいたサービス精神 (p.113)

であるが、もちろん、中等教育でも生徒に理想として意識させたいことであ
る。批判、不満が（「民博」関係者の）一部にあったそうだが、特に、後段二

点に反発があったというのだが、前三点から後二点が自然に流れ出るようであれば、実は、前三点は当人の思い込みに過ぎないものかも知れないとは、反発した人たちは思いつきもしなかったのだろうか。実際、「ふかい学識」や「ひろい教養」というあたりで既に居直っている人たちも結構目にするがある（「民博」の話ではない、念のため）。

一旦読了して、後は、まあ、このブログ記事のために記憶に残った箇所の拾い読みだが、例えば、

アメリカの図書館にはペロツとした一枚の紙切れが残っている
(p.80)

という梅棹氏の発言を見つけると、いろいろな想いが去来する。かつて、1968年5月のパリの騒乱の真っ只中で、亡父の友人であった国立文書館の Jean Prinnet 館長に食事に招かれたことを思い出す。Prinnet さんは、今、館員を挙げて街中で配られているビラ類を集めているところだ、と言っていた。歴史家の使命は過去の資料を読み解くことだけではなく、現在の断面を生々の形で後世に伝えることでもあるのだなと思ったのだが、それは歴史家というよりもおよそ学者というものの務めではある。現在の解釈が未来永劫通用するとは限らない。後世の目を曇らせないためにも、後世の人間が直接資料と対話できるように、一次資料を可能な限り残すこと、そして、改竄しないことが、文系の研究者の基礎訓練なのだろう。そう言えば、あの当時、ENS で一緒だった英米系の留学生たちの日課は、専ら図書館に通って文献を写し、夕方、居室に戻って写してきたものをタイプに打ち直し、ノートを作ることであったようである。今は、文献処理の技術が向上したから、手法は多少変わっているかも知れないが、人間の頭脳の情報処理能力自体は基本的に変わらないはずだから、根本の変化はないであろう。

実は、この点に関連して、苦い思いを今経験している。現在の勤務先に赴任して、その大転換のきっかけを作った校長が十分に顕彰されていないことに気付いたので、次の機会にはできるように資料を集めようと思ったところ、もはや散逸していて、なかなか見つからないのである。亡くなられて未だ四十年にならないのに。また、昔の人でもあり、詳細な日記を付けておられたであろう。そういうものがご遺族やあるいはご本人の考えで消えてしまってもそれはおかしくないが、しかし、各種の式辞やあいさつの文章、あるいは、関係した記録類や研究報告類が見つからないのは、これらのものが公的な価値を持っていた時期があっただけに不審でさえある。

また、もう一点、困惑しているのは校歌の作曲者の事跡が全くわからなくなっていることである。この方は、県立の高等女学校の音楽教師を長く務め、敗戦後の新学制下で、高女と中学が一緒になって新制高校となったときに、その高校の音楽教諭になられ、昭和40年代の初期に定年で退職されたことはわかっている。そして、現勤務先校の音楽の非常勤講師もしておられた時期がある。この方が作曲した校歌は本校以外にもいくつかあり、察するところ、

この地域ではかなり知られた音楽家であったはずである。実際に、新制高校初期の卒業生の方からは、この音楽の先生の指導のもと、新制高校移行直後の文化祭で見事な演奏会が開かれたことには、特に、敗戦後のあの困難な時期であったので、感動したという話を聞いている。ところが、この先生の事跡がほとんどわからないのである（高女赴任後の経歴だけはわかる。経歴と言え、今も県立高校管理職経験者の人たちと話していてやや鼻白む思いを覚えるのは履歴と人脈ばかりが話題になり、ご本人がどんなことをして来たか、どういう生徒を育ててきたか、どんな生徒がいたかという話がほとんどないことである。この点は、県立校と私立校や国立校の先生たちとの決定的とも言える違いかも知れない）。

梅棹氏が

「分類するな、配列せよ」。機械的に配列や。(p.83)

と言うのはよくわかる。分類は必ず解釈を伴う。分類された途端に、資料は一次資料ではなくなってしまう。まして、分類が取捨を伴ってれば、それは歴史への背任でもある。とは言え、わたくしも亡父が残した膨大な手書き資料をどうしたらいいかわからない。すでに大分断片化し散逸している。片付けるたびに混乱が激しくなり、しかも、最近は実家に戻る時間の捻出もできないのだから、どうなることやら。

大分脱線した。もう一点、重要な指摘があった：

日本史の学者は世界史的な視野がない。全然おおまかな筋が見えてない。(p.175)

「日本史の学者」と限定されているけれど、かれらは教科書を書く。だが、恐らく、余り世界中を研究旅行はしない。まして、梅棹氏のような素養とは無縁だろう。拙見だが、日本史の常識としては、17世紀初頭の鎖国政策により、日本は基本的に西欧文物の流入を止め、したがって、中国系文化の影響下に回帰したかのような印象が強い。しかし、よく考えてみると、それは正しくはないのではないか。だが、そう言い切る論理は、日本史の授業では出てこないように思われる。なぜか。まさに、世界史的な視野の問題だろう。つまり、各種技術や宗教を含む思想について、日本の内外との交流関係を観察すると、16世紀の大航海時代以降は、意外と近隣の地域から新たな思想や技術の受け入れは少なく、また、そのようなことがあっても日本の社会や文明に影響はほとんど与えていない。むしろ、秀吉の例のように、日本からの進出的な影響の方が際立っているように思われる。これに対し、16世紀の半ば以降、日本の文物に決定的とも言える影響を齎したのは、東南アジア経由の航路によるものである。わずかの期間のようではあるが、南蛮文明は、少なくとも、戦国時代の群雄割拠を終結させる上で本質的な重要性を持っていたのではなかったか。

鎖国時代でも、長崎からは清朝の文献が渡来したとは言え、西洋文物の翻訳が重用され、やがて、直接オランダ文献が流入するに至って、これら漢訳文献の役割は二義的になった。

要するに、近世以降の日本の文明を正しく理解する上で、大航海時代の理解は避けて通れない。調査すべき資料は、国内で湮滅されていても（実は、意外と旧家などから出て来ているようだが。これも不思議なことである）、国外では見つかるかも知れない。マカオ、ゴアあるいは東チモールに、切支丹時代の文献資料が残っているかも知れないということである。

なお、日本への文化流入は、朝鮮半島経由で博多湾周辺に入るものと、東シナ海の島嶼群を経由して有明海以南に入るものとの二つのルートがよく知られている。前者は、唐津をカラツと読むように、唐（＝古代中国本土）を意識していたつもりでも、実際は朝鮮半島（＝カラ＝韓）が中心であり、あるいは、中華冊封圏を出るものではなかった。後者は、十世紀頃までは今日の中国南部との連絡であったが、結局、こちらは全世界に繋がるルートであった。また、だからこそ鎖国政策がとられなければならなかったとも言えようか。

ところが、この二つのルートは、瀬戸内海で合流し、したがって、学者の世界では区別が見えなかったということもあるだろう。実際に、この区分ができていないことが、現在に至る近代日本の不幸であり、世界の不運でもあった！

また、脱線した。本書巻末に梅棹氏の年譜が付けてある。小学校5年修了、中学校4年修了で、三高に入学している。大変な秀才であったわけである。その秀才が伸び伸びと育っている。今の時代、本物の秀才をも、小ぢんまりとさせ、あるいは、つぶすようなことしかできていない。つくづく何とかしたいものだとは思うのだが…。

付記：校歌の作曲者の先生については、かつて師事された新制移行期の方が同窓生を通じて調べられ、ある程度わかった。県立名門校を定年退職後数年して、久留米のBS会館で団伊玖磨氏の交響曲「筑後川」の発表前テープの試聴会を教え子数人と開かれたが、その席上、心筋梗塞で亡くなられたという（お嬢様の話）。その後、お住まいが火災で全焼し、結局、何も残らなかったそうである。ただ、ご生家はわかり、また、卒業校もわかったので、調査のしようもあるし、多少具体的な感じは得られるであろう。

121. (10.12.19) 先日、学校関係のある会合で、関連する公益法人の改組が話題に上り、基金を国際交流に充てたいという形での計画の説明があった。そして、対応する組織を各学校に設けてほしいという依頼があった。国際交流と一口に言っても、本来綺麗ごとではないわけで、教員や生徒に夏休みを利用した観光旅行の機会を提供するだけなら、せっかくの基金の無駄遣いになってしまうだろうなどは思ったが、もちろん、先の会合ではそんなことは言わなかった。翌朝、校内で、報告かたがた、まあ、このような意見を漏らしたところ、学習指導要領にはあらゆる機会・教科を通じて国際理解を推進するとあるのだから、基金を取り崩して国際交流のために使おうとする

ことのどこに不足があるのかというコメントが同僚幹部から返ってきた。

しかし、言うまでもないことだが、「国際交流」とか「国際友好」という言葉は抽象的であって、具体的にどのような内容を含ませた上で理解しているかがもっとも大事なところである。したがって、表面的に学習指導要領に何と書いてあろうと、その奥が読み取れなければ、ただの思い込みだけの言葉の遊びに過ぎない。もとより、実際の現場での教科指導は、そのような洞察を伴うことを絶対的な条件としては実行できまい。とは言え、学習指導要領策定の前段階、まず原則に関しては中央教育審議会、そして、実際の教科設計については教育課程審議会を経ているわけではあり、それらの各段では、例えば、国際理解ということについて突っ込んだ議論が行われたと思いたい。しかし、このブログの趣旨とも深く関わることだが、審議会の碩学たちに「国際」ということの具体的な内容が共有されていたかどうか。もし、大多数には抽象的な綺麗ごととして把握されていたら、言葉が美しいだけに、そうとは限らないことを説くのは極めて難しい。

わたくしも「国際理解」がいけないと言っているわけではない。「国際交流」とか「国際友好」という発想の背後にある一種硬直した考えが、特に、これからの若い人たちの教育に際して、好ましくないのではないかと考えているわけである。学習指導要領に趣旨のあることを否定するわけではなく、ただ、その前提としているアイデアの硬直性が、本来目指すべき「国際性」教育の阻害要因になりうると思っているのである。

では、現行の「国際理解」なり「国際交流」なりの扱われ方のどこに問題があると、わたくしは考えているのか。

わたくしの見るところでは、現行のアイデアでもっとも問題視すべき点は、「日本」と「世界」を異なるものであり、対比すべきものとして取り扱っていることである。そして、「国際理解」なり「国際交流」の教育推進は、この異なる「日本」と「世界」が滑らかな接触ができるように、「日本」側からのインターフェースを設計し、実行することであるという、そういう精神でなされているように見えるけれども、それでは見当が違うのではないかと、わたくしは思うのである。もちろん、実際の教育の現場では、現行の形で深刻な問題が生ずるわけではないだろうが、「国際理解」の前提に、「日本」と「世界」とが異なるものであるという思い込みがあるようでは、偏頗な効果しか期待できないであろう。

そこで、大前提とすべきアイデアはどうあるべきとわたくしは考えているのか。

それは、極めて簡単なことであって、

われわれは世界の一員であり、現在の他の文化や文明に属する人
たちと一緒に新しい世界を作りつつあるのだという自覚を持つ

ということに尽きる。「日本」と「世界」が異なるものであり、対比すべきものであると思いつくのは、世界のうちの人それぞれが、生まれ育った文明、す

なわち、地域性や歴史性、を背負っているということについての、十二分には相対化されていない認識の表明に過ぎない。「理解」、「交流」、「友好」というのは、もちろん、極めて重要である。しかし、それらは、共通の文明を背景にしている場合よりも若干ややこしくなる可能性があるというだけではあるが、実は、基本的には、一緒に仕事をする上での付き合い方とでもいうべき技術的な水準の話になるのが望ましいのではないだろうか。

彼と我とは「一緒に新しい世界を構築する」のだと言っても、それが決して簡単ではないことは、今の世界情勢を見ても明らかだろう。しかし、「仲良くなりましょう」というような、誘いを発した途端に「何のために？」と反問されそうな曖昧かつ独善的なことではなく、一緒に「新しい世界を作ろう」とすることの方が遥かに姿勢として真っ当なことではないだろうか。また、さればこそ、彼我の想いの相違が明らかにならなければならない、その差異をどう折り合いを付けて、「新しい世界」に取り込んでいくかということが課題であることも見えてくるわけである。個人の交際、集団の交際、国の交際、さらに、国々の交際と異なる階梯があり、それらは同列に論ずることもできないどころか、むしろ峻別して考えるべきかも知れないことなのである。

この意味で、指導要領に限らず、国際関係を論ずるときは「一緒に新しい世界を構築する」という姿勢に基づくべきであると考え。もちろん、それは決して綺麗ごとではなく、「仲良くしましょう」とは裏腹の、実に険阻な狭い道筋を辿らなければならないことではあるが、当然のことながら、日本の教育の目標も、「世界とは一線を画した日本という別世界」で通用すればよいということではなく、そのような一線のない、世界そのものの中で通用する一「生きる」の真の意味一 ことを目指さなければならないわけである。

7 2011

122. (11.01.01) 12月に入り、実はもの凄く忙しい日々が続いているが、他方、いくつかの本を読んではいる。直近では、

布施英利：美の方程式 美=完璧×破れ、
講談社、2010
ISBN978-4-06-216586-0

に目を通し、同書に示唆されて、三木成夫氏の一連の書物を読んだ。布施氏のものは新刊書コーナーにあったのだが、後日、三木氏の本を探しに本屋に行き、書架構成から布施氏が一定のファンに支持されているらしい著者であるらしいことがわかった。

ところで、現在の勤務先に、もう一期、つまり、後三年の責任が生じた。されば、健康に留意して立派に務めてみせなければならないというわけだが、昨今の日本の状況を見ると、これは機会と言うべきか、分不相応の役回りと

言うべきか、とにかく眼前の若い人たちに対し、老人からの遺言とでも区分けされるべきメッセージを発信しなければならないという想いも募る。ここ四半世紀の間でも焼却炉が生活の場から消えたり、気候の変動もあり、子どもたちが成長していく過程での経験が、我々（あるいは、海外の同世代の子どもたち）のものどずいぶん変わってしまっている。人間の生き方の基本は、昔も、また、他所の土地でも違いがあるはずはないので、むしろ、今、この時点の日本で当たり前と思われていることに安易に慣れきってしまうと、生き抜けないのではないかという危惧が、少なくとも我々の世代の人間なら、若い日本人を見ていて感じないわけではない。そして、そのことを本気で心配するのも我々以外にはいないはずなのだが、…。さればこそその遺言という言葉辞ではあるが、発信メッセージが遺言的要素ばかりになると空転してしまうだろうが。

そんなわけで、読書傾向が若干変わってしまった。特に、基本的で重要だと想われる書物は、読了後、学校の図書館に寄贈するようにしているし、そういう場合、さらに、読書範囲を関係するものにまで広げているので、結構大変なのだが、こういう読書はわたくしなりの判断と選択の結果であり、式辞類で、遺言的メッセージとしての強化に利用したいと考えてもいる。例えば、三月の卒業式式辞の原稿はもう作ってしまったが、気が変わらなければ、中山敬一氏の「君たちに伝えたい三つのこと」（ダイヤモンド社）、梅棹・小川両氏の「梅棹忠夫 語る」（日本経済新聞出版社）、村上隆氏の「芸術闘争論」（幻冬舎）を論ずるつもりである（「梅棹忠夫 語る」は第120回記事で論じた）。

さて、上掲の布施氏の書物だが、副題中の「完璧」という語の選択に流石というか芸術系の素養が見える。内容は、基本的に黄金比とその周辺を解説し、「完璧」を実現するものとして、これらが認められるが、「美」は鑑賞者の感動を惹起するものである以上、静的な「完璧」を破ることにより鑑賞者に完璧を求めての心の運動を起こさせていることを実作品を挙げて説明している。「完璧」の中には理想的な人体比例もあり、ここから三木成夫氏の思い出が語られるという次第である。関連して、その昔、亡父にロダン美術館に案内されたことを思い出す。青銅の馬の像は、像自体は静止しているのだが、敢えて馬体の比例が破られているために不安定感が醸し出され、疾走しているという印象が生ずるんだという説明であった。美というか機能的な話ではあるが、作品と鑑賞者の間の双方向的な関係が成り立つためには「完璧」ではいけないのであろう。

三木成夫氏の書物だが、4種は本屋にあって、すぐに入手できた。そのうち、2冊はざっと目を通したが、三木氏の書物への感想は、別の機会にしたい。

注：三木氏の書物で、最初に入手できたのは、

胎児の世界 中公新書 1983

人間生命の誕生 築地書館 1992

ヒトのからだ — 生物史的考察 うぶすな書院 1997

生命形態学序説 うぶすな書院 1992

である。その後、

海・呼吸・古代形象 うぶすな書院 1992

生命形態の自然誌（第一巻） うぶすな書院 1989

も入手したが、目を通したのは、「人間生命の誕生」と「ヒトのからだ」の2冊だけである。

1 2 3. (11.01.05) 三木成夫氏の書物に目を通す傍ら、

上田雄：遣唐使全航海 草思社 2006

ISBN 4-7942-1544-4

という書物に、渋谷の丸善淳久堂で（カウンター近くの書棚にあったからだ）遭遇し、どうせなら福岡に戻ってからと思い、天神のジュンク堂で購入した。

年末年始の帰省中に読み終えてしまうはずだったが、奇妙な巡り合わせで、

尾田栄一郎：ワンピース 集英社

にはまってしまう、その53巻ぐらいまで目を通してしまった。こちらの方は殊更コメントするようなことはないが、売れているという事情は幾分理解できたようには思う。

さて、遣唐使の方であるが、基本的な研究報告に属するものであって、海事協会の賞が与えられたというのは当然だろう。ただ、索引がないこと、史料の一覧がないこと、関連地図に陸水への言及がないことといった不満は、ないわけではない。だが、基本的には、驚くべきことでもあるが、しっかりした史料が極めて少ないということがあられるらしい。著者に拠れば、肝心の遣唐使船そのものの記録がなく、航路の詳細も不明であるという。したがって、史料、資料の不足を後世の知見で補うことになるわけで、一次史料をもとに議論を組み立てていくのが歴史だとすれば、遣唐使を巡っては、極めて困難な作業が不可避ということになる。少なくとも、後世の資料からの推察だけでは、厳格な意味で、歴史を解明したとは言えないのだろう。

そこで、議論の価値をどこに認めるかという点が重要なことになり、この点での著者の立場は明晰である。すなわち、内外の記録で確認できる遣唐使の規模や時期を前提に、plausibility arguments によって、航海そのものを再現しようというのである。これは誰かがやらなければならない基礎的な仕事であって、そのような考察が及んでいない論考は、たとえ、碩学といわれる人のものであっても、弘法も筆の誤りの類のことになることがあっても怪しむことはないのではあるまいか。

本書の圧巻は、以上の意味でも、

第四章 遣唐使の船と航海

- 1 遣唐使船の形と大きさ
- 2 推進力は網代の帆
- 3 遣唐使船の横断日数と速度
- 4 遣唐使船の航海と季節風

である。各節の標題からも内容は想像できるであろう。第4節には、東シナ海の年間の風向の詳細な図が載せられており、また、遣唐使以外の日本と大陸間の交流船の記録がまとめられている（円珍のものもある）。ここで明らかになるのが、日本側の記録の乏しさである。管理する役所というか窓口が複数あって調査が行き届いていないのか、失われてしまったのか、それとも、もともとなかったのか、このことはそれ自体十分に調査検討する価値があるであろう。実は、それどころか、平安朝の官僚たちが詳細な日記を遺していたことを思うと、遣唐使の（準）公式の航海記録が十分ではないようなのは不思議ではある。

ところで、この章での論考は、東シナ海の航海についての考察に集中している。だが、疑念は、実は、遣唐使が難波津から出たと言っても、遣唐使たちが遣唐使船に乗船していたのか、あるいは、別仕立ての船に乗っていたのか、それも検討の価値はあろう。そもそもが安芸の国で造船されたというのが中途半端のように思われる。難波津か博多那之津か、あるいはその近郊、たとえば、唐津、であれば、納得が行くが、なぜ、中間点の安芸なのか、その辺がわからない。いずれにせよ、瀬戸内海のどこかで大型船を造ったとしても、現代でも難渋する関門海峡を無傷で通過することは決して易しくはなかったはずである。沿岸航路は潮流の影響を受けやすいことを考えると。遠賀川河口域も決して優しくはなかったはずである。plausibility arguments という意味では、遣唐使一行のような重要な職務を帯びた人たちが危険な道筋を行くはずはなく、古くから確立していた道筋、すなわち、大分湾から大分川を遡り、日田で筑後川に乗り換え、さらに、甘木か久留米近辺で那珂川に乗り換えて博多に至るといふ陸水を辿ったのではないかと、という感があるからだが、かと言って、安芸の国で造船したことと難波津を恐らく船で出たという記事との整合性は説明が要るだろう。つまり、一次史料を欠いているからこそ何でも言えるとは言え、難波津における儀式としての遣唐使の歓送式典と、実際の航海がどう行われたかの距離が埋まっていないのではないかと思われる。実際は、それこそ大型船舶で、安芸厳島辺りまで航海し、以後、大分湾、大分川、日田、筑後川、甘木、那珂川、博多という陸水経路を辿り、そこで、用船を待って、志賀の島辺りから船に乗って外洋に出たということも考えられるのではないだろうか。まして、高位高官の遣唐使やその副使たちにとっては船内に拘束されているより楽な行程ではなかったかと思われる。この辺が、後世の知見を簡単に援用するのがはばかれる次第かと思われるのだが。

先年、古代船が発掘されたとき、その船をモデルに熊本、つまり、有明海から外洋を経由して大阪まで巨石を運ぶという試みがなされた。一応成功したようであるが、そして、現代に何がしかの巨大物を運搬するとなると他の経路は現実的ではないが、恐らく、本来の経路があったとすれば、筑後川を遡上し、分水嶺の日田を経て、大分川を下り、瀬戸内海に出て、後は比較的穏やかな海路を辿りつつ難波の大和川河口に至ったのではなかったろうか。巨石を確実に外洋経由で運搬することは想像を絶する難事ではなかったかと思われるが、つい、ダム取水によって極端に減少した河川系の現在の水量に惑わされて陸水の可能性に想いが届かなかったのではあるまいか。もとより、全くの素人の意見である。その点も検討した上での外洋運搬の検証であれば何も言うことはないが、そこを怠っての話となると、全く無意味な行動に過ぎなかったという可能性も無視はできまい（かつて札幌にいたころ、訪問者の仏人を案内して豊平川を見たときに、この川を往来する船での運搬能力は一日何トンくらいか、というのが彼の最初の質問であったことを思い出す。急流の日本の河川もかつては水運に用いられた。札幌の創生川も福岡の薬院新川も京都の高瀬川も運河であった。さらに、博多にも道頓堀があるのである）。

多少脱線した。本書が遣唐使船の全貌を正確に反映しているかとなると確信が持てない点はあるものの、非常に重要な書物であることはわかった。第四章以外は、次のようになっている：

まえがき

序章 弘法にも筆の誤り

- 1 「空海の風景」への疑問
- 2 遣唐使の航海についての定説への疑問

第一章 遣隋使・遣唐使の派遣回数

- 1 小野妹子と遣隋使
- 2 遣隋使の派遣回数
- 3 遣唐使の派遣回数

第二章 遣唐使の航跡と事績

- 1 第一回遣唐使 犬上御田耜
- 2 第二回遣唐使 吉士長丹
- 3 第三回遣唐使 高向玄理
- 4 第四回遣唐使 坂合部石布
- 5 第五回遣唐使 守大石
- 6 第六回遣唐使 河内鯨
- 7 第七回遣唐使 粟田真人
- 8 第八回遣唐使 多治比県守
- 9 第九回遣唐使 多治比広成
- 10 第十回遣唐使 藤原清河
- 11 第十一回遣唐使 高元度

- 1 2 第十二回遣唐使 小野石根
- 1 3 第十三回遣唐使 布勢清直
- 1 4 第十四回遣唐使 藤原葛野麻呂
- 1 5 第十五回遣唐使 藤原常嗣

第四章はすでに挙げた。第四章のあとに

あとがき

がある。

付記：76 回記事で言及した円珍の渡海の頃には、実は、まだ、新羅は健在であった（新羅の崩壊は 10 世紀前半）。彼らは、なぜ、北路、つまり、半島沿いではなく、東シナ海を帆走するという南路を選択したのか。基本的には、旅程が短くなるという認識があったのではないだろうか。円珍と新羅明神との関わりは、恐らく、渡海の関係者が、実は、基本的に帰化人とその周辺に限られており、帰化人の子孫である円珍の「守護神」が単に新羅明神であったということかも知れない。つまり、当時の韓半島情勢とは強い関係はなかったかも知れない。

付記 2：120 回記事で、大陸と日本列島との交流軸は、韓半島経由の南北軸と東シナ海経由の東西軸があり、前者は地域的かつ支配被支配の線であったが、後者は、世界的な文明交流の線であったと分類できるのではないかと書いた。しかし、両者が瀬戸内海で合流して畿内に至るために両者の差異が日本の伝統的な統治主体には認識できなかったのではないかとも書いた。もちろん、以上は素人なりの荒っぽい話だが、本書を見ると遣唐使は基本的に東西軸による交流に属していることは興味深い。

1 2 4. (11.01.31) さて、三木成夫氏の著書だが、

- [1] 胎児の世界, 中公新書, 1983
- [2] 海・呼吸・古代形象, うぶすな書院, 1992
- [3] 人間生命の誕生, 築地書館, 1996
- [4] ヒトのからだ ― 生物史的考察, うぶすな書院, 1997
- [5] 生命形態の自然誌 第一巻 解剖学論集, うぶすな書院, 1989
- [6] 生命形態学序説 ― 根源形象とメタモルフォーゼー, うぶすな書院, 1992

が、今、手元にある。勝手な順序で眺め、しかも、全部を読み通したわけではない。それでも、これだけを読み、あるいは、眺めてみると、細かいことは別にして、三木氏の主張の凡そは記憶に残る。

まず、植物、動物を通ずる「生命」とは何か、という洞察がある。明晰に断定はされていないようだが、結局、それは宇宙であり、太陽、地球や月であり、それらの作用を受け止めている海であり、さればこそ、また、生命体

一つ一つが一個の惑星でもあるというのが、三木氏の生命についても上位の規定であろう。

そして、古生物学、発生学、解剖学と時空の軸を縦横に動きつつ、現在の生命の状況、なかんづく人間の生命を、特に、胎児の成長の過程と付き合いながら、理解しようというのが氏のアプローチであったようである（ただし、胎児の成長の過程をどう追跡し得たかと考えると、そこには意図的なものはなかったにせよ、著者が、別の文脈で明示的に述べていることではあるが、[恐らく、一般的に]泣きながら作業をした[であろう]という事情の想像は十分にできる）。このような時空枠の話であるから、氏が利用しえた生物学あるいは医学的知見が四半世紀前のもの（氏の没年は1987年）であっても、その後には得られた細部の発見や検証によって本質的な影響を受け得る部分は意外と少ないのだろう（と素人のわたくしは思う）。もちろん、当方が多少聞きかじった範囲では、上田泰己氏らによる体内時計の知見の進歩があり、これはひょっとしたら、むしろ三木氏の所説の具体的な検証を導くかもしれないという感想はある。

三木氏の著作は、122回記事の布施氏の書物に教えられたのだが、布施氏も三木氏も形態学に関心を持っている人たちの間では高名な方たちのようである。お二人は、東京芸大で接点があり、東大解剖学教室にも縁があったらしい。三木氏の素養は、本来芸術系ではないようではあるが、書や漢籍に詳しく、さらに、航空工学科にも在籍されていた時期があったらしい。三木氏の図は機械工学系の設計図などを想起させるところがあり、こういった履歴の「おもかげ」であろうか。植物と動物の生命の基本に、食と性との円筒構造を通して、一種の双対構造を見抜いたのは、このような幾何学的な把握なしには不可能ではなかったか。

三木氏の著作は、[1]以外、すべて没後の刊行であり、したがって、生前の種々の機会の文章や原稿を再編したものであって、当然、編集の際に付された解説記事の役割が大変重い。事実、解説は詳しい。そして、解説を書いている人たちが多岐にわたっている。[2]および[4]には、吉本隆明氏の解説があり、わたくしがこの名前しか聞いたことのない人の文章を読んだのは、これが初めての機会であった。解説記事では、[4]所収の後藤仁政氏のものが大変わかりやすかった。

三木氏はゲーテの形態学に強い影響を受け、加えて、クラークスの思想に共感したという。クラークスとは何者かと思い、本屋に行ったら、

ルートヴィヒ・クラークス：リズムの本質、みすず書房、1971

というのがあった。早速読んでみようと思ったのだが、実に難解であった。訳者による解説によって内容の推察は付けられるが、それが翻訳そのものから読み取れるかという疑念が残るのである。三木氏は恐らくドイツ語で読んだのであろうし、ゲーテの著作や医学書をドイツ語で読み、その経験を背景に、クラークスをドイツ語で読めば統一した世界に浸ることができたに違いない。

だが、いきなり日本語で、しかも、この翻訳だけの場合、例えば、「持続性」という語が現われたときに（この翻訳自体は40年前のものであり、その上、訳者による解説が非常に明晰であるのだが）今日の語彙では英語の sustain やその派生語を思ってしまう。あるいは、文脈から想像して、数学で言えば、「連続性」のことなのか、「継続性」のことなのか、結構悩ましい。ドイツ語文か、あるいは、他の欧州語訳を見れば、もっとはっきりするのだろうか。三木氏の論考の中では、クラーゲスのリズム概念の分析が重要な役割を果たしていることは、例えば、[2] では、呼吸に関連して、繰り返し述べられていることから推察がつくが、三木氏はクラーゲスの解釈をさらに敷衍して論じたと考えれば、それでいいのかも知れない。

脱線した。三木氏のアイデアは、まず、生命の基本構造が、円筒であり、基本機能は食と性の交替現象であると、まさに、喝破しているところにある。上で触れたように機械工学系のシリンダーを想像したくなる。植物の円筒構造を、いわば裏返して、内部に取り込み、外部に、いろいろと修飾を施して動物が出来上がる。植物性器官、動物性器官と分けられる次第である。さらに、植物は円筒構造を大地に垂直に固定しているのに対し、動物は水平に移動する。したがって、動物の基本的な円筒構造には重力を反映した腹背がある。これは発生にも反映して、植物は、細胞分裂の結果、垂直方向に増殖していくが、動物は水平かつ平面的に増殖していく。そして、この経過を、水棲、陸棲、原生、腔腸、脊索、脊椎、と動物の進化とともに見て、その長い時間の中で確立したヒトの生物学的位置づけに思いを馳せる。ただし、当然ながら、三木氏が利用しえた知見は四半世紀前の水準に留まっており、昨今のDNA解読に伴う情報の精密化をはじめ、ミトコンドリアの系統特定、Y染色体の地域分布など反映していない。三木氏が解剖学者として熟知していた人体各所の詳細構造は不変であるはずである。例えば、一般に臓器の周りには極めて多数の神経群が集まっていることを思うと、臓器移植、特に、心臓移植は、(すべての神経の縫合が不可能である以上) 一体、本質的に確実な医療行為と言えるのかと三木氏は疑問を投げかけている。生命倫理の問題や免疫反応の話はよく聞かすが、こんなところにも困難があるのかとわたくしは思い、改めて、生命とは何かと考えてしまう。

特に、三木氏の思想圏では、DNA解読は、ヒトだけの問題ではなく、宗族におけるDNAの変異や種の分岐とDNA情報の分岐、さらには、そういう分岐を支配する原理のようなものが本当の問題になるはずである。それに、
図式

生命の発生 → 植物 → 動物 (… → 魚類 → 両棲類 → 爬虫類 →
哺乳類) → ヒト

を重ね、これらが、三木氏の円柱構造の進化に対応していることを考えると、それらを支配する基礎的な生命構造の変化を抽出できるはずである。実際、円筒構造は、垂直から裏返って水平になり手足が生えて陸に上がり、直立し

てヒトになっている。各段階での分岐として理論的に説明できる形で「形態学」を導くような(数理的)生命モデルとでも言うべきか、そのようなものが構想できるかも知れない。

極めて怪しげな感想になった。応用はある。職務上これから発生する医学部志望の生徒との面談で、かれらが、

「人の生命に関わることができる、救うという可能性のある仕事
ができる、だから、医者になりたいと思っている」

と言うとき、

「じゃあ、君は生命とは何と考えているのか」

と問いかけることができるわけである。答えのわからない設問は無責任だっ
て? そうは思わない。まさに、一生を通じて追い求めるべき問いではないだ
ろうか。

「答えを知ることが大事なのではなく、問い続けることが大事で
あり、それが、君に今この場からでも迫力を与えるよ」

と言って、送り出せばいいのである。

付記：三木氏の想いと考えられるものの延長を、解剖学、古生物学、分子生
物学の接点のところで、おそらくほぼ最新の知見で、紹介した書物として、

ニール・シュービン：ヒトの中の魚，魚の中のヒト
— 最新科学が明らかにする人体進化 35 億年の旅 —
早川書房，2008

が挙げられるだろう。著者の姿勢が、というよりも、現代アメリカの研究体
制の様子がよく見える。解剖学、古生物学、分子生物学の接点と書いたが、研
究チームも研究室構成も、そして、本人もそう志向しており、フィールドで化
石を掘り出し、実験室で遺伝子操作された細胞を培養し、また、人体を含む
種々の動物を解剖する。単細胞の微生物から複雑な多細胞のヒトまでを貫く
共通の構造があることを示す。まして、魚類はヒトの極めて近い親戚である。

125. (11.02.08) 毎日新聞 2月6日付けの「今週の本棚」で

立原位貫：一刀一絵 江戸の色彩を現代に甦らせた男
ポプラ社，2010. ISBN978-4-591-12085-9

が紹介されていた。國芳を始めとする江戸の浮世絵の刷りあがったばかりの
姿を再現しようという男の半生記である。著者は実は相当に知られている人
らしいが、わたくしは初めて聞く名前であった。本書には著者作品の原色の
図版が多数載せられているが、それらは現物とは違うわけだし、原図との対
照もどこかで見られるのだろうか、その辺の紹介は残念ながらない(巻末に
著者の作品一覧はある)。

いずれにせよ、書評者の田中優子氏が言われるように

何と言っても著者が面白い

のだが、しかし、また、そう言い切ってしまうと身も蓋もなくなってしまう。ただ、わたくしは田中さんが強調されなかったことが結構気になった。本書の文体で言えば、「なので」、「何気に」といった語法も籠めて。

著者の、浮世絵の刷り上がったばかりの姿を復元しようとする行為は、技術的には、彫り、版木、紙、絵の具、刷りの復元への努力になるわけだが、それに成功しても、もともとの浮世絵師や彫り師、刷り師の仕事と同じものが出来上がるわけではない。著者の行為は、実は、鑑賞であり解釈であり、さらに、また、批評行為でもある。また、実際、著者は贋作を制作しているわけでもない。手間やひまという点を考えても、贋作づくりを目指すのなら、こういうアプローチはありえないだろう。だが、こうして著者の努力を通じて、江戸期の技能のある側面やその到達点の高さが非常によくわかるのである。そして、一方に、著者の創作品もある。著者は、ところが、職人としての体系的な正規の訓練は受けていない。その辺が、「何と言っても著者が面白い」という所以なのではあるが、それゆえ、著者を単純に「職人」と括るのは適当ではないだろう。では、何と分類されるべきなのだろうか：アーティスト？ディレタント？

もう一点、重要なのは家族である。特に、兄上が重要な役回りを果たして来られたと思う。大変な家庭環境でありながら、堂々と著者が生きて来られたのは、幼少時の著者を結局は支えた往時の日本の社会の包容力というようなものがあつたであろう。著者だけが苦勞してきたわけではないことを思うと、この一種の包容力は母上や兄上をも支え、それが、また、著者にも及んでいたであろう。そして、四日市の大水害の折に、小学生だった著者に、母上が

…、急いで私の下ばきをはき替えさせた。

「なんでやっ」

と聞くと、もしも死んだときに下着が汚れていたらいかん、と答えた (p.12)

というように、死と向かい合いつつも、母上を受け継いでいた時代や土地に培われていた矜持は著者にも伝わったのであろう。今、悲しいことに故郷は荒れていると聞く。人が少なくなった地方都市は皆似たようなものになってしまっているが、人が集まっている都会地と言えども、かつての伝統的な地方社会にあつたような、何代にもわたる生活の蓄積が反映しているような、そういう包容力や回復力はない。この意味でも、江戸期を想い、その名残が辛うじて留まっていた昭和 30 年代を想う。著者は言う (p.202)：

あのころ日本は貧しく不便だったが人々は丁寧に暮らし、そこにはまだ程よい情けがあつた。

あれから半世紀あまり、現状を思うと、一体、われわれはどこで、何を間違え、どう失敗してしまったのか。おそらく、自分たちの特徴、「よさ」と言ってよいが、そういうものをきちんと捉えてこなかったから、だめな奴だ、悪い奴だ、存在自体がけしからん、などと（他者から存分な政治的効果をねらって）言われたとき、（特に、国の指導層が）そのままでは踏ん張ることができず、国土や社会を破壊してまでも、いわば、そういう否定原理に対抗しなければならぬという強迫観念に突き動かされてしまい、流されてきたのだろう。

126. (11.02.14) 天神のジュンク堂で、いかにもいかがわしい編集団体名ながら信頼できる出版社のものであり、手に取って編者らの経歴を確認しつつ、なお半信半疑で

日本宇宙生物科学会（奥野誠/馬場昭次/山下雅道）編：
生命の起源をさぐる 宇宙からよみとく生物進化
東京大学出版会, 2010.
ISBN 978-4-13-063331-4-C1045

を購入した。「宇宙生物」という部分に引っ掛かったのである。ところが、目を通してみると、高度の専門解説書であって、しかも、大変面白く、この地上の「生命の起源」を宇宙（最低限、太陽系）的な文脈で論じなければならないことの根拠が示されており、少なくとも、わたくしには読者としてその理解はできたと思う。ただし、この書物をきちんと理解するための素養がわたくしにはないことも同時に痛感した（もちろん、和文縦書きであって技術的な詳細への言及が不十分だからというわけではない）。実際、本書は11名の方の執筆であるが、助教とある二名の方を別とすると、残りの九名の方たちは間違いなく相当のご年配の方であるから、話題は、すでに成熟域にあるのであろう。知らなかったほうがどうかしているわけではある。本書のもとになったシンポジウムは、第19回日本宇宙生物科学会大会の折のものというから、1980年代には、この方面の活動の萌芽が生じていたわけではある。

本書の目次は

はじめに

序章 宇宙から生命を探る

第1章 生命を生み出す有機物

- 1 生命の起源は解明できるか
- 2 アミノ酸から生きる機能分子を作る
- 3 生命をになうRNAのはじまり
- 4 生命のはじまった場をもとめて

第2章 細胞のはじまり

- 1 分子システムで生命らしさの謎に迫る
- 2 熱水噴出孔は始原生命をはぐくむか
- 3 遺伝子情報をさかのぼり祖先の姿を探る

第3章 ひろがる生命とその機能

- 1 原核生物から真核生物への進化
- 2 光合成と生物進化
- 3 全球凍結の余波と多細胞生物繁栄のはじまり
- 4 性の起源と多様な生命の進化

終章 ふたたび宇宙へ

であり、要所要所に「コラム」の形でのトピックの解説がある。さらに、参考文献、ウェブサイトに加え、詳細な索引が付されている。

まず、124回記事で紹介した三木成夫氏の書物と比べると、(わたくしの理解の仕方がよくなかったのだから本来の三木氏のアイデアの大筋を替える必要はないかもしれないが) 始原的植物から始原的動物が進化したかのような考え方は成り立たないらしいことが、本書第12章で示されている地球上の生命史の記述からわかる。三木氏が、人間のヒトとしての本来の生を、生物としてのヒトとは何であるかという解剖学者としての知見をもとに追及したのは、その根底に三木氏ならではのロマンティズムがあったからである。三木氏のロマンティズムにあるホリスティックな要素が感性豊かな芸術家たちの共感を呼んだのだろう。もし、三木氏が今日の生物学の知見を利用できたら、事実関係に基づく考察は変更を受けていたであろうが、氏特有のロマンティックな考察の展開は不変であったろう。

本書の著者たちもかれらを突き動かしているロマンティズムがあるのだが、それは知見の精緻さというより、関心がヒトに集中しているのではなく、そもそも生命とは何か、生命を貫く普遍原則は何かという想いであろう。そして、普遍という以上、地球、あるいは、太陽系という固有の環境での特殊例の分析で完結することを目指しているわけではないというわけである。別な言い方をすれば、「生命とは何か」という問いに、三木氏はヒトの生命と補った上で、ヒトという生物の発生を軸に据えて答えようとしたが、この本の著者たちは、生物とはそもそも何かと定義することを試みる形で出発する(ところが、「生命」と「生物」との使い分けは余り鮮明なようでもないが)。とまれ、(現在)「(地球)生命」の定義として了解されているものは次のようなものである(p.27)：

- 膜により外界と自己を区別している
- 外部から物質やエネルギーを取り込み、体内でそれらを用いた化学反応により自分を構成する物質を合成したり、活動のエネルギーを得たりする(「代謝」を行う)
- 自己と同じ個体をうみだし、増殖する(「自己複製」を行う)

著者は、さらに敷衍して、

地球生物は、タンパク質(酵素)を用いてを行い、核酸(DNA, RNA)を用いてを行う。…地球生物はタンパク質と核酸

という二大高分子の構造と機能，および相互作用の上に成り立っている．そこで現在の地球生物は，タンパク質・核酸などの分子を使い，☒～☒のような特徴をもつ個体と考えることができ，そのようなものが誕生した時点「地球生命」の起源，生命と生命前を分ける分界点としよう．

と述べる (p.27)．そして，生命の起源について現在の知見の紹介を試みたのが本書であり，その概要が序章に述べられているという次第である．本書には，詳細な索引と懇切な文献表が付されている．例えば，

金子邦彦：生命とは何か [第2版] 複雑系生命科学へ
東京大学出版会 2009
ISBN978-4-13-062310-0

を本書の文献表を参考に早速入手もした（文献表にあるのは，第1版（2003）のもの）．

乱暴に要約すれば，本書では，地球生命の起源は地球史，つまり，太陽系の歴史そのものに遡るものであり，一方，現在の地球生命の起源が「コモノート」という単一起源に遡るからと言って，一般に「（太陽系）生命」あるいは，生命そのものの起源が完全に了解されているわけではない以上，他の形の「生命」の可能性があるかどうかの究明は依然課題である，ということになるのか。「地球史」という点でも，「全球凍結」が何度もあったということは知らなかったし，現在の地球環境が生命あってのものであること，つまり，その上に棲息する生命体すべてをも含め地球全体を統一されたシステムと解すべき，そういうスケールで，生命の起源が論じられるべきことを感じた．

なお，現職に関連する感想としては，中等教育の力点をもっと「地学」に置かなければならないと考える．特に文系に進路をとる生徒たちが，生物としての人間自らを知るために必須だけでなく，種々の物理化学の実験やそれらを数学の知見あって始めて合理的な見解としてまとめられるということを感じることができる教科だからである．残念なことに，大学の入学試験には，こういう総合性を活かした出題はできない．だが，本末としてはどうなのか．

127. (11.02.26) 金曜日に高校卒業後50周年の同期会が横浜であるというので，東京に出た．同期会は夜であるが，昼過ぎに羽田に着く便を選んだ．実際のところ着るものに困るような日で，荷物を持って歩くと汗ばむほどであった．上野の博物館群のどれかで十分時間がつぶれるだろうという目論みではあったが，特に当てがあったわけではない．幸い，国立科学博物館の企画展「歴史でみる・日本の医師のつくり方 ― 日本における近代医学教育の夜明けから現代まで」の案内が真っ先に目に入った．

展示室の正面に，久留米大学病院にもある「医」という漢字の種々の異体字や書体を並べたパネル額と，幕末長崎の和蘭医ポンペ・ファン・メールデ

ルフォールの言葉

医師は自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものではなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶがよい。

を記したパネルが掲げられており、その両側に「神農」と「ヒポクラテス」の画像のパネルが展示されていた。ヒポクラテスの説明には、有名な「Ars longa vita brevis …」の和訳

人生は短く術のみちは長い。機会は逸し易く、試みは失敗すること多く、判断は難しい

が付されていた。どこかで述べたことではあるが、この句がもともとは医師の修行に関わるものだとすると、和訳において「機会」、「試み」、「判断」とある部分は、もっと適切に医術の文脈下の語彙を選ぶべきではないかと思われ、その意味では、この和訳は誤訳に近いような印象を覚える。

現在の勤務先のように、医学部志向の強い生徒たちを抱えていると、こういう企画展は大変ありがたい。残念ながら、係員に尋ねたところ、図録もパンフレット、チラシもないとのことであった。もし、何かまとまった出版物ということだったら、東大医学部の博物館に行ってみたら、との示唆をいただいたので、そこまで足を延ばしたが、この金曜土曜は前期入試の個別学力試験のために閉館中であった。

上記の企画展で、興味深かったのは、刑死者の解剖絵巻であった。絵師を立ち合わせて絵を描かせたのか、それとも、解剖にあたった立ち会った医師らが絵を描いたのかで、画像の整理の仕方も違って来るではあるだろう、どちらなのだろう。つまり、臓器なり骨なり、あるいは、血管や神経組織の配置や構造に主要な関心が集中していたのか、あるいは、これらが解剖されたときに現出してくる光景の描写に関心が集中していたのかということである。類似の解剖絵巻と称するものは多数作られたというので、複写や複製の需要も多くはなかったかも知れないが、秘伝の巻物と考えられていたのか、あるいは、出版を予想して準備されていたのか、それも気になった。後者であれば、浮世絵や読み本同様の印刷出版体系に属さなければならないが、それならそれで、いろいろな批判が挿画のあり方にも入り、解剖図の様式も独特のものになったかも知れない（例の枕絵などとの関わりも生じたかも知れない）。

展示の最後は、最近数年の医師国家試験の問題冊子であった。医学部受験生に対しては、求めに応じて時間が許す限り、(面接練習の枠を大幅に超えた)インタビューをしているが、医学や医療の現場について無知の身としては、最低限「医師法」に目を通しておく必要はあるなど感じた。

さて、卒業後50周年の同期会であるが、存命者の七割近くが出席し、八割が近況を寄せてきたのだから、団結は保たれていると言えるだろう。会場に

足を踏み入れての第一印象は、わっ、爺いばかり！であったが、まあ、それは仕方のないことである。その上、わたくしは遠方に住んでいるせいもあって、この類の会合は始めてでもあった。

来賓のヨゼフ・ピタウ先生から、

敗戦後四人のドイツ人が中心になって作られたこの学校は、立派に日本を再建した人たちを育て、今、日本は文化文明に世界一優れたこんなに美しい国になりました

という趣旨のごあいさつがあった。考えてみれば、先生は汚らしいものを見ないで済むようになられてから久しい。

128. (11.02.28) 金曜の夕刻、横浜駅に着いた時は同期会(127回記事参照)受付まで小一時間余裕があったので、有隣堂に立ち寄ったところ

菅原克也：英語と日本語のあいだ

(2011 講談社・講談社現代新書) ISBN978-4-06-288086-2

が目に留まった(ルミネは様子が変わっていて有隣堂の位置がとっさにはわからなかったが)。

最初に「はじめに」を見たが、「コミュニケーション英語」について論じてあり、一般的な理解として、

英語を話せる力が、英語によるコミュニケーション能力である

(p.4) と考えられていることを認めた上で、その具体的な内容を問い質そうとする。もちろん一筋縄では行かない話で、結局、

「コミュニケーション英語」の能力とは、英語の能力試験で高得点をあげる能力だという、逆立ちした理解 (p.6)

なのかという疑念まで、著者は呈する。つまり、優先されるのは、能力そのものではなく能力に伴う種々の意匠であるかも知れず、意匠重視の姿勢こそカンニングの発想が成立する条件に属するものであろう — カンニングで期待されるのはせいぜい意匠の実現だから (なお、117回記事参照)。

実のところ、よく考えるまでもなく、コミュニケーション能力なるものは(ナイーヴに考えても)英語に限らず、あらゆる場で不可欠である。なぜ、英語に限定して話が始まってしまうのか。上位のコミュニケーション能力を規定した上で、下位概念である「英語教育におけるコミュニケーション能力」を定義し、それに従って教育課程に組み込もうとしないのか、わたくしにとり、まず気になるところではある。

少々、先走ってしまった。「あとがき」を見ると、著者の見解がより鮮明になるが、要するに、平成25年度からの高等学校新学習指導要領の規定する「英語」を「コミュニケーション英語」に変更することに伴う深刻な問題点の

指摘とこのようなカリキュラムへの疑念の表明である。著者は明示的に日本の「英語教育」が日本の中等教育の一部であることを強調しているわけではないが、著者の批判は、もとより、その姿勢なしでは意味を持ち得ない。孤立し、自足した「英語教育」なるものを前提にしている限り、「英語教育」をそれだけに限定された技術的なものとして把握してしまう可能性があり、そういう人たちには、著者の批判の根幹部分が理解されないかも知れない。それだけでなく、そもそも「英語教育」の目的をいわゆるネイティブ並の「運用力」を身につけさせることと解しているかも知れない。

関連して思い出すのは、文部科学省のサイトに政策創造エンジン「熟議カケアイ」なるものがあって、そのうちのどれかの「熟議エリア」で「英語教育」が熱く論じられていたことである（「熟議カケアイ」という発想への拙見は別に述べてある）。新学習指導要領の「コミュニケーション英語」が詳細に論じられていたかどうかは記憶にないが、わたくしは英語教育の編成について中等教育を念頭にコメントを送った記憶がある。今、確認しようと思って、熟議サイトに入ってみたが、これは比較的早期のものであったせいか、文部科学省のサーバーには残っていないらしく、再現できない。確か三点挙げたと思う：

- 1) 英語を母語とする人たちと同等の英語運用力を身につけさせる
- 2) 高校段階の日本語水準と同等程度の内容を（世界語としての）英語で受発信する力をつけることを目指す
- 3) 日本語と構造が異なる外国語の有力かつ典型的な例として英語を学ぶ。水準は日常の交流ができる程度を目指す

このうち、1) は一般的には論外であり、一般には3) でよいが、国際的な活躍のためには2) を基本にしなければならないというようなことを述べたと思う。菅原氏が心配されることを、この立場で再解釈すると「コミュニケーション英語」の発想には、このような理念的階層性が全く見られないということになるであろう。

本書第6章は、「英語学習とコミュニケーション能力」と銘打って、英語によるコミュニケーションの種別や程度とそれらをどう獲得するか、そのためには、日本語話者の場合、どのような教育や訓練が望ましいかを詳細に論じている。当然、上に挙げた三点が意識に上っており、評価は、わたくしと重なる点が多い。

前後したが、本書の章立てを挙げておこう。

はじめに

第一章 日本語の環境で英語を学ぶこと

第二章 英語で英語を教えることの是非

第三章 読む力を鍛える

第四章 英語を日本語に訳すこと

第五章 翻訳と訳読 一 対応するもの・見合うもの

第六章 英語学習とコミュニケーション能力あとがき

著者の鍵語で重要なのは「等価性」であろう。「訳読」もこの立場があるからこそ教育上の基本になる。他方、一部の理系の大学入試で英語は課すが国語は課さない理由として、英文解釈や和文英訳があれば国語力は測れるとするのは、趣旨が全く違うものであり、見当違いなものであることがよくわかる。ただし、この辺りの当否は、英語の問題への解答能力と国語力の関係を（入試以外の場で）調査することによって確認できるはずではある。入試関連で言えば、センターテストの設問ごとに、英語と国語の得点の相関を確認することはできるだろうし、そういう調査はあるに違いない。

さて、著者は、日本の中等教育における英語教育の目的は、基本的に、わたくしの上述：

- 2) 高校段階の日本語水準と同等程度の内容を（世界語として）英語で受発信する力をつけることを目指す

このようにお考えであると思う。この立場なら、英語教育は基本的に日本語と英語の差異を、英語と日本語とを意識して対比しつつ、いかに克服するかということに重点が置かれることになるだろう。つまり、「コミュニケーション英語」で想定されている英語で英語を教えるという方法は、相当に周到な日本語によるバックアップ手段を伴わない限り、不適切なのである。

ところで、わたくし自身は概ね半分は英語で英語を教えるというのに近い教育を中学・高校で受けてきたと思う（77回記事参照。2009年5月）。ただし、この水準の易しい英文法や英文解釈は同時に日本語で日本人教員から学んだ。しかも、この時期の収穫は、ドイツ訛の英語の発音であり、肝心の英文法は、後日、フランスにおいて、フランス語を、それぞれフランス語で教えられ、条件法や仮説法の使い方がある程度学んでから多少わかったと思う。それでも、わたくしはフランス語では論文は書けない。英語なら辛うじて書ける — ほとんどの日本人の書いた論文は論旨不鮮明で読む気になれないという評価を跳ね返せるほどのものであるかどうかは不明だが（なぜ論旨不鮮明なのか。文法が不正確であり、語彙の選択が適切ではないからである。見本となる論文の文体を真似するだけでは著者独自の見解を存分に展開できないということでもある）。

ついでに、フランス語での経験だが、大学入学時のフランス語の授業は、まさに、本書84ページに紹介されているGTMのものであった。極めて薄っぺらい文法書に脈絡のない例文が付されたものをあてがわれたが、それで結構むずかしい、つまり、大学生水準なら当然の仏文がとにもかくにも読めたのである。ただ、実際にフランスで生活し勉学を続けるためには不足であった（聞き取りは図示などパフォーマンスの助けを借りると意外とできた）。この

補いは、アリアンス・フランセーズでの古典的な仏語授業でできたのであって、AV中心の会話主体の授業は全く役に立たなかったことを覚えている。

さらに、フランス語に浸かりながら英米系の友人との交際を怠らないように勤めたけれど、英語はなかなか出て来なかった。英語をしゃべろうと思っても、口を突いて出てくる言葉、単語の水準ではあるが、それらが何語に属するかは発語してしまうまでわからなかった。フランス語も英語もその程度の代物に過ぎず、そして、確実に日本語力も落ち、意識していたのは何と頭が悪くなったのかということだけであった。わたくしは決してポリグロットではないが、複数語の言語環境で暮らすときに、かなり確固とした言語基盤を母語で持っているつもりでも、それは怪しくなるし、かと言って、他の言語で置き換えることもできなければ、それはひたすら知的退化を呼び起こすだけという感は覚えた（ただし、数ヶ国語の同時運用は訓練と経験の蓄積である程度改善はできる）。語彙も思考法も近く文化的な共通性も高い言語同士なら、この手の問題の深刻さは大したことはないかも知れないが、日本語と英語、日本語と中国語では、恐らくそうではあるまい。

付記：英語教育には必ずしも限定されないが、NBonline（2011年3月8日）に興味深い記事があった：

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20110303/218714/>

付記2：なぜ、一部の理系の大学入試では「国語」が課されないのかということであるが、恐らく関係者の国語教育に対する不信感が底流にあるのだろう。現行の中等教育における国語教育が、文学教育に偏っているという印象があり、また、入試問題にもその傾向があるとする、理系学部の教員たちの「思い込み」が存在するのではないか。かつての教養課程における英語教育への不信感と似たようなものなのかも知れない。したがって、「コミュニケーション国語」というアイデアも成り立ち得るだろう。入学後（に限らないが）必要とされる国語力は、文芸的なものもさることながら、種々の（学術）情報の受発信、それらの分析や総合、そして、その上での論述や説得などが中心になるのであり、そういう能力の確認をしたいということは、理系以外の分野でも当然であろう。当然、日本語のヒヤリングということも試験の対象になるのではないだろうか。

129. (11.03.09) 金子邦彦氏の「生命とは何か」に目を通して一方で、

フリーマン・J・ダイソン：ダイソン博士の太陽・ゲノム・インターネット

－ 未来社会と科学技術大予測

共立出版, 2000

ISBN 4-320-00560-0

が天神のジュンク堂徘徊中に目に留まった。

標題はややゲテモノ感はあるが、内容は重厚で示唆に富んでいる。十数年前の知見にもかかわらず、本質的に古びてはいないと思うが、まさに、著者ダイソン教授の力量と見識のあらわれであろう。話題は多岐にわたるのだが、恐らく原書では詳細な索引が付いていたと思うが、翻訳にはないのは大変残念である。一方、重要な鍵語には、関連サイトの URL が注記されており、これは訳者の工夫だそうであるが、こういう意味では、デジタル・メディア上の閲読に向いていよう。翻訳の質も決して悪くはないと思うが、二三の留保が要るかなという箇所はないわけではない。

冒頭の「訳者まえがき」で訳者の中村春木・伊藤暢聡両氏は

真のグローバリゼーションとは、本書のように人類全体の幸福を考え、たまたま日本の土地に暮らし日本文化の下で生活している個人個人が、その目的のためにどのような寄与ができるかを考えるところから達成されるのではないかと思います。

と言っている (p.vi)。「グローバリゼーション」と断るまでもなく、こういう姿勢がもともとなければならないとはわたくしの持論でもある。

本書は、

序章

第1章 科学革命

第2章 科学技術と社会正義

第3章 宇宙への道

エピローグ

から成り、最後に、参考文献が付されている。参考文献は、原書のままのようで、邦訳の有無や類似の邦語文献が挙げられているわけではない。

序章において、著者は G. H. ハーディの思い出とともに、純粋数学と応用数学の関係を論じ、後者は科学技術を担保するものであり、その功罪と密着した仕事に関わってきたことを述べた後で、

科学技術は人間の歴史を進ませる力の一つにすぎず、めったに最も重要なものとはなりません。政治と宗教、経済とイデオロギー、軍事と文化の拮抗などは、少なくとも科学技術と同様に重要なものです。科学技術は人類に道具を与えるだけです。人間の欲求と制度とが、その利用法を決めるのです。(p.9)

と言う。さらに、論旨の展開の必要上、理論やモデルの話が出てくるが、

科学者として、私はモデルと理論とをはっきり区別します。理論は、論理と数学とによって構築される構造体であり、私たちが住んでいる実際の世界を記述するものと考えられます。モデルは、はるかに単純化した世界を記述する構造体です。その単純化され

た世界では、実世界のいくつかの性質は持っているものの、他は無視されています。(p.12)

理論とモデルは、どちらも自然を理解するには有効な道具です。それらは異なる意味で有効であり、その違いを意識しておく必要があります。(p.12)

と注意している。わたくしの理解と若干違うところがあるような感があり、よく考えてみなければならない。

続く第1章では、

科学は、二つの古い伝統によって始まりました。古代ギリシャに始まった哲学的思索の伝統と、中世ヨーロッパの初期に始まって栄えた手工業の伝統です。哲学は科学に考察を与え、手工業は道具を供給しました。() 二〇世紀になって、やっと科学と製造業とが分離できないほどに結びついたので。(pp.24-25)

と注意して、科学と手工業の関わりを広い文脈で論ずる。今日の「手工業」は、最先端科学の実験装置、コンピュータからソフトウェア産業まで包括していると言っている。

関連して、ピーター・ガリソンの見解を紹介し、クーン学派の批判を行っている(クーン自身はクーン学派ではないそうだが)。

ガリソンにとって、科学における発見は、すべて新たな道具によってなされたのに対し、クーンにおいては、新たな概念によってなされたのです。この二人の図式は真実ではあるものの、どちらも完全ではないと考えます。科学の発展には、新たな概念と新たな道具の双方が必要だと思うからです。(p.33)

変な感想だが、実験科学者はモノと接しているだけに、頭でっかちに成りがちな理論家にはなかなか望み得ない健全さがあると(三流の数学者である)わたくしは思う。

第2章であるが、この章は凄いとしか言いようがない。目から鱗という指摘がたくさんある。科学技術が社会正義に寄与するということが、少なくとも短期的には単純なことではなく、得失を伴っていることは、言われてみればその通りであるが、見落としがちなことではある。著者は

科学技術の変化がまず起こり、その結果として社会的公正が増進したり後退したりした歴史的な過程 (p.97)

を身近な例とともに指摘する。

さらに、倫理が科学技術を動かすというマックス・ウェーバーの視点は一面的なところもあると言うのである。これは二十世紀の科学者ならではの見識で、十九世紀のウェーバーの歴史解釈に今日の観点で限界が見えない方が

どうかしていると言わなければならない。事実、これは著者だけの意見ではないとして、リチャード・トーニーの見解を紹介する (pp.98-99)。そして、ダイソンは

倫理によって科学技術が及ぼす悪影響を最小にし、よい効果を最大にするにはどうすればよいのであろうか？ (p.99)

と発問する。この章の残部では、太陽とゲノムとインターネットの可能性を詳しく論じながら、

倫理から科学技術への、そしてまた倫理へともどる因果関係の鎖は、技術的な進歩と倫理的な進歩を協調させる道を開くのだ (p.99)

という主張を展開する。著者は

新しい科学技術は、世界をより幸福なものとする絶好の機会を与えてくれる (p.99)

と言うのである。

第3章で、NASAの宇宙開発計画を論じながら、短期的な目的、長期的な目的、つまり、プロジェクトを支配する時間単位の分類と選択が適切になされることが非常に重要であり、その辺りが混乱していたNASAの計画のコストパフォーマンスが著しく悪かったことを指摘する。このような戦略的な計画の作成や実施では、アメリカは日本より数日の長があると思っていたが、アメリカでもそうなのか、という思いがする。政治が絡み、ショー的要素が加わると、課題の本質がぼけてしまうということなのだろうか。

いずれにせよ、宇宙空間に物資を運ぶということと、太陽系の他の天体に、それらはいくつか候補があるが、それらに人類が移住するということは、基本となる時間単位が違い、当然同列に論じることはできないと注意している。後者は、生物学的時間が不可欠だと言うのであり、他の天体における生命の可能性の確認、特に、「恒温性植物」(pp.127-129)の発見なり、(遺伝子工学などによる)開発が先行しなければならないと言う。なぜなら、

人類の植民の成功に絶対に必要なことは、その土地の生態系を深く理解し、人間がそれを破壊することなくその一部になれるようにすることです。(p.151)

であり、他方、

人類の歴史における数少ない不変の要素の一つは、人々は移住するということです。(p.152)

だから、いずれは宇宙に出ていこうと予想する。もっとも日本人は比較的この傾向が小さいのかも知れないが。とまれ、居住先の候補として、「カイパー・ベルト」(pp.153-156)などを挙げている。

ただ、人類の宇宙進出にあたっては、生物学的準備も不可欠で、この文脈の延長上で、イアン・ウィルマットによる「クローン羊ドリー」の意義も論じることができる。そして

イアン・ウィルマットの成功は、彼が分析的な遺伝学の分野ではなく、実用的な動物交配の分野にいたことに起因します。p.158

と注意している。なお、山中伸弥教授の iPS 細胞の合成は 2006-2007 年である。

クローン技術や不妊治療を論じて

子どもを持ちたいという願望は、私たちが進化して来た中で、人間の本能に組み込まれたものだというものです。(p.161)

と言い、

成功する子どもを持ちたいという願望です。(p.162)

によって、例えば、私立の進学校が栄えているというのである。日本もこの点では例外ではないが、「成功」の範囲が狭いかも知れない。この延長上に「生殖遺伝学」なるものが成り立つ可能性があり (pp.162-167)、そこには、「ジェンリッチとナチュラル」(p.163) というような「人類のいくつかの種への分化」という厄介な社会的、倫理的な問題 (p.167) が発生するおそれは強い。ただ、ダイソンは、よい可能性もあることを指摘し、結局、ここでも鍵は人類の叡知というようなことになる。

最後に「エピローグ」において、著者はコンピュータとネットワークの可能性を論じている。最後のパラグラフが重要である。敢えて、一文を抜き出せば、

社会正義と人間の自由にネットワークを奉仕させる責任が、私たちにはあるのです (p.175)

となるであろうか。

130. (11.03.23) 東北地方太平洋沖大地震とそれに伴う大津波による東日本大震災は、広範囲にわたって多大かつ深甚な被害をもたらした。被災した方々のお苦しみはいかばかりかと想像しても尽きることはないであろう。実際、地震の実感が薄い遠隔地のわれわれも相当に受けているが、それは報道のゆえばかりではない。東日本大震災は、われわれ自身のことでもあり、実際、世界の形が変わり、世界の中での日本の位置に影響が及ぶだろうと思われるからでもある。

現在は粛々と救援活動と復旧支援活動が続けられており、この大震災による被害の全貌も明らかではなく、したがって、その結果について評価をする時点としてはなお早すぎるようではあるが、それでもいくつかの構造的な問

題は明らかになった。そして、わたくしの目下の立場であるが、四月に入ると早々に入学式があり、その場で式辞を新入生と保護者に向かって述べなければならない。他に、新学年の始業式もある。いずれにせよ、わたくしは、式辞、告辞を準備しなければならない時期にいる。特に、入学式式辞では、今回の大地震は、新入生たちが世に出る頃の、つまり、概ね10年から15年後の日本に深甚な影響を及ぼしているであろうと言わなければならないだろう。

先日の卒業式や学年の修了式の式辞では、わたくしは、社会的関心をしっかりと持てと生徒たちに訴えた。しっかりとした職業意識は不可欠だが、専門職業人としての見識と経験は、当然、社会において生起するさまざまな事象を大局的に把握する力として生きるはずだということを自覚してほしい。そして、その自覚のもとに振る舞ってほしいのである。相手が青年であれば、しっかりとした政治的関心を持ってと言ったであろう。だが、十代の少年少女には、それは早すぎると考えたからであった。

ところが、東日本大震災の結果、日本は「本物」の「政治家」を多数必要とすることになる、というのが、わたくしの見るところである。してみれば、有り体に、新入生諸君に政治家を目指せと訴えてもいいのではないかと考えられるだろう。とは言え、それを要らぬ誤解を招かないように行うのは極めて難しい。そもそも、このことと風が吹いて桶屋が儲かるという話とどう違うのかいぶかしむ人もいるだろう。その上、わたくしの現在の勤務先の学校には、伝統というか、癖ないし評判というか、そういうレッテルのようなものが貼られているらしく、しかも、それは政治家を目指すこととは程遠いものである。その上、政治家をめざせと言っても、向き向きはある。もちろん、何人かは中央地方の議員を務めている卒業生がいるのだが。

こう考えて来ると、新入生はおろか生徒に向かっても「政治家」を目指せとは言いがたい。幸い、どんな職業に就くにせよ、社会的関心を失わずにいれば、職業生活を通じて得た経験を良質な政治的見識として活かすことができるはずだ、そのような人生、そのような職業生活を実現せよと、訴えることはできるのではないかと。しかし、よく考えてみると、こういう言辞だけでは、現在のわれわれの建前、つまり、(民主主義成立の原理である)自立した個人たれということのただの追認になってしまう。追認だけで済まないと考える理由が述べられなければならないだろう。

さて、現在の勤務先であるが、ほとんどの卒業生は社会の中堅として極めて堅実な職業生活をおくっている。例えば、医師が典型であり、実際、勤務先には医師志望という生徒は多い。医師という職業は、日常的な社会の中で成立し、現場での症例経験によって成長していくものである。当然、社会的関心なしでは成立しないだろう(したがって、研究対象への密着度が支配する医学や生命科学の研究者とは峻別されるべきものであろう)。医師には、この意味で、良質な政治的見識は期待されてしかるべきではあろう。そして、相当の自発的な意志が働いている場合には、政治的関心が日常的な時間や空間

の単位を超えるということも大いにあるであろう。だが、それは放任されていて到達できる境地なのだろうか。

わたくしが校長になってから、若干、校訓と言うべきものを改めたが、それ以前、強調されていたのは『論語』から取った一句であった。初代の校長が、生徒が校外の世情に惑わされて政治活動の真似事をしているとして、その状況を憂えて色紙に認めて寄せられたものという。もとより、『論語』は、今から二千数百年前、異境の地を彷徨していたとされる哲人の言説を留めたものとして、古来、聖典として尊ばれてきたものである。しかし、当ブログの本来の趣旨の著者 Ivins（プロフィール参照）に従って考えれば、所詮古代人の発想をまとめたものであり、現代にもなお通用するかも知れない言説が含まれているかどうかを検証し、かつ、そのような言説を抜粋しようとするためには相当の見識と手続きが欠かせず、しかも、それ自体はひとえに解釈者に属するものであって、『論語』が含んでいたかも知れない内容とは本質的に無縁なのである。その限りでは、『論語』の一句だからと言って恐れ入らなければならない理由はどこにもないのだが、しかし、一方、我が国には、しかるべき解釈のもとでの『論語』、つまり、解釈を正当化するための符牒としての『論語』、というものを尊重してきた歴史の重みがある。さればこそ、初代校長から寄せられた一句に、生徒たちは政治的言動から身を遠ざけよという先生自身の含意が籠められていると関係者に理解されたと言えるのかも知れない。

かくて、卒業生たちが概して、政治的野心を燃やしたいという誘惑には駆られず、妙な冒険よりも地味で堅実な社会人としての人生を選択していることは、まことに結構なことなのだが、それは日本の社会が今後とも安定しているという大前提あってのことである。

しかし、東日本大震災は日本の社会が今後とも安定しているという大前提を破壊してしまったのではないか、というのがわたくしの見るところである。具体的には、どういう不安定化の引き金を引いたと考えられるのか。

まず、福島第一原子力発電所の供用停止を始めとする太平洋岸のエネルギー・プラントの不安定化である。このことは、首都圏やその周辺がその規模と機能を維持する能力を突如殺がれたことを意味する。放置すれば、首都圏はその規模と機能を維持しようとする力が暴走して、供給エネルギー規模に留まろうとするよりも、さらに、規模と機能を蕩尽してしまう。そして、首都圏とその周辺の日本社会に占めている重みを考慮すると、このことは、日本全体の産業社会の崩壊を意味する。もとより「放置すれば」ということではあるが、有効な手だてが、実は、管理された形での首都圏の規模縮小だとすると、抵抗も多く決して容易なことではないことが予想されよう。

つぎに、日本の国際的な信用失墜ということが起きるだろう。これは放射性物質に汚染された日本製品ということではない。日本が精密機器の主要な部品供給者でありながら、製造工場の地域配置の偏りから、世界的な供給不

安を引き起こしたということに拠る。つまり、世界経済に対して負っている責任というものの自覚の欠如と言い換えてよいだろう。これは、もちろん稀土類の供給に関連して某国政府の取った戦略的措置のような国家意志の行使の結果とは違い、国としての戦略を欠いていたために起きたことではある。しかし、需要国側から見れば、同種の不安に他なるまい。いずれにせよ、生産拠点の偏在が国内需要だけでなく国際需要に応えられないという事態を出来たことは決して忘れられてはならない。当然、需要国側は日本への依存度を下げる方向に動くであろう。そして、対策として、個々の日本の企業としては、生産拠点を海外に移すことを考えるであろう。だが、そうすると、進出国の法体系下での生産になり、長期的には、日本から離れざるを得ないようなことになるだろう。それは雇用の喪失を意味し、日本のさらなる衰退を招くであろう。そして、実は、そうなって行くであろう事態を読めなかったという政策当局者や企業経営者の資質や素質が本当の問題なのである。日本が良質な本物の政治家を必要とするというのは、まさに、そういう人たちを欠いていたために起きてしまった、このような事態の再発を防がなければならないからである。

さらに、もう一点ある。今般の大震災に関連して、関東大震災の事例が想起されている。しかし、あのかのときの震災復興の全貌が本当にしっかりと評価されて来たであろうか。関東大震災の影響は、当時の大日本帝国統治下の地域隅々まで及んだことはよく知られている。例えば、当時の京城市（朝鮮）の都市改造は、まさに、関東大震災の結果であった。だが、世界史的な文脈ではどうか。実は、もっと深刻な影響があったかも知れないという話を聞いたことがある。つまり、東アジア・太平洋地区の重心地区の移動が頓挫したというのである。言うまでもなく、20世紀の前半まで、世界史的な観点からは、東アジア・太平洋地区の中心は上海であった。上海の直接的な意義は複雑だが、世界的なレベルでのこの地域の活動はすべて上海に中心があったと考えてよいであろう。日米貿易にせよ、日本と欧州との貿易にせよ、上海に本社がある貿易商社の横浜支店なり神戸出張所なりを經由してはいても、決定権は上海にあったのである。そして、第一次世界大戦を經由して、こういう決定権がまさに横浜に移ろうとしている、そういう時期に関東大震災が起きたわけである。この意味は、上海を仕切っていたのが、大英帝国であり、アメリカ合衆国であったことを思い起こすと、これら両国への影響力という点で、ついに大日本帝国は中華民国の足下にも及べなかったということである（と、さる経済史家から聞いた。関東大震災が太平洋戦争の誘発になったという説）。ことの真偽はさておいて、国の中核に及ぶ大震災には、世界史的な影響があることをしっかりと意識すべきだろうと思う。今般の東日本大震災の想定しうる世界史的影響とは何かということは、しっかりと評価しておかなければならない。これも、良質な本物の政治家のなすべき仕事であろう。いずれにせよ、従来の安易な世界が生徒たちの前にあるわけではない。

生徒たち自らが、勘を研ぎ澄まして社会の変化していく動向を読み取ることが、これからは何よりも必要になるのではないか。それだけではない。受け身ではなく、一步進めて、自らが社会を設計し、世界を造形するのだという自覚を抱くことが何よりも重要になってくるのではないか。だが、守るべき原則なしでは漂流してしまう。理想とすべき社会の形を洞察し、それとの距離を測るという形で現下の社会変化の動向を読み取ることが大切である。それでは、理想とすべき社会とは何か。それは、最低限、ダイソンの言うように（129回記事参照）、公正さが担保される社会でなければならないだろう。

そうして、予定調和の安定した日本社会の継続を前提に進学実績だけで評価されてきた学校も、今後はそれでは不足のはずである。だが、こういう学校は、世間に添いながらでないとなり立たない。いや、世間より少し遅れ気味でないといけないのかも知れない。えらく不誠実な話なのだが、この辺のごちゃごちゃした事情を承知しながら、まずは、どう直近の入学式の式辞を作るか、それが問題ではある。

付記（平成23年3月31日）：東日本大震災関連の報道に接して、もう一つの課題が、良質なジャーナリストの必要性であることを痛感せざるを得ない。これはやや別の観点で、以前から指摘されていたことではあろうが、今般は深刻である。要するに、硬直し、現実とはタイムラグのある発想で、この大震災の把握をされていたのでは、本当の意味の復興の示唆は得られないだろうと思う。伝えられている「復興策」では、東北・関東の復旧策のために、日本の他の地域がさらに痩せ細ってしまうだろう。今の日本の体力では、「復興策」としては日本全体を視野に収めての資源配分を前提にしなければならないはずだが、東京にいたのでは見えて来ないのだろう。

付記2（平成23年4月5日）：結局、式辞、告辞の類の過激性は抑制的にした。しかし、東日本大震災の今後への影響の深刻度は相当のものであり、やはり、「最良の人材」が政治に向うような体系を早く作り上げておかなければと思う（社会制度全般、学校教育から選挙制度まで）。大震災の結果、日本の研究開発の拠点、特に、先端的な部分に参与している東北大学、筑波研究学園都市、東京大学などの研究施設が壊滅的な被害を受けた。復旧に時間が掛かるだけでなく、放置すれば、研究者の流出が起きるだろう（かつての旧ソ連・東欧やイランの崩壊のときに何が起きたか）。このような拠点集中を招いたのも、政治だけの問題ではなく、研究開発の当事者や企業の経営者の安易な姿勢があったことは疑いがないが、なぜ、そのような安易な姿勢が可とされてきたかが問題である。この点への反省がないと、そして、その内容は付記（前項）に言及したことと被るのだが、復興方法を間違えてしまう。報道内容から見ると、悪い方向に行っているようだが、今、研究開発拠点の復旧に際して優先的に行うべきことは、研究者群を研究・開発の一線に早く戻すことであって、考えようによっては、被災した拠点類の復旧は先送りしても、西日本の拠点を強化することであろう。ところが、そのような決断がで

き、かつ、実行に移せるような、そういう「指導者」がいるだろうか。これは、研究開発拠点の復旧だけではない。今、資源類を被災地の復旧に集中的に廻すと、以前の日本とは違い、被災地以外は枯渇してしまいかねないくらい、国力が弱っていることを、どれだけの人が認識しているだろうか。この認識の有無が、復旧計画の策定に大きく関係する。従前のつもりで立案したのでは、いざ実施をしてみると次々と不都合の連鎖が生じかねないと危惧する。いかなる国も、最先端の研究開発能力を欠いては、現代の世界で生き残ることはできない。大震災で、この能力が大いに毀損された日本にとって、未来の機会は著しく縮小したことを覚悟しなければならない。

付記3（平成23年6月12日）：第137回記事で、日本（の伝統）的空間認識からは、「客観的な空間」、ひいては、「公共的な空間」というアイデアが育たないのではないかと述べた。これは、「なぜ、日本では近代科学が発生しなかったのか」やそれに関連する一連の問いの解答を探る過程で逢着したわたくしの見解であるが、今日の日本でも、多分に、こういう伝統的な空間の意識に基づいた社会観が残っているであろう。このように考えると、この回の記事の末尾に触れたような「公正さが担保される社会」というような公共性を前提にした発想を定着させることには、それ自体大変な（社会的な意味で自覚的な）努力が要ることになるわけである。何となく堂々巡りになるところが哀しい。

131. (11.04.06) かつて関係していた大学の部局からある研究所が分離し、その開所式というのに顔を出してきた。九州大学マス・フォア・インダストリ研究所という。カタカナ名前が気に食わないが、言葉にうるさい数学者が散々議論してこうなったのであるとすれば、それなりの理由 — 公開可能かどうかは別として — はあったに違いない。

実は、別に用意していた記事があったのだが、それを差し置いて、このような、まあ、何というか、時宜性を無視できないような記事を書いたのには、これまた、それなりの理由がある。

とまれ、開所式のうち、本当の開所式には校務の都合で参加することは不可能であった。午後の講演会の方にだけ顔を出したわけである。というわけで、午前中どんな話というか、挨拶が交されたのかは知らない。ともかく、午後の講演会は、なかなかのメンバーが6名揃ってのものであった。基本的には、パワーポイントを用い、中には動画を交えてのものもあったが、全部が全部そうではなかった。

最初に、若山正人所長の挨拶があった。標題ページの右下の隅に、講演会の当日の日付の略記 H23.4.5 があり、それについて、なぜ西暦で記さなかったか、という釈明があった。いかにも若山さんらしいものだが、数を組み合わせるの複雑な遊びということではない。Hは「ひとつ」の頭文字であり、また、「はじめ」の頭文字でもあるということだった。12345…と進んで欲しいものである。

最初の講演は、京都大学数理解析研究所の森重文氏、われわれには親しい人ではあるが、紹介では、数学者としての業績への言及はなかった。メモ程度のノートを部分的に取っただけだが、総合科学技術会議の議員だか専門委員を、個人の資格で、しているとのこと、その関連の提言がいくつか印象に残った。特に、競争的研究資金に関連して、その構造的な問題点、なかでも、長期にわたって独創的な研究の萌芽の発生を維持するものにはなりにくいという指摘は同感である。少額の資金を広範囲に配分する工夫は重要で、全体としての成功件数を上げ、かつ、多様性を確保するための必須の政策だろう。鍵は、一定期間、安定的に研究できる環境を（特に若手の）研究者に保障することであるということである。他方、基礎科学と実社会との連携（だったと思うが）を実現するために試みられている努力例として

- 1) スーパー・サイエンス・ティーチャー養成プログラム（京大理+大阪府教委）
- 2) さきがけ・クレストの西浦プロジェクト
- 3) 九大 COE の長期インターンシップ

を挙げた。3) は、このマス・フォア・インダストリ研究所の趣旨と密着したものが、祝儀として挙げられたものではない。1) は、PD（ポスドク）級の研究経験のある人を高校教員に転身させようというプロジェクトだそうだが、わたくしの印象としては、中等教育界（特に、公立のもの）と先端研究の現場とは、前者が末端官僚機構化し、後者は国際流動化しているという意味で、文化が違ってきており、なかなか難しそうである。もちろん、プロジェクトの意味は、まさに、この文化的な差異をどう埋めるかというあたりにあるらしい。

次の講演は、一橋大学経済研究所の青木玲子氏であった。この方は、広範囲の関心分野のうちにイノベーション政策が含まれており、総合科学技術会議の議員でもあった。理学士（東大数学、昭和47年）とのことだが、その後、筑波大学経済学系を経て、スタンフォードに学び、ストーニー・ブルックなどのアメリカの大学のファカルティであったらしい。音の区切りは明晰で声の通りもよく、発言は鮮明に伝わったが、日本人離れした日本語でもあった。肝腎の話の内容であるが、東日本大震災がどうしても話題になり、大震災に伴う総合科学技術会議の審議方向の改訂について説明があった。大震災の被害見積りでの現時点での推定20兆円と日本のGDPのフロウが昨年度で99兆円であったことを比べて、日本経済の規模からは大震災の復旧は5年程度で可能だろうと青木氏は述べたと思う（原子力発電所事故に伴う風評被害の可能性への言及はあったが、わたくし自身は、そういうものがあったとしても中期的には問題視に値しないと思う）。確かに、金額に換算してのマクロの評価では、そういう推計もできるだろうが、問題は動的な世界の中での復興計画であり、かつ、復興の鍵を握るのは金額ではなく、いくつかの先端分野の研究・開発・生産の拠点性を日本が維持できるかどうかにかかっている

ると考えている立場からは、このような想定は荒すぎ、また、甘すぎるという印象を受けた。この点については質問で確認しようと思ったが、森さんの講演のときに、スーパー・サイエンス・ティーチャー養成プロジェクトに関連して意見を挟んだばかりなので、遠慮した。

引き続き、日本経済新聞論説委員の滝順一氏の講演があった。今回の講演の中で唯一パワポなしであった。自分は「文系」であるとの断りから始まり、やはり、東日本大震災以後の日本の「風景」が話題になったが、前半部分はよく覚えていない。evidence based とメモしてあるから、災害の正確な把握から復興が始まるとでもいうような話があったのかも知れない。後半で、今回の東日本大震災が日本の科学・技術に及ぼす影響について言及があり、要するに、

東日本大震災は国民の科学・技術に対する不信の原因にならないか

と述べられた。福島第一原子力発電所の事故は原子力政策への不信を招き、マグニチュード 9.0 の東北地方太平洋沖大地震の発生を想定できなかった地球物理や地震学への不信が生ずるだろうというわけである。そして、原子力のように、科学・技術が政策推進の手段と化してきたこと、また、地震学のように不確実性があるのに社会的にコミットすることは、いずれも問題があり、今回の大震災は、このような姿勢の手痛い敗北を示すものであったと締めくくられた（と思う）。

これはいけない、とわたくしは思った。質問の形で、科学技術政策のそのものは（本来）科学者や技術者が決定するものではないはずだ、したがって、不適切な運用があったとしても、それが科学技術への不信になるのはおかしい、本来責められるべきなのは適切な政策判断ができなかった政治家だろう、それというのも、「文系」とか「理系」という安易な姿勢を隠れ蓑に判断放棄をしているからではないか、今回の大震災の教訓は、このようなことを改めなければならない、ということにあるはずだ、と問い、さらに、震災復興は簡単にできるというようなことを青木さんは仰ったけれど、大震災の影響は東北・関東の局地的なものではなく、特に、阪神・淡路の規模と比較して大丈夫だという議論は、阪神・淡路のときと比較にならないくらい国力が低下していることを看過している議論に見え、卓近な影響例を挙げた後で、震災復興には決して楽観的にはなれないこと、特に、関東大震災の 10 年後、20 年後に、5・15、2・26、戦争と続いたことを考えると、このような事態が起きないような、周到な復興策でなければならないだろうとコメントを加えた。

すると、滝さんは、「文系」、「理系」の分類が当然のような話し方をしたのは不適切であった、と釈明し、さらに、科学技術政策については、政治家の資質こそが問題だというのは理解できると答えられた（同意できるという趣旨だったかも知れない。大事なところを聞き漏らした。さらに、わたくしが挙げなかったメディアの質やその責任にも言及があった）。その上、政治家

の資質という点で、(立場上明言されたわけではないが、言及のなかった点を補うと)大震災の影響について(日本の政治家を除き)他国の政治家たちは、ただちに爾後の国際社会における日本の存在感の低下度合いを評価し、それを前提に、日本のいない世界をどう仕切るかのせめぎあいを始めていると言われた。何だ、ちゃんとわかっているじゃないか、紙面に現われる記事との乖離はどうしてくれる、という印象は、かつて、学生時代に某大新聞の論説委員のご子息の家庭教師をしていた頃、帰宅された論説委員氏と話しながら、その新聞の論調と論説委員氏の個人的見解との相違が面白かったのと余り変わらない(論説委員氏の見解の方は当時の某紙の論調と違って今日でも価値がある。合議の結果おかしなことになっていたのだろう)。何と言ったらいいかかわらないが、やはり、この辺にいかにも日本的な「文系」と「理系」の問題もあるのかも知れない(なお、フランスでは、政治家を目指す青年が数理能力の高さを示すために、中等教育では理数コースを選び、高度の科学技術者養成の障害になり困ったことだ、と、今から三十年位前には言われていた。今は知らないが、基調は変わってはいまい。)

その後、休憩になり、関東大震災の後の5・15、2・26、戦争との比較はおかしい、今はそんな時代じゃない、と、かつての同僚から言われた。この点は、前回の記事で、真意を述べてはある。滝田さんも、その線で答えられている。なお、科学技術政策については、32回の記事(2007年9月)参照。シヴィリアン・コントロールは要るのである。

その後の講演は、日立製作所横浜研究所の寶木一夫氏、新日本製鐵先端技術研究所の橋本操氏であった。前者は暗号、後者は素材開発が主題であったが、さすがに周到に準備された講演で、面白かった。何冊かの書物の紹介もあり、確認をしてみたい。

さらに、休憩を挟んで、最後の講演は、東京大学先端科学技術研究センターの西成活裕氏であった。数式も出てきたが、渋滞学の動画の提示もあり、多岐にわたる研究と活動力・行動力の高さにひたすら感心するのみ。へー、こんな人もいるんだ、と驚くだけでは能がないが、的確に構成された知識技能と自分の目で対象をしっかりと見抜く眼力と胆力、そして、忍耐力が基本なのだろう。

付記(平成24年9月8日):文部科学省が小学校4年生以下にも英語教育を推進したいとする新聞記事を見、コミュニケーションという文字が躍っていることに、苦笑いを抑えつつ(168回記事参照)、文科省のサイトの閲覧をした。該当する発表は確認できなかったが、本末はあるわけで、メディアの報道姿勢に疑念を覚える。ただし、このブログ記事に付記をつけたのは、「数学イノベーション戦略」関連の中間報告や関連する報告会・審議会などの記事をサイト内に発見したからである。後者に関しては、しかし、発表者のpdf稿か少なくとも目次か摘要の参照が可能な形でないと、意味はあるまい。実際、発表者は氏名・所属がはっきりしていたが、審議会委員は、姓に続けて

委員とか主査とかあるだけで咄嗟に何者かわからず、確認のために、サイト内を少々彷徨って、前者の中間報告を見つけたのであった。

132. (11.04.23) 天神のジュンク堂をうろついていて

岡本隆司：中国「反日」の源流
講談社（講談社選書メチエ 489）2011
ISBN978-4-06-258490-6

という本を見つけた。一月に第一刷、三月に第二刷であった。

中国はわからない、妙に理解を試みるより、敬して遠ざけておくのがよいような感があるが、そうも行かなかつたし、ますます、そうも行かなくなるのが、われわれの、少なくとも地理的状況ではある。著者は、あとがきの冒頭で

十数年前、講義で「日本の不幸は中国のそばにあることだ」とい
うと、必ず「何でそんなひどいこと言うんですか」と食ってかか
る学生がいた

(p.236)と述べている。その後の文章に真意の説明があるが、もちろん、わたくしは直観的ながら、ほぼ同意する。地理的だけでなく、少なくとも日本側からの心理的な距離感の取り方の難しさがあるようには思っていた。

このあとがきは、文献紹介を兼ねながら、著者の姿勢が明確に述べられており、本書の価値がよく伝わってきた。17世紀以降の「日本」との関わりが中心であるが、ともかく否応なしにそこにある中国とはどんなものか、それを思いいれや思いこみを排しつつ、淡々と記述する、そういうことである。

なお、エピローグに、「歴史認識」に関して、著者は、

一方が他方を一方的に「正しく」認識するのではない。互いがある
りのまをみつめなおし、その姿を尊重する。歴史の役割はそこ
にこそ、求めるべきであって、われわれも努力しなければならない
い (p.235)

と書いている。もちろん、こういうことが常識化していれば世話はないのだが。先に(98回記事参照)、加藤陽子氏の書物でも思ったが、対象を客体化し相対化して描写することができる姿勢、たとえば、本書の場合、経済社会史だが、そういうものがあるからこそ、記述は信頼でき、了解が伴うと痛感する。この本は、一口で言えば、表題にゲテモノ感はあるとは言え、内容は日中それぞれの近世近代史の叙述、特に、清という統治構造の複雑さが詳述されており、実際、この点の理解があつて初めて「日中関係」の難しさの本質が垣間見えたように思う。非常によい本である。

さて、最初にあとがき、続いてエピローグと変な紹介をしたが、目次は、

プロローグ

第一部 「近世」の日本と中国

第1章 東アジアの一八世紀

第2章 統治の仕組

第3章 明から清へ

第4章 マクロな動向

第二部 「近代」の幕開け

第5章 一九世紀をむかえて

第6章 西洋近代との邂逅

第7章 開港と開国

第8章 動乱の時代

第三部 近代日中の相克

第9章 近代日清関係の始動

第10章 日清対立の深化

第11章 「洋務」の時代

第12章 愛国反日の出奔

エピローグ

急がば回れーあとがきと文献紹介

となっている。そして、索引が付されている。

「中国」がなぜ「わかりにくい」のか、というより、そもそも「わかる」ような代物なのか、その問いに対し、まず、第一部では、明の独特の経済と統治構造に遡って、説明を試みる。「中国」を中心に据えているのは当然だが、同時期の日本や域外の情勢とも比較しながら論述する。明の崩壊過程やヌルハチの台頭、清朝の性格など、非常に明晰に説かれており、岡田氏や古田氏に言及のあった清の統治体系、つまり、清の皇帝が、満州の皇帝であり、ジンギス汗以来の大汗であり、かつ、漢族にも清の皇帝として君臨するという意味と実際の統治の構造との関わりがわかった。

特に、「中国史」を王朝交替式の観点から理解しようとするのが、現在の中国人自身がどう思っているかは別として、全く間違っていることがわかった。「中国史」は、地域史、民族史、文化史、経済史、社会史などが、いわば並列した形のままで記述されなければならないようである。これは、日本や西欧の「中国史」の研究者には常識なのだろうが、どうしてそう思わなければならないのか、という理由は、本書の詳しい説明で初めてわかった（ような気になれた、少なくとも）。さらに、「近世中国史」との対比で、同時に「近世日本史」の意味もわかるように、記述されている。なお、第一部の著者による要約が pp.85-86 にある。

前後するが、著者は

歴史を学問として学び、また教えることに携わる者として、歴史を「暗記科目」というのは、絶対にやめてほしいと思う。正しく

ないばかりでなく、歴史嫌いを増やすだけだからである

(p.18) と言っている。暗記が苦手な歴史嫌いになるのならまだよい。暗記が得意で断片的な事項の羅列だけで、歴史がわかった気になる弊害は遙かに大きかろう。

第一部では、日本と「中国」の国内事情が両者の経済関係とも密着していること、特に、日本の銀銅の資源枯渇が以後の日中の対外的な貿易や内国経済の構造に及んだ影響が述べられる。物産としての「唐物」を銀銅で購えなくなり、日本が商品作物の生産と国内流通の発達によって、これは当時の日本の統治や行政「幕藩体制」の性格によるのだが、一種の自足型の経済、著者のいうクローズド・システムを完成させ、農村部を含めた富の蓄積が始まる。墮胎や間引きによる人口調節に対する解釈、著者独自のものではあるまいが、これも知らなかった。道義や感情「政治の重要な動機であるが」に重点を置きすぎると一方的な思いこみになる一例かもしれない。

第二部では、江戸期日本の政治経済構造と清の政治社会ないし統治構造との違いが西洋の衝撃に対する反応の極端な相違として現れたことを詳述する。アヘン戦争の意味もさることながら、清においては開港であり、つまり、局所的対応として済まされ、日本においては開国として統治構造の変化に至った理由が展開される。

そして、第三部では日本と清との相克が論じられ、日露戦争、第一次世界大戦の戦後処理まで論述される。再び、エピローグに戻れば、著者は、

社会構造およびその差異が、経済制度・政治権力の性質とそのちがひとなってあらわれ、それがさらに、対外姿勢とその齟齬をつくりだす。そのそれぞれが、相互の理解不足をもたらし、歪んだイメージや誤解、矛盾をうみだし、対立を重ねて破局にいたる。その破局の結果がまた、あらたな対立の出発になる。近代の日中関係と反日の源流を形づくった歴史経過も、ほぼ以上に尽きている。

と述べる (p.231)。歴史は人間が作るものだから、常識の範囲を出るものではなく、したがって、

歴史事実というのは、客観的なものとして共有できるし、未来への指針にできる

(p.231) と言い、だから、全体の筋立ては日中間に限った話ではないはずだと強調される。この姿勢こそが本書の価値の「根源」であろう。

133. (11.05.01) 自宅近くの駅ビル内の本屋で目に付いた書物である。

小路田泰直：邪馬台国と「鉄の道」日本の原形を探求する
洋泉社, 2011.
ISBN978-4-86248-723-0

著者は一流国立大学所属の歴史学の研究者であり、専門は日本の近代史とのことだが、考古学—古代史的に比類のない環境に勤務先があり、当然のように、「日本国家」成立史に想が及ぶという趣旨の述懐がある。

本の標題が示唆するように、著者は、魏史倭人伝にいう邪馬台国は大和にあり、卑弥呼は倭姫、箸墓古墳を卑弥呼の墳墓に比定する。根拠として著者が挙げるのは、魏史の記述の他、日本書紀、古事記の記事に加え、銅鉄の精錬に関する技術や原料の流通とその記憶を留める地名群の分布についての著者の考察である。

わたくしは素人であるから、たとえ著者が近代史の専門家であって考古学や古代史は余技に過ぎないとしても、基礎訓練には共通のものもあるだろうし、しかも（業界では）権威ある機関の所属であると考えれば、なるほどと相づち（これも鍛冶の用語だが）を打ちたいところである。だが、少し立ち入ると、結論の当否以前のことであるが、著者の展開する論述の構造に抵抗がある。一般に「業界の作法」と言うべきものがあり、したがって、（歴史学の）「業界」では、こういうアプローチを取らないと、むしろ違和感を覚えられてしまうのかも知れない。だが、わたくしにとっては、そうではない。

典型的な論述の構造は、次のようになっている：

私は甲は乙だと思う

（詳述は省いて）明らかに甲は乙である。

したがって、甲は乙である。

ことさらに注意することではないが、これでは最初から「甲は乙であると信じる」と言うべきではないだろうか。もちろん、全部が全部、こういう論述でできあがっているわけではない。だが、大事な論点では多用されている。似た例であるが、

古代において、列島中最も域内交通・通信インフラの発達していた地域はどこだったのか。統計があるわけではないので、断定はできないが、明らかに琵琶湖周辺であった（p.149）

という表現があり、琵琶湖周辺がこのような属性の地域として規定されてしまう。ここでは論理的な手続きがいくつも飛んでおり、結論は正しいかも知れないとしても、このような論理の運びでは論述全体の信頼性の獲得は困難と言うべきである。わたくしなら、

琵琶湖周辺は明らかにそのような地域であり、当時の交通体系や流通、経済について今まで得られている知見（若干の文献提示）から、おそらく瀬戸内海沿岸域などの他の候補地を凌駕していたと判断してよいと考える。

と書くであろう。ただし、「知見」は専門家に属するものであるから、素人のわたくしが言えるのは形式論理上のことだけである。

このような事情で、本書の主張そのものに高い信頼性を置くことは留保せざるを得ないが、しかし、素人の目からではあるが、大変重要な着想と指摘に満ちており、先に、結論ありの急ぎすぎた議論を避け、着目点を丹念かつ緻密に論理的に展開するだけで十二分すぎるほど興味深い本になったのではないだろうか。邪馬台国が九州か近畿か、近畿としたらどこか、というような二元論的な世間の関心に出版社が迎合し、それが著者の姿勢に及んだということはあるのかも知れない。

そこで、著者の指摘で何が興味深かったか、というと、陸水の重要性である。とは言え、博多湾から那珂川水系に拠って筑後川流域に至ることの可能性については触れられてはいない。しかし、現在の甘木近辺が那珂川、筑後川両水系の接点であり、日田同様の、あるいは、日田以上の重要性を持っていたかもしれないとは（かねてから）思っている。また、本書で強調されていることであるが、日本海側と瀬戸内海側をつなぐ陸水の系統がいくつもあること、そして、最終的には、琵琶湖域に収束して行ったということは重要な指摘に違いない。さらに、その際、鉄と硫黄だけが運搬されていたわけではあるまい。人の往来もあったであろう。いずれにせよ、東北アジア地域における水上交通については、地形や気候、季節変化も加味した（各国史から）独立の詳細な調査研究があるはずである。

著者は魏史倭人伝の他、記紀の記述も利用して、九州北部にあった勢力が東征し、大和南部に入った事情を、陸水の利用と鉄、硫黄の道と、地名などの読み換えを通じて説明を試み、倭姫＝卑弥呼として、倭人伝も合理的に解釈できるとする。そして、そういう着想の背景は、「はじめに」にある

自分がこれまで近代史を勉強してきたということもあるが、なによりも [邪馬台国の位置などにうつつを抜かすことは] あまり趣味ではない。内心では、やはり邪馬台国が畿内にあると九州にあると、それ自体はどちらでも良いと思っているからである。

(p.3)

の真意というべき点にあるようである。そして、この表現は軽率であったとして、それが本書に至るのだが、それは

国家の生まれ方は、国家のその後を強く規定するからである。(p.4)

と言う。そして、

もしそれが北九州にある場合、邪馬台国という国家の公共性の源は、外敵からの社会の防御と、対外貿易の管理ということになる。それに対して、畿内にある場合は、その源は、すべての地域からの等距離性、すなわち、公平・平等ということになる。前者の場合は「専制国家」が生まれやすく、後者の場合は「封建制国家」が生まれやすい。その違いは、その後の日本の歴史を考える上でも決して無視できない違いのはずである

と述べる (p.4)。

大変おもしろい見解だと思う。だが、著者が扱っている時代には、韓半島との関わりも深かったはずで、実際、岡田英弘氏は白村江での敗戦に伴う唐・新羅の圧迫によって「日本」という国と歴史意識が目覚めたとし、日本書紀の編纂もその意識の具体化であったと言われる (26回, 28回記事参照。なお、120回記事も)。天智天皇は白村江の敗戦の当事者であり、天武天皇は伊勢神宮の創建など歴史意識の覚醒の推進者であった。つまり、日本史は、七世紀半ば以降から始まったわけである (わたくしの理解では、こういう発想は多少とも西洋史の訓練を受けた人たちは一様に抱いているようで、亡父もそういう見解であった)。そうだとすると、対外関係か等距離性かという著者の前提そのものが崩れているような気がするのだが。

前後するが、著者の陸水への着眼は意義深いと述べた。しかし、陸水への着眼は九州北部では那珂川水系への言及がなく、また韓半島内も陸水経由の方が沿岸域を航行するよりも安全であったとすると、これらを加味した議論の緻密化がなされてもよいのではないだろうか。なお、前方後円墳の政治的な意義への言及があるが (pp.126-127)、それに従うと、韓半島南部の前方後円墳はどういうことになるのだろうか。わたくしは構わないが、どこからか文句が出そうな話ではある。

第七章、第八章には、奈良後期から鎌倉期までの歴史について著者の解釈が展開される。ひたすら感心するしかないが、それというのも、著者が「むすびに」で

なぜ今、歴史学は停滞しているのか。その内省の学としての本質を忘れ、単なる観察の学に自らを矮小化させてしまっているからである (p.212)

と述べ、その批判に自ら応えようとしているからであろう (著者の方法論は、上の文章の直後にある)。古代史・中世史だから何を言ってもいいというわけではなく、古代史、中世史にこそ現代に至る本質的な部分が覗いているはずだということだと理解はできるのだが。

最後に、本書の目次を掲げる：

- はじめに 近代史家としての反省から
- 第一章 「鉄の国」の発見ー歴史観の大転換
- 第二章 吉野ヶ里遺跡ー交易ルートの十字路
- 第三章 「神武東征」と邪馬台国への道
- 第四章 「六合の中心」にあった邪馬台国
- 第五章 共立される「女王」から世襲する「男王」へ
- 第六章 大和から琵琶湖周辺へー経済的先進地への王権の移動
- 第七章 始祖霊の弱体化と「古事記」編纂
- 第八章 第二王権の形成と不動の国土神

むすびに
参考文献

134. (11.05.16) 久しく自由な時間がなく、ようやく日曜の午後に外出した折りに

日高敏隆：ぼくの生物学講義 人間を知るてがかり
昭和堂, 2010
ISBN 978-4-8122-1043-7

を天神のジュンク堂で見つけた（ただし、手元のは初版第4刷 2011 である）。「あとがき」に編集の指揮に当たったと思われる今福道夫教授の本書成立の経緯説明がある。著者の最晩年に属する時期に、京都精華大学で行われた講義を整理したものであるという。

京都精華大学については、わたくしは不承知であるが、高度の動物学研究が実行されているという場所ではなさそうであり、また、学生たちがこの方面への強い研究志向を持っているわけでもなさそうである（ホームページの閲覧で大学の方針はわかるはずだが）。しかし、そのような場であるからこそ、動物学の碩学は、技術的詳細ではなく、まさに、本質的なことを語れるはずであり、実際に語っているようであって、大変、貴重な講義録であると思う。

半年間の講義録ということで、13 講ある。大抵、時間よりは早めに終わっているようだが、それは 70 代半ば過ぎの爺さんにとっても聴いている学生にとっても大変だったからだろうと思う。実際、第 1 講を除き、どの講義も

今日はご苦労さまでした

で締めくくられている。

さて、その 13 の講義であるが、次の通り：

- 第 1 講 動物はみんなヘン、人間はいちばんヘン
- 第 2 講 体毛の不思議
- 第 3 講 器官としてのおっぱい？
- 第 4 講 言語なくして人間はありえない？
- 第 5 講 ウグイスは「カー」と鳴くか？ — 遺伝プログラムと学習
- 第 6 講 遺伝子はエゴイスト？
- 第 7 講 社会とは何か？
- 第 8 講 種族はなぜ保たれるか？
- 第 9 講 「結婚」とは何か？
- 第 10 講 人間は集団好き？
- 第 11 講 なぜオスとメスがいるのか？

第12講 イマジネーションから論理が生まれる

第13講 イリュージョンで世界を見る

本の帯に

人間はいったいどういう動物なんだろう？

とあるが、この問いがこの一連の講義のテーマである。本書は、このように、大変基本的な話題満載である。ただ、惜しいことに、索引がない。また、講義中、種々の書物の話題が出てくるが、文献索引もない。これらは編集の責任だと思うが、残念である（いくつか書名が挙がっているものは検索できるが）。

さて、第1講では、人間がヘンであるところをいろいろと羅列して、その末尾で、

とにかく人間は、何がよかったかわからずに、まっすぐ立つということをやって、そのためにもう全身の骨から何から構造をどんどん変えた。で、今はもう、こういう動物になっちゃった以上、もういっぺん四つ足動物には戻れないんです。() やっぱり夜は横になっていたい。() やっぱりまっすぐ寝てる。そういうような動物に、とにかくなくなってしまった。こういう動物は、じつは他にはいない。(p.21)

と言う。ヘンな所以は、第2～第10講で説かれるが、結局は、そうなっているということに尽きるのだろうか。人間は直立し、言語を持ち、かつ、大きな社会を作る、そういう動物であるが、自分の血を分けた子孫を残したいという動物の本能と言語を持ち社会を作ることとの間に矛盾があるようでもある。直立したことが身体的な種々の病気のもとになっているとすれば、言語を持ち、社会を作ることが、生物集団としては、人間の集団に本質的な困難をもたらしているようでもある（まさに、陳腐な見解にすぎないが）。

現代社会を構成している種々の組織や機構、あるいは、法体系には、自然発生的なものだけではなく、設計時点でのその社会の人間理解の水準に対応しているものもあるであろう。こうしてみると、言語や社会がもたらすかもしれない矛盾にも複層的な構造があるはずで、それらがきちんと区分けされていないと、改善策が必要な場合も適切なものを探り出せないであろう。

第12講、第13講の内容は、このブログの趣旨と深く関わっている。なお、第13講で、著者は、旧著

動物と人間の世界認識 イリュージョンなしに世界は見えない
(ちくま学芸文庫)

を挙げている。これはまだ完全には目を通してはいないが、最初の数章だけでも大変おもしろい。

わたくしの感想としては、確かに、生物によって空間認識が違うことは、その通りだと思う。一方、全盲の幾何学者（何人もそういう人たちはいる）の空間認識のことを思い出した。

要は、そもそも外界を認識するとはどういうことか、（仮に）「客観的な外界」があるとして、それを完全に再現できるかたちで認識するための条件は、「客観的な外界」を規定するパラメータ全部を認識できることであろうが、一般には、その必要はない。それでは、どれだけが認識できたらいいのか。そういう部分的なパラメータで認識され、記述される世界の運動は「客観的な外界」の運動に対してどう運動していることになるのか。こういう問題を扱うためには、どの辺から手を付けたらいいのか、など、いろいろなことが思い浮かぶ。

類比としての感想であるが、認識の対象が生物の認識する「客観的な外界」の一部でなくてもよい。「法律が規定する世界」であってもよい。あるいは、ある「集団が認識する世界」であってもよい。それらが言語によって記述されてしまう前の、認識器官の構造や分類というべきものを把握して、この器官の構造ならこう見えるだろうということを確定する。それは、常識的にこういうものはずだ、ということとは、合わないかもしれない。法律なら法律の規定だけからなら、無色のものが、われわれはつい別の文脈を混入させて赤く見ていたりすることがあるだろう。四角いものを丸く見ていることもあるだろう。あるいは、そう見るようにしない限り、条文が意味をなさないということもあるだろう。この意味で、法律なり規則なりで、そこから本当に帰結される骨格だけを確認することも大事なはずである。

付記：上掲「動物と人間の世界認識」を読み出して、不安を感じたことが的中してしまった。実は、「ぼくの生物学講義」と「動物と人間の世界認識」では、「イマジネーション」、「イリュージョン」という語の意味が微妙に違うのである。「ぼくの生物学講義」では、「イマジネーション」について

イマジネーションを簡単にいうと「思いつく」ことです。ふっと思いつくこと。

と言う (p.203)。そして、いくつか発見の例が述べられ、「セレンディピディティ」というほど大層なものではないと言う。数学者なら、インスピレーションと言うだろうか。これに対し、「動物と人間の世界認識」では「イマジネーション」は、

仮にイマジネーションとは非論理的なものだとすれば（…）イリュージョンとは論理的なものである

(pp.95-96) とか、スフィンクスなどを論じた上で、

それらはいずれも実在しないものであったけれど、その姿には何らかの形の論理的根拠はあった。もともとの動物からは姿、形を

変えており、時代の人びとのイマジネーションであると言われて
いるが、そう簡単にイマジネーションと片付けてしまえない。

とある (p.91)。

実は、「イリュージョン」が鍵語であり、これが両著では意味の範囲が異なるようなのである。「ぼくの生物学講義」では、「イリュージョン」は、思い込みであり、想像力の欠如の結果のように書かれている。これに対し、「動物と人間の世界認識」は、動物にせよ、人間にせよ、世界認識の構造は（遺伝子の自己複製欲求に応じた「最適性」を実現する形で）決まっており、それは「客観的な世界」などというものではなく、種特有の「環世界」という「イリュージョン」を認識するためのものである、という趣旨のことが書かれている。つまり、動物にせよ、人間にせよ、

環境の中のいくつかのものを抽出し、それに意味を与えて自らの
世界認識を持ち、その世界（ユクスキュルによれば環世界）の中
で生き、行動している

(p.16) のであり、かくて、

その環世界はけっして「客観的」に存在する現実のものではなく、
あくまでその動物主体によって「客観的」な全体から抽出、抽象
された、習慣的なものである

(p.16) わけで、それを「イリュージョン」とこの本では呼びたいとし、

イリュージョンということばには幻覚、幻想、錯覚などいろいろ
な意味合いがあるが、それらすべてを含みうる可能性を持ち、さら
に世界を認知し構築する手立てともなるといふ意味も含めて、
イリュージョンという片仮名語を使うことにしたい

(p.17) と言う。少々飛ぶが、

ある動物がどのようなイリュージョンを持つかは、まずその動物
の近くの枠によってきまるが、それは単なる基盤にすぎない。大切
なのはその動物が何に意味を与えているかである。それによっ
て、その動物にとっての世界は、(…)、その時どきによって変わ
る。それはその時どきによって探し求めるものが変わり、それに
したがってイリュージョンが変わるからだ

(p.190) との説明がある。そして、

人間も人間以外の動物も、イリュージョンによってしか世界を認
知し構築し得ない。そして何らかの世界を認知し得ない限り、生
きていくことはできない。人間以外の動物の持つイリュージョン
は、知覚の枠によって限定されているようである。けれど人間は
知覚の枠を超えて理論的にイリュージョンを構築できる

(p.195) と言っている。だから、人間は問題なのであり、必ずしも肯定的なことではないのだが、

われわれは何をしているのだと問われたら、答えはひとつしかないような気がする。それは何かを探って考えて新しいイリュージョンを得ることを楽しんでいるのだということだ。そうして得られたイリュージョンは一時的なものでしかないけれど、それによって新しい世界が開けたように思う。それは新鮮な喜びなのである。人間はこういうことを楽しんでしまう不可思議な動物なのだ。(…)人間が心身ともに元気で生きていくためには、こういう喜びが不可欠なのである

(p.195) というのが日高氏の総括である。

これはこれでいいのだが、重要な鍵語が混乱しては困るので、日高氏の思想を引き継いで、整理してくださる方を待ちたい。

135. (11.05.18) 勤務先系列の大学本部での会議開始時間まで、医系の図書館で待つ間、見つけた記事である。

寺脇研：震災後の社会と教育

「教育と医学」No.695 (2011年5月) pp.50-55

記事では、東日本大震災から、阪神淡路大震災の追憶となる。当時寺脇氏は広島県教育長であったので、西日本の雰囲気を読み起こし、東日本の感覚との差異を反芻する(当時、福岡にいて関西に特に縁者も居なかったわたくしの感覚とは必ずしも一致しないが)。氏のロマンティズムの故であろうか、神戸株式会社と揶揄されながらも快進撃を続けていたかのように見えたさなかの大震災は敗戦後の日本再建の誓いを想起させてくれるものであったと回顧する(正直な感想としては、半世紀前、しかも生まれる前のことを、想起(?)しても仕方がないような気がする。ポイントは、この震災の事後処理にあたっての大局観不足から、地域のハブ機能を釜山に奪われ、神戸は「本質的な意味」での復興機会を完全に失ってしまったということの認識を欠いていることである。実際、それは、神戸の沈下に留まらず、日本全体の問題であったことの認識が寺脇氏にはないようである — 官庁の縦割り主義の弊害!?)。

とまれ、氏は、以後のバブル、バブル崩壊、格差社会、と四半世紀の日本社会の変転変遷を述べ、それは教育と非常に大きな関わりを持っているからの想起である、と述べられる(が、要するに、氏の頭の中には、世界から切り離された、実質、鎖国下の「日本」というものしかないようである。氏の履歴は不承知だが、海外赴任の経験はなかったのだろうか。文部省キャリアの「エリート」官僚なのに?赴任しても大使館内の特権的地位におられたのかも知れないが。)

寺脇氏は(氏に従えば)こういった日本社会の混迷を早くから洞察していたようである。あたかも、氏が文部省に復帰した頃、近代社会が限界に達し

たことが明らかになったので、まさに、二十一世紀は経済原則だけで動くべきでないとして、臨時教育審議会は「競争から共生と転換するポスト近代社会」を予測し、それに基づいて臨教審の「ゆとり教育」の提唱となったのだと回顧する。そして、以後の展開、特に、最近の状況を本心から残念がっている。

かくて、このエッセイの最後は

国民の皆さん、本当にマスコミの言う通り「脱ゆとり」でいいの？
震災後の社会を考えていくに当たって、これは早急にはっきりさせたいことである。

で結ばれる。

わたくしも現在の教育には問題が多いとは思ふ。「本来の意味での」ゆとりがないのは好ましいことではないと考えている（「」にご注意いただきたい）。しかし対策は絶対に標語ではない。つまり、「ゆとり教育」か「脱ゆとり教育」かが問題ではない。世界の一部である日本ということをよくよく認識した上であれば、われわれが世界に貢献することは、日本文明という独自の歴史文化を背負っていて初めてできることだということがわかるはずである。この認識の有無が基本なのだ。米語教育をどうこうせよ、とか、国際理解教育に過不足があるとか、そういうようなことをわたくしは言っているつもりではない。基本的に、日本についての意識の相対化が足りないと思っているのである。つまり、一連の「改革」でも、日本が善きに付け悪しきに付け国として特別なものだということが無反省に前提になっていて、寺脇氏もそのことを全く怪しんでいない。

確かに、われわれ（ほぼ）日本に生まれ育ち日本語で日常を送っている人間にとり、日本が特別な意味を持っていることは説明の必要はないかもしれない。しかし、それは、たとえば、（ほぼ）ハンガリーに生まれ育ちハンガリー語で日常を過ごしている人たちにとってハンガリーが特別な意味を持つことと全く変わらないというのと全く同じようなものはずである。日本人の場合の最大の問題は、こういう意味で、自分たちの立ち位置の相対化ができないことである。

わたくしは、われわれの子孫たちが世界の中で相応の敬意の対象であってほしいと思う。しかし、それは世界の中で特別な存在であれ、ということではない。われわれの子孫たちも他の文化文明を背負った人たちにきちんとした敬意を払って一緒に新しい世界を作り上げてほしいと考えているわけである。そこには、しかし、ロマンティックな思い入れは不要である。われわれがそうであるように、他の人たちもそれなりに善であり悪でもあり、また、誇るべき歴史もおぞましい過去も持っている。日本人は別に過去を恥ずかしがることはないが、また、自慢することもない。済んでしまったことは済んでしまったことであり、われわれやわれわれの子孫が生きていく世界の課題は、過去のものとは違う。もちろん、これからはもっと上手にやるべきだろうが、

それはお互い様であろう。

われわれの子孫たちが来るべき世界で信頼され積極的な役割を期待されるようなことは、もちろん、望ましい。だが、それには、どのような教育制度を設計すればよいのか。もし、従前のものに不備があるというのなら、どこにあったのか。国内事情だけの対策で十分なのか。もちろん、選挙は国内だけだが、それなら、それで説得の努力が要るだろう。ゆとりだ、脱ゆとりだと言うときに、こういう発想があるだろうか。いったい、将来の世代にどんな世界を約束したいのか、誠実な改革というものは、まず、その点を明らかにするところから始めなければならないものである。

ところで、くだんの「教育と医学」であるが、もっと興味深い特集記事、教員とストレスを論じたものがあったが、会議の時間になってしまい、金曜にまた本部に出かけるまでお預けになった。

付記：(7月1日) 平成23年7月1日付の日経朝刊一面に東大が秋入学を検討中という記事があった。文字通り検討中なのだが、確かに、同様のことを考えている大学は少なくはないだろうし、かつての「大学院重点化」も「八ヶ岳構想」などと言われた潜航期間が長くあり、東大の学部大学院一貫構想などとして浮上したものが、八大学工学部長会議とか十大学理学部長会議といったものを経由し、さらに、大学審議会などを経、ついには学校教育法の改訂にまで至ったということがある。記事によると、(東大の、ひいては日本では指導的な)大学の研究教育水準を国際的に高位に評価される位置に留めたい(あるいは、むしろ、進めたい)という、東大側の意志の表れのようなものである。日本の高等教育機関の秋入学は、かつて実施されていたが、当時と現在とは、日本の世界における位置づけが全く違い、しかも、今日、一般にも、情報や物流はほぼ瞬時に世界を駆け回る。当然ながら、現行の四月入学制度は少なくとも世界的に伍していける大学では教育面でも研究面でも実質的にはすでに破綻している以上、東大がそういう意向を持つことは不思議ではない。しかし、初中等教育においても秋入学に移行しなければ、かえって矛盾は深まってしまう。入学試験の作成はいつするのか。試験の実施は二月末から三月よりも初夏や夏季休暇中の方がいいだろう。試験の形式方式も変えられるだろう。その上、福島第一原子力発電所一号機～四号機の事故以来の電力不足がある。電力不足は未来永劫というわけではないかも知れないが、夏場の環境負荷を下げる意味で、夏季休暇期間中に学校がほぼ完全閉鎖になるような、初中等教育を含めた学年制度の変更、つまり、新学年の授業を秋から開始し、遅くとも7月初旬には一学年の授業を修えるという北半球標準の方式に移行することを真剣に考えるべきではないか。ちなみに、会計年度と学校年度とが一致している国は、世界中で日本くらいしかない

136. (11.05.21) 前回の記事で言及した「教育と医学」所収の教員のメンタルヘルス特集については、改めて、医系図書館で閲覧した。

記事は三点である（もう1件あったかも知れない。来週確かめてから、必要なら、付記として補充する予定）：

1) 増田健太郎 改めて、教員のストレスを考える 2) 高木亮 教師ストレスの現状と予防・開発プログラム作成の課題 3) 露口健司 学校組織特性と教師のストレス

もちろん、わたくしとしては本ブログで現在の職務に密着し過ぎた話題は扱いたくはないのだが、この業界の認識構造や認識性向が垣間見えて、大変おもしろかったのである。もちろん、教職員のストレスについての知見を集めておくことは重要なことであり、ストレスと組織なり個人なりの認識習慣が無関係ではないだろうとすると、大分苦しい言い訳ではあるが、当ブログの本来趣旨（プロフィール参照）とも整合するところはあるだろうと、まあ、考えられるだろう。

なお、記事で扱われているのは、基本的に公立学校一般でのことであり、個々の学校の事情が反映されているわけではないだろうし、さらに、私立の教育機関では、一般に、また、別種の問題があるはずである。しかし、公立、私立を問わず、広く意味のある指摘や提言もある。それらを期待して、わたくしは私立的偏りや勤務先校の事情を念頭に記事を見ているわけである。このことは予め言っておかなければならない。

増田氏の記事1)は全体的な配慮が行き届いており、非常に優れている。特に、現状や原因の分析に引き続いての「教員のメンタルヘルス向上のために」という提言がすばらしい。学校組織で対応できる対策（ミクロな変革）2件、教育行政単位の対策（マクロな変革）2件が挙げられている。ミクロな変革は、常識的と言ってしまえばそれまでだが、関係者一同が意識していなければ、やはり漂流してしまう。マクロな変革には、重要な提言がある（が、もう一步踏み込んでほしかったが）。

まず、項目だけだが、挙げる：

- (1) ミクロな変革1：コミュニケーションを促す場と時間作り
- (2) ミクロな変革2：学年と学校の”チーム力”創造
- (3) マクロな変革1：春期休業の長期化
- (4) マクロな変革2：研修システムの改善

このうち、(3)(4)が重要な指摘であるが、本格的な変革は、おそらく、現行の会計年度と一致させる学年制度のもとでは困難であろう。三月末から四月初の忙しさは、個々の学校の問題でも、また、公立の場合なら教育委員会だけで、独立に処理のできる話ではない。この時期の繁忙感は、およそ教育に関わっている人間なら誰もが経験していることであり、それは教員だけではない。春期休業の長期化は、また、影響するところが大きく、しかも、四月下旬から五月初頭の連休が控えている。教育効果を考え、また、現在、年初から三月半ばまで入試業務が続くことを考えると、春期休業の長期化を実効性のある形で実現することは決して容易ではないだろう。また、研修シス

テムの改善も、人的な余裕のある公立学校は別として、一般には長期休暇を利用したいが、夏期休業は学年途中で忙しく、春期休業は短いという恨みがある。わたくしは、こういう一連の困難は、他の国のように、会計年度と学校年度を切り離し、かつ、それだけでなく、夏期休業が学年と学年との境目に来るよう（北半球標準！）にすべきだと考えているが、増田教授がその方向に一歩踏み出していただけであれば、主要メディアや議会関係者など、教育界以外の要路の人たちからも真剣に受け取っていただけるだろうと思い、いささか残念ではある。

高木氏の記事は、文字通り、教員のメンタルヘルスについての話であるが、幸いなことにわたくしにとって特に新味はなかった。

立場上大変興味深かったのは、露口氏の記事である。校長や管理職の類型と教師のストレスとの関わりが論じられている。基本的には公立校のことである。まず、以前の自著を引用し、学校の組織文化を1) 創造性、2) 職務環境性、3) 自律性、4) 同僚性、5) 規律性、の5点で把握できるとし、2) 4) が教師のストレスを抑制する効果があるとする。そこで、これら5点と、校長や管理職の類型とを対比させて論じるわけである。

校長は、「変革型校長」と「左うちわ校長」に分けられ、両者が対比されている。奇妙な用語であり、定義も明晰ではない。気分を伝えようということだろう。概して、「変革型校長」とされる方が教師にとってストレスにならないそうである。「左うちわ校長」はミドル次第で結果が違うのだそうだが、このように議論が収束しないとすれば、それは分類が不正確か定義が不備なのかのどちらかであろう。

もっと興味深いのは、管理職の類型分類で、「デビルリーダー」と「サーバントリーダー」とあり、前者は最低のようである。しかし、いきなり、こういうカタカナを持ち出されて、意味の見当が付くだろうか（「サーバントリーダー」が、もし、Servant-Leader の音訳であるとしたら、意味の捉えようがない。今、日本語文献も世界中で読まれているということを著者にはしっかりと意識してほしいものである。）。

露口氏には申し訳ないが、この記事は、相当に stressful であった（ただし、業界の認識構造を想像する上では非常に有益（？）であった。）。校長の類型にせよ、リーダーの分類にせよ、わたくしなら、こういう俗っぽい表現よりは、中立的な一型、二型、あるいは、内容にやや踏み込んだ、利他型、利己型と書きたいところだが、こう書いてしまうと内容が見え透いてしまうおそれもある。いずれにせよ、私立の場合には、基本的なところで、こういう分類が成立する条件を欠いており、それでも、ストレス要因となりうる管理職は存在しうるのである。— ストレス要因は、管理職との人間関係だけではないはずではあるが。

付記0（冒頭に予告？したものではないので。平成23年5月23日）：露口氏の記事についての別な感想だが、指摘事項の方向性は理解ができる。この

記事で本当に問題にしなければならないとされているのは、学校の「管理職」をどう養成すべきかということであり、それは、また、学校の管理職の職務の本質は何であるかということの理解と密着したことではあるまいか。根拠法令があるから、それに従って粛々と学校運営を行えばいいというものではあるまいから、そういう運営能力だけを評価して管理職を登用すれば済むわけではないことは明らかではある。しかし、学校が漂流してしまえば、教育の本来目的も果せないであろうから、運営能力の高さが文字通り最低限の要求であることは否めない。問題は、その上に積み上げられるべき資質や能力が、現在の登用方式で十分に評価されているかどうか、また、十分ではない点があるとすれば（妙な類型例が挙がる以上、十分ではなさそうだが）、どう改善すべきか、改善に際しての留意点は何か、と言った点にまで及ぶべきで、その際に、管理職の赴任先で露口氏の挙げる組織文化の5点の適切な均衡が図られるべきであるということへの配慮が含まれることは重要であろう。左うちわ氏もミドルであった時期があるのが通例であろうし、デビル氏もサーバントを志した時期があったかも知れないのである。

付記1（平成23年5月28日）：やはり、特集記事1件見落としがあった。

増田健太郎：初任者教員のストレスを考える

この記事は、公立学校の教員採用と現場での話のようではある。その意味では、直ちに参考になるわけではないが、校長の目配りの質など、私立校でも留意すべき点が多い。

137. (11.06.02) 勤務先系列の医学部医学科の新入生向けの特別講義の打診が確か一月末にあり、それを5月30日に行なってきた。以前、連絡した標題は

写実性と茶化し、理念と意匠

— 真実との付き合い方 —

であったらしく、案内はこの題でされていたが、わたくしは完全に失念していた。その頃、おそらく、

古田博司：日本文明圏の覚醒

筑摩書房 2010 ISBN 978-4-480-86400-0

を読んでいたのであろう。この本については、当ブログで論じてはいないと思うが、「茶化し」と「写実性」とを対比させるアイデアは氏の別の著書を巡って36回記事で論じたとおりの古田氏のものである。なお、上掲書では氏は生い立ちや学問的履歴に言及しておられる。

さて、上の講義の準備でかなりの書物に目を通した。一部はここで論じてもあるが、言及しなかったものもある。例えば、5月29日の毎日新聞で書評されていた

ブライアン・スウィーテック：移行化石の発見

文藝春秋, 2011

ISBN 978-4-16-373970-0

もその一つである。わたくしには、124 回記事の付記で挙げたシュービンの本の方が読みやすかった。もとより、進化論の解説書としては、こちらの方が包括的だし、エピソードにも富んでいる。しかし、注記や文献の扱いは不適切で、何よりも致命的なのは、これだけ膨大な情報を含んでいるのに、索引がないことである。おそらく原書には詳細な索引が付いていると思われるが、邦訳では索引がないために、中途半端な非常に利用しにくい書物になっている。訳語が適切かどうか素人には判断ができないが、例えば、中学や高校の生物の副教材としての利用を考えるのなら、是非とも丁寧な索引を付けておいてほしかったと思う（20 ページの増量は販売上大変なのかも知れないが使い勝手の悪い本はもともと余裕がない限り個人は手を出さないし、索引のない本は図書館の蔵書には向いていないのではないか）。

講義そのものは、医学科新入生に対し、教養的なもの、また、業界外の人間からの医師のタマゴへのメッセージ性を含むものであればよいということであった。この医学部は伝統的に現場で診療に当たる医師を世に送り出してきた。本件とは関わらないことではあるが、前に、この医学部の先生から、現場で患者に接する医師は惻隱の情を欠いてはならぬ、あるいは、基本的にいわゆる文系心情の持ち主でなければ務まらないのが医師というものだ、とのお話は聞いたことがある。さらに、薬石効なくという事態になったときに、遺族から感謝され感謝されるような医師こそが理想だろう、というような話も併せて聞いたように思う。しかし、わたくしには実感の沸きようのないことではある。

結局、当ブログの趣旨を念頭に置きながら準備をした。ただ、実際にどう編成するかは、なかなか決められず、準備段階の最後の方で慌てて付け加えたトピックが、むしろ、本旨であったのかも知れない。それは、

Q-a) なぜ、日本では近代科学が発生しなかったのか

Q-b) なぜ、日本では微分積分学が生まれなかったのか

:

:

Q-*) なぜ、日本では近代医学あるいは解剖学が生まれなかったのか

という問いである。ここでいう「日本」とは「自律性の高い時代の日本」、つまり、江戸期までのことを、ひとまず、念頭に置いてはいるつもりである。このうち、Q-b) を中心に、一応の解答らしきものを、それこそ、Ivins のアイデアをもとに、後述のように、示してみた。後で、少々議論を補強してみたのだが、もし、わたくしの見立てに多少とも真実味があるとすると、現在も条件はあまり変わっていないようにも思われる。

さて、Ivins は、接触筋肉感覚と視覚との違いを概ね 70 年前の水準の知見に基づいて論じ、いずれに主力を置くかで、空間認識の質が異なり、さらに、空間認識を前提としての世界観の構造、日高敏隆氏のイリュージョン (134 回記事参照)、つまり、諸事把握の大枠となる仮想的スキームが異なってくることを指摘している。確かに何らかの仮想的なスキーム、つまり、解釈の大枠となる前提がないと、観測した結果、あるいは、感覚器官などを通じて取り込んだ (はずの) 情報を有用と思われる形に解釈することはできない。そして、この仮想的スキームは感覚器官と密着しているだけに、感覚器官を通じて外界を感知するという経験に基づいているはずである。この意味で、空間認識の構造は解釈の前提となる仮想的なスキームを規定している。その結果が文明の質にも及ぶだろうと考えるのは自然なことである。

Ivins のテーゼは、古典ギリシア人の空間認識の基本は、接触筋肉感覚的であり、これに対し、ルネッサンス以降の西欧人の空間認識の基本は、視覚的であるということである。このブログで、Ivins を丁寧に読むことはいつの間にかあやしくなってしまったが、かれの重要な指摘は、接触筋肉感覚的な空間認識と視覚的な空間認識の特徴的な差異であった。

接触筋肉感覚的な空間認識の特徴は、Ivins に従うと、

肉体的な単位が特徴的な長さであり、その結果として、一方では、細部の詳細把握、他方では、運動や無限把握の困難さが見られる

ものである。したがって、接触筋肉感覚的に認識された空間は

- h-1) 不連続であって、
- h-2) いくら小さくても一定の大きさのある成分の集合として解されるものであり、
- h-3) 運動しているとしても人間尺度で把握できる

というものである、

他方、視覚的な空間認識の特徴は、

- s-1) 連続であって、
- s-2) いくらでも小さい部分に細分されうるものであり、
- s-3) しかも、無限の遠方から連続しており、無限遠方や運動は内在している

というものである。

ユークリッドの点や線の定義では、大きさが無い、幅がない、と述べられる。しかし、せいぜい数個の点や線を扱うために、思考の枠から夾雑物を排除するためのものであって、古典ギリシア人が真の意味で大きさが無い位置としての点の概念を持っていなかったことは、例えば、ゼノンの逆理として知られる一連の命題の扱いから推察される。しかし、このような定義が、後

世の西欧における視覚的な空間認識の解釈に有益であったことは、アルベルティの正統作図法（遠近法）の理論的記述からも明らかではある。

近世の微分積分学は、無限や運動を内在している視覚的な空間認識があって、初めて成立したと言える。だが、それさえあれば十分であったかと言うと、やはり長い — メソポタミアやエジプトにも遡る — 前史があったと言うべきであろう。言うまでもなく、文明的なことである（例えば、87回—89回の記事で論じた溝口明則氏の書物参照）。

ところで、上記の Q-a) Q-b) … Q-*) という問いであるが、われわれの空間認識の構造が関係しているのではないかと考えている。それでは、われわれの空間認識はどんなものか。そもそも、それがどんなものを特定したいというのが、このブログの本旨であった。この作業が終了の目処が立っていれば、このブログも閉鎖できるわけだが、話はそう簡単ではない。とは言え、Ivins に従った接触筋肉感覚的あるいは視覚的な空間認識の構成要件を検討してみると、われわれの空間認識は、基本的には接触筋肉感覚的なものに近いような気がする。その他、日頃の経験を加味して、本来の「日本的空間認識」について、作業仮説として、

- j-0) 自分の現在いる地点時点を中心である
- j-1) 人間尺度で認識できると考えられるものよりは（集団尺度によって）若干広範囲を認識できる
- j-2) ただし、認識範囲は有限である
- j-3) 認識範囲外のことは認識範囲内に対し中立的である

というようなものと捉えよう。イマココ（「今＝ここ」）とかムラの発想と俗に言われるものの中身の分析を試みたと言ってもよいかも知れない。空間の微細構造に関しては余りよくわからない。絵巻類の雲や霧による画面展開を見ると、連続な塊が錯綜しているようなものであって、構成的な理解は希薄であったと考えるべきではないか。

さて、日本的空間認識においては、j-0) が最大の要点であろう。j-2) j-3) は認識限界が一種の結界を成していることを意味し、さらに、逆転して、結界を予め設けて、その外の認識をほとんど拒否するというような姿勢が執られることもある。j-1) によって、空間認識が j-0) にもかかわらず、個人特有のものを離れた共有性が得られるのである。ただし、普遍性の保証はなく、むしろ、

日本的空間認識には客観的空間というものは存在しない (1)

と考えるべきであろう。したがって、

日本的空間認識には公共的空間というものの意識はない
のである。

もとより、今日のわれわれには、知識として、公共性というアイデアは存在している。だが、日本の歴史を振り返ると、それをどこから始めるべきかは問題ではあるが（例えば、26, 28 回記事参照。120 回, 133 回も）、歴史意識が芽生えたとする 7 世紀以降、つまり、白村江の敗戦を日本史の始まりとすると、これ以降、外界からの大きな文化的衝撃は幕末に至るまでなかったようで、ほぼ、自律的に日本文明は発展してきたようである。とすると、日本人の空間認識は、基調に、古代のものを引き継いでいる可能性は高いのではないか、と思う。

この間、東シナ海や韓半島経由で大陸の文物は渡来し、また、後年南蛮貿易もあり、さらに、江戸期の鎖国中も結構海外文物は流入した。だが、これらは技術的な水準では影響を及ぼしたかもしれないが、理念上の転換を迫るものではなかった。唐の時代の影響は、強く及んだようだが、実は、ファッション以上のものではなかったのではないか。平安中期には、「国風文化」が栄え、しかも、奈良期の律令体制を支えるべく構築された道路なども急速に変質してしまっている。

そこで、Q-a) Q-b) を検討しよう。まず、

Q-b) なぜ微分積分学が日本で生まれなかったのか

という問いであるが、微分積分学の成立には、仮想スキームとして、連続な空間が想定されることが前提になると、わたくしは理解している。すなわち、どのような複雑なものもいくらでも小さい、そして、小さくなるとともに単純さが増すような、そういう微細因子に分解されるという、連続な空間で、微分積分学は初めて成り立つ。やや技術的には、微分積分学は、数学的对象について、標準化された微細因子への分解法（微分法）と標準化された微細因子からの集積法（積分法）であり、これらが相互に逆の操作になっているものとして理解できる。

もちろん、連続な空間が当然視されていなくても、円周率の近似値は知られていたし、アルキメデスのように、より一般の文脈で、曲線が囲む面積を求めた人間はいる。また、江戸期には和算があって、複雑な計算を行っている。だが、この人たちを微分積分学を生み出したということはできない。しかし、アルキメデスと和算家との間には質的に大きな差がある。微分積分学が近代科学の核心そのものであることを思うと、このことは問い Q-a)、つまり、

Q-a) なぜ、日本では近代科学が発生しなかったのか

の検討の過程で明らかにできるように思う。わたくしの解答、あるいは提案は、「日本の空間認識」に客観的な空間、さらには、公共的空間というアイデアが存在しなかったからである。

わたくしの考えであるが、個人の観察や考察は、客観的な空間を前提にした仮想的スキームのもとで整理されて個人的な趣味の域から解放され、こう

して得られた知識が社会的に共有されることにより科学となるのである。したがって、日本的空間認識のもとでは、観察や考察が、仮に西欧の空間認識の上に成り立つ仮想的スキームのもとで、科学として分類される知見や発想の萌芽を含んでいても、それを科学ということはできない。つまり、日本的空間認識のもとでは、得られた知見が発信されるべき公共的空間が存在しないのであり、科学というものが成立する条件をそもそも欠いていたわけである。しかし、技術は、技術による成果自体に客観性や公共性が認められるので、日本的空間認識のもとでも、あるいは、むしろ、日本的空間認識の構造ゆえに、優れた技術的成果は実現されてきたのであろう。

Q*) なぜ、日本では近代医学が生まれなかったのか

という問いは、もっとも基本的な理由は Q-a) Q-b) と通ずるのだろうが、より複雑な事情も認められるようで、別に論じたい。

さて、現代のわれわれは、確かに近代科学や近代数学の発展に関与どころか大いに貢献していると自負しているが、クーン流のパラダイムの転換を齎すような、本質的な貢献を為しうるかどうかは、はっきりしない。われわれは、古代以来の心情をいまだ引き継いでいるのではないか、われわれにとっての安定した世界は、依然、古典的な「日本的空間認識」の上に構成される仮想的スキームで解釈できるようなものではないだろうか。それでどこが悪いという意見もあるだろうが、現代の空間認識の基礎になるものではない。いくつかの面で技術的作品に見るものがあるような、しかし、中身は呪術の世界、それが古典的な「日本的空間認識」によって、われわれの先祖が得ていた世界だったのではないだろうか。

注：かつての「日本的空間認識」からは、客観的空間、公共的空間という仮想スキームが得られなかったということは、しかし、現在は得られているということを必ずしも意味しない — 現代の世界では、客観的空間ならびに公共的空間というアイデアは、少なくとも知識としては、不可欠であるはずではあるが。

付記：実は、医者の方々の講義の最後に、かれらが

キャリアの頂点に差し掛かる頃、多分、今から 20 年後くらい先の、医療の様子を想像せよ

という趣旨の問題を投げかけた。

そのような遠い先の医師の役割というのがどんなものになるのか、それは、医療・診療体制全貌がどうなっているか、その中でそれぞれの医師がどのような階梯の医療を担当しているのかで、相当に状況は違おうとわたくし自身は考えている。不可知の要素が多く、もちろん、今のかれらには答えようがないことかも知れない。ただ、業界外の人間としては、臨床と基礎の話は聞くが、医療の全体像の設計、医療政策や医療行政の話が、基本的に技術

が中心の臨床医療の話題をフィードバックさせながら、上位に置かれるべきであるように思われるし、また、この部分にしっかりとした先見性や指導性がないと医療体制は漂流するだけになりそうだとすることに思いを馳せてほしいということもある。医療政策や医療行政については確かに普通の医師は考えなくてもいいだろう。しかし、50を過ぎた医学部の先生たちは、自分のこととしてはもはや四半世紀先のことには関心の持ちようもなくとも目下の学生たちの人生の華がその頃だとすると、気にしていないはずはないのだが。ただ、四半世紀先の場合、最大の不確定要素は、それまでに至る日本社会の変容の見通しであり、特に、医師が免許職で保護されている一方で義務を負い、(TPPに早期加盟でもしない限り)国際性が強く制限されていることを思うと、日本の空洞化をいかにとどめ、地方を疲弊からいかに回復させるか、という課題は、これから医師を目指す人たちにとっても非常に深刻なものはずである。

138. (11.06.15) 新学年も二ヶ月経ち、今の勤務先の私立学校としての来年度向け営業活動の開始時期になった。つまり、生徒募集のための種々の活動を始めたのである。

まず、塾の営業政策に乗る形で、学校の説明を行い、それは校長だけの仕事ではないが、そして、おそらく、塾にとっても集まる子供たちや保護者の皆さんにとっても、校長が具体的な話をするのならともかく、そうでなければ、校長の話自体は集会の表紙のようなもの以上でもそれ以下でもないかも知れない。実際、今年から、この手の話としては、建学の精神についてのわたくしなりの解説だけをするに徹することにした。

なぜ、こんな話題を取り上げたかということ、いろいろな学校の校訓とか建学の精神として強調されるものを観察していると、日本の特徴と言うべきものが見え、そのことは上記の校長としての営業活動とは直接関係しているわけではないかも知れないが、現象として見ると、大変に面白いのである。例えば、勤務先の校訓も、いろいろとあるのだが、今、一番重要と思われるものを別にして、わかりやすいものでは、「立志、克己、誠実」というのが挙げられる。あるいは、「誠実、篤行」、また、「努力、気概」というのがある。『論語』から採った句も多い。ここまでは他の学校でも似たり寄ったりであろう。

これらをじっと眺めていると、上で挙げた「面白い」ことに気づかざるを得ない。つまり、基本的に、これらは、人(=個人)それぞれの身の処し方、行動の形に関わるもので、本質的には、価値中立的だということである。例えば、英語発信の表現では

4W1H、つまり、what where who why how

に留意せよと強調されることがある。学校の場合は、where who は、学校と関係者を意味するものとして、まあ、自明だろう。what why how は文脈に依存する。そこで、校訓を見ると、上に挙げた語句は、皆、howに関わるもの

ではないか、what は顔を出さないではないか、と思うわけである。why は、校訓の段階では直接は関係ないような気もするが、what がないから、why と発しようもない。しかし、what がなければ how も問題にはならない。すると、敢えて、このような語句が校訓として掲げられている以上は、このような語句の勤める姿勢態度で実現すべき何か、まさに、what だが、そういうものがあるはずで、しかも、それが殊更に明示的に表す必要のないくらい明らかであるということしか考えられないことになる。

わたくしがおかしい、つまり、普通とは違うのかも知れないが、例えば、「誠実」という句を見ても、これは何らかの価値を実現するために誠実であることを要請している、つまり、技術的な手段を指定する水準のものとして見てしまう。もとより、「誠実」によって実現されるべき価値は積極的なものであり、一般に、人間の社会にとって好ましいもの望ましいものを指していることは、うすうす承知はしている（し、わたくし自身、殊更に反省することもなく、こういう語句をそういう文脈で使用して来ている）。だが、一方で、「誠実」がこの実現されるべき価値そのものを的確に指し示しているようでもない。それゆえ、「誠実」を、所属している社会の価値観の要請に全身全霊を挙げて従うことと解すると、「誠実」を規定するのは所属社会の倫理ということになるであろう。これは上に挙げた校訓の他の標語でも同様である。これらの語句は、文脈依存性は極めて高いが、本質において価値中立的なのである。

ここで、我々は非常に悩ましい問題に突き当たる。つまり、我々の空間認識が、前回記事で触れたように、基本的に主観的なものであり、客観的な空間という意識は熟成しておらず、したがって、また、公共的な空間というものの存在に想像が及びにくいという前提のもとで、

このような文脈依存性の高い標語を殊更に校訓として強調することにどのような意味があるのか、

という問いである。

学校は一個の社会である。それは公共的な空間であるよりも、成員にとっての私的な空間というものに近い。学校には、それぞれ倫理というものがあり、主張すべき価値が本来あるはずであるが、私的な空間内ではその価値を明示的に確認する必要は通例ない。したがって、上述の校訓群の語句は、それぞれの学校の文脈では明晰な意義があるとしても、校外に対して、同様の意味を持つかどうかは直ちに明らかなることにはならない。そのためには、学校の倫理が学校をその中に含む社会の倫理として認められるものであるかどうかの確認と了解が先行していなければならないだろう。ところが、学校は校外の社会そのものではなく、また、成員も一般社会とは異なるので、学校の倫理と外の社会の倫理との関係は決して単純なものではない。

さらに、錯綜した入れ子の構造がある。つまり、個々の学校という限定された社会も擬人化されて、「私的」な立脚点を主張し、そこから学校の空間意識というものが発生する。この段階では、上述の校訓のような個々の成員向

けの語句は縮退するが、この階梯でなお有効な運動指針はありうるであろう。それらは「誠実」とか「克己」、「努力」というようなものではないだろうが、われわれの習慣からは、恐らく、擬人化された個々の（例えば）学校がまとまって作り上げている『擬「社会」』の『擬「倫理」』を担保している『擬「価値」』の実現のための技術的誠実さに直結するものであるだろう。ただ、このような入れ子構造を論ずるときに、学校なら学校で一括りにして論ずることが正しいかどうか議論の余地があり、括り方を変えると「擬人化」も変わり、『擬「社会」』も異なってくるだろうから、『擬「価値」』だ『擬「倫理」』だと言っても、これらも本来は相対的なものではあろう。このような入れ子構造の、どの階梯でも生き残るような「価値」が、例えば、もともとの学校における「校訓」に付与されているのだろうか。

「修身齊家治国平天下」という周知の句があるが、校訓として成員各自に課されるのは「修身」の水準であるとすれば、入れ子構造での『擬「社会」』に対応する最初の段階は「齐家」に相当し、「治国」「平天下」の段階が続くことが、上の括り方で必然かどうかは別として、示唆はされるわけである。『論語』所収の句などは典型的だが、どうも東アジア古典系とされる句は、肝心の実現すべき価値は暗黙裏に了解されている文脈依存性の高い表現が多いようである。この節の冒頭の句もそうである。実現すべき価値が明示されていないのである。さらに、階層構造にも問題があって、「身」の集団が「擬人化」されて「家」、「家」の集団が「国」と括られ、「国」の集まりが「天下」と整理されているというのではなく、「身・家・国・天下」の階梯が先験的にあるようであり、併せて、明示されていない価値の階梯があって、それも先験的に了解されているのであろう。ひょっとしたら、この辺に、つまり、強い文脈依存性に、俗にいう「儒教文化圏」の特徴があり、また、恐らくは弱点が潜んでいるのかも知れない。

非常に考えにくい道程に従っている感じだが、一体、わたくしは何を言おうとしているのだろうか。中学・高校の校訓は、「価値」の呈示が重要なのではない、つまり、所詮、子供相手のものであり、また、妙に価値を示すのは物議を醸すだけで、それよりは文脈依存性の高い心掛けや態度に集中した「校訓」で生徒たちを育てれば、また、それによって、生徒たちが社会生活をする際に、所属組織固有の文脈で素直に活躍できるようになるだろうと、こういう考え方は成り立つかも知れない。だが、それでいいのか、それは卑怯ではないか、と、わたくしは、こう、うすうすではあるが、思っているわけである。ところが、「卑怯」と言った途端に、すでに暗黙の価値に基づく規範に従った判断をしていることになり、そうであるなら、わたくしの価値基準を明かさなままなのは、やはり、卑怯だということになる。

この「卑怯」云々はさておいて、現在の勤務先校には、上述の文脈依存性の高い校訓の他に、人生の価値に直結する言葉が残されている。すなわち、「為他」という句だが、これとても全く文脈がないわけではない。とは言え、

大切なことは、個々の組織社会を超えた意味を持っていることであって、文脈が本質的ではないことである。

つまり、所属社会の存在が前提であり、その社会で暗黙裡に了解されていることで意味が付与されているような価値ではなく、「為他」というアイデア自体で存立するところがある。この語は「正法眼蔵」に確かに存在するが、「克己」「立志」のように、何かがつがつした感じが全く伴われてはいないとは言いきれないようなものでもなく、また、「誠実」という、今度は、独善的な要素が皆無とは言えないようなものとも距離があるように思われる。この句は、禅に造詣が深い先生が校長を務めていた頃に、初代の校長が定めたという建学の精神に、それを改訂する形で付け加わったものである。この学校は、世俗校であって宗教性はないのだが、初代の校長だった人は青年のときに受洗して以来終生篤実なクリスチャンであったと聞く。新渡戸稲造と同郷の人であり、新渡戸を敬慕していたかも知れないと思うが、わたくしには確証はない。とまれ、校訓や建学の精神には、少なくともわたくしの理解する範囲で、キリスト教的なもの、例えば、「愛」とか（カトリック的過ぎるかも知れないが）「献身」とかを示唆するような雰囲気は片鱗もなく、飽くまでも、儒教的なものが強調されていたし、今も、基本においては変わらない。

だからどうだというわけではない。たまたま、わたくしはこのようなことに気付いてしまった。それだけのことであるが、それは、わたくしがおかしいからなのか、いや、空間認識と自覚的に付き合っているうちに、見るべきもの、つまり、目当て、と見る姿勢や態度、つまり、見方、との違いが気になってきたということだろう。

問題は、学校は一校長の任期より長く存在することである。校長の思想が大事であると言っても、校長が変わるたびに、それぞれの思想に応じて、方針が変転するようではいけない。建学の精神には、そういうことが起きないための担保の役割もあるのだとわたくしは考えている。しかし、それが文脈依存性の高さに特徴がある本質的に技術的な内容の語句だけでは、学校という共同体を支える価値の永続性の保証にはならないとも考える。そういう意味では、勤務先校に「価値」をより多く包含する校訓があるということが、いかにも大切なのである。

さて、こういう発想で公立校の教育を考えると、…。

139. (11.06.02) 神のジュンク堂で

小林公夫：本物の医師になれる人、なれない人

PHP 新書 2011 ISBN978-4-569-79870-7

を見つけ、「おわりに」に目を通して、よさそうだと思い、購入した。当ブログの本来趣旨とは関係は希薄である。現勤務先の医学部志望の生徒たちとの面談の折に役立つかと思って色気を出したのだが、結論から言うと、後述のように、タイトルは適切とは言いがたく、そういう意味では、期待外れであっ

た。読んだ限りでは、生徒たちに要らぬ誤解を与えかねないと思い、利用はできないと判断している。

しかし、実は、極めて初歩的なことながら、本書で教えられたことがある。それは、世界医師会の諸宣言である：WMA ジュネーブ宣言、ヘルシンキ宣言、リスボン宣言、マドリッド宣言の抜粋（pp.190-196）である（医の国際倫理綱領、ソウル宣言は転載されていない）。日本医師会のホームページにあるとことで早速確かめた。ついでに、日本医師会のホームページに「医師の職業倫理指針〔改訂版〕」（平成20年6月）を見つけた。これらは大収穫であった。生徒との面談では、これら宣言の英語版のコピーを渡すことも考えられるなどと思うし、これらの宣言を読み込んでおくことが第一歩だろう。

さて、著者はもともと法律家であって医師ではないが、医学部進学希望者向けの予備校を経営しており、さらに、法曹資格はないようだが、医事関係の法務に詳しいらしい。「おわりに」にあるトピックもこの線のものであった。そして、当然ながら、著者の知己に医師が多く、また、受験生指導を通じて、最近の医学部入試の出題傾向にも注意を払っているとのことである。

ところで、本書のタイトルは適切とはいいがたいと述べたが、なぜか。実は、無理な話かもしれないが、医師とは何であるか、という議論がされておらず、まして、著者の「本物の医師」の描像と推測されるものも、項目の羅列だけで全体像は明晰ではないからである。文脈的に、医学者をさしているわけではなく、臨床医であり、かつ、それも特定の診療科に特化していて、最近話題の「家庭医」や general practitioner を指すわけではなさそうである。さらに、著者は、医学部進学希望者向けの予備校を経営しており、したがって、この話題に関しては、つまり、本書は「利益相反」の可能性に注意して読まなければならないということもある。いずれにせよ、（ご意見はあるのだろうが、著者の立場では困難があるわけだから）「本物の医師」とはどんな「医師」かは客観的に示されない以上、「なれる人、なれない人」と言われても、著者の想いを推測するしかないところが残念ではある。

とまれ、目次を掲げよう：

- 序章 医師という職業（4）
 - 第1章 患者の望みに正しく応える（9）
 - 第2章 正当な注意力、判断力（12）
 - 第3章 正当な開拓精神（8）
 - 第4章 さらに求められる七つの能力・資質（7）
 - 第5章 医師に訊く「本物の医師の条件」（1）
- おわりに

括弧内は章ごとの節の数である。

ところで、著者は医事法の専門家であり、医療事故やそれに伴う裁判事例に詳しい。著者は、治療法や措置法の一般性あるいは正統性獲得のプロセスが重要であり、そのようなもので実質的に業界内で公知されたものを「医療

群」として、抽出している。そして、医療事故が正当な医療行為の過程での己むを得ないものであったか過失ないし故意のものであったと判断されるかの境目が「医療群」に属しているかどうかで決まると言う。詳細は、恐らく著者の学位論文をもとにした著書にあるのだろうが、本書の説明だけでは、「医療群」の構成や分類に若干の恣意性が認められるようにも読める。さらに、海外の事例も挙げられているが、医師はどここの国でも、社会的な義務を負い、それゆえに、免許制度で保護されており、したがって、それこそ「医療群」とされるものが国際的に成立するわけではないと思われる。この差異は、医師法が国によって違うという著者のご指摘とは別のことではないだろうか。

医療技術そのものは、特に、近年のように、患者の国籍や人種が多様であることがどこの国でも当然ということになると、基本的に万国共通に適用できるものを目指すのであろうけれど、医療行為を実際に行えるかどうかは当該国の免許の有無に拠るはずである。何らかの国際協定（研究医は、医療行為をしない限り、どこでも通用するだろうが、臨床医はそうはいかない。例えば、TPPなら可。実際、TPPが農業問題やせいぜい貿易問題との関連でしか論議されていないのはおかしいと思っている。日本の若い人たち、それも臨床医師に限らない高度の専門職業人の働く場が大幅に拡大されるのだ。国内の機会が急速に縮小しているだけに、実質的には、みんな一緒に心中しましょう、という選択肢はありえなからう）が背後にない限り、医師はそれぞれの免許国から外に出て医療行為をすることは原則としてできないはずである。そして、それが緊急事態でも必ずしも例外扱いにはならないことは、クライストチャーチの地震のときに日本から飛んで行った医師が診療参加を拒否されたことから推察がつく。

実際、いわゆる「優秀な」少年少女が、はっきりとした契機なしに、(臨床の) 医師を目指すことは勧められないとわたくしは考えている。今後の日本を考えると、国内に留まり続けることが原則的な条件の臨床医という職業を選ぶことが、自分にとって本当に魅力的なことなのか、自分が本当に世の中に役立とうとするときに選ぶべき職業なのか、そういうことを考え抜いて、その上で、覚悟を決めて、(臨床の) 医師を目指してほしいわけである。そして、この覚悟があれば、当然、本物の(臨床の) 医師にならないわけがないではないか。

今の高校生くらいが医師になったとしてキャリアの華の時期が四半世紀後、つまり、かれらが40代初めとして、その頃の日本の様子を想像することは難しい。だが、現状から外挿する限り、決して薔薇色ではないことの方が蓋然性が高からう(少なくとも、わたくしは生きてはいまいが)。ところが、医師、特に、臨床医は、社会が円滑に廻るために絶対不可欠な職業ではある。そして、高度の専門職業人として粛々と日常の業務をこなすことが期待されており、業務の内容と実施に要する知識技能の特質が、医師の人格への要請を厳

しくし、また、医師の養成に長大な時間と（主に税金であるが）多大の費用とが費やされている。一旦身を投じたら辞めることは許されない厳しい職業でもある。

かくて、医師であることは、一般的には、社会的経済的な安定や敬意を齎すものであるけれども、それは結果であって、医師の権利ではない。医師という職業の成り立ちの過酷さを思えば、世の中がどう変わっても、それに見合う程度は安定が保証され敬意を以って遇されるようでありつづけてほしいと誰もが考える。しかし、四半世紀後の日本では果たしてどうだろうか。医師という職業が成り立つためには、何よりも、日本の社会がそれなりに健全であることが前提なのであり（例えば、今は高齢化が進行しているからとして高齢化シフトしても四半世紀後には高齢者は激減しているだろうとか）、そうだとすれば、何よりも社会的均衡こそ重要である。

それなのに、メディアが医師であることや医師になることが、それ自体に大きな価値があるかのように、煽り立てている。これは医師や医師志望の人たちの責任でも問題でもないのだけれども、日本の社会の健全な人的バランスを考え、このようなことの招来する未来を考えると、医師である人たちから見ると、むしろ、大変困ったことのはずである。ところが、実際に相当に偏ってしまっており、もう手遅れかもしれない。首都圏では、いわゆる「優秀な」子の医師志望率は高くはないが、地方では極めて高い。だが、地方の疲弊は急激に進んでおり、かれらには四半世紀後の展望さえ、このままでは、開けないかも知れない。

つまり、未来の日本の医療問題は、優れて現在の政治課題であり、医師の養成数の増減などでは対応できず、医療行政や医療システムそのものを根本から再構築しなければならぬのではないかと、と思われるのだが、そこには医療関係に限定されない種々の利害が絡み、解決らしい解決もできないまま、漂流が続き、何かとんでもないことになりそうである。実は、上掲の小林氏の書物に感じる根本的な「いかがわしさ」は、こういうことへの言及を全く欠いていることである（137回記事付記参照）。

付記（平成24年5月22日）：先日、医師会の会員総数と現勤務先の卒業生の医師数とを比較して、大体1%強の医師が現勤務先校の出身であり、してみると、もし彼らが団結していたとすれば、日本の医療を変えることができたかも知れないというようなことを誰かに話した。もちろん、どこの医学部でも、その出身者だけで似たような数字にはなるだろうが、これは医学部横断的な数字だからこそ、医療を変えられたかもしれないということである。ところが、利用したサイトが不正確で、医師会会員総数が間違っていたらしい。

いずれにせよ、公表非公表は別として、現在の医師の実態に関する詳細なデータは、日本医師会か厚生労働省にあるはずではある。とまれ、最近調べた数字では、概ね17万人程度が医師として活動しているらしい。日本の人口が1億2千万とすると、医師一人当たり700人というところであろうか。と

ところで、当面、ほぼ年間 8000 人医師が増えて行く。退職する医師もいるだろうが、趨勢として遡増ではあろう。その結果、例えば、今、18 歳の青年が 40 歳になる 22 年後を考えると、医師数は 30 万人を若干下回る程度かも知れない。日本の人口は、現在の傾向では、減少して行くから、これは人口統計の推計値が利用できるが、2030 年で 1 億 1 千万、つまり、医師一人当たり 400 人強、さらに、今 12 歳の少年が 40 歳になる 28 年後という、医師数は恐らく 30 万人を超えるだろうが、人口は 1 億人以下、医師一人当たり 300 人強となるだろう。

従来、医師会は、このような事態が予測されるとき、医学科の定員抑制を国に働きかけて対応してきた。ただ、今後の問題は、日本では急激な人口減少が起きているが、国外では人口増が続いており、地球全体では、医療需要が急激に伸びているということである。このような時代に、国内事情だけで国内の医学科の定員抑制を行うことは、結局、日本の医学教育や医学研究の水準の低下を招きかねない。これは医学部志望学生の偏差値とは無縁と言ってよいことではあるが、実際のところ、動機づけが維持できないだろう。そして、その一方で、先述の通り、国外では医療需要は急速に高まって行くだろうから、医学教育や医学研究の水準の向上は加速されていくだろう。要するに、日本の医学研究や医学教育を、予測される世界的進展に遅れないように、運営して行くにはどうするかが問われているので、国内の医師数の適正規模の管理も悩ましい問題ながら、日本の医学や医療そのものが埋没してしまっただけでは何にもならないことになる。

このような課題に対処することは、優れて政治的なことであるが、一旦縮小均衡への道を歩むと急激に劣化してしまうのが、日本における種々の事態の通則のようなものでもあり、医学科の学生定員の抑制は、最小限に留めるか、あるいは、条件を整備して、全く、行わないのがよいように思われる。整備すべき条件とは何か、と言え、国外での医療需要の急速な増大に、日本国内で養成された医師が対応できるようにすることである。しかし、どこの国も、医師は免許職であり、他方、非常時の徴用や軍医勤務の義務を負っており、日本でも、医師法に「応召義務」規定があるが、社会的性格のものではなく、「軍医」規定はないであろう（東日本大震災の際の医師の活動も政府が命令を出さ（せ？）なかったこともあるが、基本的にボランティア的性格であった。他国では想像もできないことである。防衛医科大学校を設置しなければならなかったという事由もある）。

このような背景のもとで、日本で養成された医師が海外で診療活動に従事するには、外交上の条件整備が要るはずであり、それも、生活条件の悪いところが対象であれば容易であるとしても、一定の生活水準があるところでは協定の交渉も相当の困難が伴うかもしれない。それでも、努力する価値はあるだろう。また、国際機関で働く医師も必要であろう。要するに、行政や外交、あるいは、軍事などの分野で、医師資格相当以上の医学知識を備えなが

ら、医師としての活動よりも、一般の行政官や外交官、あるいは軍人のような役回りの医学科卒業者をある程度の数揃えて置くことが、一般の医師が、患者数の減少にもかかわらず、しっかりと仕事ができる上での基礎的な条件になるのではないだろうか。

もちろん、言うまでもないことだが、医師問題に限らず、あらゆる点でも、できるだけ早く、現在の少子化の傾向を逆転させることである。余り時間はないと思われるが、一応、10年以内に、少子化の傾向を止められたら、本当の意味での将来の展望も開けて来るだろう。

付記2：(平成24年10月6日) 新校舎への移転の時期が近づき、部屋の整理を始めた関係もあるが、

田島知郎：病院選びの前に知るべきこと
医療崩壊から再生に向けて
中央公論新社 2010
ISBN978-4-12-004129-7 C0047

の処理を考えている。つまり、現勤務先の図書館に入れよう、という決断をするかどうか、ということである。著者は、国際的な文脈での医療体制について詳しい人で、その観点から、日本の現行の医療体制の困難の本質を指摘されている(とわたくしは思う)。そして、その指摘の意義は、実は、医療の場合に限らないのだが、医療の場合なら、

ひとえに医師を利益相反状態に置く「医師＝経営者」の構図が医療を歪め、医師の志を貶めてしまうからではないのか

という慨嘆に尽きることになろう(p.242)。しかも、それゆえに、医師は庶民から見て理解可能な水準の「小金持ち」になり、世間的な「誤解」を産み出していく。その結果が、

秀才でなければ入学できないように認識されている医学部(p.241)

になったのであろうか。

いずれも「あとがき」からの拾い出しだが、本書の迫力や真剣さに比べると、本来は、このブログ記事の小林氏のものは紹介には値しないのだが、「営業的」にはそうもいかないところがある。実際問題として、わたくしは、もはや「秀才」に医学部に行けという時代は過ぎたと思うが、一方で、医師という職業の重要性を思うと、医師の養成課程に奇妙な差別化が当然とされている現行の「医学部入試」の状況はおかしいと思っている。確かに、一人の医師の養成には多大の時間と経費が掛かり、到底私的な負担では賄えないものであるから、国費が国公立を問わず(多寡はあるにせよ)投入されるのは当然である。しかも、医学部は基本的に職業養成課程なのだから、どこであつても教育訓練内容に大きな差があるわけではない。それでも差があるが、

特に、私立医学部の学費が著しい問題である。私立医学部は、既成の開業医の子弟が多いとされ、高額な学費を支えられるのは彼らだけだからだと了解されているようだが、実は、それを誰も怪しまないことが不思議でもある。

田島氏の指摘は別として、現実には、開業医諸氏は裕福であるとし、子弟を医師にしたいという傾向は一般的であるとしよう。そうだとしたら、なぜ、かれらは、医学部進学希望者のための奨学金財団を作って来なかったのか。個別の小さなもの、特定の医学部に密着したものはあるだろう。しかし、医師養成課程の差別構造を打破しようという方向性を持った奨学金財団を作ることはできたはずである。この奨学金受領資格があれば受け入れるという国公立の医学部を募集し、できれば、年度ごとに変更しつつ、奨学金の水準を高位に設定し、かつ、受領者の学業成績管理を財団が行なうことによって、安定した良質の医師養成が可能になっていたのではないか、と思われる（「理三」の狂騒は定員が少ないこともあるだろうが、学費の問題もあるかもしれない。しかし、狂騒が秀才度のベンチマークテストのような誤解から生じているとしたら、当人も周辺も将来の患者たちも含めて、誰ひとり得する人間がいない。）。この奨学金財団も新規には年間数十人くらいが限界かもしれないが、奨学生をおくる医学部も当然審査の対象になり、現行の医学部すべてに奨学生が行くわけではないとすれば、奨学生総数が毎年 200 人くらいというようなものが存在していてもよかったはずである（差別化としては、個々の医学部ではなく、奨学生であったかどうかの方が大きいだろうが、その差別化に実質的な意味と価値が生ずるように、財団が運営できるのか、というと、そこは「日本」であり、難しいのかもしれない。こういう「妄想」がかつて唱えられたことがあるかどうか知らないが、まあ、否定的な意見もすぐに思いつけそうではある）。

140. (11.07.01) 現在の仕事を引き受ける一年前に、「フーリエの数学」という書籍原稿を作るという約束をしながら、十分な時間がないまま、大分年月が経ってしまった。何とか義理を果そうと、ぼつぼつと書き溜めてはいるのだが、なかなか進まない。フーリエの数学と言えば、その名が付された三角級数展開や三角関数を核とする積分変換が思い浮かぶ。これらの延長上の知見は、今や応用数学では必須であり、当然、最先端の科学・技術の研究・開発現場はもちろん、現代の日常生活のほとんどすべての局面において、陰に陽に利用されている。いわば、近代そのものとも捉えられるかも知れない。

ところで、フーリエ自身は、フランス大革命の申し子ともいべき人で、波乱万丈の人生をおくった (Jean Baptiste Joseph Fourier: 1768 年~1830 年)。しかも、冒頭の「原稿」では、趣旨から判断して、「数学」、つまり、フーリエ解析といわれる数学分野の基礎の話だけではなく、「フーリエ」の方にも相当の力点を置かなければならないようなのである。

ということもあって、フーリエの主著「熱の解析的理論」(1822)

Jean Baptiste Joseph Fourier: Théorie analytique de la chaleur

を眺めている。特に、先日、Cambridge Library Collection の復刻版

Cambridge Library Collection
digitally reprinted version (2009)
Cambridge University Press
ISBN 978-1-108-00180-9
ISBN 978-1-108-00178-6 (英訳版)

を入手してからは、大学図書館からの借り出しなら忘れてはならない返却期日がなくなった。

同じシリーズには英訳 (1878) の復刻版もあり、これも入手したが、原著刊行後半世紀余りの、今となつては一世紀以上昔のものとは言いながら、注が付されており、それはそれで有益であった。いずれにせよ、古典の翻訳というものは、原著の刊行時点から翻訳出版時点までの時の経過のその古典が及ぼした影響についての評価や必要な注釈類が伴っていて初めて意味があるわけだが、特に、邦訳の場合、なかなかそれだけのものがないことも事実ではある (上掲書の場合、全くお薦めできない翻訳が数年前に出版されている。他方、現在出版待ちのものがあるのだが、それこそ注や解説の関係で遅れているとか)。

フーリエの熱理論への関心は、時代背景から言っても産業革命の影響によるのだろうと、実は、長年思い込んでいた。前世紀の末近い昔の話だが、フーリエ解析の大家カーヌ (J.-P. Kahane) 教授に、何かの手紙のやりとりのついでに、このようなことを申し上げたところ、いや、それは違う、熱機関はカルノー (Sadi Carnot) の仕事で、フーリエの関心は地球環境の熱収支だったと、注意された記憶がある。実際、上掲の「熱の解析的理論」の序章 Discours Preliminaire を見ると、産業技術の発達への言及は皆無ではないが、しかし、気候、気象や海洋などにおける熱現象の影響や、太陽光線による熱供給と地球の原初熱の放熱との均衡の話に大半が割かれており、熱の数学的理論を一般的な状況で自分は得たから、その結果を、以上の話題に適用できるという主張が述べられていた。

原稿の趣旨から言えば、その程度のことがわかっていればよいのだが、できることなら、序章を引用しつつ、フーリエの研究動機を示したいと思い、序章の翻訳を試みた。仏語版で 22 ページ、英訳でも 13 ページに及ぶ長大なもので、しかも、19 世紀前半までの知見に基づいている話でもあり、今日的にはどうかとなると判断が付かない内容である。幸い、

山本義隆：熱学思想の史的展開，1，2，3。

ちくま学芸文庫 2008，2009，2009

ISBN 978-4-480-09181-9 C0142

-09182-6 C0142

-09183-3 C0140

があり、泥縄気味だが、目を通した。

山本氏の書物は、この意味で、まさに大変ありがたいものだった。フーリエの序章の冒頭の二小節も引用されている(2, p.293)。わたくしは、「第一原因」という語に抵抗を覚えたので、

宇宙の働きは、その大元となると我々には全くわからなくても、
簡単で恒常的な法則に従って現われるので、観察によって暴き出すことができる。そして、自然哲学の研究対象になるのである。
熱は、重力と同様に、宇宙の全物質を貫く。その放射は空間のあらゆる部分を占める。われわれの著作の目的は、この熱という元が従う数学法則を明らかにすることである。この理論は、今後、一般物理学のもっとも重要な一分野となるであろう。

のように訳出してみたが、山本氏の引用文はもっと直截的な形に整えられている。

さらに、熱に対するフーリエの数学的現象主義(2, p.176. 原書第1章17節前半)への言及があった。フーリエが属した時代の熱学思想をはじめ、今日に至る熱理論に関する知見を得るのに、極めて好都合であった。そして、フーリエの熱理論への動機が、まさに、地球環境の熱収支にあったことも強調されている(3, pp.323-325)。実は、この箇所を含む

第34章 熱学と熱的地球像—熱学が意図してきたもの

の内容は当ブログの本来趣旨と関わりが深い。

137回記事で概観したが、古典ギリシア世界の空間認識は、Ivinsの観察に従い、また、最近の古典ギリシア美術史の知見に従うと、接触筋肉感覚的であり、ここが難しいところだが、往時の哲学者たちに諸説があったようでも、結局のところ、「直接的経験に寄り掛かるアリストテレス自然学」(山本:3, p.312)に収斂したことには相当の理由があったのであろう。ガリレオの科学は「経験を一步越えたところで成立している」(3, p.312-313)わけだが、その前に、ルネッサンスの視覚的な空間認識に基づく均質な空間が成立し、それが微分積分学のアイデアを支えたと、まあ、わたくしは思っているわけである。この上に、ガリレオやデカルト、ニュートンらの機械的・力学的世界が成立した。そして、その底流は決して科学の進展だけに影響したのではなく、社会にも大きな影響を与えてきた。さらに、ここまでは「最初の一撃」だけであつたかどうかはともかく「創造神」は「存在」したのである。そして、山本氏はその後の物語を書いておられる。137回記事で敢えて白状した基本的な設問についても、続編を考えると、山本氏の用語なら、「共同主観」において

空間認識、ひいては、世界観の改訂はどう行われるのか世界観の改訂の契機となるものはどういうことかなぜ世界観は改訂されなければならないか

などという問いに答える必要があるだろう。

さて、基本的に原著者に語らせるという形を取りながら、適切に批評を加え、議論の不足を学問的に正確に補い、さらに、それ以降の進展との距離を評価しつつ、論述を重ねて行くという山本氏の姿勢は、実に贅沢なものである。しかし、氏の力量と見識がなければ成しえなかった仕事でもあると思う。「再刊にあたってのあとがき」が淡々としていながら、自負の程度が伝わってきて、すごく嬉しい。学説史の著者で、わたくしが個人的に存じ上げているのは、数学史家が若干というところであるが、いずれの方もロマンティストであり、どちらかというところ、対象に入れ込んでしまう感がある。かくて、迫力のある文章が紡ぎだされて来るとはいうものの、本来の数学思想の発展や系譜を辿るには、やや思い込みが先行していると思わざるを得ない場合が少なくない。概して、数学史家は優れた文学者であるというべきなのであろう。そう自負している人もいるだろうが、一方、そう評価されるのは本意だという人もいるだろう。他方、山本氏の書物は間違いなく学説史であり、しかも、冷静である。一次資料を解説し、詳細に文献資料を博搜しても、論考の価値は考察の動機となるアイデアそのものの適切性に懸かっている。山本氏は、自然哲学者として近世熱学の歴史を書かれたのであろう。

ところで、冒頭の前稿の話であるが、中間部は未定だが、最後の方で、ケルヴィン卿ウィリアム・トムソンの積分器やブッシュの微分解析機の話に触れたいとは思っている。ブッシュはともかく、トムソンは、フーリエ係数の計算のために、積分器を提案すると言っているのだから、実際はものにならなかった器械であっても、こういう機会に触れておきたいと思っていてもいい。さらに、前稿には関係ないが、現勤務先の保護者の中に鉄工所を営んでいる方がおり、そう費用を掛けずにできるというものであるなら、ケルヴィン卿の積分器の模型を作る相談をしてみたいと考えている。

なぜ、わざわざ積分器の話かということも説明が要るかも知れないが、別の機会にしたい。

付記（平成 23 年 9 月 2 日）：なお、序章のコメントつき翻訳の試みは拙HPにある。文字通りの拙訳であり、誤りや不適切な用語、訳語も多いであろうが、ご参考までに。

141. (11.07.15) 会議の待ち時間に勤務先の医学図書館で「教育と医学」の7月号を見た(135回136回記事参照)。

この号の特集は「学級崩壊」であって、どちらかというところ実践的な内容のようであった。ちなみに、寺脇研氏の連載もあり、

『「わが国の教育の目標」の見直しを』

というタイトルの長文がつづられていた(pp.50-55)。下敷きにされている話題がいくつかあって、業界の人なら説明が要らないのだろうが、アプローチの姿勢がロマンティックすぎるように思われる。

135 回記事で触れたように、これからの世界は否応なしに国際的な文脈で誰もが「生きる」ことが当然になるので、初等教育関係であっても（勝手な）夢に基づいた綺麗ごとを唱えていれば免責されるというわけではないだろう。もちろん、やたらな詰め込みも論外であるとは思うけれども、綺麗ごとでは生き抜くことはできないと達観したときに、なお、やたらな詰め込みは論外と言いうる「論」とは何なのか、その説明が要るだろう。つまり、何よりも前に、われわれが大事にしている価値を明示化しなければならないのではないだろうか。そして、教育は、この価値を維持し、強化する方向に向けることであると気付かなければならないだろう。

ところで、寺脇氏の連載記事の前のページに、「グローバル化時代の人材育成」という記事があり、遅まきながら、文部科学省のサイトに入って、文部科学大臣の私的懇談会という「国際交流政策懇談会」の最終報告書を見た。「教育と医学」の記事では、小学校での英語教育の強化が提言されているとあったけれども、提言の正式の標題は長く、

我が国がグローバル化時代をたくましく生き抜くことを目指して
—国際社会をリードする人材の育成—

というのであった。提言は、この懇談会の委員の方々の大所高所に立ったご意見の集約ということとされている。遅ればせではあるが、この提言については少々論じておかなければならないと思う。

懇談会委員の名簿も拝見したが、面識のある方が皆無というわけではない。特に、ある大学の関係者の方などは（現勤務先の同窓会のイベントで）何回もお目に掛かったことがある。最初に会ったときには、その大学にいた「わたくしの知人」が定年で退職したときは皆で祝杯を挙げたなどという話を聞いて、一緒に笑い転げたものである。この「わたくしの知人」は、しかし、非常に真面目な人で、本質に直截的に斬り込んでいく。本来は決して笑ってはいけない話なのだが、学術面でも大学行政でも、こういう調子だから、周辺はフォローに大変であり、そして、学術的にはともかく、非学術的な主張は、残念なことに、必ずしも真面目に相手にされて来なかった。大学の会議では、上記委員の方を含め急進性の不足を責められた人は多かったのであろう（わたくしのことではない。念のため）。

余計なことを書いてしまった。この提言に戻ると、折角のキーワードの説明が十分ではないような気がする。

まず、「グローバル化時代」とは何か。提言の「1. はじめに」の冒頭では、「いわゆる」をこの語の前に付し、説明というか、

ヒト、モノ、カネの流動性の高まりにより「国境」の意義が曖昧となり、各国の相互依存が複雑に深化している。

と続く。間違いではないが、この程度の観察内容であれば、今に始まったことではないと思われる。

むしろ、こういう意識を欠いたままでも今まで国の運営ができると思っ
ていたとしたら、それこそが問題ではなかったか。つまり、昔から、地球
が丸いとわかったときから、「グローバル」こそが常態であったはずであり、
それが日本ではつい最近までそう意識されていなかったからこそ、いろい
ろな不都合についても正確に認識できないまま来たということがあるのでは
ないだろうか。不都合の認識が不正確であれば、対策なるものは、もとも
となかったか、あるいは、たとえ試みられたとしても、見当違いであったか
も知れない。それが今やどうもそれでは済まないようだということから、
例えば、懇談会やその提言という運びになったのではないだろうか。

一方、「国際社会をリードする人材」という語が出てくるが、説明不要とい
うことか、いきなり、「求められる能力」として、4点：

日本人としての素養、
外国語で論理的にコミュニケーションをとれる能力、
異文化を理解する寛容な精神、
新しい価値を生み出せる創造力

が挙げられる（1. はじめに、第4小節）。さらに、語学力以前に、

国際社会で自らの考えや立脚点を臆することなく主張できる能力
が必要であり、その際、我が国固有の文化や歴史に関する正しい
知識を身につけ、自らのアイデンティティに係る自信と謙虚さを
持つことが重要である。

と注意されている。委員の方々それぞれは具体的な人物像をお持ちなのかも
知れないと思うが、しかし、この文言は抽象的であり、また、すぐ上にあ
る「求められる能力」との論理的な関係もはっきりしない。

そもそも「国際社会をリードする」とはどういうことか。また、「国際社会
をリードする」必要があるのか。そういう発問があってもよかった。わたく
しがこう問うのは、国際社会と縁を切ってもいいという考えもあるのでは
ないかということを含んではいない。実際、現代のわれわれは、まさに、国際
的な環境そのものの中で生きており、その意味では、そもそも「国際社会を」
という限定的な修飾語が要るのかということである。殊更に「国際社会」と
いう人たちは、われわれが現代に生きているということ、現代の日本が現代
世界を作り上げている一部分であるということに完全に失念しているのでは
ないかと思う。どこかに「日本」対「世界」という発想が潜んでいるのでは
ないだろうか。それでは、グローバルな感覚が曖昧な人たちがグローバル化
を論じているという構図に近いかもしれないのである。少なくとも提言の読
者の相当数が「日本」対「世界」という発想を怪しまない人たちであるとい
う了解はあるのだろう。

少々脱線するが、わたくしが駆け出しのチンピラ（今は、単に、とうが立っ
ただけだが）であった頃、ある月刊誌に載っていた母校の校長のエッセイを

読んで、そんなことだったのかと思ったことがある。校長はイエズス会神父のドイツ人で、当時は、中央教育審議会の専門委員を兼ねていたのではないかと思うが、先生が預かっていた学校（つまり、我が母校）は何と言ってもカトリック信者獲得のためのミッション・スクールであったのだが、このエッセイで先生が強調していたのは、本物のカトリック信者は三代目以降であって、例えば、この学校在学中に洗礼を受けても、まだ、カトリック信者としてはだめだと言うのである。ミッション・スクールの校長としては聞き捨てならないことを書いたようだが、さすがにドイツ人ならではの発言で、宗教が歴史文化現象であることを踏まえた、それこそ、身体から染み出している見解であると思った。実は在校中やや馬鹿にしていた人ではあったけれども、こんなに深い考えの方だったのかと、改めて感服した記憶がある。他にも、先生は、指揮下の学校の卒業生の進学先が（世間の風潮の影響で）数少ない特定の学校に限られる傾向にあることを憂慮し、何とか多様化したいと述べておられたと思うが、これも、今のわたくしの立場になると、理解できるような気がする。「学校歴」と「学歴」の違いを力説されていたのである（余計なことだが、現勤務先の校長になってから、「母校」を訪問したが、その折に、当時の校長に、お宅は日本でも安土のセミナリオから数えて5世紀になる「歴史」があり、世界中に、さらに、ヴォルテールに従えば、木星にさえも、系列教育校を展開して来ているのだから、多少の変動にはびくともしないだろうと言ったところ、朝令暮改の文教政策（日本だけとは限らない）に振り回されるので、と苦笑いとともに応じられた）。

それはそうと、先生のことを思い出したのは、(外来宗教に限らず、そもそも)「国際化」の認識は文化であり、その意義や本質がわかり、しかるべき達観に到るのには、やはり何世代か掛かるのかということを感じるからである。われわれは150年前に「鎖国」を解いた。しかし、依然として、「日本」対「世界」という発想が先行し、「日本」が「世界」の一員として、「世界」の未来構築の一当事者であるという意識が育ってはいないように思われる。「グローバル化時代」というとき、根底に置くべきことは、いたずらな緊張感ではなく、「日本」は「世界」の一当事者であるという認識の共有と確認から始めなければならないと、わたくしは考える。(国際化ということではなく)国際的であるとはどういうことか、その問いから始めなければならないのである。

ちなみに、文化が善きにつけ悪きにつけ身に着くには三代が必要だというのなら、父方も母方も、明治期以来、西欧文明との格闘をしてきた家系という意味では、わたくし自身、個人的には必要条件是満たしているかも知れない。ともかく、ここ数世代の「国際化」のレベルの違いを身を以って理解できる立場に(いろいろな意味で)一応はいるとは思っている。上述の懇談会の委員の方々も実はそうではないかと思われるのだが、何か、正直に振舞ってはいけなような、そういう強迫観念から、「日本」対「世界」というスキームのいかかわしさを打破できなかったのではないか、と思われる。

さて、提言から大分離してしまった。「日本」が「世界」の未来構築の当事者という認識の下では、「国際社会をリードする人材」の意味も異なってくるはずである。もちろん、上掲の「求められる能力」の4点の条件は、外形的なものではあり、当然のものである。しかし、これら4点が、実は、個別に表れるのではなく、ある「価値」の具現に伴って自然に表出すべきものと捉えることこそが正しいのではないか。今後はもちろんだが、今までもそうであったはずなのである。そして、この「価値」において、(日本人とは限らない)「国際社会をリードする人材」が個々に背負っている文化や文明の違いが現れてくるのだと、わたくしは考える。そして、それぞれの固有の文化文明に基づく「価値」の発露によって、なお、個々の発信者や受信者の個別の文化や文明からの「価値」の域を超えた水準の仕事ができることが「国際社会をリードする」ということの意味であろう。日本で教育を受け、「国際社会をリードする」という場合には、日本の文化文明に基づく「価値」に無縁ということはありません。個々人においては、成長の履歴があり、基層が日本の文化文明だけではない場合もあるだろう。

それにしても、たまたま地理的に日本列島内でなされる教育にいわゆる純粋日本的でない要素を高めれば、国際社会をリードするようなグローバル化時代の人材が育成できると考えるのは、論理的とは言えない。また、提言の本旨もそういう単純なことの主張ではあるまい。従前は、日本の教育では、教育の成果がそのまま世界中で通用するというを明示的に意識しては来なかった。しかし、実は、さればこそ、日本の今日の国際的な地位があるのであり、しかも、単純に、学力面だけの成果によるものではない。実は、教育の暗黙裡の背景にある日本の社会の性格に依るところもあるはずである。長短善悪があることは、われわれはよく承知しているつもりではあるが、国際性、普遍性という観点からは、長短善悪を探ることは余りないように思う。つまり、日本の文明や文化に基づく「価値」なるものは、決して抽象的なものでもなく、また、殊更に明示化しなくても、世代の差を越えて共有されているはずのものであり、例えば、先般の東日本大震災の折に、被災地の皆さんが大変な苦悩の中で示してきた行動もそういう価値の現われであるはずである。他方、「21世紀を生きる」とか「グローバル化時代にふさわしい」といった修辭を伴って教育理念を論じるのは、「21世紀」や「グローバル化」が一種の必然であって、われわれの意志とは関係なく成り立つものという前提があって、そういう対象に適応しやすいように、いかにみずからを整えて行こうか、という、どちらかと言うと、技術的な発想が先行しているようである。

「提言」においても、「2. グローバル化に対応する教育の提供」以下では、実際、現象面での「国際化」対応に集約されており、わたくしが問題視していることとは相当の間隙がある。技術的なことが無意味だとは考えないが、不用意かもしれないという危惧は強い。特に、「日本」対「世界」、「国内」対「国際」という対比が価値の優劣を伴うような印象を与えかねない形で、技術

的な体制作りが進むとしたら、それでは肝腎の日本の文化文明を基礎としての「国際社会をリードする人材」には至るまい。そして、その一方で、普通の「日本人」のストレスを強め、「国際化」への心理的な反発を招く可能性もある — 否応なしに、国際環境で生きているにもかかわらず。前者の効果は、わざわざ日本の金や人を使っただけの結果としたら意味がないことだし、後者は、まさしく、逆効果である。

先に、「本物のカトリック」は三代掛かるという母校元校長の話に言及した。しかし、ミッション・スクールとしての立場では、本物かどうかは余り問題ではないかも知れない。「本物」かどうかは、ひょっとしたら、いわゆる「カトリック国」それぞれで内容が違うかもしれない。カトリックの場合は、ローマ教会が仕切っていることになるが、それでも、教皇の方針によって、いろいろな変化はあるようである。要点は、布教という観点が加わると、それなりの相対化が少なくとも表面的にはなされ、われわれは、その表面的かもしれないけれど相対化部分とは、相手が宗教であっても、交際できるのである。日本の国際性を論ずるときに、相対化に耐える日本（人）的な「価値」を確認し、日本（人）の世界貢献の根幹をなすもの、あるいは、日本（人）の魅力の中心であるものを、確認しておくことが、種々の技術的な議論に先行していなければならないのではないかとわたくしは強く思う。もちろん、日本的なものを押し付けようとか、何がしかの教育宣伝活動を効率的に行いたいということの意味するわけではない。しかし、そういう側面が意識せずとも滲み出てくるかもしれないとしたら、出来る限り、そういった要素も把握して管理下に置くべきだろう。自らの「価値」を相対化し、他の文化文明の「価値」それぞれとのしかるべき差異が認識できるからこそ、相互に興味を引き、交流が生じるのである。ビジネスは金銭的な収益に翻訳されるという意味で抽象度が高い。しかし、現場では、それぞれの文化文明を背負った人間同士の接触のはずである。この基本への認識が希薄では、「国際社会をリードする人材」は、そもそも、空語でしかないのではないかとわたくしは思う。

実際は、「国際交流政策懇談会」の委員の方々は、「提言」後段の具体的な「国際化」の技術的な取組みにおいて実践的な活動をされていることは承知している。問題は、「提言」の「はじめに」の前段階の部分のことであり、「国際交流政策懇談会」の埒外のことにある。つまり、日本社会全体でおおよその共通理解が得られているような、しかも、合理的な世界観というものが、一体あるのかないのか判然としないという、そのことが問題なのである。わたくしは、世界の中で「日本は魅力ある存在」であり、少なくとも、ここまではそうであったと思うが、その「魅力」が実はどんなものであるのかは的確に知っているわけではない。しかし、日本と世界との関わりで、この「魅力」を確かめておくべきであり、しかも、それは、われわれ日本人からは必ずしも見えない、あるいは、見る必要もないところにもありうるわけで、その上、先方それぞれの文化文明の立場が反映するであろう。確かに、語学力

に長け、議論にも積極的であっても、基礎となる素養や発想が（日本人であっても）先方とほぼ同じであったら、先方はそこに日本人がいるとは思えない。これは、国際化ではない。他方、基礎となる素養や発想が日本の文化文明に根ざしていても、相手が興味を持ち、魅力を感じてくれなければ、いくら語学の達人でも相手にしてもらえず空転するだけであろう。「求められる能力」の4点も、実は、自明ではないのである。

「提言」の記述に関しては、随所に何がしかのコメントを付したい思いがあり、手元のダウンロード資料には書き込んであるのだが、脱線を繰り返しているうちに、この記事は入り口のところだけで、すでに大変長くなった。まとまりは悪いが、中断する。

142. (11.07.23) 時間つぶしに立ち寄った天神の黒木書店で、小説本2冊

加治将一：陰謀の天皇金貨

史上最大・100億円偽造事件 — 20年目の告白

祥伝社, 2011

ISBN978-4-396-61394-5 C0090

と

万城目学：偉大なる、しゅららぼん

集英社, 2011

ISBN978-4-08-771399-2 C0093

を見つけ、購入し、ざっと読んだ。

支離滅裂な選択だが、加治氏のものは話題になっている事件には記憶がある。少々危ない内容かな、という思いが購入時に頭を過ぎったし、奥付の下にも「危なさ」を示唆する文言があった。ただし、危なさの方向やスケールは、わたくしが予想していたものとは違った。天皇金貨とは、昭和天皇在位60年を記念して発行されたという10万円金貨である。発行枚数が歴大であったことと、純金価値が額面に比して極端に低く、したがって、金貨の特質を考えると、偽造を（必然的に）誘発するものであるとは、「偽造金貨」が話題になってから何かの解説で読んだ記憶がある。

加治氏の小説は、もとより fiction であり、そう思って読むべきものである。それでも、実在の人物名や、地名、企業名と仮構の人名や、地名、企業とが混在していると、そこらに著者の作家的意図が潜んでいるのだとは思いうけれども、それはそれとして、「陰謀」は金貨発行時点を挟む数年間の米国を中心とする国際情勢が背景にあり、日米関係や中東問題、中南米情勢が絡み、さらに、国内関係者の保身やら何やらも色を添えてあったわけである。作品では、小説家が、海外に流出した天皇金貨を国内で額面価格に換金するという作業をコミッションだけで請け負ったというコイン商と遭遇したところから話が始まり、小説家がコイン商から聞き出した内容という体裁で小説は出来

上がっている。コイン取引は信用だけから成り立っているとのことではあるが、この小説の構成では、コイン商の設定が恐らく一番弱いところであろう。したがって、小説の事実関係の当否というかいくらかでも根拠があるかどうかはわからない。当然、天皇金貨には偽造金貨が存在しなかったかどうかについても実はわからない。「陰謀」とは何かは、この小説を読んでいただくのが一番いい。

ただ、はっきりしていることは、

- 1) 10万円の金価値のない「金貨」を額面10万円で1000万枚以上発行したという事実

(つまり、将来にわたってプレミアム価値が発生しにくいということ)と、その際、

- 2) 当事者に、本当の意図が何処にあれ、記念金貨という付加価値と国内流通だけという建前で額面価値と金価値との差が補填されるという思い込みがあったらしいこと

である。わたくし自身は記念金貨に興味はなかったが、当時のお年寄りたちは相当購入したのではないか。記念金貨という付加価値を加えても、金品位の低さは、大蔵省内でも問題になっていたのではないかと思う。偽造されやすいかどうかではなく、最初から「金貨」ではなく、実質は「記念メダル」であったようである(しかし、その場合、10万円では販売できなかったろう)。そういう意味では、国が「善良な国民」をペテンにかけたようなものなのだが、ただ、当時の発行担当の課長氏は順調に大蔵省(財務省)内で昇進されたようなので、「偽造騒ぎ」にもかかわらず、そのキャリアに傷が付いたわけでもなかったのは不思議であった。115回記事で言及した書物の末尾に「日本は三流の政治家と二流の官僚に好きなようにおもちゃにされてしまった」という趣旨の慨嘆があるが、この件は、その典型的な一例であったようである。

この2)は、「日本」対「世界」という発想が暗黙裡の前提にあり、実は、目下の「日本国債」でも強調されている点である。しかし、この「金貨」に関しても本当のところはどう推移したのか、その検証は必要であろう。いずれにせよ、「日本」対「世界」という発想が暗黙裡でも前提になるような姿勢では、必ず、不都合が生ずることを覚悟すべきである。この「課長氏」は(確か高校以来の)アメリカ通ではあったが、(少なくとも当時は)世界を知っているとは言えなかったということでもある。

万城目氏の小説は、例によって、ファンタジーである。日本古来の湖沼の精から、その超能力の一部を分担して先祖代々受け継ぐことのできる家系があるとされ、琵琶湖におけるそのような一族の話である。目を通して見たところ、小説としては、実に他愛もないものではあるが、中学生や高校生には、このくらのファンタジーはいいのではないかと思う。しかし、もともと「小説すばる」という雑誌に連載されていたということで(この雑誌は見たこと

がないとは言え、子供向けではないだろうとは想像が付くので)、考え込んでしまう。この著者の小説は、しかし、かなり絵画的な想像力を掻きたてる点があり、それは著者が漫画世代だからなのか、あるいは、読者をそう想定して意図的に計算しているのか、いずれにせよ、年寄り向けではないだろう。それにしても、ファンタジーはなぜ成り立つのか。

万城目氏は、京都、奈良、大阪、滋賀と、日本古代以来の土地を中心に展開しているが、それぞれの土地のおぼろげであっても歴史的経緯が下敷きにある。一般に、ファンタジーは、そういう要素と独立でも面白みが成立するものかどうか、というか、事実として承認されていることとの関係性をどう設計するのがよいのか、そんなことを考えてしまう。

付記：「天皇金貨」の話題に直接関連しているわけではないが、最近の日経BPNet にこんな記事がある：

<http://www.nikkeibp.co.jp/article/sj/20110805/280126/>

<http://www.nikkeibp.co.jp/article/sj/20090603/157580/>

なお、「日本国債は日本国民が大半を保有しているから問題がない」という意味は、

「万一のときは国債償還のためには国民の資産を食いつぶせばいい」

という意味だと「ワンピース世代」なら喝破できるだろうと、

鈴木貴博：「ワンピース世代」の反乱、「ガンダム世代」の憂鬱
朝日新聞出版、2011

にある（ただし、鈴木氏は、最近まで營々と築き上げてきたはずの国民の資産を全部投入しても、もう賄えなくなるのではないかと危惧している）。素直に考えれば、まさにその通りとしか言いようがない。だが、「ワンピース世代」はまだ若く、また、厚遇されているようでもないから、数年内に国が破綻しても失うものは少ないようでもある。しかし、現場から離れ収入の道（収入とは言わない）が限られている「ガンダム世代」より前の老人たちには対処のしようがない。団塊世代を含む、この老人たちは数が多いが、国が破綻すると、最大の被害を受けることになるのであるが…。

143. (11.08.12) 博多駅の丸善で

西川長夫：パリ五月革命 私論 転換点としての68年
平凡社新書、2011.
ISBN978-4-582-85595-1

という書物を見つけた。新書ではあるが、477ページに及ぶ長大なもので、詳細なメモや関連文献の引用に基づいての記述である。しかも、著者撮影の現場での多数の写真を含んでおり、臨場感がある。

著者は、考えるところがあって、つい最近に至るまで、この68年五月について総括ともいべき論考は発表して来なかったと言う。だが、ある意味で、すでに母国（＝日本）においてエスタブリッシュされつつあったフランス文学の研究者が（恐らくそれゆえに）「偽学生」と称し得た余裕と、さらに、研究者（chercheur）というよりも、むしろジャーナリストに近い感覚で、ソルボンヌ周辺の学生たちにほぼ同格のように混じって経験することができたことの「総括」が、ようやく世に示されるということの意義は高い。ただ、敢えて余分なことを言えば、本書がその長大さにもかかわらず索引を欠いていることは残念であり、また、(例の「原子力村」などと同じ謂いであるが)「フランス村」周辺に居住していないせいか、わたくしにとっては内容の相当部分が符牒と装飾以外の何物でもなかったということは、それでもいくらかの恥じらいとともに、白状しておかなければならない。

さて、著者略歴によれば、著者はフランス文学の研究者で、わたくしより8年年長、朝鮮平安北道生まれとあるから、日本の敗戦後難民化してからの引き揚げ時の苦難の体験もしっかりと記憶されているに違いない。「五月の事件」の当時は、パリ大学都市のオランダ館居住であったという。日本人もかなり居住していたはずで、わたくしが親しくしていた人たちも少なくなかったと覚えている。わたくし自身は、著者と出会ったことは多分ないと思うが、しかし、そんなわけで、共通の知人はかなりの数にのぼるはずである。大学都市では、オランダ館と日本館とはかなり離れていたが、交通の便はオランダ館の方が相当によかったのではなかったか。

この「五月の事件」であるが、わたくしの理解では、「五月革命」というのは適当ではないように思う。著者は、森有正氏の見解（pp.371-372）を批判しているが、わたくしはどちらかという森氏の見解に近い意見を抱いている。関連して、加藤周一氏が引用しているというドゥチュケ、コーン＝ベンディット両氏の記事中にある言明：

学生の役割は、衝撃をあたえて、労働者大衆を起たせることである（「われわれがまず大学を占領し、その次に労働者が工場を占拠した」）（p.282）

というのは、実際の経過とは本質的な点で整合していないと、わたくしは思っている。つまり、なぜ「五月の事件」ではあっても「五月の革命」ではないのか、あるいは、今日、単に、「六八年五月」（p.8）と言われているのか、その鍵はこの辺の理解にあるように思われる。「事件」に至る社会的な底流に同情を欠いていた学生の近視眼的な思い込みに過ぎないということではなかったかと思う。少なくとも、「学生側」に視点を置いたのでは、五月の末以降の展開の説明が全くできなくなってしまうと考えている。

実は、わたくし自身「五月の事件」当時、カルチエ・ラタンの一画の寮（エコール・ノルマル・シュペリウール，ENS）に住んでいた。実際に、ある晩、寮内に打ち込まれた催涙弾が廊下に転がって往生したことがある。自室で勉

強していた学生たちも、さすがに皆飛び出して来たが、その折に、窓下の道路を埋め尽くしていた機動隊員（CRS：地方保安隊員）を見ながら、ブルターニュ出身の学生が、連中の後の半分はそれでもブルターニュにいるのさ、と呟いていたのを思い出す。

わたくしは著者と違い、学生集会やデモに参加することには興味はなかった。基本的には臆病な卑怯者であったからだが、フランス語が自由でなかったことや、それまでも、寮の食堂で同じテーブルに着くのがフランス人学生よりもイギリスやアメリカからの留学生が多く、フランス国内事情の話題が不足がちであったということもあったかも知れない。五月の事件の折も、ゼネストに入る前は、こういう席上で、イギリスやドイツでの事件報道などが話題になり、特派員なる連中が伝聞だけで実際に現場を踏んでいないらしいことを示すいい加減な記事の話が出たりした（日本でどんな報道が行われていたかは、日本の新聞を読む機会がなかったので全く知らない）。ただ、わたくし以外は、フランスの文学や歴史の研究を志していた連中で、マザリーニとかビブリオテーク・ナショナルなどという図書館に文献を写しに通っていて、その往復での出来事も話題にはなった。

それでも、当時はわたくしも一種の興奮を覚えて、新聞や雑誌の切り抜きからド・ゴールの演説のテープまでを保存し、日記も付けていた。しかし、臆病な傍観者でもあり、たまたまサンミシェルを歩いているときに、デモ隊がCRSに追われるのに遭遇して逃げ場を探す破目になったとき、周辺の商店員たちの態度がわずか数日前と一変しており、デモが完全に一般の街の人々の支持を失ってしまっていることに気付いたことを思い出す。多分、そういう経験のせいか、折角の記録類も、帰国後、何回か引っ越しているうちに何だかわからなくなり、結局、今や記憶だけになってしまった。そして、その記憶が混乱しているのである。それは、この本で、ド・ゴールの退任と亡命が69年春であったとの記述を見付け、わたくし自身が、いつの間にか、ド・ゴールの失脚が68年の夏前のように思い込んでいたことに思い当たった。多分、ド・ゴール退任後の大統領代行を務めたポエール上院議長が、すでに「五月の事件」当時から収拾策のテレビ討論などに頻繁と登場していたせいで、時期的な混同が起きてしまっていたのかもしれない（今となっては、一二年の違いがそれほど大きいわけではないかもしれないが、みっともないことに、この混乱した記憶は最近の受験情報誌のインタビュー用の下書きに反映している）。他にも似たような記憶の混同や圧縮などがあるに違いないと思う。

本書の内容と直接関わらない余分なことを書いてしまった。本書であるが、目次は、次の通り：

はじめに

第一章 六八年五月以前

第二章 ナンテール・ラ・フォリー

第三章 六八年五月の写真が語るもの

第四章 知識人の問題

第五章 六八年革命とは何であったか — 四三年後に見えてきた

もの、見えなくなったもの

あとがき

年表

主な文献

このうち、第三章が概ね著者自身が実際に体験したことであり、しかも、著者自身が現場で撮影した膨大な数の写真も付されている。著者は、むしろ、余りにも現場に即しすぎていたのではないか、もう少し傍観者に徹していた方が全体が見えたのではないか、と感じられる点もないわけではない。しかし、それは別として、臨場感に充ち溢れた、実に素晴らしい記録である。

いろいろな要素が混在していた「騒ぎ」であり、中でも、当時は、文化大革命の高揚期であったので（ENSにもマオイストはいたけれども）、よくよく考えてみると、当時の「パリでの事件」に、当時の「北京の事情」がいささかでも参照されうるとの考えの無意味さは明らかであったはずなのに、それが、「フランス版文化大革命」のように、（著者を含めて）極めて真面目に捉えられ、しかも、「五月の事件」の本質をなすかのように信じられていたということがあったとしたら、まさに、「思い込み」に他ならず、したがって、そのような期待通りに「事件」が進行しなかったのは当然ではあろう。

第四章が圧巻である。「知識人」とは何であるか、そこが問題だということが、まず、よくわかる。著者の用法を眺めていると、「知識人」の「業績」とは何かという問いを質てたくなり、そうすると、これは偏見なのだろうが、流行を作り出す人、あるいは追う人、つまり、「知識人」とは流行と共に生きる人のことではないか、という印象を、飽くまでも印象ではあるが、受ける。教祖を含めた司祭の集団のようではあるが、いずれにせよ、「知識人」は現代にしか棲息しないが、しかし、類型としては、やはり現代にしか棲息していない「研究者」とも「技術者」とも違い、もちろん、大昔からいる「政治家」や「軍人」とは全く違う。多分「哲学者」とも違うのではないか。

とまれ、著者は、この章で、森有正、加藤周一、ロラン・バルト、アンリ・ルフェーヴル、ルイ・アルチュセールを扱う。正直のところ、わたくしには、これらの方々はすべて符牒であり、装飾でしかない。作品に関心を持ったことがないのである（森さんには北大のクラーク会館で二回くらい昼食時にお目に掛かったことがある）。ただし、わたくしの知人には、これらの人々それぞれの著作に心酔している人は多い。全く挿話的なことだが、ルフェーヴルの項で、ルフェーヴル出演のラジオのテープの話が出てきて、若い出演者が、「先生（Monsieur le Professeur）」と呼びかけるのを遮って、「ヒエラルキーを廃止しよう」と応じたとある（p.326）。そして、

五月のあいだ人びとは互いに「同志（カマラード）」と呼び合い、
教師と学生も君僕（チュトワイエ）で話し合ったのである。

と注意している (p.326)。そうだったかも知れないな、と思い出すが、教授と学生、特に、大学院生との関係では、この頃を境に、アメリカ化が大幅に進んだように思う。フランス人は姓を呼び合うのが本来ということではあったが、実際、後年、院生と指導の教授がファースト・ネームで呼び合い、チュトワイエしているのを見て、変わったなと思った。これは「五月の事件」に拠るというよりも、「世界標準」が大西洋の向こう側に行ってしまった現われのようでもあり、そうだとすると、「文系」ではそうはならなかったのだろうか。もちろん、学問的な意味での師匠への尊敬・傾倒とは別のことで、社会的な交際姿勢だけの話であり、大西洋の向こう側も、ここは同じである。

そして、アルチュセールである。この人のことは名前さえ実は聞いたことがない。しかし、本書を見て、ENSに居室を持っていたとあったので、いわゆるカイマンであったのだろうか。文脈が違うからと言ってしまえばそれまでだが、本書で、レジス・ドブレの名前がずっと出て来ないのが不思議であったが、アルチュセールとのインタビューの話で出てきた (p.348)。ただし、わたくし自身はドブレが何者であるかは承知しておらず、ゲバラに近い一種の英雄として、校内でいろいろと語られていたのを見聞して記憶してただけであるが。なお、「文系」のフランス「知識人」も（飽くまでも）フランス人であり、著者が碩学との会話で違和感を覚えた点があったとしたら、そこはかれらのフランス人的本性に関わる部分であったかも知れず、さらに、掘り下げておくべきではなかったろうか。

そして、第五章であるが、これは本当に難しい。著者の「五月革命」という理解と「五月の事件」とする理解の間にこれほどの差があるのか、と思う一方で、著者は、文学の枠を飛び出た、まさに、フランス近代の根幹を押えた（左翼系）大「知識人」の一人であることがよくわかった（著者が属している京都のフランス学派の系譜は全く不承知だが、一種の規範型に近いのであろう）。著者が詳述している1970年代以降の時期のフランスとは、わたくしはもはや縁が切れてしまっており、したがって、著者が強調する「五月革命」と「大革命二百年」との性格の違いや、ミッテランの評価などを含め、この辺りの事情は実感を欠いており、意見の持ちようがない。

それにしても、「文系」の論述の錯綜した引用に基づく複雑さに驚く。特に、「文系」でも、本書で論じられている「批評」の世界のように、対象が人間の言説のやりとりに限られている場合、共有されるべき解釈の根拠が実体として存在しているものではない以上、神学というか、まさに、ドーキンスの言う「ミーム」の世界のようである。つまり、基本的には、いかに感情に辻褃を合わせるかという形で成立している分野、本質的に、文学の世界ということになる。したがって、結局、最後には、権威主義に頼らざるを得ないことになってしまうのは、分野の性格上、避けがたいのだろう。「六八年五月」を権威化してしまうということも、こういう接近法のもとでは、必然的であり、不可避なことである。それゆえ、問題はどのように権威化するかということ

なのであろう。堂々巡りになるが、「六八年五月」が権威化のための普遍的な価値を見出す契機になったかどうか、現場にいた人たちにとっては自己否定の道はないだろうが…。

付記：わたくしのパリでの学生時代の記憶は、十年余り前に書いた

Souvenirs d'un pensionnaire étranger japonais et matheux à la
rue d'Ulm,
Société d'Amis de l'Ecole Normale Supérieure, 220 (2001), pp.20-
25

にある。ただし、邦文のテキストを先方が仏訳したものであるが、もとの邦文のファイルはどこかに行ってしまった。本書の著者のように、すでに仏文研究者として世間に出ていた人と海山も不鮮明なチンピラとの違いは瞭然である。

付記2：森有正氏については、肝腎の森氏の著作は断片的にしか知らないのだが、

栃折久美子：森有正先生のこと
筑摩書房 2003

と森氏の二枚組のCDは持っている。このCDには、クラーク会館での森氏の演奏も収められている。わたくしが、森さんとクラーク会館の食堂でたまたま遭遇したのは、氏が北大に講義に来ておられたときに違いない。同じテーブルでコーヒーを飲んだ記憶があるが、何か意味のある話があったかどうか全く覚えてはいない。

144. (11.08.29) 少し前だが、中島義道氏の著書2冊

中島義道：明るいニヒリズム
PHP エディターズ・グループ, 2011.
ISBN978-4-569-79782-3

及び

中島義道：さようなら、ドラえもん — 子どものためのテツガク
教室
講談社 2011
ISBN978-4-06-217090-1

を手に入れた。中島氏のような碩学の著書について何がしかのコメントをすることは、わたくし如き無知な人間には大いに憚られるのだが、字義通りのナイーヴさで突走ってしまおうか。

と言っても、両書の背景にある中島氏の学識にいささかでも触れようなどというものではない。飽くまでも書物の字面を見ての感想のようなものを述べてみようというのである。

ところが、前者は非常に難解である。というか、しばらく前に購入し、通勤の往復に車内で目を通していたが、読み終わらないうちに、別なことに関わりだして、そのままになり、そして、薄っすらと覚えていた内容もほとんど忘れてしまったと言ってよい。再確認するためには、また最初から読み直さなければならない。それだけではない、当ブログの最近のいくつかの記事で論じてきた書物にも、明示的には挙げなかったが、言及のある哲学者の話が出てくる。すなわち、大森荘蔵氏で、中島氏の「明るいニヒリズム」はもちろん、西川氏の「五月革命私論」（143回記事参照）、山本義隆氏の「熱学思想の史的展開」（140回記事参照）でも重要な鍵語である。わたくしも大森氏のお名前は聞いたことがあるのだが（それに、以前、時間を論ずる論考の報告記事中の関連した邦語文献には確かに言及があったように思うが）、敬遠というか飛びついてみようとはなぜ思わなかったのだろうか。恐らく、わたくしが、一般に、哲学とか科学哲学と聞くだけで、一種のエッセイか、いわゆる評論のようなものに過ぎないと思いつくような、そして、そういうのは気軽なものでなければ目を通そうとは思わないというような、奇妙な偏見に囚われていたせいであろう。（何よりも、まず、近寄って見なければいけないのだから）今更ながら、人は素直でなければならないのであって、思い込みや偏見で行動が縛られるようではいけないのである。さて、…。

一方、後者は、中学生を読者に想定している（とされている）。非常にまじめな内容である。いずれにせよ、中学生向けに議論を吹っかけるような書物が少ない中で、貴重である。現在の職務の関連もあって書店の店頭で見かけたときに購入したものだが、著者がカトンというテツガクヤに扮して、テツガクとは何かという議論を中学生のグループ相手の「授業形式」の枠内で行うという設定になっている（著者は「哲学塾カント」を主催している）。実はというか、もちろん、この本の主題と「明るいニヒリズム」の主題には共通部分があるようである（「明るい…」の方はうろ覚えだが）。

いずれにせよ、「明るい…」は別に論じたい。

そこで、「さようなら、ドラえもん」であるが、目次は

- 1章 なぜ、死んではいけないの？
 - 2章 なぜ、ウソをついてはいけないの？
 - 3章 なぜ、人に親切にしなければならないの？
 - 4章 なぜ、勉強しなければならないの？
 - 5章 なのために、生きてるの？
- あとがき

となっている。

著者は（つまり、カトン先生は）

「どんなに一生けんめいに真理を求めて生きて、それは完全にはわからないし、そして、そのまま死んじゃうんでしょ？それなら、やっぱりむなしいんじゃないですか？」

と（ヨウイチという子を借りて）問い（p.136）、この質問が「何のために生きているのか？」という問への解答のヒントになる、すなわち、

自殺しないで、投げやりにもならないで、「自己ぎまん」にもおちいらしないで、しかも生き生きと生きられる道はないだろうか？多くの考えでは、一つだけあるんだ。それは、「そういうことの全体を考えるために生きる」という道だよ。言いかえれば、どうせもうじき死んでしまうという大枠の中で、ごまかすことなく生きるにはどうしたらいいか」ということを考えるために生きることだよ。わかるだろうか？それこそが、真理を求めて生きるってことであり、テツガクするってことなんだ。

と、カトン先生は説明している（pp.137-138）。最初の質問のうち「そして、そのまま死んじゃうんでしょ？」というのは、今のわたくしの心境でもあるが、それはそれでいいと実は思っている。他方、カトン先生の問い直し「どうせ…どうしたらいいか」は、昔、わたくし自身反芻したことがある。わたくしはテツガクするという道は選択しなかったけれど、この問い直し自身に重要性があると思っている。つまり、敢えて言えば、わたくしの意見としては、

人は所詮有限の存在でしかないのだが、一人ひとりの人生の意味が有限ということではなく、それをいくらかでも無限に近づけられるような生き方があるのではないか、

と、まあ、開き直ったわけである。テツガクすることも、そのような生き方だろうが、それ以外にもあるはずなのである。

カトン先生は、末尾に近いところで、

のび太君のままではダメなんだ。これが最後にきみたちにどうしても言っておきたいことだよ

（p.148）と強調する。なぜか？

どんなに思いやりのあるやさしい人になっても、弱ければダメだ。強くなければ、自分の好きなことを貫くこともできない。「道徳的によい」ことを貫くには体力と精神力と勇気がいるんだ

（p.147-148）とカトン先生は説明する。そこで、のび太君だが、

のび太君という小学生の男の子は勉強も運動もできない弱い子だ。とても心のやさしいよい子なんだけどね。のび太君は、とても弱い子だけど、一つの大きな武器を持ってい

る。二頭身のネコのぬいぐるみのようなドラえもんだ。それは
(…) すごい仕方でのび太君を助けてくれる。

(…)

絶対に人がまねできないすごい武器が出てくるんだから (ね)。
だけど、それらは自分で苦労して手に入れたものではない。いつ
だって、のび太君が「ほしい」と言えば、ドラえもんがちゃんと
準備してくれるんだから (pp.146-147)。

とマンガの本質的な内容を確認した上で、

(…) きみたちはそれがどんなに魅力的でも、苦労しないで手に入
れたもの、人から恵んでもらったもの、などに頼っちゃダメだ。き
みたちは、これからはどんなに小さいものでもいいから「自分の
手」で何かをつかまなければならない。そして、自分で自分をきた
えて、精神的にも肉体的にも、強くならなければならない (p.147)

と説き聞かすのである (ひねくれ者からすれば、お説教臭いかも知れないが、
それがどうした？真面目な話なことはわかるだろう、ならば、真面目に聞き
なさい — 実際、中島氏は一直線である)。

要するに、のび太君には生命力がない、のび太君では生きていくことはで
きないのである。

付記：なかなか思い通りには行かないが、この記事は、当初、さらに、

鈴木貴博：「ワンピース世代」の反乱、「ガンダム世代」の憂鬱
朝日新聞出版, 2011
ISBN978-4-02-330946-3

も併せて論ずるつもりであった。この本は日本経済新聞の短い書評で気付き、
一読した。さらに、さる高名な経営者がタテ社会・ヨコ社会の文脈で論じて
おられることに気付いた。他方、わたくし自身は、現勤務先の生徒たち (図
書委員会) と「ワンピース」を論じたことがあって、それ自体は混乱したイ
ンタビュー記事 (勤務先の「図書館報」所収) であったので、それを若干整
理したものをHPに貼り付けた。その後、鈴木氏の書物を見て、こういう見
方も成り立つのか、と思う一方で、わたくし自身の「ワンピース」解釈が拙
速すぎたかやや自信を失ったところもある。ただ、このインタビュー記事
(とその整理稿) では、ガンダム、ドラゴンボール、ドラえもんへも形ばか
りの言及もしたので、どうせ論ずるなら、ドラえもんだけでなく、ドラゴ
ンボールについて論じてある書物 (あるのである!) にも目を通してからと考
えた次第である。ドラえもんが先行したのは、アリバイのためであるが、わ
たくしも、ドラえもんについての否定的な評価に共感していることもある。

なお、わたくしの小学校低学年の頃、「冒険王」という月刊誌（確か、秋田書店刊）に「『砂漠の魔王』という”劇画”が連載されていた。断片的にしか記憶していないのだが、ぜひ再読したいものである（ウィキペディアに記事があるが…）。145。（11.09.30）意外と忙しかった九月も最後の一日になり、

鈴木貴博：「ワンピース世代」の反乱、「ガンダム世代」の憂鬱。
朝日新聞出版, 2011.
ISBN978-4-02-330946-3.

は、もちろん

見崎鉄：ドラゴンボールのマンガ学
彩流社, 2011.
ISBN978-4-7791-1564-6

について一言か二言でも書こうとする時間がなくなった。この間、岡山の日本テスト学会の年会をちらっと覗きに行ったりもして、そのときは見崎氏の書物は持って行ったし、少しは目を通したのだが、以来全然進んでいない。

鈴木氏の書物のタネでもある「ワンピース」に関連しては、前回の記事でも少しは論じてある。そして、この本で重要なのは、最後の

おわりに これから何が起きるのか？

という部分であろうが、この書物に言及した種々の記事などでは、この箇所と言及したものは余りないのではないかと。しかし、それでは著者に申し訳ないのではないかと。何しろ、この書物の締め括りの文章は

2011年4月 本書がひとりでも多くの人にとって未来を考えるきっかけになることを願って

(p.205) とあるのだから。とまれ、この本のあちこちに付箋が貼り付けてあるのだが、拾い出して再録しようとするには時間が経ち過ぎてしまった。

さて、見崎氏のマンガ学であるが、「学」が付いているように、やたらと難しい。実際、「あとがき」冒頭で

あまたあるマンガのなかで『ドラゴンボール』をとりあげた理由は、この作品はとても親しまれているのに、一見すると、この作品にはどんな深さもないと思われているからです。そこで本書では、『ドラゴンボール』を使って、それがどれほど多様な読みを開きうるのか、また、耐えうるのか試みてみました。(p.467)

とある。というわけで、わたくしの教養の範囲を大幅に出ている書物であることがわかった（110回 111回記事参照）。

この記事は、ブログ記事更新のためのアリバイ記事ではあるが、実は、ほとんどの空いた時間は、フーリエの「熱の解析的理論」の5章辺りを眺めていた。一体、フーリエは球座標を知っていたのだろうか、という疑問を覚える一方で、球体の熱方程式に関連して、普通お目に掛からない形の固有値問題が設定され、見事に、しかも、構成的に解かれていることに感心していた。球体の表面での熱の放散を表現する境界条件から、こんな場合でも正弦級数展開の形（実は概周期関数の直交系による展開）で熱分布の記述が出来ることがわかったが、応用解析の標準的な例題としては生き残ってはいないようである。なぜなのだろうか。

146. (11.10.06) うろ覚えの本を探しに入った天神のジュンク堂で、面白そうな書物

タイモン・スクリーチ：阿蘭陀が通る 人間交流の江戸美術史
東京大学出版会, 2011.
ISBN978-4-13-083056-0.

を見つけ、早速購入した。例によって、本文に目を通す前に、「はじめに」と「あとがき」を眺めたが、「はじめに」は長文の割りに本書についての最低限の情報しか含んでいない感じであり、他方、「あとがき」には、著者の動機や意図がかなり丁寧に述べられており、その意図の実現の程度が本文を見ることによって確認できるというような具合になった。

その「あとがき」で著者は次のように言う：

… 歴史家の仕事は、史実を発見しそれを解釈する。簡単に言えばそういうことだ。新たな史実を発見するだけでも非常に難しい場合も多い。しかし、史実を確定することだけが歴史家の仕事であつたら、そんなつまらないこともない。しかも、確定することができる史実があるのかどうかも分からないどんなに事実を記録しようとしてもそこには必ず、歴史の著者の解釈が入り込んでくるからだ。同じ出来事であっても、それを記録する人間の立場が違えば、史実として記録されたはずの情報も違ってくる。人間の残した史実とはそういう当てにならないものだろう。逆に、だから面白いのだ。… (p.199)

そして、

国際交流となれば誤解はつきものだ。しかも江戸時代のヨーロッパと日本の文化の差が、現代とは比べようもないほど大きなものであったことは容易に想像がつく。そんな共通点の少ない時代の、当てにならない人間の交流を歴史として書くことが本当にできるだろうか。(p.200)

と挑戦的な課題を立てる。欠落や落丁だらけの史料はある。さらに、絵があるではないか、やってみよう、という成果（の一部）が本書ということなのであろう。

ところで、天神のジュンク堂でこの書物が置かれていた棚には数冊しか残っていなかったの、念のためにネットで調べたら、新聞書評がされたばかりのようであった。掲載紙は無料のネット版以外購読していないので肝腎の書評記事は知らない。しかし、帯や惹句だけで書評が済まされたわけではない証拠に読者が本書を求めて殺到したのであろう。また、ネットにより、著者が江戸期の絵画に詳しく、多数の書物をすでに著している人であることもわかった。なお、本書は文献の注、図版の出典は付されているが、索引がない。編集の問題だと思うが、中途半端ではあるまいか。

最初に、目次を紹介しておこう：

はじめに

第一部 人間交流の江戸美術史

第一章 「御城」のパースペクティヴ 「城外蘭人図」

第二章 観光する阿蘭陀人 名所図会

第三章 奇妙な船 「バトー・ジャポネ」

第四章 国際交流の現場 家と空間

第五章 死をとりまく問題 阿蘭陀人の墓

第二部 忘れられた出島の学者

第六章 瓶詰めの標本 ツンベルク

第七章 日本を動かそうとしたカピタン ティッツィング

あとがき 「人間交流の歴史」という実験を終えて

索引がないのが残念だと冒頭に記した。実際、多くの人物が登場し、同じ人物が異なる文脈で顔を出す。一々ノートを取りながら読むわけではなく、また、予め、誰がどこに顔を出すかを承知して読むわけでもない。このように興味深い題材を扱っている書物がどうして索引なしで成立すると編集者は考えるのか、もちろん、このような発想が日本特有のものであることは承知しているだけに、どうして日本の（俗にいう文系の）知的階層はこういう習慣を容認しているのか、これは以前からの疑問である（今野浩氏の伝える「工学部の教え」は対照的である（第27回記事参照）。さらに、簡単な年表が付いていれば、なお、親切であったろう）。

さて、時代としては18世紀後半から19世紀前半、人物としては、司馬江漢、吉雄幸作、大槻玄沢、中川淳庵、桂川甫周らの通詞、蘭学者、他に、背景には、田沼意次なども。医師のツンベルグ（Carl Peter Thunberg 1775-1828, 1775-76 在日）、カピタンのティッツィング（Isaac Titsingh 1745-1812, 1778-1784 の間に何回か長崎）。なお、ティッツィングは日本を離れた後、インドでオランダ総督として過ごし、インド婦人との間に男子を設けている。この子が結局父親の遺産を処分散逸させてしまうのだが、オランダ社会では紳士

として活動していたようで、（掛川の）鈴木武雄先生が（数学史の文脈で）発掘された日系ドイツ人鋳山技師のことを思い出す。ティツィングに関しては、そもそもというか、日蘭関係の難しい時期に関係したらしく、日本の銅の枯渇の問題に直面したらしい。これは、132回記事で論じた岡本隆司氏の書物でも指摘されている日清貿易にも関係し、さらには、後の東アジア地域の歴史的構造にも影響が及んだことである。

興味深かった記事は多々ある。例えば、死者の始末の仕方であり、カピタンが二名死んでいたこと、墓があることも知らなかった。ヘンメイの掛川にある墓など訪ねてみたいものである。話は跳ぶが、「三国丸」という不思議な船があったことも知らなかった（第3章）。

非常に興味深かったのは、「メメント・モリ」の記事である（第5章）。連中、つまり、蘭人を含む西欧人と我々日本人の「死」や「死者」に対する「文化的感覚」の違いである。いや、これは「死」や「死者」だけの問題ではない。しかも、江戸時代の問題でもない。今日でも、そうである。さらに、「三国丸」の記事で言及のある船の絵にも共通している。いや、はっきり言えば、このブログのそもそもの趣旨にも直結しているのである。日本人が現実直面することを避ける理由の一端は言霊の思想にあるのかと思ったが、死生観そのものが「死という現実」をもとに出来上がってきたわけではないからかも知れない。種々の理由もあって、わたくしは、これ以上立入らないが。

ところで、ツンベルグに関しては、何というか、金髪で長身の冷たい感じのスウェーデン人を想像してしまったが、ドイツ語圏に近い、例えば、ヨテボリ辺りの出身だと、黒髪のドイツ人風（しかも長身ではない）の感じであったかも知れず、こういうことへの言及がないところが、著者が、ある意味で当然として、触れていないことの一環かも知れず、とても面白い。もっとも、ツンベルグの肖像画は残っているし、それどころか、それが日本で出版された書物にも転用されているのだから、気を付ければそれまでのことではあるので、そこがツンベルグの記事の興味でもある。

ツンベルグに関しては、しかし、著者の眼差しは温かくはない。なぜなのかは不明だが、ツンベルグの判断に対する著者の否定的な見解には、わたくしは、疑念を覚える。例えば、ツンベルグは（当時の）日本には解剖学はなかったと言っているが、著者は、これは事実と反すると言う、例えば、「解体新書」はただの翻訳ではなく、原書に触発された各所での「腑分け」の成果が反映しているではないかと言うのだが、オリジナリティーの観点からは、それはそんなに大事なことだろうか。ここは、上述の「メメント・モリ」の記事と関係するのだが、「死」（や種々の不幸）を事実として直面する文化と、情緒として詠嘆の対象とする文化の違いがあり、この差異は、「解体新書」や「解剖絵巻」が含んでいる図版の精緻さとは関係がないことである（127回、137回記事参照）。ツンベルグが贈り物に使った標本類の話から、ケープタウンにオランダ東インド会社の日本庭園なるものが残っていることを思い出した。

実は、他にも、著者の教養の水準（それも西欧文化の基幹－キリスト教である－についての）に疑念を抱かせる箇所はあったのだが、ツンベルグに対する著者の批判は、むしろ著者の姿勢が日本文化に好意的に過ぎるのではないかという感想を抱かせる。例えば、ツンベルグが日本に解剖学がないと言ったとされるが、その意味は、リンネ派以外の解剖学書がすでに入っていたから無視したというのではなく、体系としての解剖学に値するものの萌芽がないということであったからかも知れず、それならわたくしが137回記事で問題にしたことと同じ文脈に属することになる。

この書物は極めて興味深い。しかし、欠陥もないわけではないだろう。欠陥の分析こそ、実は、意義が大きいと思う。そして、それ、つまり、不足や欠陥の分析への関心が、まさに、著者自身の歴史観の根幹でもあるらしいと見えるのだが。そんな意味で、いろいろと考えさせてくれた書物であった。

付記： 上述の鈴木武雄先生の論考は

鈴木武雄：17世紀：日本からヨーロッパへ
－ Petrus Hartsingius Japonensis の場合 －
数学教育研究, 40, pp.115-137 (2011) (大阪教育大学数学教室)

である。以前、原稿の形でいただいていた。

付記2（平成24年7月17日）：鈴木武雄先生から、上掲論文の続編をいただいた：

鈴木武雄：Petrus Hartingius Japonensis の深い孤独と数学及び
奨学金
数学教育研究 41, pp.101-147 (2012)

Peter Hartsinck の実母の生家とされる平戸の豪商を巡る挿話によって、Peter Hartsinck の生涯を解釈しようとする労作である。先に、津田塾、さらに、九大 MFI 研究所の集会で発表された内容をまとめられたものである。

147. (11.10.19) 現在の職務のことは書かないという原則だが、ときどき破っている。今回は、最近の教員公募の面接でのこちらからの質問について、二三書いておきたい。

国語科の教員を補うことが目的であったが、他方、図書館の管理にも加わってもらいが必要があり、司書資格か司書教諭の資格もほしいというのが本音ではあった。募集要件には書き込んではいないが、幸い、面接の対象者は、条件を満たしていた。

いろいろと質疑応答をしたのだが、その中で、こちらから、まあ、個人的興味と断つての上だが、

問 A. いわゆる文系の邦語文献の多くが索引を欠いていることをどう思うか、また、なぜ、あなたは、そう（回答のように）考えるのか

という趣旨の質問をした。昨今の電子書籍化の進行から言えば、索引のあるなしは電子化された書籍に関しては重要ではないと考えられるかもしれないが、そうであっても、索引のあるなし自体の本質的な問題点は論じておく価値があると思っており、この質問の意図は的確な回答の期待よりも、こういうことが問題になるということ意識してもらって、生徒に対する教育にあたってほしいということにあった。それは、採用となって現勤務先の生徒に対してだけのことでなく、不採用の場合も、遭遇する生徒向けの教育で反映させていただければよいわけである。

もし、今回の募集教科が社会科であれば、

問 B. 日本で出版されている地図帳では、地名の索引などでページと記載枠の情報が与えられているだけで、緯度経度が付されていないものが通例だが、これについてどう思うか、また、なぜ、あなたは、そう（回答のように）考えるのか

という問になっていたであろう。

より一般の文脈で言えば、

問 C. なぜ日本では「検索エンジン」が開発されなかったのか、あるいは、もっと一般にして

問 D. 日本人にとって「知る」ということはどういうことなのか、こう問い掛けられたとき、あなたはどうか答えるか、また、なぜ、そういう回答をするのか

という質問になるだろう。

「索引のない本は読むな」というのは今野浩氏が紹介する「工学部の教え」にある（27回記事参照。もっとも最近の今野氏は索引の不要な書物を多数著しておられるようだが）。この意味は、職務上あるいは技術上の問題に遭遇したときに課題解決をするための参照が的確かつ迅速にできるためには索引が整っていることが不可欠だからであり、さらに、索引を概観するだけで書物の基本的な内容が把握できるからである。目次だけでなく索引が不可欠な理由でもある。電子化時代の技術書の場合でも索引の意義は基本的に変わらない。ただし、索引としては鍵語の表と各鍵語の概要が充実していれば、検索で賄えるが、主要ページへのリンクは要るだろう。網羅的な検索には意味がないので、著者側が提供する鍵語の表と読者側が要求する検索したい情報が適合すべく書物が編集されていることを担保する役割が索引にはあるのである。

さて、冒頭の質問に対してだが、回答の基本は、

答. 専門書は別にして何回も繰り返して読むわけではないから

ということであった。しかし、ライトノベルは別としても、書物化されたものは何度か読まれるものである。さらに、個々の読者がみな同じ視点で読むことが当然というわけでもない。確かに、最初から文庫化されたり新書化されて出版される書物はある。しかし、ここではある程度以上の内容のある書物を論じたい。そういう書物は読み捨てられることを前提に著作され編集されているわけではないはずである。

もとより、文学性の高い作品のように内蔵している情報よりも醸し出す感情世界の方に重点がある書物もある。こういう書物には索引は不要である。だが、書物には内蔵している情報が重要であり、その情報の把握がなければ理解ができないものがある。そのような書物では、著作者側は情報を提供しつつ、それに基づいて記述を進めているのである。このような書物では、目次から索引までが全体として著作を成立させているのであり、索引項目の選択には、著者の強い意志が働いているはずなのである。著者・編集者自身による内容の要約と言ってよい。したがって、電子書籍化されたから気になった項目を読者が検索すればよくなったということとは全く違うことである。

とまれ、わたくしは上掲のような回答に対しては

問 E. 索引がないことを怪しまないのは、読者が本当は著者を信頼していないからか

問 F. 著者の方としては、索引なしで済むと考えているのは、実は、読者を馬鹿にしているからか

と問を畳み掛けたが、もちろん、個々の著者の問題ではない。日本の社会・文化の風潮の問題である。そこで、問 D が本当の問題であることがわかる。

要するに、日本の社会・文化には哲学を回避する面があるのだが、それを放置することは生存の障害になるということを示唆する記事：

FUKUSHIMA の本質を問う [3] : ” 父親不在 ” が招いた風評被害の拡大

をネットで見つけた。著者はこういう観点で論じているわけではないが、わたくしからは、こういう側面も見えるということである。

付記：(平成 24 年 11 月 29 日) また、新たに、公募を行っているところだが、応募書類を眺めると、公募案内をきちんと読んでいない人がかなりいるようである。藁をも掴みたいということなのだろうか。例えば、世界史と銘打った募集の場合に、西洋史学の基礎訓練が望ましい、と文言を付してあれば、少なくとも、その点への言及のある書類を作成して応募を心掛けてほしいものである。この意味は何なのか、わざわざこのように書いてあるのはどうしてか、西洋史と東洋史あるいはその他の地域史の研究手法や研究姿勢の違いについて説明ができるか、さらに、日本史を世界史の文脈で扱うに

はどうしたらよいのか、といった、関連する知恵の働きも見せてほしいものである。

148. (11.10.26) 会議で天神に出張し、この春の博多駅の新装に伴って移転したワイシャツメーカーの店舗が本屋になっていることに気付いた。時間つぶしに店内を散策し、

安田雪：ルフィの仲間力

『ONE PIECE』流、周りの人を味方に変える法

アスコム 2011

ISBN978-4-7762-0693-4

を見つけた。この著者の書物は以前目にしたことがあり、「つながり」や「ネットワーク」に人格的にも強い関心をお持ちの方だという印象は持っていた。東日本大震災の大津波被害の文脈にある文言ではあるが

喪失の体験は人を強く、そして優しくします (p.184)

という言葉に著者の想いが籠っているような気がする。これは本書エピローグにある句であるが、エピローグには、他にも、

「仲間」「自由」は明らかにワンピースの主要テーマですが、[…]

「託す」ということも重要なテーマであると、私は解釈しています

とあり、続けて、

上の世代の人は、もう自分は子どもではないことをはっきり自覚して、下の世代の人に成長する機会と場を与える側になってほしいと思います。

そして、下の世代の人は、上の世代から託されたことを真摯に受け止め、彼らが託した夢をかなえるべく、大きく成長してほしいと思います。

本当は、私たちの誰もが託す側であると同時に、託される側でもあるのです。

と注意している (pp.186-187)。実際、エピローグの最後は

本書の裏テーマは、成熟した大人になった方に、未来の冒険王たちを育て、導き、託す側になってほしいと訴えることです (p.187)

である。

ところで、プロローグだが、本書の内容が要約されており、さらに、これは本書全体に施されている工夫だが、フォントをいろいろと混在させて、要点がわかりやすくなっている（このような工夫は、「梅棹忠夫 語る」にもあった。第120回記事参照）。このプロローグで、著者は、

本当の仲間を見つけられたら、あなたは想像もできないような大きな夢をかなえられます。

自分一人では無理だと思うことに出[会]っても、仲間がいれば勇気と活力がわいてきます。…

と述べ (p.11)、本書でそのために必要なこと (p.12) :

- 仲間を集める方法
- 仲間と助け合う方法
- 仲間との信頼を強める方法
- 仲間と一緒に成長していく方法

をワンピースのエピソードに即しながら解説すると宣言し、そして、

仲間力 = 仲間を集める力 + 仲間と助け合う力 + 仲間を信頼する力 + 仲間と成長する力

と規定している。本書は、仲間とは何かを論ずる一章に加えて、これら4点のおのおのを詳述する章の、全五章から成っている。そして、各章の末尾にまとめがある。本文中の強調点は太字で黒々と印刷されており、とばし読みしても目に入るようになっている。決してノウハウ本ではないと著者は仰るが、十二分に実用性への配慮がなされているのである。もちろん、ネットワーク論の専門家らしい重要な注目点の指摘が丹念になされている。「ワンピース世代」の皆さん以外にも多分有益に違いない。さればこそ、著者が論じたのであろうが。

そういうわけで、極めて興味深い書物であるが、一方で浮かび上がってくるのは、ワンピースの作者の尾田栄一郎とは何者かという問である。

尾田氏が、いわば、モンキー・D・ルフィだとすると、かれの仲間は、少年ジャンプの編集部員や読者だろうか。あるいは、本書の著者のような批評家などは、要するに、ルフィを助ける大人というところになるのだろうか。そして、本書の著者にしたがって分析するためには、まず、尾田氏の大きな夢は何か、そこをはっきりさせなければならない。

それにしても、本書の著者安田氏の分析のような、そういう構造を作者たちがワンピースに持たせているとすると、そして、それはこれらの分析から、確かだと思われるが、その構造の基本的な部分は間違いなく尾田氏のものである。尾田氏の間観、多くの「大人たち」が驚き、まさに、脱帽するような、そういう人間観はどう獲得されたのか。ワンピース単行本の何話ごとの最後に付されている「質問コーナー」での尾田氏の回答を眺めている限りでは、この辺のことはよくわからないが、ワンピースがドラゴンボールとは違って相当丹念な初期設計がなされていたらしいという想像は付く。いずれにせよ、何冊もの評論が出版されるようなモンスターマンガである。しかし、そういうものを作るのが尾田氏の夢だったのだろうか。

ところで、モンキー・D・ルフィの仲間とせよ敵にせよ、基本的には、皆「お互いに見える範囲」にいる。安田氏がルフィとその仲間たちの特徴として強調する「フラットな関係」は、こういう直接的な関わりが意味を持つ社会でしか成り立たないのではないだろうか。つまり、ワンピースの世界は、関係性の基本が言語が介在しない形で担保されていて、その上に、信頼性などが言語によって補強されるという、そういう規模の世界ではないか、という印象を持っている。したがって、現実世界では、われわれの日常活動の世界とワンピースの世界との親和性は認められるが、抽象度が高い、つまり、本質的に言語によって担保されている、国民とか顧客とかを対象とする世界とは異質ではないかと思う。

所詮マンガの話とは言え、ワンピースも、なかなか日常的な相対関係を越えた視点や視野の存在に想いの及ばない、日本の文化・社会の固有の思考構造を反映しているように思われる。理想形に近いとは言え、基本的にはミーイズムの世界ではないのだろうか。要するに、マンガはマンガ、現実世界とは違う。本書の著者は、ネットワークの専門家である以上、実はマンガ世界と現実世界の差に注意を払いつつ、なお、ワンピースが（たとえ日常的水準に留まるとは言え、それこそ一般人には重要なことから）仲間獲得の上で有効であることを示してほしかったのである。このままでは、不成功に終わる事例に対して、どこに不足があったのか説明できないのではないかと思うからである。

その上、現下の日本の課題が政治家の質にあるとすると、政治家こそネットワークの節点という役割はあるというものの、かれらには、実は、直接目に見える範囲の人たちとの関係性だけで活動してもらっては困るのである。日本の政治が今日の困難に陥っている理由は、政治家がモンキー・D・ルフィのような振舞いを理想としているからかもしれないのである。かれらは、何よりも言語化してはじめて説明可能な行動をしなければならない — 彼らの責任は目前の人たちだけではない。遠方の人たち、そして、未来の人たちにも及ぶのである。なるほど、ワンピースにも、その類の言及はある。しかし、この点での本質は歴史性であり、それはマンガでは表現できないのだ。ワンピースはエンタテインメントとしては優れている。しかし、マンガはマンガ、過度の思い入れは、やはり、適当ではないだろう。

なお、「ガンダム」と比較して論じられるのだろうか。ネットワーク的には、ガンダムはワンピースより単純な構造をしているのだろうとは思いますが（第145回記事参照）。

] 付記（平成24年1月24日）：支離滅裂な付記ではあるが、最近、

ピーター・T・リーセン：海賊の経済学，NTT出版，2011.

ISBN978-4-7571-2242-0 C0033

なる書物を通読した。訳者（山形浩生氏）による軽妙な文体の翻訳であり、さらに、「訳者あとがき」という解説が付いている。その上、詳細な索引と原注

が付されており、特に、扱われている海賊やら船長やらの名前は覚えきれものではないから、大変ありがたい。この本が、海賊についての基礎文献であるとは思わないが、17世紀から18世紀に至る期間の海賊たちの作り上げた社会習慣が、当時の貿易構造や国際関係、あるいは、英米あるいはラテンの社会構造への、海賊という業態特有の適応であり、そのことを経済学的発想で説明できるとするものである。この本が経済学の学習に有益であるかどうかは疑問があるが、随分と考えさせられた（この書物は、しかし、教科書の体裁をパロって作られてもいる）。「ワンピース」は、いくら話題性があり、安田氏の著書に見られるように、示唆に富んでいるとは言え、結局は、作り物であり、作者の尾田氏の思想や発想を論ずる以上のことを引き出すことは困難だが、実在した海賊たちのエピソードを再解釈して導かれた教訓には、実際に記録されていることに基づいているだけに、それなりの重みがある。

149. (11.11.15) 先日(11月6日)の日経の書評欄で

朝日崇：実践アーカイブ・マネージメント
出版文化社 2011
ISBN978-4-88338-450-1

の記事を見つけ、もともと関心のある話題なので(第120回記事参照)、早速、購入すべく天神のジュンク堂に向かった。

アーカイブ(Archive)は、数学解析の研究者にとっては馴染みの深い語で、重厚な基本的な論文が多く発表されている数学雑誌などのタイトルがArchives for Rational Mechanics(有理力学の書庫)であったりする。現時点の活動を示すActaとかActes,あるいはProceedingsから始まる標題の雑誌が軽い内容を含んでいるというわけではないが、Archivesには歴史の流れに棹差そうという創刊時の気概が伝わってくる。

ただし、本書のアーカイブは、ある組織の活動を記憶する一次的な史資料の保存や保管についての種々の活動を意味しているようである。著者は、第一章の冒頭で、辞書や大学の学科説明を引用した後、簡潔な表現にまとめると、

アーカイブ(ズ)とは、個人や組織の活動の結果生み出された資料を、いろいろな目的のために、情報資源として保存し活用する

ということになると述べている(p.19)。

この後、アーカイブという語がそもそもどういう成り立ちなのか、という説明があり、Jacques Derridaの表現を引用し、

アーカイブとは、物事が始まって法が作られ、権力が支配するという世の中の根幹をなす概念だ、と言っているように思われます

と著者は言う。この辺になると、西欧学の教養の問題になって来るのかも知れないが、念のために、辞書を引くと、archという成分は古代ギリシア語の

動詞 arkhein に遡り、その意味は、to begin, rule, command を表すのだそうである。

さらに、世界や日本のアーカイブの基本として、ISO15489 が制定されたことを述べ、よい記録の規定、要するに、

記録の真正性・信頼性・完全性・利用性が示されることによって、単なる文書のファイリングに留まらず、記録の持つ特性が、どのように組織活動と絡むのかがこれらによって明確に定められた [とし] (p.31)

さらに、文書と記録の定義が紹介されている (p.32)。

一応、目次を掲げておこう：

第一章 アーカイブの世界に馴染もう

日本で起きていること アーカイブとは何か 図書館、博物館とどう違うのか世界で起きていること 組織アーカイブと収集アーカイブの区分けを明確に専門職のアーキビストとは

第二章 アーカイブの大事さを知ろう

記録がなかったではすまされない — 記録から見る日本の風土アーカイブは利益を生む いま、なぜアーカイブが必要か — 自治体の場合いま、なぜアーカイブが必要か — 企業の場合いま、なぜアーカイブが必要か — 学園の場合

第三章 アーカイブを実践してみよう

実践 — アーカイブの態勢 アーカイブ、その作業手順について

作業手順 — リサーチとプランニング 作業手順 — 資料の分類

作業手順 — アナログ資料アーカイブ 作業手順 — デジタル資料アーカイブ

作業手順 — 仕上げ、整理再配置、メンテナンス コストとスケジュール

できるところから始めよう — 中堅、中小のアーカイブ

第四章 先達から学ぼう

自治体の事例 企業博物館と研究団体の事情 学園資料館の事例

第五章 これからやるべきことを見きわめよう

編集物との共存 中間書庫のこと デジタルの長期保存と電子メール

レコードキーピングの考え方

まとめとして — 今後の方向性、どんな勉強をしたらいいのかあとがき

索引

目次は、以上のように周到であり、さらに、嬉しいことに索引が整っている。非常に参考になる書物である。なお、アーカイブについてはオーストラリアのモナシュ大学により研究者がそろっているらしい（モナシュ大学は特徴ある優れた大学であることは承知していたが）。

なお、本書第二章に関連して、

日本（文明）には自己を巡る堅固な世界観というものの構築に著しい弱点がある

ということを改めて思い起こした。それはどうしてか、という追求が当ブログの本来の目的であるが、だからこそのアーカイブへの関心でもある。

付記：なお、目次にある「学園」とは大学を指している。現勤務先も学校法人は大学名を冠しており、当然、本書で言う学園のアーカイブ構築の話には relevance はある。だが、現勤務先は、中等教育の機関であり、当然ながら、特有のアーカイブ構築の政策があるべきである。また、それは現勤務先特有のものや中等教育機関共通のものに分けて考えられるべきだろう。後者に属するものとしては、教育課程に関する資料や「中体連」「高体連」といった類のもの、さらに、地域の関係のものなどが入るであろう。前者に関するものは学校の特徴や変遷を記憶するものであり、丁寧に構築しなければならないものであるが、関係者が個人的に管理したりして、相当に散逸している。現勤務先はそんなに歴史が古いわけではないから、敗戦直後のトピックとしてよく語られる墨塗りの教科書は使用されたわけではないが、初期の生徒たちはそういう経験を持っていたはずであり、したがって、アーカイブの最初は学校創設以前の種々の状況を示すものでなければならないだろう。それ以降の学校生活や運営その他の状況を示すものがどれだけ残っているのかわからない。そして、大事な資料は、教科書、副読本、プリント類、試験問題や答案である。特に、プリント類以下は消耗品であり意識して保存してこない限り失われてしまうものである。今、どれだけ昔のものを集められるかわからない。もっと保存に適しそうなもの、例えば、式辞、告辞の類が残されていないことには赴任時に気付いた。わたくし自身のものは、少なくとも原稿はPC内には残してあり、また、入学式や卒業式の告辞の類は学校のHPの行事報告の箇所に貼ってもらっているが、これらの営みはアーカイブ構築とはまた違うのである（実際に式で読んだハードコピーも保存はされているはずであるが）。

150. (11.11.24) 先日、天神のジュンク堂で

竹内洋：革新幻想の戦後史
中央公論新社 2011
ISBN978-4-12-00430-0

というのを見つけ、表紙に顔写真がいくつかあり、そのうち何人かは認識できたので手にとってみた。著者は、わたくしと同年齢ではないか、当然なが

ら、今となっては相当に説明しづらくなっている昭和三十年代後半の学生生活についての記述もあるだろう、と思い、相当の厚みにもかかわらず、購入した。

著者の竹内洋氏は、わたくしの経歴と交叉するところがほとんどないためだろうか、著書が、書店の店頭で並んでいたり新聞の広告にあったという漠という記憶はあるが、手に取ったのは実は本書が初めてであったような気がする。竹内氏と京大で同期であったはずのわたくしの高校の同期生は二名いた。そのうちの一人は幼い頃から親しくしていた人で、かれの京都の下宿、確か、北白川ナントカ荘と言ったように思うので恐らく農学部の裏手にあったのだろうが、一二回訪ねたように記憶している。新幹線もまだない頃の話である。居室の分厚い一枚板のドアが印象的であったと覚えているが…。かれは大学院は東大の人文系研究科に行き、中部地方の国立大学の教員になったが、日本近代史の研究者としてこれからというときに亡くなってしまった（もう一人は京都での学生生活が長かったはずだが、わたくしの大学院時代に比較的京都に行く機会があったにもかかわらず、再会したのは先日の高卒50周年の同期会の席上までなかった）。

本書で論じられているのは、戦後日本のベスト・アンド・ブライテストとは恐らく自他共に言うことはできないだろうが、当時としては間違いなく、ベター・アンド・ブライターと認められていたに違いない人たちの話である。ただ、世代の差はあり、わたくしとしては、「革新幻想」の影響下で育った人たち、特に、遅れてきたわれわれより若干若い世代の人たちに関心がある。

さて、この記事を書き始めたときには、まだ、本書は途中で、今は一応読了したとは言え、再読しようというわけではない。今、たまたま開いているところで、著者は、J-P. サルトルや丸山眞男の知識人言説を評して

ここで重要なことは、丸山の知識人言説もサルトルの知識人言説も、戦後の高等教育のマス化によって大量に生じた大学生の「身分不安」とアイデンティティの揺らぎに対して、「(本来の)知識人」という特権的アイデンティティを与えたところに魅惑と訴求力があつたことである (p.358)

と言っている。これは1960年代の半ば頃のことである。今は(著者の語法の詳細は知らないので、想像ではあるが)「下流化」しており、知識人にせよ特権的アイデンティティにせよ、もはや意味を持たないだろう。実は、この辺りの状況は、わたくしの現職から見ると、非常に深刻で、たとえ一時でもいいから、このような「特権的アイデンティティ」に憧れるような雰囲気があれば、現勤務先のようなところでは生徒たちに動機付けをしやすいのである。今の世間的状況からは生徒たちがようやく想像できる未来は、(p.358引用の)丸山の言説を裏返した

特定の職場に密着した知識・技能に留まることをよしとし、いさ

さかも一般的普遍的な事柄について議論しようとする能力ないし
傾向を發揮するには及ばない

人間の世界であるようである（もとの知識人についての言説は少し下に再録する）。

一方、別の文脈であるが、著者の平林たい子の引用のうち

[昔の人が、] 子供を、大人を小型にしていた [ことに感慨深い]
(p.247)

を、中学に入った子供がすでに成人同様の特権への希求を備えていると解釈すると、この子供＝大人という解釈が、中高一貫六箇年教育を標榜している「進学校」の一部で、俗に言う「学年団」を編成して、『中一から高三まで原則として同じ先生たちが生徒の世話をしています』と強調している習慣の背後にあることに思い当たる。確かに、かつては「特権への希求」に規範性はあったかもしれないし、その限りで、実は、その時点での大人の希求を子供にかぶせても通用したかもしれない（そして、規範性があったからこそ、このような教育と正反対の放任型の教育を子供の自主性を尊重すると称して行うことにも多少の意味はあったのであろう）。

しかし、現在のように、規範性が希薄化あるいは喪失してしまっていると、このような子供＝大人式の思い込みに根ざした教育編成には問題があるわけである。その一方で、今でも、丸山の言説

特定の職場に密着した知識・技能を越えて、多少とも一般的普遍的な事柄について議論する能力ないし傾向 (p.358)

は（知識人と限らず、一般に）大人は身につけているべきであり、当然、子どもたちにも教育を通じて身に付けさせるべきではないか、「議論する」だけでなく「判断する」まで踏み込むべきではないか、とわたくしは思う。

さて、一応最後まで目を通して見て、著者がわたくしが経験してきたのとはずいぶん違う世界で生きてこられたと思う。文系、理系、西日本、東日本の差は大きいのだろうが、わたくしのように、横須賀線沿線で育ち、大学に入ってからようやく東横線沿線や井の頭線沿線、あるいは丸ノ内線まで行動範囲が広がったという単純な人間と、佐渡という既に相当に文化的にも歴史的にも複層の土地で少年時代をおくり、京都に出て、さらに、一旦エリートコースの社会人生活を経験された著者との違いは大きい。何よりも、佐渡という土地の歴史風土を一度遠くから眺めなおすことにより、思想や信念を相対化することが自然にできるようになったのではないだろうか。本書の第一章では、佐渡出身の二人の政治家、有田八郎、北 吉をその背景まで含めて詳しく論じておられるが、本書を通読して改めて振り返ってみると、ここでの論が非常に意義深いものであることがわかる。

竹内氏の氏の学生時代の読書傾向も、もちろん、違うが、60年安保後の京大と東大のキャンパスの雰囲気についても、少なくとも、わたくしの記憶の

ものと、著者が描かれているものとは全く違うような気がする。駒場の構内には確かに立て看は多かったが、多分、京都と違い、駒場のキャンパスは教養課程の学生が主で入れ替わりが早かったからかもしれない。いや、もともと東大の学生はノンポリが多かったのではないか、という気もする（二年年長の今野浩氏の小説（115回記事参照）には、不思議なくらい、60年安保闘争の話が出てこない）。

しかし、そうだとすると、著者が論じておられる「革新幻想」とはどんなものだったのか。地方の大学特有のことではなかったはずだが、わたくしの交際範囲に限られていたからだろうか。この頃は今のように塾が狸獺を極めていなかったので、鎌倉近辺の東大生の集団から成る「鎌倉東大会」が夏休みに中学生相手に塾紛いのものを開いて小遣い稼ぎをしていたが、かれらには、終了後のアンケートで、東大生には見えない、慶応ボーイみたいと（特に女子中学生から）評価されて悦ぶ学生も少なくなかったという屈折した雰囲気はあった。こういう連中の「革新幻想」は社会交際上の知恵のようなもので、場によって使い分けていたのではなかったか。裏返して言えば、真剣に「革新思想」の帰結を考え抜くということもなかったというわけでもある。当時、君たちはものを知らないから革新思想がもっともらしく見えるだけだよ、と、年長者から定番のように聞かされたようにも思うが、ものを知らないと言われれば反発するのも事実ではある。そして、今野氏の著書にある科学技術振興策のもとでの理工系シフトが、日比谷、西、新宿、戸山などの都立高校や教育大附属などを中心に起きていたことも「革新幻想」がファッションでしかなかったことと無関係ではあるまい。115回記事で触れた今野氏の疑念（同書末尾）であるが、当時の少年たちのベスト・アンド・ブライテストの相当部分が、理工系学部に進学してしまったが、もちろん、それで国が持つわけではなかったもので、そのツケが近年の日本に廻ってきてしまったということのようである。当時も、利口な連中は、東大法学部などから、行政、司法あるいは政治を目指したろうが、その中に、そのような分野に進むべき人たちに本来要求される、強い責任感、柔軟な思考力と高い事実認識の能力（あるいは、120回記事の「五箇条のご誓文」に相当する力）が十分ではないかも知れない人たちが相当に紛れ込んでしまったのではないかということでもある。

竹内洋氏の著書が示唆することは、メディアや教育界に、事実認識において硬直した人たちが多くいたということが、すなわち、「革新幻想」という現象の背景であるということのようである。実際、著者から、新聞の「論壇時評」の運営に垣間見えた「進歩的文化人」の尊大さや傲慢さを指摘されてみると、かれらがベスト・アンド・ブライテストではなかったことはもともと分かっていたが、ベター・アンド・ブライターどころか誠実とは言えないような人たちが少なからず混入していたと思わざるを得ない。何とも情けないことではあるが、現象としての「革新幻想」は今日薄まったとしても、この

ような幻想を産みだした本質的な状況はいまだに変わっていないようである。問題は「革新幻想」にあるのではなく、そのようなものを次々と産みだして来た日本の知的社会にあるのである。この意味でも、竹内氏が常に過去の類似現象を発掘し確認して論を進めておられるのは、極めて周到で好ましい。

最後に、本書の目次を掲げる：

はじめに — 自分史としての戦後史

☒章 悔恨共同体と無念共同体

1. 三島由紀夫が描いた都知事選
2. 北一輝の弟
3. 有田八郎と北 吉

☒章 『世界』の時代

1. 民主社会党と雑誌『自由』の不運
2. どれだけ読まれていたか
3. 『世界』のアップ・アンド・ダウン
4. 小春日和

☒章 進歩的教育学者たち

1. 牙城・東大教育学部
2. 教育社会学者との確執
3. どこかおかしい教育学
4. 知識人の欲望と教育学支配

☒章 旭丘中学校事件

1. 北小路 と北小路敏
2. 「おい！おっさん、早く書かんか」
3. 皇国少年と平和・民主少年

V章 福田恒存の論文と戯曲の波紋

1. 福田恒存と清水幾太郎
2. 「解つてたまるか！」
3. 進歩的文化人をめぐる攻防

☒章 小田実・ベ平連・全共闘

1. 颯爽たるデビュー
2. 小田実とベ平連
3. 歴史のなかで見る全共闘

☒章 知識人界の変容

1. 大学解体論と大学教授叩き
2. 知識人概念の拡散
3. 保守系オピニオン誌の台頭

終章 革新幻想の帰趨

1. 石坂洋次郎の時代
2. 草の根革新幻想

3. 大衆モダニズムの帰結

あとがき

主要参考文献

人名索引

事項索引はないが、文献表と人名索引は詳細で、大変ありがたい。(なお、目次中、福、恒、台は本来の字体ではなく、己むを得ず、流用したものである)。

要するに、「革新幻想」は真剣な思考のための論理を提供するものではなかったということが、本書での竹内氏の論考から浮かび上がって来る。革新だからよいとか悪いというのではなく、「革新幻想」は日本の現代社会を論理的に把握するための基礎になるような思想の展開と言い得るものからは程遠いものであったようで、そこが幻想と言われるゆえんであろう。「革新」だから即「幻想」ということではないわけなので、論理的に冷静に扱うべきことを感情的(あるいは政治的)に処理し、したがって、不備や欠陥の指摘に対しては、無視か、いろいろな手立てを講じて権威主義的圧殺で対応する、という姿勢が問題なのである。しかし、そういう傾向は今も至るところに見られるのではないだろうか。ただ、空論度が高ければ、それだけ権威主義に拠るところが大になり、したがって、権威主義的傾向は強くならざるを得ないということはあるだろう。もっとも、この議論も定義や論証の性格を規定しての話ではないから、「空論⇒権威主義」という命題の対偶をとって、「権威主義ではない⇒空論ではない」と結論付けるわけにはいかないかもしれない。

151. (11.11.30) また、関西方面への中学修学旅行の時期がやってきた。昨年は、梅棹忠夫・小川修三:「梅棹忠夫 語る」を持参した(120 回記事参照)。今回も手元の本を何冊かもって行くつもりだが、とりあえず、

潮木守一: いくさの響きを聞きながら — 横須賀そしてベルリン

東信堂 2008

ISBN978-4-88713-805-6

と

見崎鉄: ドラゴンボールのマンガ学

彩流社, 2011

ISBN978-4-7791-1564-6

とを手にとってみた。潮木氏の著書は、150 回記事の竹内洋氏「革新幻想の戦後史」に一部が引用されているが、その背景が知りたかったということもあって最近入手したものである。見崎氏の書物は、確か、日経の書評欄で見かけて入手したもののだが、それっきりになっていた。

ところで、潮木氏の著書の奥付の著者紹介を見て、同氏の著作に何冊か読んだものがあることに気付いた。そのうち、印象に残っているのは、19 世紀ドイツの高等教育の編成を指揮した教育官僚アルトホーフを紹介したもので

ある（「ドイツ近代科学を支えた官僚―影の文部大臣アルトホーフ」中公新書 e 版）。竹内氏の引用部は、上掲書の第一部の末尾の節のエピソードであるが、そもそもこの本はかなり不思議な構成である。本書には、「まえがき」も「あとがき」もない。目次はある。索引はない。参考文献はある。何となく、著者が孫に家族史を語っておこうという側面もあるような気がする。わりと読みやすく、通勤の往復で読み終えてしまい、修学旅行に持っていくまでもないようである（実際は、ブログ記事の確認のために持参した）。

第一部「いくさの街に育ちて」は、著者が太平洋戦争末期に疎開した先の父親の故郷、伊豆半島の西側の山と海とが接したような土地での記憶から始まり、大正期に、父親が海軍に志願した経緯、さらに、水兵から下士官、極めてわずかな機会を掴んで士官になり、潜水艦に乗り組んでいたこと、さらに、背景としての軍縮時代、そして、著者が十代に入って早々に経験した敗戦後の米軍占領統治の実態などの世相の一端が淡々と述べられている。著者が幼いときに亡くなった母親の不幸と苦労の話には何と云うべきなのだろうか。最後の節が、昭和二十年後半の高校時代のエピソードで、沖縄戦での特攻機の撃墜されていく様子を撮影した米軍のフィルムをもとにした映画を観たときの名状しがたい凝縮した感情の記憶である。そして、著者は、第一部を

その後、予想もしなかった高度経済成長期が到来し、すべての人々が豊かになった。それとともに悲惨な話、嫌な話は口にしなくなった。話はしなくなったが、忘れたわけではない。我々世代は声高に叫ばれる思想に背を向け、自分自身の等身大の体験にこだわるようになった。

と書いて閉じる（p.104）。

第一部の概略は以上の通りであるが、細かい点で興味をひかれたところが二三ある。「軍縮時代」という節で、米英日の軍艦のトン数比が5:5:3になったこと、帝国海軍の仮想敵の第一が米になったこと、米の西太平洋の進出と米本土における日系迫害、具体的には「日本人学童」の隔離問題（p.33）に言及している。この「日本人学童」とは、当ブログ70回記事にある Japanese Schoolboys を指すのであろう。もう一点興味深かったのは「爆撃実験」という節で、軍縮の結果、廃棄に決まった戦艦「石見」の爆撃実験について述べられており、招かれた見物人のうちに神奈川第一中学生（神中）800人が含まれていたことである。当時の神中の全生徒数は不承知だが、計算してみると、亡父は在籍していたはずである。亡父は最晩年には子供のころの話をよくしたが、この話は聞いたことがないように思う。関東大震災の翌年のイベントであり、後年、震災の恐怖に比べると戦時中の米軍の空襲や艦砲射撃は予測が効くということもあって怖いという感じではなかったと亡父はよく言っていただけに、洋上はるかに浮かぶ戦艦に航空機が投下した爆弾の爆発により白煙が発っても、余り印象に残らなかったのかもしれない。

潮木氏の著書第二部は、氏の1968年から70年にかけての西ベルリン滞在を中心にしたエッセイからなる。プラハの春がソヴェート軍の戦車によって終焉を迎えてから、まだ日が浅く、東西が相当に緊張していた時期に西ベルリンの研究機関に赴かれ、高緯度の地での冬の早い訪れに驚いた様子が「ベルリンの市民生活」や「幼稚園探し」という節に描かれている。西ベルリンが第二次世界大戦の戦後処理の複雑な過程で発生した都市域であることはよく知られているが、ドイツ連邦共和国と西ベルリンが共有した、ドイツの理念的な未来への強い意志が西ベルリンを維持し、それが、結局は、条件が整った時に東ドイツの崩壊を招いたと言えることがよくわかる。政治は、現在の安逸のための利益誘導だけに徹していると、大きなところでの機会を失ってしまう。西ドイツが万難を排して西ベルリンを維持し続けた理由は何か。それは決して経済的な合理性ではなかったはずである。これに対し、東ドイツ崩壊時の党主席ホーネッカーは硬直的で（かれの関わったことの内容からいえば不適当な用語だが）喜劇的さえある。党官僚としての順調な昇進を保証したホーネッカーの自らを建築士に擬えた固い信念を、著者は紹介した後で

建てるべき家の設計図がすでに決まっている時代には貴重な資質
だっただろう。しかし家屋を建てるには設計図が必要だが、歴史
には残念ながら設計図がない。歴史の前に、人間の知恵はあまり
にも無力である。

と評している（p.173）。歴史の語り掛けを正しく聞き取るのは難しい。ゴルバチョフは正しく聞いたのであろうか。対話はしたと言えるであろう。だが、東ドイツは壁を巡らしてしまった、原理主義的で硬直な方法で。基本的に物理的な手段だけで人間の流出を抑えようとした時に、東ドイツの崩壊が決定づけられたのだろう。

1968年夏は、プラハの春が終焉を迎えた時であった。しかし、チェコスロヴァキアの国民は夏休みに西欧諸国を訪問することができた。ただ、そのためには受け入れを表明してくれる人間がいなければならなかった。わたくしは当時パリにいたが、ほぼ一年間 ENS にいて、特に、五月の事件の時には、パリの街を一緒に歩いたチェコスロヴァキア人の友人から、ガールフレンドがパリに来たがっているから招待状を書いてもらえないかと依頼され、一応、年配のフランス人に相談して、何かあってもチェコスロヴァキア政府はあなたには何もできないよ、という言葉信じることにして、招待状を書いた記憶がある。実際、何の問題もなく、彼女は数週間後パリに現われ、一週間のパリ観光の後、プラハに帰っていった。そして、わたくしにも何事も起きなかった。

見崎氏の書物の方は、まだ、半分しか目を通していない。

152. (11.12.07) 前回の続きだが、見崎氏の評論

ドラゴンボールのマンガ学 彩流社 2011

ISBN978-4-7791-1564-6

は極めて難解であった。ドラゴンボールは子供が家にいた頃のマンガで、概ね内容は知っていたつもりだが、今、手元に現物が残っているわけではない(「Dr. スランプ」は単行本がまだ家に残っている)。

見崎氏は、ドラゴンボールが世評では頭カラッポにして戦闘シーンだけを楽しめばいい代物とされていることに、敢えて異を唱えて、いかに奥深く読み取ることができるかを、本書で示そうと意図したという。そして、

少しゆっくり考えないと [ドラゴンボールの] 深層にある構造はわからないのです (p.17)

として、ゆっくりどころか、行きつ戻りつしながら、ドラゴンボールのストーリーから描画、せりふ、登場人物の表情表現、場面転換などについて、広範囲の知見を動員しながら、論じてみせる。本書を評論あるいは文芸批評と理解するゆえんである。論旨の水増しや引き伸ばしの議論が多いとは言わないものの、ここまで難解かつ錯綜した姿勢で論じられるのかと感心してしまう。マンガの楽しみ方としては端的に言って邪道なのだろうが、「ドラゴンボール」が現代日本文化の古典に登録されるためには回避できない作業ではあろう。

しかし、本書は本当に難解であって、すいすいと読めるようなものではなかった。470 ページを超える長大な書物ということもあるが、本来なら、原典の「ドラゴンボール」を手元に置いて読むべきものであったからかもしれない。だが、結局は、この本が一種独特の「冗談」であるからかもしれない。見崎氏はこれでもかこれでもかと難解に読み解いて見せることができるわけだが、われわれが、それに付き合わなければならない理由は本来ないので、ふーんと思いながら斜めに読んでしまえばいいはずなのである。しかし、斜めに読もうとするとき、氏が参照先として挙げる原典の該当のコマを思い出すというか想像する作業が不可欠で、ここで相当に疲労する。

読んで何か役に立つかと問われると困惑するが、何日か掛けて、とにかく、一応目は通した。なお、本書で

竹内オサム：マンガ表現学入門 筑摩書房 2005

ISBN4-480-87347-3

の存在を知り、入手したが、さて、こっちの本はどうしよう。

ところで、見崎氏の書物の目次は

はじめに

1 物語

『ドラゴンボール』の構成と梗概

『ドラゴンボール』の物語論

2 群像

記号としての身体 孫悟空

二世としての抑圧 孫悟飯
次男の反復 孫悟天
異形の二重身 ピッコロ
余裕と焦燥 ベジータ
小さい身体の逆説 フリーザ
中継と目的 人造人間たち
文明的な怪物 セル
終わりの摘 ブウ
師匠から老人へ 亀仙人
一身にして三役 ブルマ
あの頃」のままで クリリン
過剰と欠如 天津飯
もう一人の悟空 ヤジロベー
母という機能 チチ
切断する使者 トランクス
空転する自意識 グレートサイヤマン
物語のパラダイム・チェンジ ミスター・サタン
脇役という無意識 ミスター・ポポ

3 言語

『ドラゴンボール』の言語ゲーム
ネーミングをめぐって
『ドラゴンボール』の資本論
『ドラゴンボール』の比較作品論

あとがき

なお、各章末にコラムがあって、若干、異なる視点から、章の内容を総括している。

内容的には、3章が示唆に富んでいて、感心する点も多く、特に、面白かった。

追記：『ドラゴンボール』を「現代日本文化文明の古典」として登録するためには、本書のような批評的文献が不可欠であろうと上で言った。考えてみれば、通例、日本人が古典と言うとき、文芸作品に限定して考えていることが多い。だが、われわれの文化や文明は文芸作品だけで成り立っているわけではない。むしろ、今は、文芸作品の占める地位はずいぶんと低下しているだろう。さらに、かつて文芸作品が文化の面で重要であった時代は、それらが虚構であり芸術であったから重要であったのではなく、社会の営みそのものを規範的に表現しているものであったから重要であったと理解すべきであろう。この立場からは、当然、古典として分類されるべきものは、社会の営みにおいて本質的であり規範的な役割を果たしているもののすべてから選択されなければならない。現代日本でいえば、好悪や主義主張は尊重するにせ

よ、古典の候補は、江戸末期の日米和親条約の文章から直近の芸能誌の記事や、あるいは、歴代首相の記者会見の記録（画像など）に及ぶべきであろう。もちろん、マンガも候補になる。つまり、マンガの古典を問題にするのではなく、マンガも日本文化文明の一部であることを踏まえて、日本文化文明の「古典」を選び出すとき、『ドラゴンボール』は、本書のような論考を伴って、古典として遇すべきかどうかの第一関門は通過したのかな、と、考えられてもいいのではないか。

153. (11.12.18) 少し前の日経ビジネスオンラインの著者インタビュー記事で興味を引かれて amazon 経由で注文していた

中村安希：Be フラット（亜紀書房、2011）
ISBN978-4-7505-1108-5

がやっと届いた。著者はノンフィクション作家だそうで、略歴によると、二年前に開高健ノンフィクション賞を受賞している（堂々とした人らしく、生年も略歴にはある）。帯に「待望の最新作！」とあったのは、こういう事情だろう。

日経ビジネスオンラインの書き振りからは、本書が、若手の国会議員たちへのインタビューをまとめて書き上げられたもので、想像はつかないわけではないものの国会議員たちの鈍感さが、的確なインタビューを通じて、如実に明らかにされたものという感じであった。そのせいか、この記事につられて、本書を入手しようとした人間は多くはなかったであろう。手元に届いたものは、初刷であった（5月出版）。

確かに、本書の重要な部分は国会議員のインタビューからなるが、著者の心の琴線に触れた議員数名のものが詳しいだけで、他方、著者としては、興味は惹かなかつた、反発を覚えた、…といった類のひとたちは名前も挙げていない。

いずれにせよ、書名の「Be フラット」の由って来る所以はわかつた。乱暴に要約すると、個人法人を問わず機会の平等を徹底させよ、ということになるだろうか。その結果、失敗しての再出発も、最初からの出発も、機会は同等で、公平な社会が出来上がるだろう、というのである。著者は、派遣社員を経験し、現代の日本社会の現場を身をもって体験しており、いわゆる綺麗ごとには惑わされることはない。

著者の議員インタビューから浮かび上がってくることは、未来を老人たちに「収奪」させている国に日本をしてしまったという自覚が、かれらに希薄なことである。老人たちの方には「収奪」の自覚がないわけではないだろうが、問われれば、「はした金」でも余分に手元における機会を拒むものはいまい。そして、そのための言い訳を用意してくれば猶更であろう。後世代の連中は勝手に道を開き、日本人は優秀だから、などを密かに想定して、老人たちは自分たちの「甘え」を正当化しているのだろうというわけである。

ただし、著者は、このようなことを一切口走っていない、念のため。つまり、著者は、世界を知っており、十二分に日本を相対化して本書を著しているのである。

わたくしも老人の一人だから言うのだが、老人は自分の寿命と晩年の予想される老衰の状態を想像することは辛うじてできても、死後のことには関心の持ちようがない。健康に近い状態で生きられるのが70代のうちまでとすれば、今、60代の人はいずれ15年後までしか関心は及ばず、今、70代以降の人は今にしか関心がないと言ってよいだろう。つまり、老人たちには、日本の未来はもともと関心外なのである。そういうかれらに、未来をしっかりと確保することを説くことができるのが政治家でなければならないが、その政治家たちが、老人に未来を「収奪」する「口実」を提供して自らの保身を図っているわけである。恐ろしいことに、そのことを恥じない「若手」政治家もいるわけである。かれらは、しっかりと自分自身を見詰めているのだろうか。

どうして老人たちはかくも品性下劣になってしまったとされたのだろうか。卵鶏の謂いになるが、老人たちの周辺に若い人、幼い人が少ないからである。特に、地方の人口減が大きい。老人たちだけの社会があちこちに出来上がってしまっている。かれらには、(政治家による)若い人たちの、あるいは、幼い人たちの「収奪」に、自分たちが加担しているとは、到底想像もできないだろう。このような政治家にも言い分はあるかも知れない。老人たちを満足させられなければ、当選できないではないかと言うかも知れない。しかし、老人たちには未来が見えないままの状態が好ましいわけではなく、また、老人たちが自分たちが嘗々と築き上げてきた日本が自分たちの我儘なるものを理由に崩壊して行っていると考えているはずもないのであって、そこには、政治家たちの言い訳は空虚であると考えべき理由も、また、あるわけである。

ところで、本書の文体のリズム感は好ましい。著者の過去の経験や体験、友人の話題などちりばめながら、著者は進む。何人か長文で扱われている議員がいるが、そして、わたくしもこれらの議員が、その政治思想ともども、日本の政治の主流になると面白いと思うが、果たしてどうだろうか。

本書の目次は以下の通り。章の題名しか示さないが、この結果、全くの判じ物になった。特定の議員名の付いた節名を避けたからではあるが。

プロローグ

- 第一章 国会議事堂前 一
- 第二章 ボロボロ
- 第三章 国会議事堂前 二
- 第四章 バイバイ
- 第五章 リセット
- 第六章 スタートライン
- 第七章 セルフスタート

第八章 サバイバル
第九章 コミュニケーション
第十章 信頼
エピローグ

このうち、第六章で述べられていることは（現在の立場やわたくしの経歴上は無条件に賛同とは言えないのだが、）基本的に正しい方向性だと考える。だが、いずれにせよ、今日、国内事情だけで物事を策定し判断し実施することはできない。踏まえるべき基本線をまず確認し、それからのヴァリエーションを実態に合わせて作り上げることしかできない。議員インタビューから若干距離を置き、自らの経験した世界をもとに提案をしている第七章以下がよい。ただし、ここも踏まえるべき基本線という意味で。

なお、第九章にあるスーダンのある村でのエピソードとして、元国連職員という現地の人の話がよい。正直言って、目からうろこが落ちた気がする。その直後に、著者の、言わば、実践的な応用になったような、フィリピンでの逸話がある（pp.220-223）。歴史というものはこういうものだと思う。フィリピンの（中年の！）商店主が言ったという

「もう、ずっと、ずうーっと、昔の話だよ」（p.223）

となることに尽きるのだが、それには、過去から未来に至る、しかるべき客観性が不可欠なのである。

154.（11.12.27）久しぶりに天神の東北三県のサテライト店を覗いてから、黒木書店に立ち寄ったところ、一番目に付く棚に、

安田峰俊：独裁者の教養。（星海社、2011）

ISBN 978-4-06-138504-7

という本があった。独裁者と言えば、最近もそのような一人の死亡が伝えられたばかりであり、また、この一年の間にも北アフリカで何人が失脚したり、殺害された。時宜性に富んだ書物のようなのであるが、出版は十月であり、準備期間は、もっとはるかに前からだったようである。

結論から先に言えば、極めてよい本と評価できる。ただし、「目次」は見やすくない。再構築すると、

はじめに 29歳の中国ネットウォッチャーが語る、体験的独裁者入門

ワ州密航記 ☒～☒

コラム ☒～☒

ヨシフ・スターリン

アドルフ・ヒトラー

毛沢東

ボル・ポト
サバルムラト・アタイエヴィッチ・ニヤゾフ
リー・クアンユー
サダム・フセイン
ムアンマル・アル・カッザーフィー（カダフィ）
日本人
あとがき

となるだろう。

このうち、「ワ州」というミャンマーの辺境、雲南省に隣接し、実質的に、中国の経済圏に組み込まれている「ワ族」の支配地域での見聞が、実は相当に限定的だとは思いますが、これが面白い。著者は29歳、中国史を専攻したこともあり、中文には練達しており、しかも、「ネットウオッチャー」として若い人たちの俗語にも詳しいと思われる上に、通常の29歳の日本人青年よりは多様な経験をしている。加えて、友人にも恵まれているようである。「ワ州密航記」は、さらに、著者の並々ならぬ「コミュニケーション能力」を証明していると思われる。「ワ州」において「独裁体制」のプロトタイプが見られるというのだが、この「ワ州」に関する記事は、しかし、このままでは、並みの冒険記になってしまう。「軍歴」12年とはいえ、21歳のチンピラの兵士との交流だけでは、現地に行ってきたということだけがウリの、想像や憶測が中心の記事になってしまう。つまり、「独裁体制」の特質の分析が、果たして著者独自の視点に基づいているか鮮明ではないのである。

他方、コラムの記事は、要領のよい解説であり、著者が直接言及していない「独裁者」についても時代背景や地政学的条件を補って論じ、章建てして扱った「独裁者」のレゾン・デートルを検討している。人選でも明らかのように、著者は「独裁者」を一方的に断罪しているわけではない。実際、独裁者の定義として、本書の扉の次のページで

☒専制的支配者。

☒人類社会の普遍的正義と道徳を代表し、清廉潔白で常に人民の幸福のみを考え、その偉大にして正確な指導の下、祖国を輝ける未来へと導く高邁な指導者に対して、いまだ真実を理解せぬ哀れな反革命分子がさわぎたてる蔑称。

を挙げる（カヴァーの裏表紙見返しにも同じ文言がある）。著者は基本的に☒の意味で論じようとしているが、☒が「独裁者」の心情に近いものであるかもしれないことにも注意が及んでいるわけである。

各「独裁者」に関しては、参考文献が巻末に挙げてある。リー・クアンユーについても、本人の（中文の）自伝が挙げてある。丁度出版された頃のシンガポールの書店で見かけたが、英文版もあり、所収の写真が異なっていることに気づき、興味を惹かれたが、入手を憚った記憶がある（英文版の方では、戦

時中の日本軍の残虐行為の写真の数が少なかったと思う。現代シンガポールも結構インド人やマレー人など非華人人口に気を使わなければならないのかと思ったのだが。28回記事参照)。

著者が世界史的視野でものを見ることができるといわれるのは、大國のご都合主義による、フセインの勃興と滅亡を評して、

考えてみれば、七〇年ほど昔の極東にも似たような立場の国があった。ロシアの南下の防波堤としてアングロ・サクソン諸国にちやほやされ、いざ強くなってアジアの覇者として台頭しかけたところ、国際的な包囲網を敷かれて一斉に袋叩きにされたどこかの国だ

(p.277) と言う辺りにある。さらに、少し後で、

フセインは「悪い人」に違いない。彼の自滅も必然であった。しかし、われわれ日本人は彼とイラクの運命に対して、同情くらいは感じてもいい立場のはずなのである

と言っている (p.278)。

本書で、多分、一番参考になるのは、最後の「日本人」の章だろう。ここで、著者は「独裁者の(必須)条件」と「独裁体制を支える支配される側の条件」を論じている。

「独裁者」の「必須」条件とは

- ☑ 強烈な愛国主義
- ☑ その国や社会が持つ「歴史の呪縛」
- ☑ 本人の個人的な志向や性格
- ☑ 「反米」や「半植民地」のような抵抗思想

であるとする (p.315) が、もとより用いられている語彙を正確に定義する必要はあるが、感覚的には、検討済みの「独裁者」たちから帰納されたものであり、「必要条件」と言ってもよいであろう。当然、論理的には、これらのいずれかを欠いていれば、「独裁者」ではないことになるのだが、「独裁者」は個人を指すのではなく、ある種の社会現象を指すと理解しなければならず、そうだとすると、ここまでの議論では、まだ、不十分だということにはなる。

日本の場合、単純な意味での、つまり、上の☑~☑の条件はきわめて曖昧な形でしか成立しえず、したがって、「独裁者」が成立する条件は弱いという結論を導きながら、著者は、日本人が、「空気」という、ある種の独裁者の支配下にあることは否めないことに苛立ちがあることを示している。そして、

日本は世界で最も発達した独裁体制の国である (p.314)

と叫ぶ。

ここで、著者は、「独裁体制を支える支配される側の条件」を検討し、E.フロムのナチス体制の心理的起源の説明を承知しつつ、それが近代という場

に限られているのが難で、より普遍的なものとして、「阿Q」的人間の存在に鍵を求めている。

「阿Q」的人間とは、自分の個人的能力とは無関係の強大な権威をバックに他人に対し威張り散らし、自己の利己的な欲求を満たすために、必要以上に独裁に積極的に奉仕する人間を指すようである。見返りは、一般の「支配される側」よりは若干の優遇を独裁側から受け取ることができることであるとしている。「阿Q」的人間は、しかし、当人の社会的地位や知的水準とは独立でもあるという。著者の「阿Q」的人間への嫌悪は、体験的なものでもあるらしい（二三実例の示唆がある）。日本社会の「阿Q」的人間の入れ子構造のようなものへの言及があり、実は、これが「空気」という独裁者を生み出す所以のようなのだが、なぜ、そのような、実際に物事が動いているのを見ないような、奇妙なメンタリティーの入れ子構造が成り立つのか、つまり、それが本当の謎ではある。著者が整理しきれていないきらいはあるが、そして、それは不思議ではないのだが、

日本式独裁体制の支配者は、世界の歴史を通じても最低の連中だ。
(…) 彼らは「阿Q」的思考パターンを持つ。その正体は俺であり、あなた自身である。日本人という名の、独裁者どもを打倒せよ！俺たちの教養こそが、革命の武器である。

と絶叫して (p.326)、「日本人」の章を終える。

付記 (平成 24 年 9 月 23 日): 久しぶりに、天神岩田屋内の本屋 LIBRO を歩いてみて

三橋貴明・さかき漣: 真冬の向日葵

海竜社, 2012.

ISBN978-4-7593-1262-1 C0095.

というのを見つけた。Pollitical Fiction ということであり、時代は、安倍内閣の崩壊から、福田、麻生という短命の自民党内閣を経て、「政権交代」選挙による鳩山内閣の成立辺りが背景のようだが、メディア志望の女子学生が業界に入ってから取材活動が評価されない事情や携帯のアドレス間違いから始まった派閥の領袖との交流などが絡めてある。比較的丁寧に書き込まれているのは、「朝生一郎」氏と「中井昭二」氏である。見え透いた名前の付け方だが、現実の麻生氏や中川昭一氏とどの程度対応しているかは、フィクションでもあり、詮索するのは間違っているだろう (ただし、IMF の専務理事ストロースカーン氏 (DSK) はこの名前で登場する)。

本書では、三橋氏の持論というべき、経済政策が主張され、しかし、実際に (「財務省」の強い意向のもとで) 導入された政策はそれと相反するものであり、結果はやはりよくないではないかというのが本書の言うところでもある。ところで、このような書物についての付記を、ここで書いているのは、安田

氏の叫ぶ「日本は世界で最も発達した独裁体制の国である」ことが、まさに本書の主題だからである。「空気」を理由に、メディアが情報を操作する：報道しない、報道する場合は、一部のみを選ぶ、事実と異なることを作る、印象操作を目指す、など。

もちろん、「事実」なるものを報道可能な形に整理する過程は不可欠であり、それが報道機関の編集権というべきものだろうが、本書で論じられている日本メディアの問題は、報道機関が「空気」を理由に、印象操作を承知の上で、自らは信じていないこと、あるいは、信ずべきでないことを、報道する（ことがある）ということである。そして、メディア間のクロス・オーナーシップが禁止されていないこと、新聞社の株式が非公開であることなど、メディアに対する批判が成り立たないことである。

なお、LIBRO では（立ち読みであるが）「新潮 45」のオリンピック関連のスポーツジャーナリストの記事をいくつか見た。山口香氏の日本柔道のロンドン五輪での成果と反省についての記事には同感である。氏の指摘どおり、わたくしも選手たちは予想以上の好成績を挙げたと思っている。「金メダル」が当然というのは思い上がりであり、確かに、ある水準以上の選手の間では結果がどうなるかは、やってみなければわからないわけであり、その点を踏まえた謙虚さは最低限なければならない。こういう基本的な点を外しているので、国際的な発言力が十分に発揮されないわけである。メディアに関しての記事もあり、玉木正之氏が論じている。ここでも、クロスオーナーシップ禁止がなされていないことの問題点が指摘されている。実際、日本の「言論の自由」が絵に描いた餅になっているのは、まさに、この点にあることは、わたくしも大いに感ずるところがあるが、それにしても、一体、日本の主要メディアは、おのれの利権構造が、国民（つまり、国そのもの）の利益と衝突する場合でも優先して維持されなければならない、と考えている、その本当の理由は何なのか。

155. (11.12.31) 天神の岩田屋 7 階に本屋が開店した。買い物についてと駐車券の獲得に便利であるが、先日、

山本七平：なぜ日本は変わらないのか — 日本型民主主義の構造
さくら舎, 2011 ISBN908-4-906732-00-5

という書物を見つけた。著者の山本氏は 20 年前に亡くなっており、著者生前のエッセイ、それも 1975 年～76 年に「季刊歴史と文学」（11 号～14 号）に、本書副題を表題にして連載されたものをもとにしている。4 号にわたった連載のためか、編者たち（「山本七平先生を囲む会」）は本書を 4 章立てにしている。さすがに、30 年余り前の記事となると、準拠している事象は今となっては古く、恐らく、若い読者には相当説明しても感じが伝わらないのではないかと思われるが、そこのところは各章冒頭の「要約」（と言っても 2 ページにわたるのだが）で、著者の言いたいことを察するのがよいであろう。ちな

みに、山本氏の書物は前回（154回）記事で論じた安田氏の書物を見ていなければ、わざわざ手にとろうとは思わなかったかも知れない（実際、安田氏が言及していた『「空気」の研究』を探しに行ったつもりであった）。

さて、目次であるが、

第一章 「民主的」か「非民主的」か

- . 正統か異端かを超えて
- . 官憲主義と全体主義
- . 歴史の中の共通パターン
- . 日本に西欧型ファシズム時代はなかった
- . 「暗黙の了解」崩壊の不安

第二章 「天皇機関説排撃運動」に見る歴史の繰り返し

- . 言論弾圧事件ではなかった
- . 背後にあったものは何か
- . 「教育勅語」という強い根

第三章 十五年周期で循環する日本人の政治意識

- . なぜ日本には「終戦祭」がないのか
- . 「歴史的現在」感覚の欠乏症
- . 終戦と安保の共通現象

第四章 変革なき組織的家族社会の深層

- . 西欧的正当化と日本的調和
- . 「自由」と「組織」の欠落
- . 変革への模索

となっており、それぞれの節には、また、小見出しの付された小節がある。

山本氏の着眼点の第一は、日本人が思い込みで議論に入ることが多く、したがって、問題点の本質が見えないということの指摘である。そんなことはわかり切っていると（日本人なら）誰もが言いそうではあるが、決して簡単ではない。たとえば、第一章の「非民主主義」である。山本氏は、敢えて、こういう語を用いているのは理由があり、「非民主主義」が一元的なものではないことに注意しつつ、その根拠として、「政治化」という観点を導入する。これによって、「非民主主義」が「官憲主義」と「全体主義」に分離されること、しかも、両者は決して同一視してはならないという本質的な差異が（「政治化」という観点があればこそ明白になるとは言え）あるにもかかわらず、この点に想いが及ばないような（要するに、粗雑な）議論によって、似て非なる「非民主主義」の要素が「全体主義」として一括されてしまうということの不正確さが明らかになるのである。

そこで、「全体主義」と「官憲主義」との相違であるが、「官憲主義」と聞いた時の語感の問題はあるのだが、もっとうまい言い方がないと嬉しい。要点は「統治」ということであろうか。実は、ここが難しいのだが、「日本的文脈」で考えると、本質的に、日本では「全体主義」は成立せず、「官憲主義」

という（要定義の）世界の中で、右左に振れているのが実情かもしれない。そこで、「官憲主義」であるが、本書の基礎になったエッセイより後の時代であったと思うが、竹下登という首相が「司司」と言ったということが、わたくしには思い起こされる。この人は、典型的な「官憲主義」の proponent であったのであろう。要するに、（統治行為は）専門家に任せればいい、（日常生活こそが主眼の）自分たちは違う世界に生きているんだ、ということなのであり、これが「官憲主義」のエッセンスだと思う。

そうだとすると、わたくしが強調している「健全なる素人」という発想とは場違いの、「官憲主義」の背景には、大方の人間は無責任であっていい、何かあったときに断罪の対象があって、結果として免罪権があればいい、ということになる。わたくしの発想は理想主義であり、山本氏の主張は氏の体験に裏打ちされたものから生じていることは承知しているが、実は、日本の社会で不変なのは（上の意味での）「官憲主義」であって、何らかの事情で（この点で、山本氏の分析があるのだが）（本来の意義を考えると、せいぜいのところ「疑似」）「政治化」された民衆を「動員して成り立つ日本的」「全体主義」との差異が、案外、見え難くなっているのではないかという感もある。

実は、本書の指摘には、思うところは、まだ、いろいろあって、たとえば、「公正」が日本の社会では意味を持たないであろうと言われると愕然としてしまう。異議があるのではない。空虚なことに価値を求めたとしたら、これは失敗につながるという意味で、しまったと思うだけである（たとえば、129回記事で、ダイソンが基本的に公正を担保することの期待がインターネットを重要な契機としての未来の世界の可能性だと言っていることに、わたくしは賛同してしまっている。日本の社会で長く生きているくせに、こんな感覚ではわが足は地に着いていないなど、思ってしまうという意味で）。

他には、日本の「組織」が目的を的確に持たないという指摘は大きい。これについては、一般的に言って、私立高の校訓なるものが、教育という観点からは、実は、ほとんど意味をなさないものであることに夙に気づいていた（たとえば、138回記事）が、その理由が山本氏の指摘でよくわかった（第四章）。

大変、恐ろしい話だが、山本氏の没後二十年を経ながら、なお、氏の指摘の適切さは失われていない。今は、明治憲法も教育勅語も、昭和初期のテロリストもいない。要するに、言い訳の効かない真面目な時代である。それなのに、という想いは強い。

ちなみに、自由であるということの重さはわかる。日本の社会での、その難しさも、体験的によくわかる。だが、「難しさ」は、まさに、「今＝ここ」的精神のものであり、第四章で論じられる「歴史的現在」とは全く異なる。この「今＝ここ」的束縛が、いかに、若い人たちを縛っているか、それを解きほぐすのが、物事が分かっているはずの（日本社会の）大人の役割のはずなのに（と思いつつのわたくしも含めて）かれらが何もしないために、結果的に一層「間違った」方向にものを進めている。…

この現況をどうすべきか、と問い直すと、遺憾ながら、山本氏の著作の三十年前よりは、もっと悪くなっているかもしれない。しかも、それが（山本氏のご指摘の「日本的組織」（＝疑似家族組織）の「崩壊寸前」である可能性も高いのに、と思うと、日本的には、どう破綻前に逃げ出せるかが問われるのだろうか。まさか…!?と思いたいが、最近の事例で示唆に富む（福島第一原子力発電所の一号機以下の大津波被災後の経過についての）報告記事がある：

<http://techon.nikkeibp.co.jp/article/COLUMN/20111215/202630/?ST=rebuild>

示されていることは、山本氏の指摘の「植物化した組織」よりも「悪質」かもしれない。加えて、関連するメディアの「不誠実さ」が、また、問題なのだが、ここで起きていることは、山本氏の流儀でいうプロセスとしては「政治化」なのか「脱政治化」なのか、おそらく、メディアの方の標的は「脱原発」なのだろうし、そういう意味で政治化を図っているのだろうが、事実検証をすっ飛ばしての騒ぎ方はよろしくない。一体、こういう姿勢は明治初期の拙速な西欧基準の取り入れの後遺症なのかどうか。いずれにせよ、現下の政治化のターゲット地点に達した後、それは目的が果たされたかどうかとは独立ではあるだろうが、その後、一旦脱政治化するとして、次の「政治化」のターゲットは？

他方、喫緊の課題は、実はそういう方向ではなくて、（原子力であろうとなかろうと）イノベーションと無縁の企業体あるいは組織体に一国の生命や安全を託すことができないという、上記記事の著者の提起した問題への回答であろう。山本氏の指摘は、「日本的組織」というものは、目的志向型ではない、したがって、組織の延命のため以外のイノベーションには本質的に関心があるわけではない、ということである。実際、上記報告記事から垣間見えるのはまさにそういう現象であり、しかも、メディアがそれを援けているという事情である。

付記（平成24年1月15日）：毎日新聞ネット版に加藤陽子氏の記事（「時代の風」）：

<http://mainichi.jp/select/opinion/jidainokaze/news/20120115ddm002070083000c.html>

があり、畑村委員会の報告書から垣間見える福島第一原子力発電所の事故を論じている。その前段で、中東研究者の酒井啓子氏の最近の記事についてのコメントがあり、「俯瞰と総合」という観点を抽出して、それから、中間報告書を読み解くのである。実は、この報告書はネットに存在していることは承知しているが、ダウンロードさえしていないので、伝聞となるが、「さもあらむ」ということではある。「俯瞰と総合」という姿勢が、少なくとも近年の日本の文化には希薄であり、それが、敗戦とか原発事故といったせいぜい短期中期で既に見えやすい結果として現われたともいえるのだろう。さらに、日本の現状の困難、少子高齢化、地方の疲弊なども、こういう観点さえあれば、こうなってしまうような極端な政策が継続することはなかったはずという意

味で、やはり、「俯瞰と総合」という観点の欠如から来ているのであろう。目下論じられている種々の方策も、実際のところ、目先小手先のものばかりであり、基本的には、従来の効果が薄かった政策の延長上のものである。何とか、しかし、「俯瞰と総合」という観点を言論メディアが自らの課題として自覚すれば、相当に改善の見込みも出てくると思っはいる。

8 2012

156. (12.01.08) 日程に余裕があり、何年振りかで「数学教育の会」に顔を出し、懇親会では、昔の先生にもお目に掛かれた。

当ブログでは、(歴史上の) 故人か言及している書物の著者かしか個人名を挙げない方針なので、まだ、お名前を挙げることは憚るが、先生は、懇親会の最後に、この会についての、今や神話時代ともいべき昔の「秋月委員会」と呼ばれた頃の話がされた。本来は、もっと丁寧に伺っておくべきことであるが、要するに、敗戦後の日本の教育崩壊に対して危機感を抱いた、数学者や数学教育者が文部省の教科責任者たちの精神的な支援をするための、相当に高踏的な動機のものであったようなのである。「秋月委員会」の「秋月」は秋月康夫先生のことであり、また、弥永昌吉先生は、この委員会の黒幕的創始者でもあったということである。秋月先生と弥永先生とでは、数学教育の目標の設定に違いがあったようで、この違いは、一種の文化的な違いを反映していたようでもある。この話をされた老先生も、また、余り詳しくはおっしゃらなかったが、文化的差異というようなものを味わえなかったわけでもないようではある。それと関係あるかと言われると返答に窮するが、わたくしが参加した頃の「数学教育の会」は学士会館で精養軒の(簡易化だとは思いますが、それでも形式ばった) 定食の昼食が必ず提供されていた。スープから始まる、この雰囲気は、まさに、戦前の帝国大学の持っていたものの、極めて退化したとは言え、まあ、それなりの系譜に属するという、何とか、哀しい伝統の名残である。経費上の理由で維持はできなくなったのだが、このような「洒落っ気」を失うことが、いかに日本を駄目にしたか、と思うけれど、もともと、そんなセンスのないチンピラ官僚がどうして生まれたか、その辺が問題なのだが…。

いずれにせよ、日本の敗戦からすでに半世紀を大分過ぎ、間もなく70年となる。敗戦後に、占領行政の一環として施行されたものには、戦前の「革新官僚たち」が構想していたものが占領軍の威光を背景に実施に移されたものもあったであろう。一方、占領行政に当たった米軍の軍政官のうちには、本国では実行不能な理想主義的な政策を、占領下の日本(や韓国)で機会を得て実験に近い形で実施した例もあったであろう。そういう事例がどんなものであったかは洗い出しておく必要はあるだろう。こういうものを含めて、事実関係の確認や資料の収集や整理など、敗戦前後の日本の状況については、今

が時期的には最後の機会になりつつあることを痛感する。恐らく、当時のことを何らかの意味で相対化して記憶している人は、もはや非常に数少くなっているのではあるまいか。敗戦時に成人であるか、少なくとも、中等教育相当を終えていた人となると、実は、八三歳とおっしゃった先の老先生も、ぎりぎりの世代である。しかし、占領軍と日本の制度を巡って何らかの交渉があった人たち、しかも、その中でも、秋月先生や弥永先生たちは中堅の世代であったはずだが、皆世を去られてしまったわけではある。もちろん、わたくしは親や祖父母など親族から耳にした話はあるが、敗戦後の数年間については実感を以って思い出すことはできない。

前後するが、この会の報告の合間に、

細矢治夫：ピタゴラスの三角形とその数理（共立出版 2011）

ISBN978-4-320-01986-7

の宣伝があり、購入して、眺めながら帰途に就いた。細矢氏は履歴によると、わたくしの大先輩にあたる。名簿で確認できることではあるが、一期下に高名なエッセイストがおられるのではないかと思われる。この書物で論じているのは、直角三角形の三辺の長さをなすような整数の三つ組みについての詳細な議論である。著者は理論化学の研究者だそうで、当然、数学、特に、群論には詳しいと思われる。ピタゴラスの三角形についての関心も、もともとは理論化学から生じたものであったとのことである。わたくしは、初等整数論は全くの無知であるから、感心することばかりであった。話題そのものは、ピタゴラスが示唆するように、極めて古くからあり、なかでも、ルネッサンス期の西欧で、ずいぶんと進んだらしい。古典的な数学者の名前が多出する（つまらない誤植を見つけてしまった：フェルマは Fermat (p.29) ではなく Fermat とすべきであった。また、隣接行列 (p.50) の定義の条件が落ちているのは残念である。)。ただ、これだけの詳細な研究は、数式処理ソフトなしではなし得なかったと思われる。

ピタゴラス三角形の理論化学における登場の仕方については、細矢氏の原著論文、恐らく、日本化学会の欧文誌（1971年）所収のものを見ないとわからないだろう。現在の勤務先では難しいが、ネットで見られるのかも知れない。なお、この話題は扱い方によっては、多体ポテンシャルのシュレーディンガー方程式についての平衡解の固有値問題の解釈を含んでいるのかも知れない。

まだ、完読もしていない細矢氏の著書を敢えて挙げたのは、この会での報告で、現行の「数学Ⅹ」の教科書における「極限」の扱いを論じたものがあったからである。報告者は、会の前代表であり、実は、上記の細矢氏の著書が属するシリーズの主編集者である。ただし、報告の内容は、「数学Ⅹ」において「極限」を論じている例が多項式関数に限られてしまっているために、(数学的にも、論理的にも、日本語的にも)、非常に、具合の悪いことになっているということの注意である。

そもそも「極限」とは何か。数学Ⅱの文言に対応する形で言うと、まず、独立に変動する変数（独立変数）に応じて変動する変数（従属変数）が定める関数がある。独立変数は（数直線上の）ある区間を自由に動き回れるものとされており、独立変数のそれぞれの値に応じて、計算方式は不明であっても、関数の値がただ一つに定まると想定されている。特に、関数が独立変数のある決まった多項式で与えられていれば、独立変数の値を代入したときの多項式の値として、関数値が定まるが、これが多項式関数である。多項式の次数に応じて、定数関数、1次関数、2次関数などと呼ばれており、グラフもよく知られている。

そこで「極限」であるが、独立変数が自由に動き回れる区間の内部の一点（つまり、変数の値）、あるいは、その区間の端の一点を考えると、独立変数がこの一点（定点であり、したがって、定数として扱われる変数値）に「近づく」という様態が考えられるであろう。さらに、「極限」の議論においては、「限りなく近づく」という言葉づかいも現れる。ところが、実は、これらの分析が容易ではない。この文脈で「近い」とはどういうことか、それがはっきりしない。定点の他に、何個か点（変数）を区間内に取り、これらと定点との距離を測れば、これらの点と定点との「近さ」を論ずることができる。したがって、「数列」あるいは「点列」というアイデアが先行していれば、「近づく」という表現が意味を持つと言えるだろう。さらに、「限りなく近づく」という表現も、定点の「近く」に点（数値）をとり、定点とこの点の間に、さらに点（数値）をとるという操作を続けることによって、定点に「いくらでも」「近づく」ような点（数値）の「列」をとることができる（ように見える— 具体的にどうするのかは不問として —）のだから、「限りなく近づく」という表現の納得が得られたらうに、というわけである。そして、独立変数の値の数列に応じて、関数値の列が出来上がり、この関数値が（関数値の属する数直線上のある指定された点、つまり、）ある数値に「限りなく近づく」（かどうか）という議論も意味を持つであろう、というわけである。ところが、現行の「数学Ⅱ」は数列の極限を前提にしていない。そして、かつては、そういう前提で用いられていた表現だけが、生き残っているという事情らしいのである。

その上、実は、多項式関数において（独立）変数の値の変化に伴う関数値の変動を、わざわざ、「極限」というアイデアを入れて論ずることには余り意味がない。多項式関数は、独立変数の各値に対し、関数値が確定し、しかも、グラフに表示できるように、連続であり、何か異様な現象の発生が予想されるわけでもなく、したがって、ことごとく「極限」というアイデアを入れて論ずるには及ばないのである。しかも、本来、「極限」というアイデアでは、独立変数が「限りなく近づく」値、今、仮に、「極限独立変数値」と呼ぶが、それが関数の「定義域」に属してはいない場合も許容しているから、したがって、「極限独立変数値」を関数に「代入」するようなことは想定して

はならない。関数が「極限独立変数値」において定義されている場合も、「極限独立変数値」に「限りなく近づく」独立変数の値に応じた関数値が、関数に「極限独立変数値」を代入した値に「限りなく近づく」かどうかは別のことなのである（そして、関数が「極限独立変数値」においてとる値と、この「極限独立変数値」に「限りなく近づく」独立変数値に応じた関数値が「限りなく近づく」値が一致したときに、この関数は、「極限独立変数値」において「連続」ということになる。多項式関数は、独立変数のどの値においても「連続」なのである）。

しかし、現下の教科書をすぐに改訂することはできないし、改訂の方向も明らかではない。したがって、現場の教員が正しく理解して生徒に伝えることが大切だということが、報告の骨子であったと思うが、具体的な方策としては、「近づく」を「小さくなる」、「限りなく近づく」を「限りなく小さくなる」と読み替えると思ひ込みや思い違いも減るのではないか、という提案を伴っていた。似たようなことではあるが、「近づく」を「小さくなる」と読み替えるためには、多項式関数の場合でも、独立変数を「極限独立変数値」と「小さくなる変数」の和に一旦書き換える必要があり、その場合は、「小さくなる変数」をいきなり 0 にせず、何か、納得が得られるような効果があるというのであった。

ところで、先の細矢氏のことと、この「極限」のこのの間、さらに、老先生のお話との間には、私的なことではあるが、三題噺と言うわけではないが、ある関わりを付けることができる。ある縁で、わたくしは、中学三年のころから高校三年のころまで、土曜の夜に（鎌倉の御成小の教室を借りて）（故人のことであり、お名前を挙げるが）竹田清という数学者が、主に、旧制中学や旧制高校の水準の数学の授業を試みておられるのに出席していた。竹田先生はメタ・アーベル群という数学的対象の解明を一生の仕事としておられたが、最終的に、どこまで行けたのかは不承知ではある。細矢氏は、中学時代に竹田先生に数学を習ったのではないか、と思うのだが、わからない。竹田先生は、細矢氏（やわたくし）の母校の草創期に数学の授業をしておられたと聞かすが、その時期はそう長くはなかったと思う。細矢氏と同期の人、先年亡くなられたが、この方の名前は何回か御成の教室で聞いたことがある。当然、細矢氏も習われたのであろう。もし、細矢氏に竹田先生の影響の一端でもあるとしたら、竹田先生はさぞやお喜びではあるまいかと思う。

竹田先生の御成での授業は、およそ受験数学とは無縁のものであり、また、雑談はとても子供向きのものではなかったが、雑談の内容を推察できるような子供たちしか居なかったとも言える。ともかく、この教室にいた子供たちのうち、曲がりなりにも数学科に進んだのは、わたくしを含めて二名しかいなかった。ただ、先生はそれでも大変満足されたようで、後年、わたくしの師匠から、「電車の中でね、竹田さんにお目に掛かって。あなたのことをおっしゃってましたよ」と言われたことがある。

「極限」の話だが、竹田先生は、独立変数が「極限独立変数値」に「限りなく近づく」という意味の数学記号 (\rightarrow) に、いつも不等号も併せて付けておられたのを覚えている。代入して極限值を求めるなどというのは、理念を重んずる立場ではありえないことなのである。他方、竹田先生からは、戦前の山の手の旧制中学（中でも、高師の附属）や旧制高校、特に、第一高等学校の、何とも鼻持ちならない様子と、また、思うに任せぬ人生をおくりながらも、なお、毅然としていられる痩せ我慢の気概のようなものも感じ取った。実際、敗戦後 10 年余り経っていたとは言え、わたくしの周辺でも、まだ、そういう雰囲気は残っていたのであった。

157. (12.01.21) 当ブログの趣旨とは離れるようだが、東京大学の秋入学の件が話題になっており、大学の秋入学に限らず、日本の学年制を北半球標準の初秋（晩夏）開始にすることが合理的だというのがわたくしの昔からの持論でもあるので、目下の言論メディアの議論の推移に関心を注いでいる。そして、このことは、実は、当ブログの本来趣旨である「われわれの時空認識」の構造理解とも無縁ではない。

さて、最近（平成 24 年 1 月 20 日）の東京大学の総長の記者会見で「入学時期の在り方に関する懇談会」の「中間まとめ」が示されたことを承けて、言論メディアで論じられているのであるが、東京大学の中間まとめは、いわば、周到に、課題を東京大学（や東京大学と同様の憂いを強く感じている一部の高等教育機関）だけに局限することによって、要するに、一般人の議論参入を限定することによって、話題の拡散化を防ぎ、敢えて表現するならば、第三者からは、「実行するならご勝手に」という免罪符を得やすくしている方向性を示すものと言えるだろう。

しかし、そのためには、入学試験を春に行い（上述「中間まとめ」p.2。特に、脚注 2）、秋入学までの半年間をギャップタームと称して、入学予定者の経験蓄積期間にするという、不自然な提案をしなければならなくなっている。一方、卒業時期が半年遅れることについては、東京大学はそう心配してはいないだろう。少なくとも研究者を養成するという点に関しては（生命科学分野を含めて）全く何の障害もないのであるから。ただ、これほどの無理を重ねてまで国内で例外的に振舞うということによっても、東京大学は国際的に主導的でなければならないと考えているとするほど、東京大学は切羽詰まっているのか、あるいは、自己中心的であるのか、など俄かには信じがたい面がある。ところで、上述「中間まとめ」であるが、pdf 版をダウンロードしてみたところ（ウィンドウズ XP）、ネット上では色彩豊かな添付資料のグラフ類が、単色化されてしまい、ほとんど識別不能になった。著作権の関係もあるのかも知れない。

さて、言論メディアの報道に関連して言えば、何よりも参照がきちんとしていないことを指摘しておかなければならない。紙で提供される新聞（妙な言い方だが、紙面に印刷されている古典的な形式のもの）ならば、縦書きで

あり、URL を加えるのは簡単ではないかもしれないが、工夫はできるであろう。まして、ネット版ならば、URL への言及がない方がおかしい。確かに、今日は検索ソフトがあり、URL の表示がなくても済むように見えるかもしれない。しかし、本当にそうだろうか。原資料への参照が可能な場合に、それを怠り、必ずしも正確ではないかも知れない要約だけを示して、記事を進行させるという態度は（よく言って）安易（実態は、不誠実）ではないだろうか。それでは記者自身による原資料の分析的な検討を経なくても書き上げられる程度のものしか書けないのではないだろうか。なお、147 回記事参照。日本の言論メディアの特有の行動かもしれないのである。

「中間まとめ」そのものは、平成 23 年 12 月 8 日の日付になっており、1 月 20 日までの間に年末年始の休暇が挟まれたとは言え、東京大学の検討はすでに次の段階に入っているのであろう。学内者に対して意見募集をしているところらしいが、学外者として、今更「中間まとめ」について云々することは憚られる（学内者を通じて意見を反映させられないわけではないとしても）。とは言え、「中間まとめ」において何が論じられていないか、は注意しておく必要があるだろう。そして、言論メディア、特に、有力新聞は、論じられていない点について分析的な検討を加えるべきだと思う。社説を見る限り、大半が社会の理解が欠かせない云々という抽象的な文言を付して締めくくっているが、日本経済新聞だけが、大学だけではなく、

学校暦をすべて秋スタートに変えた方が合理的という声もある

と言っている（1 月 21 日付社説）。東京大学が想定している 5 年程度で実現できるかどうかは不明だが、「中間まとめ」に散見する種々の無理は、学校暦すべてが秋開始となれば、その段階では自ずと解消されてしまう。メディアにも、このことはわかっているはずである。しかし、敢えてそこには踏み込まず、国際化、ギャップターム、就職、公務員試験などを列挙して、バランスしてみせて、社会の理解が欠かせないという他紙の社説は、要するに、婉曲に、東京大学の方針に異を唱えているのであろう。「中間まとめ」がメディアに投げかけている本当の問題は、東京大学や一部高等教育機関だけでは困難かもしれない課題を、（日本経済新聞のように、少々及び腰でも）きっちりと見抜いて、論議することではなかったか。それを仮に理解して、婉曲に批判しているのだったら、「中間まとめ」を見ながら、表面的に主張をなぞるのではなく、「中間まとめ」が議論を避けている部分を発掘して、批判するのが公正ではないだろうか。ただし、返り血を浴びるかも知れない、ということはあるが、恐らく、そういうことよりも単純に記事編集の習慣の問題なのだろうが、そこがわたくしにはとても気になるのである。

法人化されたとは言え、東京大学は国立大学であり、歴史的にも社会的にも、日本を代表するものである。それゆえ、国際的な存在感を有することは当然であり、東京大学が世界的な水準で一流でなければならないとするのは、東京大学だけでなく、日本全体で実現あるいは維持しなければならないこと

である。もとより、そのような水準になければならない大学は、東京大学だけだと言うことではない。ところが、このことと東京大学の学生が海外に留学しない、あるいは、海外からの東京大学への留学生が多くない、ということとは、論理的に結び付くことではない。ある程度の論理的な整合性があるとしても、その評価をどのように行うかは、それなりの検討が欠かせない。いずれにせよ、東京大学の海外諸機関との関係が、国立大学である東京大学が配慮すべき国内の諸事情に優先するほど差し迫った重要性があるという判断の合理性がきちんと示されているだろうか。配慮すべき国内事情なるものが実は相当にいかがわしいということは大いにあり得て、実際、海外諸機関との関係の障害の本質的な部分があるところにある可能性も高いかも知れない。だが、周到な検討の結果、早期の行動開始が可能ないように「中間まとめ」は作文されたということはあるだろう。「中間まとめ」は議事録ではないのである。

わたくしは、しかし、日本経済新聞の社説の末尾の文言（上掲）にある意見の持ち主であり、それは、「配慮すべき国内事情」が実はいかがわしいという自分なりの判断に基づいている。それゆえ、思うのだが、言論メディアには、東京大学の「中間まとめ」をもっと深読みして分析的な記事を用意してほしいのである。もとより、「配慮すべき国内事情」のかなりの部分が、言論メディアのこういう姿勢に起因している可能性もあるが、それが明らかになれば、少なくとも一歩は前進するであろう。

翻って、東京大学の秋入学に関連して言えば、少なくとも5年先のことであり、それまでに、ギャップタームなどという夢のようなことを口にしないで済むように、理想を言えば、初夏に入学試験ができるように、日本の学年が北半球標準に近づくことを期待するものである。ギャップタームというアイデアは、現行の受験体制を前提にして、その対策として、つまり、受験勉強における受け身の習慣から脱却する機会だと言うのだが、果たしてどうか。このような不自然な（つまり、他国にも過去にも検証済みの事例がないような）小手先だけの対策を重ねて行くうちに、ますます弊害が蓄積されていく可能性もあるのである。

なお、「中間まとめ」31ページに、さらに、「まとめ」があるが、大事な議論や、補足としての脚注や、図版類は、やはり、通読することが前提である。

付記（平成24年2月4日）：この記事を書いてから、主要メディアの議論の方向を眺めて来たが、秋入学を大学だけの問題に局限化しようとする傾向が強いのが残念である。東大の言うギャップ・タームは、緊急避難的な不自然なものであるという指摘がなぜないのか。もちろん、秋入学は正しい方向であるが、そのことを中等教育以下に及ぼすべきではないかという議論がなぜ出て来ないのか。実は、東大や東大の意向に賛同する高等教育機関の投げかけていることは、日本の社会が今後の世界の中で生き残っていくための方策なのである。当然ながら、初中等教育との接続が滑らかでなければ、効果はない。つまり、大学だけに問題を局限したのでは、日本は今後の国際社会での

生き残りに相当の困難を覚悟しなければならない。そして、もちろん、そのような魅力のないところには、そもそも、留学生を吸引する力はないだろう。つまり、東大の提案には（このままでは）それこそギャップがある。— 東大の提案の裏をどうしてメディアは論じないのか、とわたくしが言うのは、こういう意味なのである。もとより、わたくしでさえ気付いていることである。日本最高の知恵者集団が気付いていないはずはない。言論メディアの人たちも実は気付いていると思うのだが。

なお、かつて「数学教育の会」（156回参照）に、日本政府が間に入って、世界中の主要大学と協定を結び、（日本政府提供の）奨学金付きの学部段階（大学院ではない）での日本からの留学生枠を設け、前段階の選別は日本国内で行って最終選考自体は先方に任せる、という政策はどうか、と述べたことがある。ずいぶん前のことで、原稿ファイルも見つからないが、世界中というのは、いわゆる「先進国」だけのことでなくて、このようなインセンティブあって始めて学生が行くかも知れない国々も含ませたつもりだし、また、実は、そういう国々こそが日本の将来のために重要なのであると思ったからでもある。ただし、こうして学部段階を海外で過ごした若い日本人がしかなるべきアイデンティティを維持できるかどうかは、初中等教育の質に依存する点が高いので、この辺への問題提起でもあった（また、後段の付記7参照）。そして、もちろん、ベスト・アンド・ブライテストの一部がこういう形で海外に出るという可能性があるだけで、国内の受験戦争は変質するだろう、という期待もあった。今、受験戦線の末端にある進学校の校長になって、意見は変わったか、と問われると、実は、全く、変わってはいない。要するに、日本人が大人になる過程に日本国内の経験だけが評価されるシステムでは、日本は持つまい、と思うのである（帰国子女云々を評価せよ、ということではない。しっかりとした中等教育の実現と、高等教育の国際化ということである、念のため）。

付記2（平成24年2月26日）：余計なことだが、現在実施中の個別学力検査前期入試の合格発表は、東京大学の場合、3月10日に行われる。今や、この大学だけが学内掲示板のみの合格発表であり、他の国立大学がネットでも公表するというのとは異なっている。受験者本人は発表板を見に行かなくても結果は知りうるとしても、勤務先校のような学校では結果の集約を早くしたいと考えているわけである。受験番号は基本的に個人情報であり、管理の面では軽々に在学中の卒業生に調査確認を委託することはできない。もちろん、発表板の撮影画像の送信にも問題がある。勤務先校の場合、教員が一名出張して確認するという合理的とはいえない習慣を未だに維持しているが、この手のことの蓄積が学校の財務を圧迫していないとも言うことはできない。ともかく、こちらから要請できることではないが、東京大学も来年度からはネット発表を実施することを期待するのみではある。

付記3（平成24年3月31日）：東京大学の「秋入学」関連の報告書が公開さ

れた。議論は若干精緻になったが、基本的な点是不変であって、東京大学だけの改革では、日本の青年たちが、そして、やがては日本の文化文明が、今後の世界に生き残って行けるかどうか、つまり、それにふさわしく、しかるべき普遍性を獲得しつつ成長していけるかどうかとなると、その回答にはなっていないわけである。実際、先日の同期会（第161回記事参照）でも、東大の秋入学案の基本的な問題点は、東大がその国際的な地位低下の対策として秋入学を提案したというイメージを流してしまい、事柄の本質が、長期の、しかも気候的にも空調なしでは勉学に適さない夏季休暇が学年の中にあるという学年編成そのものに難があることがぼけてしまっていることだという指摘が、わたくし以外からもあった。小学校から秋入学に移行すべきだということである。もとより、「ギャップターム」などは不要になるし、各種の入学試験の編成の仕方も抜本的に様変わりするであろう。日本の困難は、問題の本質と直面しようとしないうちにあり、この件も一例ではある。こういう環境で最初に悲鳴を上げたのが、東大であり、それが「秋入学」ということであろう。これは事柄のはじまりでなければならない。

付記4（平成24年4月11日）：象徴的な記事が、日本経済新聞朝刊1面にある（「2000人対1人の戦い 国際規格、自ら取りに動く 第5部 国依存の先へ（2）」）。「ニッポンの企業力」という連載コラム記事の一編だが、ここで指摘されていないことは、日本の老若男女に本当の意味での国際性ということの感覚が欠落していることである。日本が小国であり、独自の産業はおろか文化や文明もないというのなら、それは独立の存在とは言えないのだから、国際性以前の話ではある。しかし、現実には、日本は依然大国であり、独自の文化や文明もあり、しかも、世界的に意義ある価値の発信をする能力があり、また、それを継続する責任があり、それを世界的に期待もされていると、わたくしは思う。しかし、その能力の維持が、日本自体の自覚の欠如から困難に晒されているというのが現状であり、そのことの現象としての現れとして、例えば、このコラム記事で言う国際規格化への発想の欠如がある。なるほど、独自の特徴ある日本的技術や製品は国内で流通すればそれでいいという考え方はあろう。しかし、人口構造が高齢化と少子化という偏頗な形になっており、国内市場向けだけでは第三次産業を含めて企業は成り立っていかない。特に、少子化は今後の開発力の縮退を意味するのであり、高齢化部分は海外脱出は予想されないとしても昨今の財政困難を念頭に置くと経済規模的には急速に縮小させざるを得ないのではないだろうか。東京大学の秋入学の議論は、一応5年後開始を念頭に置いているが、その他の主要大学が追随することも期待したい。しかし、本質的な部分は、日本が独自の文化文明を持ち、意義ある価値を世界的に発信する拠点として生き残れるということではなければならない。実際、そのことがより重要なのである。さればこそ、その意味で、日本が多勢に無勢を自覚すれば、世界の、少なくとも北半球の主要国と小学校からの学校年度を揃えて、システムとしての日本の制度の特異性

を減らすことが喫緊の課題のはずなのである。コラム記事も、ニッポンの企業力を論ずるに当たり、

日本のメディアは世界標準の受発信をしているか

という問いが今一番問われているのではないか。これは、いわゆる logistics の基礎的部分でもある。

付記5（平成24年6月5日）：現在の政府の国家戦略室（だか会議だか）で、教育改革の提言がなされたという。事前に、メディアから報道がされていた内容であるが、高2での卒業可能性は、いろいろと提案者は条件を付しているが、日本の社会の実情を踏まえていないという意味で、この提案は非常に危険である。このまま実行すると、現在の高校は、いずれ2年課程になってしまう。中高一貫の場合なら、かつて、5年課程であったから、いいのかも知れないが、予想される問題の本質は、そこにはない。義務教育の九年制をどうするか、まさか、戦前のように、初等教育として九年制を捉えるのではあるまい（中学校は、前期中等教育、戦前の高等小学校は後期初等教育、この違いは形式的なことではない。）。私立の中高一貫校を預かっている身として言うのではないが、このままでは、現行の公立高校は、中高一貫校として再編されなければならないし、その先には、中等教育五年制が見えるわけである。一方で、大学が秋入学を模索している時期である。本来、合理的な提案は、二年での高校卒業ではなく、二年半での高校卒業、あるいは、高校の六月卒業であるべきで、これは、優秀児であるかどうかには無関係の提案として行われてよいものであり、仮に、優秀児向けに始まり、そのあと、退化しても、大学入学が秋であれば、万事、整合するのである。資料を作った文部科学省の担当局の人たちに、この辺の事情がわかっていなかったとは信じがたいので、大手メディアの反応を事前に確かめてのことかも知れないが、それでは国の将来を本気で考えるべき、国家戦略室のあり方とは矛盾するのではないだろうか。戦略として提言すべきこと、それは、小学校から大学まで、すべて、秋入学に移行すべしということであったはずである。それ以外のことは、すべて、目先の点数稼ぎに過ぎない。

付記6（平成24年7月8日）：「學士會会報」895号（2012年第4号）に、Yale 大学教授 浜田宏一氏の「大学の国際化はなぜ必要か？」という記事がある。「VIII 結びにかえて」が示唆に富む。浜田氏は制度を問題にしているようであるが、制度を当然のものとして「自己規制」して行動してしまうことが問題なのではないだろうか。

付記7（平成24年10月5日）：先週9月28日に現勤務先の生徒職員対象の「人権同和教育講演会」の枠内で、前広島市長の秋葉忠利氏の講演があった。講演は、近著

秋葉忠利：ヒロシマ市長〈国家〉から〈都市〉の時代へ

朝日新聞出版 2012

ISBN978-4-02-250993-2

の一部の内容の要約のようなところもあったが、この本に収められていない重要な話もあった。中でも、氏のそもそものきっかけが、高校時代の AFS アメリカ留学での経験にあったことは、かれとの長い付き合いで、初めて聞いたように思う。現地のハイスクールにおけるアメリカ史の授業で、広島・長崎への原爆投下の正当化がなされていることに対する強い違和感・不審感を、いわば、熟成してきたのが氏の人生でもあったようだ。

「真珠湾」が「広島・長崎」を正当化できるか、アメリカ史の記述のように、原爆の使用が米兵 25 万人、日本人市民 25 万人の命を救ったと称するが、それは真実と言えるのか、そういうことがアメリカ史の授業の時に感じたが、英語力や語彙力などの不足と、そしてクラスの生徒ほぼ全員と教師相手にして、うまく反論ができなかったそうである。その後、帰国後、大学生時代から夏は広島の原水禁会議などで通訳を務め、そして、被爆者の人たちからいろいろと教えられて今日に至ったということだった。

このブログ記事の文脈で、秋葉市長の体験をなぞったのは、かれがしっかりとした自己の文化的アイデンティティを確立していて、その上で、最初のアメリカ生活を経験したということに注意したいからである。もし、自己アイデンティティの確立が不十分であったなら、アメリカ史の記述に流されてしまったかもしれないとも思われたわけである。「いや、1950 年代の末期は、まだ、戦争の記憶があったから、原爆記述に関しては多かれ少なかれ誰もが似たような感覚を抱いたのではないか」という意見もありうるかもしれない。だが、要点は原爆に関する記述の当否の方だけにあるのではなく、他に三点、すなわち、第一に、アメリカ史の記述に対し、論理的に対応しようとし、第二に、それだけの準備が氏の内部の日本語の世界ではすぐに出来たが、第三の点として、英語では十分に表出できなかったということにある。そして、この第二の点が最重要なので、氏の受けた教育の質がここに表れていると思う。別な言い方をすれば、カルチャー・ショックとして深く受け止めることができるだけの成熟が中等教育段階で実現できていたということである。もとより、この感想は、当ブログ記事の文脈での話であって、秋葉氏の著書本来の主張に対して感想を述べているわけではない。

付記 8（平成 24 年 10 月 28 日）：10 月 27 日付の朝日新聞の社説「秋入学一東大よ、初志を貫け」は、このブログ記事の本来に関係がある。東大が春入学、秋授業開始で、この間、さまざまなプログラムを用意するというのに対して、有体に言えば、イチャモンである。「ギャップターム」はどうした!」というのだが、そもそも『ギャップターム』という発想に難があり、すべては、学校年の秋開始への移行で自然に解決し、しかも、東大をはじめとする主要高等機関の国際的生存に留まらず、今後の世界においても日本の社会や文化の存在価値を維持する上では、小学校から北半球標準に学校年を揃える

ことが大事なのだが、この社説は「見事に」そういう本質的な部分への言及を回避している。

かつて「中曽根臨調」で、学校年の開始時期の秋への移動が提起されたけれど、まさに、主要メディアによって潰されたという話がある。表面的には、例の「桜の下での入学式云々」が強調された所以であるが、主要メディアの本音は、そういう情緒的なところにあったわけではないと聞いている。この社説も、東大が提起した学年開始時期の移動の本当の理由を分析しようという方向ではないから、あたかも東大の決断を惜しむかのような標題とは裏腹のイチャモンというか、新聞社の勝利感さえ漂っているようなものになっている。なお、東大のHPの10月26日付記事を参照したい。

158. (12.02.24) 確か、日経の書評欄だったと思うが、AIBOの開発に携わった仏人研究者の著書

フレデリック・カプラン：ロボットは友だちになれるか 日本人と
機械のふしぎな関係
NTT 出版 2011
ISBN 978-4-7571-0309-2

が論じられていた記憶があり、書店であったか、ネットであったか失念してしまっただが、ともかく、今、手元にある。翻訳は、工学系(?)の研究科に勤務している人の手になるものであるが、索引がない。原注は詳細に訳出されているが、それだけでは装飾以上のものではない。被引用文献は仏文のものが多くのである。しかも、本書の原点は2005年の出版であり、翻訳が出るまで6年を経過している。さればこそ、本書末尾の

西垣通：和製ロボット考 — 解説にかえて

が重要な意義を持っている。著者から寄せられた「日本の読者のみなさんへ」は、2011年3月の日付であり、訳者の「あとがき」は4月、本書出版は6月である。本書の内容がエンタテインメント・ロボットを中心としているとは言え、ロボットと関連する日本の思想に不備があることが、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故処理の過程を通じて明らかになった後の時期であり、著者や解説者には時間的限界があったとしても、訳者からはこの点への言及があってもよかったのではないかと思う。

さて、本書の目次として、冒頭の「日本の読者のみなさんへ」、末尾の「和製ロボット考 — 解説にかえて」、「訳者あとがき」に挟まれた部分：

はじめに
第I部 友だち化するロボット
第1章 当惑
第2章 系譜
第3章 誕生

第4章	多元的な世界
第5章	道のり
第6章	愛着
第7章	変身
第II部	ロボットと友だちになること
第8章	異境（1）
第9章	異境（2）
第10章	不完全性（1）
第11章	不完全性（2）
第12章	メタファー
第13章	人形
第14章	魔術
あとがき	— イエロー・ブリック・ロード

を挙げよう。西垣氏の解説は、「あとがき」に引き続く「原注」の後にある。

さて、この書物は、大変興味深く、また、大変難解でもある（翻訳調の表現だが）。理由は、著者が西欧文明を相当に相対化し分析的に整理した上で、エンターテインメント・ロボット AIBO の開発を通じて体験した日本文明の（著者にとっての）異質性の理解の試みが、当然ながら、著者に染み込んでいるフランス文明の（われわれから見ての）異質性も垣間見させてくれるのであるが、そして、そこが興味深いという所以でもあるのだが、著者の日本文明経験もわれわれのフランス文明理解も実は偏頗なものなので、著者の見解や、それから惹起されるわれわれの反応も、どの程度の価値があるものなのかの判断が実は極めて難しいのである。

概して言えることは、そして、それは已むを得ないことではあるが、著者が西欧文明と対比させて日本文明の異質性を述べる時、著者の援用する西欧文明の文脈と、日本文明の文脈が整合していないということである。著者は、ギリシア・ローマあるいはユダヤ・キリスト教の伝承を引用して、ある意味で、古代メソポタミア以来の文明史の中で、

西欧文明の基本的なロボット把握を、人間の能力の一部を代行するために人間が作り出した機械として、神と人間との関わりにおいて、改めて人間とは何かという、再定義の反復過程の一契機である

と整理する。AIBO のような「エンターテインメント・ロボット」「ペット・ロボット」は、このような範疇の外にあるわけである。他方、著者による日本文明の理解は、その本質なるものについては基本的に暗箱として、19世紀後半以降の西欧文明の受容の仕方による現象として解釈できる部分に留めようという姿勢のようである。もちろん、この姿勢は健全なものであるが、この目的のために、著者は、近年の日本の、たとえば、アニメその他のポップ

カルチャーについての西欧文献を多数引用する。しかし、利用した文献を批判的に読むことができるほど、著者の日本体験は深くはないのである。他方、著者の見解の構成の上で、ソニーの研究所における日本人の同僚、特に、かれらの知見の質の影響も大きかったであろう。これらは、主に、本書第II部についての感想であり、後に、改めて論じたい。

第I部では、自律的なエンターテインメント・ロボットという、(上述の意味での)西欧文明的発想の盲点を突くような存在との遭遇によって提起された、このような存在を支えるアイデアの系譜について反省する。本書の基調は、「はじめに」で掲げられ、西垣氏の解説でも注意されている：

今日、エンジニアが新たな機械を構想するとき、その機械が社会にどのように組み込まれるか、ユーザーがどのように受け止め、どうすれば社会に受け入れられるか、そして、どんな未来が築かれるか問わないわけにはいかない (p.III)

という自覚に基づくものである。したがって、

科学の進歩が社会にどんな影響をもたらすかは、エンジニアが発明した新たな応用技術だけではなく、進歩によるわたしたちの考え方の変化次第だ。科学とテクノロジーは考え方を変化させるのだ。このような一連のプロセスでエンジニアが持つ役割を否定しようとしても無駄だろう。それゆえ、エンジニアは、この事実を十分、意識し、社会の広い文脈における、みずからの活動の存在理由を正当化できる言説を確立せねばならないのだ (p.IV)

ということになる。このような姿勢は、最近の日本流に言えば、「上から目線」だということになるのだろうか。

「みずからの活動の存在理由を正当化できる言説」というとき、「常識」的には、エンジニアの開発の結果が、人類の福祉の向上に貢献すれば可、そうでなければ不可という風に考えるべきだろうし、かくて、科学的知見や技術的工夫が社会の進歩につながるべく利用されなければならないし、この文脈に属している「産業用ロボット」は、ことさらに「言説」を要求するような存在ではないであろう。ところが、「エンターテインメント・ロボット」は自律型の玩具であり、たとえば、AIBOの開発に投ぜられた知識や知見の量や質は、AIBOによって展開されるであろう人間社会への有用性とはおよそ釣り合わないものである。なぜ、こんなものがあるのだ、ということで、著者は、「エンターテインメント・ロボット」が、現代の科学的知見やテクノロジーの中で占めるべき位置を探り出そうとして見せる。結果として、第I部は、認知科学の基本的な問題が扱われることになったと思われる。

興味深いのは、第II部なのであるが、第8章で日本体験というカルチャーショックを論じ、第9章で、自己の西欧古典から現代にいたる西欧文脈での知見から、カルチャーショックを整理し、第10章以下で、必ずしもユデオ・ク

リスチャンの立場にこだわらずに、造物主という宇宙創造の想定上の主体と、(人造人間型) ロボットの製作者の系譜と、さらに、AIBO のようなペットロボットの製作者というのは、西欧型の文脈には属さないというようなことが述べられている。ここで、系譜が丁寧に述べられていることが大事なのだが、著者は対応する系譜を AIBO の発想に辿ることができなかつたようである。近いところでも、「からくり儀右衛門」の茶汲み人形があり、一方、体系的には文楽があり、歌舞伎の人形振りがある。縄文土偶から出発してもよかつたはずである。著者に対し、長い文化的な伝統について AIBO の開発者たちが余り言及しなかつたのかも知れないし、むしろ、著者にはそれが不思議だつたかも知れない。いろいろな模式図を多用しての論述だが、著者が十分に納得していない様子がこの辺りの文化受容のプロセスの説明図に見られる。

著者は、現代日本文化の特性を伝統型とそれとは異質の西欧起源のものとの混在に認め、なお、その混在の現れ方に明治初期の西欧受容のある種の偏りに注目している。概説的には、それは否定できることではないが、著者の論旨の組み方から判断すると、(上述のように) 著者に日本文化の伝統をレクチャーした人たちの教養の質がステレオタイプ型であつたのではないかとも推察される。ソニーの研究所を始め、著者が日本で交わつた人たちは、(日本的にも世界的にも) それなりに「優秀な」人たちであつたはずであるが、かれらは、日本の歴史や日本の文化の発展を世界史やメソポタミア考古学に通底する人類史的な観点での教育を受けて来なかつたか、あるいは、そもそも日本史や日本文化史をきちんと学んで来なかつたのではないかと思わざるを得ない様子が見えるのである。

もともと、我が国の中等教育において、日本史を世界史的な文脈で教育していない弊害の大きさは、国際的な視点を持って活躍した人たちが一様に指摘していることである(梅棹忠夫先生、岡田英弘先生など)。文化史の面となると、伝統的に流入は論じながら、起源地域とされる一帯の文化的発展との対照は十分ではなく、また、近年に至って、流出もあるのだが、流出の由縁を受け入れ側の文化の問題と絡めてきちんと論ずることも少ないようである。日本の歴史や文化を(普遍的な観点を承知しながら)十分に理解するという、そういう大事なことの訓練を受けていない同僚からの説明に基づいて、自分なりの日本文化観を作り、何か納得が行かなかつたのであろうか、補強するためにイタリア人研究者などによる文献を利用している。

この辺りは、もっと丁寧に読み直した上で、改めて論ずるに値するところだと思ひ、実際、この記事は大分前に書き始めたのだが、雑な紹介で文字通りお茶を濁すことにしたのは、わたくしの勤務先校の事情で、取り込み中だからである。

追記：ちなみに、亡父の著書であるが、日本美術の概説に

Itsuji Yoshikawa: Major Themes in Japanese Art (Heibonsha Survey of Japanese Art, 1976)

がある。亡父から、サンサヴァン教会堂の壁画を対象に選んだのは学生時代の日本美術の授業で受けた訓練が生きると考えたからだと聞いたことがあるが、他方、この本では、西洋美術史の研究法を日本美術史の解釈に適用したのだと言っていた。現在の水準で、この書物がどのように評価されるかは知らないのだが。

159. (12.02.28) 前回の記事と並行して

John Allen Paulos : Innumeracy – mathematical illiteracy and its consequences

Hill and Wang, 2001

ISBN:978-0-8090-5840-2

を眺めていた。この本は、SIAM News の古い号を整理しているときに、書評記事で気づいたのだが、(確か、丸の内の、しかし、東京にはなかなか行けないし、一月初旬以来行ってはいないから、そのときでなければ、天神のジュンク堂の地下であったかも知れないが) 丸善で見つけて、購入しておいたものである。ペーパーバックで180ページ強、しかも、(わたくしの印象だが) 英文は易しくはない(初版は1988年)。語彙も相当に exotic なものが多い。年齢のせいもあるのだろうが、片道30分の通勤の電車の中で、10ページ近く目を通すと眠くなってしまふ。表紙を開くと、Praise for Innumeracy という宣伝文句が並んだページがあって、「この小さな素晴らしい本は二時間もあれば読めるし、今まで経験した二時間では最上でしかもお得感 (profitable) がある」というシカゴの地方紙の評者の意見が紹介されているが、二時間はもともと無理としても、いろいろな意味で(一応数学者のわたくしでも) 得るところは多かった。著者は、数学者であり、家族に for numberless reasons によって本書を捧げている。

さて、Innumeracy とは、副題の mathematical illiteracy が示すように、数学的感覚(というよりも、ものごとを合理的に把握する姿勢や習慣)が欠如している状態を示す語であり、そのような人たちを innumerate といい、かれらと対照的な人たちを numerate という(のが著者の語彙選択である)。著者は Introduction の始めの方で

Innumeracy, an inability to deal comfortably with the fundamental notions of number and chance, plagues far too many otherwise knowledgeable citizens (p.3-4)

と言っている。

もちろん、米国だけの話ではない。かつて、日本語では、illiteracy を「文盲」と称したが、今日では「盲」という字を憚ってか、的確に訳しようがなくなった(メディア関係者には差別意識はあったかもしれないが、「盲」という字自体に差別意識が伴うわけではない。今の日本のこういう習慣は、もの

ごとを正確に把握しようとする努力を放棄して目先の自己正当化を図るとい
う精神の表れのように見える。それには、innumeracy に留まらない深刻な
問題が潜んでいると思う。ともかく、「盲」に代えて「識字率」という語を使
うと illiteracy に相当する内容を表現するのは難しくなる。illiterate につい
ては、しかし、「文盲」を（当事者の悔しさを含み、その恨みが「文盲」より
も反映する）「無学」と言い換えることができる。innumeracy も「無学」の
一側面であるべきなので、「無学」を流用するか、「無数」と訳すか、論理に
考えが及ばないという意味で「無論」と訳すことも考えられるが、「無学」
以外は、勿論、無理な話ではある。やはり「数盲」とするのが適切度が高い
ような気はするが、心理学的な意味で、数概念が全くないという人を指す術
語として使われているかも知れず、その場合には、注意を加えなければなら
ない。

さて、本書の目次は

- Preface to the 2001 Edition
- Introduction
- 1 Examples and Principles
- 2 Probability and Coincidence
- 3 Pseudoscience
- 4 Whence Innumeracy ?
- 5 Statistics, Trade-Offs, and Society
- Close

である。ともかく、第一章から第三章まで、著者は、確率計算などを丁寧
に行って、数を伴う思い違いしがちな話題から、稀な現象とされるものが実
そうではなかったと示したり、関わりがあるかのように喧伝されることが実
は偶然でも十分に起こり得ることを示し、日常的な数的な誤解からトンデモ
科学や疑似科学に至るまでを俎上に載せる。扱われているトピックの中には、
初等確率論の演習問題として印象的なものが結構含まれている。

第四章で、著者は Math Anxiety という小節の末尾近くで

In writing this book, I've come to understand a way in which
I (and probably mathematicians in general) contribute uninten-
tionally to innumeracy. I have a difficult time writing at ex-
tended length about anything. Either my mathematical train-
ing or my natural temperament causes me to distill the crucial
points and not to dwell (I want to write "dither") over side
issues or contexts or biographical detail. The result, I think, is
clean exposition, which can nevertheless be intimidating to peo-
ple who expect a more leisurely approach. The solution is for a
variety of people to write about mathematics. As has been said

about many subjects, mathematics is too important to be left to the mathematicians.

と書くが (pp.119-120)、(アメリカ流ゆとり教育の結果) もっと始末に負えない無反応な学生が増えていることを大いに気遣っている (これも日本の方が深刻だろう):

Their problems are an order of magnitude more serious than math anxiety (p.120).

この章を、著者は logarithmic safety index (対数安全指数) なるものを提案して終える。ある活動の従事者が (統計上) 一年間に X 名あたりで一名の死者が出るとすると、この活動の「安全指数」を X の常用対数値 $\log X$ で定義し、ここが重要なところだが、メディアのニュース報道では、事件事故の報道に際し、必ず「安全指数」に言及させよ、と言うのである。例示されているのは、米国内では、一年間に 5300 人に一名の割合で自動車交通事故の死者が出るので、自動車交通の安全指数は $3.76 (= \log 5700)$ となる。あるいは、「危険指数」として $10 - \log X$ を採用してもいい。同じもののはずだが、心理的効果はずいぶん違う。などと言う。この定義による「安全指数」は、極めてまれな活動の場合などには適当とは言い難い面があることも注意はしているが、優れた提案だと思う。この章の末尾では、著者は、統計オンブズマンを設けて、メディア報道に現われる数字の報道を「安全指数」の観点を加味して批判的に検証すべきだと言っている。そして、危機感を吐露して

These matters are not merely academic, and there is a direct way in which the mass media's predilection for dramatic reporting leads to extreme politics and even pseudoscience. Since fringe politicians and scientists are generally more intriguing than mainstream ones, they garner a disproportionate share of publicity and thus seem more representative and significant than they otherwise would. Furthermore, since perceptions tend to become realities, the natural tendency of the mass media to accentuate the anomalous, combined with an innumerate society's taste for such extremes, could conceivably have quite dire consequences, (pp.131-132)

と述べる。米国だけのことではないし、まことに、この通りである。

第五章で、コンドルセ-アローの定理や囚人のディレンマなどを、抽象度の高いモデルから著作時の米大統領選挙の予備選挙のカリカチュアなどを作って論じている。個のレベルの選好と集団や社会のレベルでの選好の衝突などは数学的・中立的な議論を予め丁寧に展開しておかないと、いたずらな混乱の結果、もっとも不適切な結果に至ることもありうるわけである (と数学的議

論が示唆する)。また、仮説検定法や標本抜き取り検査、世論調査などを論じながら、誤用や誤解、限界についての注意を喚起し、また、調査技術の若干の紹介をする。さらに、大数の法則と中心極限定理が言葉だけを用いて概観される。相関が因果関係を示すものではないことを例示し、さらに、統計数字の読み方で一番要注意なのが比率や百分率の数値であることを、もちろん例示によって、注意している。この章の要約というわけではないが、pp.169-176に本書の主張が集約されているとも言えよう（特に、p.176）。

Close において、執筆動機を述べ、それは怒りからだと言うものの、

The desire to arouse a sense of numerical proportion and appreciation for the irreducibly probabilistic nature of life – this, rather than anger, was the primary motivation for the book

と記して終える（p.180）。

実は、上掲の書物の前に

Tina Seelig: What I wish I knew when I was 20
– A crash course on making your place in the world
HarperOne, 2009
ISBN978-0-06-204741-0

という本に目を通していった。これは暮れに東京に行ったときに丸の内の丸善に山積みになっていたのを見かけたが、青臭い表題の書物で躊躇があった。勤務先校の生徒向けには年齢が合わないが、と思いつつ、正月に行ったときに買って来た。以来、いろいろな機会に生徒向けの発信材料に利用した。格調は高くないし、内容も深いとは言えない。もともとは一人息子が16歳になったのを機会に、親として子供に人生について伝えたいことを書き溜めているうちに、著者のいろいろな出会いから、そして、そういう不思議さや世間の狭さについても論じられているが、出張中の機内で出会った編集者との関わりから、書物になったという。一人息子の二十歳の誕生日プレゼントになった、と最後に記している。

Seeligの本は質としては Paulosのものには到底及ばないものの、成り立ちから若い人たちを元気づけるものであり、また、アメリカと（特に最近の）日本との間に極めて大きな社会的な意識の差があることに気づかされる。近頃の日本が、いかにも異様な国になっているように思われる。特に、第8章：Paint the target around the arrow がいい。Seeligは、ここで、competitiveとdrivingという仕事に向かう姿勢を対比して、後者を強調する。前者は（基本的に固定化された舞台上）他者を犠牲にして自分が勝つための競争的活動を指し、後者は、流動的な拡大する舞台を自らの動機に基づいて（ここが、drivingのゆえん）、他者と共同して自らも成長するという活動を指す。そのような成功事例を挙げながらの記述ではあるが、少し甘いような気はする。

若い人向けには、しかし、妙な競争心を焚き付けるだけのものよりは健全であろう。

Seelig は numerate か innumerate か？ この問いは易しくないが、numerate に分類するのは難しそうである。

160. (12.03.16) 以前(140回記事参照)にも触れたが、フーリエの数学についての原稿を用意や整理もせずに放置しっぱなしとはいかないとも思い、フーリエの評伝

Jean Dhombres & Jean-Bernard Robert : Fourier, Belin. 1998
ISBN 2-7011-1213-3

を拾い読みしている。この書物は、序文を寄せている J.-P. Kahane が、フーリエ解析の全体像を概説した本の中で言及しており、前から注意をしていた(107回記事参照。特に、後述の Jacobi の言説との関連もある)。入手したのは、しかし、ずいぶん前になり、その直後、京大の数理解析研究所であった数学史の研究会に嬉々として持参したことを覚えている。フーリエの「熱の解析的理論」の邦訳(未刊行)をしたN氏もご存じの書物であり、冒頭近くにあるフーリエの生地挿絵とN氏が実際に現地で撮影してこられた写真を対比して、二百年以上の時を経て、なお、余り変わっていないような景色に感服したような記憶がある。もっとも、そのときは居合わせたさる高名の科学史家から、この書物の著者の論述は概して感覚的で精密正確とは言い難く高い評価には馴染まないという趣旨のコメントがあり、そんなものなのかと思っただけ、ともかく、書物の厚み(767ページ)と重量だけでも相当のものではある。

こんな意見もあり、仏文でもあるので、もっぱら積ん読であった。フーリエの *Théorie analytique de la chaleur* を通読して、フーリエの議論の組み立て方の構造がわかったような感じがしてから、本書を眺めたところ、わたくしが留意すべきだと考えた議論を(恐らくはフーリエの手稿や予備的な出版物を参考にしてであろうが)丁寧に図示して説明しなおしており、Kahane が言及しただけのことはあると思った。携帯に不便にもかかわらず、拾い読みとは言いながらも、目を通し始めた所以である。

本書の構成は次のようになっている：

Préface de Jean-Pierre Kahane
I Les régimes d'un monde savant
II Les premières années à Auxerre
III Enseignement et engagement révolutionnaire
IV De l'Ecole normale à l'Ecole polytechnique
V L'expédition d'Egypte, le savant et le politique
VI Grenoble. Savant isolé, historien par devoir et préfet par fonction

VII Paris 1815-1830. La consécration scientifique
 VIII Le physicien-mathématicien de La Théorie analytique de
 la chaleur
 IX Un homme et la construction d'une postérité
 Epilogue Sévère de Fourier
 Annexes
 Chronologie (年表)
 Bibliographie (文献)
 Index (索引)

このうち、付録 (Annexe) はフーリエの著作 (VIII 参照) からの部分引用であり、Discours Préliminaires も含まれている (上記 Kahane の著書にも再録されている)。わたくしにも翻訳を試みたものがある。

フーリエの評伝は、いくつかある。元勤務先の蔵書はアメリカの大学の図書館で用済みになったものを (わたくしの在職中に) 購入したのもあり、定評あるものが東大数理にはあるのだが、年間数回しか首都圏に行けず、駒場に適当な時間に行けるのは稀有という状態が続いているので、browsing さえ果たしていない。いずれにせよ、これらは、やや古く、フーリエの数学者あるいは数理物理学者としての面に光を当てており、エジプト遠征やイゼール県知事時代のことには詳しくはないようである。

Epilogue が、いわば、著者らによるジョゼフ・フーリエという人の理解のまとめになるが、冒頭の節に (アクサン類省略！)

Peu d'anecdotes pour une vie riche en événements, peu de dialogues, peu de confidences, absence même d'évocation d'une vie familiale ou sentimentale, peu de réflexions philosophiques générales, de très rares références à la religion. Pas d'interrogations même sur le sens de son travail de savant ou de préfet. Fourier est un personnage sévère.

波乱に満ちた人生ながらも挿話なし、対話なし、心服なし、その上、家族や恋愛の人生の想起の欠落、広い哲学的内省なし、宗教への言及稀少。おのれの学者あるいは知事としての仕事の意義への懐疑の欠如。フーリエは厳固な人物である。

とある。stoïque ではなく sévère が使われているのはなぜかとも思うが、謹厳実直とか堅忍不拔という語が思い浮かぶ。それらでは適当ではないような気もして、sévère を「厳固」としてみた。

フーリエは、余り幸福な人生をおくったようには思われませんが、一方、何人か高名な学者を思い浮かべてみると、フーリエは西欧近世のある種の人たちの規範型に属するのではないかと、とも思われる (それどころか、つい最近まで、規範型として意味をもっていたようにも思う)。

その上、哲学を語らず宗教に触れず、という評に関しては、表面的にはそうなのかも知れないと思うものの、たとえば、「熱の解析的理論」の序章は、人はどう生きるべきか、という意味での哲学とは縁遠いかも知れないが、「神の御業」を解きほぐそうという意味では、単純に「科学」的な考察であるとは言いきれないのではないだろうか。ここは議論が要るものと考え。いずれにせよ、フーリエの育ち（フォルマシオン formation）が関わっている部分はあるのだろうが、かれは「神」に関しては不可知であっても否定していたわけではなく、「(理性)神」の働き（「神の御業」としてみたが）は観察や実験で確認できるし、数学で表現すべきであると序章で言っているように思われる。

しかし、皮肉なことに、本書の著者たちは、Epilogue で、フーリエの死の直後に、ヤコービからルジャンドルに充てた書簡の有名な一節を引用している（ケーニヒスベルク、1830年7月2日）。著者たちが引用しているのは、

[Mais M. Poisson n'aurait pas du reproduire dans son rapport une phrase peu adroite de feu M. Fourier, où ce dernier nous fait des reproches, à Abel et à moi, de ne pas nous être occupés de préférence du mouvement de la chaleur. Il est vrai que M. Fourier avait l'opinion que le but principal des mathématiques était] l'utilité publique et l'explication des phénomènes naturels [; mais] un philosophe comme lui aurait dû savoir que le but unique de la science, c'est l'honneur de l'esprit humain, et que sous ce titre, une question de nombres vaut autant qu'une question du système du monde. [Quoi qu'il en soit, on doit vivement regretter que M. Fourier n'ait pu achever son ouvrage sur les équations, et de tels hommes sont trop rares aujourd'hui, même en France, pour qu'il soit facile de les remplacer.]

[しかし、ポアソン氏は報告中に、故フーリエ氏の巧緻さを欠いた（＝不躡な）句、すなわち、われわれ、アーベルと私、に対する、熱運動に専念しようとしないうという非難ですが、これは再録されるべきではなかったのではないのでしょうか。確かに、フーリエ氏の見解では数学の主要目的は] 公共的な有用性と自然現象の説明です [が、] 氏のような学者ならば知っていたはずのことですが、科学の唯一の目的は、人間精神の名誉であり、この資格において、数論の問題も世界の成り立ちの問題も同じ価値があるということです。[いずれにせよ、フーリエ氏が方程式についてしか仕事を完成させられなかったことは心から惜しまれなければならないことで、実際、このような人物は今日フランスにおいてさえ大変稀で、簡単に代わりが見つかるというものではありません。]

である（ヤコービ全集、第1巻、pp.454-455）（ただし、[]内はわたくしが、もとの書簡から補った。ヤコービの全集からコピーを作り、送ってくれた九大マス・フォア・インダストリ研究所の友人に多謝）。

科学の唯一の目的は人間精神の名誉である

というのは有名な句で、ヤコービが最初に述べたのかどうかは知らないが、文脈から言うと、当時の学者の間では常識とされていたのかも知れない。だが、この句は単なる自己正当化に墮する危険性の高いものでもある。なぜ、数論と熱学や有理力学が人間精神の名誉の上で、同等になるのか。つまり、そこには暗黙裡に、「数」も「自然」もともに（「神」の）「被造物」であるという思想か、あるいは、「数」の方がアイデアとしての純度が高い、つまり、より根源的だという思想があるのだろうか。

なお、この句は、「純粋数学」をなぜ研究するのか、という問いに対する答えとして挙げられることもある。だが、わたくしは、それでは答えになっていないと考える。純粋数学は役に立たない、いや、そもそも立つべきでない、研究は目的として自足しているのだ、なぜなら、人間精神云々…、という議論の運びになることがあるが、これで仲間内以外の人たちを納得させるのは不可能だろう。

数論に限らず、純粋数学の対象は、しかるべき抽象度のもとで極めて基本的なものである。純粋数学者の美的な感覚が、理由は何であれ、純粋数学的对象に美を見抜くとき、それはまさしくアイデアに触れたに違いないのだが、しかし、それが目的で（純粋）数学的对象と取り組んでいると考えるのは一般的ではないだろう。おそらく何かに惹かれて、まあ、数学のある断片と取り組むわけだが、「純粋数学」の場合でも、そのこと自体に意味づけを求めることはできないのではないか。少なくとも、わたくしは「人間精神の名誉」などという尊大な言い回しは好まない。言えることは、

純粋数学者は眼前の応用的課題に答えようとして数学をするのではないが、しかし、かれらはおのれの興味に任せながらも、ここが数学の不思議な点だが、本質的な意義のある結果を得るまでは活動をやめることができないので、当然の結果として、応用を意識もしていなかった純粋数学的な数学理論は、その基本性ゆえに、有用でないということが不可能なのである

ということである（拙見である、念のため）。言うまでもないことだが、この文言には、応用数学と純粋数学とどちらが優位かなどという発想は含まれていない。応用的課題に日常的に取り組む「応用数学者」も、基本性を欠いた目先の結果だけでは生きていけないだろうという含意がある。すでに、フーリエにもわかっていたはずのことで、現実には、妙な党派性が現われがちのところではあるが、ヤコービのいう「人間精神の名誉」という文言は、少なくとも文脈上も、不適切であったと言っているのではないだろうか。

付記（平成 24 年 5 月 19 日）：なお、107 回記事の付記では、Jacobi の言説の後で、ぐだぐだと述べてもいる。関連して思いだしたのだが、数日前、来訪した元官僚氏との雑談である：例のバブル崩壊の直前の金融機関の採用活動で、理系の学部や大学院生が多数吸引され、それによる技術開発にも影響はあったかもしれないが、そのような活動は、金融機関だけでなく、多くの企業におけるマネジメント部門に数学的素養のある人材が必要だったからのはずなので、そのこと自体は非難できない。デリヴァティブがどうこうということではなかったはずだというわけなのだが、当時の金融機関の経営者にどこまでわかっていただろうかとは思ふものの、それは彼らだけの話ではなかった。とにかく、企業サイドで、しっかりとした工学マインドの人材を経営管理部門に備えたいと考えており、また、それが実は、どんな時代でも必要なことであることを理解していたのであれば、理系卒業生をあさるのは緊急避難的措置なのだから、本来は、財界などの経済団体が日本の高等教育機関、特に、いわゆる文系学部等に、数学の入試必須化やカリキュラムの数理化を要求するのが筋ではなかったか、というような話をした。考えてみれば、四半世紀昔に近いことであり、当時に、まっとうな対応をしていれば、例えば、昨年の東電の福島第一原発の事故は津波による破壊だけに留まったかもしれないと思う [もっとも、大体が、四半世紀前、地方の企業城下町をつぶし、地方の共同体をこわしてまでして、首都圏近郊に工場を移す「大」企業が続出した理由が、当時はわからなかったのだが、今にして思えば、東京電力の原発群による首都圏のエネルギー供給余力を頼ったのだろう。]

161. (12.03.28) 少し前の日経の書評欄に紹介されていて、気になっていた

小塩隆士：効率と公平を問う。日本評論社、2012

ISBN978-4-533-55679-9

を眺めている。効率性と公平性が完全にトレード・オフの関係にあるのかどうかは一概に言えないことかも知れないが、一般的には、何がしかについての現下の不平等から、公平性が平等性への過程を探るのに対し、効率性は最適状態への接近を目指すとして了解してよいだろうから、確かに、方向性の相違はある。著者は、経済学の立場で、この方向性の相違がどのようなものであり、社会政策、経済政策において、両者の関係がどのように現われているかを、日本の諸制度、税制、社会保障制度、教育制度を中心にして、論じている。

著者によると、経済学においては

効率性は「限られた資源をいかに効率よく配分するか」、公平性

は「社会で生まれた所得をいかに公平に分配するか」

という観点で扱われるものだという (p.i)。両者は必ずしも両立しないからこそ、

両者のバランスをどのようにしてとるかが政策的にも重要になる
し、研究テーマとしても興味深いものとなる

(p.i) つまり、本来の経済学 (political economy) にとって本質的であるとい
うわけであろう。

目次は、次の通り：

- はじめに
- 第1章 効率性と公平性
- 第2章 公平性の受け止め方
- 第3章 日本の再分配の問題点
- 第4章 効率性と公平性から見た教育
- 第5章 世代間のゼロサム・ゲーム
- おわりに — 本書のメッセージ

丁寧に書かれた本で、「はじめに」で本書の概略が章ごとに述べられ、「おわ
りに」で、改めて内容の復習が示される。「メッセージ」とあるが、明確にこ
うしろとは述べていない。しかし、日本の社会政策が人口増を前提に設計さ
れてきたこと、その前提が崩れても、なお、それを改めようとはしてこなかつ
たこと（第1章第5節の「私たちが行ってきた無責任な選択」）から、このま
までは持続不能（つまり、滅亡）となってしまうのだが、うまく乗り越えら
れるだろうか、と、東日本大震災の直後の「絆」感を思い起こしながら、述
べている。

各章は、それぞれ3から5の節に分けられ、議論的が絞られている。た
とえば、第4章なら、

- 1 経済学は教育をどうとらえるか
- 2 教育に市場原理は導入できるか
- 3 学校は教育にどこまで貢献できるか
- 4 子供の学力は家庭で決まる — 中学2年生の数学の決定要因
- 5 子どもの人生は家庭でどこまで決まるか

となっている。

第1章は概説であるが、非常に優れた論考だと思う。節分けは

- 1 経済学はなぜ嫌われるのか
- 2 効率性と公平性をどうバランスさせるか
- 3 世の中の幸せをどうとらえるか
- 4 なぜ人々は公平な社会を望むのか
- 5 「大きな政府」と「小さな政府」のどちらがよいのか

となっている。第2章、第3章と併せて読むと、日本の政策決定者たちは党
派性に捉われすぎているのではないか、かれらに実証的にものごとを判断す

る習慣が身に着いているのだろうか、一体かれらは何を見ているのだろうか、疑問を覚えてしまう。かれらに、政府機関などが集めた調査データから問題が見えてこないとしたら、その鈍感さに驚く。

第4章については、現在の勤務先のレゾンデートルとも関係しており、興味深い。しかし、実証的調査自体が困難でもある。そもそも教育を経済学の対象というか経済学を成り立たせているような種類の哲学の管轄下に収めて論じようとするとき、教育の特徴をどう把握するのが正しいか、ということから始めなければならないようである。

まず、効率性の観点からのアプローチを示しているが、人間を労働力を提供する一種の資本と考える「人的資本論」というのがあって、「教育を受けることはその人的資本を高めるための投資とみなされる」のだそうである (p.116)。しかし、教育には、「外部効果」とよばれるものがあり、

自分が身に付けた専門知識は社会の経済活動に貢献し、世の中の
経済的な便益を高める

(p.116) ことになる。

ところが、人々はこの外部効果まで意識しないで教育をどこまで受けるかを判断する。そのために、世の中の教育の需要水準、そしてそれによって決まる教育の供給水準は、社会全体にとって最適な水準を必ず下回ることになる

のだそうで、前段は概ねその通りだろうとは思いますが、後段の結論に至る論理は述べられてはいない。さらに、若干の議論を重ねて、

政府がなんらかの形で教育に関与してくるのはそのためである

のだという。以下、いくつかの鍵語の羅列になるが、例えば、「ピア効果」という難しい話題が現れる (p.122)。実際、「教育」は、いろいろな意味で極めて複雑な個性の持ち主の集団に対して提供されるものであり、

教育というサービスが、学校や教員による供給だけでは完結せず、
消費者による関与が一種の階層性を帯びるということも決して無
視できない点である

(p.134) という指摘がある。次いで、(本来は、各教育機関あるいは過程の評価の問題として) 教育の付加価値の問題が論じられる。そして、実証的な調査の限界であろうとは思いますが、授業時間数の多寡とか生徒の出身家庭の教養水準とかがほぼ決定的な効果を齎しているという、ある意味で、予想通りの「結果」が導かれている。当然ながら「ゆとり教育」は、実態に基づかない夢想的な政策であったことが、わざわざ調査するまでもなく、明らかになったわけである (ただし、わたくし自身は、いささかなりとも、「ゆとり効果」の

提案に含まれていた高校教育の改訂に組みしようとして、大学入試の出題方針をいじくったことがある)。

「教育」問題の難しさは、例えば、直近の「大学入試ランキング」のようなものにも表れている。前述の「外部効果」に思いを及ぼすことのない情報が行き来しているというのが実情だろうが、この点では、進学塾の姿勢は、まあ、理解ができるが、メディアの流す情報はそうではなくて、犯罪的であると言ってもいいかもしれない。

主要な言論機関が、大学入試結果を嘸し立てるのはどういうことか。それも、本紙ではなく(本紙は高校野球その他の購読者一般向けの記事は載せるが)系列の週刊誌で、「高校ランキング」などを載せるのである。実際、この辺は、理解に苦しむ点が多く、例えば、主要メディア側に、日本の将来像に対する何がしかの見識があり、その観点で、いわゆる「優秀層」の挙動に関心を持っての、(系列週刊誌を利用しての)メッセージ発信というのであれば、そういうことかと理解しようと思いたい。だが、実際の「ランキング」は余りにも粗雑で、到底、国や世界の未来を担おうという青年の育成に求められるであろう大局観や「外部効果」を配慮した、敢えて言えば、社会的に意義ある高邁な意図を嗅ぎ取ることはできない。メディアの目先の商業的動機以外に何かあるのであろうか。

まあ、この辺は、粗雑な評価だからこそ、現在の勤務先を含め、俗にいう進学校の多くが、ある意味で(本質的な社会的貢献に関しての不備を問わずに)過大な評価を受けているということにもなるので深入りはしたくないが、要するに、たかだか小市民(プチブル的)理想(それも日本版の偏頗な形のもの)をメディアに強調されているだけのことで、学校の「格付け」に関して、こういう不適切なメッセージを主要メディアが発信し続けているようでは国は持つまいと思わざるを得ないし、まさに、こんな状態で半世紀を超えてきたからこそ、今日の日本の体たらくがあるようには思う。ナイーヴなわたくしも、流石に考えることもあって、とは言え、ここでは一番の問題点には触れないが、意見はある。推測に任せざるを得ないことながら、このテーマは、経済学的にも、社会学的にも、政治(学)的にも、極めて興味ある部分ではあるまいかと思う。

それはそうと、日本の教育政策の立案者に、国際的な視野という文脈がなかったことが惜まれる。「ゆとり教育」の結果として各種の国際的な調査で日本の児童生徒の成績が振るわなくなったことが問題だと言っているわけではない。もちろん、そのことは問題視に値するが、政策策定において、日本で教育を受ける人々の国際的な地位についての考えがなかったことが惜しかったと言っているのである。

どういうことかと言えば、教育的成果は、家庭の教育的素養あるいは教養水準に依存することが極めて大きいという、身も蓋もない調査結果が著者たちにはあり、それは予想外とは思えないのだが、調査法とか、その他、文句

を付けたい人はいるだろう。とは言え、著者たちの調査に加え、各種の国際調査を念頭に置くと、実は、以前から予測が付いたはずのことであり、日本の教育改革も、この「事実」を前提に、かつ、国際的な視野のもとで、組み立てられるべきであった、と、わたくしは思う。要するに、日本の国内の教育水準を低下させることには（日本の国際的存在観の低下を招来させるだけのことから）全く何の正当性もないだけでなく、他方、もし、日本の国際的地位ということが念頭にあっての教育改革であれば、上述の種々の調査が示しているように家庭の教育環境こそが子どもたちの教育効果に強い影響を与えるのだから、日本の教育水準を高く維持し、それを普及させることこそが、日本の一般家庭の教育水準を高めて行くことになる。さればこそ、爾後の国際環境における日本人の一般的な地位の保障になることを担保するように、教育改革は進められなければならないということである。

この本については、第5章を読み終えてから記事をアップするつもりであった。

数学会の年会を覗いてみようと思い、東京に出てきたが、本書は携行しなかった。昨晩は、かつての数学科の同級生たちと久しぶりに食事をした。年齢的に現役という人間は少なくなったが、まだ社会的関心は残っており、現在の文部科学行政において実は高等学校教育の部分が一番「弱体化」しているという話があった。相対的なことなのであるが、学術研究や高等教育（大学）、義務教育（小学校・中学校）に比べ、後期中等教育（高校教育）への注力が貧相だということであり、文部科学行政の当事者たちも気づいていないわけではないそうである。高校授業料の無償化などの話ではなく、質的な面でのことである（無償化の問題は、小塩氏の書物の第4章では明示的には扱われていないことであるが、効率性、公平性のいずれの点からも検討の余地が大きいものであることが推察される）。

例えば、高校の数学教員に教員養成学部系の人が増えているけれど、教員養成学部のカリキュラム変更の結果、かれらの数学的知識が質量ともに不足するようになり、しかも、ここが重要なところだが、就職後に数学の勉強をするために必要な基礎的な訓練ができていないことが懸念されているそうである。実際、指導要領の改訂に追従できない教員が多いのではないかと、という危惧が強い。これらは主に公立高校の場合の話ではあろうが、いずれにせよ、世代交代で教員間の文化の継承が失われると、急速に高校教員の知的素養の構造が変質していく可能性は高い。このことは数学教員だけのことではない。さらに、別の人から、教育実習に行った学生から聞いた話として、教員養成学部系の実習生の関心が公立高校教育界での管理職ポストへの昇進機会に集中する傾向があることが紹介された。専門教科に関する自己研鑽が特に若いうちは第一の関心事であるべきであるのに、職業的な規範意識の醸成という点で、教員養成学部系の教育に（恐らく、数学教員に限らないことだろうが）欠陥があることが見えているわけである。他方、森重文氏が挙げた京

大理学部と大阪府教育委員会との取組もあるようだが（131回記事参照）、教員という総合的な人格が要求される人たちをどう確保して行くのかは、実に、大事な話である。

162. (12.04.01) 三月末の東京滞在の最終日の午後は、暖かい日差しに誘われ、飯田橋から皇居東御苑まで足を延ばした。まあ、途中は跳んでいるので、実は、オアゾで恐竜の化石骨を眺め、蕎麦を食べ、そして、(一応)洋書を二冊購入してから、皇居まで行ってみたのである。さて、その洋書なるものであるが、一冊は

A. Doxiadis, C. Papadimitriou, A. Papadatos, M. Di Donna:
Logicomix
Bloomsbury, 2009. ISBN 978-1-59691-452-0

という graphic novel、要するに、劇画であるが、上質紙に全編彩色という贅沢なもので、重量がある。目次は、

Overture
1. Pembroke Lodge
2. The Sorcerer's Apprentice
3. Wanderjahre
4. Paradoxes
Entract
5. Logico-Philosophical Wars
6. Incompleteness
Finale

そして、補遺

Logicomix and reality
Notebook
Bibliography

となっている。索引はない（目次も別立てになっていない。上記は拾い出したのである）。

実は、この本は、数学書のコーナーの数学基礎論・論理学の棚の前、Russel & Whitehead の Principia Mathematica の復刻版の傍に置いてあった。最初目にしたときは、このプリンキピア・マテマティカの解説かと思ったが、全く無関係ではないとは言うものの、2009年度のTime誌ノン・フィクション上位十冊、Washington Post紙2009年度最優秀伝記、Financial Times紙2009年度の本などと仰々しく裏表紙に印刷してあり、開いてみると、オールカラーの劇画という次第で、びっくりであった。

最初の数ページで、著者の一人 Papadimitriou が計算科学者であり、ホームページにより、本書に邦訳が予定されていることがわかった。さらに、

Doxiadis や、本書のホームページもあり、たどって行くと、1001 comics you must read before you die などというサイト もあった。

話の組み立ては、著者たちが「数学の基礎の探求」を劇画化するにあたり、1939年9月ヒトラーのポーランド侵攻の三日後に Bertland Russel がアメリカの大学で講演（標題：the role of logic in human affairs）の機会があったというところから始まる（Di Donna はフランス人とあるが、残りの著者たちはギリシア人であり、著者らの工房はアテネにある）。バートランド・ラッセル（1872-1970）を主人公に選んだ理由について若干の議論があり、論理学者と狂気の関係の示唆も論じられる。講演当日に英国はドイツに宣戦布告をしており、講演会場にラッセルが着いたときには入り口に孤立主義者がピケを張り、講演を取りやめ、「イギリスの戦争」へのアメリカの参戦阻止の活動に加わるよう要求されるが、講演を聴けばわかると彼らに説き、講演へ出席させる。そして、ラッセルの講演が第1章以下になる。

講演内容については、Overture にもコミックゆえの虚構があることが述べられ、また、Logicomix and reality でも注意されている。実際問題として、取り上げられている話題は、到底1時間講演に収まるようなものではなく、また、344ページのコミック本一冊に収まるものでもないようではある。第1章は、幼時から青年期まで、ユークリッドの原論との出会いと体内を流れる狂気の素質への自覚が主な内容か。第2章は、ケンブリッジのトリニティ・カレッジにおける勉強、数学の基礎の脆弱さの発見、Alfred Whitehead との出会い、最初の妻の Alys との結婚だろうか。第3章は、遍歴時代とあるが、新婚旅行を兼ねての大陸旅行の体裁で、論理学上のビッグネームを次々と訪問する。虚構が多いようであるが。まず、イエナに Gottlob Frege を訪ね、ハレではすでに精神の平衡を失った Georg Cantor に会い、パリでは直観主義者の Henri Poincare と形式主義者の David Hilbert に会い、そして、Hilbert の問題（第2問題：算術の公理の無矛盾性の証明）を聞いたことになっている。そして、Mrs. Evelyn Whitehead との出会いも。

第4章が Russel Paradox と、それを乗り越えようとする苦闘、Principia Mathematica 3巻本に至る Whitehead との共同研究のことが描かれる。Alys との別れ、Evelyn への恋の不首尾。ラッセルのパラドクスは、自己言及に基づくもので、街中の成人男性は髭を自分で剃るか、（ある一人の）街の床屋で剃るかどちらか一方でなければならない、とするとき、この床屋はどうすべきか、という形で紹介されている。床屋も街の成人男性であり、自分で剃らなければ、床屋、すなわち、自分で剃らねばならず、床屋で剃るとすると、すなわち、自分で剃ることになるから、床屋で剃ってはいけないことになる。この矛盾の深刻さは、日常語のレベルでは明らかではないのだが、ナイーブな「集合」概念の不備を示すものであり、この概念を基にして数学の基礎を構築しようとしたフレーゲの思想の破綻を意味するものであり、その延長から出発したプリンキピア・マテマティカは、タイプ理論のアイデアの展開に

よりこの矛盾の克服に努め、一応の脱稿に十年の事実を要することになったというわけである。ウィキペディアに拠ると、ラッセル・パラドクスは、ラッセルからフレーゲへの手紙に最初に述べられ、その後出版されたフレーゲの著書 *Die Grundgesetze der Arithmetik* 第2巻 (1903) の補遺で内容が公表されて、広く世に知られるようになったというのであるが、このフレーゲの著書自体が、一種のパラドクスになってしまったとも言える。

Entract で、Papadimitriou による *Logicomix* の狙いについての補遺があり、この劇画の副主題として、主題、すなわち、数学の基礎の探求、論理学者と狂気を補うものとして、アルゴリズムを下敷きにして、地図製作者というアイデアが加えられる。そして、この劇画のもう一方の基調がアイスキュロスのオレスティアであることが明らかにされる。つまり、論理学の基礎の探求は、オデュッセイであり、子殺し、夫殺し、母殺しは、パラドクスというわけだろうか。最後に、アテナイによる審判が、調和と民主主義と来るはずだというのが、そこは劇画の本筋では示唆するのみである。

第5章は、Ludwig Wittgenstein の登場であり、かれの Russel 批判や *Tractatus* に至る哲学話題、真実へのアプローチと論理学との関係についての師弟の見解の相違が論ぜられると言うべきか。この章は、第一次世界大戦、ラッセルの反戦運動と下獄、Wittgenstein の軍役志願と生還、他方、Whitehead の子息 Eric の空軍志願と戦死、など、エピソードに事欠かない。だが、わたくしに特に印象に残ったのは、発作で生死の境を彷徨う Evelyn が

Please... help Eric face my death like a man !

と Russel に言うところである (p.322)。以下、

And this made the encounter with death, this memento mori ...

... An occasion for a surprising new outreach to life.

と続く。次ページ (p.334) にさらに詳しいイメージが描かれているが、「死」との直面の仕方に、彼我、つまり、西欧と日本の文明の違いが表れているように思われる (なお、第146回記事参照。西欧圏で、出産に家族が立ち会うのは、「生」への直面の仕方か。最近の日本の産科での傾向は、本来の日本的なものとの関わり方への哲学的批判を含んでいるのであろうか。)。敢えて言えば、感情だけでなく、論理的に「死」を必然として受け入れるという習慣の有無だろうか。この「経験」が反戦運動や Eric の志願に関係するのかどうかは明らかには描かれてはいない。

第6章は、戦間期の束の間の雰囲気とナチスの台頭による不安とテロや混乱の増幅、そして、講演会場に戻る。トピックとしては、Kurt Goedel と Johannes von Neumann の登場である。Goedel による Hilbert の問題の否定的な解決 (算術の公理の不完全性) の講演会場に、Hilbert も Russel もいたことになっており、また、このときに von Neumann が

It's all over !

と Russel の脇で言ったことになっている。悄然と講演会場を去る Hilbert の絵はよく描けている（が、実際は、出席機会はなかった）。他方、Witgenstein も Russel も初等教育に身を投じた時期であり、いずれも失敗に終わった。Russel のアイデアは、後のリースクールにつながるものだと評価されているそうであるが、劇画の著者たちの評価は（子どもという存在を自分の脳内の像だけで把握しているとして）手厳しい。Russel の講演自体は、孤立主義者を含む聴衆の一人一人に、ナチズムや Kommunismus が必然的に導くであろう人間の自由の抑圧について述べ、この事態に対処するにはどうすべきか各人が答えを出すべきだということと終わる。

Finale は、オレスティアの舞台である（著者チームの一人が出演している）。

なお、Alan Turing は直接は登場しないが、不完全性や不決定性を前提に、決定可能な命題を解決するアルゴリズムを実行する器械としての計算機のアアイデアと、von Neumann による実際の製作とが、Papadimitriou の口から述べられている。

第二次世界大戦の大西洋における戦争という側面への西欧文脈での位置づけの説明として、こういう理解も可能だということがわかった。論理学者を巡る私的な狂気と、いわば、文明の狂気が対比され、文明の狂気に対するからこそ、反戦運動には意味があるのだが、それは、また、傍観ではなく、戦う反戦運動でもあるということだろうか。錯綜した矛盾やパラドクスが人生や世界の現実と言うことかもしれない。さらに、こう考えてみると、第二次世界大戦における日本が関わっている部分については、この意味での、近代の矛盾という観点での整理ができていないように思われる。論理的な意見ではないが、わたくしが思うには、彼ら西欧人からは、日本の文明は「戦勝」（日本の「敗戦」）によって、つまり、実質的に滅ぼすことによって、ようやく認知したものであり、インカやアステカと変わらないものなのではないか。我々にとって、それでいいのだろうか。

163. (12.04.14) 気づいてみれば、また新学年である。入学式だ、始業式だ、と行事をこなし、その延長上で、九重に来ている。たまたま、今年は気候が悪かったので遅れたという長者原の野焼きに遭遇したが、わたくしが別行動で九重に着いたからで、その見学が新入生の研修旅行に組み込まれていたわけではない。

陽光の中を九重、阿蘇、霧島といった九州の高原地帯をドライブすると、いつも、その程よい感じに九州に住んでいるということへの満足感を覚える。だが、地方の自動車道のパーキング・エリアの売店や山道の食堂などは工夫が足りないように思う。むしろ、この自然の程のよさと比べると、現代日本の発想の貧困さがどうしても露呈してしまうというべきかも知れない。先日、何かの機会に九州旅客鉄道の九州周回列車の話を目にしたが、自動車道も鉄道もうまく連携させて日本列島周回のプランを作り、例えば、新幹線と一部在来線、さらに、高速バスなどを組み合わせて、一か月くらいの旅行プラン

を世界中の「富裕層」に売ったらいいと思う。相応の水準の食堂と宿が、移動固定を問わず、開発されるはずで、豪華な食堂車と寝台車や、山の中の贅沢なホテルなどが成り立つようになるのではないだろうか。そして、そのおこぼれを我々地方の庶民も多少はいただけるのではないかというわけである。今のように、エサとしか言えないようなものを短い時間に掻き込むのがデフォルトになっているような、そういう鉄道や自動車による移動の構成は合理的なようでいて実は全く不自然で不愉快なもののように思う。

さて、九重に持参したのは、

加賀野井秀一：獵奇博物館へようこそ — 西洋近代知の暗部をめぐる旅

白水社 2012

ISBN 978-4-560-08186-0

である。また、勤務先系列の医学部新入生向けの授業をする機会が来るので、その材料にもなるかと思い、先日、天神のジュンク堂で見かけたときに購入しておいたものである。

基本的な理由は、今回は「メメント・モリ」(memento mori) というアイデアを表に出してみようと考えたからである。

なぜか。理由を説明してみたい。系列の医学部志望者とは限らないが、医学部の入試によくある口頭試問の練習台として、生徒の相手をするのがよくあるのだが、多くの生徒が、志望動機として、何がしかの個人的事情を述べた後で、

ですから、人の生命を救える仕事に就きたいと考えるようになり、
それで医師を目指すようになりました

などと言う。そして、大概の場合、わたくしは混ぜっ返して相手の困惑を引き出し、結果的に、もう一回来なさい、というようになることが多いのだが、混ぜっ返しに際して、

でも、人は必ず死んでしまうんだよ、遅い早いはあるかも知れないとしても、人の命を救うって発想は空しくないか？

というような問いを発したことはなかったと思う。わたくしが言ったのは、せいぜい、例えば、祖父母の病気を動機付けに使った生徒に対しては、

でも、老人の病気は完治ということはなく、いかに病気と折り合いをつけるかということだけしかできないんだよ。医師はせいぜいその手伝いしかできないと思うけれど、それでいいの？

というような問いを返した程度である。いずれの場合も何回かやりとりしている間に、何となく筋が通ったのか、志望の医学部には合格したように思う

のだが、センター試験を含むペーパーテストの結果が優先したのかも知れない。ただし、わたくしは、

人の生命を救いたい

という主張が不足だと（少なくとも彼らの面接試験の練習台を務めていたときに）考えていたわけではない。恐らく、何かのマニュアル本にあることであろうと思われ、本人の心底からの志望動機としての訴求力は十分とは言えないと思っていただけであろう。

わたくしも含めて、「人の生命を救いたい」という動機そのものをいかがわしいと思っている人ははいないと見てよいであろう。ところで、この文言の背後には、「人の生命は救うことができる」「人の生命は救うに値する」「人の生命は救わなければならない」等の発想があるはずである。そして、少し違う方向には「人は生きる権利がある」「人は生きなければならない」などの想念があるであろう。一方、人間も生物であり、必ず死ぬものである。生物限界に近いところまで生きれば、老いの問題に直面するであろう。とすれば、「人の生命を救いたい」という想いは「人はいかに死ぬか」「人の死とは何か」「人はいくつまで生きるべきか」という類の想念と密着しているはずでもある。

だが、本当のところ、「人の生命を救う」という想いは、少なくとも、我々現代の日本人一般には極めて浅薄なものであるかも知れない。確かに、医師志望者の場合、「人の生命を救いたい」という文言で

眼前の患者は、身体的な健康状態に問題があり、中には、生命の危機にさらされている場合もあるであろう。医師としての知識と技能によって、そのような患者を生命の危機から脱出させるということは、医師の職務として期待されていることであり、当然のこととして、そのような期待に存分に応えたい

ということを表現していると理解することができる。

しかし、現代日本には、「(日本) 人の生命」を相対化して把握することは不当であるような雰囲気がある。随分昔になったが、日本の旅客機がテロリストにハイジャックされ某国の空港に着陸させられたとき、当時の日本の首相は「人の生命は地球より重い」として、テロリストの要求に屈したということがあった。このテロリストたちは、その後、別の国で凄惨なテロ活動を行ったように記憶しているが、この件がひょっとしたら現在の世界的なテロの横行のきっかけになったかも知れないと考えられる節もある。当時としては、そこまでの予測や見通しはなかったとしても、今から思えば、必ずしも適当な措置ではなかったのではないか。

「人の生命は地球より重い」という命題が合理性を根本的に欠いているものながら、情緒的には不合理性を絶対化する効果がある。このような言葉を発した、この首相は、恐らく古今東西の哲学者の名前などには知悉はしてい

ただろうが、しかし、自らのものとして哲学をする、あるいは、ものごとを根源に遡って考えようとするという習慣は身に付けていなかったのであろうと推察される。実際、この首相は、日本社会の中での「秀才」中の「秀才」であったことはよく知られており、その政治行動についても気概があるとして評価されたことさえある。したがって、この件は、この首相個人の問題ではなく、要するに、現代日本が「生と死」の問題に対し、「生」を選ぶか「死」を選ぶかという二者択一問題の形でのみ応じてきて（応じられると思いついて）、常に、「生」に○を付けるという対応をしてきた表れなのであろう。このことは、直ちに非難されることは滅多にないだろうという意味で、極めて安易であるが、一方、浅薄でもあり、危険なことでもある。しかし、

現実に人間は死ぬものであり、それゆえ、いかに死ぬか、ということが、生きるということの意義をなすものだ

という、かつての日本にあったと思われ、しかも普遍性を帯びていた思想を、敗戦により、あたかも戦前の日本だけの特殊な思想であるかのように決めつけられ、否定されてしまった結果であるのかも知れない（つまり、日本以外の社会では、依然、生きている思想であろう）。

こう言ったことが *memento mori* を強調したくなった所以であるが、それは前回（162回）記事の Evelyn のエピソードを見て、わたくし自身衝撃を受けたからであり、そのことが、また、146回記事で論じたタイモン・スクリーチ氏の書物では、*memento mori* が、難船凶を説明する文脈で現われたことを、改めて思い起こさせてもくれたのである。つまり、*memento mori* とは、「この世のものはすべて有限の存在である」という命題に他ならないということの意味しているわけである。そして、*memento mori* をここまで抽象化してみると、日本の伝統文化に「盛者必衰の理」という言葉があっても、「死」とか「滅び」とかは、それらを事実として受け入れ論理で整理するのではなく、現象として傍観し詠嘆に流してしまっていることに思い当たる。*memento mori* には「覚悟」という語の方が近いのかも知れないとも思うのだが。

こんなことを考えながら、加賀野井氏の書物を眺めようとしたのだが、九重では思ったほど時間がなく、結局、後回しになった。改めて眺めているのだが、「メメント・モリ（死を想え）の伝統」という副題の付いた一章が同書にはある。ところで、同書にざっと目を通した感じで思うのであるが、同書は非常に話題豊富で有用なのだが、残念なことに、重大なポイントを外してしまっていると感じる。わたくし如きが口走ることではないのであるが、この本で扱われている材料は、西欧理解に不可欠なもののように思われるのだが、加賀野井氏は、いささかあらぬ方向への解釈に走りすぎてしまったのではないかと密かに思うのである。「獵奇」という字面に囚われすぎてしまったのかも知れないが、あるいは、著者は万事を承知の上で、一般向けの version として、本書を著したのかも知れない。だが、当ブログだけでも、すでに挙

げた162回、146回記事のほか、158回記事での話題も深い関わりがあり、いずれも、彼我の、つまり、西欧と現代の日本の文化の基層にある「生きるということ」への了解の差が反映していると思われる。

なお、162回記事の関連で言えば、フランス人の友人から聞いた話を思い出す。かれの奥さんが末期癌で入院していたことは知っていたが、亡くなったということを知ってお悔やみを述べたとき、奥さんの臨終の様子を話してくれた。いよいよ余命は後一日程度となって奥さんは病院から自宅に戻され、娘がパリから帰り着いて全家族が揃ったときに、一瞬目が覚めて皆にさよならを言えし、モルヒネが効いていて苦しまずに死んだのでよかった、と言ったのである。そのとき、臨終は自宅でというのがフランス末期医療の原則だとのことだったが、何とも壮絶な連中だという感想も覚えた。当時は知らなかったが、メメント・モリという文化的発想があったのではあるまいか。なお、64回記事参照。

実は、加賀野井氏の書物であれっと思ったのは、デカルトの頭蓋骨のエピソードを紹介した章にあるラテン語4行詩の扱い方である。デカルトの遺骸の数奇な運命については、この章をご覧くださいのが一番よいと思う。ところで、章の構成そのものは4行詩の解釈に依存しているのだが、その解釈に疑念を「感じた」のである。4行詩は

Parvula Cartesii fuit haec calvaria magni
exuvias reliquas gallica busta tegunt
sed laus ingenii diffunditur orbe
mistaque coelicolis mens pia semper ovat

となっている（同書 p.110）。わたくしは、ラテン語には全く疎いのだが、1行目の calvaria とか magni という語の見当は付くし、fuit も haec も見当が付く。もちろん、Cartesii もわかる。わたくしのフランス語の知識では、類推が効かないのは冒頭の parvula だけである。加賀野井氏の訳では、この行は

名高きカルテシウスのものなりし小さき頭蓋

(p.110) であり、それを、さらに、「デカルトのちっぽけな頭蓋骨」として、章のタイトルにしているわけである。ちなみに、加賀野井氏的全訳は

名高きカルテシウスのものなりし小さき頭蓋
その胴体は遠く仏蘭西（ガリカ）の地に隠されたり
されどその才、あまねく地上に讃へられ
その魂、今も天球に憩ふ

となっている（p.110）。ところで、calvaria と magni が並んでいることが気になって、文脈を示さずに、4行詩と1行目の訳について、ラテン語の知識のある[身内の人間]に問い合わせてみた。parvula は「小さい」という義とのことで、してみると、第1行は、語義としては、

小 デカルト (眼前たり) 頭蓋骨 大

という語順を、格の変化形によって、小が頭蓋骨に係り、大がデカルトに係ると関係づけていることになる。

この4行詩は、[身内の人間]の試訳では

この小さな頭蓋骨は偉大なカルテシウスのものであった。
残りの亡骸は、ガリアの墓に埋葬されている。
けれど、彼の天才への賞賛は世界にひろまっており、
その高潔な精神は、天上に交じわって、常に歓び躍る。

となる。つまり、章の標題は「偉大なるデカルトとちっぽけな頭蓋」とすべきであったようである。

この書物は、実際、非常に興味深い(仏語で, *très curieux* 好奇心をととても募らせる。ちなみに, *curieux* = 獵奇的)。しかし、このデカルトの章に見るように、どうも筆が滑っているような感も否めないのである。しかも、高名な哲学者の名前をことごとく多数挙げるには及ばない。本書で扱われた話題の多くは、肉と霊の対比、霊なき死体の機械論的認識、というような括り方で整理できるのではないだろうか。その意味で、加賀野井氏は、フランケンシュタインや、あるいは、人型作業ロボットについても論議の道を開いておくべきであったろう(158回記事参照)。そして、猥褻であるか、悪趣味であるか、あるいは、学術的であるか、宗教的であるかということは、本来、その上の言わば、表面的な夾雑物と解すべきものだったのであろう。獵奇性に振り回された結果、「西洋近代知の暗部」という過大な評価になってしまったのかも知れない。

問題は、われわれ(現代)日本人には、こういう括り方ができないことであり、表面的な夾雑物の前で立ちすくんでしまうということである。そして、「獵奇性」に流されてしまい、その向こう側が見えない…。

164. (12.05.05) 連休で一休み、溜りに溜まった個人的な宿題、要するに、種々の片づけなのだが、それに少しでも手を付けようとしつつ、茫然と立ちすくむばかり。未開封のままの封筒は処分する前に、中身を調べなければならず、全く進まない。雑誌や新聞類も未開封のものがあれば、目次は一応眺めてはいる。厄介なのは、学会誌の類で、この世界から隠棲している身としては最早不要なのだが、定期的に送られてきて未開封のまま溜まってくる。最近、ネットで論文が読めるようになっていたので、自宅からが無理なら大学にまで行けばいいのだが、その時間が捻出できないわけである。したがって、この辺りの事情には全く疎くなってしまっているが、今回、片付けの過程で、SIAM NEWS (45-2, March 2012) を眺めて、事態は容易ならぬことになっていることに気づいた。3ページに

Mathematicians Spark Boycott of Elsevier Journals

という記事があり、ケンブリッジ大学の数学者 Timothy Gowers が Elsevier という学術書出版社の学術誌購読契約の姿勢が不実だとしてボイコットを呼びかけているというのである。この出版社系の編集出版に一切協力しないという運動 The Cost of Knowledge 参加の呼びかけである。Elsevier はオランダの出版社であり、数学系の雑誌に関しても、近年、ドイツやフランスなどの伝統と権威のあるものの刊行権を獲得している。いわば、学術情報の寡占化が進んでいるわけで、大学図書館などは Elsevier などとの学術誌購読契約の交渉で苦闘してきた。実際、学術誌出版者の寡占化は、各研究機関の所属研究者の評価にも直結し、当然ながら、各研究機関の評判に密着している (Gowers の Elsevier 批判の中には、雑誌の impact factor への影響力も含まれている)。日本の大学の場合、研究機関は研究紀要を刊行しており、海外の場合も同様のところが多く、かつては紀要を交換するという形で少なくとも同一水準の研究機関同士の紀要は図書館に収めておくことができた。しかし、紀要の雑誌評価指数が高くはなく、したがって、紀要論文が人事で余り評価されないこともあり、機関所属研究者も紀要に論文を寄せなくなった。いずこの機関も紀要の水準を維持することが困難になったのである。学術誌は、紀要のほかに学会系のものがあり、これらは十分に権威はあるのだが、出版社系の学術誌の評価が高くなったのは企業努力の反映であったろう。だが、Elsevier は度を超しているというわけである。

さて、Elsevier Boycott については、引退の身であり「実害」が予測されるわけでもないので、早速、The Cost of Knowledge に賛同の署名をした (ただし、査読はしない、という欄にはチェックは入れなかった)。ネットで検索を掛けたところ、日本でも報道はされていたみたいで、Twitter の記事もあるようである。変わったところでは、学術情報流通ニュース (STIUpdates) 2012 年 4 月 11 日があり、わたくしが気づかなかただけのようである。ただし、The Cost of Knowledge の署名者で国内の日本人は少ない。Twitter の著者たちも署名はしていないようだ。

ところで、また、昔話であるが、四半世紀近い昔、日本の大手出版社が海外出版を心掛けていたことがあった。その頃、学術系の書籍刊行で名の通った出版社の関係者に、海外向けの出版の意志の有無を尋ねたことがある。もとより、文芸作品の英訳などを海外向けに展開したら、ということではなく、日本の著者の英語の学術書出版の一角に食い込んだらどうか、ということである。実際問題として実行する力がない、とのことであつたが、国内向けの権威ある著者の著書群と海外文献の翻訳紹介を主要なビジネスモデルとしてきた出版社には、もともと、海外で事業を展開するという気持はなかったのかも知れない。もちろん、私企業がどのような事業政策を採用しようと、それはそれぞれの企業の自由である。しかし、事柄の本質は、むしろ、文化・情報政策であって、科学技術文献の流通に特化して理解すべきことではない。このような大手出版社であり、しかも、周辺の著者群に日本の一流の研究者

があり、さらに、シリーズでそれなりの啓蒙価値のある書物を出版し続けているのに、国際的な事業展開を図ろうとしないことが、むしろ不審だったのであり、結局は、日本政府の、つまりは、日本国民の戦略観の不足から、このような活動に十分なインセンティブが与えられてこなかったこなかったからではないか、というのが、わたくしの感想であった。

村上春樹の翻訳がどうだ、とか、オタク文化がこうだ、というのとは違うので、これらはなくても生存に支障はない。ファンに任せておいてよいのである。しかし、基本的な科学上の知見や技術上の進歩は、死活に直結する。したがって、世界平和のためとか何んとか大仰なことを言うまでもなく、われわれ自身のために、日本からの科学上・技術上の新知見の発信を続け、世界の更新に貢献を続けなければならないからこそ、自前の発信手段を広く確保するための政策が重要なのである – 日本は世界の一員であり、他国と一緒に世界を作っているのであり、しかも、その際、独自の文化と歴史によって、特徴と意義のある貢献のできる国なのだから。だが、現代の日本を支配する考え方は、相変わらず、幕末以来の日本を世界と対峙して捉える見方であり、このため今世界で起きていることのうち、実に、多くのことを読みそこなってきたと思う。

そこで、Elsevier の件であるが、単純に、この出版社の事業政策の問題として理解してよいのかどうか。Elsevier が扱っている学術誌は、医学を始め、多岐の分野にわたり、しかも、重要度も評価も高い。先述の通り、古くから権威と伝統で君臨してきた学術誌の出版権を獲得した事例も多く、中には、国家権力の了解なしでは不可能と思われるものもある。このような西欧圏の大手出版社や学術誌の出版権の集約には、EU の文化政策が反映していないとは言えないのではないかと思わざるを得ないのだが、そこがはっきりしないわけである。もとより、そうだとすれば、Gowers の提起した Boycott 運動は早晚効果は収めるであろうが、その際、非 EU 圏の日本やアメリカなどはどうなるか。ここでは、それぞれの国、例えば、日本政府の文化政策・外交政策が（EU との交渉で）問われるわけである。この点で、不安なのは、上記の学術情報流通ニュースの扱いである。Twitter の著者たちも同様かも知れないが、十分な総合力を発揮して、事態を観察できているだろうか。自分のごく身の回りのことしか見えていないのではないだろうか、それが日本の常態とは言え、そのような感想を覚えてしまう。

なお、片付けの段階で、「學士會会報」892号（2012-I）に

上山隆大：グローバル化時代におけるアカデミアの行方

という記事を見つけた。直接 Elsevier の件と関わるのかと問われると検証は困難だが、底流には共通するものがあるようである。

165. (12.05.15) 勤務先校の図書館に自伝評伝の類をできるだけ揃えたいと考えているが、そのうちの一部は当方読了済みのものを引き取ってもら

えたらありがたいと思っている。とは言え、最終的な採用の可否は図書委員会の仕事だが、ともかく、そんなこともあって、本屋に行くと、自伝評伝の類の書棚は一応眺めてはいる。ついでに、書架を通り過ぎる間に予定外の書物が目に留まることもある。今回は先日は、天神のジュンク堂で

栗本慎一郎：ゆがめられた地球文明の歴史
技術評論社 2012
ISBN978-4-7741-5061-1 C3036

というのが目に入った。この著者の本は昔何冊か読んだことはある。大病を患い、家族の努力と本人の気力で回復したと聞いており、その苦闘の過程の映像が放送されたのに接したこともある。もともとカール・ポランニーの所説に基づいてとのことだったが、「文明」の栄枯盛衰に関心を持っていた人のように記憶していた。

本書は、一口に言えば、ゲテモノに分類されてもおかしくないものである。基本的な主張は、東西交通路は現生人類がユーラシア大陸に定着して以来確立されていたが、19世紀来「シルクロード」という政治的虚構のものが強調され、東西交通路としてはもっと重要なものがあったという事実が隠されてしまっており、そのため、「文明」が人類の病となるに至った本質がわからなくなっている、ということであろうか。つまり、文明の単一起源論の一種であるが、メソポタミア起源論というわけではない。

さりながら、恐らく、著者の根本的な立脚点は正しいだろう。それにもかかわらず、あるいは、それゆえに、細部の議論が雑というか乱暴なので、著者の主張の大局性や俯瞰性を評価できない人が多いのではないか。

著者は、中央アジアから南シベリア、さらに、北満州など北東アジアに至る草原地帯を重視するのである。現在、その地域に中心を置いた強力な政治勢力は残っておらず、域外から勢力を伸ばしてきたロシアなり中国なりが支配しており、ますます実態は分かりにくくなっているが、ロシア側には、それでも地道な研究がかなりあるらしい。とまれ、ロシア共和国は時差があり、ソ連時代にロシア化が進んだと言っても、地域性は尊重されてきたということだろう。

他方、現代中国には時差はなく、シンガポールも北京時間である。この意味では、漢族には、地域性・歴史性への関心はもともと強くなかったことが推測され、したがって、中国側での地域性・歴史性の保全は不足していただろうという予測は付く。その上、実は、本書を読んで腑に落ちたところが一か所あった。それは司馬遷の史記および前漢武帝の位置づけである。いわゆる中国史が、秦代以前は信用できないことは今日ではよく知られていると思われるが、はるか後年の清の統治構造の話の思い起こし（132回記事参照）、秦が実質的に中央アジア起源の遊牧民帝国であったとすると、前漢も武帝以前は匈奴の藩屏国家であった蓋然性は高いと思われる。実際、本書には、そういう趣旨の記述があるのである。ただし、史記では、漢族が遊牧民に対し

て自立的な経済力を備えるに至った事情は強調されてはいないだろう。東アジア一帯の文書記述で漢字が用いられるようになる経緯も論じておくべきであろう（なお、26, 28, 36 回記事参照）。

一応、目次を示す：

- はじめに 歴史の真実を知りたい人のために
- 第1章 始まった栄光と苦難の道
- 第2章 移動と遊牧と宇宙観と文明の本当の始まり
- 第3章 世界史の柱・西ヨーロッパ
- 第4章 「遅れていた」地域・西ヨーロッパ
- 第5章 アジアの共生的「発展」

各章には細かい小節がある。なお、本書は体裁以上に真面目な本であり、6ページにわたる索引が付されている。

「はじめに」に著者の考え方の基本が述べられている。第1章の冒頭は定義である。すなわち、

… 一定の時間的継続を持ちいくつかの文化と地域をまとめる諸文化の総合を文明という (p.20)

そして、

その総合や統合、時には統治のあり方は文明の性格の重要な要素であ[り、]… 宗教と交易のあり方は普通、非常に密接なものであって、そのことは王や皇帝の統治の基本にもおおきくかわるものである (p.20)

と言う。また、

文化のほうは、むしろ、広がりよりもまとまりや深まりを持つもので、かつ時間的には文明より長く、時には永遠に続くものだ (p.21)

と言う。例示をしないで、この部分だけ引用するのも変ではあるが。

しかし、言葉を明確に規定しないで議論に入ることにはできないのだから、この著者の姿勢は当然のことなのではある。

それで思い出すのだが、先日、勤務先校の学園文化祭があり、さる高名な経済系教育文化人を講演者として生徒会が招いた。なかなか元気のよい話術を展開したが、鍵となる概念語の定義がなく、また、論述の方向性を示す価値観についての議論を欠いていたので、結局のところ、講演者のファンであるかないかで印象がまるで違うということになったのではないかと、わたくしは考えている。

本書の場合は論述の方向性を規定する著者の姿勢は「はじめに」で明記されていると言えよう。ただし、この段階で反発を覚える人もいるには違いない。

著者の主張については、アシュケナーズの起源については何とも言い難い(人数の多寡に拠らずに、セファラディンの方が正統的だということなら、そうかもとは思うが)。他にも、気になる細部は多々ある。しかし、「シルクロード」はなかった、あるいは、東西交通の主要路は別にあったという主張は、基本的に首肯できるように思う。環境条件の悪いところに交通路を開くことが、そもそも不自然だからである。そして、中央アジアに主要な帝国があり、文化的な淵源を共有する連中が、メソポタミアに都市文明を築いたというのも、もっともらしいとは思う。ところで、かつての東西交通路の主流は、今日なら、シベリア鉄道やアジア・ハイウェイが通っているのではないかと、思ったが、ネットでは十分に確認できなかった。現代の技術をもってしても、かつて交通路が確立していたところの方が建設も管理運営も楽で自然だからである。この点でも、やはり、「シルクロード」の方が歩は悪そうである。

読み方が雑なせいも、雑な印象しか残っていないが、中央アジアの「キメク汗国」の重要性の指摘に伴い、この「キメク汗国」が高句麗と同根であったらしいとのことだから、韓半島の動乱も西欧での民族移動も確かに連動しているわけである。わたくしは西から東まで民族移動はつながっているものと中学の世界史の授業の頃から思い込んでいたが、そうは思っていなかった人の方が多かったようである。

朝鮮関係では、著者は「百済」は「クダラ」、「高麗」は「コマ」と読むべきことを強調している。理由は、日本で古来からそう呼んできたからと言うのであるが、かねてからのわたくしの疑問は、「唐」はなぜ「カラ」であり、「呉」は「クレ」なのかということである。「唐」を「カラ」と読むのは、多分、「韓」と「唐」との混用ではないかと思うのは、「唐津」の例を合理的に考えるとそうなるからである。「呉」の方は、海路が違うのではないかと。東シナ海経由なら長江下流域やさらに南部から九州に到着するのは、韓半島沿いより容易で日数も掛からなかったと聞く。

「百済」の方は、実は、仏教徒の一団として渡来した(「百済」系)一族がおり、かれらは仏教を奉じながら、当時の日本の支配層と交替していったのではないかと、という風にも思われる。考古学的知見では、社会の多様性まではなかなか読み切れないのではないかと思われるので、一次史料があればよいのだが。騎馬民族説と言うわけではないが、漢族ではない、しかし、朝鮮系を含む北方系の、仏教徒の一団が渡来したのではないだろうか。それ以前より韓半島からは何回も渡来があったろうが、仏教を奉じて来た渡来回数は多くはなかったろう。

日本史で、仏教伝来というと、つい知識としての仏教が経典類の到着と置いてしまうが、よく考えてみると、大勢の人間を意味していなければ、定着には至るまい。つまり、何世代かにわたっても仏教の諸儀式を執り行うことができたほどの大集団が到着していたはずである。規模の詳細は不明だが、民族移動と言ってよいだろう。要するに、家族を伴う準軍事集団が仏教とともに

にやってきたわけであろう、…渡来理由が、韓半島における敗戦や政権崩壊による亡命や難民化の帰結であったにせよ。

そして、土着の、あるいは、先行の連中とは、混淆はなかなかせず、奈良期に至ってようやく支配層の土着化が進んだのではないだろうか…などと思ってしまう（栗本氏は「飛鳥」と「アサカ」という南シベリアの王朝とを結び付けようとしているようだが、引用文献は見えていないから判断ができない。しかし、タミール語と日本語を結び付けようとした言語学者もいたのだから、距離の遠近が直ちに問題になるというわけでもないだろう）。

空海、最澄など、高僧に帰化人が多かったのは理由があったのではないだろうか（76 回記事参照）。ちなみに、仏教の土着化の過程で本地垂迹説が現れたのではないか、と思うのだが、それでは本地垂迹説はいつごろから現れたのであろうか。また、その意義は何なのか。明治初期の廃仏毀釈は、神道原理主義のなせる業であったと思うが、要するに、各種の原理主義の不自然さは、文明の病であって、確かに、我々も病んでいた。いつ、文明に感染したのか。

ところで、当ブログの本来趣旨から言えば、道路と町内域の関係などを考えると、この辺では日本は古来例外扱いすべきであったかもしれない、やはり、自前でもそれなりの文化が発生成長する条件の確認が要るようである。

付記：韓半島ついでだが、朝鮮民主主義人民共和国の建国のストーリーが、初代金日成、二代金正日いずれもが古代以来朝鮮半島に支配権を打ち立てた諸勢力と同様の地理的な背景を持つように語られているらしいのは、何か、古代からの伝承を引きずっているのだろうか。実際、あの国の構造を理解するには、社会主義とか共産主義といった近代西欧文脈で初めて意味があるような経路を追うのではなく、むしろ、東北アジア固有の古代からの体制に当てはめるのが適当ではないか、と密かに思っていたが、栗本氏の論考に従えば、こういう発想を合理化できるかも知れない。儒教主義云々も表面的なことである。もとより体制が古典的だから技術的に遅れているということではない。現代最新技術と古典的な体制との相性が悪いとする理由は特にないだらう。核武装しているようだし、IT 技術の開発や運営に長けていることも今や周知であろう。だが、古代以来繰り返し生成してきた韓半島固有の王朝形態の変形であると見ると、韓半島の南北関係は長いスパンの時間で考えると、奇妙なことになる。昔から、あの半島には北の満洲方面から入ってきた勢力が南の勢力を征服し、あるいは、駆逐して、安定した政権が成立した。他方、南からの侵入は、失地回復の試みも含めて、定着せず、短期で駆逐された。近年においても例外ではない。もし、南北関係において、北が、このような歴史的大局観によって対処しているとするなら、かれらの自負も理解できるような気がする。

166. (12.06.12) Fourier は、「熱の解析的理論」で、金属円環の熱伝導の方程式の導出を丁寧に説明している。その限りでは、議論の方向性に間違

いはないようで、しかも、得られた結果ももっともらしい。さらに、Fourier は、得られた方程式の解を論じて、特に、定常（平衡）状態の解を検討して、円環の温度分布の特徴をいくつか挙げ、実験で検証できると述べている。二百年も前の話である。しかも、話題は基本的な上に、工学的にも重要であり、近年の有限要素法による数値計算なども含め、今日では、詳細な研究成果が、理論的にも実験的にも、文字通り、山のように蓄積されているに違いない。

実は、これは目下（というか、ずいぶん前から）準備中の Fourier の数学についての原稿の一節で例として取扱おうと考えている話題である（例えば、160 回記事参照）。しかし、Fourier の議論をそのままなぞるのは能がないと思ひ、熱伝導の方程式を空間内に位置する円環体にふさわしい座標系で書き直した上で、構成した解を検討して、Fourier が金属円環の熱分布について述べていることを再現してみよう、というのが、わたくしの目論見である。その上、Fourier の導出では、円環表面の熱の流出についての扱い方が、かれが一般の熱伝導の方程式を導出した場合と比較して整合しないところがある。果たして、同じ方程式が導き出されているのか、見かけ上の相違は座標系の選択に基づくものなのか確認してみようと考えたということもある。

さて、円環体の扱いに適していると思われる座標系を導入し、直交座標系で表されている熱伝導の方程式を、この座標系に書き直してみた。だが、何かがおかしくて、Fourier が導き出したものに相当するような対称性を伴う解が、少なくとも、まだ、作れないでいる。つまり、変数分離がうまく適用できず、Fourier がより直観的な手法で導いたような時間と緯線方向だけの 2 変数の偏微分方程式の解に相当するものを導き出せていないのである。

そうこうしているうちに、

Benjamin Wardhaugh: How to read historical mathematics.
Princeton University Press, 2010
ISBN978-0-691-14014-8

という書物を、天神のジュンク堂地下の丸善で見つけ、早速購入した。Fourier とは直接関わらないが、今とは発想も基礎的な知見も表現法も、さらには表現手段も異なる時代の数学文献に、必ずしも数学史家のものではない立場でどう向き合うか、というのが本書の基本的なテーマのようであり、それを実例をもとに、解説というか読者に向かって共同作業を呼びかけているというような、そういう姿勢の本である。そもそもがオクスフォード大学における著者の数学史の授業をもとにした本である。

目次は

Preface
Chapter 1 What does it says ?
Chapter 2 How was it written ?
Chapter 3 Paper and ink

Chapter 4 Readers

Chapter 5 What to read, and why ?

Bibliography

Index

となっている。第1章は、冒頭に、Niccolo Tartaglia (1499/1500-1557) の3次方程式の解法の文章が引用され、まず、読み方についての著者からの挑戦があり、Newton による連続の定義などに言及しつつ、解説が続く。本書では、どの章も、ひとまとまりの議論を始める前に、読者に自分なりの考察を勧め、一通りの解説を述べて、箱型コラムにまとめを記して、つぎの議論に進むという形をとっている。章末には、改めてまとめのコラムを置き、さらに、例あるいは問題として、その章で扱った内容と同種、あるいは、延長の話題が紹介されるという体裁を取っている。第1章の場合だと、章末のまとめは次の通りである：

When you're reading a piece of historical mathematics, you can ask ... What does it say? What mathematics is in it? Can you translate it in modern terms? How does it say it? What are the differences between the modern version and the original, and what do they tell you? How is the author thinking? How are the terms and concepts, and the approach to this piece of mathematics, different from yours would be? (p.17)

第2章は、冒頭に長文の手紙の引用を載せ、内容から書き手の推測を試みさせる。文中から、数学的内容だけでなく、時代や場所、書き手の状況を読み取ることが不可欠であることが述べられる。冒頭の手紙は Evariste Galois (1811-1832) が決闘前夜に書いたもので、以降の関連するエピソードなどが紹介されている。ここでは、一次資料、二次資料、「三次」資料の分類が紹介され、また、現在は、ネット上で画像として相当数の一次資料への接近が可能であることが指摘され、重要な URL が紹介されている。これはアーカイブの思想と深くかかわっているはずである。この章の章末の考察例として、Sophie Germain (1776-1831) から Carl Friedrichs Gauss(1777-1855) に宛てたファン・レターが挙げられている。

第3章は、数学史上のビッグ・ネームではなく、著者所有の The Young Man's Book of Knowledge という18世紀末に出版された書物の表紙や内部のページ、書き込みなどの写真を、別の当時の手稿の写真と対比させながら論じている。この時代のある階層の数学的水準や、その理由などが、この本の履歴から浮かび上がってくるのであり、そのために払うべき注意は、第2章で、手紙その他の記録の内容から、書き手の状況、時代、場所などを読み取れ、というのと同等のものである。実際、著者は、この書物の表紙の記述から、さらに細かく読み取って見せている。何を読み取るべきか、となると、

しかし、何を指して、例えば、古書を見るか、という姿勢と密着していよう。著者は、この時代の数学普及の様子を見ることが目標であったようで、その理由を、書き込みに現われる地名や西暦年に読み取るのである。一方、この時代に数学がどのように利用されていたかを見る上で、このテキストは有用かもしれない。しかし、そのように見ようとすると、多分、この書物が含有している情報だけでは十分ではないかも知れない。著者が示唆しているように、西欧圏以外ではどうか、となると、例えば、われわれなら和算を念頭に置き、各流の中枢部で秘伝口伝として伝承されたであろうものと大量の出版物として流布されたものとを適切に対比させる際の基礎となる論理の選択の問題でもあろう。

第4章は、冒頭に de l'Hopital の *Analyse des Infiniment Petits* (ロピタル：無限小解析) (1696) の英訳 (1730) に基づく無限小演算の基礎の部分のかなり長い引用があり、それから読み取れることから始め、どういう読者を想定していたのか、内容の先端性、普及性、あるいは、社会的な需要や受容などを推察し、こういったことの配慮がテキストの種類に応じて個々に行われなければならないことを述べている。

この章の Conclusion (pp.86-87) では、

Readers can be just as important as writers. They're just as much a part of the history of mathematics – and even when there weren't supposed to be any readers, you can learn something from that as well. As you did in Chapter 1, you think about how the writer wrote – and why – just as much as what, when or where.

と言っている。ここで、読者を予想していないテキストとは、著者手稿やメモの類を指す。

第5章は、Lagrange の方程式論の一節の引用から始まり、その内容が、今日では、有限群の部分群の位数はもとの群の位数の約数であるという命題に整理されているが、Lagrange の当初の言説がそのように理解されるようになった長い歴史的経緯をどうたどるかというような話題が論じられている。「後知恵」として片づけてはいけない、その理由である。古い文献では、今日、流布されているような表現がされているわけではないし、また、分野が違うと、時代が近くても、内容の表現形式が違っていて把握が難しいことがある。わたくしが頓馬だったからだろうが、Balian-Low の定理と呼ばれることもある、ある種の不確定性原理の命題を Balian の *Comptes rendus* の記事で見ようとしたときに、どこに言明があるのか、なかなかわからなかったことを思い出す (Low の方は時代が下がったせいかわかりやすかった)。この類のことは、恐らく、書かれたものだけでは深刻には伝わらないので、口頭での情報伝達、セミナー、講義、討論などで、内容理解の共有が図られ、そういった経験を通じて整理の方向性が見えてくるということもあったのでは

ないか。証拠として残っているのは、文献資料だけであっても、失われてしまった連携部分を探るのは、なかなか難しいわけである。

ちなみに、本書の著者は1979年生まれ、つまり、30代の前半である。本書から浮かび上がってくるのは、著者の本質は歴史家であって、素材として、過去の数学文献を多用していると理解するのがいいのだろう。読者に、5w1hの慇懃を怠らないことなど、立派なものである。師匠も優れているのだろう。

この著者の試みは、数学者が概説を書くときに先人の研究を検討するのは、もちろん、性格の異なる営みである。

「数学史家」には、過去の数学者個人の人生に関心を集中させるようなアプローチの人もいれば、自己実現というか自己主張のために、敢えて言えば、数学史がマイナーな分野だからこそ、数学史に身を投ずる人もいるかも知れない。わたくし個人の好みとしては、歴史家が、その素材として、つまり、ある時代の人間の営みを理解する上で、その時代の数学者に関心を持つというのが一番よく、他方と言っても同じようなことだが、数学者の人生を人間の生き方の一典型として描き出そうとする仕事もよいと思う。自己主張のための、つまり、何というか、俺は偉いんだ、という主張のために、人の少ない分野を選ぶという例も皆無ではないようだが、矛盾しているようでもあり、わたくしの好みではない。

167. (12.07.17) 文献を参照できないままでの円環体の熱伝導の方程式(166回記事参照)の解の具体的な構成は意外と難しく、果たしてドーナツを無事に揚げられるかどうか確信は持てないものの、考えるべき方向は見えてきたように思われたので、まあ、浮気である。何日か前、確か岩田屋7階の本屋で

ジョージ・G・スピロ：数と正義のパラドクス

青土社, 2011

ISBN 978-4-7917-6589-8

というのを見つけ、購入した。訳書としてはきちんとしたもので、索引と参考文献表が付いている(ただし、文献表には番号がなく、したがって、本文中で言及があっても、それが文献表のどの文献を指すのかは直ちに明らかにはならない。)。「訳者あとがき」に拠ると、訳書の表題は、編集部が選んだものらしく、訳者の寺嶋英志氏は満足しているようである。原題は、

Numbers rule: the vexing mathematics of democracy, from Platon to the present.

であるらしい。なお、訳者略歴によると、訳者は昭和16年生まれ、旧帝大系大学の博士課程修了であり、当然、今の若い人たちよりは英語も日本語もできるはずだと思われるが、それなのに、翻訳の質は決して高いとは言えない。これは不思議である。また、編集部が選んだという本書の表題も、わた

くしから見ると、適当ではない。「正義」という語から、「民主主義」という統治原理を予想する人がどのくらいいるだろうか。

実際、本書をぜひとも手に取って読んでほしいのは、実は、(数学に興味があるという人よりも) 政治や経済に関心が強い人たちだとわたくしは考える。その観点からは、本書の表題は不適切だと言われても仕方がないのではあるまいか(わたくしなら、「民主主義と悩ましい数学」としたい。少なくとも入り口で読者を誤解させたくはない。)。また、翻訳に用いられた日本語の質をもっと高めておかなければならなかったはずである(例えば、「訳者あとがき」における日本語の水準が参考になる)。もとより、原著の記述姿勢にも問題はないとは思わないが、(アメリカとイスラエルの一般の社会人と想定される) 読者層に対応して選択された記述姿勢であろうし、それが「編集」ということだと理解される。つまり、本書の翻訳にイチャモンを付けたということは、本書の編集力に疑念を呈したことに他ならない(翻訳者が免責されるわけではない)。

重要な内容だと思われるだけに、こういう欠陥が残念である。

目次を挙げよう：

まえがき

- 1 反民主主義者 プラトン
- 2 書簡の名手 プリニウス
- 3 神秘主義者 ラモン・ルル
- 4 枢機卿 ニコラウス・クサヌス
- 5 士官 ジャン＝シャルル・ド・ボルダ
- 6 侯爵 コンドルセ侯爵
- 7 数学者 ピエール＝シモン・ド・ラプラス
- 8 オクスフォードのドン チャールズ・ラトウィッジ・ドッジソン (ルイス・キャロル)
- 9 建国の父たち ジョージ・ワシントン／トマス・ジェファークソン／アレクサンダー・ハミルトン……
- 10 アイヴィーリーグの先生たち ウォルター・E・ウィルコックス／ジョゼフ・A・ヒル／エドワード・V・ハンティントン……
- 11 悲観主義者たち ケネス・アロー／ジョン・フォン・ノイマン／O・モルゲンシュテルン……
- 12 割当て論者たち (クォータリアン) マイケル・L・バリンスキ／H・ペイトン・ヤング……
- 13 ポストモダンの人たち ヨハナン・バデル／アヴラハム・オフエル……

訳者あとがき

参考文献と索引が付されている。なお、各章の人名は、著者が章末に評伝を付していることを示す。

第1章から第8章、および、第11章は、最適選択あるいは最良選出の原理についての議論である。第9章から第13章は、アメリカ合衆国の各州（ステイト）に割り当てるべき下院議員定数の計算規則およびスイスの各州（カントン）への国民議会議員数割り当て（さらに、イスラエルのクネゼトも）が話題になっている。ちなみに、クザーヌスは当ブログの本来テキストである Ivins の書物でも扱われているが、文脈は全く違う。

なお、この本で思い出したのが、ずいぶん前に手に入れた

Alan D. Taylor: Mathematics and politics Strategy, Voting,
Power and Proof
Springer, 1995
ISBN0-387-94391-9

である。こちらは、Union College での授業の教科書である。この本と併せて論じておきたい。

このようなことに興味を持ったのは、入学試験などの検定において、評価点の重みの付け方によって順位が変わる可能性があることから、そのような不安定性の理論的な処理の仕方を知りたかったからである。日本では「入学試験」がこれだけ社会的な重要性を持っていながら、その本質についての基礎的な研究がないようではないか。もっと不思議なことは、入試の問題は、日本の社会では昔から気にされていたにもかかわらず、真面目に突っ込んでみようとする体系的な試みがなされてこなかったようだ – 日本の「教育学」の大テーマのはずなのに、せいぜい歴史的な変遷を調べるものとか公平性とか社会的階層性といった、入試に伴う周辺事情の調査研究ばかりしかなされて来なかったのではなかったか。要するに、入試に伴う誤差の性質、あるいは、入試の限界や効用は、出題技術の改善として応用できるような形では、つまり、社会の知的共有財産を目指すような研究はされて来なかったのではないと思われる。なぜだ?! – 準拠すべき論理の開発がされて来なかったからなのではないか – それにしても、なぜだ? 入試を巡って騒いでいる学校関係者やメディアは、実は、本気ではないのではないか。かれらは「勝ち組」であり、現状の、ひょっとしたら、「入試」の不公平性・非公正性で利益を得てきたのではないか … ヒントとして、選好の問題があるのではないかと … とまあ、こんなわけだったのだが ……。

さて、スピロの書物に戻ろう。この本で読んでおくべきところは、11章と12章だろうか。他の章の内容も意味がないわけではないが、要するに inconclusive なわけである。そして、静的な数学的議論としては不完全であるとしても、人間生活では時系列にしたがっての何らかの決断が常に要求されるのだから、静的な議論で限界があるのなら、動的な議論、つまり、力学を展開しなければならないわけではある。その場合でも、加味すべき原理が、数学的に矛盾を含んでいてはだめだが。

最適選択あるいは最良選出に伴う基本的な問題は、3個以上の元を含む集

合の各元に「値」を付すときに、二元間の比較を繰り返すことによって、集合全体に線形順序が入れられるかという問題、あるいは、最適値の元の特定ができるかという問題、さらに、ある値づけによって成り立った線形順序が元の追加や除去によって安定に留まる条件の探求、そして、もちろん、現実世界で直面する選択や選出の課題との親和性の検討がある。「値」づけの原理としては、「多数決」に代表される、ある集団の成員による選好に基づくものがある。この議論は、試験問題の設問ごとの配点を変えることにより成績順位が変動しうるということからも判断されるように、適用される場合は広範囲に及び、したがって、抽象的な数学的な議論も意味がある。

スピロは、プラトンの「国家」および「法」の議論から始めているが、プラトンが問題にしていることは、最良選択の過程を、一応承認して、その（数学的原理上の）脆弱性ではなくて、選択過程を担保する集団の不均一性であろう。古典ギリシアの統治構造が飽くまでも前提でなければならない話だろうし、他の文脈に翻訳するときには、古典ギリシア的世界を解釈の一例として含みうるけれども、それからは基本的に独立した構造の原理を立ててから論ずべきではないのだろうか。もちろん、スピロ氏は選択原理の話の枕として近代西欧にとっては古典中の古典に言及したのであろうし、プラトンの哲人王も、どう実現できるのか、話を聞いただけで疑問を覚えかねない代物のようではある。

この第1章の内容は、選挙人に期待すべき資質にまで及べば、実は、第9章以下のアメリカ下院やスイス国民議会での州当りの議員数の配当問題とも無関係ではない。しかし、選挙人自体に（地域性以外の）階層性や構造的性があることを前提にしては、少なくとも、本書で紹介されているような議論は成り立たないであろう。法律的に整備しなければならず、一方、それには合理性が不可欠である。合理性を担保するものを十分に展開せずに、単純に、数学的原理を適用すると、定数配分ができないと言うのであれば、配分を支配している法律が前提としている原理を検討しなければならないだろう。「民主主義」を否定的にとらえるべきだと言うのではない。米国の場合の十年ごとの国勢調査に基づく定数配分という発想に問題があるのではないか。今日の統計技術によれば国勢調査の頻度を上げることができるだろうし、中間年調査を推計調査で間に合わせるのなら、毎年も可能だろう。定数配分に動学的要素を加味できるのであれば、定数配分も趨勢を考慮に入れられるであろうし、あるいは、中央政府が人口動態の変動管理にある程度の責任を担うということも可能だろう。つまり、数学的結果が示唆することは、現行の定数配分の思想の粗雑性であり、連邦議会がやるべきことは、精度を高めて、定数配分の正当性を高めることであろう。まして、二年に一回選挙が行われるのであれば、十年ごとの定数配分の変更ではおかしいわけである。つまり、ここでの本質的な問題は、ORを適用して、議員定数配分は数学的に合理的な決定ができない、という結論で終わることではなくて、議員定数は、選挙

時点だけでなく任期期間中も加味すべきではないのだろうか。なぜなら、統治原則の基本が議員定数の配分が合理的になされることであり、他方、議員の権能が、議員自身の見識と責任において選挙民の付託に応えるということであり、選挙と選挙の中間期の時間経過による事態変化への対応への判断は議員の責任に全面的に拠るべきことであろうから（アメリカ下院の議員定数は総人口に対し今や少なすぎる状態、つまり、議員一人当たりの選挙民の数が[ロシア（!）や日本（!!）を別にすると]（曲がりなりにも）一般選挙を行なっている世界の国々に類のないほど極端に大きい、つまり、欧州諸国に比べて、アメリカ合衆国は、制度上、到底民主主義的とは言えない、という意見も聞くが）。

アローの不可能性定理は第 11 章で扱われる。スピロは、アローの学位論文から、その目的が

「一組の既知の個人的好みからひとつの社会的意決定の様式へ移行するための手続きを構築することが形式的に可能である」がどうか、

という問題の提起であること、すなわち、

もしすべての個人が効用関数をもつならば、これらの効用関数をどのように融合させればひとつの社会的効用関数にすることができるか？

ということである、と注意している（p.268）。

以下、本書の記述だけを基にして要領よく行なうのは難しいのだが、整理を試みよう。まず、すべての個人の効用関数を融合させるということが問題になる。効用関数の説明として、ダニエル・ベルヌーイの考察が挙げられ、個人の選好の強さを表すものとして、単調増大な、しかし、上に凸なグラフを持つ関数、典型としては、対数関数によって記述されるというベルヌーイの主張が紹介される（ただし、アローの定理との関係は明らかではない）。次に、個人の効用関数を融合させるということの意味として、スピロは 2 条件

- A) 意思決定者は常に提供された二つの選択肢を比較することができる
- B) 合理的な人間の選好は推移的でなければならない

を述べる。スピロは、公理と言うのだが、融合手続の定義の一部と考えるべきなのではないのだろうか。

そして、「ひとつの社会的効用関数」として、社会厚生関数の条件が挙げられる：

- 1) 非制限領域
- 2) 単調性

- 3) 無関係な選択肢からの独立
- 4) 選択の非強制性
- 5) 独裁の否定

スピロは、これらの条件の意味を例示や類推で説明を試みる。そして、

「A)B) の手続きのもとで、1) ~ 5) を満たす社会厚生関数が存在しない」

というアローの定理を述べる。だが、なぜ、そうなるのかの示唆は十分に与えていない。

これらの5条件の一部をパレート条件に置き換えたり、あるいは、ブラックやセンによる改良の試みも紹介されている（ブラックは文献表にあるが、センはない）。言うまでもなく、アローの定理は静的なもの、つまり、時間要素はない。動学的な定式化を試みても、平衡状態は得られないだろうが、一種の安定多様体のようなものが得られるのであれば、それはそれで、応用というか政治・経済的な利用の考え方もあるのではないだろうか。

本書の原題には *vexing mathematics* という句があるが、実際、スピロのこのような記述は悩ましい。一方、Taylor の書物を見ると、数学的には明晰な記述があり、非常にわかりやすい。しかし、条件の設定や定義がスピロのもの（わずかとはいえ、それでも）若干違う。両者を比較して、内容をきちんと整理し、理解するには、経済学なり政治学なりの基礎的な訓練が必要になるのである。

168. (12.07.20) 先日読んだ日経の書評欄の参照項目にあったからと記憶しているが、三森ゆりかさんの著書

三森ゆりか：外国語を身につけるための日本語レッスン
白水社, 2003. ISBN978-4-560-04988-4

に気づいた。幸い、帰路立ち寄ったジュンク堂で手に入った（第13刷であった）。

前回の記事で言及したスピロの書物より、はるかに読みやすく、通勤の往復には好適であった（ただし、ノートを取るとなると、別ではある）。

なぜわたくしには読みやすかったかということ、主題が日頃の関心事に近いこと、また、わたくしの日頃の考え方にほぼ近いことが書かれていること、しかも、具体的な技術例の一端が示されていること、そして、著作の日本語の質が明晰であることが挙げられよう（三森氏流に従えば、読みやすかった理由は少なくとも四点あり、第一に、…とすべきであったろう – なかなか実践的なのである）。

どこの国の人であれ、母語以外での表現力は母語の素養がそのまま表れる。このことは、自らが母語以外の表現者になった場合でも、あるいは、他人が母語以外で表現をしているときでも、観察していれば、誰にもわかるはずのことである。したがって、日本人が一般に外国語での表現力の不足を自覚し

ているのであれば、その不足を補うためには、母語である日本語における表現力を高めることが基本とされなければならない。このことは、極めて明らかかなことのはずだが、そう思わない日本人が要路の人たちを含めて多数存在する – かれらこそ主流であると言ってよいかもしれない。この人たちの理解では、多くの日本人が英語（実は、外国語一般なのだが）での「コミュニケーション能力」が低いとされるのは、英語の運用技術が低いからであるということであり、したがって、対策としては、運用技術の向上のための環境整備、つまり、英語教育の早期開始、教材の改善、教授者に占める英語母語者の比率向上、英語母語国への留学推進など、が強調されてきた。この傾向は、まだ、効果が足りないとして、さらに、強化される方向にあるようである。

実は、日本人の「英語コミュニケーション能力」の不足が問題視されるようになったのは、今に始まったことではない。確かに、現象として、「英語コミュニケーション能力」の不足は昔からあるわけである。このことが不利に働く状況が決して少なくはないので、当然、従来も種々の対策が講じられてきた。それにもかかわらず「事態」が改善したわけではないから、一層「英語教育」を強化しようというのが数年来の流れである。「英語コミュニケーション能力」の不足は現象として否めないとしても、分析にあたっては、「英語」と「コミュニケーション能力」を分離することは、最低限、不可欠なことであろう。つまり、基本性の階梯上は、「英語」よりも「コミュニケーション能力」の方が重視されるべきことであり、本末としては、「コミュニケーション能力」は、本来、国語教育を含む母語に基づく教育課程で涵養されていなければならないことなのである。

しかし、肝心の国語教育が「コミュニケーション能力」を前提に設計されていなかった。だから、外国語でも「コミュニケーション能力」は発揮されなかったのである。「コミュニケーション能力」の不足は、しかし、英語（外国語）との接点で明らかになっていたからこそ、本来は「英語」に限定すべきことではないのにもかかわらず、英語運用技術の向上を通じて、「英語コミュニケーション能力」として、「コミュニケーション能力」の涵養が図られるようなことになっているのではないだろうか。特に、中等教育において、英語教育が「英語」教育ではなく人格教育を含めた「英語教育」となる所以かも知れない（77回記事参照）。

国語教育の不備のことは、大学入試の「英文解釈」が、「英語力」よりも「英文」を素材にした（三森氏の言う）『読書技術』力の測定として、（英語や国語関係者以外の人たちから）期待されていることとも対応する。さればこそ、理系学部の入試で、「国語」を外すことはあっても、「英語」は外されてこなかったのであろう。しかし、医学部のように、基本的に海外での勤務が想定されない職業の養成課程の場合には、「コミュニケーション能力」は必須だが、それは「英語コミュニケーション能力」ではなく、他方（「英語」）「読書技術」は不可欠だから、「英語教育」が「英語コミュニケーション教育」

にシフトして行くことは、本来の職業上の要請からは、必ずしも歓迎できることではあるまい。

いずれにせよ、「国語教育」も「英語教育」も学校教育の一環として考えられるべきものであり、もちろん、「数学教育」などもそうであるが、目標として、それぞれの教科でのある水準での技術力の習得が設定されると、問題点が意識されても、その解消のための方策が、教科内で対処可能と考えられる範囲に限定されてしまう。そして、多くの場合、問題点の解消ではなく、表面的な先送りに留まり、当初問題視された困難は一層深まってしまうようである。ものの順序としては、感性や思考力の基礎は母語にあるのだから、「国語教育」が十分な総合性を発揮していないのではないかと疑われるが、最近、この点では改善の方向にあるらしい。

だが、教科の「文化」は、まだ、伝統的かも知れない。今でも、大学に（実質的に）「国文科」というのがあるかどうかは知らないが、例えば、中等教育を担当する国語教師なら、（外国人向けの）「日本語教師」としての資格を持っているとか、言語学の訓練があるとか、あるいは、（英文学を含む）外国文学を原語で研究した経験があることが望ましいように（飽くまでも）個人的には内心で思っている（現勤務先では、現在、国語教員を公募中だが、この面での注文があるようなことは、もちろん言うてはいない。性別要件も preference はあるのだが、それさえも、匂わしているだけである。年齢や性別要件の明記は、欧米なら違法だが、日本では違法ではないようだから、書き込んでもよかったのだが…）。

余分なことを書いた。三森氏の著書の目次は

- はじめに
- 第1章 外国語と日本語の違いを意識する
- 第2章 翻訳できる日本語へ
- 第3章 「対話」の技術
- 第4章 「説明」の技術
- おわりに

となっている。各章は、さらに細かく節に分かれている。

本書の姿勢は、第1章冒頭の

本来、言葉を本当の意味で使いこなすためには技術が必要です。
(p.9)

の認識に基づき、この技術、すなわち、「言語技術」を実践的に紹介するということに尽きる。そして、「言語技術」は普遍性があり、（欧米では）教育課程の中で言語技術を指導しているが、日本ではそれが十分ではない。しかも、

言語技術は、国語ばかりでなく、外国語の授業にも応用されます。
国語も外国語もどちらも言語であり、言語である以上、その運用

技術は不変だと考えられているからです。日本人が外国語を学ぶときも日本語でまず言語技術を学ぶことが、外国語を習得するための近道になります。なぜなら、外国語の達人になるためには、まずは日本語の達人になる必要があるのです。(p.10)

と著者は述べている。そして、本書を通じて、具体的に、言語技術とはどういうものかの解説を行うのである。この著者の言明は、上述のように、基本において、わたくしの考えと一致している。しかし、わたくしは「言語技術」が具体的にどのようなものであるか、系統的に学んでは来なかったの(何しろ、国内で国語教育を受けてきたから)、本書によって学んだ点が多い。

本書を通読した後、三森氏の関係著書

三森ゆりか：外国語で発想するための日本語レッスン
白水社, 2006.
ISBN4-560-02787-0

の存在に気づき、こちらを購入した(こちらは初刷)。こちらは、「言語技術」の一部の「読書技術」を解説している。なかでも、「絵の分析」(後述の目次)は面白かった。こちらの目次は

はじめに
第1章 外国語で発想するために必要な「読書技術」
第2章 絵の分析
第3章 本の読み方
おわりに

となっている。要するに、「テキストそのものに基づいて、分析をする」ことが基本だということである。日本の読書教育では、テキストの分析の部分をとばして、いきなり、読者の意見に入ってしまう。テキストの把握については、再話あるいは要約をすることにより、確認ができる。感想や意見は、その上で成り立つものである。絵の分析も、全く同様に行われる。そして、極めて理詰めには絵の理解への道が開けるわけである。テキストのどこを話題にしているか、テキストについても事実か著者の意見かの区別を読み分けることが要点になる(ただし、「読書分析」でも「絵の分析」でも、作者の意図と表現能力との間に、何というか、調和の問題があり、作者の意図通りに、分析者が読み取ることができるかどうかは別だろう - これは、もちろん、わたくしの感想である)。

実は、「数学教育」にも、現行の「国語教育」とよく似た問題があるのである。

付記(平成24年7月25日): この件で、最近、面白かったことが二件ある。

一件目は、24日にあったイチローのマリナーズからヤンキースへの「電撃移籍」に伴う会見でイチローが用いた日本語の質である。かれの日本語は、

そのまま英語になるのである。イチローは在米生活が長くなっているから日常的に英語世界にいることは疑いようがないが、会見で用いられた日本語は、実際に、英語でものを考えていることを示唆するものであった。報道からは、正確な仕組はわからないが、先行して、英語での会見があり、続いて、日本人記者向けに日本語での会見があったのかも知れない。アメリカにおける記者との応答が的確な意見を要求する性質のものであったことが、かれを、もともとと理詰めに考える人であったけれど、一層鍛え上げたということであろうか。そう言えば、Jリーグのトップクラスの人たちの会見も、総じて、よく整理されていて、言明の構造がはっきりしている。かれらも国際舞台での活躍が前提になっているからであろう。

さて、面白かったことの二件目は、福岡市が最近標語として掲げている（という）「ユニバーサルシティ福岡」なる語句にアメリカのユニバーサル何某しという企業から警告があったという話である。ユニバーサルシティという語は、同社によって、商標登録済みであり、商標権を侵しているから使用するな、ということだが、福岡市などの行政機関の安易な言語感覚が引き起こしてしまった問題には違いない。基本的には、この怪しげな語句によって象徴しようとしている理念の定義が十分ではなく、思い付きに近い水準のまま、恐らくは、イベント会社の「ノリ」で万事が進行したからであろう。商標として登録済みかどうかの調査を欠いていたことは、安易な姿勢の現れでもあるが、事前調査をしておけばよかったということではない。行政の被対象者の立場に立ってみれば、こういう怪しげなカタカナは単に行政当局者の自己満足に見えるだけで、行政サービスの実態の正確な把握を阻害するだけの効果しかない。当然ながら、サービスの限界も不明になる。要するに、行政サービスにカタカナ語の名称を付すことは、根本的に不誠実なことなのだが、その認識が行政やメディアも含めて行政の周辺にないことが問題なのである。国語教育の偏りが、結果としてこういうことを招いたと即断はすべきではないようだが、やはり、行政を司る人たちの言語感覚の甘さや言語表現力の未熟さの一因にはなっているであろう。しかも、英語ができるかどうかではなく、日本語のつもりのところでもイチャモンが付いたという、貴重な例として、この件は本当に興味深い。

付記（平成 24 年 10 月 1 日）：今度は面白くなかったこと：

先日、かつての卒業生が、教育実習で現勤務先に来校し、高校 2 年生の教室で国語科の研究授業を行なった。参観した感想である。詳細は不承知だが、恐らく、高三相当の教科書に基づいた授業だと思うが、教材として用いられた国語教科書所収のエッセイが酷かった。現勤務先で採用されているくらいだから、恐らく、主要な「進学校」が採用していると考えられる教科書であり、それはこれらの高校の国語科教員たちが出版社なり執筆陣なりに対して抱いている一種の信用が与かってのことだろう。合評会には出席できなかったのも、後で聞いた話だが、他教科の教員から、教科書所収のエッセイの質、

特に、論旨展開の混乱への言及があり、実習生が教材研究の形で補充した部分で、さらに、混乱を倍加させてしまったのではないかという指摘があったそうである。

教科書会社の提供する教師用マニュアルの問題もあって、実習生を責めるわけにはいかないのだが、国語科の指導教諭の説明では、難関大学の現代文の入試問題には、この手の構造のものが多いのだというようなことだったそうである。つまり、教科書の編纂から入試の出題まで、国語科関係者の業界内事情だけで仕切られているという状況が伺われるが、まあ、これは「現実」だから、高踏的なことを言ってそっぽを向いているわけにも行かない。

ここで、深刻な問題は、この手のエッセイや、あるいは、伝えられるような入試問題のいかがわしさに気付くにつつ、同様のいかがわしさに対応することは不誠実であり、他方、全く気付くことなく懸命に回答しようとするのは愚かでしかないという、不毛な状況をどう乗り越えるかということである。

なお、件のエッセイであるが、浅薄な銜学趣味のもので、文字通りの「子供騙し」であり、そこには読者への敬意が皆無であるように思われて、わたくしには腹立たしかったのだが、しかし、ひよっとしたら、エッセイの著者の言語感覚が鈍く、言葉というものを正確に使うことができなただけで、読者を馬鹿にしようとしたわけではなかったかも知れない。いずれにせよ、驚くべきことは、このような代物が、我が国の中堅層や指導層になることが期待されている生徒たちの学ぶ高校で採択されるというような立派な教科書に載っていることである。

169. (12.07.31) 猛暑の夏、気分転換も兼ねて、東京に行ってきた。もともとは、ネット版日経上にあった「大学改革とグローバル人材の育成」というシンポジウムの案内に気づいたので、応募してみたのである。そして、ついでに、昔は新聞記者だったというジャーナリストにも会った。

このシンポジウムであるが、How did you find it? と問われたら、Umm,...,I found it quite deceiving. と答えることになるだろうか。もっとも、今のわたくしは大学とは関わりがないし、特に、ここ数年の「大学改革」の状況については全く知らない。そして、この点では、後半のパネルにおける国立大学法人化以後の国立大学の挙動についての一橋大学長の話は具体的で実に面白かった。パネラーは、他に、筑波大学長と、基調講演の二氏、慶応義塾の塾長と、日本を代表する世界企業（日立製作所）の会長であった。他に、モデレーター兼パネラーとして、高名なジャーナリストがいた。このシンポジウムがあいまいなものになってしまったのは、モデレーター氏がこの種の問題についての見識を欠いていたからである。

もっとも、モデレーター氏は、あるいは、よくやったとも言えるのかも知れない、と言うのは、シンポジウムの真の目的は、大学生の新聞ネット版契約者を獲得することであったのかも知れないと思われたからである。実際、会場には、学生が多かった。シンポジウムのテーマが、現在の学生にとっては

必ずしも関心事ではないであろうことを思うと、不思議ではあったのである。

基調講演のうち、塾長氏の講演は、よく準備されている上に、要旨も配られていたから、聴衆にはわかりやすかったのではないか。内容の基本は、極めて当たり前のことではあるが、「大学改革」は、学生のためという視点からであるが、学生に迎合することではなく、かれらの人生を視野において

自分の頭でしっかりとものを考える能力

のある学生を育てるためであるという話であった。そして、

すぐに役立つ人間はすぐに役に立たなくなる人間である

という先人（谷口豊太郎—小泉信三）の言の引用があった。要するに、教わっただけの知識はすぐに陳腐化するから、自前でものを考えられなければ生き残れないということである。モデレーター氏は、後半のパネルで、この方向の議論を十分に深めることができなかつたと思う。

会長氏の話は、話の内容を会長氏がよく把握していることは明白であったが、整理が十分ではなかつたし、要旨の事前配布もなかつたから、流れが取りにくいところはあった。塾長が「大学改革」を扱ったとすると、会長は「グローバル人材」を論じられたのであろうか。リーダー、高度理工系人材、グローバル人材と言った語が出てきたように思う。「リーダー」の資質として、

高度な専門性、幅広い知識、課題発見能力

が挙げられたと思うのだが、詳細は、経団連の「グローバル人材の育成に向けた提言」（2011年6月）にあるのであろう（調べてみないとわからないが）。会長氏の視野は、個々の大学学長氏のものより広いようであり、「グローバル人材の育成に向けた提言」は、すぐれて政治的な内容、つまり、一方に「リーダー」層の創出を述べるとともに、他方、中核層が担う地域型の新一次産業や新サービス業の育成など、も含んでいるようである。

パネルについては、先述の通り、断片的なトピックが出たり消えたりであったが、リベラル・アーツ、留学制度、そして、秋入学などが論じられた。いずれも十分な定義を与えての話ではなかつたから、パネラーの間に共通理解があったかどうか、パネルとフロアとの間に共通の理解を構築することができるようなものだったか、と問われると、恐らく、いずれも否であったろう。秋入学から秋卒業や秋入社の話になったが、これでは、世界標準に揃えたいということとは違う。また、人材育成は大学より前の段階も重要だという指摘は再三あったけれど、現行の四月新学年のために、長期夏季休暇が学年の途中にあり、生徒・学生の経験の拡大の援けになっていないことを問題視する見解はなかつた。

全般的な印象としては、このシンポジウムはかなり皮肉なものであった。企画がどうなされたのかはわからない。モデレーター氏が企画の当初から関わっていたかどうかは不明だが、氏が大学関係者や経済界にある危機感を共

有していなかったらしいことは推測できる。シンポジウムの鍵語に「リベラル・アーツ」があったことは触れた。そして、一橋大学長からであったと思うが、ダーウィン、シェクスピア、ニュートンのうち尊敬するのは誰か、というイギリスでの会話とシェクスピアを選んだ人の意見の紹介があった。興味深い会話であったと思うが、本来は、これら三者のうちの誰の作品を読んだことがあるか、という問いであったかも知れない。ニュートンの著作（原典はラテン語である！）を読んだ人は、そもそもどのくらいいるのか。ダーウィンは多いだろう。シェクスピアははるかに多いだろう。だが、ニュートンにせよ、ダーウィンにせよ、今日でも手に入りやすい形で復刻されている。そして、こういうことは、（塾長の発言にあったと思うが）創造性の「追体験」が保証されていることの現れである。もし、「リベラル・アーツ」と言うのであれば、その浸透の結果がこういう形で表れていると理解すべきだろう。

実際、会長氏が、自らの教養のなさを公衆の前で恥じてみせたとき、本来、そのことを真に受けることはできなかつたはずである。経歴から言っても、氏が大学で学んだ時は、1 学年 500 人足らずの理科一類の一員としてのプライドに満ちた駒場の生活は、1 年半とは言え、旧制高校時代の雰囲気濃厚に留めたしっかりとした教養課程と一体化していたはずである。確かに、当時の学卒と言えども学識は不十分なまま世に出たには違いない。だが、今の大学の状況を考えると、かつての、特に、会長氏が学んだ頃の教養教育を復活させることは不可能であろう。しかも、会長氏が嘆いたのは、せっかくの糸口を学生時代に見出していたはずなのに、長い職業生活でその後を引き出すことができなかつたということが、実際に、仕事をするということが全人格的なことであることを痛感するようになってみて、つくづく残念であったということではなかつたか。

皮肉というのは、こういうことでもある。会長氏は、話の都合上、自らの教養のなさを、もとより実感もあってではあろうが、嘆いて見せた。ところが、そこを文字通りの無教養なモデレーター氏が乗ってしまったということである。なお、拙見については 141 回記事参照。

他の鍵語のうち、「留学制度」であるが、「グローバル人材」という語と組み合わせると、一方で、「大学改革」は学生のためと言いながら、関係者の思考の硬直性が覗いて見える。学生にとって、「留学制度」は、所属大学から一定期間離れることであり、休学との違いは、その間、別の大学において授業を受けることが想定されていることである。「留学」という場合、日本的発想では長年の習慣で、つい、海外の一流とされる大学において授業を受けることだけに限定しがちであるが、上のように、「留学制度」を原則にまで遡って考えると、「海外の一流とされる大学」でなくてもよいはずで、「留学先」の選定についても肌理の細かい制度設計が必要であろう。国内の場合も含みうると考えると、直ちに、単位互換の問題が出て来るが、海外の場合も同様で、単に、「海外で学んできました」という証明として単位を要求する場合はとも

かくとして、本来は、各学生の全体の修学プログラムの中で、所属大学、他大学、他国における大学での単位取得を、科目や、時期を籠めて、あらかじめ建てた計画の中で考えられるようにするのがよいのではないか。当然、シラバスや単位評価の標準化の問題が派生する。さらには、塾長氏の指摘された私学の場合の建学の精神の扱いも検討の対象になる場合もあるだろう。

これは想像なのだが、現状では、「留学制度」はもっぱら語学力習得のために計画されているのだろうが、それでは、語学クラスの学生構成を想像してみればわかるが、受け入れ先が相当に意識的に自国の文化文明を学生たちに伝える努力をしているところでない限り、国内にとどまって、語学研修を受けた場合と比べて費用対効果の点で疑念が生じかねないのではないか。「一流とされる大学」に行くのであれば、語学研修に来ている学生たちではなく、その大学本来の一般の学生と学術面での交流機会として、正規の授業への参加を前提にすべきであろう。そして、「コミュニケーション力」は、前回記事で言及したように、前提が母語でのコミュニケーション力であれば、語学研修型の海外留学は、単なる自己満足か、あるいは、自己の能力の誤評価につながりかねないであろう。

なお、秋入学についての拙見は、157回記事参照。このシンポジウムでも、塾長氏や会長氏から、大学以前のことが問題である（つまり、中等教育の質である）との指摘が再三あり、入試のことも「頭出し」はしていた。秋入学は、グローバル人材育成のため故に進められるべきことではなく、長期の夏季休暇が学年の中間にあり、きちんとした休暇として機能しないこと、さらに、昨今の気候条件を考慮するなら、環境負荷の点で感心しないから、大学だけでなく、初等教育段階から実施に移すべきであるとわたくしは信ずる。ただし、このシンポジウムで暗黙裡に前提にされていたような秋入学＝秋卒業は海外事例でもありえないことであり、実際、秋入学＝初夏卒業、秋新学年＝初夏学年修了が通例なのでもあるから、(学年境界の)夏季休暇期間の特別プログラムは要る。そして、それこそ、(中等教育段階からの)語学研修や特別補習などの教育上の計画が種々取り込めるはずである。学校関係者の生徒管理が生活面だけでなく学業面でも難しくなる、つまり、複数の言語を駆使するといった、現行教員の知識や発想の埒外の生徒が多出することになるかもしれないが、本物のリーダーやクリエイターが、そういう過程を経ずに産まれるものだろうか。

付記：元新聞記者氏とは、氏が連載中の高校人脈記事を通じて縁ができた。今の勤務先を預かっている身としては、センセーショナルな話題性よりも、着実に社会貢献をしている人たちや、「中央」で成果を挙げた後に出身地に戻って地元の優良企業のトップになった人などを拾い上げてほしいのだが、そして、実際、記者氏はそういう意見に理解を示してはくれたのだが、要するに、読者層という前提に立つと、読者層の大半が関心を持つと想定される内容に仕上げるのが編集的には優先するとのことであった。メディアの発

信する情報は、その内容自体を実は発信者自身が信じているかどうか不明なものが多いようにも思われるのだが、それでも、こういう内容を発信すれば少なくとも非難されることはないという判断に基づく水準のものから、とにかく読者を敵に回すと商売にならないという判断に基づくだけのものまでであると思ってはいた。さて、この場合はどうなるのだろう。高校人脈など、その高校に関心のない人以外は深くは読まないものである。センセーショナルな話題性のある卒業生を取り上げても、肝腎の高校関係者が困惑してしまうと、読者層への配慮と言っても、読者層は高校関係者を中心とすることを考えると、奇妙なことになると思う。

付記2（平成24年8月15日）：「グローバル人材」という語を字義通りに捉えれば、オリンピック選手団のメンバーは、その典型である。競技者もそうだが、役員もそうである。さらには、周辺のメディア関係者もそうあるべきなのだが、こういう発想をかぶせて、報道記事を眺めると、果たして、彼らにそういう自覚が浸透しているかどうかが判然としない。競技者の「グローバル人材度」は文句なしで、メダルの有無にはかかわらず、期間中の不適切行為で追放されてもしない限り、一生物のはずである。オリンピックには、国別対抗戦の要素はあるが、他方、競技者をグローバル人材として国際的に認知する場でもあり、しかも、この認知が今日の世界では実質的な意味を持つようになってきている。国別対抗戦の要素を強調して、メダルの数を競うのも悪いとは思わないが、その場合でも、「見方」というものはあるだろう。そして、メディアに必要なのは、この「見方」を提供することであろう。メディアの編集政策として、メダル数の競い合いを強調し、あるいは、個々の選手のエピソードを取り上げるのは理解はできることであるが、それでは「高校野球」の報道と本質的に変わらないことになる（こちらは、もともとは郷土の少年たちが地元の声援を背に甲子園でトーナメントを闘うことを当時のメディアが上手にビジネス・モデル化したものであり、今日では、郷土性という基本的な要素には変質が見られるようであるが、形式構造は当初型のまま、広大な周辺産業を有する一大ビジネスになっている。しかし、本質は、飽くまでも、局所的、つまり、いわゆるガラパゴス的なものであり、「グローバル人材」の育成には関わらないものである。）。

「見方」の提供として、大事なことは、メダルの数の意味を論ずるという姿勢である。例えば、国別順位や金銀銅の個数を挙げるだけでは表面的過ぎるので、一捻りするだけでも少しは違って来る点がある。競技人口比や競技内容に注意することはよいことであり、今回では、日本のメダル獲得競技が全競技の半数に及び、バランスがよくなったという報道はよい方向のものであった。しかし、他の国はどうか、という情報を必ず付さなければなるまい。また、メダル数で言えば、ファイナルあるいはセミ・ファイナルに残ることが前提になるのであって、目標として意義があるのは、この段階の話ではあるまいか。そして、参加国・地域の全体像が見えていれば、およそ plausible

というべき推測が可能になるであろう。事前の目標設定も、JOCが提起するものとは別に、各メディアがある程度の幅のある数字を掲げることができ、しかも、結果の評価も、この線以上なら、成功、これより上なら大成功、他方、ここより下だと反省点多し、というような有意義な評価ができるであろう。また、競技人口や国の総人口も重要な要素で、これらを加味して、メダル数について雑な計算を試みることもよいだろう。総数が概ね30個以上という国は成功したと言えるだろうし、人口比で言えば、韓国は概ね日本の倍近い成果を挙げていることになり、他方、中華人民共和国は相当に割り引かなければならないことになる。そして、アメリカは文句なしだし、イギリスはすごいということになる。総じて、ドイツ以下の西欧圏諸国はよい成績を挙げていることがわかるし、オーストラリアもスポーツ大国である。

メダル数予測などの基本情報は各競技団体から聞き出すことしかないだろうが、メディアと競技団体との交際において、双方が同じ方向の視野狭窄を起こさないことが重要なので、良質なスポーツ・ジェネラリストというか、スポーツ・ジャーナリストの存在が望まれる。かれらには「甲子園型野球報道」で培われるであろう能力とは異質の、スポーツとは何かを考え抜いた上での、特定競技に偏らない視点が要求されるであろうし、スポーツ行政やスポーツ政策についての見識も必要ではあるまいか。

170. (12.08.20) 天神のジュンク堂で、これは福岡県私学展のついでだったが、

伊東乾：笑う親鸞 楽しい念仏、歌う説教

河出書房新社, 2012.

ISBN978-4-309-23087-0.

という本を見つけた。確か、新聞書評で取り上げられた書物の棚にあったから、当然、最近の新聞書評で扱われていたのだろうと思われるが、詳細は知らない。

著者のお名前は、日経 NBOonline に連載中のコラム（「常識の源流を訪ねて」）を通じて承知していただけである。著者の本業というか vocation は、音楽家、指揮者・作曲家ということだそうだが、その一環として、東京大学大学院情報学環の准教授でもある。氏の経歴のおおよそは NBOonline のコラムから想像できるが、音楽作品は全く知らない。氏のコラムは実に話題が豊富で多岐に亘っているだけでなく、導入や接近法が論理的であって、その一方で、コラムの性質上、常に明確な結論が示されているわけではないので、読者の一部には相当な苛立ちを覚えた人もいたであろう。

上掲書を論ずるにあたって、著者のコラムを取り上げることはないようであるが、本書の主題である真宗大谷派名古屋別院での「お待ち受け法要」は、コラムで触れられており、店頭で本書を見たとき、詳しい経緯がここにあるのだな、と思った次第である。実際は、CD でも付いているのかと思ったが、それはなかった。そして、理由も本書を読んでわかった。

さて、本書を一口で特徴づけるとしたら、どう言うのが適当だろう。いろいろ考えてみたが、オタクの本とするのが適当ではないだろうか。本書の隠れた主人公は、法然、親鸞を背負った、蓮如であると思われ、また、本書には、親鸞晩年の念仏和讃がゴシック体で随所に現われる上に、現代の真宗大谷派の高僧たち、そして、名古屋の僧侶たちが、本質的な役回りを演じている。しかし、本書は、宗教書ではなく、真宗の報恩講などの法要に認められる総合的な音楽としての完成度の謎を解明しようとしたものと言えるだろう。当然ながら、このようなエッセイ本ではなく、詳細な検証データを伴う学術論文が伴っているようであるが、本書は、索引も引用文献もない、読み捨て専用のような編集であり、そういう意味では、オタクの本らしくないのが残念である。しかし、宗教や音楽、さらに雅楽や舞芸と言った基本的に情緒的な世界を、理知的、分析的に、詳細な実証実験を援用しながら、整理することができたのは、著者ならでのことに違いない。前世紀末に、学位を得た直後に、(慶応義塾大学から)講師の依頼があり、

「日本伝統音楽論」の担当に欠員が出来てしまった、あなたなら何とかできるでしょ、担当してもらえない？」(p.10)

という話が、そもそもの発端であったという。「日本伝統音楽論」とは、標題だけでも、いかにも巨大な建造物なので、ニッチ的授業を計画しながら、小沢昭一氏の残された資料を眺めているうちに、「節談説教」に遭遇し、その魅力に引き込まれてしまった。一方、この筋とは若干異なる経緯での真宗大谷派の研究機関の雑誌からの寄稿依頼があり、それが縁で、真宗寺院における法要の総合的な音楽性の分析に突き進むことになったというわけである。

わたくしは極めて浅薄な男で、宗教性は一片も身に付けてはいないが、宗教儀式には少しは出たことがある。真宗の儀式は、札幌時代に大谷派の葬儀に何回か出た。一番悲しかったのは、今は廃校になってしまった市立小学校のPTA会長をやっていたときに、確か小二だったと思うが、児童の母親が出産の際の出血多量で亡くなったときのものであった。新生児は助かったが、今日なら医療過誤が疑われる件でもあるし、実際、当時も知人の産科医何人かの意見では、先生が未熟だったんだらうね、ということだった。ともかく、悲しい葬儀であったけれど、僧侶の法話に感心して帰った記憶がある。今、思い出そうとしても、大事なところがぼけてしまっているのだが。残された家族には、母親が助かれば、赤ん坊が助からなくてもいいという考えもあったのであろう。実際問題として、母も子も助かるとはならなかったし、しかし、母も子も助からなかったというわけでもない。母が、というのは理屈なわけであるが、残された若い父親が幼い子どもたちや赤子を抱えて途方に暮れてしまっていることも想像が付く。導師は、こういったことを踏まえた上で、諦念ではない、何か積極的な受容を説いたように思うのだが、そこを思い出せない。節が付くところがあったかどうか思い出せないが、列席者の感情を相当に揺さぶった後で、一種のカタルシスに導いたことは確かである。

ただ、これは寺院本堂内で執り行われたわけではないから、伊東氏の指摘されるような、楽器としての寺院建築機能とは無縁のことである。

断片的なことでは、祖父の葬儀のとき、本来は臨濟禪で行うべきであったのであろうが、祖父の知己の浄土宗の僧侶に導師をお願いした。先生は、自分は声がよくないからお経を上手に読めないとのことではあった。葬儀は寺院で行われたものではなかったが、四五人の坊さんが一緒に来られて、導師のお経にバックコーラスを付けていたことを思い出す。お経の旋律には、仏教伝来の土地土地の民謡の旋律が留まっているのではないかと、漠然と思ったことを覚えている。祖父は、浄土系の戒名のもとで、臨濟宗の墓地に埋葬されたが、その折の法事の際の禅僧の拝礼を見ながら、亡父がイスラムの拝礼と同じだと感想を述べたことを思い出す。他にも、あることはあるのだが(69回記事参照、ただし、詳細は書いていない)。

大分脱線してしまった。伊東氏の書物を見ていて驚くのは、過去から現在に至るまで、次々とすごい人たちが登場することである。雅楽や能と真宗との深い関わり、さらに、明治以降、今日に至るまでの雅楽の伝承における真宗関係者の貢献、そして、一般的に、真宗の僧侶たちの高い音楽的素養と幅の広さである。著者は、そこに、真宗の伝統を見る。何のための仏の教えかということを経験や親鸞が洞察した結果として、文字なき民にも染み渡るべく、歌を通して教えを伝えること、そして、蓮如を中心として、この方法が最大の効果を挙げるべく、歌唱法、説教法、さらに、寺院建築にまで細かく考えが及んでいることに、現代科学の手法で検証してみて、敬服している。

本書で、特に、面白かったのは、第七章で、和讃が、わらべ歌や童謡、演歌のメロディーと極めて相性がよいことである。和讃が今様に基づいていて、日本語のリズムを駆使しているから、という説明が付されている。そして、この親鸞の発見と実践が、親鸞の説教を彷彿させるのではないかと、節談説教の原型は、まさに、親鸞の説教にあると、伊東氏は述べる。笑う親鸞という標題の所以であろう。なお、本書の目次は次の通り：

はじめのはじめの、つれづれに……

一 元祖浪花節・親鸞聖人？

二 仮に来て、教えて帰る……

三 光顔巍巍・威神無極

四 信心があろがなかるが……

五 猿樂法師・蓮如上人

六 宮商和して自然なり……

七 天竺問答・親鸞聖人和讃事始

八 念仏往生・清浄楽正信偈次第

はじめのおわりの、うたかたは……

あとがき

171. (12.09.24) 八月下旬以来、余り快調とは言えず、やるべきことは

例によって山積しているのに、易きに流れているきらいがあり、しかも、この間、詰まらないことが続出している、とまあ、こんな状態の昨今であるが、一方、ようやく多少とも涼しくなって来たのは嬉しい。円環体における熱伝導方程式の扱いも、自分だけの計算では余り進まず、ある種の直交関数系を一応苦心して導出してみて、その後で考え直してみたら、もっと簡単に導けたはずのものであることがわかり、しかも、実際には、それだけでは余り役に立たないものでもあった。いずれにせよ、この場合は、数学的にも、機械工学的にも、基本中の基本の形状の物体における熱伝導の方程式なのだから必ず詳細な計算がされているはずであり、文献に当たっておくべきであったと思い知り、先日、伊都に行ったときに図書館で文献検索を試みたが、肝心の現物には辿りつけず、これも出直しである。

ところで、大分前に、博多駅の丸善で購入したのだが、

勝木渥：曾禰武 忘れられた実験物理学者

績文堂出版株式会社, 2007.

ISBN9784881161470

が現勤務先のわたくしの部屋で積ん読状態であったのを手に取って拾い読みをしてみたところ、面白くて、始めから目を通し始めた。通勤の往復で、数日で読み終わられるだろうと思っていたが、やはり、時間の使い方がおかしく、まだ、終わってはいない。勝木氏は、日本の物性物理学史を纏めておられるが、その一環として、曾禰武（そね・たけ）の業績が紹介される。本書冒頭で、勝木氏は、執筆の姿勢を

物理学者としての人生の軸は物理学研究にあるのだから、それを主要な場としているその人生を描きたい。物理学研究を描写することを通して、曾禰の人物・曾禰の人生を描きたい。そして、そのような曾禰を社会的背景の中でとらえることを通して、歴史を描きたい

と述べ (p.7)、三項目の具体的な方針をその後に掲げている。本書の面白さは、曾禰本人へのインタビュー、曾禰とその師本多光太郎、同僚による研究報告、その他同時代資料からの抜粋と解説、さらに、著者本人による関連研究の解説が醸し出す臨場感に依るものと言えらるう。

本書の主要部分 Ⅹ～Ⅹ が、前後の序、跋を籠めて、曾禰武の仕事や人生に関わる。本書は、引き続き、「謝辞」、「付録1～3」とあり、さらに、著者自身に深くかかわる「備忘録」がある。備忘録において、著者と本書が捧げられている三先達、有山兼孝、宮原将平、中澤護人、との関わりが述べられている。余計なことだが、可能な限り資料に語らせるという姿勢を貫いている著者であるが、社会的にはある種の党派性を強く纏っていることは本書の叙述から覗かれる（著者の「党派性」の経緯そのものは「備忘録」からわかる。）。党派性ゆえの勇み足だと思われるが、特に、本の標題の前に、

基督主義者にして一時代早すぎた実験物理学者

とある。しかし、そもそも「基督主義者」(Christist ?!)という言葉があるのだろうか(個人的には、「キリスト者」という言葉もわたくしの好みではないが)。

なお、余分なことを言えば、宮原将平先生は、北大時代に昼食時によくクラーク会館でご一緒した。当時、数学教室と物理学教室の偉い先生たちは大学や学部の運営において同一歩調を取っていたとは思わないが、数学の先生たちは主にノンポリであり、物理学教室の方はそういう先生は多くはなかったとは言えるだろう。宮原先生が物理学会の会長をしておられたのもこの頃だったのではないだろうか。脱線したが、クラーク会館での昼食時に、主に理学部の偉い先生たちと同席して、いろいろな話を聞いたのはよかった。九大に移った後、そういう場がなかったことは残念だったが、(箱崎の最後の頃は、五十周年講堂にファカルティ・クラブができたが)伊都ではどうなっているのだろう。

実は、本書を丸善で見つけたとき、曾禰益という名前を咄嗟に連想した。著者は、曾禰武の訃報に、「故曾禰益氏の実兄」としてしか報道されていないものがあることに大いに不満を漏らしているのだが(p.11)、それは曾禰武の人格を正しく表しているわけではないことにたいする一種の義憤のように見えたのだが、著者の党派性に気づいてみると、「曾禰益氏」自体がいけなかったのかな、とも思われてしまう。

ところで、本書から、本多光太郎、曾禰武、茅誠司といった人たちの士気の高さが伝わってくる。また、いろいろな化合物の磁性を調べていた、かつての(九大工学部共通講座時代の)同僚のことを思い出した。あの人は京大で研究生生活を始めたから果たして本多先生の系譜に繋がるのかどうか知らないが、無縁ということもないだろう。

他に思い浮かぶのはPurdueにおられた故里洋先生である。先生の奥さんは、本多先生のお孫さんだったし、里さんの周辺に北大や東北大からたくさんの方が集まっていた時期に、わたくしもPurdueにいたわけではある。里さんは茅さんのお弟子さんになるのではないだろうか。ここには間違いなく本多先生以来の研究上の系譜があるのだろう。

断片的だが、VIIIの年表の

1941年：京城帝大に理工学部が設置された。

という欄を見ると、

犬井鉄郎：球函数・円筒函数・超幾何函数 (河出書房、1948)

の序文を思い出す。犬井先生とは何回か京大数研のシンポジウムでお目に掛かったことがあり、「孫は無条件に可愛いものですよ」とおっしゃっていたことを思い出す。この古い本は、楕円体関数を調べる関係で見たのだが、先生は、何と、城大理工におられた時期があったのだな、と知った。そのときには、先生にお会いする機会はなくなっていた。

磁性とは関係ないが、興味深かったのは、本多・曾禰の各地の間欠泉や渡瀬の風穴の調査研究である。かれらは最終的に模型を作って確認したようだが、方程式も立てられるはずで、一旦、方程式が立てば、いろいろと細かい議論ができるわけである。だが、(例えば、わたくしなら)方程式を立てるためには、残念ながら、何人かと多少時間を掛けて議論しなければならない。渡瀬の風穴の場合でも、気体の方程式と熱方程式とを組み合わせる必要があるが、風穴そのものは、両端が開いた直円筒で置き換えるとして、この円筒内部の空気振動を円筒の内部壁面の温度変化が規定するように境界条件を与えて気体の運動方程式を立て、両端の開口部での圧力の変化が記述できればいいのだろう。円筒の内部壁面の温度は、季節変動と位相が逆転するように、円筒が埋没する材質の熱伝導率や厚みが選ばれている必要があるだろう。まあ、こんな風に、方程式が立てられれば、解を計算することにより、風穴の数値シミュレーションが出来上がるはずである。

間欠泉の方は、岩盤内に閉じ込められた地下水の温度や水位の変化や蒸気の体積膨張、水にも圧力が掛かるので、水も圧縮性流体として扱うべきなのだろうか。多孔質物質内の何だかややこしい方程式群を扱わなければならないそうである。

なお、曾禰武は、開成中学の出身であり、同中学の後身、開成学園の校長を22年間務めている。1970年退任、83歳であった。昨年、某大学勤務の(元)同業者から同大学附属中の校長を兼ねることになって様子を伺いたいと言うことで会って話をしたけれど、80過ぎまで校長をやるんでしょうと問われて、いや、任期というものがあるから、と答えたのだが、ひょっとしたら、やっこさんは開成の出身なのかも知れない。そうであるとすれば、年齢的に、70代後半の曾禰校長時代を知っていておかしくないからである。

172. (12.10.10) 二週間ほど前に天神のジュンク堂で見つけたが

石黒浩：人と芸術とアンドロイド 私はずせロボットを作るのか
日本評論社，2012. ISBN978-4-533-58624-6
C1040

を紹介しよう。まず、目次だが

プロローグ

- 1 アートの街のジェミノイド
- 2 ジェミノイドを作ったこと — 人々の疑問に答える
- 3 人間らしさを作り出す
- 4 人間以上のロボット、最低限の人間
- 5 社会を変えるロボット・メディア
- 6 「私」は人か、ロボットか
- 7 作ることと生きること

8 融け合う芸術と技術

エピローグ

となっている。本書の副題に「なぜ」という語が入っていることに注意してほしい。つまり、著者は類を見ない挑戦を続けていることがここに見えている。実際、本書で特に重要だと思われるのは、第8章である。プロローグ、エピローグと併せて著者の想いがよくわかる。

まず、プロローグで、

これまでの自分の研究活動を思い返してみれば、私はロボットの研究を始める以前から、「人間とは何か?」「人はなぜ生きるのか?」という疑問をもってきた。そして様々な分野を学ぶ過程で、「人に何かを伝えたい」「人に自分のやったことを知ってもらいたい」「人に認めてもらいたい」という想いに自分が支えられているということが、ぼんやりとわかってきた。

と言う (p.004)。つまり、著者の石黒氏は生まれつきの哲学者なのである。そして、エピローグでは、

誰しも、頭のなかにぼんやりとした何かあこがれのようなものを持っている。たいていそれは人の形をしている。おそらくその人は、みずから作り出した理想であり、その人に自分の全てを伝えることで、逆に自分を知ろうとしているのである。

芸術に目を向けなおしたとき、以前からぼんやりもっていた、そういう人のイメージが再びよみがえった気がしている。

...

いずれにしろ、まだ自分自身にときめきを感じている。

と締める (p.189-190)。

第2章の問答は基本的なのだが、第6章までは、わたくしが目を通した著者の他の書物でも論じられていることが多い。だからどうだと言うのではないが、それでも、こちらの知見が多少増えてみると、以前には思わなかったようなことがある。例えば、第6章では、「サロゲート」を扱っているのだが、BMIなどの話を知ってみると、p.145所収の石黒氏の疑問には並々ならぬ意味があるように思われる。すなわち、サロゲートと(あるいは、すでにジェミノイドでも)操作者との一体感に至る脳活動の様子とか、さらに、サロゲート=ジェミノイドが延長された「自己」として脳機能上定着した後で、サロゲートに事故が生じる、あるいは、極端な場合、サロゲートの「突然死」が生じたとき、操作者に何が起きるのか、興味がある。もちろん、危険すぎ

て実験のできることはないし、(拡大) BMI の倫理原則に反するはずのことではある (114 回記事参照)。ただし、サロゲート＝ジェミノイドに個性があるということではなく、飽くまでも操作者の感覚の延長ということであるが、操作者とジェミノイドが似ても似つかない場合には、一体感の醸成が成り立たないというものでもあるまい。

第7章にも重要な指摘がある。すなわち、

何かを作り出すということには、二つの側面がある。一つは「人間とは何かを知る」ことだ。

…

むしろ人間の能力を自覚したとき、それが人間固有のものであるかどうかを確かめるために創造的な活動が生まれるのである。人間について少しでも理解を深めたいという根源的な思いが創造を導く。

もう一つは、「作り出したものを誰かに伝える」ということである。

…

誰とも関わることなく自分の価値基準を作ることはできない。どんな人でも、どこかで他人と自分を比べることによって目標を定め、その目標を達成することで、社会の中で位置づけられたいという思いがあるはずだ。(pp.156-157)

要するに、人間は誰もが社会性を帯びて初めて人間として成り立つのであり、かくて、上のように考えて、

何かを作ることは結局のところ、自分を知るための行為である

と著者は喝破する (p.157)。著者はさらに進めて、なぜ人間は自分を知ろうとするのかと問い、根源に性的情動を認めるのだが、しかし、そこで、ロボットの「性」の問題が現れる。動物や人間の「性」の模倣物には留まらない可能性があり、事態がややこしくなる。そう言えば、昔、バーバレラという劇画があった (検索してみたら、ウィキペディアに記事がある)。著者は、社会における人の存在価値を考察し (pp.160-164)、種々議論を重ねて、

自分の存在価値を見つけるには、自分に自信をもつだけでは不十分である。むしろ、人を好きになることの方が重要だ。他人の存在価値を認めてはじめて、自分の存在価値も認められるようになる。このように考えれば、改めて人とは社会の中で生きる生き物なのだと思います

と述懐する (p.164)。

第8章では、著者は、技術と芸術の違いと、そして、関わりについて述べる。ここで論じられている内容は、当ブログの本来趣旨とも深く関わるのだ

が、われわれ（日本人）が技術的詳細に一種の美を感じるということが技術と芸術の融合を示しているという主張を著者は展開していない。むしろ、著者はそういう見方に飽き足らなさを感じていることが見える。順序は逆なのである。技術は芸術から生まれ、芸術は自然から生ずるという観察をし、さらに、技術は再現性が本質的な要素だが、芸術は直感性、つまり、人間であることが根本にあると言うのである。

173. (12.11.06) 週末を挟んでメンテナンスが長期間に及んでいるこのサイトだが、この間、東京往復をした。主な用務は現勤務先の同窓会東京支部会に顔を出すことであった。今考えると、少し前から風邪を引き込んでいたのだろうが、体調万全とは言えない状態で週末を過ごしたことになる。気候の変わり目の旅行は結構難しいものである。さらに、来週には、関西への修学旅行に同行しなければならないのだから、こじらせるわけには行かない。

さて、山中伸弥教授のノーベル賞（生理学医学賞）及び文化勲章（幹細胞生物学）決定から時日が経った。山中因子なる4種の遺伝子を抽出しえた事情について曖昧な記憶しか持っていないなと思い、多少は勉強しなければいけないと感じていたところ、帰途の羽田空港の売店で、Newton 12月号（ノーベル賞緊急特集）というのを見つけたので、購入し、機内で読んだ。内容的には、この雑誌の過去の特集を再編集したものとのことだったが、構成は、図解と解説によって、アイデアの概要をつかませようというのであった。

そもそも初期化因子候補を含む蛋白質の集団の選択がどこから来たのかというのが最初の疑問だった。それらは、胚性幹細胞の遺伝子群の中にあるに違いないというのが、山中博士の最初のアイデアであつたらしい。そして、丁度、胚性幹細胞の遺伝子群のデータベースというもっとも基礎的な知見が利用可能になっていたというのである。胚性幹細胞はすでに実現された多能性細胞（万能細胞）であり、したがって、その蛋白質群の中に初期化因子が含まれているとするのは確かに当然の見当であつたようにも思われる。ただ、技術的な詳細というべきものがあり、実際に初期化因子の候補となる蛋白質を特定し、検証するところまでには、相当の階梯があつたはずである。また、ヒトの皮膚細胞（線維芽細胞）から山中因子の添加により多能性細胞が得られたと言われても、その意味も簡単ではない。特に、当初の4種の山中因子には癌化因子も含まれていたが、それを除いても初期化は可能であるとのことであり、また、アメリカのトムソン博士は山中因子群とは異なる初期化因子群によってヒトの体細胞から多能性細胞を得たとのことなので、初期化の反応過程が（まあ）独立に複数あるのか、胚性幹細胞の遺伝子群の間に反応があつて、初期化のスイッチを押せば、その後の初期化過程そのものは本質的に一つなのか、その辺は少なくとも Newton の記事ではわからない。少なくともこの段階では、胚性幹細胞がなければ、山中因子もなく、そして、ガードン博士のアフリカツメガエルでの実験がなければ、エヴァンス、トムソン両博士の胚性幹細胞もなかったらうと言うことであろう。つまり、入り口と

いうべきガードン博士と出口というべき（マウスの線維芽細胞の）初期化因子を発見した山中博士がノーベル賞になったというわけだろう。

山中博士らによるヒトの多能性細胞、すなわち、iPS 細胞については、医療や創薬への応用ばかりが喧伝されている。それも悪いことではない。実際、ここまでの結果は、やや抽象化して述べれば、ある確立した種の各個体について、体細胞を初期化できるという話である。ヒトの場合、それゆえ、医療応用で免疫反応の恐れがないというのだが、本当に大丈夫だろうか。しかし、知的好奇心という点では、体細胞を初期化するにあたり、DNA を操作した細胞の場合はどうなるのだろうか。あるいは、もともとがカエルの実験が起源なのだから、初期化はカエルの場合でも検証されているのだろうし、魚類でも為されているのだろうとは思うのだが、どうか。節足動物などではどうか。ウニやナマコでは？さらには、まあ、妄想だが、進化の過程を遡行することができるか？と言ったようなことが、興味の対象になるのではないか。

要するに、医療工学的・医学的には、再生医療や創薬などが課題になるが、科学的には、第一に、初期化過程の完全な解明が課題であり、最終的には、進化の過程についてのいささかの知見を明らかにすることが課題になろう。もとより、Jacobi が Legendre に宛てた書簡（1830、Koenigsberg 発信）で述べたように、

Le but unique de la science, c'est l'honneur de l'esprit humain.

（科学の唯一の目的、それは人間精神の名誉である）

なのだから。

付記：（平成 24 年 12 月 16 日）先日来、加齢のせい、体調を考えることが多い。老人は、どんなに治療しても、遠くない将来に死ぬのだし、それも予め時期がわかるわけではない。老人だって急逝することがあるのである。そうしてみると、iPS 細胞の応用で話題になる再生医療や創薬だが、いくつか疑問を覚える。例えば、費用対効果ということを考えると、実際の適用は、”富裕層の老人”を当てにすることには道義的な問題があるかも知れない。かと言って、”若年の恵まれない境遇の人たち”なら無条件に対象としてよいか、というと、経費の捻出についての理念や哲学が不可欠なのだから、やはり問題があろう。つまり、”個”の救済なり治療と”社会”の安定なり運営なりの相反に関して新たな哲学を展開しなければなるまい。医療は経費が掛かり、経費を要するのは医療だけではなく、しかも、個への医療の優先順位は無条件に高くてもよいのか、といったことを”哲学的に”論じておかなければならないということである。例えば、iPS 細胞関連に選択集中的に投与される多大の経費（国税や国債に拠る調達）が正当であるとされる判断の根拠やそれを導く哲学は論じておかなければならない。もちろん、それだけではない。高額な医療や生命科学研究は経済的繁栄が前提になるが、経済的繁栄を支えるのは金融取引だけではなく、飽くまでも実体経済の繁栄にあるはずで

ある。しかし、実体経済を支えるのは誰なのか。また、どういう環境下で実体経済が廻っていくのか。こう考えてみると、これは日本や米国だけの問題でもないし、iPS細胞だけの問題でもない。結局、生きるということはどういうことか、という問いに取り組んでいるかどうか、この意味での誠実さが根底にあることを忘れないことだろう。

174. (12.11.17) また、関西修学旅行の時期になった。今回は、本一冊と計算ノートと持参したが、計算をするための下準備の稿を用意することで出発前の時間を使ってしまい、旅行先での空いた時間、具体的には、京都での半日余りの使い方の予定が全く立てられなかった。持参した本は Brian Rotman の 2008 年の物で、慌てて読まなくてもよいので、結局、手付かずに終わった。

計算だが、円環体の熱方程式の解の構成の続きである。参照文献なしで続けているので非能率極まりないが、少しだけ進んだが、まだ、十分ではない(166回記事参照、ああ…)

京都では、何も京都でなくて観られるはずだが、京都シネマで

チキンとプラム あるバイオリン弾き、最後の夢

という映画を観ようと思った。順序としては、京都シネマで短い映画を観ようか、というのが先で、京都シネマのサイトに入って、適当な映画を物色した結果である。フランス語を久しぶりに聞きたいと思ったからかも知れない。

半世紀余り昔のイランが舞台であるようだが、登場人物はすべてフランス語で会話をしている。ややこしい悲恋、むしろ、錯綜した片想いの恋の物語のようで、しかし、それなりに考えさせられた。

実際、わたくしが単に全く知らなかっただけだということが、鑑賞後、シネマの売店で購入した、映画の原作という

マルジャン・サトラピ：鶏のプラム煮

小学館集英社プロダクション、2012.

ISBN978-4-7968-7106-8 C0979

を見てわかった。これはモノクロの BD Bande Dessinée つまり、仏語コミックの翻訳であって、著者のサトラピはイラン系フランス人で高名な BD 作者であった。原作とあった書物を小説と思って買ったのがおかしく、実際、B5版なのだから、小説のわけはないのに、変な思い込みをしたものである。コミックとわかっていたら買わなかったかという、そうでもないのだが。映画パンフレットを購入しなかったのは、しかし、失敗であった。

コミックは、アルジャン・サトラピの大叔父のナッセル・アリーという天才的なタール（イランの弦楽器）の奏者の死の事情を描き出したもので、映画は原作コミックとは若干設計を異にしているが、本質的なところは変わらない。映画では、タールをバイオリンに変え、ナッセル・アリーを世界的なバイオリニストにしており、他にも、イランの固有の地域性を一見薄める工夫に満

ちている。さらに、コミック本に比べ、人間関係も骨格部分を除き、単純化され、わかりやすくなっていると思う。翻訳に付されている解説や、訳者のあとがきでは、著者のイラン的心情が強調されているが、著者を含め、一族にはイスラム革命を契機に亡命を余儀なくされた人たちがいるようでもある。

ストーリー自体は、バイオリン（タール）の天才的奏者であるナッセル・アリーが意に染まぬ結婚生活の伴侶との感情的行き違いから師から受け継いだ大事な楽器を伴侶に壊され、その音色を代替の楽器では到底再現できないことを悟って世をはかなみ、死を図り、死に至る一週間の絶食の間、ナッセル・アリーが想起する人生を語るものであり、その核となるのが、タール修行に赴いたシーラーズで出会った時計商の娘イラーンとの相思相愛の恋を父親に壊された経験であった。ナッセル・アリーはイラーンを思いきれず、しかし、それゆえに彼の奏するタールが深い音色を帯びたということでもある。もし恋が実っていたら、ナッセル・アリーは音楽家として大成することなく、イラーンの父親の懸念したような、ただの甲斐性なしでしかなく、したがって、また、恋は現実の前に終わったであろうが、イラーンも決してナッセル・アリーを忘れていなかったことが最後にはっきりと示される。

ところで、イラーンという名前なのだが、この意義が、映画を観ているとき、コミック本を眺めているときには、よくわからなかった。今、この記事を書きながら、まさに、イランの国名そのものであることに思い当たった。もちろん、イスラム革命と著者や著者の縁者たちの亡命を、いわば、壊された恋に対比もできる。しかし、話の構造は、もっと複雑で、ナッセル・アリーが死んだという1950年代の末期がイランにとってどんな時期だったのかわからないと的確な理解はできないように思う（当然ながら、わたくしにはできない）。共産主義者という弟アブディとナッセル・アリーの会話に、1950年代初頭の、イランの石油資源の国有化を図り、英米資本と対立して失脚した、モサデクという首相の話が出て来る。このとき、出光佐三がイラン原油の買い付けを行って、英系資本と対立したことは記憶にある。いずれにせよ、イランの地政学的重要性が、ロシア・ソヴェト連邦と大英帝国・英米の勢力圏の衝突を招き、その間隙を縫って、イランの内政の転変があり、そのような歴史が、このコミック＝映画の背景を為していると思う。

ナッセル・アリーは、1908年生まれとあり、亡父と同じ時代を生きていたはずである。映画の設定では、ナッセル・アリーは、20代後半から世界的バイオリニストとして演奏旅行を続けたことになっていて、亡父がいた1930年代後半のパリと思われる一シーンがあったが、実際は、演奏家であっても、大恐慌後の政治的な不安定と世界各地で直面したはずである。もちろん、話の筋としては、どうでもよいことながら、少なくとも映画ではその辺ははっきりさせない（コミックではイランの外に出ないのだが）。

175. (12.12.20) 日本経済新聞社主催の大学改革シンポジウム「秋入学と人材育成」の様子を見に行ってきた『追記：日経平成25年1月18日付朝

刊特集記事]。7月にも類似のものがあり、いささか期待外れだったので、今回も特に期待をしていたわけではない(第169回記事参照)。しかし、「秋入学」(第157回記事参照)の提案者でもある濱田純一東大総長を中心に、安西祐一郎 JSPS 理事長、川口清史立命館総長に加えて、日本マクドナルドホールディングスの原田泳幸会長という、四名の主役を、モデレーターの木場弘子氏がほどよく立てて、前回のモデレーター氏のような、むしろ無礼さというべきなのだろうが、尊大さがなかったのがよかった。

とは言うものの、シンポジウムとは言いながら、基調講演の後で、パネルの議論のようなものを集まった群衆が見守るというもので、フロアとの交流があったわけではないから、結局、何であったのかははっきりしなかった。前回も同様ではあったが、学生風の聴衆が多く、主催メディアの広報活動の一環という感が強く、それはそれで辻褄はあってはいたと思う。今回は、学生風の参加者よりも年配の人たちが多く、原田氏の指摘に従うと、企業の人事部門の人間もいたようである。それにしても、この手の話題に関心を示し、なお、このような「シンポジウム」に来ようという人たちは、どのような人たちなのか。

主催者挨拶の後で、濱田氏の『社会システムとしての秋入学』という標題の「基調講演」があり、東京大学が「秋入学」を提した背景の事情について、パネルの際の論点を挙げるという意味も籠めて、説明があった。

理由は三点あると言う：第一に、学事暦の国際化、第二に、社会の意識改革とカリキュラム改革、第三に、日本と世界とを同じ地平に置くとのことであった(濱田氏の講演は、スライドを使用せず、要旨の事前配布もなかったから、当方の怪しげなメモを、さらに、整理しての話なので、整理の間違ひがあるかも知れないが)。濱田氏は、事柄が簡単ではないことを強調していたが、要するに、日本の現実を踏まえつつ、東大の、あるいは、日本の若者たちの意識を、国際地平のものにしようということが、「九月入学」の提案の根底にあったと言うことである。[追記：要旨は日経1月18日付記事にある]

技術的には、第一の学事暦の国際化に伴い、高校卒業が三月である限り、四月から八月いっぱいまでの期間をどうするかという問題が生じ、これが話題のギャップ・タームということになる。第二の点に絡めて、ギャップ・タームを青年たちの多様性獲得、意識改革に利用できないか、ということになる。しかし、大学入学や卒業後の就職を含む社会的な習慣の醸し出している慣性の問題があり、社会の意識改革といわれる所以であろう。そして、第三の日本と世界とを同じ地平に置くということは、従前の日本型「成功モデル」の終焉の自覚とその後の階梯設計の話というわけである。したがって、「九月入学」の提起は、実は、東大の学事暦の変更に要点があるのではなく、日本の社会システムの変革と完成を目指すという、社会プロジェクトなのだ、と濱田氏は言うのである。そして、実際、パネルにおいて、すべてのパネラーが一致して同意したのは、まさに、この点にあったのである。

ただし、濱田氏のお話を伺っていて気になったのは、濱田氏がグローバル化と言い、世界と同じ地平に立ち、あるいは、ギャップ・タームを通じて、海外経験を積むことの意義として強調されていたのが、こうして、若い人たちが多様なアイデアを受け入れ、活かすことができるということだという受け身の姿勢があるように思われたことである。つまり、優秀な日本の若者が国内的な勉強だけでは縮小均衡に向かってしまうが、海外との異文化交流の経験を積ませることによって回避を図ろうということに目標を置いているように聞こえ、それが気になったのである。

濱田氏の説明の何が問題なのか。それは視野が十分に広くないということである。日本の若者も世界の若者も一緒になって新しい世界を作っていくのであり、今のような日本の社会システムのもとでは、日本の若者は新しい世界構築への貢献ができないではないか、というような、発想から出発してほしかったわけである。もちろん、世界への貢献と言っても、地元への寄与もそれに含まれる。そして、まさに、地元への貢献も世界への貢献という文脈で自然に理解できるかどうかが大変なのである。もとより、日本は危機的状況にあり、世界全体がどうこうという余裕はないことは承知している。パネラーの諸氏も同様であろう。安西氏は、例のタイタニック号の譬えを引かれ、ブリッジにいる人間、それはこの会場に参集している皆様であるが、と付け加えたが、この人たちは船客がボールルームでダンスに打ち興じている間に氷山との衝突と沈没の危険に気づいており、一刻でも早い進路変更のために手を打とうとしているところだと述べた。ただし、モデレーターの木場氏には、タイタニック号と聞いたときに、咄嗟には、その意味が取れなかったのか、あるいは、先走ったことを言わないようにしたのか、ややロマンティックな反応をしたのが、まあ、面白かった。

濱田氏は、ギャップタームを学内で議論する際、アメリカの大学の学生の海外留学制度を調べて、趣旨というようなものを論じた文章が見つからなかったと述べた。確かに、アメリカ企業などの世界的存在感というものもあるだろうが、やはり、何よりも、青年たちが新しい世界を作るのに貢献したいという気概を自然なものとして備えているかことが前提になって高等教育の設計がなされているかどうかの問題でもあるのではないか。後述するが、わたくしは、日本の問題の基本は、日本社会のこの辺りの意識の偏りにあると考えている。

日本の若者が、意識として、自分たちが新しい世界を作るのに貢献する義務がある、と意識するようになれば、今度問われるのは、それでは、日本の大学で学ぶということはどういうことなのか、日本の大学の役割とはどんなものなのか、というより根源的な問いと取り組まなければならない。そして、この問いに的確に答えることこそが、日本の大学が、日本の大学として、国際的に価値ある存在になることであり、そこの出身者が、日本の大学で学んだことを誇りとして、世界に貢献することが自然にできるようになるはずな

のである。企業サイドからは、余りにも悠長な、と言われそうなことではあるが、こういう意識の有無が結構決め手になるように思う。なお、この点については拙 HP に、まだ、大学在職中に意見を述べている（このページは整理しなければならないのだが、そのままになっている）。

他方、原田氏の指摘で記憶に残っていることは、日本の教育は恵まれすぎており、子どもたちは、育てられていて、自ら育っていかうという意識・努力の結果、大人になっているようではない、ということがある。つまり、濱田氏の提起し、目標とする、九月入学をトリガーとした社会プロジェクトは、高等教育だけの問題ではなく、日本の教育システム、社会システムそのものの根底に関わる問題だということである。もちろん、こう抽象的に述べると、自明になってしまう。どのパネラーからも話題にされたのが、正解のある問題、正解を求める訓練から、正解が必ずしもない課題、取りあえずの解答をしながら理想に近い到着点を探って行く問題解決能力の涵養などであったのである。具体的な事例として、初中等教育で導入されるようになった「ディベート」や「協同学習」が形ばかりで実を成していないこと、教員の指導力の問題、教員養成、したがって、高等教育の問題と、また、堂々巡りになってしまう。結局、いろいろと難点はあるとしても、九月入学が突破口だろうということになるわけである。なお、協同学習は海外の初中等教育では相当に普及しており、特に、最近、聞いた話では、今世紀に入ってから、同一年齢比較では、日本の指導要領の内容程度に留まっている国はほとんどなく、大体において同一年齢では指導要領の数年先の内容の消化に成功しているという。日本の教育の深刻な状況は、高等教育段階で突如始まったというわけではないらしい。

もちろん、丹念な国際比較なしでも、日本の教育システムが問題をはらんでいることは、その結果から見て今や明らかであり、これについての拙見は当然ある。さる受験情報誌でのインタビュー記事がネットに公開されているのでリンクしておくが、後半の方で、勤務先校の状況に特定されないことを述べている辺りで、今回のパネラー諸氏の見解とかぶっているものが多い。

なお、濱田氏からは、ギャップタームの使い方として、学内で意見一致の見られている方向性への言及があった。これは非常に合理的に聞こえたが、一方、入試の際の類別がどれほどの意味を持つのか、進学時の類を超えての学部選択が緩和されていくのではないか、その際、高校の進学実績のベンチマークテスト化している理科三類はどういう扱いになるのか、まあ、興味は覚える。他方、「多様性獲得」をうたい文句にしたギャップタームの学生放置は、新入生が内外の関連業者の「餌食」になるだけだろうし、考えてみれば、四月から八月までは海外の正規の教育機関は実質的に休業しているのであり、ハーバード何がしプログラムなどと銘打った場所借りをしたの業者プログラムに学生を参加させるよりは、東大内でしかるべきケヤをすることの方が合理的なのである。

なお、東大に限って言えば、結構問題が多いようで、女子学生比率に二割の壁があるとか、地方公立高校出身者が逡減しているとか、国際交流以前に、本来の知的資質の向上交流のための条件がなかなか改善されないことへの苦慮も濱田氏の口からは漏れた。そう言えば、九月入学と聞いて、桜の季節はどうしてくれるという反応もあったとかで、まさに、タイタニック号のボールルームでダンスにうつつを抜かしている連中らしいことではある。しかし、もっと深刻なことは、このような反応自体が日本という国をよく知らないからこそ起きるものであることの自覚がないことである。桜の件は、沖縄や北海道・東北、あるいは、本州でも山岳地の人たちに尋ねてみる手間を掛けるだけでいい。今後の日本のためには、こういう視野や経験の狭さに気づかない人たちの数をできるだけ減らしていかなければならないのだとわたくしは思う。

付記（平成 25 年 1 月 17 日）：浜田総長の挨拶が東大サイトにある。関連して、これについて、秋入学の後退のように、否定的な報道をする日本の大手メディアがある（一例）。日本の大手メディアは健全な日本があって初めて存続しているということの認識が十分なのだろうか。東大の九月入学提案の意義は、浜田総長の仰るとおり、日本の困難な状況の改善の方向を目指しての提案なのである。メディアの営業政策と衝突することはあるかもしれないが、もし、そうなら、正直にそう言うべきだし、もちろん、そうなれば、健全な日本ということへの提案と日本の大手メディアの目先の営業政策とが整合しているかどうかという議論になるだろう。もちろん、このような展開こそ望ましいことなのである。

176. (12.12.23) 天神のジュンク堂でパンフレット様の出版物

小倉紀蔵：東アジアとは何か ― 〈文明〉と〈文化〉から考える
弦書房 2012 福岡 U ブックレット
ISBN978-4-86329-080-8 C0021

を見つけた。薄っぺら（全 64 ページ・本文 58 ページ）というのがよく、手元にある

小倉紀蔵：創造する東アジア 文明・文化・ニヒリズム
春秋社 2011
ISBN978-4-393-36635-6 C0010

の内容概説になっているのではないかと、思い、購入した。書物の方は、記号が多用されているが、記号の必然性がわからず、厚さもあって、手つかずのままなのである。

その点、上記のパンフレットは確かに薄くてよいのだが、小倉氏の大事な概念が十二分に展開されているわけではなく、わかりやすいというわけではない。そもそもが講演記録であり、講演の表題が「創造する東アジア―文明・文化・ニヒリズム」であったのだから、確かに、解説のはずなのだが…。

著者の小倉氏が、陸前南部の人であり、(坂上田村麻呂に投降した)阿弓流為に遡る郷土の英雄への想いを忘れず、そのことが明示されているが、敢えて言えば、これらの著作にも反映されているのだろう。小倉氏が、韓国に強い共感を覚えておられるらしいゆえんかも知れないと考えるのである(97回記事参照)。

小倉氏の著作のメモを作ろうと思っているうちに、NBonline 掲載の福島香織氏の記事「“良き独裁”強化か、民主化への政治改革か」で紹介されていた

陳冠中：しあわせ中国 盛世 2013
新潮社, 2012
ISBN978-4-10-506361-0

を入手して、読みふけり、小倉氏の著書のことはすっかり忘れてしまった。

ところで、この陳氏の小説だが、一部だけは上記福島さんの記事で紹介されている。原書は、2009年刊、すでに諸国語に翻訳されているとのことだが、中華圏では、肝腎の中華人民共和国内では発禁なのだそうである。プロットとしては、初老の老作家老陳の旧知の女性小希への思慕恋愛が全体の縦糸になっているのだろうが、舞台は、発刊当時からみて4年後の中国、主に、北京と考えてよいようだ。世界経済は、著者の言葉で「氷火期」、つまり、大不況にあるが、例外的に、中国だけが繁栄しており、中国資本は全世界に強い影響力を及ぼし、そして、中国人民は、繁栄による生活水準の向上に、みな、少なくとも99%は、大いに満足している、そういう中国世界を描いた小説である。

第三部、特に、政治局員とされる何東生の告白がいい。何は、非常に聡明で勤勉、冷静で教養も深く、大局観にあふれ、しかも、観察力に富み、計算高く、なお、果敢である。こういう人たちが中国の政治局員なのだとはいえるのではないだろうか。何によって、すでに二年余りになる中国の繁栄と人民の幸福感(=盛世)の種明かしのようなものがされるのだが、一方で、何の発言には、確かに、中国要路の人たちが、一般的に、想定しているであろう中国の世界政策の可能性の一つが詳細に語られているように思われる。

この小説が中国内で発禁処分になったという理由がよくわからないが、それは恐らく内政に関係する部分での何人かの登場人物の発言や挙動が問題になったのかもしれない。例えば、何の話聞きながら、小希が、民権を犠牲にして何が繁栄か、幸福感か、と叫ぶくだりがある。別の登場人物は、連邦制が必要だと口走る。この辺が本当は引っかかったのかも知れない。あるいは、何たちの内政面での政策について、中国的ファシスト政権を防ぐための選択肢としてこれしかなかったと、何が言う辺りがいけなかったのかもしれない。

世界政策としては、世界のブロック化による棲み分けの話があり、その肝が、中日不可侵条約による「中日同盟」であり、中日間の経済活動の相互制約の完全撤廃、そして、人的交流の自由化の実現であって、(これらは2013

年の段階では実現されていることになっているようだが)、かくて、日本は「脱米入亜」し、東アジアには、中国を「兄」とする東アジアモンロー主義の経済圏 — 東アジア太平洋共同体 — ができあがったのだ、と何は言う。「中日同盟」に関しては、双方に内部抵抗があり、特に、中国は、抗日・反日を国家成立の正統性の根拠の一つにしていたので、抵抗も多く、また、東シナ海の権益(尖閣その他のことである)については(共同開発だそうであるが)日本に譲歩しすぎだ、国辱だ(「喪権辱国」とあるが)と反発が強かったのを、抑えたのだ、とも言う。その際の中国側の担保は、日本の現行憲法順守、軍事独立阻止、核武装阻止なのである。何の発言の体裁を取っている、この辺りの著者の国際的、地政学的な感覚はみごとなものである。中国の立場からのこの領域の見え方がよくわかる。

ついでに言うと、何はインドとの関係にも言及しており、中国の資源補給線、つまり、アフリカと中国沿岸に至る海路がインド洋に及んでいること、マラッカ海峡や南シナ海が中国にとって死活の重要性を持っていることにも触れており、さればこそパキスタンからの陸路の補給線の重要性が強調されている。

もちろん、これは近未来小説であるけれど、何の述べている、特に、東アジア政策は、中国側の希望的な政策としては、大いにありうるのではないだろうか。だが、問題は、外交政策というものが基本的に抽象度の高さゆえに当該国の内部事情が二国間の関係に必ずしも決定的な影響を及ぼすものではないにも関わらず、何が示唆する「中日同盟」その他の深い同盟関係にある二国関係になると、それぞれの統治構造の同質性が絶対的な条件になることだと思う。これだけ周到に立案し、実行に移せる政治局員たちは、中国の内部的な障害の除去もさることながら、基本的に(歴史的にも社会的にも全く)異質の日本に対する「工作」をどのように展開したことにしてあるのか、それはこの小説で述べられるべきことではないものの、わたくしは興味を持ってしまう。何は、中国人民の反日感情と日本国民の対中感情の関係を分析し、日本人の対中感情は基本的に中立的だが、対米感情は、敗戦を契機として、根本において反米的なものだろうとしており、この点を基礎として、経済利害の誘導と人口減に基づく国力低下ということに、日本の「脱米入亜」の蓋然性を見ているようなのだが。

ところで、何の一連の発言に対して、老陳が

何東生、あなたは典型的な儒者だ。頭は治国平天下のことでいっぱい、一日中官となることを願い、皇帝の師匠となり、権力に近づくほど興奮する。権力の核心に入るや権威主義専制を支持し、絶対的権力を以て大事をなすと言えば聞こえはいいが、実際は個人の欲を燃えたぎらせているんだ。大事をなすことは必ずしも良いことをやることとは限らないし、とんだ悪事をしでかして、以後に災いが絶えないこともある。 …

と言うところがある (p.280)。儒者とは何であるか、ということを知ることができるように思う。実際のところ、儒者と『論語』読みとは別物であろうが、巷に『論語』を持ち上げた書籍類が目立つ昨今、

金谷治訳注：論語

岩波文庫 (改訳) 1999-2008

ISBN4-00-332021-2

を通読して思うのだが、論語には、対等な人間関係を論じた項はなく、また、その結果だろうが、感謝の意を含む対等者の相互関係の倫理の扱いが完全に欠落している。孔子の思想とは序列関係の遵守強調に尽きると言えるのではないだろうか。

『論語』の思想が、そのような発想を中華世界に植え付けたというより、もっと古くから漢族にあった、そのような発想を整えたのが、儒学であったのかも知れないな、と思う。もとより、遵守されるべき序列の長は、天であるが、実際は、天の代行としての皇帝、つまり、執政者である。老陳の指摘の本質は、この構造が現代に至っても全く変わっていないということだろう。さらに、老陳は気づかないかもしれないが、対内的だけでなく、対外的にも同じ発想で臨んでしまっていることが、何の陳述から伺えるのである。

付記：(12月28日) 学校法人の理事会の帰りに、駅の本屋に立ち寄り、

富坂聰：習近平と中国の終焉

角川SSC新書 角川マガジンス, 2013

ISBN978-4-04-731590-7 C0295

という本を見つけた(発行年月日は、2013年1月5日とある)。上掲「しあわせ中国」と併せて読んでみると、現代中国の統治構造が、日本の、例えば、霞ヶ関や永田町あたりで起きているらしいことと付き合っ身につけたようなセンスで、日本の政治家やジャーナリスト、あるいは、企業人が、思い込みでもって中国を見てはいけないことがよくわかる。「太子党」だとか「団派」、あるいは、「ナントカ閥」の類が、中国の国や党の運営で決定的な要素になるわけではない、ということ、富坂氏は丹念に説く。

標題にある「終焉」というのは誤解を招きやすく、適当ではないと思うが、実際、富坂氏の習近平総書記に対する期待は厚いものがあるようである。「中国の終焉」は、その可能性も籠めて、この書物の主題とは言えない。富坂氏は、習を中心におくと、極左に失脚した薄熙来、極右に、汪洋を置き、17大、18大の党人事と絡め、文化大革命以来の中国共産党や中国の歴史と、習の総書記就任に至る径路を探ってみせる。文革のトラウマと、天安門事件、胡耀邦の追憶、などが、実は、ずっと党の最高幹部の間にあるというのだが、実際のところは、検証のしようもないような気がする。

時宜性だけの解説書かと思ったが、中国の諸政策の連続性、あるいは、むしろ、根幹部分の不変性、その依って来る所以、の解説であった。富坂氏が学生

時代に遭遇した事件の記憶を述べたところがいい（エピローグ pp.177-178）。胡耀邦失脚の原因になったという、警備兵の措置は、武装している以上、当然なので、自国民に対し発砲することは統治の失敗に他ならない。今、天安門事件が隠蔽されるのは、まさに、その理由だろうが、この事件と正面から向き合うことができるようになったとき、それは、指導者次第というもの、今までの中国は「終焉」を迎えるともいえるかもしれない。習近平の亡父習仲勳は長老たちに対し胡耀邦の擁護をしたというのである。

9 2013

177. (13.01.12) 大晦日から正月三日にかけては、東京方面に旅行していた。基本的には鎌倉でごろごろしていたのだが、そこにあった三冊の小説本に目を通した。つまり、かつて話題になったもの：

池井戸潤：下町ロケット 小学館
三浦しをん：舟を編む 光文社 2011
沖方丁：天地明察 角川書店 2009

を遅まきながら読んだわけである。いずれも、技術の質が物を言うような仕事をしている人たちの話であるが、それぞれに著者の持ち味が反映されると、こう言ってしまえば身も蓋もないかも知れない。わたくし自身の関心から言えば、沖方氏のものが一番近いわけだが、幕府天文方の渋川春海（安井算哲）（1639-1715）の評伝と言えよう。和算家の関孝和が登場し、建部賢弘・賢明兄弟への言及もある。沖方氏は、渋川春海が地動説を受け入れていたかのように書いているが、測量家であった以上、「地球」という観念は持っていたろうが、だからと言って地動説には直結しないのは、Jean Dominique Cassini（1625-1712）の例がある。

Eli Maor: Trigonomic Delights
Princeton University Press, 1989

に拠れば、

Amazingly, he was also one of the last professional astronomers to oppose Copernicus's heliocentric system, and he remained convinced that the earth was a prolate spheroid, despite mounting evidence to the contrary.(p.69)

とあるのである。

さて、帰途、羽田空港で、

小林哲夫：高校紛争 1969-1970
中公新書 2012

ISBN978-4-12-102149-6

湯浅邦弘：論語

中公新書 2012

ISBN978-4-12-102153-3

を購入し、機内で小林氏の著書を斜めに読んだ。この書物中に現れる高校のこの時期の出身者は、知人に結構多く、他方、わたくしは、帰国直後の時期で、大学紛争も（駿河台近辺を除き）基本的に収束した後だったと思うので、高校でこういうことが起きていたとは、ついぞ知らなかった。

このうちの高校に同時期に在校していたはずの知人に読後感をメールしたところ、小林氏から取材を受けたが、その後のことは注意していなかったという返事をもらった。また、ごく近くにいる同僚に話したところ、やはり、遠い少年期の思い出が蘇ったようであった。メールでは、現在のわたくしの立場を反映させて

ただ、「管理者」の立場で見ると、総じて、管理側や教員側のナイーブさが目立ちます。生徒側がナイーブなのは当然ですが、学校をナイーブな世界として防衛しようとするのは、何というか、高校生にバイク免許の取得を禁じているのと同じようなもので、学校を出た途端に全く違う世界に直面させることになるということへの想像力を欠いているとしか思えません。もっとも、ワクチンのようなことをすることが誠実かという点、そこも問題があります。今は、「高校紛争」的な要素が希薄ですが、理屈の上では、今後もありうることでしょう。そのときに適切なアイデアは何か、それは検討を続けておく必要はあると思います。

というような付言はした。

湯浅氏の『論語』については、漢代の墳墓から出土したという竹簡類の研究成果を反映させての著ということであり、また、わたくし自身は『論語』の思想なるものに否定的と受け取られるような言辞を弄していることもあり、多少とも詳しく（改めて）論ずる必要はあるだろう。

実は、この間、日経の書評に啓発され

トマス・レヴェンソン：ニュートンと贋金づくり

白楊社 2012

ISBN978-4-8269-0167-3

を読んでいた。アイザック・ニュートンの造幣局監事（後に、長官）時代の話で、天才的な贋金づくり ウィリアム・チャロニーとの対決を中心に述べたものである。ニュートンは、性格的にかなり偏狭で、しかも、天才的な洞察と緻密な計算に基づく科学的な業績で知られているだけに、政治的にも行政的にも極めて有能な造幣局監事としての姿には驚くが、レヴェンソンは、ニュー

トンの研究習慣、特に、錬金術の研究過程、が極めて実証的かつ効率的であったことに注意して、監事としての業務遂行が快調に進んだのは不思議ではないと言う。アイザック・ニュートンという人間の評価を、自然哲学者・ルーカス教授のニュートンだけを見て行うべきではないことはよくわかるものの、プリンキピアと錬金術は「神」への接近という意味で、理解できるが、造幣局監事への転身は、そのような論理にはなかなか載るようには思われない。しかし、監事になる前に、ケンブリッジを代表する議員として議会にいたこと、王権神授の理念から、貨幣に刻印される王の肖像の背景に「神」を見ていたのではないか、というレヴェンソンの指摘も否定はできない。

いずれにせよ、ニュートンの段取りのよさと賈金退治によって、銀貨の改鋳は成功したが、貨幣の品位を維持したために、イギリスの銀貨は大量に大陸に流出してしまい、結局、イギリスは銀本位制から金本位制に移行せざるを得なくなったのだという。もし、ニュートンがチャロニーに敗れ、チャロニーが造幣局を牛耳るような事態が生じていたら、どうなっていたらどうかと考えてしまう。恐らく、改鋳される貨幣の品位は下がるだろうから、銀そのものは、チャロニーを含めて、腐敗した役人や貴族のポケットに入り、他方、貨幣の品位が相当に下がったのなら、流出は起きなかったということになるかも知れない。そうだとすると、イギリスは金本位制に移行したのだろうか。

178.(13.02.04) さて、『論語』であるが、

湯浅邦弘：論語（中公新書 2153）
中央公論新社 2012
ISBN978-4-12-102153-3

は、帯の表の方に

新出土文献研究の成果を踏まえた『論語』入門決定版

とある。そして、

より深く、より真摯に、孔子の言葉と向き合うために

とあり、裏には、

孔子の言葉と切り結び、初めて見えてくるもの

という見出しの下で、

… 通り一遍ではない、新たな古典の読み方を提起する。

で終わる本書の紹介がある。

本書における『論語』、あるいは、「孔子」の扱いの根幹をなすのは、論語述而第七の第五章

子曰甚矣吾衰也久矣吾不復夢周公也

の「夢」の意味を廻る考察である。つまり、著者は、(岩波文庫：金谷治訳注「論語」、p.129、のように)

先生がいわれた、「ひどいものだね、わたしの衰えも。久しいことだよ、わたしがもはや周公を夢にみなくなってから。」

と訓ずることが、孔子や儒者の「本心」と考えられるものを想像するとき、適当か、という疑問を覚え、この章が、『論語』という古典著述の中で、「不協和音」をなしているのではないかと、読者に問いかけ、そして、そのわけを本書を通して解きほぐしてみせようということなのである。

『論語』は、中国の古典として、長い注釈の歴史があり、秦の始皇による「焚書坑儒」の話が信頼に値するものとするれば、紀元前三世紀ごろには、儒、つまり、孔子の追随者とされる人たちは何がしかの勢力を成しており、少なくとも、秦による統治上は無視のできない障害となるようなものであったろうとは想像できる。もとより、その「儒」が、今日、われわれが信じているような「孔子」の学説を奉じていた人たちであったかどうかは明らかとは言えまいが、漢代以降の統治体制の中では、「孔子」の学説は、基本的に、今日信じられているような形になっていると考えられるべきであろう。そして、それに伴い、『論語』の注釈や解釈の長い歴史があるというわけであろう。

『論語』に限らないが、聖典とされる古い文献の難しさは、その文献が成立したであろう、その時代の実質と、聖典視されるに至った後代の実質に乖離があり、成立当初には想像もできないような解釈が後代に提起され、それを、一方では、古典には永遠の生命があると言いながらも、他方、よくよく考えてみれば、トンデモ解釈の横行とも言えるかも知れないことが必然的に起きてしまうことである。こう考えてみると、伝承に従う限り、『論語』や孔子の価値は、秦や漢の時点で、すでに微妙ではなかったかと思われるものの、ともかく、漢代には珍重され、以来、解釈の主眼は変化したが、今日に至るまで、重視され、孔子は「聖人」の典型とされるに至ったわけである。

断るまでもなく、ここで展開された「暴論」は、わたくしのものであって、著者のご意見ではない。ただし、このブログの陰の主役の William M. Ivins, Jr. による「思想」の賞味期限についての注意：

思想の年齢は、思想が有効性の明言であった時からこんなにも遠くなってしまうと、思想の健全性に疑問を投げかける

(第9回記事参照)の応用ではある。ただし、Ivins は自ら言うように斯界のアマチュアであり、わたくしはただのナイーブ(プロフィール参照)である。

著者の湯浅氏は、専門の研究者であるから、もとより、こんな乱暴なことは主張されない。しかし、「夢」という語彙が、確認できる範囲で、古代中国以来、どういう文脈で用いられてきたかを調べ、

中国古代において夢は、人間精神との関係よりも、むしろ天との関係を強く持つものと意識されていた。夢は天の声として、未来

の吉凶を告げ、人間の言動に深く関与していった。古代の文献に
天と人とを結ぶ媒介としての夢の記述は数多い。

ことを注意している (p.213)。述而篇第五章の「夢」を周公への思慕への言
及と見ての解釈が必ずしも当を得ていないとするわけであるが、「周公」が
象徴する意味も違って来る。天に抛る「執政」の委嘱が要と言うことになる
ようである。著者は、解釈史を検討し、著者の見解が、実際に、歴史的にも
全く見当が違っているわけでもないことを示唆している。湯浅氏はそこま
ではおっしゃらないが、わたくしには、要するに、「脂ぎった野心家」であった
孔子が、結局のところ、有力諸侯に相手にされず、失意のうちに、何と
言うか、われわれが今日理解しているような「聖人君子」の見本のように
なった経緯が、この第五章の句から読み取れるようにも思われる。しかも、
こう考えた方が、前々回 176 回記事で引用した老陳の何東生への「儒者の典
型」という批判の語と整合するのではないだろうか。

ところで、湯浅氏の著書の紹介から、脱線し、暴走してしまった。湯浅氏
のおっしゃることは、「おわりに」にあるように

人文科学の分野には、それぞれの領域に膨大な研究の蓄積があ
る。特に、古代の文献を対象とする古典学の場合は、数十年、数
百年、時には千年を超える研究成果が積み重ねられている。そこ
に新規参入し、独自の見解を提起するのは、まさに至難の業であ
る。(p.272)

というわけで、

新説を打ち立てるには、二つの方法しかない (p.272)

ので、第一に、近年の新出土文献を利用すること、第二に、(新出土文献に関
連して) 研究の視点をみがくことである、と著者は言う。

本記事では、少なくとも、ここまでは、第一の方法、近年の「新出土文献
を利用すること」の方を飛び越えて、第二の方法の適用例として、著者が紹
介している話題に触れたことになる、脱線しつつではあったが。

なお、第一の方法として、著者が挙げているのは、漢代の墳墓から出土し
た(とされる)竹簡類で、これらにより、『論語』がほぼ現在の形に整理され
た年代の下限が推測されるということのようである。著者は、これらの資料
を利用しながら、『論語』の主要な章の背景や解説を、諸種の注釈史や近世江
戸期の日本の儒者の解釈とも、比較しながら、説明する。

拙見(「拙」に極まっているが)では、『論語』の注釈のもっとも基礎に置
かれるべきものは、

孔子にとって「政治」とはどういう営みであったか

を特定することでなければならない。意外なことに、そもそも、治まるとは
どういうことなのか。統治とはどういうことなのか、被統治者たちの感情を

宥めることが本質的なのか、そういう基本的なことについての孔子の見解が、『論語』からは見えてこないように思われる。

実は、湯浅氏の「夢」の解釈と密着することとして、「夢」を「天と人との関わり」と考えるということは、『論語』を政治的文書と解すべきことを示唆しているようでもあり、さらに、もともとそう考えるならば、『論語』を道德書と思いついていたために生じたであろう、この述而第七篇第五章は不協和音ではないかという感覚はなかったはずである。実際、今日の孔子の思想の理解から考えて、なぜ、焚書坑儒というような過激な弾圧の対象になったのか、直ちに理解できないところがある。孔子の本来の思想が、今日に伝わっているものとは大いに異なっていた可能性も排除できないのではないかと、思われる。『論語』なら『論語』の断簡として後世に伝承されたものは無害化されたものであったかも知れないが、「夢」に本来の思想の面影が残ったということがあってもおかしくはないであろう。

孔子の政治観は、当然ながら、孔子が生きていた時代や社会の性格の反映である。天を頂点とした精緻な垂直構造による秩序が理想とされ、個々の垂直関係の質に応じて、礼、悌、忠、孝、信などといった語が使い分けられていたように見える。もちろん、孔子の生きていた時代には、人間とは何か、生きるとはどういうことか、などということはいささかも問題にはされなかっただろう。謎と言うべきことは、後代の中華諸帝国が成立していた時代や社会の性格は、孔子のものとは大違いであったはずなのに、解釈を改めるだけで、なお、論語が意義ある文献として、尊重されてきたことである。もちろん、同じことは江戸期以降の日本についても言える。

『論語』には確かに道德書としての側面もある。だが、道德書としては普遍的というより、人間観が偏っている上に、むしろ、陳腐である。対極にあるはずの「毛沢東語録」と、この意味で、比較してみたいという想いがある。しかし、「毛沢東語録」は手元にはなく、今、入手できるものかどうかはつきりしない。

付記（平成 25 年 2 月 26 日）：「毛沢東語録」であるが、入手できた：

毛沢東：毛沢東語録 平凡社ライブラリー（平凡社 1995. 手元のは 4 刷（2012））

竹内実氏の訳であり、訳者まえがきのほか、解説 2 編（津村喬・田崎英明氏）が付いている。さらに、本文にも詳細な注が多数用意されている。

付記 2（平成 25 年 4 月 1 日）：ちなみに、勤務先の図書館に

陳東林・苗棣・李丹慧（編）、加々見光行（監修）：中国文化大革命事典
中国書店 1997
ISBN 4-924779-32-6

という大部の書物があった。中国書店は、九大のそば、福岡市東区箱崎にあったように記憶しているが、博多区になっていた。

179. (13.02.22) 年初に、ブログ開設6周年というメールが届き、記事数としては漸く180回に届こうか、という段階だけど、どんな記事をどの回に書いたか段々わからなくなってきたので（これは年数の経過だけでなく、各回の表題の付け方もよくないからだが）、少なくとも昨年末までの記事を集めてハード・コピーを作ろうと思い、しばらく前から、記事のコピーをTeX化している。さらに、索引について喧しいことを言っている手前、索引も作っている（TeX化した理由の一つ）。

— 昨年の記事までは、一応TeXに直したが、まだ、昨年末までは辿りついていない（今の時点で、17回分残っている）。月に一二度しか記事を書いていないにもかかわらずである。これだけで、dviファイルは、A4で420枚近く（約2000KB）になり、言及した文献のページだけで、8ページ（文献数143）、そして、不完全なままだが、索引ページが8ページになった。別に急いですることでもなかったが、これだけのヴォリュームになると、ハード・コピーというのは合理的ではない。多分、CDに焼いておくのがよいのだろうが、索引と文献だけは印刷すべきなのだろう。

ところで、今月の初旬は、勤務先校の高校2年生の修学旅行の引率として、ルスツ・リゾートに行ってきた。残念ながら、天候に恵まれたとは言えなかったが、スキーはしっかりとってきた。機材繰りやら天候やらで、予定通り行動できなかった部分もあったが、大事もなく、戻ってこられたのはよかった。例によって何冊か本を持参したが、ほとんど読めなかった。それどころか、帰途、新千歳空港で、二冊軽い読み物を買って、そのうち、一冊

津上俊哉：中国台頭の終焉，
日経プレミアシリーズ 184, 2013.
ISBN978-4-532-26184-9

を数日掛けて読んでしまった。津上氏の基本的な主張は、統計データを多用した上で、中国の生産労働人口が間もなく減少に向かい、人口オーナスの効果が現れ始めるので、中国の経済成長の減速は避けられないだろう、ということであるが、当然ながら、日本経済の将来にも大きく影響が及ぶ話である。それで思い出したのが、以前購入して、本棚に置きっぱなしになっていた

藻谷浩介：デフレの正体 — 経済は「人口の波」で動く，
角川 one テーマ， 2010
ISBN978-4-04-710233-0

である。こちらは、今世紀に入ってから日本の「デフレ」の原因は、生産労働人口の減少とそれに伴う購買層の縮小に基づく内需不振としており、この事実を踏まえた対策以外は、皆、傷を深めるだけだ、と言っている。ただ

し、この本は、東日本大震災の前に出版されており、手元にあるのは、震災後の第 18 刷であるが、初刷は 2010 年 6 月であり、震災の影響が読み込まれているわけではない。

大局的に考えて、津上氏の指摘も藻谷氏の指摘も、正しいのではないか、とわたくしは思う。ところで、新千歳で購入した、もう一冊は、

猪木武徳：経済学に何ができるか 文明社会の制度的枠組み、
中公新書 2185 (2012)
ISBN978-4-12-102185-4 C1233

だが（手元のは 4 刷、2013）、これは、まだ、目を全く通していない。

そこで、まず、津上氏の本だが、これは、第 176 回記事で触れた陳冠中の「しあわせ中国 盛世 2013」のように、現実を展開しないだろうという話でもある。

津上氏の書物は、「はじめに」と「結び」で、趣旨の大要はわかる。「はじめに」で、

中国経済の悲観的な未来を予想することは、中国コンサルタントをする私にとって自分で自分の首を絞めるようなものだ。しかし、あえて予想したままを書こうと思ったのは、今後の中国の経済成長が世界中で過大に見積もられており、いまやそれが中国と周辺国の外交・安全保障問題に看過できない悪影響を及ぼしているという思いを禁じ得なくなったためである。

という執筆動機が述べられる（p.5）。そして、「結び」に「日本人は心を強く持とう」という見出しのもとで、

日本は、いまあるストックをフル活用して成長を促進しようとしていない。

と指摘し（p.267）、

「失われた 20 年」を続けるうちに、日本人はほんとうに心が弱くなった。とくに 2011 年の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故をみてからは、心のどこかが折れてしまった感すらある。心が弱いから、現実を正視するところから出発できない。直面する困難を「誰かのせい」にしようとする。「危機感をもって努力すれば途は開ける」といった前向きな考え方ができなくなり、「身の回りのいま」を守ることに汲々とするようになっている（それは「いまを守る」ことにかえて逆効果に働くのが常なのだが）

と慨嘆している（p.267-268）。そして、

日本はこれだけ発達し、国民に暮らしやすさや安心を提供するだけでなく、世界の多くの人々が愛おしく思う国柄である。私には、

その国・社会がなすすべもなく衰えていくばかりの未来というのが、どうも想像しにくい。そうであっていいはずがないと思う。

と述べる (p.269)。そこで、

これからは「必要に迫られて国を開く」のではなく、そういう良さを活かして、世界から「人を引き付ける」時代にすべきだと思う。招き入れた外国人をやさしい日本色に染めてしまうのである。おそらく、それは聞こえのよい小手先のことで済まないだろうが、途を拓かなくてはならない。

と宣言する (p.270)。お気持ちはわかる。「やさしい日本色」なるものを(さまざまな視点から)分析・整理して、日本の「魅力」を明らかにすることも欠かせないだろう。

なお、引き続いて、「結び」の末尾で、石原慎太郎氏の十年前の旧著の文言を引用し、石原氏が主張されたとする、大量の移民受け入れによる日本再生に賛意を示している。しかし、津上氏のデータに基づきつつ、また、藻谷氏に従うならば、「大量移民」はどこに起源を持つのか、という話になりそうである。上掲、『しあわせ中国 盛世 2013』では、何東生は中日同盟下で毎年大量の中国からの移民が日本に向かうと言っているが、中国や、一般に、東アジア諸国の人口動態から、これは予測しがたいことにもなる。移民を必要とするかもしれない国は日本だけではないだろうということでもあるので、まあ、それぞれの国の魅力を競い合うことになるかもしれないが。

「はじめに」と「結び」の間には、10章：

- 第1章 中国は5年前には中成長モードに入っていた
- 第2章 「4兆元投資」の後遺症(短期問題)
- 第3章 中期的な経済成長を阻むもの 「国家資本主義」と「国進民退」
- 第4章 新政権の課題(1) 国家資本主義を再逆転
- 第5章 新政権の課題(2) 成長の富を民に還元(還富于民)
- 第6章 民営経済の退潮 一投資家の体験談
- 第7章 新政権の課題(3) 都市・農村二元構造問題の解決
- 第8章 少子高齢化(長期問題)「未富先老」
- 第9章 中国がGDPで米国を抜く日は来ない
- 第10章 東アジアの不透明な将来

挟まれ、これらを通じて、中国の社会上・統治上、さらに、人口動態上の困難が、中国経済の成長を阻害しつつあるということを公表された統計データやそれらを加工した多数の図表をもとに述べられる。第9章は、いわば、結論と提言である。第10章は、中国や周辺諸国の心理的歴史的感情についての考察であって、図表37: 東アジアの国際関係緊張のロンド (p.259) が興味深い。ここで、津上氏は

本書で取り上げた「少子高齢化」は日本と中国だけに限った問題ではない。韓国、台湾、さらにはタイまで東アジアを広く覆う共通現象である。対応を誤ると、「2050年の東アジア」は世界の注目を浴びる現在とは一変、すっかり活力を失って、世界から見向きもされない地域に転落する恐れさえある。そんな未来を控えているのに、軍拡と対峙外交をしているのはほんとうに愚かである。日中双方の国民にこのことを訴えたい。(p.260)

と言っている。

そう言えば、以前、評判に惹かれて購入して、そのままになっている

英『エコノミスト』編集部：2050年の世界 英『エコノミスト』誌は予測する

文芸春秋 2012

ISBN978-4-16-375500-7 C0098

という本があったことを思い出した。この本の方は読んでいないので、何とも言えないが、「歴史を動かした国際的な事件や合意の舞台裏とその歴史の意味を、各国の政権中枢まで入り込んで、描き出すという手法を得意とする」「日本を代表するジャーナリスト」⇒ 船橋洋一氏の解説だけは目を通した。出版後半年で、この本が完全に陳腐になったとは思わないものの、データというものは怖いものだという印象を得た。

藻谷氏の本であるが、「率」ではなく「実際の数」を見よう、ということが姿勢の基本にある。現在の日本の「デフレ」を話題にしているので、生々しい感じがあり、しかも、着眼点がメディアに流布され、目下の諸政策の基礎にあるものと異なっているだけに物議を醸しているようである。しかし、内容は、ある種の新興国（＝つまり、明治以降の日本）の経済成長、人口増加、社会移動の事例研究にもなっているように評価できると思う。しかも、世界的に、近年は、経済成長の過程は加速され、人口調節の技術は進化しており、社会移動も恐らく障害が減っているのであろうから、現在、急速に成長中の諸国の情勢分析においても参考になるのではないかとと思われる。

藻谷氏の書物の目次であるが

まえがき

第1講 思い込みの殻にヒビを入れよう

第2講 国際経済競争の勝者・日本

第3講 国際競争とは無関係に進む内需の不振

第4講 首都圏のジリ貧に気づかない「地域間格差」論の無意味

第5講 地方も大都市も等しく襲う「現役世代の減少」と「高齢者の激増」

第6講 「人口の波」が語る日本の過去半世紀、今後半世紀

第7講 「人口減少は生産性上昇で補える」という思い込みが対

処を遅らせる

第 8 講 声高に叫ばれるピントのずれた処方箋たち

第 9 講 ではどうすればいいのか☒高齢富裕層から若者への所得
移転を

第 10 講 ではどうすればいいのか☒女性の就労と経営参加を当
たり前に

第 11 講 ではどうすればいいのか☒労働者ではなく外国人観光
客・短期定住客の受け入れを

第 12 講 高齢者の激増に対処するための「戦中八策」

おわりに — 「多様な個性のコンパクトシティたちと美しい田園
が織りなす日本」へ

あとがき

となっている。要するに、藻谷氏は、一定の消費能力のある購買層を国内に確保することを政策目標にしなければならない、と言う。それなのに、それに逆行する政策が立てられて、当然ながら、効果はうすく、時ばかりが無駄に流れている、という指摘でもあるわけで、政策関係者などから反発されるということなのであろう。

藻谷氏自らの作成という数表や図表に説得力がある。第 4 講は「目からうろこ」であった。首都圏の比較的利便性の高い住宅地を歩くことがあるが、この辺りには若い人は住んでいないのだな、と感ずることが多い。もう大分前になるが、しかも札幌の話だが、真駒内駅に降り立ったとき、駅前の団地住民が高齢化し、小学校はなくなったことを知り、戦後の住宅政策に矛盾があったな、と思ったが、持ち家制度の普及が経済成長を支えた面もあり、難しいものだ、とも思わざるを得なかった（今や、真駒内駅の裏山にはヒグマが現れるとか）。第 7 講の関連で言えば、工学部に赴任した当初、同僚教授に、ロボット、ロボットと言うけれど、ロボットは消費しませんよ、と言って、君は変なことを言うとなしなめられたことを思い出す。

なお、第 11 講は、津上氏の書物の「結び」で言及がある外国人移民（恐らく労働者が中心）よりも実際の、しかも、消費力という点でも効果が高く、よい提案だと思う（移民受け入れは社会インフラの整備を必要とするが、現在でも、それだけの余力のない自治体が多いことを藻谷氏は指摘している）。

付記（平成 25 年 3 月 1 日）。最近、吉祥寺で若い女性が刺殺されるという事件が起き、容疑者として外国籍の少年が検挙されたと報道されている。東京郊外のことゆえ、この件について、（実質的な）外国人労働者受け入れに必須であるべき社会的インフラの不備が背景にあると、即断することはできない。しかし、地方で起きている類似の事件の場合には、そう判断すべきものが多いことを思い出した。また、外国籍少年が関連する事件事故の中には、確か、北関東での事故報道で、外国人労働者の子供たちが実質的な少年労働に従事させられていたことを疑うべきではないかというようなものもあった（わた

くしがそう思ったくらいである。他にもそう思った人は少なくあるまいが、メディアによる発掘や追跡はなかったように思う — 日本のメディアの弱点かもしれない。

要するに、外国からの移民を受け入れることは、かれらの数がある程度のもになって民族的な集団が出来上がることによる社会的摩擦の発生への危惧もあるが、それより前に、かれらが少数者である段階こそ重要で、かれらの家族の日本での社会的位置を保証し、かれらが日本においてしかるべき社会的地位を確保できるような、制度的保障が不可欠だと考えるが、しかし、それが困難なのである。「社会インフラ整備」の発想さえ十分でないからこそ、このような悲惨な人間疎外が生じているので、海外からの「移民」を声高に唱える人たちは、このようなことを生じさせない方策を建て、内外にしっかりと説明すべきだろう。

180. (13.03.16) そろそろブログの更新記事を書かなくてはと思っているところで、新しい教皇フランシスコ一世が選ばれた。イエズス会士としては最初の教皇だという。イエズス会士は教皇庁の幹部になれないなどという話もかつてはあったような気がするが、ついに、こういう時代になったか、と思う。

わたくしは、イエズス会系のミッションスクールの出身だが、実は、カトリックについては、ほとんど知らない。小学校もカトリックのミッション・スクールだったし、その後、高校卒業まで付きあったし、それ以外の事情もあって、カトリックにはそれなりの関心はあり、教会組織を通じて、イエスの教えと称するものを更新し続けているカトリック教会の意義と価値には、原理主義に偏らず歴史主義に軸足を置いているという意味で、高く評価をすべき点があると考えている。ただし、非信者であるゆえ、教会の官僚構造や、それに付随する聖者とか福者とかいった分類には強い関心はない。

だが、日本のメディアが、一方で、現地音主義と言って、例えば、斐勇俊氏を比較的現地音に近い(らしい)カタカナで表記しながら、「教皇」という日本のカトリック教会が用いている語彙を「法王」と言い換える不思議さを改めて意識する機会になった。「読者が、読者が…」とかれらは言うのだが、この類の記事に真剣な関心を抱く読者は「教皇」という語彙を承知しているし、大して関心のない読者には「法王」だろうが「教皇」だろうが、違いはないのであり、そうであるからこそ、「教皇」という語を使うべきなのだが、それが改められないというのは、要するに、日本メディア関係者の面子の方を読者の利益よりも優先させているからとしか言えないのではないだろうか。

ちなみに、現勤務先は、名称の一部に「附設」という部分があるが、報道では、常に、その部分が「付設」とされる。「附属」とあるのを「付属」と書き換えて記事にするのと同様、「附」という字は「付」に書き換えるという、報道メディアの自己都合の基準適用である。いわゆる「現地音主義」が報道対象に対する敬意に基づくのであれば、先の、「法王」の場合でも、「付」

の場合でも、ありえない用字でなければならないが、現に、これらの形のものしか使われないのである。一体、これはどういうことか。もちろん、ここで、「日本メディアの不誠実さ」というようなものを指摘しようというのではない。つまり、日本メディアのこういう政策が通用していることも問題なのである。実は、この辺の混乱に、まさに、日本文化の空間認識・他者認識の特性が反映していると思っており、それゆえ、よいとかわるいとかの価値判断は簡単にはできないとも考えている。

価値判断と言えば、例えば、中国文化圏の発想と比較してみるとよいのではないか。断片的なことだが、韓国の首都を現代日本語では「ソウル」と言う。かつては、「京城」と言った。「京城」は、「首都である都市」を意味しており、おそらく、日本統治下で導入された都市名ではなく、李氏朝鮮—大韓帝国以来の由緒正しいものであろう。他方、中華圏では「漢城」と呼ぶ。「漢江畔の都市」という意味だが、都城であることを示唆しない。現代日本語で「京城」を「ソウル」と改めたのは、それなりに意味のあることであり、現地音主義もあるだろうが、現代韓国に対する敬意が反映しているとは言えるだろう。他方、この都市を「漢城」と呼び続けるのは、中華圏の長い伝統に忠実という意味で、第三者がとやかく言うべき筋合いのものではないが、しかし、都城という意味を含んでいないようだし、華夷秩序も含みうることだから、韓国側からは本来一言ありたいであろう。だが、その場合、提案できるものは「京城」しかないかも知れない。幸いと言うか、現代韓国は漢字を排して時間が経ち、もはや、「漢城」と表記されることにも深刻さを覚えないのかもしれない。

新教皇がイエズス会士であるという話から大分脱線してしまった。本筋はイエズス会の方であった。イエズス会と言えば、否定的な連想としては、謀略である。少なくとも小説の上では、そうなのだが、陰謀とか謀略とは違った「秘密」が本当は大事ならしい。

イエズス会を支配するのに必要なのは、破壊でもなければ、戦争でもなく、力でもないのだ。精神の優越を保証する神秘的な影響力。われわれが求めているのはまさにそれなのだが、そのような人物はついに姿をみせなかった (p.313)。

Ce n'est point avec la ruine, avec la guerre, avec la force que l'on doit gouverner la société de Jésus, c'est avec l'influence mystérieuse que donne une supériorité morale. Non, l'homme n'est pas trouvé, ... (p.382)

と死にゆくイエズス会の管区長(仏文には le général とある)は慨嘆する。前半は、

A. デュマ:華麗なる饗宴 (新装版 ダルタニャン物語 第8巻).
復刊ドットコム 2011 (鈴木力衛訳)
ISBN978-4-8354-4594-6

後半（つまり、原文に相当する仏文）は、

Dumas: Le Vicomte de Bragelonne II
folio classique
ISBN 978-2-07-040052-2

にある。大体、この管区長はフランシスコ会士に変装しているのだが…。ここに、アラミスが現れ、国家の重大秘密を知っていることを明かし、指輪を引き継ぎ、後継者になる。その後、（前）管区長は、そのこまごまと指示を適切に処理するとの答えを聞いて絶命する…。この指示のうちには、教皇の暗殺や教団が密貿易に従事しているらしいことの示唆もある。教皇への絶対忠誠を誓っているはずなのだが、暗殺とは、…。小説ではあるが。（なお、鈴木力衛先生は、「教皇」ではなく「法王」を使っている）。

キリシタン大名の刑死について、イエズス会の謀略を絡めて論述した書物

宮本次人：ドン・ジョアン有馬晴信
海鳥社 2013 ISBN 978-4-87415-867-8

がある。この本は、先日、天神のジュンク堂で見つけたのだが、極めてローカルなものではある。もともとは「島原新聞」に連載された記事であったという。郷土史のようではあるが、16世紀後半からの日本史は、地方史と言っても、世界史の文脈を欠いてはならないことに著者は気づかれたことになるとも言える。

有馬晴信は、1560年ころに生を受け、1580年ころにイエズス会巡察師ヴァリニャーノから受洗した島原半島を拠点とするキリシタン大名である。有馬氏は、佐賀の龍造寺氏に圧迫されていたが、1582年に沖田畷の戦いで勝利した。キリシタンの信仰が勝利のもとになったという実感を晴信は得たに違いないと著者は推察する。教皇下賜の聖遺物が精神的な支えとなり、また、イエズス会を通じての火力支援（砲？）も得られたようである。なお、有馬晴信らは、1582年に天正少年使節を派遣している。その後、秀吉の九州鎮圧、伴天連追放令、朝鮮出兵と、波乱がありながら、有馬領内、つまり、島原半島は、いわば、キリシタンの聖域として、1610年ころに至ったのだそうである。ところが、この辺りで、晴信の運命は暗転する。長崎港外でのマードレ・デ・デウス号襲撃沈没事件（1610）、その後処理の過程での、佐賀・藤津郡の有馬領への組み入れの請願、仲介の徳川家陪臣岡本大八への贈賄、長崎奉行長谷川左兵衛暗殺計画露呈、など、事件が続き、幕府に逮捕され、現在の山梨県甲州市の初鹿野で斬首により処刑される（1612）。

著者の宮本氏は、晴信の晩年の行動、藤津郡の件と長崎奉行暗殺計画の件、さらに、切腹ではなく斬首刑を選んだことは、晴信の名誉を汚すものであり、謎であると言う。この書物は、いわば、宮本氏による謎の解明の試みというわけである。実際のところ、謎の解明に成功しているかとなると、それはわからない。本文中に、宮本氏が利用した資料や書籍が挙げられているが、それ

らがどの程度のものかわからないし、イエズス会文書なども翻訳されたものだけなのか、ラテン文でも印刷公刊されたものだけなのか、手書き資料を利用しているのか、そこらがわからない。他方、島原半島の旧家の史資料の利用の形跡はある。いずれにせよ、素人のわたくしには判断のできることではない。ただ、カトリック教会の日本布教政策の失敗という重大な事態の経緯と評価が関係しているようで、未公開、未整理の資料が、マカオ、ゴア、ヴァティカンなどに眠っているかもしれないと思う（マカオの書庫を調査された、さる美術史家のお話では、英仏の文書館と違って、整理が全然できていないとのことだから、ある意味で宝庫でもあろう）。

上記の謎の解明について、宮本氏は、基本的なプロットの構成要素を二点、第一に、当時のイエズス会の布教政策、第二に、有馬晴信のイエズス会や教皇に対する姿勢を挙げる。第一点に関しては、具体的手法の曲折はあるが、日本布教と併せて貿易上の権限の独占の確保と維持とするが、第二の点に関しては、有馬晴信のイエズス会等に対する姿勢は封建武士の御恩と奉公の関係として理解すべきであるとするのである。晴信の藤津郡要求は、有馬氏歴代の版図から見て、正当性のあるものではなく、ここに岡本大八の介入や長崎奉行暗殺計画などの不合理な事態が発生する理由があるとするのであるが、晴信が正当性のない行動に走った理由として、ドミニコ会が藤津郡における布教活動を龍造寺氏を襲った鍋島家から認められ、それをイエズス会が妨害するために、晴信を利用したというわけである。晴信の側から見れば、これは不合理ではあるが、沖田畷の戦いの勝利をイエズス会などの御恩と捉え、奉公として、主の不合理な要求にも命を懸けて従った結果だとし、山本常朝や新渡戸稲造などの書物を引きながら、自説を補強する。細かいこととなると不備だらけだが、わたくしは、ふむふむと言っていけばよい立場だから、宮本氏の推理は推理として認めたいと思う。敢えて、若干の感想を付け加えれば、有馬領がイエズス会かポルトガル王に寄進されてはいなかったか、という疑問はある。先年の長崎の歴史文化博物館での「バチカンの名宝とキリシタン文化」展（第64回記事参照）には、大村純忠からの教皇への長崎の寄進状が出ていた。晴信が類似のものを出していないということはないのではないか（イエズス会文書に記事があるのかも知れない。仮に、現物がマカオで見つかったら、悪い冗談だが、某国政府が島原半島の領有権を主張するかもしれない…）。

ところが、今日の午後、九州国立博物館で明日閉幕予定の「ボストン美術館日本美術の至宝」展を見に行き、会場外のミュージアム・ショップを冷かして、

岡本顕實：原城跡

さわらび社（郷土歴史シリーズ 9）

というのを見つけた。発掘に基づく島原・天草の乱の実相を概観したものが、有馬晴信がキリシタン貿易によって膨大な富を蓄積した可能性に触れら

れている。そうだとすると、沖田暉の戦いは、背後の財力と火力の差による当然の帰結となる。他方、財力の割には身の処し方が常に適切とは言い難ったことを思うと、晴信の能力はあまり高くはなかったのかな、とも思われる。また、秀吉の伴天連追放令の根拠に、奴隷貿易、つまり、晴信認可のもとでの若い男女の奴隷としての輸出があったとのことである。これもイエズス会のインド布教の都合からであったとか。

付記:Scientific American Newsletter に、新教皇は科学者である（修士号（化学）を持っている）ことと近年に至るまで多くのイエズス会士が科学の発展に貢献したことを論じたブログがあった（平成 25 年 3 月 24 日）。

181. (13.03.24) 大学時代の友人から、福岡市博物館で開催中の「きものビューティー」の券が送られてきたのは、ほぼ一箇月前、なかなか自由な時間が作れないまま、今朝、ようやく自転車を駆って行ってみた。ボストン美術館蔵のビゲローのコレクションもあったが、それだけというわけではなかった。着物というのは、不思議なもので、もちろん、ピンからキリまであるのだろうが、一応、ピンだけを問題にするにせよ、装飾の場としての機能には驚く。今日では、婚礼衣装が一番贅沢なのだろうが、江戸時代の上級武家の衣装として展覧されているものは、着用の場面が必ずしも明らかにされていたわけではないにせよ、派手なものであった。富裕な町家の例では、ビゲローのコレクション中には、三井家伝来というのも含まれていた。洋服では、なかなか、こうは行くまい。まず、衣料の表面積が和服より相対的に小さい。他には、髪飾りなども出ていたが、簪、櫛、など、宝石を鏤めたティアラなどと比べるとどうなのか。何を主張すべきか、という文化のアイデアの違いがあるかもしれない。あるいは、衣装の表面なのか、中身、つまり、着用者の肉体なのか。また、様式の支配力のようなものもあるかも知れない。つまり、カトリック教会なら枢機卿の僧服は赤であるとか。

それはそうと、会場には、お着物のおばさまたちが多かった。多分、今世紀に入ってからの和服の流行もあるのだろう。そう言えば、留袖とか色留袖、裾模様などという言葉聞いたことがあるような気がする。奥様に色留袖を着せてあげられますかね、と言われたのは、結婚したころだったかしら。

会場には、明治・大正・昭和の着物や和服女性の絵画類もあった。竹下夢二、高島華宵の名前は、亡母から聞いたことがある。高島華宵は、幼いころ見た世界童話全集か何かの挿絵で記憶がある。売店には、図録の他、これらの画家の画集などがあったが、結局、絵が一番綺麗だったので、

露谷虹児：露谷虹児

河出書房新社 2007

ISBN978-4-309-72756-1

だけを購入した。後で眺めなおして、この人の挿絵も子どもの頃見た記憶があることに気づいた。

ところで、ミュージアム・ショップで

近江俊秀：道が語る日本古代史（朝日選書）

朝日新聞出版 2012

ISBN978-4-02-259989-6

を見つけ、これは読んでおかなければならない、と思い、これも購入した。当ブログの本来趣旨に関わりが深いはずなのだから（137回記事で、律令体制下の国道に言及しているが、国道の話はどこにあったのか）。

誘惑に弱いせいも、夕方、天神方面に出たときに、ジュンク堂で

今野浩：工学部ヒラノ教授と七人の天才

青土社 2013

ISBN978-4-7917-6691-8

を見つけ、立ち読みしているうちに、まあ、魔がさして、買ってしまった。4月1日発行となっているが、大丈夫だろうか。今野氏の著書は、27回、115回の記事で、言及したし、特に、27回記事で紹介した「工学部の教え」（『カーマーカー特許とソフトウェア』所収）のうち、「索引のない本は読むな」という教えは、このブログの中で何回も触れている。ところが、本書の「おわりに」によると、今野氏は、長く、お忘れだったそうである。この「工学部の教え」中、「納期を守れ」というのは、工学部勤務中、レポートを遅参した学生を追い返すのに利用したことがある。

なお、七人の天才とは、吉田夏彦、藤川吉美、富田信夫、パン・ティアン・タック、小島政和、江藤淳、白川浩の七先生である。

182. (13.04.23) さて、順序としては、前回記事で言及した近江俊秀氏の「道が語る日本古代史」を論ずるべきなのだが、例によって、その前に

村上隆：想像力なき日本

— アートの現場で蘇る「覚悟」と「継続」

角川 one テーマ 21 （角川書店 2012）

ISBN978-4-04-110330-2

に捉まってしまったので、まず、この本を見よう。「はじめに」冒頭で、書物標題の選択の理由が述べられている。要するに、

今の日本のクリエイティブシーンは確実に衰退しつつある。なぜか？

と村上氏は観察し、その理由を分析して、

僕の出した答えでは戦後刷り込まれた「ドリーム・カム・トゥルー」＝「夢はいつか叶うもの」の方便の徹底が人を怠惰にしたと思っています。

と判断する。そこで、

その方便を捨て、実直に働くことが、つまりはクリエイティブであるという基本に目覚めてほしい。

という思いの籠った標題にしたというのである (p.2)。しかも、氏は恐ろしい指摘、

今の若い人たちの労働力低下の複合的な原因のひとつに「アイデンティティを持たないことが正義である」というような哲学が彼らの中に浸透していることがあります。

をされている (p.4)。「労働力」は広義に捉えるべきで、「作業力」だけでなく、「構想力」「忍耐力」といった知力を含む人間的総合力を指していると考えられるかもしれない。「人間的魅力」と言ってもよいかもしれない。村上隆氏の著書については何冊かこのブログで論じてきたが、大変教えられるところが多い (13回、86回、110回、122回記事参照)。ただ、だんだんと氏の抱く危機感が深まっているような気がするのだが、肝心の作品を直に目にする機会が余り作れないのは残念である。

村上氏は、実直さの喪失を近年の日本のアーティストの(卵の)場合について危惧しておられるが、もちろん、アーティストの卵たちだけの問題ではない。また、わたくし自身も、「夢」という語が安易に強調されることは好まない。職務上、卒業式などで式辞を述べることもあるが、このような際に、一度も「夢を大切に」などと口にしたことはない。事実と直面せよ、とか、実現目標の描像をできるだけ詳細に作り上げる努力をせよ、というようなことは言うかもしれないが。なお、「夢」は多義的であって、ここでの語義は、178回記事で紹介したものと比べれば、矮小でもある。

さて、目次は

はじめに

第一章 アート業界で生きていくということ

芸術家になる覚悟とその処世術 他 12 節

第二章 成功するための「修行(トレーニング)」と「仕事術(ワークスタイル)」

形なくして心は伝わらない 他 15 節

第三章 チャート式勝つための戦略の練り方

ルールの把握とマーケット分析 他 11 節

第四章 「正論の時代」における極論的人の育て方

「正論の時代」の極論 他 11 節

第五章 「インダストリー」としてのアート業界

アート業界で最も力を持っている存在 他 14 節

特別対談 村上隆×川上量生

「管理教育」と、その対極 他 16 節

となっている。

第一章冒頭で、

アーティストは、社会のヒエラルキーの中では最下層に位置する存在である。その自覚がなければ、この世界ではやっていけない。

という句が現れる (p.20)。これは実践的な句であって、

芸術作品は自己満足の世界でつくられるものではありません。営業をしてでも、売らなければならないものです。そのためには価値観の違いを乗り越えてでも、相手、顧客に理解してもらう「客観性」が求められます (p.32)

が、

現代美術が、純粋芸術である以上、客は大衆ではないのです (p.32)

から、

顧客との関係性において、ぼくたちアーティストは常に”下からお伺いを立てる立場”にあります (p.33)

と説明する。ただし、村上氏の志は高く、芸術家の成功を論じて、

私にとって成功とは唯一、「歴史に残る作品を造りあげること」しかありません (p.34)

あるいは、

本当のアーティストが至るべき成功とは、この世を忍んででも名作を一つつくりあげること (p.34)

だと言う。この辺になると、従来村上氏の著作でも繰り返し述べられている。本書では、さらに、実戦上の要素がふくらまされており、第二章、第三章に集約されている。第二章冒頭には

おはようございます
失礼いたします
ありがとうございました
お先に失礼します
お疲れ様でした

という挨拶の言葉の引用 (p.52) から始まる。それというもの

芸術作品には乗り越えなければならない領域があります。その領域に足を踏み入れていくためにはまず、「形なくして心は伝わらない」という基本をよく認識しておく必要があります。その第一歩として挨拶を徹底しています。

それはもちろん、自分たちが”社会の中で生きている”ということをしかりと自覚させることにもつながります。 (p.53)

というわけだからだが、さらに、

…芸術の世界において最も大切にすべきことは「仁・義・礼」
だと考えるようになりました。(p.58)

とあり、ここで、

「仁」とは人を思いやること
「義」とは利欲にとらわれず、なすべきことを選択する人助けの
心
「礼」とは礼節の心。人間関係を尊重する精神です。

と説明している (p.58)。これは「儒教道徳」の語を借りているが、実は、普遍的な意義を持っているものである (つまり、儒教道徳の文脈にこだわると矮小化されてしまうので、178 回記事参照)。もとより、こういう精神的な面の強化の上に、技術力における精進が不可欠であり、さらに、作品が受け入れられるようにするためにも、「ご機嫌取り」の重要性が強調されている。著者は、

ご機嫌取りの発想を持たないということはつまり、相手の感情を顧みず、自分の欲望に忠実すぎる人たちが増えているということです。こんな姿勢で仕事に臨んでいる限り、目の前の仕事に真剣に向かい合っているとは言えないはずです。そういう人たちは”社会における最大限の効果”を考えながら作業をしていく仕事には向かないとも言い切れます。(p.76)

と言うのである。挨拶の意義は、ここで完結するというわけで、著者の姿勢は一貫している。

こんな調子で紹介していると、スペースがいくらあっても足りなくなる。第四章は痛烈であり、第五章は非常に勉強になるとだけ言っておこう。末尾の対談、実は、ここから読み始めたのだが、これがなかなか面白い。ただし、つくづくわたくしの年齢を感じる部分でもあった。

なお、

村上隆：現代アートで時代を変える (インタビュー)
ラジオ深夜便. no.153 (2013 年 4 月号), pp.40-51

には、もう少し、ざっくばらんな様子で、村上氏の考えが伺える。しかも、氏の初期の作品が運慶の仏像よりも高額で競り落とされたことから、アート業界の仕組みに開眼したことが正直に述べられているのである (上掲書の第三章第五章相当)。インタビュワーの力であろうか。掲載誌には、『五百羅漢図』の一部の図版を含む口絵「恠恠奇奇に、芸術する」も付されている。実は、バスで乗り合わせた (多分、わたくしより年長の) 老人が開いていた雑誌に、村上隆氏の記事が見えたので、昔と違って視力の衰えた身としては確

認に手間取ったものの、とにかく、掲載誌がわかったので、岩田7階の本屋で入手できたのである。

付記：上掲の「ラジオ深夜便」には、

磯田道史：評伝、三人の日本人～無私の精神に生きる（歴史に親しむ）

ラジオ深夜便. no.153 (2013年4月号), pp.64-74

もあり、触発されて、

磯田道史：無私の日本人

文藝春秋 2012

ISBN978-4-16-375720-9

を入手して一読。帯には、

私たちの知らない強く美しい日本人がいた

とあるが、江戸期の人間の「日本人」としての規定は適当なのだろうか。基本的に誤っていると言うわけではないが、「日本人」の定義を含む相応の議論の展開が欠かせないであろう。この書物の問題と言うよりも、「強く美しい」あるいは「無私」という「美点」を「日本的特性」として整理するためにも欠かせない作業であろう。実際、紹介されている三人、穀田屋十三郎、中根東里、大田垣蓮月の「無私」には範疇の相違があり、中根東里や大田垣蓮月の「無私」は基本的に個人のレベルの話であり、他方、穀田屋十三郎の活動には社会性、政治性に特徴があり、基本はそこにあるべきで、穀田屋らの活動の背景に、かれらの「無私」があり、さらに、「無私」が招いた僥倖があって成功に至ったことを認めた上で、なお、東里や蓮月と同列に扱うべき性質のものではないと思われる。少なくとも、それは歴史家の態度ではあるまい。もちろん、上掲書は小説であり、学術論文は別途発表されているのだろう。また、東里の関係で、磯田氏は、荻生徂徠について否定的とも受け取れる文章を挟んでいるが、それは、史料に基づいてのことなのか、東里を際立たせるための創作なのか、気になった。

183. (13.04.30) さて、

近江俊秀：道が語る日本古代史、

朝日新聞出版. 2012

ISBN978-4-02-259989-6

に向かおう。最初に、目次を掲げる：

序 道路は社会を映し出す鏡

第Ⅹ章 葛城の道

- 一 古墳時代にも頑丈な道路を造る技術があった
 - 1 古墳時代の道路の発見
 - 2 鴨神遺跡の道路の正体は
 - コラム 古代の土木技術 六～一〇世紀の道路づくり
- 二 造ったのは誰か
 - 1 古代の大豪族葛城氏
 - 2 渡来人がもたらした技術
 - 3 葛城氏の勢力を支えた道
 - コラム 『日本書紀』から読み解く河川交通 磐之媛の話
- 三 付け替えられた国道
 - 1 雄略天皇の誕生
 - 2 葛城氏滅亡と道路の行方
- 第Ⅷ章 大和・河内の直線古道
 - 一 六世紀の道路
 - 1 壬申の乱に見える道路から
 - 2 いまも残る古代道路
 - コラム 衢とは何か 海石榴市
 - 二 いつ造られたのか
 - 1 史料が語る敷設時期
 - 2 発掘調査の成果から
 - コラム 道路が舞台となった古代史 下ツ道と竜田道
 - 三 なぜ造られたのか
 - 1 直線道路網の特徴
 - 2 推古朝の政策
 - 3 道路網成立の契機
 - コラム 大道を考える 竹内峠越え
 - 四 聖徳太子と蘇我馬子
 - 1 推古朝の立役者
 - 2 蘇我氏の政策
 - 3 大和・河内の直線道路の意義
 - コラム 使節接待はまず道路で 太子と馬子の確執
- 第Ⅷ章 七道駅路
 - 一 古代のハイウェイ
 - 1 直線道路網
 - 2 七道駅路の構造
 - コラム 道路を造り、守った人びと 律令国家の公共事業
 - 二 律令国家と駅路
 - 1 律令国家への歩み
 - 2 新たな国家建設に向けて

コラム 遷都で付け替えられる駅路 都の要衝

三 古代国家と道路

- 1 駅路から見える天武朝の政策
- 2 律令国家の変遷と駅路

あとがき

目次から察しが付くように、本書の構成は明解であり、かつ、節立てから、論述の姿勢もよくわかるであろう。「道路」を中心に据えたからこそ、このような著述が可能になったのだろうとすることができるのだろう。もっとも、素人なりに、いくつか思うことはあり、ここでは思いついたことを書いておこう。

さて、大別して、第Ⅹ章は葛城氏の勢力下の道路を論じ、雄略朝、つまり、6世紀初頭までの時期に相当し、第Ⅺ章は蘇我氏を中心とする勢力下の道路を論じ、推古朝、つまり、7世紀初頭までの時期が扱われる。ここまでは大和を中心とする道路が主だが、第Ⅻ章では天武朝の七道駅路、つまり、列島全域と大和を結ぶ直線道路が主に論じられ、時期的には、9世紀までが話題になっている。これらの章を分けるのは政変であり、その結果としての権力中心の移動である。

著者が暗黙裡に前提に置いているのは、第Ⅹ章、第Ⅺ章で扱われた時期については、畿内に（日本の）権力主体があり、畿内勢力の繁栄の基礎が、瀬戸内海を経由して、大陸、主として韓半島、から、文物、技術、人材の獲得にあり、したがって、主たる道路は外交・通商のために開かれたとしていることである。考古学的発掘調査だけでは、道路の性格は判断しにくいだろうから、文献との照合によって想定されることなのであろう。実際、「歴史地理学」という学問分野では、史料に現われる地名や記事を総合して過去の時代の地理交通の再現を目指すらしい。

素人の身としては、殊更に異議を差し挟むことができるような筋のものではないが、畿内の豪族が「渡来人系」でないにもかかわらず、豪族としての地位を脅かされることなく、「渡来人」の技術を利用し得たとするのは自然ではないのではないかという気がする。畿内の豪族が天皇家を含めて結局のところ「渡来人」として分類される集団から成ったとしても、道路の意義が変わるわけではないだろう。いずれにせよ、相当の数の人間の移動がない限り、宗教や祭祀体系、それらに伴う土木技術、つまり、仏教や寺院建築のことだが、そういうものは伝わらないはずであるし、さらに、鎮護国家思想に近いものを含むのであれば、これらを伝えたのは統治者層に属する集団があるいは統治者層に容易に到達しえた集団でなければならないだろう。こう考えると、畿内に限らず、当時の日本各地の豪族が「渡来人」そのものと考えた方が自然ではないだろうか。

技術にせよ宗教にせよ、歴史時代に入ってから受容では、日本土着の本体が土台から揺らぐようなことは太平洋戦争の敗戦までなかった（この敗戦

で土台から揺らいだかどうかは評価は難しいかもしれないが、米軍占領政策が当初意図したことは、かれらの多大の誤解に基づいての判断であったかも知れないが、およそ日本的なものは特殊危険なものとしての全面的な否定であったはずであり、一方で、憲法改定、他方で巧妙な検閲や統制経済の援用による言論弾圧によって、目的に沿ってのそれなりの効果は挙げたのではないか)。しかし、昭和20年の敗戦や事後の経過は、近代の戦争の論理の結果である。7世紀頃までの情勢とは全く対応しないであろう。それより前で大きいものは、幕末に米欧の植民地帝国から受けた圧迫であろう。このときも土着日本の根幹は揺らいだと思うが、民族移動あるいは大規模な軍事侵攻を伴っていたとは言えないだけに、民俗というレベルでは影響は少なかったと言えるだろうし、その後の「欧風化」の進行も、「日本土着」の選択的自主性に基づいていたと（一応）言えるだろう（ここが、実は、太平洋戦争「敗戦」の後との大きな、かつ、本質的な違いである）。

さらに、その前を遡ると、16世紀後半の「南蛮人」との関係が目立つ。このときは、直接的な軍事的な脅威があったわけではない。「南蛮人」も「日本攻撃」に十分な「基地」の構築が出来ていたわけでもないし、実際に、「南蛮人」の主な関心が日本であったかどうか議論の余地があるだろう（なお、132回記事参照）。しかし、いずれにせよ、かれら「南蛮人」が日本、それも「種子島」に漂着したことには、重要な事実を想起させるものがある。つまり、「先進文明」の到着経路が韓半島・日本海・北部九州だけではなく、南シナ海・東シナ海・南部中部九州があるということである。後年の遣唐使なども日程上あるいは安全上の理由で後者の経路を利用したと言い（123回記事参照）、韓半島利用の場合は（沿岸伝いよりも）陸水利用の方が安全であったと聞くと、地理的な距離感だけからの思い込みでは議論が変な方向に行ってしまうと思う（この二つの経路を分けて考えなければならないことは九州に来て観て初めてわかった。関西以東、特に、関東以北の人たちには感覚が全くないのではないか）。倭の五王が、北魏・高句麗の圧迫下にあつて、宋と結ぶことができた理由もこの辺にあつたのであろう。

ところで、今、わたくしは（老境ゆえの非常に怪しい）記憶に基づいて書いているのだが、種子島に達した火縄銃はポルトガル船に「相応しい」とされる西欧型ではなく、東洋型であったという。この手の事実を指摘することは重要であるが、知りたいことは、西欧型とされるものと東洋型とされるものの「運用上」の違いであり、点火時期や点火装置の単純な差であつて、手にすればすぐわかり、慣れれば問題はないということであつたら、何と云うか、差異を騒ぎ立て過ぎると肝腎な点を外してしまうように思う（火縄銃史にはそれとは別の興味があるだろうが）。とは言うものの、「種子島」の殺傷兵器としての優位性を評価したのが織田信長なのだが、信長の評価に至るまでの経過や状況がよくわからないのは不審ではある。安土城の研究などから、信長の思想はある程度想像が付くものの、滅ぼされた武将である。後世

の人間の遺した史料の記述は、秀吉の場合ほどではないとしても、ただちに信用できるものではない。はっきりしていることは、「種子島」以降、キリシタン伴天連を含めて、土着日本が変質したことであり、その結果として、徳川幕藩体制が成立したことである。議論としては、秀吉の「朝鮮出兵」がなかったら「関ヶ原」もなかったかもしれないとするのはありうる。もちろん、こう考えると、秀吉の「朝鮮出兵」は何だったのかということになるが、真相は、朝鮮の方からも、徳川幕府の方からも、史資料を文字通りに解するだけでは、恐らく明らかにはなるまい。唐津の名護屋城跡を訪ねて、家康の陣が秀吉の本陣から遠く、しかも、家康は韓半島に兵を出していないというのだから、家康は秀吉とは違う情報源を韓半島に持っていたのではないかと、思ったことがある。なお、種子島の前の大事件としては、元寇を入れるべきだろうが、これも結局は、北条政権の倒壊を招いたことは明らかだろう。

考えてみると、日本の史上、対外勢力と深く関わって、それまでの「土着日本」が無事ということはありえず、しかし、関わらざるを得なかったことも事実であり、そして、関わるたびに国内に相応のことが起きてきたということである。しかも、そういうことが統治能力については国家としての体制が相当に整備された平安時代以降で起きているのである（平安時代の国内騒乱にも海外事情が全く反映していなかったかどうかはわからないが）。

「渡来人」の「故郷」をどこに想定するかは微妙だが、宗教的・技術的な先進地域であって、しかも、大量の人的移動が可能なところとすると、やはり韓半島南部であろうということになる。そして、この想定は、日本の歴史資料と矛盾はしない。ただし、だからと言って、現在の韓半島に、当時の「渡来人」の系統が残っているかとなると、話は別である。「渡来人」の原集団が、韓半島北部からの勢力に圧迫され、さらに、吸収されてしまったとすれば、一部が日本列島に「渡来」していたとしても、今日の韓半島と日本列島とがそれぞれ異なる文化のもとにあることも不思議ではない（165 回記事参照、「意外とそうかも」ということだけだが）。しかも、7世紀ころまでの日本での政変が、実は、韓半島の政変に連動しているということがあってもおかしくない、あるいは、むしろ、そういう性格のものであると考えるべきではないだろうか。つまり、この辺りまでは、日本史を独立なものとして海外の影響を無視することは適切なことでは全くないのではないかと、言うことである。平安期以前であって、しかも、韓半島と人的にも政治的にも強いつながりのあった本書で扱われているような時代に「渡来人」と後世呼ばれた人たちは、実は、韓半島南部と日本列島西部に存在していたとすれば、いずれかにおける事件が他の地域に影響を与えたと考えるべきではないだろうか。その上、韓半島からの「渡来人」にしても、何派かに分かれて「渡来」したかも知れず、また、異なる「部族」に属していたかも知れず、「渡来人」とひとくくりにすることは意味がないであろうが、葛城氏から蘇我氏への勢力の移転には、こんな事情が反映していてもおかしくないように思う。そして、葛

城氏や蘇我氏の祖先が大和から韓半島南部に将軍として「派遣」されたという史料記事も、編まれたのが韓半島から大和の勢力が完全に駆逐された後であることを思い、かつ、日本書紀が当時の地域の共通文献語である漢文で著された事情を考慮して読み解くべきだろう（54回記事参照）。

いずれにせよ、以上の長い挿入部分は素人の感想であり、本書の内容の重要性や興味を左右するものではない。

ところで、葛城氏の道路（第Ⅹ章）にせよ、蘇我氏の道路（第Ⅺ章）にせよ、あるいは、七道駅路（第Ⅻ章）にせよ、それぞれに、交通手段は何であったか、また、通行目的は何か、さらに、通行者はどのような人たちか、という問題がある。徒歩、駕籠、馬、馬車などのいずれを通すために敷設されたのかということである。七道駅路は直線道路であり、恐らく、馬が主要交通手段であったろうと見当は付き、また、人間の立ち入りは禁止されていたのではないかとも思われる。これらは古代帝国の類似の直線道の運営と比較して推測の付く部分もあるだろう。なお、近世の話だが、17世紀のダルタニヤンはアンヌ王妃の危急を救うべくロンドンに急行するが、途中で馬を何頭も乗りつぶす、つまり、過労死させているのである。馬が使われたとすれば、発掘調査で馬の骨が見つかるに違いないとも思う。

第Ⅹ章、第Ⅺ章は、河内・難波と大和を結ぶ道路を論じており、河川交通との関係も論ずるべきだろう。葛城氏は紀ノ川、蘇我氏が大和川によって、瀬戸内海から大和の地に遡上していたという感じであろうか（133回記事参照）。大和川流域は淀川流域と隣接し、淀川を遡上すれば琵琶湖に到達し、したがって、日本海側とも繋がるのだから、豊穡という点では、大和川流域の方がチャンスが大きかったように思われるのに利用されていないのは、葛城氏の時代には、淀川河口域が大湿地帯であったからだろうか（利根川や多摩川の河口域の様子が参考になろう。上総、下総の上下は都からの「近さ」に拠る。利根川は江戸時代を通じて流路を変えられたので東京湾にはもはや注いでいないが。）この時代の道路の役割は何だったのか。河口域から大和まで道路があるということは、河川交通の補助手段というわけではないだろうが、（その実、韓半島との連絡使の往来であったとしても）「外交」のためだけでは説明が難しいのではないだろうか。

第Ⅻ章は、天武朝以降の古典古代帝国としての日本の完成を象徴するものとして、都と結ぶ直線道路網、七道駅路、が出来上がったことが述べられる。平城京時代が、まさに、規範的な古典古代帝国の時代であったようである。そして、この章の終わりには、古代帝国が崩壊し、急速に、中世と呼ばれるのにふさわしい体制に移行したことが道路の状況からわかる。平安京の設計そのものは、古典古代帝国の最後のあだ花というべきものであっただろうが、平安遷都の時には、世の中は、すでに実質的に中世と呼ばれるべき、規範性の希薄な、地方それぞれに実質的な支配層が成立する時代になっていた、ということだろう。亡父は、ヨーロッパ中世との類比から平安時代を中世に分

類していたが（158回記事参照）、古代帝国にふさわしい道路の建設や維持管理ができなくなった時代には違いないようであり、かくて、七道駅路の大半は今日まで伝わっていない。

なお、本書20図（p.189）の西日本高速道路会社の九州道・長崎道と西海道駅路との比較は示唆に富む。本書所収の図はいずれも極めて興味深い。ただ、広域の地図があれば、もっとよかったのではないか。さらに、本書に限らないことであるが、索引があれば、と思う。

184. (13.05.10) 確か、日経の広告欄で

平川祐弘：竹山道雄と昭和の時代

藤原書店，2013

ISBN978-4-89434-906-3

を見つけたので、高額の書物であるが、（一箇月くらい前だが）早速入手した（「祐」は、本来、示偏にすべきなのだが、手書きパッドでも、ネになってしまった。平川氏の慨嘆の程が偲ばれる）。

竹山先生が偉い人であることは子供の頃から承知していた。子息の護夫とは幼な馴染みであり、一の鳥居辺りを尻っぱしよりで散歩している先生の姿から、どのくらい偉い人であるかはわからなかった。竹山家の皆さんの健啖ぶりが本書のどこかにあったが、そう言えば、遊びに行ったときに、出されたカレーライス一皿を食べきれなかったことを思い出す。護夫の姉君がヨリコであることは知っていたが、依子であることは、本書で知るまで気づかなかったし、子供たちの名が聖書由来であるとは知りようもなかった（第14章、p.333）。「はじめに」に、その依子さんの思い出が引用されているが、父と息子の会話があって、なるほど、こういう風に父は子を鍛えていたのか、と思いが当たった。また、母君、つまり、道雄夫人が今もお元気らしいことが本書から察せられたことはよろこばしい（「あとがき」、p.494）。竹山邸の裏山から護夫が鎌倉時代と思われる頭蓋骨を見つけ出したことは覚えているが、あれは多分小学生の頃だったと思うけれど、もはや、はっきりしない。先年、竹山家の辺りを散歩したときに地所の半分が分譲されて、周辺がすっかり明るくなっていて驚いたが、材木座のあの一带もすっかり変わってしまった。竹山さんのご近所の広大な別荘地も何年か前に細かく分譲されて、しかも、そこがかつて誰に縁のあった土地であったか現在お住まいの人たちは考えたこともなかったようである。もちろん、わたくしもへーと思っただけで何も言わなかったが。

護夫が亡くなった時、わたくしは福岡にいたはずである。かれに最後に会ったのは、父君の遺骨がまだ鎌倉の家にあった頃で、札幌から帰省した折に竹山邸を訪れたら、護夫が丁度いて、市原豊太先生の観察（pp.483-484）にあるような祭壇に導かれ、確か、撫でてやってください、と言われて、戸惑いながら、遺骨の白い覆いに手を置いたように記憶している。護夫の最後の様子は、

前坊洋：模擬と新製 アカルチュレーションの明治日本

慶應義塾大学出版会 2010

ISBN978-4-7664-1705-0

の著者、われわれの幼馴染だが、かれからいろいろと聞いただけである。弔問にも行っておらず、家族にもお目に掛かったことはない。本書（平川書）452ページの家族写真が涙を誘う（前坊書もいずれ論ずる予定である）。

さて、本書の本文であるが、大変勉強になった。特に、「ビルマの豎琴」の持つ思想性や、そのプロットやエピソードの背景分析は見事である（第八章、第九章）。

前後するが、本書の根幹部の目次を掲げておこう。

- 第一章 竹山家の人びと
- 第二章 遠州の名望家
- 第三章 母方の人びと
- 第四章 西欧遍歴
- 第五章 立原道造と若い世代
- 第六章 独逸・新しき中世？
- 第七章 昭和十九年の一高
- 第八章 『ビルマの豎琴』
- 第九章 僧の手紙
- 第十章 東京裁判とレーリング判事
- 第十一章 『昭和の精神史』— あの戦争とは
- 第十二章 門を入らない人々
- 第十三章 自由
- 第十四章 「危険な思想家」
- 第十五章 妄想とその犠牲
- 第十六章 剣と十字架
- 第十七章 古都遍歴
- 第十八章 東大駒場学派の人びと
- 第十九章 死ぬ前の支度

一応、全部目を通したが、印象として、著者の私的な時代追憶に過ぎるかな、と思われる部分もあったが、竹山道雄が正体を明かすべく格闘してきた時代というものを描き出すには必要であったのだろう。ただし、わたくしのような「文系素養」を欠いた人間から見ると、ある時代の駒場の話や人間模様などどうでもいいような気もしないでもない。もっとも第十八章、第十九章は、文字通り著者の周辺の親しい人々の話で、失礼な言い回しながら、大変よい。ここに、護夫のことも書かれており、

父の道雄は『昭和の精神史』を書いたが、息子の護夫は父が関心を抱いていた「昭和陸軍の将校運動と政治抗争」、「北一輝」、「戦

争内閣と軍部」、など昭和の歴史を綿密に実証的に調べて書いた。父と張りあっていたが、父の生き方や『昭和の精神史』の観察を肯い、補完する仕事をしたといえよう。

と評されている (p.451)。冒頭で、父子の対話に触れたが、父は見事に子を鍛えただけでなく、さらに、本書第一章から第三章辺りで触れられる育ちと
いうか家柄とでもいうようなものが背景にあって、父は、護夫という作品を産み出したのだろう。著者の引用を孫引きすると、道雄は

歴史を解釈するときに、まずある大前提となる原理をたてて、そこから下へ下へと具体的現象の説明に及ぶ行き方は、あやまりである。歴史を、ある先験的な原理の図式的な展開として、論理の操作によってひろげてゆくことはできない。このような「上からの演繹」は、かならずまちがった結論へと導く。事実につきあたるとそれを歪めてしまう。事実をこの図式に合致したものとして理解すべく、都合のいいもののみをとりあげて都合のわるいものは棄てる。そして、「かくあるはずである。ゆえに、かくある。もしそうでない事実があるなら、それは非科学的であるから、事実の方がまちがっている」という。

「上からの演繹」は、歴史をその根本の発生因と想定されたものにしたがって体制化すべく、さまざまな論理を縦横に駆使する。そして、かく成立した歴史像をその論理の権威の故に正しい、とする。しかし、そこに用いられる論理は、多くの場合にははなはだ杜撰なものである。

と述べているという (p.261)。とまれ、本書に教えられて、竹山護夫著作集 (一式5巻) と補巻 (一冊) を購入した。著作集の解説は、加藤陽子氏がされており、98回記事の背後には、こういう事情も働いたのかもしれないと想像した。

なお、著者の感慨として、

外国語習得の機会に恵まれなかった戦中派世代や、敗戦で自信を喪失した戦後世代が、かつての戦勝国アメリカで劣等感に襲われて口が利けなくなり、英語できちんと自己表現できなくなったのは無理ないことかもしれない。……世間の錯覚と違って日本で国際派と目されている知識人の多くは日本国内向けの国際派にしか過ぎず、外国と知的応酬を展開する人はきわめて稀である。……もっとも新渡戸のように (…) 気張りが勝った英語の応酬の仕方にはこれもまた問題はあるだろう。だがそれにしても敗戦後の日本には世界の中の日本を把握し、きちんと自己主張をする外国語著述が少ない。外国で日本批判の文章が出ると、反論を書く日本

人はいる。ただしその反論はおおむね日本人向けの雑誌に日本語
で書かれるにとどまっている。……

という重要な指摘がある (p.344)。鍵となる表現は「世界の中の日本」である。

付記：(平成 25 年 5 月 26 日) 今朝の日経ネット版に竹内洋氏 (150 回記事
参照) の書評があった。

付記 2：(平成 25 年 6 月 17 日) 今朝の産経ネットに平川祐弘氏の「正論」
記事があった。京城帝大、台北帝大とソウル大学、台湾大学の関係について、
氏が最近知友と経験された対話などの形で、触れられていた。台湾大学は、台
北帝大から数えているが、ソウル大学は京城帝大との関係を表向き否定して
いることは、それぞれのホームページに入って、沿革を眺めればわかる。た
だ、ソウル大学は、京城帝大から引き継いだ図書を非常によい状態で保存し
ていることは承知している。さらに言えば、京城帝大創設準備期に初代の教
授候補者たちがドイツなどで収集した貴重図書が多く含まれており、それら
のうちには、どういう経路でソウル大学の所有になったかには触れることな
く、毎年、開学記念日に公開されている (文字通り世界唯一の奇書というべ
き) 書籍もある (これも、ホームページで気づいた)。実際、いわゆる岩波文
化人の (ただし、後に「心」に集った人たちが主だが) かなりが京城帝大に
初代教授として赴任しており、中には、敗戦後、文部大臣を務めた人もいた。
ただ、単身で当時の京城に暮らした先生たちも多かったのかもしれない。わ
たくしの母方の祖父も京城帝大の初代教授の一人だが、家族で京城に暮らした
ためか、こういう先生たちは祖父の家でよく食事を取られたのではないかと
思う。母の口から、偉い先生たちの様子、例えば、高名な西洋古典学者が、
昭和初期の女学生相手に、該博な知識を噛み砕いた上で、いかに面白いお話
をしてくださったか、など聞いたことがある。

185. (13.05.14) 新大阪駅の dan という本屋で、

Yu Dan: Confucius from the Heart
Pan Books, 2010
ISBN 978-0-330-51375-3

というのを見つけた (Confucius は周知の通り「孔夫子」の音訳である。「孔
夫子」=「孔子」は言うまでもなかろう)。中国における人気 TV 番組が書
籍化され、さらに、英訳されたものだという。中文版は 2006 年刊行で 1000
万部売れたそうである。本書見開きに、著者 (Yu Dan 于丹) は、北京師範
大学教授で、学長補佐、メディア関係学部の長とあるから、少なくとも出版
当時の中国では、党か政府のメディア政策の責任者の一人であったと思われる。
中国の超エリートが『論語』 (Analects of Confucius) をどう料理し、か
つ、対外発信するかという興味と、現代中国人の、何と云うか、公式の『論
語』受容と、今の日本人の一般的な『論語』理解の違いを探ることもできそ

うだという興味を覚え、購入した。印象を言えば、基本的に、『論語』を基にしたハウツー物、英語で言い表すと、

How to live a happy and morally successful life !

として、まとめられ、そして、推奨されるのは

Cultivate your strong inner heart following Master Confucius !

ということになるのか。

『論語』に関しては、いい加減ながら拙見（例えば、178 回記事）があり、それは基本的に、孔子が生きたとされる時代と現代との間に横たわる人間観、社会観、政治観の本質的な差を念頭に置くと、『論語』は歴史資料と解しておくべきであり、自明な部分を除けば、内容に今日的な有効性を求めようとするのは意味をなすまい、ということであった。そこを、さらに、西欧圏に持ち込むと、この無意味さが一層際立つのではないかとも思われるのだが、その前に、そもそも、現代の共産党指導下の中国で、どのように『論語』の有効性を意味づけるのか、まさに、興味津々であった。結果は、丁度、胡錦濤・温家宝政権下での「和偕社会」の推進に最適のハウツー物としての扱いであり、孔子の思想の特徴は、morally successful を外さないことによって、きちんと継承されているわけでもある。ただし、morally の中身そのものについては踏み込んではいない。ここは、自分たちの属する社会の moral として読めばいいというわけであろう（実は、この踏み込みの回避こそが問題なのだが）。

とは言うものの、本書は大変面白い。わたくしの英語力での判断だが、読者層の想定によるのか、英語の質は決して高いとは思わないし、編集にも若干気になるところがある。その上、『論語』以外から引かれている話題を確認することも簡単ではなく、そういうところは重要な例として挙げられていても、そういうものかと思って読み飛ばすしかない。英語圏の読者ならなおさらであろう。しかし、こういう不備にもかかわらず、本書は楽しい読み物であった。なかでも、引用されている『論語』の章節を、手元の岩波文庫「論語」（金谷治訳注）から探し出す作業はよかったと思う。ついでに言えば、引用された章節の解釈や引用されていない章節群を眺めることにより、まさしく現代中国の公式の『論語』受容の姿が見えてくるようなのが面白かったのである（次回記事に被引用章節の表を示す）。もっとも、わたくしの『論語』の知識では、引用箇所の確認が完全にできたと言うことは難しいが。さらに、興味深いのは、我が国の人口に膾炙しているいくつかの章節、例えば、

學而時習之、不亦説乎、有朋自遠方來、不亦樂、…（學而第一、第一章）

や

朝聞道、夕死可矣（里仁第四、第八章）

への言及が本書には全くないことである。現代中国と日本の『論語』受容の差異の一端が覗いているのだろうか。

また、仁、義、礼、知、信、恕、…、といった基本的な語彙の欧文翻訳にも興味があった。これらについては、改めて述べる。『論語』には、良くも悪くも、今日に至る中華文明の本質が凝縮されていると言えるのかも知れない。さて、目次であるが、

Foreword	Why Confucius
Part One	The Way of Heaven and Earth
Part Two	The Way of the Heart and Soul
Part Three	The Way of the World
Part Four	The Way of Friendship
Part Five	The Way of Ambition
Part Six	The Way of Being

となっている。わたくしは、『論語』の基本的な構造は垂直関係の規範型の追求にあり、水平関係にはほとんど関心がないと判断しており、Part Four がどういう扱いになっているか、特別に興味を覚えた。これについては後述する。

Foreword は、北宋の宰相趙普 (922 - 992) の『論語』観の紹介、Ask Sickness Spring という、入浴すれば疾病箇所が明らかになるという温泉の話、そして、この温泉のごとく、『論語』は、おのれの知恵の不足を明らかにしてくれる、という説明があり、陽貨第十七、一九章からの孔子の言の引用「天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉」によって、『論語』が明かす真理は普遍的なものだと説明する。

Part One は、陽貨第十七、一九章を挙げて、孔子が聖人 (sage) である所以を説明する。漢族の創世神話（「三五曆記」、3世紀だそうだが）、天と地を分けたという盤古に遡って、天、地、人の三界を一体として解するのが、中国人の人間観であり、天と地の二世界における成功が中国人の理想であるという (pp.14-15)。孔子は、この理想を説いてきた最良の教師であり、『論語』には孔子の教えが詰まっているというわけである。『論語』からは孔子の inner heart から迸り出る強さを受け取ることができると、著者は言う（孟子の言を襲ったと言っている）。かくて、

Only when the essences of Heaven, Earth and everything in between them combine within a person's heart, can they be as powerful as this. (p.16)

とあるが、this は孟子が指摘したという孔子の精神を指すのであろうか。天、地、あらゆるものを一体化するとはどういうことか著者は説明を試み、「和諧社会」という著作時点の中国の統治目標を導き出している（なお、尻取り的に、少しずつ論点をずらして行くというか、中心論点が予めあって、種々の出発点からこの中心論点に少しずつ近接していくという記述の展開法は、本

書のあちこちで見られる。エピソード多用の巧みな印象操作に基づいた、論理性の捨象の上に成り立つ、敢えて言えば、政治的あるいは商業的な効果を主眼とする手法であるが、この箇所も一例である)。次に、話題は、顔淵第十二第七章の「子貢問政」に移り、「民無信不立」に至って、要するに、

On a material level, a happy life is no more than a series of goals reached; but true peace and stability come from within, from an acceptance of those that govern us, and this comes from faith.
(p.18)

とまとめ、これこそ、孔子の政治観だと著者は言う。当世流に言えば、政府や党の主張を信じて受け入れること、それこそが安寧秩序の根源だと言うことになるのか。もとより、(この文脈なら) 与信というべきか、統治の正当性(および正統性)の担保を論ずることが先行すべきであって、この点を不問にする、つまり、被統治者と統治者とが乖離していることを前提に、統治者をアプリアリの存在とした上で、いわば中間管理職である統治者の下僚が政治を論ずるのは、論者が孔子であっても、本質的な議論ではあるまい。実際、与信過程がしっかりしていれば、「民無信不立」は空文になるはずである。さればこそ、秦の始皇に弾圧されたという「孔子の教え」は、今日まで伝えられている統治者にとって有害どころか有益になった「孔子の教え」と同じものかどうか知りたいところである。

脱線した。本書では、引き続き、GNPやGNH(H=Happiness)の話があり、雍也第六第一一章の顔回への賞賛が引かれ、また、學而第一第一五章が引かれる。そして、「君子(junzi)」という理念が示される。陶淵明の逸話が述べられ、さらに、衛霊公第十五第二四章に移り、「子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人也」が引かれ、「恕(shu)」が forbearance と訳されることがわかる。さらに、里仁第四第一五章から「夫子之道、忠恕而已矣」が引かれ、「忠恕」が faithfulness と forbearance と訳されることがわかる。著者のまとめ(p.26)：

Put simply, you have to be yourself, but at the same time you must think others.

これは、tolerance であるとし、関連して、仏教説話が紹介され、合致する孔子の教えがあると言う：

[W]hen it's time to put things down, put them down. By being tolerant of others, you are in fact leaving yourself a lot more room (p.27).

今のところ、該当する『論語』の章節はわからない。

Part One は、さらに、顔淵第十二第二二章「樊遲問仁、子曰愛人、問知、子曰知人」が説かれ、「仁」が benevolence、「知」が wisdom と訳されることがわかる。仁者の振る舞いの一端は、雍也第六第三〇章によって示される。

Part One の残りの数ページでは、極端な現実主義が逸話によって強調される。すなわち、この世で一番重要な人間は誰か、一番重要な役目は何か、役目を果たすのに一番重要な時はいつか、という問いに対し、一番重要な人間は目前で助けを求めている人であり、一番重要な役目は、その人を助けることであり、一番重要な時は、今である、という解が示唆される (pp.29-31)。目前で助けを求める人間を今助けなければならない、ということであるが、これだけでは粗雑としか言いようがないだろう。

Part One の末尾は、

Confucius offers us simple truths that will help us develop our inner hearts and souls and allow us to make the right choices as we go through life's journey. The first step on this journey is having the right attitude. (p.32)

とあって、Part Two に移行する。

こんな調子で、それぞれの Part を紹介していたら、時間はいくらあっても足りなさそうである。ただ、Part One は、まだ、付き合い方がよくわからなくて、該当の『論語』の字句の搜索も要領よくはなかった。子貢が Zigong であり、子路が Zilu となり、顔回は Yan Hui などだから、日本流の漢文素養が国際的な文脈下での中国理解の妨げになっている可能性は大いにあると考えざるを得ない。その上、手元の金谷注「論語」には相当に詳細な索引が付いてはいるが漏れもあり、また、本書の言及箇所への指示にも誤りがあったりで、金谷注「論語」を何度も斜めに眺めた。本書でも後に引用されているが、為政第二第二章の「子曰、君子不器」はよい辞だと思う。わたくしに色紙を書く機会があるかどうかは知らないが、練習しておいてもよいか、と思った。ついでに、本書には引用はないが、子罕第九第八章

子曰、吾有知乎哉、無知也、有鄙夫、來問於我、空空如也、我叩其兩端而竭焉

を見ると、孔子にもソクラテスの言う「産婆」としての面もあったかも知れないと思う。

さて、Part Two は、顔淵第十二第五章の、金谷注と対照すると、恐らくは政治的理由による不正確な紹介から始まり、君子を論ずることになる。いくつかのエピソードを挟み、引き続き、同第四章が紹介される。ここで、inner heart 特に、strong inner heart が「君子」の要件とされ、「小人」との対比が述べられる。ここで挙げられているのは、里仁第四第一六章が類似の内容だろうが、的確なところは見つけられなかった。この後、公冶長第五第七章、陽貨第十七第二三章、述而第七第一五章をもとに、勇 courage では不足で、義 morality でなければならないことが述べられ、義の内容が分析され、自制が鍵だと言う (里仁第四第二三章、学而第一第四章、里仁第四第一七章が挙

げられる)。補強材料というべきか、さらに、蘇軾の文（‘On Staying Behind’
— わたくしの知識では特定できない）および韓信の股潜りへの言及があり、

The truly courageous had a 'restraint that surpass that of ordinary man' [, and could endure bitter public humiliation. ...
A man like him would never have reacted on a moment's brave impulse just for the sake of snatching a brief moment of satisfaction. This is because he possessed self-belief that was controlled by reason, and a settled, composed mind; this in turn is because he had a broad and lofty aspirations (p.48).

と解説する。さらに、蘇軾と高僧 Foyin、蘇軾の姉妹 SuXiaomei の逸話を経て、

In today's fiercely competitive society, it is more important now than at any other time in history to maintain a positive state of mind (p.51).

と著者は言い、さらに、子路第十三第二六章の引用がある。この後、憲問第十四第三〇章を挙げて、鈴木大拙から引き、

If you are clear-headed and generous-minded, candid and brave, then you may find that you reap many unexpected benefits, and everybody be willing to tell you all sorts of wonderful things. However, if you are the opposite of this, even a teacher such as Confucius, who taught worthy and unworthy alike, would not waste his breath talking to you. (p.58)

とまとめる。この後、『論語』の引用と思われる文章があるのだが、今、該当箇所が見つからない（思い出せない）。

ここまでで、相当に長くなった。一旦中断し、Part Three 以降は後日に廻す。

186. (13.05.18) 前回記事（185回）の続きだが、まず、Yu Dan の書物で、引用されている『論語』の章を挙げておこう。わたくしの『論語』知識と金谷注「論語」の索引、それに、本書で指示がある出典箇所に従っての検索の結果だから、完全ではないが、傾向は明らかになるものと思う。すなわち、

学而第一： 三、四、一五（章・以下同）
為政第二： 四、一二、一三、一四、一五、一八、一九
里仁第四： 三、一一、一五、一六、一七、二三、二四、二六、三〇
公冶長第五： 七
雍也第六： 一一、二九？、三〇

述而第七： 一五、一八、二〇、三六
 泰伯第八： 三、七、一三、一四
 子罕第九： 一〇、一四、一七、二六
 郷党第十： 一〇
 先進第十一： 一二、一六、二六
 顔淵第十二： 四、五、七、二二、二三
 子路第十三： 二〇、二三、二五
 憲問第十四： 三、二五、二九、三〇、三七、四四
 衛靈公第十五： 二二、二四
 季氏第十六： 四、六、七
 陽貨第十七： 一七、一九、二三
 堯曰第二十： 五

である。他に、陶淵明、蘇軾、杜甫、などの引用がある。

また、既述の通り、「恕」は perseverance、「仁」は benevolence、「忠」は faithfulness、「礼」は courtesy、「義」は morality と訳される。もとより、翻訳は中国古代思想の専門書としてなされているわけではないから、これらの訳語が周到に選ばれているかどうかはわからないが、現代中国と翻訳者の語感とが反映される形で選択されたであろう。例えば、忠を loyal あるいは true と訳すこともあり得たであろうし、一方、下手に訳せば、“貞節”の意味に捉えられてしまうかもしれない。本書のハウツー物としての性格を考えれば、異なる文明圏の読者に上手に誤解させられるかどうかも大事なことなのである。そして、「君子」は junzi と音訳され、イタリックで表されるが、「小人」は the petty あるいは petty people である。

ちなみに、junzi は、he or she で承けられることがあり、陽貨第十七第二十五章とは無縁になっているが、しかし、「君」に仕える「臣」であるということは否定されていない（これは、176 回記事の老陳の何東生に対する発言と符合する部分でもある）。「君子」という概念は、心性と資質において最上の人間を指すものであり、極めて優れたものとは思っているが、前提には、抽象的な存在ではあっても「皇帝」がおり、「君子」は、「皇帝」の臣下である以上、一個の完結した独立主体を意味するわけではないだろう）。

さて、本書 Part Three（前回記事参照）であるが、中庸と言うか、雍也第六第二十九章か先進第十一第一六章が冒頭に引かれ、さらに、顔淵第十二第四章辺りがあり、さらに、財物へのこだわりにおいても淡々とすべきと言ったことの後で、子游の言、里仁第四第二六章が

excessive closeness is bound to harm other people (p.69)

のように解釈され、敷衍される。そこで、どうするか。顔淵第十二第二三章を引き、

So with good friends you also need boundaries. More is not

always better.

(p.70) と述べる。つまり、過干渉は 'non-loving behaviour' だという説明である。この後、泰伯第八第一三章一四章が引かれる。人間関係でも職務遂行の面でも、ある種の「程の良さ」が求められるわけであろう。

Part Three では、さらに、学而第一第三章、陽貨第十七第一七章（いずれも、「巧言令色、鮮矣仁」）、為政第二第一八章、泰伯第八第三章、子罕第九第一〇章、郷党第十第一〇章が引かれ、さらに、憲問第十四第四四章二五章が引かれる。これらは「君子」論である。「君子」の例として、「詩聖」杜甫、范仲淹が挙げられる [恥ずかしながら、范仲淹の「岳陽樓記」が「先憂後樂」の出典であることは本書で初めて知った。それにしても、ネット検索で Fan Zhongyan から范仲淹が検索でき、wikipedia に当たれば、その記事自体が不正確であっても、さらに調べようがあるのだから、ありがたいものである]。

ともかく、Part Three では、この後、わたくしが気づいた限りでは、憲問第十四第三〇章が引かれ（なぜか、ここだけ子貢が Zigong ではなく Tzu-kung となっている）、里仁第四第一六章、第一章が引かれ、「義」が論じられ、「君子」と「小人」との違いが説かれる。そして、「君子」たることをさらに補強して、衛霊公第十五第二二章、子路第十三第二三章、為政第二第一四章、述而第七第三六章、子路第十三第二五章、述而第七第一八章が引かれる。なお、子路第十三第二三章は、「君子和而不同、小人同而不和」、述而第七第一八章は「発憤忘食、楽以忘憂、不知老之将至也云爾」という孔子の自己描写である。

Part Three の末尾は、

If we have an optimistic and positive attitude, and a proper understanding of the boundaries and limitations of dealing with others, we can become the kind of person who brings happiness to others, and let our own happiness become a source of energy, shining like the sun on those around us, bringing comfort to our family and friends and even, eventually, to the whole of society. But, as junzi , we must begin with our friends. (pp.96-97)

として、次の Part Four に接続する。

Part Four であるが、著者自身が末尾で

One thing we notice from a close reading of the Analects is that there are not actually many examples concerned with friendship alone, but that choosing friends is choosing a way of life. The kind of friends we make will first depend on our inner wisdom and self-cultivation; then on our particular circle of friends, and whether these friends are harmful or beneficial to our lives. (pp.124-125)

と述べ、

In short, once we have focused on our own heart and soul and on those who surround us, we must concern ourselves with what goals we should set ourselves as we move through life. (p.125)

として、Part Four を閉じる。

実際、close reading でなくても、つまり、斜めに読むだけで、『論語』では対等な人間関係が論じられていないことはすぐわかる。当然ながら、友情も恋愛も議論の対象ではないし、感謝や恩義についても、實際上、扱われていないと思っている。子路第十三第二五章の指摘が典型であろうが、『論語』における人間関係は基本において「利」を基準として構成されているから、したがって、「君子」間の交わりは淡々とし、「小人」間の交わりはあげつないものになると理解できると、まあ、わたくしは感じていたわけである。しかし、このようなリアリズムの世界であっても、友情や恋愛は論じられてもおかしくないのだから、ここが不思議であった。恋愛については女性観の問題もあるだろうが、プラトンではないが、同性愛もありうるのである。もちろん、このことは『論語』の善し悪しの問題ではなく、ただ、そういうものだというだけである。

しかし、著者は Part Four を The Way of Friendship という表題のもとで書き表す。この表題は本書の幸せな人生のためのハウツー物としての性格上不可欠でもある。季氏第十六第四章から始められ、敷衍される。ここで「友」とあるけれども「交際対象」の選別のことではないだろうか。とまれ、よい友を選ぶことは、仁と知に基づくとして、顔淵第十二第二二章が引かれ、史記の伝える晏子（晏嬰）の逸話が述べられる。さらに、陶淵明の無弦の琴の逸話があり、続いて、台湾人作家林清玄が友人に頼まれて揮毫した書の話がある。次いで、満ち足りた生活をしながら幸福感のない王が臣下に世界一幸せな人間を探しに行かせるという説話の紹介があり、さらに、季氏第十六第六章が紹介されるが、改めて見てみると、この章における「君子」は、『論語』の他の箇所での「君子」とは内容的に整合しないのではないか。いずれにせよ、この延長上に、ヴィヴィアン・リーを怒らせた記者の話があり、さらに、顔淵第十二第二三章が引かれる。その後で、季氏第十六第七章が引かれる。すでに示したが、末尾で著者が慨嘆したように、この Part は相当に無理を重ねたなという印象はある。

次に、Part Five であるが、まず、子罕第九第二六章が引用される。つづいて、本書では ninth chapter とあるが、先進第十一第二六章が引かれ、孔子が子路、曾、冉有、公西華それぞれに抱負を尋ねた問答が敷衍される。曾の陳述に孔子は同意する。著者も共感しているようで、鼓瑟希という漢字を示して、臨場感を強調している。その後、引かれるのは、学而第一第三章（「巧言令色、鮮矣仁」）、里仁第四第二四章、憲問第十四第二九章、為政第二第一三章が論じられる。つまり、「君子」は腰が軽いようである。朱子による

曾 言の解釈が示される：

Remaining content with the place I am now in, taking joy in its daily business, I have no intention of sacrificing myself for the sake of others (p.139)

というのだが、確かに、こう読めば読めるのだが…。ここで、為政第二第一二章が引かれ、さらに、著者は、15世紀の宗教改革者の逸話を紹介する。志の大中小による視野の広さや自足感、さらには使命感が問題にされており、非常に大事な指摘である。著者は、為政第二第一二章を引いた後で

A junzi 's role in society adapts to the context, and moves with the times. It is not a junzi 's actions that are important, but the motives behind those actions. The junzi are the conscience of a society. But being a junzi is something that everybody can achieve. That dream, that goal, is both high and far-reaching, but it is not beyond our reach, in fact it exists in the here and now, in the inner hearts of each one of us (pp.142-143).

とまとめている。引き続き、コメディアンと精神科医の挿話があり、職業的成功と心の問題との乖離が論じられ、さらに、別の挿話によって、表面的には無価値に見えても心の安定には重要なものがあることが注意される。そして、

The relationship between our goals and our actions is just that of a kite and a string. The key to how far a kite can fly is in the string in your hands. And this string is the aspirations of your inner heart. The more calm, matter-of-fact and steady your mind [is], the easier you will find it to reject grandiose, showy external things, and respectfully listen to the tranquil voice of your inner heart. … (p.147)

と整理する。ここで泰伯第八第七章を引いているようだが、はっきりしない。ともかく「士」が論じられ、憲問第十四第三章、子路第十三第二〇章が引かれ、孔子は「士」にも階梯を置いていたことが示される。「士」の典型として、趙の藺相如の和氏の璧 (Hesheng Jade) の逸話が紹介され、inner heart の文脈で解釈が付される。

ここで調子が変わって、子罕第九第一四章が引かれ、「君子」の在り方として解釈が二つあるというのだが、華夷秩序が垣間見え、孔子の時代とも言えども感心しない。いずれにせよ、「君子」が漢族固有の理念であるとしか言えないようで、夷狄の子孫である我々は、教化はされても、つまり、「小人」として認知されても、「君子」には成れないのではないか。このことを現代の文脈で解釈してみれば、本書におけるこの章の引用は非中国人にとって不愉快では済むまい。もっとも意識してのことではあるまいが、失礼である。本書で

は引用されないが、八（イツ）第三第五章や陽貨第十七第二五と同様に旧弊として除外しておくべきではなかったか。

とは言ってみたものの、子罕第九第一四章を引用した著者の意図は、曾の言の補強のためとは理解している。かくて、劉禹錫の詩への言及が続き、さらに、荘子が紹介される。そして、

In other words, the ancient sages and men of virtue all started out on their spiritual journey from a fixed core: their own personal values. First they came to understand the yearnings of their own spirit, and only then could they make great plans or form grand ambitions. (pp.155–156)

とまとめられ、以下、孔子へのオマージュを経て、Part Five は終わる。

Part Six は、昆明大觀樓の孫髯応の長聯の各行の冒頭の句から始まり、水の流れ、時の流れと杜甫の詩に移り、劉禹錫への言及があり、さらに、張若虚の春江花月夜から

江畔何人初見月
江月何年初照人
人生代代無窮已
江月年年望相似
不知江月照何人
但見長江送流水

を引き、孔子の想いも変わるまいとして、子罕第九第一七章を示す。

一方、孔子は人生の諸段階を示しているとして、為政第二第四章を挙げ、解説が続く。途中で、述而第七第一九章、先進第十一第一六章（過猶不及也）、為政第二第一五章が鏝められている。

「三十而立」に関しては、六芸（Six Classics）への言及があり、泰山上の対句（原典？）：

The sea reaches out to its furthest extreme, the sky is a shore
On ascending the summit, I will be another peak of the mountain
(p.168)

が引用される。以下、述而第七第二〇章、先進第十一第一二章が引かれる。著者は、

Going beyond material gain and focusing on what is within, is,
for me, the greatest proof that one has taken one's stand (p.170)

と言っている（taking one's stand = 而立）。柳宗元の詩、王徽之の戴逵訪問の逸話が説かれる。「不惑」は freedom from doubts と訳されている。三十

歳を過ぎたら、人生は引き算である、と著者は言い、四書の一である「中庸」を挙げる。現代中国の哲学者馮友蘭が引用される。「五十知天命」に至り、これは50歳になったら運命に身を任すということか、と問い、憲問第十四第三七章が引かれ、皇侃の注釈が示される。憲問第十四第二四章が引かれ、さらに、堯曰第二十第五章について説かれる。荘子の引用もある。著者の意見を的確に示す場所を引用するのは難しいが、要約として、

What we call growing and maturing is a process by which the inner heart gradually becomes stronger through experience, and we acquire the ability to take external things and transform them into inner strength (p.178)

を挙げておこう。そして、「耳順」となる。「経世済民」について言及があり、

Attuning the ear is a sympathy for the world and all the people in it, that is, understanding and tolerance (p.181)

とページの欄外にまとめられている。Attuning the ear = 耳順である。いよいよ「七十而従心心所欲、不踰矩」である。

Looking at the state of human life that Confucius described, the further through life we get the more he emphasizes the inner heart, and the more calm and relaxed we should become, but before you can reach this state of calm, you must be forged and remade hundreds and thousands of times (p.184)

を要約と考えていいだろうか。まだ末尾まではあるのだが、毛沢東主席の詩が引用される：

Seize every moment, for ten thousand years are too long (p.186)

(手元の毛沢東語録では見つからなかった)。

以上、要するに、まだ理解は不十分だが、大変勉強になった。Thank you very much, Professor Yu Dan !

187. (13.05.28) 近江氏の著書(183回記事参照)から浮かび上がるのは、日本の「古代」が7世紀半ばから10世紀前半くらいまでで、それも二期に分けられる、つまり、平城京末期くらいを境にして前後に分かれるようだった。7世紀半ばというのは、白村江の敗戦によって、大陸から切り離された時期を指し、10世紀前半とは、律令国家体制の実質的崩壊ということになり、いかにも、という感じではあるが、それが道路を巡る状況から見えてくるというわけであった。「古代」の重要な属性として、統治権力が統一性をもって機能していた時期であることを挙げるならば、こういう措定でよいのではないかと思うがどうだろうか。こういう意味で、古代前期の掉尾

を飾る人間は、わたくしの乏しい知識では、坂之上田村麻呂かなと思ひ、年代を調べたら、8世紀末から9世紀初頭に活躍期がある。10世紀の半ばになると、寺院や大貴族の荘園支配の強化により、統治権力の統一性は形式的になってしまうから、「古代」ではなく、「中世」と呼ばれるべきだろうということなのだが、この端境期の「悲劇」的な人物が菅原道真ということか。

ところで、この感覚を別の側面から補強する書物：

石川九楊：万葉仮名でよむ『万葉集』

岩波書店 2011

ISBN978-4-00-024810-5

があった。著者の基本的な主張は、万葉集所収の歌は、すべて、漢字で綴られており、したがって、安易に、かな漢字交じりに読み下してしまったのでは、歌意を正しく汲み取ることはできるはずがないので、漢字のままで読み取るべきであるということであり、さらに、高名な書家としての著者の経験と見識を駆使されて、万葉集の漢字の使い方の変遷から女手といわれる仮名書きの和歌への移行を考察している。万葉歌の成立については古くから多くの研究がなされていたに違いないが、特に、初期の漢字を音価よりも語義を借りて表された歌となると、今でも、読み下し自体に相当に問題が残っているらしいことは想像が付く。石川氏は、漢詩の一種と考えて読んだ方がいいと言い、さらに、このような漢字使用を通じて、日本語自体ができあがったと言っている。一応、目次を示すと、

はじめに

第一章 万葉仮名とは何か

第二章 異形の漢字＝万葉仮名が語る意味

第三章 文化の曲がり角 ― 表語文字から表音文字へ

第四章 女手・平仮名の成立によって何が変わったのか

終章 万葉歌の二重性 ― 万葉から古今へ

となっている。第一章は、紀元前二世紀ごろから紀元後十一世紀くらいまでの日本人の漢字受容の歴史を概観したもので、ここに、冒頭の「時代区分」に相当する観察も認められる。ここでも、白村江の敗戦は重要な契機で、日本列島（石川氏は「弧島」とよぶ）のそれ以前（「前日本」とよぶ (p.27)）も、韓半島も、大陸も、基本的に一体と考え、いわば、その内の地方史として、「弧島」や「半島」で政治・軍事的にも文化的にも事件が生起してきたというわけで、

一度そういう目で東アジア史を見直してみれば、東アジアの大転換は六五〇年にあることは誰の目からも確認できよう。

と言う (p.29)。実際、今日では常識となっているのではあるまいか（このときを契機に「日本」が成立し、律令国家として「日本」の「古代」が始まる。

直線道路も全国に張り巡らされる。183 回記事三章。伊勢神宮も天武天皇の時からである。26 回、28 回記事参照。なお、133 回記事も)。冒頭で挙げた「古代前期」は、まさに「万葉集」の時代と重なっているのではないか、そして、「女手」としての「平仮名」が「古代後期」を通じて完成度を高めて来たということになる。

ところで、著者は「前日本」に漢字が入ったのはかなり早く、紀元前後には、漢文にも相当熟達していたと想定する。後漢書や魏志の記載を信ずるならば、上表文が挙げられているはずで、当然、それらの上表文は漢文でなければならなかったろうから、それだけの漢文素養がすでに出来上がっていなければならなかったろうと言うのである。例えば、卑弥呼の朝廷で用いられていた言語は大陸 [や半島] の言語 [の方言] だったろうと推測している。これについては、何とも言いえないが、大体、当時は「弧島」も「半島」も同種の人間が居住していただろうから、考えてみれば、不思議なことではないとわたくしは思う。

ところが、この時期の「弧島」における（漢字に接する層の）漢字受容がどの程度であったかを示す資料として、「方格四神鏡」や「三角神獸鏡」の漢字紛いの使用例があり、「漢字」は文字としてではなく、「呪符」とみなされていたのであろうとの指摘が

大島正二：漢字伝来（岩波新書 1031）

岩波書店、2006

ISBN4-00-431031-8

にある（p.8）。実際、大島氏は、漢文受容について、

本格的な漢文学習は五世紀の始めころに始まった。それからおよそ三〇〇年をへて、古代日本の人びとは外国語で書かれた文章の内容を理解し、それを自国語に写しなおすことのできるレベルにまで到達したのであった。もとより〈訓読〉という一種の翻訳は古くからなされているが、それはあくまでも漢語と同じ意味の日本語への訓みかえである。それに対し、「仏足石歌」にみられるのは、漢語・漢文で書かれた内容を消化し、日本語で言いなおす知的作業であって、翻訳史の上では画期的なことで、意義深い。（上掲書、p.137）

と言っている。これは大島氏上掲書第Ⅹ章（目次後述）の末尾の文章なのだが、大島氏は、この章で、地名、人名、和歌などの音写に用いられる漢字の用例が、古事記、日本書紀、さらに、万葉集、仏足石歌と異なっており、なかでも、万葉集のものが際立って複雑であることに注意し、これらの用法上の違いの理由を分析している。万葉集の漢字使用の様子が華麗であることは、石川氏の論考の出発点でもあり、また、このような漢字用例の現象が「歌をよむ」という行為に密着したものであることは、実は、石川氏も大島氏も同

様に捉えていると言ってよいだろう。ただし、両氏の主張には根本的な違いがあって、それは、石川氏は、万葉集の漢字用例は「中国語」の一種を通してしか意志を表明できなかった「前日本人」（を含む東アジアの膠着語圏の人びと）が「中国語」の影響を受けながら、その後の膠着語を造り上げていく過程を、「日本語」の場合に反映しているとするのに対し、大島氏は、歌謡という特質上、もともと日本語で歌われていたものを漢字化するにあたっての漢字への態度や知識が反映しているとされるというところにある。

大島氏は言語学者としての知見と韓半島における新羅の漢字使用例などを踏まえての見解であり、他方、石川氏は書家としての直感に基づいての意見であろう。合理性は、大島氏の見解にあるだろうとわたくしは判断しているが、一方、新羅語と百濟語、さらに、百濟語と大和語がどのくらいの違いを持っていたか、さらに、百濟語の場合なら、域内の一般住民の言語と支配階層などの白村江の敗戦の後に「弧島」に「亡命」を余儀なくされた階層の言語が一致していたかどうかは詳しくは論じられていない（言語関係の入り組んだ歴史は、かつて Dagstuhl を訪れたとき、城下の住民はドイツ語（の方言）を話しながらも、城主の一族が残っていた碑文はフランス語であった。また、新羅は韓族、高句麗、百濟は貊族とあったが、両族の差異がわからない。「弧島」の漢字受容は、(複層の) 呉音、漢音であるのに対し、新羅や越南の漢字受容は漢音であり、特に、古事記などの古謡は呉音が用いられるという。百濟の漢字受容の様子を十分に確認再現できないようだから、現在の韓半島に百濟の名残がどの程度あるのかも含め、議論に穴が開いてしまうように思われる。

もとより、石川氏の所論は、肝腎の「中国語」が明らかにされていないまま進められているので、万葉集の漢字用例の複雑さ、華麗さ、特に、初期の歌について、「中国語」韻文の退化した形として捉えようとするのは、論として成り立つものではなく、相当に苦しいと思っていた。歌会始における朗詠は母音の引き延ばしを伴う独特の歌い上げである。漢詩の原音による朗詠とはまったく似ていないだろう。その上、作者不詳の祭り歌のようなものは口承で機会ごとに再現されてきたであろうから、そのようなものは文字化が先行したのではなく、むしろ、文字化には非常な時間と相応の儀式性が伴っていたと考えるべきだろう、とも思った。つまり、漢字に対しては、呪符としての機能が極めて重視されたらしい様子が、石川氏の挙げる用例から伺われるように見えたのである。

なお、石川氏の論を追いながら、「仏足石歌」のことが念頭に浮かび、wikipedia にあたって年代を調べて、万葉集で言えば晩期後期の時期と知り、表音性の突出に石川氏の所論とも整合しているようで何となく納得した。しかし、大島氏書物の解説を読み、むしろ、万葉集の用字法の特異性が相当に意図的なものであることが結論できるように思われ、日本語の成立と万葉集の用字法を絡めた石川氏の所論、要するに、

…日本語は、漢字・漢語の流入以前の弧島に前もってあったのではなく、圧倒的に高い水圧を持つところの漢字・漢語との衝突の中から次第に造られていったという事実である。弧島に地方語はあった。バラバラであったにせよ、地方語はあった。それが漢字・漢語にのしかかられ、ぶつかり、整理され、そして一緒になってできてきたのが日本語。漢語に触発されて生まれかつともにある—それが日本語なのである (pp.126-127)。

は、体を成していないとわたくしは判断する（この部分だけ引っ張ってくると自明なようにも見え、石川氏の主張の弱点がはっきりしないが）。

石川氏は、三筆、三蹟における文化の質的な変化に注意を喚起し、女手としての仮名や「御家流」の成り立ちを説明する。日本語の筆記法の発達史という点では、大島氏の概説の方が史資料の選択も総合的、かつ、近隣諸言語の場合との比較も伴っていて合理的であるが、石川氏の書家ならではの観点が反映している個所は非常に面白い。特に、「ひ」「と」とを合わせた字体の意義の強調が興味深かった。惜しいことは、編集者が十分な同情心を欠いていたのか、この合字を実際の活字として造らないまま「ひ」のわきに「と」を小さく並列しただけの中途半端な活字（例えば、p.11）で流用してしまったことである。漢文訓読の際の片仮名にも、例えば、「ト」と「キ」、「ト」と「モ」を合わせた合字があったと聞く。かつて竹田先生の数学授業（156回記事参照）は片仮名書きだったが、「トキ」「トモ」は必ず合字を使われ、これは昔の漢学者の伝統だと説明されたことを思い出す。片仮名の合字が先か、平仮名が先か不承知だが、確認はできるだろう。

前後したが、大島氏の上掲書の目次は次の通り：

はじめに

第Ⅹ章 漢字が日本列島にやってきた

- 1 文字のある社会の誕生
- 2 漢字は中国語の文字である

第Ⅺ章 〈漢字文化〉の伝来

- 1 百済からの贈物
- 2 漢字の使用がはじまった

第Ⅻ章 漢字・漢文学習の本格的な開始

- 1 写経と識字層の成立
- 2 固有名詞を漢字で書く

第Ⅼ章 漢字文化の確立

- 1 正確な漢字・漢文を書く
- 2 漢字・漢文を日本語で訓む

第Ⅽ章 漢文の日本語化が始まる

- 1 〈漢字文〉の登場
- 2 日本語の〈送り仮名〉を書く

3	万葉仮名で日本語を書く
第Ⅹ章	漢字“日本語化”の完成
1	片仮名・平仮名の誕生
2	漢字をすてて造られた国字
3	漢字を真似て造られ、消えた文字たち
補章	日本漢字音と中国原音の関係を知るために
注	
	おわりに
	索引

ところで、石川氏の書物に目を通したところで、特に、万葉集初期の漢字表記の歌は漢詩の一種だと解すべしという石川氏の主張に、そう考える人もいるのだな、と思いつつ、以前購入した

大島正二：唐代の人は漢詩をどう詠んだか 中国音韻学への誘い
 岩波書店 2009
 ISBN978-4-00-024145-8

を思いだし、目を通した。順序としては、大島氏の岩波新書本は、この本によって存在を知ったのであった。結論から言うと、この本は非常によい書物である。付録として、李白「秋浦歌」、李商隠「楽遊原」、張継「楓橋夜泊」、王翰「涼州詞」、岑参「碩中作」、白居易「対酒」、柳宗元「江雪」、杜甫「春望」、李白「子夜呉歌（其三）」、孟浩然「春暁」を、復元された唐代長安音による音符表記、原詩、訓み下し、現代語訳が挙げられている。わたくしは、中国語を全く知らず、発音の見当がつかないので、せっかくの音符表記を実感することができないが、この形で、ここに挙げられている漢詩を暗唱していれば、唐都長安に遊んでいる気持ちになれるだろうとは、強く思う。

内容的には、新書本の補章を大いに膨らませたものである。中国語音韻の基本知識、漢字の音価、反切、中国音韻史の概説を、言語学の基礎を踏まえながら、問答形式で丁寧に論述されている。そして、応用として、上に挙げた諸詩の唐代長安音による復元の試みである。優れた学者の書物は読んで快いものだと思う。なお、目次は、

話のまえに
第1話 漢詩と韻 — 中国音韻学への第一歩
☒ はじめに
☒ 漢詩と韻のはなし
☒ 古代中国語の音韻
第2話 古代中国の音韻学
☒ 中国の言語研究
☒ 〈反切〉のはなし — 中国で生まれた表音法
☒ 〈四声〉のはなし — 高低アクセント

☒ 韻書のはなし — 韻引き字典

☒ 韻図 — 現代的な音節表

第3話 古代音の実相に迫る — 清朝の古代音研究

☒ 古代音の復元にむかって

☒ 古音研究の夜明け

☒ 古音研究の開花

☒ 中古音の探求

第4話 古代音を復元する — 杜牧「江南春」を唐代音で読む

☒ 近代的な古代音研究への旅立ち

☒ 〈中古音〉復元の方法

注

あとがき

付録

索引

となっている。

188. (13.06.18) 学校説明会の時期がまたやってきた。しばらくは週末ごとに勤務先校の宣伝活動のためにあちこちに出かけることになる。わたくしは細かい話をする立場にはなく、学校の教育理念や建学の趣旨について概説することが役割であるが、それでも毎回出席できるわけではない。先日、欠席する場合のためにビデオ・メッセージを収録したが、その原稿を用意しているときに、たまたま、留学予定の生徒の留学志望理由書の写しが目に入った。

この生徒は、半ば公的な国際交流団体の公募に応じたものであるが、留学内定先の校長宛に当方が改めて推薦状を送る必要があり、志望理由書は、そのときに参考にしたものである。このときは、本当に久しぶりに公式の英文手紙の形式で書いたのだが、細かいフォーマットはとうの昔に忘れていて、マニュアル本も手元になく、勤務先校の英語教員に確認を求めたが、幸い、一人知っている、むしろ、覚えている人がいて助かった。入学願書、就職身上書、ビジネス・レターなど、本来は書き方のフォーマットが決まっているのだから、英語教員の多数までもが英文手紙のフォーマットを忘れてしまうようでは、困ると言えば困るのである。

だが、以下では公式の英文手紙の書き方を問題にするわけではない。実は、留学内定の生徒に関する添付用の調書を見ていて、非常に大事なことに気づき、その内容を上述のビデオ・メッセージ用の原稿に慌てて取り込んだということがあるので、こんな話を始めたわけである。

鍵語は「グローバル人材」なのだが、一体、英語では「グローバル人材」は何と言うのだろうか。少なくとも直訳を試みる限りでは、無意味な語として翻訳不能かもしれない。しかし、最近の日本語で「グローバル人材」というときには、それなりの意味を含ませているわけであり、それなら英語世界でも通用するだろうから、当然ながら、相当する英語が見つかるかも知れない。

ところが、この生徒の調書を見ていて、この期待も、ただの思い込みかもしれないと思ったので、その事情の分析を試みたいというわけである。

調書で聞かれていたのは、次の 11 点であった：

基本的な生活習慣 自主性 責任感 根気強さ 創意工夫
情緒の安定 寛容 指導性 協力性 公正さ
公共心

もともと英語の項目を日本語に訳したものであろうから、英文での調査書フォームを確認すべきではあるが、応募者は、母語での資料作成ができるように設計されている以上、飽くまでも、通常の日本語として、これらの項目を理解するのが筋である。それゆえ、これら 11 項目を眺めていると、この類の英文調書の項目を検討している場合には気にならなかったことに注意が向く。

ここで確認を求められているのは、受け入れ先の中等教育機関の生徒として、恐らくは、標準的な水準にあることの確認であろう。学力的なことや語学能力は、別途、試験があったとは言え、ここでは、明らかに、人間としての極めて基本的な資質について細かく問われていることがわかる。しかも、その項目内容が興味深く、いずれも、学校だけが涵養できるものではなく、家庭の躰や家庭の社会に対する感覚が深く関わっている。

このうち、「基本的な生活習慣」は小学校を卒えるころにはきちんと身につけてほしいものであり、また、学校よりも家庭の力が大きいものではあろう。しかし、少なくとも日本の場合、現実には、十分に身につけていない人はいる。それは、これが、本来は、家庭や学校だけでなく、それらを含めた社会全体で子どもたちに身につけさせるべき習慣であるのに、肝腎の社会の教育力が弱くなったか、あるいは、阻害する方向に働いているからかもしれない。しかも、それが日本だけのことでなく、ひょっとしたら、こういう国際交流に関与している中等教育機関では、かつては、この手の設問はして来なかったけれど、それが必要だと判断されるようなことが生じているのかも知れない。いずれにせよ、この「基本的な生活習慣」こそが、その他の 10 の項目の基礎にあり、実際に、11 項目全体にどのように評点を振り分けようと、「基本的な生活習慣」の項の評点が高くない限り、その他の項目の評点が仮に高いとしても、そのときには調査書自体の信用が割り引かれると考えなければなるまい。

他の項目は、いずれも、日本でも人物評価の際に考慮されるものであろう。しかし、「公正さ」「公共心」は、われわれが推薦状を用意するとき、少なくとも一般的な文脈では（つまり、特別な業種を除いては）滅多に取り上げない項目ではないだろうか。これらの項目の直接の意義というのではなく、11 項目全体の中での位置づけを考えているうちに、これら 11 項目の階層性に気づいた。

階層構造は、機会の広がりや視野の広さ、あるいは、視点の高さに基づいて、設定できるようである。取り敢えず、4層に分けてみた。第一層は、もっとも基盤にあるもので、「基本的な生活習慣」はここに属する。「基本的な生活習慣」に不備があっても生きては行けるだろうが、機会はかなり狭くなるだろうと思わざるを得ない。第二層は、「根気強さ」「創意工夫」「情緒の安定」から成ると考える。これらは、個人的な資質であって、自らの機会の拡大のための基礎をなすものである。第三層を構成するのは、「自主性」「責任感」「寛容」「指導性」「協力性」である。ここでは、ある人間集団の一員としての資質が挙げられ、それらは、属している集団が挙げるべき成果やその集団の機会を支配するものである。集団の規模は余り問題ではないが、それでも成員によって合理的に把握される程度、つまり、具体性のある集団である。最後に、第四層は、「公正さ」と「公共心」とから成る。これらは自らが属している集団を超えて意味を持つ観念である。「公正さ」という語がなければ、「公共心」を、例えば、弱者には席を譲りましょう、とか、街の美化に協力しましょう、というような、「身の回り」のことへの処し方、つまり、「公衆道徳」として捉えてしまってもおかしくないが、「公正さ」と並ぶものとする、公に対する意識、あるいは、公に対する自覚、と解す方が適切ではないかと思われ、「公正さ」「公共心」から第4層が成るとしたのは、こういう理由である。

「公共心」を、このように定義しなおすのは、我々の常識外かも知れないが、public mind という意味で、調書の項目に入れられているのだとしたら、わたくしの理解が間違いだとは思わない。そういう意味では、「公共心」を第三層に入れるべきか、第四層に入れるべきか 若干の逡巡はあるが、わたくしとしては、第四層に含めた上で、あるいは、ここで、こんな議論を要するという事を含めて、この第四層として考慮すべき階層への日本のメディアその他の意識こそが、上述で、散々不備を問題視した「グローバル人材」なるものを英語に翻訳できるかどうかの鍵になると思っているからこそ、ここまでの長文である。要するに、この第四層部分が一番大事なので、この階層で、初めて時空を超越した価値への意識が話題に上るわけである。冒頭のビデオ・メッセージの準備中に、愕然としたところは、まさに、この簡単なことに対して、自分自身が漠然としたアイデアしか持っていなかった、要するに、基本的には、第一層から第三層までくらいしか明確に意識できていなかったことである。

「グローバル人材」という語は翻訳不能だろうと、上で述べた。意味は、「英語遣い」を指しているとして、そこに重点を置いて、訳語を探すと、第三層どまりになるが、それでいいのだろうか。それに、someone fluent in English という程度の人間に、何か仰々しい響きの語を充てると、とんでもない誤解を引き起こしかねない。他方、第四層に及ぶ人間は確かにいてもらわなければならない。しかも、意識的に育てる必要があるかもしれない。かれらは、

どこでも、そして、いつでも通用するはずの人でなければならないが、それをただの英語遣いで済ましていいとの考えは、そういう人たちが必要だという想いとは整合すまい。

冒頭のビデオ・メッセージに戻ると、「公共心」や「公正さ」の扱いに、実は、わたくしの勤務先校がどんな「人材」を世に送っていきたいと考えているか、ということが掛かっている。私立である以上、保護者にアピールできることはとても重要で、保護者がわが子に期待している人生や社会的役割と学校の理念や校長の想いが乖離してはいけなわけである。保護者は、基本的に、今かれらが生活している社会を基準にして、わが子の将来を考えている。だが、その子どもたちが実際に生きる社会は四半世紀後であったりする。少なくとも、親と子が生きるのは全く同質の社会ではない。こう考えると、第一層から第三層だけの発想では、子どもたちに十分な機会を保証するようにはなっていないことがわかる。それどころか、社会が大きく変化したとき、卒業生に十分なリソースが残っていないということもありえるだろう。いずれにせよ、第四層的な理念を強調できる水準の学校であって、はじめて、いつでもどこでも通用するに違いない人間を送り出せるだろう。これは決して保護者と学校だけの問題ではない。わたくしも、留学内定者の調書を見るまで深くは考えなかった。今の日本の社会の風潮にも、第三層的なものでよいとする安易さがあり、それに、わたくし自身、言わば、毒されていることに思い当たるのである。

付記（平成 25 年 6 月 19 日）：上の「第四層」的なものは、「今＝ここ」の発想とは整合しないことがある。日本の社会は、確かに、「今＝ここ」的精神が強調されていて、いわゆる「おもてなしの心」も、客と主人の関係において、客には「今＝ここ」を心地よく過ごしたいという願望があるにちがいないという判断を前提に主人が客を遇するという心がけを表わすものであろう。しかし、客が「今・ここで」味わいたい「心地よさ」がどんなものであるかの分析が的確になされているという保証はなく、客は主人の気持を忖度して、「今・ここで」立派なもてなしをしているという満足感を主人に味わってほしいと感じて接しているという主客転倒しての「おもてなしの心」ということもあるだろう。接客業の場合は、しかし、こういう双方向性は予想されないから、「おもてなしの心」が顧客への迎合を招き、また、顧客側の無礼を生むこともあるだろう。してみると、「おもてなしの心」は、日本の社会・文化の特徴として、無反省に強調することには憚りがあるものであると言わざるを得ない。

こんな奇妙なことを言うのは、実は、週末所用があって、札幌に行き、月曜に戻ってきたのだが、帰途の機内で、この航空会社の乗員訓練に問題があることに気付いたからである。航空会社は旅客機を運航して、大量の人員を輸送している。乗客は、顧客であり、当然、乗客に対する接客業務は発生し、しかも、飛行中は相当の部分を占めている。そこで、航空会社は旅客に対し

「おもてなしの心」で接するが、接客業務の一環でもあり、乗客からは乗務員のサービスは当然提供されるべきものと考えられるだろう。極めて安定した標準的な飛行状態からの乖離がほとんどない場合には、飛行中の航空機内であっても、地上の喫茶店・食堂と表面的には変わらないように、接客業務が営まれていてもおかしくはあるまい。ただし、航空機は飛行中に種々の事態を想定して置かなければならず、そのような事態への対処の責任は、すべて、乗務員が負っている。つまり、航空機内では、基本的に、乗務員は絶対者であって、乗客は乗務員に従う義務があるのである（運航約款もそうなっているはずだが）。「おもてなしの心」は、乗務員が「絶対者として振舞うには及ばない」限り、航空機上で「許容されている」ものであって、逆ではない。したがって、航空会社は何らかの事態の発生で、乗務員が絶対者として振舞う必要が生じた時は、きちんと、その事実を明確にして、乗客に乗務員の指示に従うべきことをはっきりと通知しなければならないし、そして、ここからが、むしろ、航空会社の問題だが、異常事態では誇りを持って遠慮をせずに乗客を支配下に置くことを乗務員に訓練しなければならない。ところが、そこが及び腰なのである。結果として、非常時に乗客がパニックを起こしたり、避難が遅れたり、あるいは、避難させるべき乗客の把握が出来なくなってしまうこともあるのではないかと、感じるようなことに、福岡空港着陸時に遭遇したのである（幸い、大事にはならなかった）。

何が起きたか。まず、機内に「体調不良」の乗客が出たことと乗客中に医師など医療関係者がいるかどうかのアナウンスがされた。これはよくあることである。「体調不良」の程度に拠っては、最寄りの空港への緊急着陸もありうるだろうとは思ったが、それはなかった。「体調不良」者の詳細は、このようなことでもない限り、周知の必要はないだろう。しかし、目的空港に着いてからの救急車搬送はありうるだろうし、対応は、一般乗客に優先するだろう、とは予想されることであった。ところが、たまたま目的空港、つまり、福岡空港の滑走路上で離陸のための滑走中の航空機に鳥がぶつかったとのことで、滑走路の緊急点検が発生し、空中待機が必要になった。これもよくあることである。幸い、天候は安定しており、特に、飛行自体は特に深刻な状態にあったわけではない。

問題は、着陸に際しての乗務員の指示が混乱したことである。着陸後、所定の位置に到着次第、直ちに救護隊員が機内に入って来ること、「体調不良者」の搬送を優先させること、乗客には、救急搬送が完了するまでの着席を要請すること、以上の3点を、的確かつ十分な指示の形で行なわなかったのである。

着陸に際し、通常通り、ベルト着用サインが消えるまで着席していただき、と言いき、日本語のアナウンスでは、「体調不良者」の搬出についての通り一遍の説明はあったが、乗客がどうしているべきかの指示はなかった。続いて、英文のアナウンスがあったけれど、それでは「体調不良者」への言及

はなかった。英文アナウンスを必要とする乗客もいたかもしれないが、この事態で、このアナウンスを維持することは大事だったろうか。英語アナウンスを省いても、通路を空けておいてください、くらいは最低限繰り返さなければならないことではなかったか。英語でも、それだけは言わなければならないだろう。実際は、救急隊員が乗り込んでから、関連の通路を空けてください、と言ったけれど、事前の指示ではなかったし、一步遅れた感がある。このときも、停止後、指示を待たずに、座席上部のコンパートメントから荷物を取りだそうとする人たちは、いたのである。搬送後についての指示も的確になされたわけではないので、「体調不良者」の搬送が完了しないうちに、わっと出ようとする人もいたという次第であった。「体調不良者」は車いすで行ったが、もし、ストレッチャーだったらどうだったか、また、出血など「体調不良」の状況によっては、乗客のパニックも起きえはたずである。これらの様子を見て、この航空会社は、種々の事態を予測しての事前の訓練が不足していたと考えたわけである。

この機体のクルーや、この航空会社が特に問題だと言っているわけではない。むしろ、改めて思うことは、航空機の乗務員の他にも、例えば、国のレベルでも、時と場合によっては、「絶対者」として振舞うことによって、事態の深刻化を防ぎ、その終息を早めなければならない立場にいる人たちがいるはずである。われわれはかれらの邪魔をしたいと考えているわけではないのに、「今・ここ」的な目先のことしか考えていないために結果的に邪魔をしてきたようである。そして、いつの間にか、そのような非常時に、覚悟を決めて的確に振舞える人がいなくなっていた、つまり、起こりうる事態について、冷静に分類し、整理し、対応を予め想定し、その際に、対応すべき立場に就かなければならない人々をきちんと養成して来なかった。かれらには、何が許され、何が許されていないかを、きちんと訓練して来なかったのではないか、そういう心配を覚える。

付記2（平成25年7月3日）：今日の毎日新聞ネット版は、かつて有力メディアで論説委員を務めていたという人の見解を、来るべき参議院選挙の争点を問うという文脈で、掲載している。この方が、そこで示しておられる見解は、上の付記で述べている拙見に通ずるものがあるので、ここで挙げておく（わたくしも同意できる内容でもある）。しかし、わたくしにとって否定しにくいことは、この方がおられた有力メディアに限らず、一般に日本のメディアは日本の中長期的な将来よりも目先の自社の営業上の利益を優先しているのではないかと思わざるを得ないことがなかったとは言えないような気がするということである。業界内部の人間であったこの方は、有力メディア在籍中どう考えておられたのだろう。ずっと大昔、この方の大先輩に当たる方に定期的にお話を伺う機会があって、何とか、国際水準のご意見の持ち主であって、お話が紙面の傾向とは必ずしも一致しないことを知ったことがある。「新聞は売れてこそナンボ」かも知れないとは言え、当ブログの今回記事の趣

旨に絡めれば、(有力メディアは私企業であるが)「宮仕え」は、「公正性」も「公共心」も抑制するのか、という事情は今も変わっていないということなのかもしれない。われわれは互いに惻隱の情を以って接すべしということなのか。ちなみに、「グローバル人材」という語は、実際に世界的な業務展開をしている企業関係者から発せられたのではなく、そういう状況を報道に載せたメディアの人たちが発明したのではないだろうか(初出例を調査すればいいのだが)。これが「グローバル人材」が翻訳不能ではあるまいか、と直感させた理由ではないだろうか、と密かに疑っている。

189. (13.07.06) 勤務先系列の医学部医学科新入生のための教養授業のレポート採点をした。本来ならば、一箇月ほど前に、つまり、授業の直後に済ませておくべきだったのだが、よく言えば、手が回らなかった。この授業の全体としてのシラバスは承知していないのだが、実は、医療科学に関する原理的なこと基礎的なことの概要が扱われているらしい。その中で、わたくしの担当は、医者ではない人間が医者に期待しているものを示唆すればよい、ということであったと思う(!?)。今年は、三回目であった。毎回、パワーポイントのスライドを新しく用意しているのだが、三回目ともなると、早くも知恵(?)が尽きた感があった。

実は、この授業では、毎回、当ブログで論じてきた話題を展開して見せるような試みをしていて、lay people から医者へのメッセージとしては奇妙なものである。実際、ppt ファイル(pdf化)を改めて見直して、構成がなっていないことに気づいた。そう言えば、かなり急いで作ったことを思い出した。今回は、講義の編成についての考えがまとまらないまま、時間切れになったような気がする。相手が違っても、同じ話は二度と繰り返したくないという、奇妙な方針がかえって邪魔になったようだ。もっとも、この方針は、次の話では前のものより内容上の進展がなければならぬ、ということでもあるので、順守できれば、それに越したことはないのだが。

この場で、上記の教養授業を思い起こしても仕方がないのだが、実は、当ブログで延々と論じている話題の要約のような要素も籠めた。中でも、当ブログでも何回か触れたが(162回、163回記事)、メメント・モリ *memento mori* を論じ、病院の入り口に死神の像を建てるわけにはいかないだろうが、医師は心の中に死神の像を建てるべきか、という問いを立ててみた。解説のために、というよりも、日本的心情の一般的な説明のために、「言霊」に言及し、「言霊」という発想は *memento mori* とは対極のものであることを陳べた。レポートの多数は、授業内容の要約を試みるものを中心だったが、中には自分の意見を展開しようとするものもあった。

ところで、一昨日、来訪者があり、雑談をしているときに、Kelvin 卿とか Airey 卿が関わった(ヴィクトリア女王治世下の)鉄橋建設や海底電線の敷設の話になり、中でも Airey 卿の助言による構造計算にしたがって建設された(確か北海鉄道か何かの、スコットランドの)鉄橋の開通式で女王から建

設技師が叙爵された件で、詰まらぬ蘊蓄を傾けてしまった。この叙爵の件には、続きがあり、後日、強風下を通行中の列車を載せたまま鉄橋は崩落してしまい、多数の死者が出た。結局、技師は爵位を剥奪され、失意と不遇のうちに死んだらしいが、Airey 卿はお咎めなしであったとか（こういう話は、

L.T.C. Rolt: Victorian Engineering, Penguin

というペーパーバックに書いてあった。18世紀末から20世紀初頭、特に、19世紀後半のイギリスの産業技術を概観した書物だったが、工学部に赴任したてに入手して通読した。家のどこかにあるはずだが、…。Penguin かどうかも実はわからないし、出版年も不明。ウィキによると、翻訳もあるらしい)。同様の橋梁崩落事故は決して少なくないが、日本であった比較的最近の山陰線余部鉄橋事故（1986年）は強風に煽られて列車が転落したもので、強制振動による鉄橋破壊とは違うらしい。工学部勤務時代に応用数学の授業用教科書に採用したアメリカの本の表紙に（多分、タコマナローズ橋の）橋梁崩落の事故写真があったことは覚えている。

応用数学の教科書の表紙に崩落事故の写真とは、まさに、memento mori ではないか、と、こういう一連のことを思い出した後、丸一日近く経って、ようやく思い当たった。実際、講義をしていた当時は、そんなことは思い付きもしなかった。くだんの教科書は、厚すぎ、しかも、内容のごく一部しか講義されないこともあって学生の評判が悪く、その上、英語なので、かれらが必要とする工学文献（社内報告書や論文、書籍類）に現われる日本語の数学上の術語、これらは講義は日本語で行っていたから伝わったつもりだが、少なくとも、定着には役立たなかったらしく、この点について後々申し訳なく感じたことまで思い出してしまった。今思い返してみると、学生たちは英文の教科書をどう利用していたのだろうか。術語に邦語を書き込むのは当然としても、まさか、英文和訳の調子で、びっしりと行間に和訳を付すようなことはしていなかったと思うが、英文を英文のまま、読んでいたかどうかはわからない。要するに、愚かな教官（法人化前の国立大学教員は官であった）がいると学生たちは思い、修行のつもりで講義に付き合ってくれていたのかもしれない。

5年くらいの間、アメリカの教科書を何冊か使ってみたが、ようやくこういうことにうすうすと気づいたこともあり、そのうち、翻訳され分冊化されているものを利用するようになった。大学設置基準の大綱化の頃からだったかも知れない。教科書は、当該分野の概説書であり、講義されるところだけが必要なわけではない。エンジニアは教科書を手元に置いて、新たな挑戦に際して、基礎的な部分は教科書の概説で確認しながら、前進するのであり、分冊化された教科書、つまり、最低限の基礎知識相当の章だけから成る書物は、それだけでは、授業が終われば不要になってしまう。出版社の販売政策だったそうだが、卵鶏の謂いのきらいはあるものの、こういう安易なことの継続が、科学技術に限らず、あらゆる面での今日の日本の劣化を招いたので

はないだろうか。ちなみに、1960年代初頭までに、わたくしの師筋に当たる人たちが編纂した教科書は重厚であり、基本的であった（恐らく、どの分野でも）。最近になって復刊されるものが多いのには納得するが、他方、情けない想いもある。

付記：（平成25年7月14日） 上掲 Rolt の本は、探したら、書棚の片隅にあった（Pelican Books, 1974-1980 ISBN 0-14-02.1124-1）。問題の箇所は pp.190-191 だった。特に、p.191 後半では、

Poor Bouch was a ruined man. That there were serious faults in design and construction is undeniable, but Bouch's fatal error was that, in preparing his design, instead of trusting to his own judgement or carrying out practical tests on the spot, he had consulted the Astronomer Royal, Sir George Airey, as to what wind pressure he might expect on the structure. That worthy had replied: 'The greatest wind pressure to which a plane surface like that of the bridge will be subjected in its whole extent is 10 lbs per square feet.' In view of Airey's dogmatic pronouncements, Bouch should have known better than to trust such a statement.

とある。Bouch というのが問題の技師である。

190. (13.07.28) 天神のジュンク堂で、新書二冊を購入した。傾向は全く違う、いわば、衝動買いだが、一冊は

水谷千秋：継体天皇と朝鮮半島の謎
文春新書 2013
ISBS978-4-166-60925-3 C0221

であり、もう一冊は

岡本隆司：近代中国史 ちくま新書 2013 ISBN978-
4-480-06724-1 C0222

である。

水谷氏の著作は通勤の行き帰りに目を通してしまったが、歴史時代以前の日本列島と周辺域について、つまり、十分な歴史資料を欠いている点を最近の考古学的研究の成果を利用して補い、それなりの物語を紡ぎあげたものである。当ブログでも、関連する書物は何冊も論じてきた。多数の研究者と愛好家がいる分野で、わたくし如きが何か新味のあるコメントができるわけでもないが、ここに挙げられている考古学的なファクトを念頭に、この謎の時代について合理的な描像が簡単に得られるものかどうか疑問があり、水谷氏が示されたストーリーでは、説明のできないことが残るように思う。いや、

そもそも、この時代について、何らかの合理的な説明を試みること自体が適当かどうかもわからないように思う。

いずれにせよ、目下、一泊の人間ドックの最中で、岡本氏の書物しか持参しなかったから水谷氏の著作について細かいことは言えない。この著作で触発されたことを、当ブログでこれまで論じてきた関連書物の内容などと絡めて、後日、改めて論じたいと考えている。

というわけで、ここでは岡本氏の著の方を眺めてみたい。岡本氏の著書は132回記事で『中国「反日」の源流』を論じ、データに基づいた冷静かつ周到なものの見方に感服した旨を述べた。本書は、概説度はより高められているが、近世以来の日本との関係ではなく、中国の内在的かつ社会・経済史的な特徴に重点を置いた論述になっている。

実は、本書は英語で（も）書かれるべき書物ではなかったかという印象を持っている。理由は三点ある。第一に、日本語読者よりオーディエンスが大きいからである。もちろん、その主要部分に欧米の読者を期待できることが大事である。つまり、専門の中国研究者以外に、近世中国の社会構造の基本を伝え、かつ、それが日本と中国の違いがおのずと表出する形で可能になるのである。第二に、中国人の将来の活躍が期待される層に読んでもらいたいからである。中国人の有力層においても、特に、近年は日本語よりも英語読者層の方が圧倒的に多いだろうと思われる。かれらが中国の特徴とか特殊性を他文明との比較の上で尊大にならずに意識することは重要だと思っている。第三に、中国と接触のある国々、つまりは、今や世界中だが、そういう国々の知識人に対し、かれらが自分たちの歴史と引き合わせながら中国を理解しようとする上で有益な視点を本書が提供していると考えられるからである。

さて、本書の目次は：

- プロローグ — 中国経済と近代経済史
- ☒ ステージ — 環境と経済
 - 1 自然環境と開発の歴史
 - 2 人口動態と集落形態
- ☒ アクター — 社会の編成
 - 1 政府権力
 - 2 科挙と官僚制
 - 3 民間社会
- ☒ パフォーマンス — 明清時代と伝統経済
 - 1 思想と行為
 - 2 明朝の成立と中国経済
 - 3 転換と形成
 - 4 伝統経済の確立
 - 5 伝統経済の特徴

- 6 景気の変動
- 7 経済体制と社会構成の定着
- ☒ モダニゼーション — 国民経済に向かって
 - 1 序曲 — 一八七〇年代まで
 - 2 胎動 — 一八九〇年代まで
 - 3 進展 — 日中戦争まで
- エピローグ — 中国革命とは何だったのか
- あとがき
- 参考文献
- 索引
- 関連年表

となっている。

プロローグ（と「あとがき」）で本書執筆の動機と意義が述べられる。日本は中国と隣接しており、「好き嫌い」でお互いの関係を左右させることはできない。何よりも互いに相手をきちんと知らなければならない。少なくとも日本から見る際は、

中国と向き合う日本人にいまもっとも必要なのは、中国経済の履歴書なのではなかろうか（p.014）

と著者は言い、

本書はそんな履歴書のデッサン、名づけて『近代中国史』という。「近代」とは現在の状態に直接つながる過去の謂で、中国経済が由来する来し方を語る構造史にほかならない。現状に対する理論分析・計量分析だけでは必ずしも見えてこない中国社会のしくみと中国経済の動きを、およそ六百年にわたる歴史のなかで考えてみたいと思う（p.014）

と陳べる。エピローグで、一九二〇年代以降の中国史を概観し、中国史の文脈における国民党政権の性格と共産党革命の基本的な相違を挙げ、共産党政権に至って、ようやく（ここでは後述の）「官・民の二層構造」を解消し、「中国の一体化」を達成できたと指摘する。ただし、その過程や以後の経過に伴う無理もあり、

経済発展をとるのか、中国の一体化をとるのか。もはや二者択一できない、両立せねばならないところに、現代中国のジレンマがある（p.268）

という状態だと著者は見る。そして、

もちろん、かつて一体化をはたし、いまグローバル化のただ中にいる中国の経済を、まったく伝統経済と同一視することはできない。とはいえ、数百年にわたって、伝統経済が根づよく続いた近代中国史の過程は厳存する。それはいったい、現代中国とどんな関係にあるのか。

そんな問いを立てるとすれば、ふつつかながら歴史家の答えは決まっている。随所に言及してきた、現代中国にみられる歴史との共通性は、単なる表層的な類似現象では断じてない。構造的な連続とみるべきである。(pp.268-269)

と取りあえずの感想を述べている。なお、「伝統経済」は、

一七世紀以降の中国経済は(…)社会の商業化と流動化・銀の浸透と貧富の分化という前提であり、明代にはじまったそれは、清代も変わらない。明清時代と一括してよばれるゆえんであり、この前提のもとに展開する経済を以下、西洋近代の経済様式と対比して、「伝統経済」とよぼう(p.147)

と、第Ⅹ章で定義され、同第5節で詳述されている(なぜか、索引には「伝統経済」はない)。

さて、第Ⅹ章で、「中国」の自然地理の概形的な構造を確認され、黄河、長江の流域の環境風土をもとに、華北、江南、さらに、沿海部と分けられ、それぞれの人口収容力と経済発展の関係が述べられ、特に、人口の変動で、中国史(BC221~2008)を五つに時代区分する:「図表1」(p.034)および「関連年表」(-)。このうち、本書で主に扱われるのは、明朝成立から中華人民共和国成立まで(すなわち、1369 - 1949)の「近代」約600年である。すなわち、

確認すると、三、四世紀あたりが第一の画期、一〇世紀が第二、第三は一四世紀。そして現在にまで続く二〇世紀は、それまでと異なる段階にある、と考えたほうがよいだろう。そのうち最も注目し値するのは、一五世紀から一九世紀にかけての時期である。そこに中国独自の展開があらわれているからである(p.046)

とする。そして、行政機能や都市機能が反映する規模に応じた集落数の分布を示す(つまり、統治の構造に関係する)重要な図表(「図表4」p.049)が掲げられる。

第Ⅹ章では歴代中国王朝政権の統治構造を「財政」面から分析する。事例としては清朝の歳出構造を引いている(「図表5」p.056)が、4500万両余りの歳入のもとで、3460万両余りの歳出があり、読み取れることは、財政黒字と「小さな政府」であるが、

本質的には軍隊・官僚という純消費者の権力集団を養うため、つまり政府権力が自己保存するためだけに、財政が存在していたと

もいえる。いいかえれば、一般の民間社会に税収が直接に還元されることがほとんどなかった、財政支出がカバーしていた「社会」とは、ひと握りの支配階層でしかなかったことになる。(…)当時の中国は、そうした軍隊と官僚組織が構成する権力で、社会全体を治めていた、という事実がある。その社会が二億以上の人口を擁する巨大なものだったことを考え合わせると、表の数値は財政支出としては、ごく小規模な額にすぎない。

であると注意がされる (pp.056-057)。著者は、さらに、現代中国の税体系を検討した上で、

以上からわかることは、中国の政府権力が収支の対象とした「社会」は今も昔もきわめて狭小な範囲に限られている、ということである。一八世紀の清代の事例はやや極端ながら、財政が関わる「社会」が狭小だったればこそ、あのようにつめたチープ・ガバメントの様態をとることが可能だった。

したがってそのチープ・ガバメントを、われわれの感覚で額面どおり受け取ってはならない。その埒外に、膨大な社会が横たわっているからである。(pp.063)

と述べる。

チープ・ガバメントなればこそ、官僚は政府からの俸給だけでは「生計」がたたず、いろいろな「工夫」を要し、そのことが社会の習い性になってしまったという面もあるというわけでもある。なぜだ？というところが恐らく中国理解の上で一番重要なことだろうが、著者が密接な現象として挙げるのは「士・庶」という文化的歴史的な二層構造である。「国計民生」という句を引いて、「国計」が政府の財政で「士」の世界、「民生」は政府の財政の及ばないところで「庶」の領域を表すから、対語になるという説明がある。「国民」ではなく「国・民」によって中国史は紡がれてきたとのことである。「科挙」も基本的に「士」の再生産過程のようではあるが、明朝では「士」の大粛清の結果、「官」つまり、皇帝権力と「士」との一体感が薄れ、民の領域にある「中間団体」などが在野の「士」の参画を得て増殖し、政府の管理下でない民生経済が発展するようになったという。「士・庶」の二層構造、あるいは、「国・民」(「官・民」)の分離構造が二〇世紀までの中国の特徴だったことになる。

現代中国は、これらの克服を課題とし、ある程度成功してきたはずだが、胡錦濤・温家宝体制下のメディア政策に強い影響力を發揮したと思われる于丹教授は、(185回186回記事で論じた) Confucius from the Heart で「士」を持ち上げている。一方、昨今伝えられる中国各地での「暴動」の類も、「国・民」の分離構造が完全には克服されていない反映であって、現在の政権運営に対する不満の表明と解すべきではないこともわかる。「盛世」であっても

(官の統治の埒外の)「民」には統治の質と関わりなく騒ぎ立てたいことが起きるようである。わたくしは、(186回記事で)『論語』の文言は、史料の興味を除けば、今日ことさらに持ち上げるに値しないが、「君子不器」は、「君子」にもルネッサンスの万能人的な人格側面が認められることを示唆する句として意義があるのではないかと述べた。しかし、わたくしの勘違いと言うべきものであったようである。岡本氏は、この句からは専門職業への軽視・侮蔑が導かれ、官僚たちの行動に反映したと指摘する(pp.078-079)。なお、日本には専門家に対する侮蔑感はないようだが、総合的人格への関心もないようであり、わたくしは、それでいいとは思っていないのだが…。

さて、第Ⅹ章では、上記「伝統経済」に至る経過とその内容が、詳述される。明代の「商業革命」と西欧の「商業革命」の本質的な相違が注意され、結局、明の統治理念と政治的・経済的あるいは社会的現実の間の乖離が官の干渉を受けない民生経済が成長し、「伝統経済」の成立に至る過程が分析されている。そして、銀が「伝統経済」において占める重要な地位が詳しく述べられ、銀の輸入量によって、地域間格差や経済変動が起きることが述べられる(鄭成功一派に対抗する「海禁」による17世紀の危機なども)。引き続き「乾隆盛世」、人口爆発、貧民層の増大、華人の生活圏・交易圏の内外への拡大が導かれる。

この章の冒頭で、言行不一致というか、「名」と「実」の乖離というべきものが古今を通じて中国の特徴的な現象であるとして、一例として、王陽明の「知行合一」が唱えられた所以が注意されているが、この種の、何というか、抽象度・理念度の極めて高い名分(標語)と具体度・現実度の高い実際の現象との乖離が、外部の人間が中国を見るときに位置する距離によって、印象や理解が全く異なってしまう理由なのだろう。それは『論語』においても、すでに、そうなのだが、実は、「小人」についての記述にこそ『論語』の価値が凝縮していることがわかる。「小人」はリアリストであり、今日に至る「庶」あるいは「民」の祖先なのである。だが、「小人」に中心を据えた『論語』の解説は存在するだろうか。

第Ⅹ章は、主として19世紀以降の展開であるが、「伝統経済」が世界経済に組み込まれ、結局、社会体制を含め、明清時代の二重体制では対応できなくなった経緯が述べられる(「督撫重権」という重要な鍵語が出て来る)。「銀錢二匱制」の意義も地域(間)通貨としての「銀」と地域内通貨としての「(銅)錢」の二重構造があり、中国からの茶、陶磁器、絹製品など高級品の輸出と、海外からの銀や銅の輸入という関係が長い間成り立ち、これが「銀錢二匱制」を担保していた。銀は、当初、主として日本から調達され、日本の銀が枯渇した後は、西欧との「交易」で新大陸から持ち込まれ、銀の需要は、日本からの銅で賄われ、日本の銅の枯渇は、少なくとも日本の国内には多大の影響があり、日清貿易が細り、オランダ船の来航の間隔も開いたようである(この辺のことは『中国「反日」の源流』(上掲)や『阿蘭陀が通る』(1

46回記事参照)に書いてあった)。ここに、イギリスと中国の交易は、茶と銀、つまり、中国の茶をイギリスが新大陸から持ち込んだ銀で決済する形で行われたのを、西欧圏での銀の需要の増大と共に(ニュートンが匱金づくりと闘っていた頃か(177回記事参照))、茶とインド産阿片に移行し、さらに、清代の官・民の二重体制が関わって阿片戦争に至る次第であったことが説明される。植民地主義とか帝国主義というような、簡単な話ではなく、しかも、阿片戦争によって清の統治の基本的な内部構造に変更が加えられたというものでなかったことがデータに基づいて示されている。この辺りのことは、洋の東西を問わず、中国史や中国経済史の専門家には周知のことらしいが、われわれどころか、今の中国人自身も実際の経過とは違う理解をしているらしい。19世紀の後半になり、中国と英国の二国間貿易にインドの木綿が加わり、さらに、インド茶による中国茶の競争力低下、銀価格の低下(為替レートの変動)が、中国の経済に大きな影響を及ぼし、自己完結であった中国の産業構造の変質をもたらすことになったのだという。この間の事情は、pp.218-219に、小節「変化の様相」としてまとめられている。対策として、関税自主権への希求と「洋務運動」とが解説され、その困難が従来の二重構造に根差したものであったことが述べられている。他方、対外貿易の税関制度や関税収入の会計処理が西欧基準で運営されるようになったために、清の財務に関する西欧諸国の「誤解」が生ずるようにもなったという。

そして「日清戦争」である。特に、日清戦争の結果として課された多額の賠償金の処理が、従前は存在しなかった

中央財政と中央政府の出現 (p.237)

を余儀なくさせ、

小さくは税目で、国税と地方税の区分が喧しくなるのも、大きくは政局で、中央と地方の対立が常態化するのも、すべてこのためなのである (p.237)

という。

この後、軍閥の割拠、辛亥革命(1912)、袁世凱の事業・善後大借款(1913)、第三革命(1916)、この間の第一次世界大戦開戦による金本位制の停止、銀価の高騰、その効果として、内債発行の成功、中国銀行の確立、輸入綿糸の駆逐、工業化、「民族資本の黄金期」、…、が述べられている。しかし、第一次世界大戦終結後、1920年代にそれまでの好況を支えた諸条件が逆転してしましたが、蒋介石が、広州の軍閥から成長して、革命を標榜し、実績を挙げ、南京の国民政府に至ったのだという。袁世凱、蒋介石、毛沢東の政権構造の端的な相違は、図表25(p.356)に示されている。世界大恐慌の影響で、銀が流出し、深刻な金融恐慌に陥った時に行った幣制改革(1935)は成功であったが、

しかし、目標とした国民経済の建設は、ついに達成できなかった
(p.258)

ま、日中戦争に至る（1937）のだが、なぜ、日本との対立が解けなかったのか、その解説が「エピローグ」にある。

… 国民政府は、上海が発する旺盛な需要に反応する沿海地方に立脚した政権であった。そうでない地方には手の及ばない権力集団だったのである (p.261)

と規定し、

上海を中核とする経済関係から孤立した地方には、別の政権が生まれる余地がある。国民政府時代に地方軍閥を一掃できなかったのも、日本との対立が解けなかったのも、さらにいえば、共産党との対立が取まらなかったのも、そこに原因がある。経済構造の視点からみるなら、日中戦争は上海・長江流域に拠る国民政府と東三省に拠った日本との争覇であり、軍閥抗争の延長とみなすことも不可能ではない。軍事力に勝る日本は、華北にくわえて、上海はじめ江南デルタを中心とする国民政府の経済的な地盤を奪った。日本が中国を経済的に支配するには、それを再統合しなくてはならなかったはずである。しかしけっきょく、重慶にたてこもり、長江上流域の地方政権として、頑強に抵抗した国民政府を打倒できなかったし、長江流域の農産地を経済的に統合することもかなわなかった。

同じことは、戦後内戦期の国民政府じしんにも言える。… 長江流域の経済圏統合という課題に、応えるべくして応えられなかったのが、致命的な失敗だったのである (pp.262-263)

と解説する。そして、中国共産党の革命である。「土地革命」と「管理通貨の実現」という二大改革の意義は、いくら強調しても過ぎることはあるまいと著者は評価している：

[土地改革] は国内的・階層的垂直的に、格差・懸隔があまりに大きい二元構造の社会構成を否定し、[通貨管理] は対外的・空間的水平的に、貿易・金融で強い景気波動を加える世界経済の影響から中国を独立せしめた。両者あいまって中国経済の一体性を高め、統合的な国民経済の枠組をつくりえたわけであり、これは二〇世紀のはじめに国民経済への希求がはじまってから、いな、大航海時代に伝統経済が始動してから、史上初の達成である (p.267)。

上述したが、本書はぜひ英訳してほしい。

191. (13.08.14) 目にした書物をすべて論じているわけではないが、何冊かの本については記事を書きかけたまま、後で見た本の記事を先に書いてし

まうことがある。今回も、実は、書きかけの記事があるのだが、先日、岩田屋の7階で購入した

北川智子：異国のヴィジョン 世界の中の日本史へ
新潮社、2013
ISBN978-4-10-334341-7

を論じてみたい。西欧の古典的な都市巡りの旅行エッセイの体裁を取りながら、昨年のベストセラー

北川智子：ハーバード白熱日本史教室 新潮新書（新潮社）、
2012 ISBN978-4-10-610469-5

の続編のような、つまり、Lady Samurai のアイデアに至る回想を、かなり踏み込んだ形で述べている。新書では不思議な感じがしたところが、実は、必然的と言ってもいい過程を辿っていたことがよくわかるのである。ただし、Lady Samurai はハーバードの授業用の惹句というべきものであって、学術的には、秀吉の正室をモデルにした限定的な定義 — 戦国大名の正室とその領国経営、家臣団統率、さらに対大名対朝廷外交における本質的存在感を示すもの — を与えているようである。北川氏のプリンストンでの学位論文を見なければならぬが、282 ページあるようであり、しかも、自宅からはダウンロードできない。北川氏が、いわば、すなおな目で発掘するまで、江戸時代を経て、大名正室の政治的権能についての理解が戦国期と大いに異なってしまったことに誰も気づかなかったという事情も分析の必要はあるだろう — 恐らくは、徳川幕府の儒教推進策によって上級武士の間での女性の社会的役割への感覚が変質してしまったからなのだろうが —。

実は、著者の「新書」については当ブログでは論じていない。感服した箇所は、第5章、特に、小節 — 「大きな物語」がない日本 — であったが、わたくしは新書が十分に話題になってから手にしたので憚った面もある。遅ればせながら、そこでは、

この本をまとめながら、私のような若い歴史家でも、もっと広く
貢献できることや発信できるメッセージがあると思いました

と述べて (p.180)、

そのメッセージとは何でしょうか？それは、「日本のイデオロギー
を目に見える形で作ること」です。つまり、この [新書] 本は、実
際に読んでいただいた皆さんにアクティブに考えてもらうための、
一つの「難題」を提示するところが終着点なのです。イデオロギー
という固い話に聞こえますが、ここでは「日本とは何かという
質問に対してしっかりした答えを構築すること」と思ってください
い。… (pp.180-181)

と進み、個人個人のアイデンティティ確立の上で、過去の出来事を思い起こし、意味を考えることが本質的なことに注意した後で、さらに、

国史も同じなのです。「この国とは何か？」という国のアイデンティティを形成する上で必然的に重要な要素になるのが、その国の歴史です。そのアイデンティティをつくるために、日本の歴史を知ることが重要なのです。(p.181)

と言い、そして、

残念ながら、第二次大戦後から長い間、日本には「大きな物語」がありません。一般化された歴史叙述がないのです。つまり、イデオロギー、アイデンティティが不足しているのです。(p.181)

という重要な指摘をしている。この後、戦前期の「イデオロギー」への言及があるが、その結果が、まあ、今日の状況でもあるのだから、「正しい」とか「誤った」とかいうのではなく、そもそも本当の意味での「大きな物語」ではなかったことは明らかである。わたくしには、なぜ、こういうことになってしまっているのか、という疑問があり、それが当ブログの本来のテーマなのだが、北川氏の、むしろ、そういう「大きな物語」の一端でも書き出してみよう、という試みに邁進している様子がまぶしい。

わたくし自身は、随分昔（平成19年4月頃）に、拙HPの雑談と本音と称して縷々愚痴を連ねた中で、大学の国際化を論じ、

要するに制度や社会全体が関わることであり、技術的な表面を対象とする手直しだけでは、期待する効果は生まれまい。内外の学生が、わざわざ、日本の大学で学ぶメリットは何か — 日本で学びたい、暮らしたいという動機は何か。大きすぎる課題だが、大学を超えた特徴的で永続的な日本という価値を育んでいかなければならないのではないか。

と述べた条があるが、「特徴的で永続的な日本という価値」の素が、つまりは、「日本とは何か？」ということにほかならず、それが意識できなければ、グローバリゼーションなどは空語だという想いは今も変わらない。

脱線をした。北川氏の旅行記の方だが、6月まで、ニーダム研究所研究員として、イギリス・ケンブリッジにいたようであるが、今はアメリカに戻っているのだろうか。ともかく、本書は6月に出版されており、一応、去年の初夏、ハーバードからニーダム研究所に移った前後の旅行記の体裁になっている。

目次であるが、

まえがき
一 水の街 アムステルダム

はじめての旅 マルチカルチュアリズム ヴィジョン

二 時の街 ボン
 異国で日本を語る フリーマン・ダイソンとの出会い 生きて
 いる歴史

三 光の街 パリ
 歴史のプリズム 命とインプレッション それぞれのプリズム

四 音の街 ウィーン
 現在を生き、未来を生きる時間 失われた命を語る 歴史をシェ
 アする

五 匠の街 ミラノ
 「現代のWe」 戦後を生きる

あとがき
 付録

となっている。実は、旅行記の部分は、余り、できはよいようには見えないのだが、見聞に触発されて示される内省的な回想の展開は非常に面白い。第一章では、バンクーバーに最初に行ったときのこと、ブリティッシュ・コロンビア大学での学生生活、特徴であるマルチカルチュアリズム、日本史との出会い、戦国女性の消失への違和感、「ヴィジョン」という言葉 (p.39) の発見：

「ヴィジョン」[のように] 理想を実現化することが有用であると認められているアイデアが、単なるひらめきと違う点は、その根底に「時間を超えて、場所を超えて、人種を超えて共有されるべきエレメントが含まれている」という前提条件があるからなのだ (p.40)

と (マルチカルチュアリズムを例に挙げて) 言っている。アムステルダムで、殊更に、「ヴィジョン」を回想したのは、アンネ・フランクからマリファナ、そして、ブレイトナーの絵画など、バンクーバーに通ずるものがあったということもあるのだろう。著者が観賞したブレイトナーの絵画はこれだろうか。

第二章では、ボンやケルンを訪れているが、ここでの回想は、希薄なマルチカルチュアリズムなどアメリカ東海岸とカナダ西海岸の違い、ハーバードのサマースクール、ボライソ教授のザ・サムライという授業への違和感、「日本とはどんな国ですか」などという問いへの的確な回答の難しさ、フリーマン・ダイソンの (アインシュタインの限界についての) 言葉：

いや、厳密に言うと、彼が生きた時代がそれを知る準備ができていなかった (p.61)

が紹介され、著者の Lady Samurai というプロジェクトについて、

わたしのプロジェクトは、国ありきのものではない。これまでの既存研究を批判するものでもなく、海外の人が今を知るために読む歴史叙述を書く。つまり史実はそのまま伝えても、歴史叙述として日本史を海外で語る時には、国という枠や、国という感覚から離れた客観性が求められる。そういう事情が海外にあり、世界史としての日本史の語り形成されなくてはならない時代が来ていることを、[日本に対して]説明しておかなくてはならない気がした。

と述べている (p.63)。ケルンの大聖堂を訪れた後、

ボンでは、これまでの命を忘れないように、今を生きる人がなくなった命を心から大事にしているようすに出会った。毎日「生きている」この聖堂のように、命を引き継ぎながら、みんな生きている。ケルンの聖堂で歴史と人の強いつながりを感じながら、わたしは時の街を去った。(p.76)

と、この章を閉じる。

第三章はパリだが、学位論文を用意しながら国連の日本代表部でインターンをしていた頃の回想がある。新書第4章の末尾に、日本史の「外交官的役割」の話が出て来るが、それが体験というか体感に裏打ちされたものであることがわかった。ピカソ美術館を訪ねて迷い、アルシーヴ・ナショナルでの音楽学校生のコンサートに遭遇する話が出て来るが、ストリート・ミュージシャンの演奏と違い、室内楽はそれなりの環境が不可欠なので、週末など、あちこちの古い建物を使って修行中の音楽家の手軽な演奏会が多いのは嬉しいことである。もちろん、このためにはパリなど現地に行かなければならないだろうが、文化的伝統というものには「外交官」的要素があることがわかる。

もちろん、時の政府が特に肝入りをして、ということではなくて、その「国」を表す総体が「外交」資源なのであり、歴史とか文化的伝統というものは、中でも、ことさらに重要な地位を占めているということである。そして、フランスは、この点に早くから強い意識を持っていたことは疑いがない。翻って日本の場合だが、明治初期の廃仏毀釈と敗戦後の混乱期に大量の美術品が流出したが、結果的に、日本文化の独創性についての理解を深め、評価を高めたという効果があったであろう。最近のアニメはどうか。クール・ジャパン (191 回記事) や村上隆氏 (13, 86, 122 回記事など) を論じては見たが、結果として、日本を知ってみたい、自分なりの日本についてのストーリーを作ってみたいという感覚を、海外の人たちに起こさせるかどうかまで考えると、オタクだけが共感を覚えるという水準では不足しているわけである。北川氏のレディ・サムライから脱線したかのような感想だが、この章の回想で、授業の意図に関して、北川氏は非常に興味深い図式を示している。すなわち、受講者は、プリズムなのであって、レディ・サムライという日本史授業を通

じて入射したアイデアの光線がプリズム通過後に実現する散乱光線が大切だ
というのである。ただし、パリの旅行記としての出来は余りよくない。

第四章はウィーンである。デューラーの版画ウサギ（1502）の図版がある。
回想では、3.11の衝撃と、授業における学生たちのレスポンス、そして、

海外の日本史の授業は、学問的な興味や方法論を超えたところにも
重要な意味があることをわたしに再確認させた。大学生のため
には、歴史はもっと広い視点からの語りを認めなくてはならない
し、議論の枠組みを大きくする必要がある。少なくともわたしは、
海外で日本史を教える者として、現在の世界が気にかけているこ
と、あるいは日本への期待や疑問に、歴史を通して理解を求め
ること、そして教えられる側の次世代を担う学生たちの興味に応
えること、という二つの役割を果たす義務がある。（p.137-138）

と言う。少し後で、学生のレスポンスを思い起こしつつ、プリズムを通過し
た散乱光が発散するのではなく収束しているとして、

「命を大切に。ひとつひとつの命の軌跡を大切に」ヴィジョンの
前提条件となる、命というエレメントを見つめて書いた歴史は、
たとえその叙述は百通りあっても、どの歴史もどれも同じ方向の
未来を描き出していた。それは語りという形をした、明らかなる
「ヴィジョン」だった。

と言う（pp.138-139。この2ページには、プリズムを通過した光線が「ヴィ
ジョン」に収束する図があり、さらに、重要な観察が書かれている）。上の引
用箇所は抽象的だが、p.139末の

国中心ではなく、過去の命を日本以外に住む人たちの共通のプロ
パティとすることで、歴史の収束点がひとつになっていた。

の方がもっとはっきりするだろうか。

第5章は、ミラノである。大聖堂とレオナルドの「最後の晚餐」を見学し
た話がある。スカラ座の戦災と再建を語るガイドから、欧州人には「戦後を
生きている」という意識があるという観察、「戦後」はいつ終わるか、日本の
場合は、と続き、「日本史」記述の二重性、海外の研究者は「日本人（they）
は」として扱い、日本の研究者は「我々（we）は」として扱うが、今や、どの
「国」の「戦後」であっても、その「国」だけでは決められない。なぜなら、

それは今、世界各国が世界史を一緒に書いている時代だからだ
と思う（p.162）

と理由を推測し、

最終的に [戦後の終わり] を歴史に書くのは誰なのか…。それは
わたしたちの次の世代。「現代の We」に違いない。（p.162）

とする。わたくしよりも遥かに若い著者に「次の世代」などと言われると、絶望的な感じになるが、意外と早いかも知れない。いずれにせよ、we か they かは難しく、ここで北川氏が言っていることは、正反合の弁証法的展開への期待のようにも見える。

付記： はなはだ余計な感想だが、北川氏は、わたくしの現在の勤務先が立地しているエリアの出身である。北川氏が高校受験をした当時、勤務先校は女子生徒の受け入れはしていなかった。もし、当時から女子生徒の受け入れをしていたら、彼女は受験したであろうか、受験すればおそらく合格したであろうという水準の学力は想定できるが、しかし、その場合、入学手続きをとったであろうか、さらに、入学したとして、これだけの成長を遂げるような進路を選択したであろうか、といった疑問が次々と湧く。もとより、こういう志の高さやスケールは、学校教育ではなかなか養えないものなので、藩校の伝統を引く古い県立高校、つまり、地域屈指の伝統校の理数科だから、とは思ってはいない。しかし、わたくしの職務にとっては、生徒たちに、もっとおのれの可能性を信じよ、というか、かれら（自らの内心から）の（存在をかけた）志の覚醒に向けて（わたくし自身が）半歩でも踏み込むべきではないかという課題が示唆されたという想いはある。

192. (13.09.07) 日経の NOnline の記事で教えられ、amazon を通じて

西股総生：戦国の軍隊 現代軍事学から見た戦国大名の軍勢
学研パブリッシング 2012
ISBN978-4-05-405304-5

を入手した（ところが、もとになった記事が確認できない — 上掲書の序章「はじめに」の冒頭部分を引用していたのだが）。ともかく、ネットで検索し、ページの一部の閲覧によって、購入を決めた。巧みに書かれていると言えるわけだが、実際、版を重ねているようである。また、ネット検索で、続編というよりも本編というべき

西股総生：「城取り」の軍事学 築城者の視点から考える戦国の城
学研パブリッシング 2013
ISBN978-4-05-405646-6

も併せて入手した。これらは、実は2箇月余り前に書き始めて、その間に別の記事（190回、191回）と書いたもので、内容は、ほぼ忘れてしまった。

ところで、NOnline の記事では、「戦国の軍隊」の冒頭が引用され、それが企業活動との関連で論評されていたように記憶している。他にも、秀吉の小田原攻めの際の出城（山中城）攻略で功績のあった侍大将への言及もあったようだが、何せ、肝腎の記事が見つからないので…。いずれにせよ、「戦国の軍隊」購入の動機は、その記事であるが、「城取り」の軍事学も購入し

たことを悔いてはいない。また、著者の西股氏がこの方面では相当のファンを抱えておられるらしい人であることも推察が付いた。要するに、具体的かつ論理的であり、事例に即して、論述が展開されているようなので、説得力があるのである。

時間が経っていることもあり、併せて、論じてしまうが、まず、目次を掲げよう：

「戦国の軍隊」目次

はじめに — 戦国時代への扉 —

第一章 戦いの現場から — 天正十八年の山中城攻防戦 —

箱根路の戦雲 渡辺勘兵衛の活躍 山中城陥落

第二章 中世の軍隊 — 封建制的軍事力編成の原理 —

武士とは何者か 封建制的軍隊の成立 元寇から南北朝・室町時代へ

第三章 戦国の兵士は農兵か — 軍団の編成と戦争の季節 —

後北条軍団を解剖する 後北条軍団の諸相 戦争と季節

第四章 足軽と長柄 — 軽装歩兵の戦列化 —

兵種別編成方式と領主別編成方式 足軽とは何者か 戦争を変えた長柄鎧

第五章 鉄砲がもたらした核心 — 集団戦から組織戦へ —

兵種別編成方式の成立 鉄砲と戦国の軍隊 軍事上の画期

第六章 侍と雑兵 — 格差社会の兵士たち —

侍と軍役 侍たちの戦場 戦国時代の非正規雇用兵 二重構造の軍隊

第七章 補給と略奪 — 軍隊に出されつづける永遠の宿題 —

戦国時代の兵站 小田原の役と補給 飢餓と略奪

第八章 天下統一の光と影 — 信長・秀吉軍はなぜ強かったか —

兵農分離と民兵動員 鉄砲神話の再検証 覇者の素顔 戦国軍事革命の結末

あとがき

時間が経ち、記憶も薄れているので、きちんと論じようとするれば、もう一度読み直すしかない。ただ、強く印象に残ったところがあり、それを確認するだけでよいとするれば、そして、ここでは、それを実行するので、まず、目次を掲げ、概要を示した上で、コメントを加えよう。実は、NBonline で引用されていたのは、本書冒頭に、真珠湾攻撃（1941）の際の南雲中将の第三波攻撃を取りやめて、艦隊を反転させて帰途についたという判断と、その際の、中将の判断の根拠となった4点（p.4）であったと記憶している。本書の「はじめに」は、同様の反転帰途の事例として、長尾景虎の小田原攻め（1561）の例が挙げてあり、

[実際の軍事行動では作戦終結のタイミングの判断が難しいので]

指揮官は、自軍の損害および作戦を継続した場合に予想される損失・リスクと自軍のあげた戦果とを総合的に勘案したうえで、行動を継続するか打ち切るかの決断を下すことになる。長尾景虎も南雲中将（彼の場合は、与えられた権限内で）こうして反転を決意したのだ（pp.5-6）

と説明がある。実は、背景には、著者には、戦後の日本の歴史学の風潮に対する疑問があって、

皇国史観の克服と軍国主義への批判を出発点としたゆえに、軍事・戦争の分野は歴史学の対象から切り離されてしまった。つまり、戦国史にかぎらず現在の日本の歴史学は、軍事・戦争という事象について認識し、思考するための適切な方法論的枠組みを、ほとんど持ちあわせていないのだ。結果として、戦国時代の戦争に関しては、戦前から語り継がれてきた英雄譚のような合戦物語——それらは青少年を戦場へと駆り立てるプロパガンダとしても利用されていた——が、あいかわらず通説・定説として十分な検証を経ないまま、再生産されつづけている。これは、皇国史観からの脱却を出発点とした歴史学にとっては、大いなる皮肉と言えよう。（p.7）

と感じており、特に、

近代的な軍事用語・概念を前近代の歴史的な事象に適用するのは無意味だ、という理屈はそもそもおかしい。現在の歴史学は、戦国時代に存在しなかった多くの概念や用語を用いることなしに、思考することはできないからだ。もし、経済・階級・共同体などという用語は戦国時代には存在しないから使用してはいけない、と言ったらほとんどの研究者は何も論じることができなくなってしまう。研究者たちが、こうした「近代的」な用語・概念を用いるのは、古今・洋の東西を問わず人間社会にはある種の普遍的な原理が存在する、という認識を前提としているかなにほかならない。（p.9）

とし、

軍事に関して、同じことが適用できない理由はあるのだろうか。たとえば、指揮官は自軍が獲得した戦果と自軍の損失及び予想されるリスクとを秤にかけて、作戦を中止するか継続するかの判断を下す。この原理が普遍的であることを確認するために、冒頭に見ると関係のなさそうな真珠湾作戦と、永禄四年の長尾景虎の事例を持ち出してみた。これは、決して不当でも無意味でもない。（p.9）

と信条を述べる。

現代日本の認識の偏りを西股氏は、非常に慎重に状況を限定して、指摘しておられると言ってよいであろう。実際、「皇国史観」「軍国主義」は、総体として、大いに問題があったことについては、結果的に、それらが目指したであろう成果、つまり、日本の永続的な隆盛、を達成できなかったどころか、日本の敗戦と衰亡を招いてしまったという、極めて簡単な事実ということだけを考えても、異議を差し挟むことは誰にもできないであろう。しかし、問題点の把握と分析を正確に行うことは、別の話であって、「軍事」とか「皇国」という発想をタブーにすることは、問題点との直面を回避することに他ならない。当時、「皇国日本」だけが軍事活動を行ったわけではなく、また、現在、「皇国日本」が「平和国家日本」になったからと言って、世界から軍事活動が消えたわけでもない。「軍事」活動と「皇国日本」とは独立の概念なのである。「皇国史観」と「軍国主義」の組合せの最大の問題点は、「軍事」をロマンティシズムの観点で把握してしまったことであるが、それでも、南雲中将の例のように、むしろ、軍人にはリアリズムの世界に踏みとどまっていた人がいたのかも知れない。軍事をロマンティシズムの観点で把握するという傾向は、当時は、日本だけではなかったのかも知れない。しかし、第二次世界大戦の後には、「軍事」理解からロマンティシズムの要素は、もはや、ほぼ完全に払拭されてしまっていると思われる。ところが、「平和国家日本」では「軍事」をほぼすべてタブーにしてしまったために、「軍事」理解の水準が、「皇国史観」「軍国主義」の時代のままのロマンティックな水準で静止してしまっていると言えるのではないだろうか。

いずれにせよ、西股氏は、近代的な軍事用語・概念を前近代の歴史的事象に適用するという姿勢をとることにより、概念規定が明晰になり、感情移入の少ない分析を、後北条氏の軍事経営に対して適用し、この時代の東国の軍隊の状況を立体的に説明することに成功されているように見える。戦国時代の軍事状況が漠然と想像していたものと違って、近世の戦闘形態としては、デュマの三銃士に描かれているような同時代の西欧圏のものとも共通する点があるように見えるのは、用語や概念の選択に拠るところもあるのかも知れない。「あとがき」では、西股氏が専門とされる「城郭史」から踏み出して、戦国の軍隊を論ずるに至った事情とその釈明がある。要するに、

生物の世界と同様、人間の作り出す構造物やシステムの場合も、進化とは単純なものが複雑化してゆく過程ではなく、変遷する環境への適応ではなかろうか。だとしたら、城郭構造の進化とは、城郭をとりまく環境への対応として生じたのではなかったか。城郭の本質が軍事的構造物であるのだとしたら、城郭の構造が進化するという現象の背後には、それを構築し使用する人間集団、つまりは軍隊の変化があるのではないか。(p.257)

という認識である。

さて、「城取り」の方であるが、具体的な「城」というか「砦」というか、そういうものの縄張りとは分析が、典型的とされる例について詳述されている。やや疲労感もあるので、こちらには立ち入らないが、書物としては、どちらの方が生命力があるだろうか、わからない。いずれも、事例に即して記述されており、簡単には陳腐化しないであろう。

付記（平成 25 年 12 月 9 日）：少し前に本屋の店頭に出ていたので気づいていたが、丸の内のオアゾに寄ったついでに、移動中に読むのにいいかと思ひ、

竹村公太郎：日本史の謎は「地形」で解ける

PHP 文庫，2013

ISBN978-4-569-76084-1

を購入した。前に立ち読みしたときは、末尾の「河川流域の森林限界で遷都が行われた」という仮説に基づき、奈良盆地、つまり、大和川流域よりもっと小さい流域の邪馬台国から、大和川の奈良盆地に移ったとする前提で、大和川より小さい流域の比定地は一箇所しかなく、それは伊都だというので、へえーと思っただけで買わなかった。那賀川水系と筑後川水系の近接する辺りとてもあれば、購入を考えたかもしれないが、確かに、これでは古墳時代でも流域は広すぎるし、大半が湿地でもあった。

また、関東平野が湿地帯であり、利根川が東京湾から太平洋に、つまり、付け替えられて今日の関東平野が豊穡な農耕地帯に変身したこと、最後の仕上げは、ようやく明治になってからなされたことは、確か、學士會会報で、まさに、竹村氏の記事で読んだ記憶がある。西股氏の記事との関わりは、本書の

第 9 章 なぜ家康は江戸入り直後に小名木川を造ったか

にあつて、家康が北条氏残党を鎮圧するために要した重要な水路だったとの説明にある。西股氏の城塞の議論は、山などの陸地の地形を念頭に、もちろん、川や道路の位置関係もあるけれど、城塞の防御のために開削されたかもしれない運河については触れられていなかったと思う。とは言え、竹村氏の書物と併せて眺めると、戦国期の武将が土木的知見に優れていたこと、移動や防御手段の確保に長けていたことに驚く。この意味では、竹村氏の書物

第 2 章 なぜ信長は比叡山延暦寺を焼き討ちしたか

も面白い。要するに、逢坂の安全通行のために比叡山に城塞や城塞のようなものの存在を許さなかったのである。もう一点、感心したのは、

第 7 章 なぜ徳川幕府は吉良家を抹殺したか

であった。矢作川の水利権をめぐる松平一族の吉良家に対する積年の恨みのようなものがあつたとは想像もできなかったが、この章の内容は、史資料で検証できるのではないかと思う。前後の第 5 章、第 6 章、第 7 章、第 8 章とも合わせ、興味深い指摘である。

第4章 元寇が失敗に終わった本当の理由とは何か

は、当ブログの主旨とも無関係ではない。本書に紹介されているチンギス・ハンの22頭立ての巨大パオが数名の御者（車上に1名、両脇に2名）の制御で行進していることの意味である。この絵は草原の様子のようなが、去勢という畜産技術が牛馬に牽引された車という移動手段を定め、車に拠る移動が道路整備を進め、内陸に都市を発達させたとともに、直線道路を中心とした帝国の成立になったように思われる。日本は、第一に、去勢を知らず、したがって、牛馬牽引の大型車両の発生を見ることもなく、さらに、地形的な要因もあって、道路の必要性は限定的なものとなり、道路によって社会が整理され把握されるという習慣が発達しなかったと言えるのではないだろうか。小さな川の流域を中心とした小さな丘や森林の集積と、それらを束ねる形の高山地帯や湿地帯で日本列島は細かく分けられていて、大スケールの車馬の通行はもともと論外であったのかも知れないが…。

なお、竹村氏の書物の9, 2, 7, 4の各章を除いた目次は

- 第1章 関ヶ原勝利後、なぜ家康はすぐ江戸に戻ったか
- 第3章 なぜ頼朝は鎌倉に幕府を開いたか
- 第5章 半蔵門は本当に裏門だったのか
- 第6章 赤穂浪士の討ち入りはなぜ成功したのか
- 第8章 四十七士はなぜ泉岳寺に埋葬されたか
- 第10章 江戸100万人の飲み水をなぜ確保できたか
- 第11章 なぜ吉原遊郭は移転したのか
- 第12章 実質的な最後の「征夷大將軍」は誰か
- 第13章 なぜ江戸無血開城が実現したか
- 第14章 なぜ京都が都になったか
- 第15章 日本文明を生んだ奈良は、なぜ衰退したか
- 第16章 なぜ大阪には緑の空間が少ないか
- 第17章 脆弱な土地・福岡はなぜ巨大都市となったか
- 第18章 「二つの遷都」はなぜ行われたか

である。

193. (13.09.17) 久しぶりに天神のジュンク堂の理工書のエリアをうろつき、

高瀬正仁：岡潔とその時代Ⅰ 正法眼蔵 — 評傳岡潔 虹の章
みみづく舎（発行）医学評論社（発売）2007
ISBN978-4-86399-194-1

：岡潔とその時代Ⅱ 龍神温泉の旅
みみづく舎（発行）医学評論社（発売）2007
ISBN978-4-86399-195-8

が目に入った。この著者による岡先生の評伝「星の章」「花の章」はご恵贈いただいたが、予告されていた続編「虹の巻」が漸く刊行に至り、実は、上記の二冊本の書物であることは、実際に手に取って見るまで気づかなかった（実際、この間の消息は、下巻のあとがきにある）。岡潔という人の難しさと正面から取り組んだ大労作というべきだろうが、非常に重い著作である。

わたくしのかつての同僚には、すでに亡くなられているが、岡先生の薫陶を受けた方がおられた。その方の最終講義は、確か、岡潔と芭蕉の俳諧との関わりを論じたものであった。講義予稿は保存してあるはずだが、今参照できる状態にはない。印象に残っているのは、岡先生の研究室のメンバーが句作に励んでいたことと、元同僚の先生が初めて岡先生に論文を褒められたときに、（真善美の）美やねえ、真にはまだまだや、と言われたというくだりである。岡先生の数学的遺稿集は、この先生が整理され、確か、10冊程度の報告集にまとめられていたが、未完であったかもしれない。遺稿集は、かつての勤務先の図書室にも（当然）あって、わたくしは何回か眺めたことがある。岡先生に関しては、奈良女子大の数学教室で書籍を整理していたら、北海道帝国大学理学部印のある本が出てきて、これは岡さんが北大から持ってきてそのままになっていたものに違いない、として、北大に返したという話を聞いたことがある。この話を、上記、岡先生のお弟子さんにしたところ、そんなはずはない、先生の退職時の研究室の整理は自分たちでやったが北大からのものはなかった、と応じられた。奈良女子大の数学教室が教室図書の整理をやったのは、それより大分時間が経ってのことだから、研究室に残されていたというわけではないのだろう（岡先生が昼寝をしたというソファは、わたくしの北大在職中はまだ残っていた。）。

なお、高瀬氏の書物に、小林秀雄氏との対談で、岡先生が連続体仮説について説明する条があるが、岡先生の周囲では、数学基礎論、特に、ゲーデルの仕事をずいぶん調べられたのではないかと思われる。というのは、これも先のかつての同僚の先生のことだが、わたくしが Penrose の Emperor's new mind はゲーデルの不決定性定理に基づいて、「人工知能」では人間の脳を代替できないという主張をしていると言ったところ、ゲーデルの定理の本質は、真偽が人間には直ちに明らかなことでもアルゴリズムでは決定できないという命題があるということやろ、という反応があったことを覚えているからである。Penrose は、脳の秘密として、いかにも西欧的に、「自由意思」を取り上げ、不確定性との関連から重力場の理論（相対論）の量子化という方向に進もうとするのだが、岡先生は「西洋は間違っている」という立場であり、その理由が、上掲の高瀬氏の書物の解説するところでは「自由意思」というアイデアそのものの否定のようにも見えるのだから、岡スクールがゲーデルの定理からどういう姿勢を選び取ったのかは知らない（確かめなかった）。

わたくしは、岡先生の数学的著作に目をきちんと通したことはなく、関わりのある分野で仕事の真実事をしてきたわけでもない。岡先生の噂話

は聞いたことはあり、例えば、さる秀才の数学者が学会の折に岡先生の前で発表をしたところ、先生は直ちに後ろを向いて出口を指差したという逸話を耳にしたことがある。その伝でいくと、わたくしなど全く相手にされない部類だろうと思う。こと数学に関する限り、西欧風のアプローチがよいのか、岡潔流の情緒に基づくとするのがよいのか、よくわからない。恐らく、岡先生に従えば、指物師流か百姓流かということなので、比較などそもそもできないことなのかも知れない。この点で、岡先生の「不定域イデアル」というアイデアが Henri Cartan の手によって (Leray 流の) faisceaux の枠組に整理されて、フランス数学会誌に掲載されたことにご不満があって、岩波から出た論文集では Cartan の手が入る前の形の論文が収められていると聞く (!)。両者の比較で見えてくるものがあるのではないかと思ひ、他人にも、その趣旨の示唆をしたことはあるけれど、興味の説明が意外と難しく、どうやら自分でやらなければならないことだとわかっただけで、その実、まだ何も手を付けていない。

さて、高瀬氏の上掲の書物であるが、これを要らぬ誤解をされないように論ずるのは簡単ではない。まず、書体であるが、歴史的仮名遣、正字 (繁体字) 使用であり、岡潔の色紙や刊行物で、「現代かなづかい」のものも、すべて歴史的仮名遣に改めてある。ここには高瀬氏の強い拘りがある。実際、☒の第一章は、石井式漢字教育である。石井勲先生の漢字教育の効果が高いことは、わたくしが中学生の頃に聞いたことがある。事実、福田恒存氏の「私の国語教室」(『聲』連載) は愛読していたから、今でも、歴史的仮名遣はほぼ間違えることなく書くことができる (福田氏が強調されたように、歴史的仮名遣の方が易しいのである)。漢字に関しては、書くのと読むとは別だと考えれば、そして、最近のワープロ式の変換可能性を考えれば、今こそ、多くの字音語を正しく教えて変換ミスが減らすべきだと思われるので、むしろ、正字なるものに拘泥すべきではないと考えている。「現代かなづかい」と「当用漢字」は、敗戦後の改革でも legitimacy に疑念の残るものの筆頭ではあるが、それでも過去との断絶が微温的に留まり、歴史喪失に至らなかったのは、漢字かな混じり文が日本語表記の主流だからである。福田氏は日本語の正書法は漢字かな混じりであると公式に決めておくべきだと主張されていたと思うが、その上での、歴史的仮名遣いであったと理解している。

いずれにせよ、漢字かな混じりが今もしっかりと生きていることが現代日本にとっては最重要なことである。仮に、漢字を難しいとか (民族主義的に) 異国起源だからとか言って、敗戦後に、(国産だから) 平仮名と片仮名、さらに、(異国起源だが便利そうだから) ローマ字の三種 (あるいは、そのうちの一種ないし二種) の使用の横書きのみを (内閣告示ではなく) 法制化していたとしたら、日本ほどの文化を創り上げてきた国でも、今頃は、生物的集団としてはともかく、文化的社会的集団としては消滅しつつあったろう — 今だって、怪しいと言えば怪しいのだが。それに、仮名の字体を整理した明治期の

国語改革による過去との断絶は敗戦後の「国字改革」によるものとは比較にならなかったとも考えられることも注意しておきたい。江戸末期の識字率の高さから察して、果たして、現行の平仮名片仮名に整理する必然性があったかについては疑問はあるものの、活字化は不可欠であったろうから、合理的な改革ではあったと思う。考えてみれば、江戸末期から明治初期は、政治的な大転換の時期であったが、原理主義が初めて日本を支配した時期でもあった。近代日本の不幸は、江戸末期の原理主義勃興にあるような気もする。具体的には、廃仏毀釈と神道の純化は、まさに、非日本的なことではなかったか。そして、岡潔の思想は、神仏習合の未分化の域に起因しているようにも見える。

さて、第二章は「駒込千駄木町の一夜 ― 国民文化協会」、第三章は「正法眼蔵 ― 玉城先生の肖像」である。第二章には、「国民文化協会」の合宿で、岡先生がされたという講演「欧米は間違っている」についての論がある。第三章では、仏教学者の目からの岡先生の信仰についての見解が紹介されていると思われる。第四章はIIにあるが、「人間の建設 小林秀雄との対話」となっている。著者自身の思い入れの深い章でもある。第五章は「龍神温泉の旅 ― 保田與重郎との交友」である。「無明」という境地、ピカソの作品には「無明」そのものをそのまま描き出してしまっているものがあるという難しい指摘がある。

最後に、長文の「あとがき」があり、各章の解題、出版に至る経緯、フィールドワークの思い出が収められている。乱暴な読み方としては、ここだけに眼を通すということも考えられる。それから面白そうなところを改めて見る、とか。

ともかく、本書では、数学者岡潔ではなく、思想家・宗教家岡潔が描かれる。もとより、岡潔は一人しかいないから、皆一緒ではある。しかし、高瀬氏の評伝を読んで、岡先生に対する理解が深まったかと問われると、答えに窮する。なお、本書には、岡潔の詳細な年表が付いている。索引を付けてほしかった。

付記：なお、岡潔先生の数学的著作、人物については、奈良女子大学のサイトでご覧いただきたい。このサイトには、岡先生の第7論文の原型（岩波版、34ページ）がある。フランス数学会誌版（33ページ）もネット上で公開されているから、両者の比較は簡単にできるということに気付いたが、実際に、両者をダウンロードして比較する作業は、また、別ではある。最初の一二ページを比較してみたただけだが、もちろん、フランス語の質は問わないとして、用語の選択にも微妙な差がある。序文の末尾でも、岡先生が研究の動機として大事にしたらしい書物の扱いで差があることが見えたが、これは時代的な政治判断の反映であったかもしれない。だが、重要な語彙選択の違いもすでにあり、意外と興味深い検証作業になるかも知れないという想いはある。いづれ、報告したい。

194. (13.09.21) 先日の日経の読書欄で紹介されていた書物：

森臨太郎：持続可能な医療を創る グローバルな視点からの提言
岩波書店、2013
ISBN978-4-00-025906-4

を入手したので、早速、目を通した。目次であるが、

はじめに
序章 曲がり角にある日本の医療
第1章 医療が提供されている仕組み
第2章 医療財政を考える
第3章 医療の質と安全の担保
第4章 医療政策の意思決定
第5章 日本が進むべき道
あとがき

となっており、序章から第5章までは、こまかく小節化されていて、しかも、ページ番号までが目次に付されているので、興味深そうなところをさっと読めるようになっているのはありがたい。

著者の履歴は日経の記事にも紹介されていたが、著者の海外での医療実践の様子が今一つ明らかではないように思われ、そもそも、医師という職業ほどグローバル化に馴染まないものはないと理解しているので、副題「グローバルな視点からの提言」に、やや違和感を覚えたことも白状しなければならない。しかし、著者の姿勢は、非常に穏当で、著者は、医療について述べているのだが、その実、今の日本の制度すべてに通底する指摘

地理的にも文化的にも、微妙な立ち位置に居る日本は、社会的価値観に基づく競争の時代にいるという意識を持って、戦略的なグローバル化を進めていく必要がある。グローバル化が是か非かということではなく、日本単独ではすでに国の運営ができなくなっている事実を直視し、「国益」ではなく、広い意味で「日本に住む市民の総体的な利益」を鑑みたくて、社会的価値観に基づく競争の世界を認識し、社会的価値観を共有する他国との段階的グローバル化の方向に進んでいくべきだろうと筆者は考える。

がある (p.24)。敢えて不自然な点を挙げれば、「国益」と「日本に住む市民の総体的な利益」とどう違うのか、「国益」ではなく、とわざわざ言っているのは、あたかもこの両者が対立するかのようにとらえている現れだが、もちろん、そんなことはなく、後者を実現することこそが「国益」に他ならない。著者の経歴も、論旨も、この理解を支えていると思われるので、恐らく、編集者の筆の滑りの一軽薄とは言わないが一添加を著者が見落としたのだろう。ついでに言えば、日本語の「市民」も、(西欧語の citizen や citizen と違っ

て－これらは血腥い、まさに、nationalism を背負った代物であるが－）歴史性、地域性の希薄な語彙なので、この文脈では好ましいとは思わない（この点については、かつての政権下の「熟議かけあい」の発想のいかがわしさに関して論じたことがある）。とは言え、「国益」ではなく、の部分を削れば、この一節は、わたくしの日頃の想いとほぼ完全に一致する。殺し文句である。他方、「社会的価値観を共有する他国」を確認することも決して容易ではないことも知るべきだろう。つまり、それには、まず我々自身の「社会的価値観」を確認しなければならず、実際、すでに「日本に住む市民の総体的な利益」が実質的な意味を持ちうるかどうかの検討と同義であるとさえ言えるのである。

余計なことを書いてしまったが、上掲引用部の最初の文章にある認識が日本の現状把握の基本でなければならない。この意味は、日本対世界が前提になっての「グローバル化」ではなく、日本が世界の一部であるということに深刻に認識しての「グローバル化」でなければならないということである。ところが、例えば、主要メディアの理解は相変わらず、「日本」対「世界」だからこそ、自分たちの思い込みの構図で、「世界」を「日本」に投影し、「国益」と「日本に住む市民の総体的な利益」とを対立概念のように表出してしまう（拙見はここにある）。実際、「グローバル化」、少なくとも国際標準での行動原理の尊重という点では、日本の主要メディアは大変あやしい－言語（日本語）を口実にする傾向があるのかも知れないが、日本語使用者・理解者は今や世界中にあり、日本出身者にも限定されないのである。前回記事で、岡潔先生の評伝に触れたが、今思えば、著者の高瀬氏に敢えて不満を述べるとしたら、せつかく西欧近世の数学黎明期の著作者の論考を翻訳している人なのだから、岡先生を突き動かしてきた根源的な日本文化、上古の精神とでもいべきものを、ミューズ神なり、あるいは、他の古代文明の技芸の神の持つ意味などと引き比べつつ、（これらの神々は恐らく一旦は死んでしまったのだろうが）その精神が後世の西欧の数学者なり芸術家なりの創造力の根源になったという図式との比較提示をしながら分析することも可能であったと思われるのに、そこを踏み込んでいるようではないことかも知れない。岡先生が西欧は間違っていると言ったからといって、それは岡先生の視点からの話である。岡先生を離れて、なお、意味のある内容を整理できるか、極論すれば、岡先生の提起から人類の共有財産を引き出せるか、その辺が課題であり、そういう作業と「社会的価値観」についての議論とは無縁ではない。

ところで、本書の著者は「医療」の話をしている。「医療」と「医学」は違う。「医療」は飽くまでも地域密着型の「現場」の行為であり、実際、医療従事者は、医師であろうと、看護師であろうと、あるいは、その他のパラメディック、コメディックの人たちも、国家試験によって資格が担保されている。実は、この点が、まさに、「医療」のキモであって、関係者は全員「準公務員」なのであり、実際、日本の「医療」は、医師・看護師等の養成を含め、基本的

に税金によって賄われている（私立の養成機関も例外ではない）。他方、医学者は、医療を支える医学的知見の拡大深化に努めている人たちで、風土病や特定の間人集団固有の疾病を対象とする場合はともかく、基本的に国境はない。もとより、医療と医学と言っても、相互に独立ではなく、重点の置き方にニュアンスがあるということである。いずれにせよ、文脈のある話題なので、一点だけを取り上げることはできない。上の引用箇所が続いて、著者は

性急で近視眼的なグローバル化や誤った価値観の分析に基づく限り、グローバル化はうまくいかないだろう。医療という視点はこのような判断を提供するベンチマークとなるだろうと考えられる。
(p.24)

と述べる。なぜか。医療における第三の道（第一、第二の道を、社会主義的、市場主義的と性格付けた上で）の根幹として著者は、

市民全体の健康度（あるいは幸福）など、社会として共生をめざす価値観に近いところにゴールを設定して、そのゴールに向かって施策や医療がそれぞれ競争するという「社会的価値観に基づく競争」を行うようにしてはどうか。(p.19)

と提起する。そして、

社会的価値観に基づく競争とは、医療における利益の増加をめざすのではなく、市民の総体としての健康度、さらに公正や平等という視点で人々の権利が配慮される社会というゴールは精緻に示しつつも、それに至るプロセスに関してはある程度市場に任せるという方向性にシフトすることである。(p.19)

と定義を与えている。

以上は、序章についての感想である。第1章では、目下の医療および関連分野の状況を日本を中心としながら、グローバルな視点を加味して述べられている。ひとことで言うと、戦略性の不足という点に、日本の医療は問題を抱えていることがよくわかる。この章のまとめは、pp.62-64にある。この章で指摘されていることで、恐らく、重要なのは、タスク・シフティング、医療機器・製薬企業、医療ツーリズムの問題であろう。背景には、診療文化があるということだが、恐らく、著者が強く意識はされていないことと思われるが、人材養成の偏りの問題もあるだろう。医療に限らないことであるが、戦略性を備えた人材を育てることができないのである。著者は、旧英領圏の医療政策の策定に関わったとのことであるから、これらの地域で、ただの医者ではなく、医療行政や医学研究で主導的な位置を占めている人々を観察する機会があったと思われる。かれらと、日本の対応する位置の人々は同質なのかどうか。

他方、日本の場合、本来なら戦略性を発揮できるような職種に向かうべき人たちが、必ずしも、そういう道を歩んでいない、あるいは、別の道に吸引されているということがあるように思われる。現に、わたくしの勤務先校は、医学部医学科志望者の比率が極めて高く、健全な授業カリキュラムの編成に困難をきたすほどである（地方特有の現象で、庶民レベルで見えるのは医師だけだからだろうという説はあるのだが…）。もちろん、生徒の中には医者に向いている上に、この子が医者として診療にあたれば本人も患者も幸せだろうと思わせる子もいるが、相当数が、実は、医者になることなどよりもっと大きな志を抱いてほしいというくらい総合力の高い子なのである。いわゆる「内向き志向」の典型的な現象だろうが、現在の日本は、一人の医師養成に不自然に過大な社会的コストが掛かっており、これが、また、医療問題を複雑化しているのではないだろうか。つまり、日本の医療の困難は、医療だけの問題だけではなく、まさに、「社会的価値観」の確認の問題なのである。

第3章は、標題は、「医療財政」であるが、実は、医療政策の諸相に関して、本質的なことが提起されている。財政悪化が合理性の不足した政策によるコストの結果だと考えれば、当然のことだが、「科学的根拠に基づいた政策策定」が勧められている。残念ながら、日本の政策策定は、その水準にはないことが、子宮頸がん対策を例に詳述されている。要するに、

質の高い政策の比較研究の検討に基づきつつ、費用対効果を勘案し、社会の価値観に照らし合わせて総意形成するという、本来ならば当たり前の政策策定プロセスが、日本には欠けている。このプロセスを健全に動かすには、透明性ととともに、判断の独立性、そしてそのための技術が大きな要素となる。これはどのような仕掛けによって可能になるだろうか。

ここにも地球規模という視点が生きてくる。[…] 医療の世界においてもすでにグローバル化が起こってきている。現在は多くの国から出た研究成果を共通財産として利用できる状況になっている。別の視点で考えると、政策決定において最も重要な鍵を握るのは情報であるが、インターネットの発達により、情報はグローバル化している。基礎的な情報を世界各国が共有しつつ、各国の政策策定において、民主的な国がお互いに監視し合い、よりよい手法を一緒に考えるという構造が、一種の緊張感を産み出す。日本ではそれは「ガイアツ」として揶揄されてきたが、他の国々と透明性の高い関係を持つことで、よりよい政策決定のプロセスが可能になるのではないかと筆者は考えている。(pp.91-92)

と著者は言う（この文脈で「ガイアツ」が言及されるのはおかしいとわたくしは思うが）。さらに、この章では、「医療は地域に根ざす」という「常識」と「医療はグローバル化する」という「新しい常識」との長短の検討もされている。上述のように、著者の注意に留まらず、人材養成や人材配置の問題も絡

み、種々の社会的な投資の構造問題とも関係する事柄であって、まず、正確な分析が望まれることだと考えるが、そのための視点の設定をどうするか、と改めて検討しだすと、堂々巡りの輪に囚われてしまいそうである。

第3章も非常に重要な指摘で満載である。標題「医療の質と安全の担保」の前提として、章の冒頭で、著者は

筆者は患者のニーズや社会全体の価値観を軸にすえたくて医療の競争が進んでいく必要があると考えているが、市場主義では、患者の需要を喚起・拡大する方向に進み、保健医療財政の増大を招いてしまう。患者の需要ではなくニーズを軸に競争するということは、保健・医療の質と安全を競争の目的とすることに他ならない。(p.101)

とし、

医療における競争の方向性をコントロールすることに、政府や地方自治体の本来の役割がある。(p.101)

と続ける。ここで、

サービスの質と安全と言う際には、大きく分けて、☑医療従事者の技術、☑医薬品や医療機器の性能、☑医療行為や公衆衛生施策、という三つの面があることを押さえておきたい (pp.101-102)。

として論を進めている。本章で紹介されている事例は、いずれも興味深く、☑に関しては、医師の資格や養成に関する話題もあるが、上述のタスク・シフティングや、あるいは、プライマリー・ケアの構造とも絡むことであり、☑では新薬の承認の話題がある。☑については、あちこちに話題がちりばめられている感じだが、いずれも、日本では既得権者の力を削ぐ話である。もとより、著者が強調する「社会的価値観」に忠実な医療を真面目に実践したいということであれば、紹介された事例は、いずれも効果が実証されているので、そちらの方向に進んでいるはずであると思う。医療に限らないことだが、戦略観を欠いたまま目先の処理に終始して解決した気になるのが「日本的」という風に理解してみると、要するに、「日本的」とは真剣味不足ということになる。あるいは、視野の狭さゆえ、問題の全貌や本質が見抜けないうことなのか。

第4章「医療政策の意思決定」という章は極めて重要である。実は、当ブログで、「索引」や「アーカイブ」を含め、種々の形で問題視してきたことが、より具体的に、かつ深刻に日本の医療政策の問題点として現れていることがわかる。非常によく書けている章である。実際、著者の指摘の要点は、「公正」というアイデアが日本社会には稀薄だということであり、実は、それによる、ある意味で不必要なコストが生じているということだとまとめてよいであろう。この事実に気づくには、著者がそうであるように、まさしく「グ

ローバル化」経験が不可欠であり、それも、米国型の経験だけでなく、異質なヨーロッパ型も。つまり、グローバル化自体を相対化して、なお、骨格として取り出せる部分を抽出できるかどうかということでもある。社会は総合的なものなので、軽々に優劣をつけるべきことではないが、中長期の社会的なコストの推移を見て、有利な方を選択することは自然だろう。残念ながら、目下の日本のシステムには、この点で大いに問題があり、その問題点を鮮明に浮き上がらせ、対策を要求する点で、グローバル化は契機であり、しかも、日本は今やグローバル化を避けることができないのだから、選択肢は実は限られており、早晩、行動を起こさなければならない…。

最終章（第5章）「日本の進む道」は、本書全体の概要でもあり、さらに、ここまでの論考をまとめた提言であり、最終節は「八つの提言」となっている。再録しないが、大筋において、同意する。医療に限らない意義があると思う。

195. (13.10.23) 前回の記事にも関わりがある件だが、先日の日経の書評欄で紹介されていた

葛西龍樹：医療大転換 ― 日本のプライマリ・ケア革命
ちくま新書 (2013)
ISBN978-4-480-06731-9

を購入し、眺めている。この本は、以前にも、ジュンク堂で立ち読みをしながらも、ちくま新書は勤務先の図書館に継続して収められていることもあって購入を見送ったのだが、日経の書評に加え、週末に、北大医学部主催の

国際シンポジウム『医学部入試の課題と改革』

を覗きに、東京大学（本郷）伊藤国際学術研究センター謝恩ホールに行ってみようと思っているので、急いで読んでおこうと考えたわけでもある。

著者の葛西氏の履歴を見ると、少なくとも1970年代の後半から80年代の初め頃までは北大のキャンパスにおられたようである。わたくし自身は、当時は北大理学部在籍中で、よくクラーク会館の2階で昼食をとった。理学部の偉い先生たちと同席することも少なくなく、学ぶことの多い場所ではあった。小耳に挟んだ近くのテーブルでの会話にも記憶に残っているものがあった。中でも、医学部の学生たちが、インターンをどこでやるかという話から慶応大学病院か琉球大学病院がいいと言って盛り上がっていたのを覚えている。理由は、general practitioner としての訓練がきちんとできる病院は他にないからというようなことであった。年齢的には、葛西氏もこの時期に医学部におられたはずだから、こういう会話を交わしていた医学生に混じっておられたのかも知れない。なお、小耳に挟んだ医学生の会話では、もう一件、髯剃りで剃刀負けするという仲間に他のがクリームでなく石鹸を使えと言っていたことを覚えている。実際、わたくし自身、石鹸を使って髯剃りをする

ようにしてから、剃刀負けを経験していない。石鹸がベストかどうかは、たまに、髭剃りクリームを使った後で思うことはあるが…。

general practitioner という言葉が記憶に残ったのは、札幌で家族ぐるみで交際していた沖縄出身の北大の医局員ご夫妻と会食しながら、患者の立場で医師に望むことは、症状が医師の手に負えるものかどうかの判断を迅速にして、手に負えないと判断したら的確な専門医を紹介してくれることだ、というようなことを言って、褒められたこともあったからだろう。ナイーブな話だが、当時は、一次医療、二次医療、三次医療というような分類は知らなかった。一次医療、二次医療の区分としては、後に、と言っても、今や大昔だが、アメリカで下の子の関係で、一般診療医から地域の中央病院まで何回か世話になる形で、経験はした。ただ、アメリカの医療制度に深刻な問題があったし、未だに解消されていないことは周知の通りだし、また、当時、アメリカ在住の長い日本人ご夫妻からはアメリカの制度の難しさや日本の保健所の存在への高評価を耳にした記憶がある。

本書の内容と直接関わらない周辺状況のことばかりだが、この夏、勤務先校の教員研修の一環で、古い卒業生の医師から、陸前高田での医療ボランティアとしてのご経験を伺った。現地でのプライマリ・ケアの実践の重要性とそれを巡る困難の指摘があり、そういう状況下ながら、非常に意識の高い医師が育っているというお話でもあった。この先生は、現場を離れて時間も経っているので、夫婦で借りた部屋で医師の皆さんに食事と団欒の場を提供したことくらいしか役に立てなかったと仰っていたが…。その少し後で、近県での同窓会支部会に招かれ、雑談相手の支部会員の医師に、この先生の話の内容を伝え、プライマリ・ケアの重要性を強調しておられましたよ、と言ったところ、医師仲間ではプライマリ・ケアの評価は低いんですよ、という返事が返ってきた。この医師は60代半ばだと思うが、特に、この支部は医師の比率が高いところでもあり、この後、別の若手の開業医も加わって、ロジスティクスの意味で、もっと医療行政に卒業生が関わらなければいけないのではないか、保健所の医師も大事ではないか、というような話になった。プライマリ・ケアや医療行政の在り方については、医師の世代による温度差は若干あるようではあった。

前後するが、プライマリ・ケアに対する評価が低い、という意味では、以前の勤務先の大学で、どういう機会であったか正確には思い出せないのだが、何かのパーティーで、大学の幹部の医学者に、北大クラーク会館の医学生の会話を思い出して、general practitioner の養成はどうなのか、と、いわば、お愛想のつもりで、尋ねたところ、この先生は general practitioner なんて医者じゃありません、と即答されたのを記憶している。当時は、大学を巡る内外の環境が激変しており、変革の方向性や趨勢の的確な読み取りが求められている時期であったから、医学部の場合でも、周辺領域を見まわしての将来設計が求められていたはずだったが、この先生は余りにも硬直的であった。

さて、葛西氏の書物によると、日本の医療行政の場では、「プライマリ・ケア」や「general practitioner」についての定義が曖昧で、国際的な共通理解と対応していないのだと言う。のみならず、前回記事の森臨太郎氏も同様の指摘をされている。そうだとすると、プライマリ・ケアに否定的な見解を述べる人たちと肯定的な見解を述べる人たちと同じ医療分野に言及しているかどうかの検討なしでは、不毛な議論になってしまう。そこで、葛西氏は、

第1章 立ち遅れた日本の医療

において、現在の日本の医療が直面している種々の問題を具体例（だろうと思うが）を挙げて示し、その大半が適切な「家庭医のシステム」が整っていれば解決されること、したがって、「家庭医システム」が整備されている諸国では起きえないことが説明されている。実際、上で触れたような指摘についても言及がある：

日本では、大学の専門科で最先端の医療と研究に従事する医師に比べて、地域でプライマリ・ケアを担当する「家庭医」「総合医」「かかりつけ医」には二流、三流と言うイメージが付きまどってきた。なぜだろうか。

と問いをたてる（p.57）。著者は医師のキャリアパスの問題として、プライマリ・ケアが専門分野として認められてこなかったことを挙げる。そして、

プライマリ・ケア先進国では、医学部を卒業した時点で、病院で二次・三次の専門ケアに携わる人と一次ケア（プライマリ・ケア）をやる人に分かれて、それぞれ専門医としてのトレーニングを受ける。家庭医と他科専門医は競い合うのではなく、あくまでも相補的な関係にある。どちらが上でどちらが下という関係ではない。

と注意する（p.58）。なお、本書の

はじめに

では、日本の医師一般の「家庭医」に対する認識の不備への慨嘆があり、

はっきりさせておきたいのは、[…]「かかりつけ医（総合医）」と、プライマリ・ケアを専門に担う「総合診療専門医（家庭医）」は、その質を異にするということである。諸外国の家庭医は、厳しい研修プログラムと認定試験を経てこそ資格を取得できる専門医師である。内科、小児科はもちろん、外科、産婦人科、精神科、整形外科など広範囲な領域のプライマリ・ケアをカバーする。[…]

と強調している（p.15）。ちなみに、上述の陸前高田でのボランティア活動をされた医師のおっしゃった「プライマリ・ケア」が、まさに、この意味であったことは、講演スライドで例示された事例から判断ができる。

なぜ、こういうことになってしまっているか、という分析では、前回記事の「持続可能な医療を創る グローバルな視点からの提言」の書中で、森臨太郎氏が行っているものと共通する点が多い。しかし、葛西氏は、さらに、1970年代から80年代にかけての世界的な家庭医療のパラダイム・シフトに日本が乗り遅れたことを挙げている。general practice という言葉は入ってきたが、それを「総合診療」と訳しただけだったというわけである。北大の医学生がgeneral practitioner に強い関心を示したのは、それがトレンドであったからということになりそうである。それでは、なぜ乗り遅れたのか。葛西氏によると、

まず、世界トップレベルの家庭医療学を学ばなかったということが挙げられる。これまで海外でトレーニングを受けた日本人医師のほとんどが、プライマリ・ケアの整備に関しては一流国と言えない米国に学んでいる。医師だけでなく、医療政策や社会医学を専攻する日本人のおおくも、プライマリ・ケアが国レベルのシステムとして整備されていない米国での留学・滞在経験を持っているのは象徴的だ。

…

家庭医療先進国のようなパラダイム・シフトを経験できなかったことも大きい。日本では依然として医師主導の医療が中心で、ほとんどの患者は医者と言ひなりになっている。このため、患者の気持ちに寄り添った医療が主流にはなりえなかった。…

また、将来に向けた家庭医の教育システムを構築するという視点が欠如していたことも大きい。

…

といくつも理由が挙がる (pp.59-60)。要は、

私たちにとって必要なのは、病院にとって使い勝手のいい医療システムではなく、幼児から高齢者まで患者一人ひとりの状況やニーズに応じる、(傍点、ここから) 患者にとって使い勝手のいい医療システム (傍点、ここまで) である。

と医療の基本を再確認している (p.61)。こんな簡単なことが、なかなかうまく行かないのは、

日本では社会の利害関係者たちが大きな目標のために協力して働くということが皆無に等しい。だから、利害関係者が反目すれば、大きな目標への動きはいつこうに進まない。

それに変化を避ける日本の精神的風土が立ちふさがる。暗黙裡に意思決定がなされることがほとんどでオープンなディスカッションは敬遠されがちである。

からであると指摘する (p.60)。もちろん、これは医療分野だけでなく、また、医療分野でも、プライマリ・ケアの問題に限定されない指摘である。

一方、127 回記事で触れた 2011 年 2 月の国立科学博物館の展示

「歴史でみる、日本の医師のつくり方 — 日本における近代医学
教育の夜明けから現代まで」

を思い出すと、医師養成に遡る歴史的な因縁もまだあるのではないかという気がしてしまう。また、本書で、プライマリ・ケアの先進国として挙げられているのは、旧英領諸国やイギリスとの制度上の親和性の強い国々である。これに対し、戦前の日本の医学教育が範とした大陸系の国々での医師養成やプライマリ・ケアの状況は、今、どうなっているのだろうか。これも昔のことだが、ロシア語を勉強していたころ、テキストではモスクワ在住のカップルが中心になっていたが、やや若い彼女は診療所の医師、彼はモスクワ大学医学部の博士課程在籍中（カンディダート）という設定になっていて、印象では、彼女と彼との基礎的なトレーニングが全く違うようだった。ソヴェート連邦の医療システムがどうなっていたか知らなかったが、彼女は一次医療の現場におり、彼は、二次か三次医療の現場か、あるいは基礎医学者を目指しているように見えた。もし、大陸型の医師養成に、こういう階層性があり、戦前の日本がそれを引き継いでいたとしたら、general practitioner なんて、という差別的な言辭が、年配の旧帝大系の医学者の口から洩れてもおかしくはないと言え言えるわけである。だが、こういう記憶が、日本の一般人はもちろん医療関係者の間においてさえ、イギリス型の「家庭医」というアイデアの理解を難しくしているということは言えるだろう。

現在の日本は、医師養成の道程は単純になったはずだが、医学部医学科はどこも医師になるための訓練を提供する場として本質的な違いがないにもかかわらず、その実、今でも、旧帝大系、旧医大系、あるいは、国公立大系、私大系などと、少なくとも、医学部入試の偏差値の評価では分けられている。実際には、医学部としては、家庭医を含む臨床医学に注力するか基礎医学を重視するか、あるいは高次医療に重点を置くかという違いの方が重要なような気はするし、その程度の政策の差はあってよいだろう。実際、医師養成は国家の大事であるというのなら、そして、そこで階層性を排除するというのなら、その方向性を徹底すべきであろう。

もし、私大の場合、設備費や授業料が一般の学生にとって過大であるというのなら、本来は、奨学金団体を整備することから始めるべきであったし、これは開業医の次代養成とも別に矛盾することではないだろうと思うし、むしろ、そういう発想のもとでの整備が試みられて来なかったようなのが不審である。その上、奨学金財団の基金の出所が医師に限られる理由もなく、よく考えるまでもなく、対象から国公立大学医学部の学生を排除することも不自然であろう。つまり、奨学金財団には、広範囲の民間資金や税金を始めとする公的な資金が入ってもいい。当然ながら、こういう奨学金財団は個々の

医学部の教育内容や学生の履修状況にも口を挟むことになるだろうが、医学部というのはもともと専門職業教育の場に他ならない以上、専門職業人養成のための強い縛りが掛かっていることは全く不思議なことではあるまい。さらに、奨学金獲得のための選考が個々の医学部入試に優先すれば、現状のような医学部の本務にとっては全く意味のない（どころか、誤解や偏見のもとになっている）入試偏差値による序列化は解消しないまでも軽減はされるだろうし、そのこと自体、日本の医療体制の健全化のためには望ましいことだと思う。「家庭医」の文脈に戻れば、「家庭医」というものは、明示的はもちろん、暗黙的なものであっても、何らかの差別意識や階層意識があっては成り立たないはずのものである。

さて、

第2章 プライマリ・ケアとは何か

は、著者の「家庭医」としての出発になった感動的な逸話から始まる。そして、「家庭医」「家庭医療」「プライマリ・ケア」の定義が続く（pp.66-67）。ここで再録はしないが、著者は、

これを読んで、あなたはどんなサービスを想像するだろう。家庭医はどんな医者だろう。「あたりまえの医者」と感ずるかもしれない。しかし、もしそうならば、今の日本で、その「あたりまえの医者」はどこにいるのだろう。

と述べる（pp.67-68）。医者にそう言われてもね、とは思うものの、事態の深刻さは伝わってくる。そこで、プライマリ・ケアとは何か、「家庭医」は地域や社会の中で、どういう役回りをするのか。あるいは、一国の医療体制の中で、どういう立ち位置にあるのか、ということが説明される。ここで、医療の三区分、

一次医療（一次ケア）＝日常的で身近な病気やけがを診る医療
二次医療（二次ケア）＝専門医の診療あるいは入院を伴う医療
三次医療（三次ケア）＝二次医療では対処できない高度先進医療

が重要だということになる（pp.69-70）。前回記事で紹介した森臨太郎氏の用語では、「診療文化」ということになるが、今の日本の医療体制下では、一次医療から三次医療を抽象的に分類することはできても、それぞれが遂行されている場の区別や権能の分別が明らかではない。特に、一次医療が専門医療としてうまく機能していないということが、上の引用で指摘されていることだろう。したがって、本書で指摘されている医療のピラミッド構造と日本の医療体制はうまく対応していない。本書で紹介されているように、海外事例であるが、「家庭医」一人当たり地域住民概ね1000人の健康状態の管理をし、日常的には、これで医療の八割が処理できるとすると、これを日本にざっと当て嵌めると、1億2千万の人口に対しては、12万人の「家庭医」がいれば、

一次医療は済んでしまうということになる。その分、高次医療に医師や医療資源が投入でき、また、それが本来だから、医師が余るということにはならないであろう。ただし、日本には「家庭医」としての専門的な訓練を受けた医師が極めて少ないから、そもそもこういう計算は成り立たない。

こんな調子で内容にいちいちコメントを加えていると、切りがなくなるが、結局、1980年代頃からの先進国での医療のパラダイム・シフトに乗り損ねたことが大きいようである。このパラダイムの変化については、本書

おわりに

で紹介されている

マクウィニー：家庭医療学（上巻）（訳：葛西龍樹・草場鉄周）
ぱーそん書房（2013）
ISBN978-4-907095-05-5

に説明がある。

本書の

第3章 プライマリ・ケア先進国の実践例

として、イギリス、オランダ、オーストラリア、シンガポール、キューバの例が挙げられ、医療に混乱がある国の例として合衆国が挙げられている。僻地医療としてのプライマリ・ケアの先進例として、タスマニアが紹介されている。結局、医師とは何か、医療は何のために行われるのか、という基本的な質問にもどった上で、医師個人ではなく、患者を含めた医療関係者全体の了解として成立する回答が得られるのかどうか、それこそ、まさに、「診療文化」の問題になるようである。

第4章 福島での災害医療

は、文字通り、東日本大震災の際の災害医療の話であるが、上で触れた陸前高田でのプライマリ・ケアの話と共通する課題の指摘はあるが、急性期（震災直後）と緩和期のプライマリ・ケアの違いもあり、さらに、福島の場合は第一原子力発電所の暴走による放射線被曝の問題も絡んでいる。著者は、このため、マーシャル群島の例と台湾の例とを現地で調査している。放射能対策は、長丁場の話になるが、放射線医療の専門医だけでなく「家庭医」が放射線医療の知見を深めることの重要性を強調している。また、震災と津波で、地域の医療システムが完全に破壊されたことを承けて、大災害後の医療体制の再構築の事例として、台湾を調べている。震災直後に、医療システムの機能が完全に失われたことは事実であり、生々しい話が多数紹介されている。緩和期というか緊急時から時間が経った今、および、今後、他所でも予測される大規模災害でそういうことが繰り返されないようにするにはどうしたらいいか、ということが問題なのだが、著者が提案している改革の方向は、日本

医師会のホームページにある震災支援の成果の評価によると、現行のシステムが局所的に破綻しても各地からの支援で十分に補えたとしているので、なかなか難しいかも知れない。

第5章 患者中心の医療を

では、「総合診療専門医」という専門分野の誕生に至るまでの経緯と、本来、高度の専門訓練を要するものであり、「かかりつけ医」「総合医」「総合内科医」とは違うものであることが力説されている。国際的には「家庭医」と呼ばれるべき存在というわけだが、定義や権能を明確に示した議論を避けて、いろいろな印象上の手垢の付いた語を用いて種々論ずることの弊害が大きいことは、わかる。この点に関して、著者は、日本医師会の理解不足を非常に危惧しておられる。念のために、医師会のサイトを見てみたが、「家庭医」というアイデアそのものの評価が家庭医療の先進国とされるオランダでも低いというような報告も載っていた。日本のシステムの方こそ優れているというのだが…。実際、本書第1章で指摘されているような、現在の医療の問題点についても、日本医師会の主流の認識や評価は違うかも知れない。

個人的な記憶としては、大昔、若手の数学者だったころであるが、臀部にできた瘍（の膿出し）の切開後に出張し、ガーゼ交換のために出張先の研究所から病院を紹介して貰ったことがある。この病院の性格にも拠ったことではあるが、待合室の様子を観察しているうちに、医師を始めとする医療従事者は、心身ともに健全という人を相手にするわけではない、ということが痛感され、中でも、医師の生活には、対等な人間関係の世界の確保で初めて成り立つ、（医師自身の）健全な精神の平衡を保証するものがほとんどないということが見えたように思われた。こういう病院でさえ、そうなら、もっと楽なところだと、なおさら医師には、病者の精神の荒みが見えず、人間としての成長の機会が少ないのではないか、と思われたのである。そういうこともあって、医師という職業を安易に世間が囃したてることには、いろいろな点で、問題が多いと思ってはいた。しかし、本書第二章で紹介されているような、「家庭医」という仕事は、人間としての総合性を高める内容に富んでおり、さすがのわたくしにも大変魅力的なものに見える。

とは言え、現実の問題として、著者が本書第5章で述べているように、日本の医師のキャリアパスが開業を促すものであり、当分、その状況が変わらないのであれば、そして、開業した結果「専門医」としての能力を発揮する機会が大幅に減少し、「家庭医」に近い方向に向わざるを得ないにもかかわらず、家庭医としての後期研修をきちんとこなすだけの余裕が作り出せないというのなら（もちろん、職業的な誠実さを論ずることはできるだろうが）、少なくとも当面は（一時的には）医師会のいう生涯研修のプログラムにも価値を認めるべきだろう。ただし、「専門医」としての研修に徹することよりも、一次医療、二次医療、三次医療の理念的な区分を医療現場に適切に反映させることが欠かせまい。今のように、ある意味で完成度の高い日本の医療体制

に内発的に手を入れることの困難さも想像は付くが…。

196. (13.10.30) 前回記事の動機にもなった、国際シンポジウム「医学部入試の課題と改革」というのを覗いてきた。参加対象者には、主に、医学教育関係者であるが、「一般市民など」も含まれており、わたくしは、このカテゴリーに属する。

文部科学省科学研究費基盤 (B)「我が国の医学部入試の妥当性と将来像に関する多面的国際共同研究」(研究代表者：大滝純司北海道大学教授)の一環としての研究集会というわけであるが、会場は、東京大学(伊藤国際学術研究センター)であり、分担者の北村聖東大教授の開会あいさつは当然として、文部科学省高等教育局医学教育課および厚生労働省医政局医事課の課長補佐からもあいさつがあったから、関係省庁も強い関心を持っていることがわかる。実際、この集会の URL は前回記事にあるが、そのサイトに「背景」と称して、

医学部は入学者の大半が将来医師になることから、その入学試験(以下、医学部入試)が社会へ与える影響は大きい。格差社会が日本の大きな課題になる中、教育格差も深刻になっている。現在の日本の医学部入試は、進学校の成績上位者、そして予備校で受験対策を学ぶことができる者でなければ、合格することがきわめて困難になっている。一方、医師不足の地域出身の志願者を医学部・医科大学に多く入学させる、いわゆる「地域枠」が政策的に導入されるなど、医学部入試に関する要請や介入が顕在化しつつある。海外では、教育格差の是正を目指した入試制度や学業成績以外の指標も重視した評価も行われている。この医学部入試の評価方法や合格基準について、その妥当性を検証した研究は少ない。

とある。ここで、「医学部」というのは「医学部医学科」のはずであるが、そうであるなら、「入学者の大半が将来医師になる」と言うのではなく、「入学者は原則として将来医師になる」と言っていたかなければ困るのだが…。「医学部の入学試験が社会へ与える影響は大きい」ことは、医師が社会において占める役割の重要性から見て当然のことであるが、わざわざ明言しているのは、深刻な教育格差の一方で、医学科の学生の現状が、医師の養成に当たっている人たちから見て理想的とは判断できない状況だからだろう。格差には、医師分布における都市と地方の格差もあり、その解消のために「地域枠」が導入されたが、これも医学教育上は問題なしとはしないのであろう。

このシンポジウムは、基本的に(日本の)医学部医学科の現状を前提に、米英加および台湾の医師養成のプロセスを参考に、今後の改善を探ろうという趣旨と理解されるが、医療システムは国によって違いがあり、したがって、医師の在り方も完全に万国共通とは言えないらしいことも見えた。この辺りが、制度に関係する「国際研究」の難しいところで、厳密なことを言えば、こ

の研究も「医療」「医療従事者」「医師」「医療制度」「医学教育」といった基本語彙をきちんと定義し、国別の異同を整理した上でないと国際比較も、さらに、それぞれの国に対する提言も生きてこないだろう。このことは、前二回の記事で見た、一次医療（プライマリ・ケア）の位置づけを考慮しても想像できることではあるが。そういう面はあるものの「医師」という職業が備えるべき基本的な性格は共通していて、しかも、それが相当部分で、各個人の人間的素質に依存しているという認識も共有されているからこそ、この手の国際共同研究が成り立つわけである。

このシンポジウムの6講演は次の通り：

1. 世界の医学部入試の状況と国際的な課題 クラレンス・クライター
2. 日本の医学部入試の現状と課題 大滝純司
3. 格差社会における医学部入試 — ロンドン大学キングス・カレッジの試み 武田裕子
4. 英国全体とロンドン大学セントジョージ校の医学部入試の状況 ピーター・マクロリー
5. 台湾における医学生選抜の概略 頼其萬（ライチーワン）
6. マギル大学の医学生選抜、その新手法 ジョイス・ピカリング

この後、討論があり、閉会の挨拶は、平形道人慶応大学教授であった。

第1講演は、英語が耳を通り越して行く感じで、ぼんやりと聞いていたが、医学生選抜は多様であり、なかなか一般的な議論はできないが、まあ、それなりに有効であると言った程度のことと、世界の医学部を網羅する WHO の avicenna directory が記憶に残った。もっとも、これには台湾やパレスティナの医大は載っていない。

第2講演では、日本の制度の問題を論じ、学力検査の妥当性や対策としての地域枠の問題、そして、教育格差の問題が述べられた。教育格差と経済格差は連動しており、さらに、医師の世襲の問題もあるわけである。これについては、感想というか、無責任な思い付きを後述する。

格差といえば、イギリスと言うわけだろうが、第3講演、第4講演は、格差解消に真正面から取り組んでいる医師養成の紹介であった。第3講演は、日本語でもあり、わかりやすかったが、ロンドンの人種構成の多様性と社会的格差は驚くべきことであったが、その中で、恵まれない階層出身の医師を養成することの重要さと具体的な努力がされていることが興味深かった。

第4講演の演者は、自校の紹介チケットを配ったが、あとで、サイトを訪問してみると、これが大変面白く、非常に参考になった。早速、勤務先の英語教員に紹介し、ヒヤリングなどの教材としての利用を考えてもらった。なお、大事なことだが、第4講演は、結局は医師の話とはいうものの、しかし、医療従事者の養成という文脈で語られたと理解している。

第5講演は、研究代表者の大滝教授が聴衆に重要性を事前に強調されたものであるが、日本の制度に近い形から近年変貌を遂げつつあること、その一方で、都市と地方、また、特に、北部と東南部の格差解消のための努力が必要なことが述べられたと思う。頼教授は、台湾における医学教育は、1897年から始まったと述べられたが、台北帝大創設（1928年）より古いので、台北帝大ができるときに、医学部として統合されたのかと思い、National Taiwan University のサイトを見てみたら、台北帝大に医学部ができたのは遥かに遅く、1934年とある。そこで、ウィキで台北帝国大学を見ると、さらに遡って、台湾総督府医学専門学校（1919年）、台湾総督府医学校（1899年）、台北病院講習所（1897年）と系譜を辿ることができた。ところで、前回の記事中で、葛西教授は、大地震の後の台湾の医療体制の再編について述べておられるが、台湾の医学教育のシステムの検討も同様の背景を持っているのかも知れないが、大局観のある医療行政が展開されているようである。

第6講演では、マギル大学の例として、MMI（= Multi-mini Interview）の例が、ビデオクリップの形で紹介されたが、大変面白かった。医学教育の過程で、学力検査による結果との相関が高い内容のものと、MMI との相関が高いものがあり、基礎科学は学力検査との相関が高く、臨床訓練は、むしろ、MMI との相関が高いという調査が紹介された。そこでは、一般の面接の成績は、むしろ、逆相関を示すのである。

感想であるが、洋の東西を問わず、医師という職業についての共通了解として、一般的には正常な状態にない生身の人間を相手にすることが基本であり、しかも、生死に関わるものであって、誰でもができるというわけではない、つまり、医師にはそういう困難な状況に耐えることができる覚悟と、複雑な医療プロセスの適切な処理で乗り越えようと努めるための学習能力は欠かせない、要するに、適性というものがあるとして、いいだろうと思う。さらに、医師の働く環境は多様であり、医師は、この多様さに対応できなければならない、と、こう考えていいのではないか。医学部医学科の入試の目的は、入学後の教育と訓練によって、このような医師になるような学生を適切に選抜することであると言えるわけである。ただし、具体的な医師の形に立ち入ると、これだけでは抽象的過ぎるように思われる。いずれにしても、学力検査だけでは医師としての適性の有無の全貌は掴めないらしいことはわかる。しかし、学力検査時に、MMI のようなものを同時に課すことに意味があるのかどうか、という気もする。つまり、医学教育の階梯性があるのなら、臨床研修に取り掛かる前に、その方面の適性検査をすべきではないだろうか。

以下、日本の場合のことであるが、大滝教授が言及されなかった問題がある。あるいは、冒頭の北村教授の挨拶中で、医学部医学科に理系入試の上澄み部分が入学して来るとされることを怪しまなくてよいのか、ということがある。わたくしが大学受験をしたころは医学部（=医学科）志望者は高校成績の最上位層ではなかったし、少なくとも、成績の良さは医学部志望の動機

にはならなかった。当時は、確か、大学入学後に医学部進学のために別の進学試験があって面倒くさそうでもあった。この進学試験の内容は知らないからことの当否は怪しいが、医師としての適性を真剣に評価するというのであれば、二段に分けるといって自体は間違っていないと思う。ただ、上の形式のものは今は廃止されてしまったから、弊害が大きかったのだろう。

英米加の事例では、医学部では、化学が必須であるようである。日本でも例外ではあるまい。生物学は当然であろう。計算機科学も不可欠かもしれない。一方、人体の詳細や生理学的な反応を含む種々の生体現象の意味や構造をしっかりと理解し、自分のものにすることも要求されるだろう。それに加えて、医師としての職業生活をおくる上で欠かせない職業倫理や法律知識、患者の心理への慮りの訓練など、まことに切りがないようだが、これら一人前の医師になるための訓練の過程で必要となるものが、手順に従い、程度が上がりつつ、提供されていくのであろう。したがって、医師志願者のリクルートのためには、訓練のプロセスをよく見せて、それに対応する形で、医学部入学者選抜を行っていることをはっきりさせることが第一歩だろう。これは現行の入試方式のもとでもやらなければならないことだが、その上で、受験科目の指定や、一般の理系入試とは出題形式を変えるなどを行うべきかもしれないが、医学部の入試だけを特殊な形にするのは、少なくとも、現段階では、中等教育の立場からは弊害しかないと考える（特に、わたくしの勤務先のような医学部志向の強いところでは、高校高学年でまともな授業編成を想定することが難しくなり、その結果、誰ひとり得るものがなくなるだろう）。医学部医学科は、入ったら医者にしかなれないのだから、本来は、医者という職業がどういうものか、ということの説明もきちんとしておかなければならないのだろうが、厄介なことは、医者の内容は多様性に富んでおり、しかも、視点の位置で異なって見えてしまうことである。実際、前回、前々回で眺めた書物の著者たちは、患者の利益を第一義に考えるべきだと言って、現行の日本の医療システムには問題があるとする。しかし、日本医師会のサイトでは、一方で、現行の日本の医療システムは患者のためにぜひとも守るべきものだという主張が力強く展開されている。医師たちの意見がこうも分かれているときに、実現可能で、なお、関係者一同が皆満足できるような、少なくとも、大きな不満を抱くことのないような、そういう医学部入試の改善が可能だろうか。

また、大滝教授が提起されている「地域枠」の問題は、医師養成、特に、現在の医学部教育の文脈で論じられているが、この枠の導入に至る経緯を確認しておく必要があるのではないかと。つまり、それ以前の医学部の医師養成体制に、特に、地方から見て不備があったから、導入がいわば政治的に進められたはずである。医学部志願者の観点からは、こういう趣旨よりも、入試枠の入試定員としての性格が興味の対象で、地域枠に対応した地域に密着した医療実習を伴う医学教育が行われているかどうかには関心が払われていな

いようである。医学部側も同様と見え、実際、古い医大や医専系の国立大学医学部医学科などの地域枠が、その大学の所在県だけでなく、隣接県どころか遠隔地の県にも、少数だが割り当てられたりしている。地域に密着した医療実習を組む時に、同窓会や同門会への依存を前提にしているのか、あるいは、そもそも「地域枠」と言っても、地域への配慮が医学部の教育課程には稀薄だから可能なこととしか思われないが、「地域枠」以外の学生にも地域に密着した医療実習を課すことには意味があるだろうから、そういうことも考えにくい。そういう状況だとすると、「地域枠」はただの形式で、それに基づく入学者と一般入試に基づく入学者との間に学力差があるかも知れないとしても、不思議ではない。加えて、推薦入試やAO入試というのもあり、医学科の学生が、学力的に多様化していることは想像が付く。

医師に求められるのは「人物」だとしても、上述のように、学力の担保は欠かせないのであり、他方、学力重点主義の結果として、現実の医療現場が、当の医師から見た場合を除き — ここには意見の不一致があるようなので — 十分に機能していないとされて、「地域枠」が導入されたのだとしても、何か変ではある。要するに、国や地方の医療の意味や目的、医療体制、医師養成体制、医学部のカリキュラム編成、など、すべてを改めて検討し直す必要があるのではないか。そうしないと、目先の対症療法的手直しで、結果的に、事態はますます錯綜してしまいそうである。

実は、医学部入試の問題では、恐らく、医学部側からは、なかなか提起しにくいだろうというものもある。医学科が職業教育課程であり、医学科入学が医師という職業に直結していることをはっきりと示して来ているだろうか。特に、医師という職業の具体的な場である医療という仕事の内容や編成が時々刻々変化していることも伝えなければならないだろう。医師を始めとする医療技術者の養成課程のメニューも、養成機関に依存する面があるだけに、それぞれで、わかりやすく志願者に示す必要があるのではないか。医系の単科大学や複数学部から成る大学でも独自の医学部医学科入試を行っているところは別として、医学部医学科の学力検定を理系入試のカテゴリで行なっているところは、医師への適性が反映するような入試設計ができていないのか確認する必要があるのではないか。

大手の国立大学の医学部医学科入試は、まさに、この手の検証が必要な実例だろうが、たまたま、進学校のベンチマークテストと化していて、実は、逸話的なこととは言え、合格者の中には学力も高く総合力も備え人間的なバランスのよい人間も確かに混じっており、そういう人たちは問題のない医師になっているだろうから、現行の入試方式に深刻な困難があるとは思っていないかもしれない。要するに、入試を通じて選抜したいとする人間についての具体的な条件が明確ではないために、入試の評価をこの観点から行なうことができず、期待通りか期待外れかの判断が逸話に留まってしまっているのだろう。しかも、医学部教授の人たちは、十分な学力的能力があり、総合力

も備え、人間的なバランスもよく、医学部教授そのものは医師としては極めて特異なものであるとしても、もともと医師という職業に就いての意識は高かっただろうから、少なくとも、自身を例として、入試について肯定的な評価をしがちであるということも否めないのではないだろうか。

医学部医学科が職業教育課程であるにもかかわらず、そこへの進学率が進学校のベンチマークテストに流用されていることは好ましいことではないと、わたくしは考えているが、医学部サイドは、本当のところ、どう思っているのだろうか。もちろん、医学部の教育課程の詳細が高校生に伝わり、また、医師という職業の本質や重要性がしっかりと伝わっていれば、医学部の「入試偏差値」に幻惑されて医学部を受験するというような高校生はいなくなるだろう。医学部の偏差値の高さは、しかし、間違いなく、ある程度以上の素質のある子供たちを一度は惑わしているはずである。しかし、一般に、医師には、社会を動かしたり、革新したりする役割を担うことが期待されているわけではなく、一方、そういう役割は、医師とはまた違う適性が要求されると思われるとは言え、学力的にも総合的にも優れた人たちに担ってほしいものである。青年時の人生の選択の問題だから、決して、二択ではないが、医学部入試が余りにも強調されるのは、社会的には非常に不都合なことである。

とまあ、いろいろと想いはあるが、どうしたものだろう。医師の養成課程は、6年であり、特別であるということに基づき、医師を含む医療従事者の養成課程のリクルート・プロセスを、一般の理系の入試から切り離すことも一案だろうし、三学年修了くらいのところで、医療従事者としてのコース分けをするのもいいのではないか。医療従事者の場合、何であれ、国家資格であろうから、資格試験を省略することはできないだろうが、年二回というのは、真剣に検討していいのではないだろうか。

三学年修了時点で、コース分けというのは、現実的ではないとして、現行の医学部入試の場合だと、ベンチマークテスト化していることの当否は検証する必要がある。結果によっては、極論であるが、各医学部に、高校ごとの合格者数の上限を決める権限を認めるという方法もある。受験者は、いずれも医師を目指しているのであって、特定の医学部でなければならないということはない、という立場をとるのである。飽くまでも例示としての話だが、例えば、東大の理三の場合、一つの高校からの合格者は5名まで、と決めたら、医学部入試の状況は激変するだろう。関連して、いわゆる進学校の入試も激変するだろう。プロ野球のドラフトの場合と同様の困難がある話ではあり、また、各医学部が同様のクォータを設けると、例えば、わたくしの現勤務先のようなところはどういうことになるのかは全く見当が付かないが、一方で、国のレベル、それぞれの医学部のレベルでは、万事が今よりはよくなるのではないだろうか。

付記：(平成 25 年 12 月 24 日) コメント¹⁴を一件いただいた。メディカル・スクールの考え方に近いご意見と思われる。勤務先の法人理事会での見聞などから判断した限り、メディカル・スクールという発想には、日本の医系エスタブリッシュメントの抵抗があるらしく、それも決して弱いものではないようである。さらに、英米系の大学制度下での学部課程が学科制ではなく(主・副の)専攻制であることがメディカル・スクールをシステムとして支えているらいことに考慮を及ぼすべきだろう(しかも、主専攻：数学、副専攻：美術、という例もあり、文系・理系を越えていることも大切だと思う)。ただ、公平・公正な医学教育システムを構築しなければならない、という意識は、関係者に強いことは言わなければならない。

付記 2：(平成 26 年 1 月 3 日) 再度コメント¹⁵をいただいた。匿名氏ゆえ扱いは慎重であるべきかも知れないが、ご意見の趣旨は理解できる。アメリカ型大学への移行の試みは、実は、平成初頭期に、当時の文部省サイドから提起され、大学設置基準の大綱化、教養部廃止、大学院重点化という、やや退化した部分だけが実現されたという印象を持っている。当時、工学部に在籍して、文部省だけでなく、通産省、科学技術庁、さらに、経団連などの資料を会議などでずいぶん見た記憶があるが、大学院重点化は学科制度から主・副専攻制度への移行とはならず、学部段階での教育強化は、総単位数の管理強化の前に形骸化し、その一方で、GPA 評価の導入も中途半端だったから、あの時期の「大学改革」は成功とは言えなかったのではないか。この辺りは、医学部教育の問題以前のことではあるが、なぜ、「大学改革」が中途半端に終わったのか、ということへの、わたくしなりの感想はある。一因は、バブル崩壊に伴う投資の不足と余裕の喪失、さらに、学生の進路の面での日本の産業構造の大変質があったことは間違いなからうが、より、深刻な問題は、この手の「大学改革」が日本の「社会システム」の変革を伴うことであり(たとえば、学科最高学年の学生は教員の研究上不可欠な実質的な助手になっているとか)、したがって、大学や、たとえ中央官庁であっても、ただの行政機関の意向だけでは、推進のための動機が不足するということである。日本の「社会システム」は変革を要していることは誰も否定できないことだと思われるけれども、変革の提起を行うべき「機関」、メタ的なものである以上、行政官庁やその影響下の審議会ではなく、国会常置の委員会でなければならないだろうが、それが存在しない。さらに、不思議なことに、そのことを誰も怪しまないようなのである。医学教育の問題も、まあ、こういう大問題の一端ではあるのだが、個々の問題は、こういう不備の状況下で、やはり、それなりに解決をしていかなければならない。願わくば、状況をさらに錯綜さ

¹⁴通りすがり氏：アメリカやカナダみたいに理系学生対象の医学大学院に するというのはどうでしょうか？(匿名コメントゆえ却下してもよかったのだが)

¹⁵追記ありがとうございます。自分の考えは 大学入学時点での文系と理系の区別は廃止して学部 4 年間は教養課程とし医学は院課程とする 医学大学院は学部で決められた理系科目の単位を履修しなければ 受験できないとする 現在大学改革が謳われ教養教育(+英語教育)の充実が叫ばれているので上記のアメリカに倣った制度は有りだ思うのですが...？

せるような方向だけは避けてほしいということであろうか。

197. (13.11.10) 勤務先校の同窓会の支部総会懇親会のために東京に来たついでに、国立博物館と西洋美術館の特別展を覗いてきた。前夜は、167回記事でお目に掛かったジャーナリスト氏にもお目に掛かり、プレスセンタービル内のレストランで御馳走になった。

国立博物館の特別展「京都」は、各種の洛中洛外図の展示や、御所、竜安寺の障壁画、そして、圧巻は二条城の障壁画であった。わたくしの興味は、洛中洛外図で、都の街路というか都市構造がどのくらい描かれているかという点だったのだが、展示に付されている補助的な図版は、細部の拡大ばかりであった。陳列替えがあって、上杉本の展示は終わっていたが、以前、京都国立博物館で見たときに、金色の雲が多すぎて街の概要がほとんど描きこまれていないことがっかりしたが、今回展示されていた歴博乙本はもっと酷いものであった。池田本も華麗であったが、やはり、金の雲だらけで画想としては変な感じのものである。歴博甲本が、街を実際に描き出しているという点では好ましかった。舟木本は、岩佐又兵衛筆とあり、街人も街路も程よく描きこまれていた。福岡市博本は、小ぶりで華麗さは劣ったが街の様子はよく描きこまれていたと思う。

洛中洛外図は絵地図図ではないのだから、描かれた時点での都の様子を正確に表す必要はないのだから、装飾性が中心になっても構わないのだが、一応、同時代資料として、当時の京都の様子を再現する上で役立つはずである。実像はこうであったろうが、それを華麗に描き出したものである、という説明があってもよかったのではないか。四季が描かれていようと、祭礼が描かれていようと、それらは京都という都市の骨格の上で展開されているわけである。当然、このことを確認する手続きがされていしかるべきだと思うが、そもそも関心がないのかも知れない。後者だとしたら、なぜだ！ということになるのだが。

二条城の障壁画は凄かった。二条城二の丸御殿の障壁画は圧巻だったが、特に、大広間北側の大障壁を見て、狩野永徳山楽展で見た障壁画が、もし、全景が残されていたら、こういう雰囲気だったのか、と思った。当時の大名には、聚楽第や大坂城の障壁画を眺めた経験のある者も少なくなかったであろう。探幽一門はそれ以上のものを描かなければならなかったはずである。

西洋美術館は、ミケランジェロの仕事の紹介であった。フィレンツェのカーサ・ミケランジェロの収蔵品の展覧である。手紙がいくつも展示されていたが、発信人の自筆なのか他人に書かせたのか、もし、自筆だとすると、カリグラフィーの訓練も教養人の必須の素養ということか。

シンシナティ礼拝堂の4K画像の投影があったが、大事なことは、ミケランジェロの計算通りに床から天井を見上げたときの印象を示すことのはずなのに、ここでも、接近拡大画像が多数示されていた。実際は、視覚効果を考え、基本となる画像を一通り見せてから、光線の様子を変えて絵画の印象の

変化を観る者に迫体験させることではなかったろうか。実際、大塚国際美術館にあるというレプリカには、そばでみると比例がおかしく見えるが、天井の曲面に置かれたときの視覚効果を計算した上での制作だからだと説明がある。それに、最後の審判の壁画大画面も紹介されていたが、全景を眺めると、人物たちが天空に浮かび、また、地獄に落とされていく様子に、臨場感がある。これも、一部を拡大したのでは、比例の違いから違和感が生じてしまう。拡大詳細図は、飽くまでも、技法の説明のためだけになされるべきだし、それも、例えば、見上げながら移動していくときの画像の見え方の変化をどうデッサンに反映させているかということにも触れておかなければ不十分というものだろう。

洛中洛外図の紹介の仕方にせよ、シンシナティ礼拝堂の天井画や壁画の紹介の仕方にせよ、全体像への言及を省いて細部について丁寧な、しかし、当該の細部だけで完結するような、説明がされる、というのは、何か、日本人の発想の典型がここにも見えているようで、まあ、興味深い。

上野から支部総会の会場に移動する途中で、

堀江貴文：ゼロ

ダイヤモンド社 2013

ISBN 978-4-478-02580-2

を購入し、総会終了後に読了した。この著者は、いつだったか、読売テレビ系の「たかじんのそこまで言って委員会」に呼ばれて、司会の辛抱治郎氏とのやり取りを見て、素直というか、純な人だな、と思ったことがある。最終章に、人の気持ちはわかるわけではないのだから、

わからないからこそ、僕は信じる

とある (p.229) が、そういうことなのだな、と思い当たった。

現勤務先校の出身でもあり、仮釈放後にあった地元のある会合で名前が出て、その際の座の様子では、まだ、社会復帰に時間が掛かるかな、と思ったが、多少、時間も経過したことだし、一応、「迷惑」を掛けた人たちとのわだかまりも解けたのであろう。

実は、最近、目にした

八谷和彦：ナウシカの飛行具、作ってみた

幻冬舎 2013

ISBN 978-4-34-402450-2

あさりよしとお：宇宙へ行きたくて液体燃料ロケットをDIYし

てみた：実録なつのロケット団

学研教育出版 2013 (学研科学選書)

ISBN 978-4-05-405702-9

との関係で、堀江氏の本も見ておこうと思ったのである。いずれにも「なつのロケット団」一員としての堀江氏への言及がある。実際、「ゼロ」の最終章で、ロケットの話が出て来る。八谷氏の本とあさり氏の本は、読了後、現勤務先校の図書館に寄贈してしまったが、堀江氏のはどうか。すでに、発注済みの可能性があり、そうだとすると、来春の学校祭のバザー出品かしら。

なお、堀江氏のメッセージ「はたらこう」は鮮明だが、堀江氏特有のものもあることもわかった。現勤務先校には、かれのことを覚えている教員も残っており、教員サイドの意見も聞きながら、考えてみたいことがある。ただ、最近、かつての堀江氏のような生徒は減っており、本書中でも指摘があるが、「いい子」だらけであって、自由への希求がない。それは、現勤務先校の問題というよりも、今の日本の問題なのだ、とは思っているが。

堀江氏は、

人生には「いま」しか存在しない (p.210～)

と言うが、注釈が要るのではないか。他人の「いま」は自分の「いま」ではないし、まして、親の「いま」は子の「いま」ではない。子は子だけの「いま」を積み重ねて行くべきで、結果として、人生がどうなろうと、これも今日の日本では手垢まみれで妙なことになっている言葉だが、「自己責任」なのである。他人の「いま」を生き続けても、恨みが残ろう。嫉妬するという事は、結局は、そういうことであろう。堀江氏は、嫉妬を厳しく糾弾するが、それは氏が嫉妬心の的であったからではないこともわかる。そう言えば、昔、友人のフランス人と何かの噂話をしていたときに、かれが

Merde ! j'ai commis le péché d'être jaloux !

(だったと思うが) とつぶやいたのを覚えている。(モーゼの) 第十戒に相当するのだろうが、西欧圏の文化では、嫉妬は罪なのである。

付記 (平成 25 年 11 月 18 日): 日経ネット版の記事 (有料読者限定) に堀江氏のインタビュー¹⁶があった。

198. (13.12.06) 勤務先からの帰途、下車駅のビル内の書店に立ち寄って

水戸岡鋭治: 電車をデザインする仕事

日本能率協会マネジメントセンター 2013.

ISBN 978-4-8207-1886-4

を見つけ、購入してしまった。

水戸岡氏は、「ななつ星」のデザイナーとして有名だが、大体が、氏のデザインした JR 九州の種々の特急車両は国際的な賞を連続受賞しているし、そういう列車に乗りたさに海外からも多くの人たちが来ている。実際、知己のドイツ人 (ダンナは DB 勤務!) の夫婦が先年やって来たのも本当の目的は

¹⁶<http://www.nikkei.com/article/DGXBZO62568480U3A111C1000000/>

「湯布院の森」号とか「かもめ」号に乗ることであった。「ななつ星」と言うと、わたくし自身は勤務先近くの久大線の踏切で二回ほど見送った。

水戸岡氏の仕事については、昨年初めだったと思うが、博多駅で水戸岡氏のデザイン展が開かれていたときは見に行った。「ななつ星」という名称はまだなかったし、計画そのものも公表はされていなかったようだけれども、九州の観光地を巡るクルーズ・トレインのアイデアも展示されていて、なるほど、と思ったことがある（会場で販売されていた水戸岡氏の著書やデザイン集を購入し、それらを勤務先の図書館に寄贈したことは覚えているが、当ブログの記事では何も触れなかったらしい）。

水戸岡氏もさることながら、水戸岡氏と組んで独特の車両デザインを以って経営を続けている JR 九州の幹部諸氏の発想も評価すべきなのだが（余り褒めすぎるのも当方の知らない盲点があったりするので憚られると言わざるを得ないことは認めた上で）、いわゆる「東京の発想」に囚われてはいないからだろうということは推察が付く。「地方」は「東京」に背けばいいと言うのではない。むしろ、東京の価値観の特徴的な単調さやその延長上の（あるいは、退化した）価値観の雑駁さに毒されてしまうことの方が常態なので、実際、毒されることなく、独自の姿勢を採って、なお、かつ、正当な機会を活かしているというのは稀有のことなのである。

JR 九州の発想については、新博多駅の構想に伴って、駅ビルの壁面を飾ることになるタイルに焼き付ける葉っぱの図柄の応募を兼ねた寄付金（！）の募集があり、わたくしたち夫婦も（有料の）応募をし、友人が来福した折など、そのタイルがあるところまで行って記念写真を撮ったりしているが、つくづく大変な知恵者が JR 九州にはいると思わざるを得ない。

さて、本書の目次であるが、

（口絵写真：「ななつ星」）

はじめに

PART 1

第 1 章 総合的で創造的なデザインをめざす

第 2 章 デザインの基本、デザイナーの原点

第 3 章 日本の良さを活かすデザイン

PART 2

第 4 章 鉄道デザインの裏側

第 5 章 公共デザインの裏側

おわりに

となっており、各章は、もちろん、細かく節分けされている。

第 4 章（PART 2）は、主に、JR 九州の特急車両のデザインに当たったのデザイン思想の話であるが、水戸岡氏と JR 九州の歴代経営陣とのいわゆる chemistry の話でもある（フランス語なら、*mariage* というのだろうか）。もちろん、「ななつ星」の記事もある。第 5 章は、公共デザインの作品例と設計

思想の説明である。建築家に近い仕事が多いが、「高速船ビートル」もここで挙げられている。

PART 1 の各章は、いわば、水戸岡氏のデザイン原論の展開になっている。第1章の始めの方で、「JR九州で車両デザインをするようになってわかったこと」として

デザインとは自己表現の道具ではなく、公共空間である鉄道、その事業は街づくりや環境づくりそのものであり、地域の経済も考え、地域の人と一緒に質の高いものを創り上げていく。ひとつのデザインに対してこのように総合的にデザインするためには、いかに全体を見渡せることができるかが重要なポイントになってきます。(p.27)

との感慨が述べられている。そして、

この「全体を見渡せる」とは鳥瞰の視点、つまりは広い視野で見る、考えるということです。それによって多角的に大きな視点で全体を見渡すことによって「正しいデザイン」のガイドラインが描けるようになるのです (p.27)

との整理がある。次節「総合的で創造的な計画と五感」において、水戸岡氏の車両設計思想の核心として

最高レベルのものを提供し、お客様に圧倒的な感動を五感で味わっていただく (p.29)

ことであることが強調される。母子の「五感の連鎖」を敷衍して、

私たちデザイナーの仕事とは、いかにいい環境を整えるかを考え、それを形にするための知識を蓄積し、それによって次の世代に最高の環境をつくっていくことです (p.30)

と言い、やや具体的には、

手間暇をかけた最高レベルのものを大人が本気でつくれば、子どもたちは必ず何かを感じるはずです。それが、正しいデザイン、つまりは総合的で創造的なデザインができるデザイナーを育ていくのです (p.31)

と述べ、「五感」と共に、「何事にも興味をもてる好奇心」の重要さの意義を説いている。そして、

デザイナーに必要なのは処世術ではありません。もっと理想の話をして、長期的なビジョンを見据えていけるような生き方です。これが将来の文化をつくり、経済を盛り上げていくことに繋がるのです (p.35)

と言う。だからこそ、子どもに良質の満足感を与えることが重要だということになる。デザインをこのように解した上で、

人が生きるということは、デザイン作業に似ています (p.36)

という水戸岡氏の述懐に、さもあらむと共感を覚える。ここで言う「人」とは水戸岡氏ご自身のことに他ならないのだが、「正しいデザイン」のガイドラインが見つげ出せるかどうかは、個々人の問題としても、だからこそ、第2章で、松田権六の言を引き、それを解釈して、

デザイン力を身につけるために最初に必要なものは、人としての作法だと言うことです (p.59)

との注意がされるわけである。掃除の仕方、お茶の淹れ方を例にして、

デザインというものは何も特別なことではなく、人々が毎日生きるために何をしようか、どのように時間を使おうかなどと考えること、その営みこそがデザインなのです (p.61)

と言う。本書は、もっと狭義の「デザイナー」志望の若い人たちを念頭に書かれている面もあるのだが、意欲や野心といった自我を大事にしながらも、それを乗り越えたところで仕事をしなければならないと言っているようである。この章では、さらに、デザイナーの基本が述べられているが、偏見をできるだけ持たないこと、得手不得手などあってはいけないこと、クライアントと対立するのでも妥協するのでもなく、いわば、共通の目線に立てるかどうかのポイントだと述べている。公共デザインは、不特定多数の人たちに「心地よさ」を提供しなければならず、また、それが、この「デザイナー」による仕事であるということによって加算されなければ意味はないし、もちろん、公共空間の本来目的を増進するものでなければならないのだから、「尖った作品」を生で提供するようなことでは成り立たないわけである。

第3章は、現代の技術環境、商業環境下において、「和」の味わいを活かすということはどういうことか、また、なぜ「和」を活かさなければならないのかという問いがなされ、水戸岡氏が、和歌山電鐵やJR九州の車両デザインにおいて到達した解決の方向が示されている。第3章冒頭に現われる「米仕事」「花仕事」という対語は印象的であった。193回記事で言及した岡潔先生は、和洋の対比を「指物師」と「百姓」という言葉を使ってされているが、この対比を「分析的」と「総合的」あるいは「論理的」と「直観的」とで近似するとしたときに、ほぼ同じ地平で「米仕事」「花仕事」を的確に言い換えられるだろうか、と思ったこともある。

この章にも、もちろん、いろいろと素晴らしい指摘があるのだが、

私は「働くということはすなわちサービスをすることである」と思っています。それは、人のことを考えることができるというこ

とは能力が高いということでもあり、幸せになれる基本ではないかと思うからです。つまり、仕事で最も難しく、最も大事なことは人にサービスできるかということなのです (p.105)

を引こう。デザイナーの立場としては、「お客様の五感を刺激し、心を心地よくさせることができるか」ということになり、

1. 健康で安全・安心できるデザイン
2. 笑い笑顔が生まれるデザイン
3. 気配を感じさせるデザイン

という三つのデザイン活動によって、それができると述べている (p.106)。ここに「和」のテイストの意義があるというのである。

199. (13.12.30) 少し前の週末、丸の内のオアゾの丸善で

小倉紀蔵：新しい論語
筑摩書房（ちくま新書）2013
ISBN978-4-480-06757-9

を見つけ、また、『論語』か、と思いながら、購入してしまった。小倉氏は、難解な記号を多用し、特に、概念の使い分けが記号の添加の形での記述でなされることが多く、必ずしも読みやすい文章ばかりというわけではないことは、氏の大部の著作に挑戦しようとした経験からの判断である（176回記事参照。なお、97回記事も）。この本でも同様の習慣は維持されているが、それでも比較的明晰に書かれていると思う。

また、『論語』か、と述べてしまった。もちろん、『論語』や孔子に何らかの現代的な意義があるかのような姿勢での著作なら、そもそも、その前提が狂っているのだから全く読むには値しまい。つまり、史のあるいは思想史的史料としての扱い以外は『論語』や孔子についての著作には価値はないというのが、わたくしの一貫した判断である。小倉氏もハウツー物としての扱いをされるはずはなく、朝鮮での『論語』受容を踏まえた興味深い視点を提供されているかもしれないが、しかし、二千数百年前とされる時代と今とは余りにも違いすぎるのだから、さすがの小倉氏でもどうか、という想いがあった（第185－186回記事参照）。しかし、結論から先に言えば、この本は、予想をはるかに超えて興味深く、特に、孔子や『論語』の位置づけの説明としては、文字通り、腑に落ちるものであった。

それにしても、漢字の羅列で構成される簡潔な文章列というのは難しいものである。古代シナ語の表記法（？）の問題かもしれないが、解釈の幅の広さに驚き、加えて、後代の政治的な利用法が確立したことによる解釈態度の硬直化にも驚く。小倉氏に従えば、例えば、わたくしの『論語』に対する否定的な評価の基になっている、今日の通俗的な『論語』解釈、つまり、人間社会における各種垂直関係の規範性の追求、というのは、まさに、後世の硬

直化した解釈に拠るものであって、本来の孔子の思想とは無縁のものであった、ということになる。そうだとすると、『論語』や孔子に対するわたくしの姿勢も改めなければならないかもしれない。もちろん、孔子や『論語』に史的興味以外の今日的な価値があるということにはならない。生きている時代が根本的に違うことは忘れてはならない。

さて、本書の「おわりに」に、『論語』の「読み方」についての著者、小倉氏の意見が陳述されている。すなわち、

本書では、孔子の世界観そのものに肉迫することにより、これまで『論語』のなかで意味がよくわからないとされてきた章についても、その正確な意味をつかむことができたのではあるまいか。また、これまであまり重要性を感じられないとされてきた章にも、きわめて重要な意味があるということも、理解されえたのではあるまいか。(p.260)

と著者は言う。そして、

その世界観の核心は、仁であり、*j*あいだのいのち*i*であり、*j*第三の生命*i*であった。(p.260)

と総括している。問題は、著者の分析を経た「仁」は、通例の解釈での「仁」とは一致せず、より根源的なものである。著者は、古人の生命観を分析して、(ここでは、まだ、符牒めいているが)〈第三の生命〉というアイデアを抽出し、その発露である〈あいだのいのち〉の現れという、実は、これこそが孔子の追求したことなのだというを示すために、本書を著したというわけである。

そこで、〈第三の生命〉、〈あいだのいのち〉について、著者の考えを聞かなければならない。著者は

第一章 東アジアの二つの生命観

において、東アジアには「生命」についての解釈に二つの潮流があり、一方が、〈アニミズム〉、他方が〈汎霊論〉であるとする。ここで、〈、〉が付されていることには理由があり、本書なりの特殊な用法であることを示すものである。とまれ、著者は、

孔子こそは、〈アニミズム〉を代表する思想家だったのである (p.12)

と言う。ここで、〈汎霊論〉について、

[〈汎霊論〉]は、どういうものかというと、世界あるいは宇宙がひとつの霊的なもので満たされているという世界観である。… 東洋においては気の思想というのが代表的な〈汎霊論〉なのである。なぜなら気というのは純粋な物質ではなく、生命やたましいというものを包括した霊的な物質 (spiritual material/spritual matter) なのである。(p.12)

と説明している。

関連して、シャーマニズムの説明がある：

シャーマニズムは「天」という超越的な存在を信じ、その天と地上を媒介するシャーマンが地上に君臨するという世界観である。すべての価値は天にあり、天が地上のすべてを統括するのである。したがって、シャーマンは絶対的な権威を持つ。なぜなら、天とその代理者であるシャーマンこそが普遍的な価値そのものだからである。(p.13)

著者の観察によれば、孔子は『論語』の至るところで、このような世界観を批判しているという(例示として、憲問第十四の二四章が挙げられている)。孔子を、日本で定説化しているシャーマンとして捉えることは、『論語』の解釈を難しくしてしまうというのが、著者の小倉氏の主張である。そこで、小倉氏による〈アニミズム〉の定義を見なければならない。

鍵は、アニミズムではなく〈アニミズム〉と記しているところにあって、ここに、小倉氏のアニミズム概念の分析が反映している。アニミズムについて通例の理解をまず、

ふつう、アニミズムというのは、森羅万象に生命・アニマ・カミなどが宿っていると信じる世界観であり、それゆえ岩石や樹木などにも生命・アニマ・カミなどが宿っていると考える (p.15)

とした上で、この把握に(日本の土俗信仰を例に)疑念を示す。すなわち、万物がすべて同様にカミとして扱われるわけではなく、そこには可否が見られる。可否の所以は何か。小倉氏は、

それなら何が生命やカミとなり、何が生命やカミとならないのであろうか。天という超越的な存在がそれを決めているわけでは全くない。その村や国や共同体などの成員のおおくが、ある石に何らかの〈いのち〉を感じ取ることができ、それが帰納的に、つまり上から下へではなく、下から上への認識によって共同主観的にオーソライズされれば、生命やカミとなるのである。(p.15)

と説明する。小倉氏に従えば、〈アニミズム〉とは、このように共同主観的、帰納的に〈いのち〉を感じ取ることによって成り立つ世界観を意味しており、統一的な原理に基づいた上から下への演繹的な世界観であるシャーマニズムとは対極的なものということになる。

しかし、こうして見ると、〈アニミズム〉というのは、共同社会に依存する面があり、個別的で、一般論の展開には馴染みにくく、したがって、明晰な定義を与えにくいものであることがわかる。〈〉で既存の語彙を囲んで、文脈の指定をしなければならないわけではある。このままでは余りにもナイーブだから、恐らく、宗教学、あるいは、文化人類学の視点からの補強によっ

て（この本の英訳なり独訳なりへの翻訳に際して困難が生じない程度の）洗練化が必要だろうとは思ふ。もとより、小倉氏のアイデアそのものを批判するためではなく、より強化するための作業のことである。小倉氏は、さらに、孔子の世界観を説明するために、〈アニミズム〉をさらに特殊化した〈ソウリズム〉（ソウル=英 soul）というアイデアを、後述のように、提起する。

考察の基礎をなすのは、第一、第二、第三の三種の生命観への分類である。本書第一章に、「申し訳ないけど……」（p.21～）という小見出しのもとで、本書の用語の説明がある。上述の〈アニミズム〉〈ソウリズム〉も本書の用語だが、その根底にある「第三の生命」の説明が中心である。小倉氏は、まず、人類がこれまで、意識し、理念化してきた標準的な生命観を

- ☒ 肉体的・生物学的生命
- ☒ 精神的・宗教的生命

の二種に分け、それぞれ、〈第一の生命〉、〈第二の生命〉と名付ける。〈第一の生命〉は、生物学、つまり、自然科学的対象であると同時に、日常生活感覚での「いのち」とであると、著者は言う。そう言われてみれば、実際、自殺などの報道に伴って「いのちの大切さ」の見解が加えられているのは、この語法であり、それどころか、今の日本社会の生命観は圧倒的に、〈第一の生命〉に集中していることに思い当たる。

さて、小倉氏の説明では、〈第一の生命〉、つまり、

この生命は、一定の時間経過や物理的ダメージによって消滅したり破壊されたりする。人間はこのことに深い悲しみを覚えたり、耐えがたいという感覚を持ったりする。それを救うのが、後者の宗教的な生命観であった。「肉体が滅びても魂は滅びない」とか、「肉体的生命は有限でも神から与えられた霊のいのちは永生する」などという「語り」そのものが、宗教的認識として強い力を発揮してきた。（pp.22-23）

となっている。ところで、論理的な構造を想像する限り、〈第一の生命〉〈第二の生命〉は、個々の有限な生命というアイデアを共通の根底としながらも、それから展開される観念の方向が違うようである。〈第一の生命〉は、個々の有限な生命を抽象化する方向は、どちらかという、自然科学的な客観化、あるいは、少なくとも、異論を立てにくい見解の集積の範囲に留まるようなものであって、わかりやすいといえば、わかりやすいが、素朴といえば素朴なものを指すようである。これに対し、〈第二の生命〉は、小倉氏は、宗教性を強調されるが、むしろ、高度に組織化された文明性を支える生命観とした方が、本書の論旨の展開にはふさわしいのではないだろうか。例えば、欧州の都市の街路や広場などに人名を付しているのは、これらが人名が現す「偉人」の神格化の一種ではあるが、宗教性よりも社会性・文明性の反映ではないだろうか。他方、100回記事で言及した池田晶子氏の「死」は、本書の〈第

二の生命〉に包括されることになるのだろうが、しかし、池田氏が強調したのは、死後も、なお、留まる生き生きとした死者についての生（命）の記憶である。

さて、小倉氏の〈第三の生命〉であるが、

〈アニミズム〉における生命観である。…〈アニミズム〉においては、村などの共同体の成員の多くが、ある [対象物] に何らかの〈いのち〉の立ち現われを感じ取ることができ、それが共同主観的にオーソライズされれば、生命やカミとなるのである。このような〈いのち〉は、肉体的・生物学的生命でもないし、なんらかの普遍性を標榜する宗教的生命でもない。偶然性・偶発性に支配された、関係性のなかで立ち現われるか立ち現われないか予測できない〈いのち〉である。これを〈第三の生命〉と本書では名づけるのである。(pp.23-24)

とある。pp.24-25 には、〈第一の生命〉〈第二の生命〉〈第三の生命〉の言い換えが示されている。ここでは、

〈第三の生命〉 — あいだのいのち、立ち現われるいのち (p.25)

だけを挙げておこう。なお、改めて、〈アニミズム〉について、

本書では、「森羅万象に生命やアニマが宿っているのではなく、共同主観によって〈いのち〉を立ち現わす」世界観を、〈〉つきで〈アニミズム〉といている。

と整理し、特に、

〈汎霊論〉のように森羅万象に霊＝スピリット (spirit) が浸透していると考えerのではなく、〈いのち〉というのは、魂 (soul) と魂 (soul) の〈あいだ〉に立ち現われるものなのだ、という世界観 (p.26)

を〈ソウリズム soulism〉と呼びたいと小倉氏は言い、したがって、鍵語と図式は、

〈アニミズム〉 = 〈ソウリズム〉 → 〈第三の生命〉
〈汎霊論〉 → 〈第二の生命〉

に整理されると言う (p.26)。

概念構成は、なお、明確化が必要かと思われるが、この図式がアプリアリにあるわけではなく、『論語』や「孔子」についての不審な想いをすなおに分析して行ったら、核として、こういうアイデアに到達し、改めて、『論語』をこの立場から読み直してみると、よく辻褃が合うではないか、というのが、小倉氏の姿勢である。

第一章の紹介が非常に長くなった。ここで、目次を示そう：

- はじめに
- 第一章 東アジアの二つの生命観
- 第二章 孔子とは誰か
 - 1 孔子はシャーマンだったのか
 - 2 孔子と〈アニミズム〉
 - 3 バランサーとしての孔子
- 第三章 仁とは何か
 - 1 〈いのち〉としての仁
 - 2 〈第三の生命〉と仁
- 第四章 君子と小人
 - 1 君子という理想
 - 2 君子と小人
 - 3 君子の危機
- 第五章 孔子の世界観
 - 1 仁と礼
 - 2 知覚像至上主義
 - 3 孔子と〈汎霊論〉
- 第六章 孔子の方法論
 - 1 知覚像 — 孔子の認識論
 - 2 学ぶこととすること
 - 3 いうこととおこなうこと
- 第七章 孔子の危機
 - 1 〈汎霊論〉の台頭と浸透
 - 2 その後の中国思想
 - 3 日本では？
- 第八章 第三の生命
 - 1 〈第三の生命〉とは何か
 - 2 詩と〈いのち〉
 - 3 〈第三の生命〉の復活へ
- おわりに

小倉氏の見るところでは、孔子はシャーマンではなく、

孔子は「真理は上から下に降りてくるのではない」ということを明言したのであって、孔子の革新性の本質はここにあるのである。この意味で、孔子を人間主義者と呼ぶのは間違っていない。つまり、真理は天や神にあるのではなく、人と人の〈あいだ〉にあるのだ、と孔子は宣言したのである。(p.51)

とあり、「君子不器」の真意は、

孔子が理想とした君子というのは、道徳的に完成されている人で

も教養人でもない。ただひたすら、どんな鄙事においてもその場
その場で最高の〈いのち〉を立ち現わすことができる人のことを
いうのである。(p.48)

として、伝統的な解釈を批判している。わたくしが、この章句に、いわば、
飛びついたのは、ホモ・ユニヴェルサリスの匂いを嗅いだように思ったから
で、「大人」とか「士大夫」を想像したわけではなかったが、しかし、後に、
この章句が硬直した思想を正当化するものと聞き愕然としたけれども、小倉
氏流の理解なら歓迎である(185回記事参照。なお、190回記事も)。

小倉氏の解釈で光るのは、「仁」と「礼」である。結論から先に言えば、「仁」
とは〈第三の生命〉であり、「礼」とは、その場その場で最高の〈いのち〉を
立ち現わすための手続きである。

問題は、『論語』や「孔子」は、垂直関係の規範性を与えるものとして、後
世に「生き残った」、つまり、〈汎霊論〉の世界に完全にやり込まれてしまう
ほど、孔子の〈第三の生命〉は脆弱だったのは、なぜか、ということである。
そこには、恐らく、中国の歴史があるのだろう。

他方、日本の方はどうか、というと、どうも〈第二の生命〉は十分に発
達せず、〈第三の生命〉の延長上にあるようである。日本文化の仏教受容は、
(本書でも言及があるが)法事や仏壇へのお供えに見るように、儒教儀式を
伴っているという。そして、明治以前は、神仏習合であった。仏教は〈第二
の生命〉観の上に成立していることは間違いないが、神道は、〈第三の生命〉
の延長上にあるようである。そういう意味で、我々は小倉氏の〈第三の生命〉
を直感的に了解してしまうが、西欧圏やアラブ世界、インドや中国など、公
的な世界での思想の主流が〈第二の生命〉に基づく世界に対して、〈第三の
生命〉を存分に説明できているかということ、それはあやしい。少なくとも、
善悪、正邪、進遅のような価値判断を伴う話ではないことは明確に説明し切
らなければならないだろう(〈第二の生命〉観には、排他性の要素もあると考
えられるだけに)。

参考文献

- [1] 秋葉忠利. ヒロシマ市長 〈国家〉から〈都市〉の時代へ. 朝日新聞出版, 2012.
- [2] レオン・バットスタ・アルベルティ. 絵画論. (中央公論美術出版) 1971.
- [3] 朝日崇. 実践アーカイブ・マネージメント. 出版文化社, 2011.
- [4] あさりよしとお. 宇宙へ行きたくて液体燃料ロケットをDIYしてみた:
実録なつのロケット団. 学研教育出版, 2013. (学研科学選書)
- [5] ビートたけし・村上隆. ツーアート. 光文社 (知恵の森). 2008.

- [6] ハルトムート・ベーム. デューラー 《メレンコリア I》. 三元社, 2005. (加藤淳夫・訳)
- [7] The New Encyclopaedia Britannica. Volume 2 Micropaedia/ Ready Reference. 15th Edition (1994)
- [8] F. Brody & T. Vamos, ed. The Neumann compendium. World Scientific, 1995.
- [9] フレデリック・カプラン. ロボットは友だちになれるか 日本人と機械のふしぎな関係. NTT 出版, 2011.
- [10] 陳冠中. しあわせ中国 盛世 2013. 新潮社, 2012.
- [11] 陳東林・苗棣・李丹慧 (編) 加々見光行 (監修). 中国文化大革命事典. 中国書店, 1997.
- [12] 千代島 雅. アキレスと亀 ― 時間の哲学と論理 ―. 晃洋書房. 2005.
- [13] D. コックス他. グレブナ基底と代数多様体入門 イdeal・多様体・アルゴリズム. シュプリンガー・ジャパン, 2000.
- [14] アーサー・コーン. 都市形成の歴史 (SD 選書). 鹿島出版会, 1968.
- [15] Richard Dawkins. 神は妄想である. 早川書房, 2007.
- [16] Richard Dawkins. The God delusion. Black Swan, 2007.
- [17] Jean Dhombres & Jean-Bernard Robert. Fourier, Belin. 1998.
- [18] A. Doxiadis, C. Papadimitriou, A. Papadatos, M. Di Donna. Logicomix. Bloomsbury, 2009.
- [19] W. S. Duke-Elder. The Book of Ophtalmology. (St. Louis, 1933) .
- [20] デューラー. 「測定法教則」, 中央公論美術出版. 編訳解説 (下村耕史). 数学史解説 (三浦伸夫)
- [21] Dumas. Le Vicompte de Bragelonne II. folio classique.
- [22] A. デュマ. 華麗なる饗宴 (新装版 ダルタニャン物語 第8巻). 復刊ドットコム, 2011. (鈴木力衛訳)
- [23] フリーマン・J・ダイソン. ダイソン博士の太陽・ゲノム・インターネット – 未来社会と科学技術大予測. 共立出版, 2000
- [24] 英『エコノミスト』編集部. 2050年の世界 英『エコノミスト』誌は予測する. 文芸春秋, 2012.

- [25] Samuel Y. Edgerton, Jr. *The Heritage of Giotto's Geometry – Art and Science on the eve of scientific revolution –*. Cornell University Press, 1991.
- [26] James T. Enns. *The thinking eye, the seeing brain : explorations in visual cognition*, W. W. Norton and Co., 2004
- [27] Federigo Enriques. *科学の諸問題*. (シカゴ) 1914.
- [28] アンリ・フォション. *ピエロ・デッラ・フランチェスカ*. 白水社, 1997 (訳・原章二).
- [29] Jean Baptiste Joseph Fourier. *Théorie analytique de la chaleur*. Cambridge Library Collection digitally reprinted version (2009). Cambridge University Press.
- [30] 藤井直敬. *つながる脳*. N T T 出版. 2009.
- [31] 藤井直敬. *ソーシャルブレインズ入門 <社会脳>って何だろう*. 講談社, 2010. (講談社現代新書 2039)
- [32] 露谷虹児. *露谷虹児*. 河出書房新社, 2007.
- [33] 布施英利. *美の方程式 美=完璧×破れ*. 講談社, 2010.
- [34] 古田博司. *新しい神の国*. ちくま新書, 2007.
- [35] ゲーデル. *不完全性定理*. (岩波文庫 33-944-1)
- [36] 八谷和彦. *ナウシカの飛行具、作ってみた*. 幻冬舎. 2013.
- [37] 浜田宏一. *大学の国際化はなぜ必要か？* 學士會会報, 895 号. (2012)
- [38] T. L. ヒース. *ギリシア数学史* (共立出版・復刻版). 1998/05.
- [39] 日高敏隆. *ぼくの生物学講義 人間を知るてがかり*. 昭和堂, 2010.
- [40] 東裕紀 (編). *日本的想像力の未来 クール・ジャパノロジーの可能性*. (NHK ブックス). 日本放送出版協会, 2010.
- [41] 樋口貴広・森岡周. *身体運動学 – 知覚・認知からのメッセージ*. 三輪書店, 2008
- [42] 平川祐弘. *一石二鳥の教養教育は可能か*. 學士會会報, 888 号.
- [43] 平川祐弘. *竹山道雄と昭和の時代*. 藤原書店, 2013.
- [44] 平山諦. *和算の誕生*. ちくま学芸文庫.

- [45] Hoddeson, Henriksen, Meade, Westfall. *Critical Assembly*. Cambridge University Press, 1993.
- [46] 堀江貴文. *ゼロ*. ダイヤモンド社, 2013.
- [47] 細矢治夫. *ピタゴラスの三角形とその数理*. (共立出版 2011) .
- [48] H. E. Huntley. *The divine proportion – A study in mathematical beauty*. Dover Publications. 1970.
- [49] 池田晶子. *死とは何か さて死んだのは誰なのか*. 毎日新聞社, 2009.
- [50] 池井戸潤. *下町ロケット*. 小学館, 2010.
- [51] 猪木武徳. *経済学に何ができるか 文明社会の制度的枠組み*. 中公新書, 2012.
- [52] 井上章一. *南蛮幻想 — ユリシイズ伝説と安土城*. 文藝春秋 (1998)
- [53] 猪瀬直樹. *空気と戦争*. (文春新書)
- [54] 犬井鉄郎. *球函数・円筒函数・超幾何函数*, 河出書房, 1948.
- [55] 石橋浩介・大山野拓・吉川敦. 街区・丁目・グラフ. **Radix** (九大全学教育誌), 39 (2004)
- [56] 石黒浩. *人と芸術とアンドロイド 私はなぜロボットを作るのか*. 日本評論社, 2012.
- [57] 石川九揚. *万葉仮名でよむ『万葉集』*. 岩波書店, 2011.
- [58] 石鍋真澄. *ピエロ・デッラ・フランチェスカ*. 平凡社, 2005.
- [59] 石飛道子. *ブッダ論理学五つの難問*. 講談社選書メチエ (講談社, 2005) .
- [60] 磯田道史. 評伝、三人の日本人～無私の精神に生きる (歴史に親しむ) . *ラジオ深夜便*. no.153 (2013年4月号), pp.64-74.
- [61] 磯田道史. *無私の日本人*. 文藝春秋, 2012.
- [62] 伊東乾. *笑う親鸞 楽しい念仏、歌う説教*. 河出書房新社, 2012.
- [63] William M. Ivins, Jr. *Art & Geometry*. Dover 1964, (Harvard Univ. Press 1946)
- [64] William M. Ivins, Jr. *Prints and visual communication*. MIT Press, 1953.
- [65] 岩田誠. *臨床医が語る脳とコトバのはなし*. 日本評論社, 2005.

- [66] Jacobi. Gesammelte Werke, Band I.
- [67] W. Jaeger. Aristotle. Oxford University Press, 1934.
- [68] かどや ひでのり. 「学習の動機づけ」からみたカンニング. 日本高専学会誌, 15(3), pp.97-102 (2010)
- [69] 加賀野井秀一. 猟奇博物館へようこそ — 西洋近代知の暗部をめぐる旅. 白水社, 2012.
- [70] J.-P. Kahane et al. Fourier Series and wavelets. Gordon and Breach Publishers, 1995.
- [71] 加治将一. 陰謀の天皇金貨 史上最大・100 億円偽造事件 — 20 年目の告白. 祥伝社, 2011.
- [72] 亀山郁夫・佐藤優. ロシア 闇と魂の国家. (文春新書 2008)
- [73] 金谷治訳注. 論語. 岩波文庫 (改訳) 1999-2008.
- [74] 金子邦彦. 生命とは何か [第 2 版] 複雑系生命科学へ. 東京大学出版会, 2009.
- [75] 葛西龍樹. 医療大転換 — 日本のプライマリ・ケア革命. ちくま新書. 2013.
- [76] 加藤周一. 日本文化における時間と空間. 岩波書店, 2007.
- [77] 加藤陽子. それでも, 日本人は「戦争」を選んだ. 朝日出版社, 2009.
- [78] 勝木渥. 曾禰武 忘れられた実験物理学者. 績文堂出版株式会社, 2007.
- [79] 川人光男. 脳の情報を読み解く BMI が開く未来. 朝日新聞出版, 2010.
- [80] 見崎鉄. ドラゴンボールのマンガ学. 彩流社, 2011.
- [81] S. Khavronina. Russian as we speak it. (5th ed., Russian Language Publishers 1976).
- [82] 北川智子. ハーバード白熱日本史教室. 新潮新書 (新潮社). 2012.
- [83] 北川智子. 異国のヴィジョン 世界の中の日本史へ. 新潮社. 2013.
- [84] ルートヴィッヒ・クラークス. リズムの本質, みすず書房, 1971.
- [85] 小林公夫. 本物の医師になれる人、なれない人. PHP 新書, 2011.
- [86] 小林哲夫. 高校紛争 1969-1970. 中公新書, 2012.
- [87] 今野 浩. カーマーカー特許とソフトウェア: 数学は特許になるか. 中公新書. 1995.

- [88] 今野浩. スプートニクの落とし子たち 理工系エリートの栄光と挫折. 毎日新聞社, 2010.
- [89] 今野浩. 工学部ヒラノ教授と七人の天才. 青土社, 2013.
- [90] 小塩隆士. 効率と公平を問う. 日本評論社, 2012.
- [91] トーマス・クーン. 科学革命の構造. みすず書房. 1971 (原版 1962) .
- [92] 九鬼周造. いきの構造. 岩波文庫
- [93] 栗本慎一郎. ゆがめられた地球文明の歴史, 技術評論社, 2012.
- [94] トマス・レヴェンソン. ニュートンと贋金づくり. 白楊社, 2012.
- [95] 町田宗鳳. 人類は「宗教」に勝てるか — 一神教文明の終焉. NHK ブックス (日本放送出版協会 2007)
- [96] 万城目学. 偉大なる, しゅららぼん. 集英社, 2011.
- [97] マクウィニー. 家庭医療学 (上巻) . ぱーそん書房. 2013. (訳: 葛西龍樹・草場鉄周)
- [98] 三浦しをん. 舟を編む. 光文社, 2011.
- [99] 前坊洋. 模擬と新製 アカルチュレーションの明治日本. 慶應義塾大学出版会, 2010.
- [100] 毛沢東. 毛沢東語録, 平凡社ライブラリー, 1995.
- [101] Eli Maor. Trigonometric Delights. Princeton University Press. 1998.
- [102] David Marr. Vision: A computational investigation into the human representation and processing of visual information. W.H.Freeman and Co., 1982
- [103] 三橋貴明・さかき漣. 真冬の向日葵. 海竜社, 2012.
- [104] 三木成夫. 胎児の世界. 中公新書, 1983.
- [105] 三木成夫. 人間生命の誕生. 築地書館, 1992.
- [106] 三木成夫. ヒトのからだ — 生物史的考察. うぶすな書院, 1997.
- [107] 三木成夫. 生命形態学序説. うぶすな書院, 1992.
- [108] 三木成夫. 海・呼吸・古代形象. うぶすな書院, 1992.
- [109] 三木成夫. 生命形態の自然誌 (第一巻) . うぶすな書院, 1989.

- [110] 水戸岡鋭治. 電車をデザインする仕事. 日本能率協会マネージメントセンター. 2013.
- [111] 宮本次人. シ・ジョアン有馬晴信. 海鳥社, 2013.
- [112] 宮崎興二. 「かたち」の謎解き物語 – 日本文化を○△□で読む. 彰国社, 2006
- [113] 溝口明則. 数と建築 – 古代建築技術を支えた数の世界. 鹿島出版会. 2007.
- [114] 水谷千秋. 継体天皇と朝鮮半島の謎. 文春新書. 2013.
- [115] 森臨太郎. 持続可能な医療を創る グローバルな視点からの提言. 岩波書店. 2013.
- [116] 藻谷浩介. デフレの正体 – 経済は「人口の波」で動く. 角川 one テーマ, 2010.
- [117] 元村由希子. たばこの危険, 牛肉の不安.
発信箱, 毎日新聞 2007 年 5 月 30 日.
- [118] 村上隆. 芸術起業論. 幻冬舎, 2006.
- [119] 村上隆. 芸術闘争論. 幻冬舎, 2010.
- [120] 村上隆. 想像力なき日本 – アートの現場で蘇る「覚悟」と「継続」.
角川 one テーマ 21, 2012.
- [121] 村上隆. 現代アートで時代を変える (インタビュー). ラジオ深夜便.
no.153 (2013 年 4 月号), pp.40–51.
- [122] 長島陽子. 中国に夢を紡いだ日々 – さらば「日中友好」 – . 論創社
2009.
- [123] 中村元. 論理の構造, 上, 下. 青土社, 2000.
- [124] 中野美代子. 龍のいるランドスケープ. ベネッセ, 1991.
- [125] 中山敬一. 君たちに伝えたい三つのこと. ダイヤモンド社, 2010.
- [126] 長山靖生. 不勉強が身にしみる. 光文社新書, 光文社, 2005.
- [127] 中島義道. 明るいニヒリズム. PHP エディターズ・グループ, 2011.
- [128] 中島義道. さようなら, ドラえもん – 子どものためのテツガク教室. 講談社, 2011.

- [129] NHK スペシャル「安土城」プロジェクト・辻 泰明. 信長の夢「安土城」発掘. 日本放送出版協会 (2001)
- [130] 日本テスト学会編. 見直そう、テストを支える基本の技術と教育. 金子書房, 2010.
- [131] 日本宇宙生物科学会 (奥野誠/馬場昭次/山下雅道) 編. 生命の起源をさぐる 宇宙からよみとく生物進化. 東京大学出版会, 2010.
- [132] 西川長夫. パリ五月革命 私論 転換点としての 68 年. 平凡社新書, 2011.
- [133] 西股総生. 戦国の軍隊 現代軍事学から見た戦国大名の軍勢. 学研パブリッシング. 2012.
- [134] 西股総生. 「城取り」の軍事学 築城者の視点から考える戦国の城. 学研パブリッシング. 2013.
- [135] Igor D. Novikov. The river of time. Cambridge University Press (1998)
- [136] 大澤真幸. 量子力学とともにある「歴史哲学テーゼ」, 「本」(講談社), 平成 19 年 4 月号.
- [137] 尾田栄一郎. ワンピース, (1 巻～). 集英社
- [138] 小倉紀蔵. 日中韓はひとつになれない. 角川 one テーマ 21. (角川書店 2008)
- [139] 小倉紀蔵. 東アジアとは何か ― 〈文明〉と〈文化〉から考える. 弦書房, 2012. (福岡 U ブックレット)
- [140] 小倉紀蔵. 創造する東アジア 文明・文化・ニヒリズム. 春秋社, 2011.
- [141] 小倉紀蔵. 新しい論語. 筑摩書房 (ちくま新書). 2013.
- [142] 岡田英弘. 日本人のための歴史学. WAC BUNKO, 2007.
- [143] 岡田英弘. 日本史の誕生 (ちくま文庫). (筑摩書房, 2008)
- [144] 岡本顕實. 原城跡. さわらび社 (郷土歴史シリーズ 9).
- [145] 岡本隆司. 中国「反日」の源流. 講談社 (講談社選書メチエ 489) 2011
- [146] 岡本隆司. 近代中国史. ちくま新書. 2013.
- [147] 岡本政耿・中沢薫 (編著). 経営品質導入で学校が劇的に変わる. 学事出版, 2007
- [148] 近江俊秀. 道が語る日本古代史 (朝日選書). 朝日新聞出版, 2012.

- [149] 大島正二. 漢字伝来. (岩波新書), 岩波書店. 2006.
- [150] 大島正二. 唐代の人は漢詩をどう詠んだか 中国音韻学への誘い. 岩波書店, 2009.
- [151] John Allen Paulos. Innumeracy – mathematical illiteracy and its consequences. Hill and Wang, 2001.
- [152] Roger Penrose. The emperor’s new mind. Oxford University Press. 1989.
- [153] Piero della Francesca. De la perspective en peinture. In Medias Res, Paris, 1998.
- [154] ポアンカレ. 科学の価値. (岩波文庫 33 – 902 – 3)
- [155] Henri Poincaré. La science et l’hypothèse. Flammarion, Paris 1968.
- [156] Ilya Prigogine. From being to becoming - Time and complexity in physical science. W. H. Freeman and Co. (1980)
- [157] Hans Reichenbach. The direction of time. Dover (1999) (University of California Press, 1956-1971)
- [158] Hans Reichenbach. Les fondements logiques de la mécanique des quanta. Ann. IHP, **13**(1952-1953), pp.109-158.
- [159] ピーター・T・リーセン. 海賊の経済学. NTT 出版, 2011.
- [160] L.T.C. Rolt. Victorian Engineering. Pelican Books, 1974-1980.
- [161] Brian Rotman. Will the digital computer transform classical mathematics ? Phil. Trans. R. Soc. London, A, **361** (2003), pp. 1675-1690.
- [162] 齋藤孝. 国語力は数学力. 集英社, 2010.
- [163] 三森ゆりか. 外国語を身につけるための日本語レッスン. 白水社, 2003.
- [164] 三森ゆりか. 外国語で発想するための日本語レッスン. 白水社, 2006.
- [165] 佐藤優. 地球を斬る. 角川学芸出版, 2007.
- [166] 佐藤光. マイケル・ポランニー「暗黙知」と自由の哲学. 講談社, 2010.
- [167] マルジャン・サトラピ. 鶏のプラム煮. 小学館集英社プロダクション, 2012.
- [168] タイモン・スクリーチ. 阿蘭陀が通る 人間交流の江戸美術史. 東京大学出版会, 2011.

- [169] Tina Seelig. What I wish I knew when I was 20 – A crash course on making your place in the world. HarperOne, 2009.
- [170] Glenn Shafer. The art of causal conjecture. The MIT Press, (1996)
- [171] 滋賀県安土城郭調査研究所 (編集). 図説安土城を掘る — 発掘調査 15 年の軌跡 (大型本). サンライズ出版 (2004)
- [172] 滋賀県安土城郭調査研究所編著. 安土城・信長の夢. サンライズ出版 (2004)
- [173] 島村昇・鈴木幸雄他. 京の町家. (SD選書 59). 鹿島出版会, 1971.
- [174] 清水真木. これが「教養」だ (新潮新書). 新潮社, 2010.
- [175] ニール・シュービン. ヒトの中の魚, 魚の中のヒト — 最新科学が明らかにする人体進化 35 億年の旅 — . 早川書房. 2008.
- [176] Mathematicians Spark Boycott of Elsevier Journals, SIAM NEWS, 45-2, March 2012.
- [177] ジョージ・G・スピロ. 数と正義のパラドクス. 青土社, 2011.
- [178] 菅原克也. 英語と日本語のあいだ. (2011 講談社・講談社現代新書)
- [179] 鈴木大拙. 日本の靈性. (岩波文庫)
- [180] 鈴木大拙. 大雪 禅を語る — 世界を感動させた三つの英語講演 — . 重松宗育: 監修・訳. (アートデイズ 2006)
- [181] 鈴木貴博. 「ワンピース世代」の反乱, 「ガンダム世代」の憂鬱. 朝日新聞出版. 2011.
- [182] 鈴木武雄. 17 世紀: 日本からヨーロッパへ — Petrus Hartsingius Japonensis の場合 — . 数学教育研究, 40, pp.115-137 (2011) (大阪教育大学数学教室)
- [183] 鈴木武雄. Petrus Hartingius Japonensis の深い孤独と数学及び奨学金. 数学教育研究, 41, pp.101-147 (2012)
- [184] 田島知郎. 病院選びの前に知るべきこと 医療崩壊から再生に向けて. 中央公論新社, 2010.
- [185] 高瀬正仁. 岡潔とその時代 I 正法眼蔵 — 評傳岡潔 虹の章. みみづく舎 (発行) 医学評論社 (発売). 2007.
- [186] 高瀬正仁: 岡潔とその時代 II 龍神温泉の旅 — 評傳岡潔 虹の章. みみづく舎 (発行) 医学評論社 (発売) 2007

- [187] 竹村公太郎. 日本史の謎は「地形」で解ける. PHP 文庫, 2013.
- [188] 竹中平蔵: 竹中教授の 14 歳からの経済学 経済を良くする方法を考える. 東京書籍, 2009.
- [189] 竹内洋. 革新幻想の戦後史. 中央公論新社, 2011.
- [190] 竹内オサム. マンガ表現学入門. 筑摩書房, 2005.
- [191] 竹山護夫. 竹山護夫著作集. 第 1 巻～第 5 巻. 歴史学叢書. 名著刊行会. 2005～2009.
- [192] 竹山護夫・平川祐弘. 竹山護夫著作集. 補巻. 歴史学叢書. 名著刊行会. 2009.
- [193] 立原位貫. 一刀一絵 江戸の色彩を現代に甦らせた男. ポプラ社, 2010.
- [194] Alan D. Taylor. Mathematics and politics Strategy, Voting, Power and Proof. Springer, 1995.
- [195] 寺脇研. 震災後の社会と教育. 「教育と医学」No.695 (2011 年 5 月) pp.50-55
- [196] 柄折久美子. 森有正先生のこと. 筑摩書房, 2003.
- [197] 富坂聰. 習近平と中国の終焉. 角川 SSC 新書. 角川マガジンス, 2013(sic).
- [198] 津上俊哉. 中国台頭の終焉. 日経プレミアシリーズ 184, 2013.
- [199] 沖方丁. 天地明察. 角川書店, 2009.
- [200] 上田雄. 遣唐使全航海. 草思社, 2006.
- [201] 上山隆大. グローバル化時代におけるアカデミアの行方, 學士會会報, 892 号, 2012.
- [202] 梅棹忠夫・小山修三. 梅棹忠夫 語る. 日本経済新聞出版社, 2010.
- [203] 潮木守一. いくさの響きを聞きながら — 横須賀そしてベルリン. 東信堂, 2008.
- [204] Benjamin Wardhaugh. How to read historical mathematics. Princeton University Press, 2010.
- [205] James D. Watson. Avoid boring people. Vintage Books, 2010.
- [206] 山本七平. なぜ日本は変わらないのか — 日本型民主主義の構造. さくら舎, 2011

- [207] 山本義隆. 熱学思想の史的展開, 1, 2, 3. ちくま学芸文庫, 2008, 2009, 2009.
- [208] 柳瀬尚紀. 日本語は天才である. (新潮文庫)
- [209] 安田峰俊. 独裁者の教養. (星海社. 2011)
- [210] 安田雪. ルフィの仲間力 『ONE PIECE』流, 周りの人を味方に変える法. アスコム. 2011.
- [211] Atsushi Yoshikawa. Souvenirs d'un pensionnaire étranger japonais et matheux à la rue d'Ulm, Société d'Amis de l'Ecole Normale Supérieure, 220 (2001), pp.20–25
- [212] Itsuji Yoshikawa. Major Themes in Japanese Art. Heibonsha Survey of Japanese Art, 1976.
- [213] Yu Dan (于丹). Confucius from the Heart. Pan Books, 2010.
- [214] 湯浅邦弘. 論語. 中公新書, 2012.

索引

- アーカイブの思想, 423
Art & Geometry, 3-5
暗黙知, 206
愛, 228
Ivins, 3, 11, 12, 17, 20, 28, 30, 36,
42, 314
アイデアの剽窃, 32
AIBO, 391
アインシュタイン, 12
アインシュタインの相対性理論, 9
青木玲子, 294
秋月康夫, 379
秋入学, 383
秋葉忠利, 388
「阿Q」的人間, 374
足利義輝, 61
アシモフ, 244
アシュケナーヅ, 420
安土のセミナリオ, 333
アテナイ, 12
阿豆流為, 456
アポロニウス, 7
アマチュア精神, 5
アメリカ文明, 26
新井仁之, 34, 177
荒木村重, 67
アリアンス・フランセーズ, 284
アリストテレス, 19
アリゾナ, 14
アルトホーフ, 364
アルベルティ, 4, 8, 19
アンゴラ, 65

イアン・ウィルマット, 288
イエズス会, 66, 333
家康, 61
池田晶子, 564

医師の職業倫理指針〔改訂版〕, 322
石橋美術館, 94
石橋文化センター, 94
弩（いしゆみ）, 59
一人称の死, 202
イチロー, 433
「一神教的コスモロジー」, 69
アイデア, 16
伊藤一長, 86
移動する空間, 181
医の国際倫理綱領, 322
「今=ここ」, 35, 74, 315, 377, 508
意味の共鳴, 20
弥永昌吉, 379
ID (Intelligent Design) , 52
インテリ道, 262
インドネシア, 65
impact factor, 416

ヴァティカン, 185
ウィリアム・チャロニー, 460
ウェスト・ラフィエツト, 26
Wertheim, Margaret, 29
Wertheim 曲線, 29
ヴォルテール, 333
宇宙生物, 277
梅棹忠夫, 393
裏表紙, 3
運動学習, 188

英語コミュニケーション能力, 431
H指数, 242
エコル・ノルマル・シュペリウー
ル, 339
エッシャー, 12
江戸時代, 348
Elsevier, 416

Elsevier Boycott, 416
 遠位空間, 181
 演繹原理, 21
 エンターテインメント, 392
 エンターテインメント・ロボット, 390
 円珍, 270
 エンリケス, 9

 「黄金時代」, 12
 黄金比, 268
 汪兆銘, 197
 大槻玄沢, 349
 オーム真理教, 64
 大森荘蔵, 344
 岡田英弘, 393
 岡本隆司, 350
 小沢昭一, 441
 オタク, 235
 オタク性, 56
 織田信長, 61
 鬼原俊枝, 66
 オハイオ河, 25
 「お待ち受け法要」, 440
 思い込み, 261, 263, 266, 376
 おもかげ, 273
 おもてなしの心, 508

 J.-P. Kahane, 398
 開高健ノンフィクション賞, 369
 外交シミュレーション・ゲーム, 259
 「解体新書」, 350
 外部効果, 404
 解剖絵巻, 280, 350
 解剖学, 313
 顔見知り, 251
 化学反応式, 212
 核酸, 278
 核磁気共鳴装置, 37
 学習, 188
 学習指導要領, 265

 学術情報の寡占化, 416
 革新幻想, 362
 革命説, 192
 「学歴」, 333
 梶本裕之, 177
 春日権現絵巻, 184
 価値重視, 193
 「学校経営」, 216
 「学校歴」, 333
 桂川甫周, 349
 加藤周一, 339
 狩野永徳, 61
 狩野内膳, 66
 鎌倉東大会, 362
 神, 45
 神の存在, 46
 からくり儀右衛門, 393
 唐津, 265
 ガラパゴス的, 439
 カラム構造, 222
 ガリレオ・ガリレイ, 259
 カルチエ・ラタン, 339
 カレル・チャペック, 244
 Timothy Gowers, 416
 「かわいい」, 23, 233, 234
 「官憲主義」, 376
 『完全雇用と自由貿易』(1945年),
 211
 ガンダム, 346
 カンニング, 252
 カンニング行為, 252
 韓半島, 420
 完璧, 268

 機会の平等, 369
 『擬「価値」』, 320
 危険指数, 396
 『擬「社会」』, 320
 技術, 317
 北岡明佳, 177

北川正恭, 218
 北九州市立美術館, 124
 キメク汗国, 420
 客観的空間, 315
 球座標, 348
 九州大学マス・フォア・インダスト
 リ研究所, 293
 教育, 404
 「教育と医学」, 330
 行政機関の安易な言語感覚, 434
 「経典」, 63
 京都シネマ, 450
 京都のフランス学派, 342
 教養, 214
 「極限」, 381
 キリスト教, 14
 キリスト教固有の男性原理, 73
 キリル文字, 49
 『擬「倫理」』, 320
 近位空間, 181
 金正日, 421
 近代医学, 313
 近代科学, 313
 近代武士道, 262
 金日成, 56, 421

 空海, 421
 空間認識, 7
 空間の表象, 181
 「空気」, 373
 「空気」の研究, 376
 クール, 234
 クール・ジャパノロジー, 231
 九鬼周造, 235
 クザーヌス, 4, 8
 國芳, 275
 クラーク会館, 343, 444
 グラフ理論, 249
 クリエーター, 248
 Kurt Lewin, 94
 「グローバル化時代」, 331
 グローバル人材, 435, 505
 クローン羊ドリー, 288

 経営, 216
 慶応ボーイ, 362
 京城市, 291
 形態学, 273
 計量的, 9
 ゲーデル, 18
 結界, 315
 ゲテモノ, 418
 ケプラー, 4, 8, 259
 ケルヴィン卿ウィリアム・トムソ
 ン, 330
 建学の精神, 318
 研究の礼儀作法, 211
 言語技術, 432
 原子爆弾, 14
 健全なる素人, 50, 377
 現代日本文化文明の古典, 368
 検定, 252
 遣唐使, 269
 原爆資料館, 85
 原爆投下による日本の敗戦, 23
 原理主義, 207

 ゴア, 65, 185, 265
 小泉・竹中政策, 199
 「工学部の教え」, 7, 39, 75, 246,
 349
 公共的空間, 315
 高句麗, 420
 校訓, 318
 「高校野球」, 439
 「高校ランキング」, 405
 孔子, 458, 461, 488, 561
 「甲子園型野球報道」, 440
 皇室の名宝展, 184
 高次のカンニング精神, 256

公正, 377
 公平性, 402
 効率性, 402
 コーン=ベンディット, 339
 五箇条のご誓文, 262
 「五月革命」, 339
 「五月の事件」, 339
 国際交流, 266
 「国際交流政策懇談会」, 331
 国際友好, 266
 国際理解, 265
 国立科学博物館, 279
 国立文書館, 263
 越川倫明, 119
 The Cost of Knowledge, 416
 胡適, 197
 「古代都市文明」, 26
 古典, 368
 古典的な東アジア, 193
 五野井隆史, 119
 コペルニクス, 8
 「コミュニケーション英語」, 281
 「コミュニケーション国語」, 284
 コミュニケーション能力, 431
 コモノート, 279
 ゴルパチョフ, 366
 「今週の本棚」(毎日新聞), 275

 サーバントリーダー, 311
 SIAM News, 394
 最澄, 421
 齊藤憲, 7
 坂上田村麻呂, 456
 坂本繁二郎, 94
 索引, 7, 38, 40, 75, 313, 349, 390
 錯視, 177
 錯触, 177
 「作品を通して世界芸術史での文脈を作ること」, 22
 『砂漠の魔王』, 347

 samuraization, 262
 J-P. サルトル, 360
 サロゲート, 446
 産業用ロボット, 392
 三人称の死, 202

 G T M, 283
 JR 九州, 558
 genidentity, 94
 ジェミノイド, 446
 「ジェンリッチとナチュラル」, 288
 視覚的, 8, 9
 事業仕分け, 219
 時空認識の構造, 1
 自己組織化の原理, 181
 視座の移動, 36
 思想の年齢, 13
 「死の臨床」(日本死の臨床研究会), 201
 司馬江漢, 349
 事物の解釈の習慣, 11
 自分たちの立ち位置の相対化, 308
 射影的, 9
 社会的文脈の無関連化機能, 232
 社会脳, 219
 写実性, 56
 洒落っ気, 379
 自由意志と歴史認識, 28
 「宗教戦争」, 63
 宗教的原理主義, 63
 住居表示, 248
 「収奪」, 369
 集団内で暗黙のうちに了解されている諸種の文化原理, 11
 「熟議カケアイ」, 282
 儒者, 457, 462
 ジュネーブ宣言, 322
 荀子, 193
 蒋介石, 197
 常識的な東アジア, 193

「正法眼蔵」, 321
 縄文土偶, 393
 触原色原理, 177
 職人の知恵, 259
 触覚, 177
 序文, 9
 シルクロード, 418
 素人, 5
 素人 amateur, 10
 シンガポール, 40, 372, 418
 神経可塑性, 186
 信仰神, 47
 人材配置の偏り, 248
 シンシナティ, 25
 シンシナティ大学, 25
 (人造人間型) ロボット, 393
 身体イメージ, 181
 身体図式, 181
 新潮 45, 201
 人的資本論, 404
 神道原理主義, 421
 神農, 280
 新聞社の勝利感, 390
 親鸞, 441

 数学教育の会, 379, 386
 「数学通信」, 54
 数理解析研究所, 398
 杉原厚吉, 176
 Skeptic 誌, 47
 鈴木武雄, 350
 スプートニック・ショック, 246

 性悪説, 192
 西欧受容, 393
 「政治化」, 376
 性善説, 192
 生態心理学, 180
 正統作図法, 8, 67
 生命 (定義), 278

 生命の起源, 277
 世界医師会, 322
 関孝和, 54
 関孝和賞, 54
 接触感覚, 7
 接触筋肉感覚的, 9
 節談説教, 441
 ゼノン, 16
 ゼノンの逆理, 16
 セファラディン, 420
 狭い意味での東アジア, 191
 戦艦「長門」, 14
 全球凍結, 279
 全国学力・学習状況調査, 210
 「戦後民主主義」, 23
 「全体主義」, 376

 ソヴェート連邦, 49
 創造主としての神, 45
 相対化に耐える日本 (人) 的な「価値」, 335
 相対論の衝撃, 12
 造物主, 393
 ソウル宣言, 322
 ソーシャルブレインズ, 219
 「測定法教則」, 8
 セルゲイ・リボビッチ・ソボレフ,
 33
 ソボレフ研究所, 33

 「大学入試ランキング」, 405
 大航海時代, 265
 太子党, 189
 対数安全指数, 396
 体性感覚, 177
 ダイソン, 377
 「対テロ戦争」, 63
 第二次世界大戦, 17
 大脳皮質, 222
 タイモン・スクリーチ, 413

高津家本, 61
 高山右近, 67
 滝順一, 295
 竹内洋, 364
 竹下登, 377
 竹田清, 382
 竹中塾, 198
 他者との関係性, 227
 「多神教的コスモロジー」, 69
 磔刑の評価, 73
 谷口豊太郎ー小泉信三, 436
 田沼意次, 349
 「旅する脳」(日本航空機内誌連載), 30
 ダランベール, 101
 タンパク質, 278

 チェコスロヴァキア, 366
 地球生命, 279
 「知識人」, 341
 地図帳の索引, 75
 知的冒険を共有する愉しみ, 10
 地方の疲弊, 199
 茶化し, 56
 中華冊封圏, 195
 朝鮮民主主義人民共和国, 421
 知力の低下, 45

 辻佐保子, 32
 ツンベルグ, 349

 ディズニー, 23
 ティツィング, 349
 デカルトの頭蓋骨, 414
 デザルグ, 4, 8, 19
 手続き重視, 193
 手の届く空間, 181
 デビルリーダー, 311
 デューラー, 4, 8, 10, 258
 寺嶋英志, 425
 寺脇研, 330

 テレヴァンジリズム, 48

 同期会, 279
 東京大学, 383
 東京電力福島第一原子力発電所, 390
 「東京の発想」, 558
 統計オンブズマン, 396
 統治, 192, 376
 統治の正統性, 192
 ドウチュケ, 339
 東北地方太平洋沖大地震, 288
 「道路, 都市, 帝国」, 42
 Dawkins, 40, 62, 63
 ドーキンス, 342
 独裁者の定義, 372
 読書技術, 431
 読書傾向, 268
 「Dr. スランプ」, 367
 戸口番号, 250
 ド・ゴール, 340
 富永直樹, 85
 ドラえもん, 344
 ドラゴンボール, 346, 367
 鳥フル, 50

 ナイーヴ, 1, 2, 4
 中尾佐助, 60
 中川淳庵, 349
 長崎, 14
 長崎歴史文化博物館, 118
 中島義道, 343
 中山敬一, 248
 名護屋城, 67
 「ななつ星」, 557
 南蛮屏風, 66
 南洋大学, 41

 ニーナ・パタポーヴァ, 49
 Giovanni Nicolao, 58
 日仏学館, 55
 日米和親条約, 369

日経ビジネスオンライン, 369
 日中関係, 297
 日中友好, 189
 新渡戸稲造, 321
 二人称の死, 202
 日本語文献の世界戦略, 230
 日本数学会, 53
 日本的空間認識, 315
 「日本的組織」, 378
 日本テスト学会, 210, 347
 日本文明の秘密, 1, 22
 ニュートン, 460
 人形振り, 393
 認知学習, 188
 認知コスト, 220

 「熱の解析的理論」, 421

 脳神経倫理学, 244
 脳プロ, 242
 脳文化人, 242
 のび太君, 345
 ノボシビリスク, 32, 48

 G. H. ハーディ, 285
 パーデュー大学, 26
 バーバレラ, 447
 Jeanne Peiffer, 258
 廃仏毀釈, 421
 白銀比, 184
 爆心地公園, 85
 「はした金」, 369
 パスカル, 8, 18
 バチカンの名宝とキリシタン文化,
 118
 Robert Maynard Hutchins, 213
 林晋, 18
 パラダイムの転換, 8, 317
 Balian-Low の定理, 424
 パリ・シテ島地下博物館, 102
 パリでの文化衝撃, 42

 ハワイ出雲大社, 56
 「反日」, 190, 297, 299
 反応拡散系, 212

 BMI, 37, 239
 ピースミール, 215
 ピーター・ガリソン, 286
 ピエロ・デラ・フランチェスカ, 5
 東アジア化, 191
 東アジア共異体, 194
 東アジア共同体, 191
 東アジアという関係性, 194
 東チモール, 65, 265
 東日本大震災, 288
 ビキニ環礁, 14
 ピタゴラス, 380
 左うちわ校長, 311
 秀吉, 61, 67
 人型作業ロボット, 415
 Hitler, 19
 批評, 342
 皮膚感覚, 177
 微分解析機, 259, 330
 微分積分学, 313
 ヒポクラテス, 280
 「非民主主義」, 376
 表意文字体系, 42
 表音文字体系, 42
 ぴよこびよこ蛙, 32
 平林たい子, 361
 平山諦, 185
 ヒルベルト計画, 18
 広島, 14
 品性下劣, 370

 フーリエ, 259, 348
 Fourier の数学, 198
 フーリエの数学, 398
 フェッシュ美術館, 124
 フォード, 25

Focillon, 32
 不可知主義, 47
 不完全性定理, 18
 俯瞰と総合, 378
 福岡県私学展, 440
 福島第一原子力発電所, 290
 フセイン, 373
 ヴァンネバル・ブッシュ, 259
 ブラジル, 65
 プラトン, 16
 プラハの春, 366
 フランク・ロイド・ライト, 62
 フランケンシュタイン, 415
 ブランデー, 5
 Jean Prinnet, 263
 ブルカ, 65
 ブロードマンの脳地図, 186, 223
 E. フロム, 373
 文化・情報政策, 416
 文化大革命, 341
 文化的文明的先祖, 13
 文系世界のお約束, 215
 文明の単一起源論, 418
 文楽, 393

 北京時間, 418
 「別垂」, 58
 ペット・ロボット, 391
 ペットロボット, 393
 ヘルシンキ宣言, 322
 ペルラン, 4
 変革型校長, 311
 弁証法, 16
 ヘンメイ, 350
 ベンヤミン, 27
 Penrose, 28

 ポアンカレ, 11
 法家思想, 193
 「冒険王」, 347

 豊国祭礼図屏風, 67
 放送大学文京センター, 258
 法然, 441
 亡父, 32, 264, 365, 393, 442, 451
 ホーネッカー, 366
 ポリグロット, 284
 ホリズム, 8
 ポルトガル, 65
 本地垂迹説, 421
 ポンペ・ファン・メールデルフォールト, 280
 「本物のカトリック」, 335

 マイケル・ポランニー, 204
 マカオ, 65, 185, 265
 マックス・ウェーバー, 286
 マテオ・リッチ, 185, 259
 マドリッド宣言, 322
 マリア信仰, 73
 丸山眞男, 360
 マンダラン, 33

 ミーム meme, 40, 50, 52, 342
 三木成夫, 267
 ミケランジェロ, 61
 水野広徳, 197
 溝口明則, 315
 ミッテラン, 342
 宮家外交ゲーム, 259
 宮崎淳, 251
 妙好人, 68
 ミラーニューロン, 187
 ミラノ大学の数学教室, 9

 無限と運動の認識の質の転換, 20
 「無神教」, 69
 村上隆, 22, 87, 164, 231, 239, 268
 ムラの発想, 315

 メトロポリタン美術館, 3, 6

- 「メメント・モリ」, 350, 411, 413, 511
- 蒙古襲来絵詞, 184
- モザンビーク, 65
- モジュール仮説, 223
- ものの見方, 11
- 森有正, 339
- 森重文, 294
- ヤコービ, 221
- 八杉満利子, 18
- 山口華楊, 32
- 山口昌哉, 32
- やまなかいんし, 448
- 山中伸弥, 288, 448
- 山の手の生活水準, 43
- 山本義隆, 344
- ユークリッド, 7, 15
- ユークリッドの不定命題, 8
- 「ゆとり教育」, 308
- ユニバーサルシティ福岡, 434
- 養老孟司, 34
- 抑制, 223
- 吉雄幸作, 349
- 吉田耕作, 33
- ヨゼフ・ピタウ, 281
- 楽水亭, 94
- 「洛中洛外図」, 61
- 洛中洛外図, 555
- リー・クアン・ユー (李光耀), 40, 53, 372
- 李承晩, 56
- リスベクト, 227
- リスボン宣言, 322
- 理性神, 46
- 量子力学と歴史認識, 28
- 「理論」と「応用」 theory and practice, 237
- 臨時教育審議会, 308
- リンネ, 351
- ルール, 223
- 霊的な「位」, 70
- 歴史主義, 207
- 歴史的大局観, 421
- 歴史哲学, 196
- 「歴史でみる・日本の医師のつくり方 — 日本における近代医学教育の夜明けから現代まで」, 279
- 歴史認識, 297
- レジス・ドブレ, 342
- 蓮如, 441
- 老人からの遺言, 268
- 「六八年五月」, 339
- ロダン美術館, 268
- Brian Rotman, 104
- ロボット工学3原則, 244
- 『論語』, 290, 318, 458, 461, 488, 561
- 若山正人, 293
- 和讃, 442
- 和辻哲郎, 261
- ワバシュ川, 26
- ワルシャワの公衆便所, 185
- ワンピース, 346, 347